

福島県文化財調査報告書第243集

東北横断自動車道遺跡調査報告11

法正尻遺跡

下巻



1991年3月

福島県教育委員会
兼福島県文化センター
日本道路公団

東北横断自動車道遺跡調査報告11

ほう しょう じり 遺 跡
法 正 尻 遺 跡

下 卷

総目次

上 卷

第1章 調査経過と環境

- 第1節 調査に至るまでの経過
- 第2節 自然環境
- 第3節 歴史的環境
- 第4節 調査経過
- 第5節 調査の方法

第2章 遺構と遺物

- 第1節 基本土層
- 第2節 竪穴住居跡

中 卷

第2章 遺構と遺物

- 第3節 土 坑
- 第4節 埋 壘
- 第5節 焼土遺構
- 第6節 その他の遺構

下 卷

第2章 遺構と遺物

- 第7節 遺物包含層

第3章 考 察

- 第1節 縄文時代の遺物について
- 第2節 縄文時代の遺構について
- 第3節 縄文時代の集落について
- 第4節 平安時代の遺構と遺物について

付 編

例 言

- 1 本報告書は、東北横断自動車道いわき・新潟線のうち、猪苗代～会津坂下間（第9次区間）建設にかかる遺跡の発掘調査の報告であり、昭和63年度・平成元年度に発掘調査を実施し、平成2年度に整理作業を行った。法正瓦遺跡の調査成果を収録した。
- 2 法正瓦遺跡の所在地は、耶麻郡磐梯町大字更科字法正瓦と同郡猪苗代町大字磐根字遠出である。
- 3 本報告書は、上・中・下の3巻で構成した。上巻には、壑穴住居跡とその出土遺物を収録した。中巻には土坑・埋壘・焼土遺構とその出土遺物、下巻には遺物包含層とその出土遺物を収録した。
- 4 当遺跡調査事業は、福島県教育委員会が日本道路公団の委託をうけて行ったものである。
- 5 福島県教育委員会では、発掘調査を財団法人福島県文化センターに委託した。
- 6 財団法人福島県文化センターでは、事業第2部遺跡調査課の次の職員を配し、調査ならびに整理作業を行った。

昭和63年度	文化財副主査 松本 茂	文化財主事 磯上 義明
	文化財主事 山岸 英夫	文化財主事 丹治 秀樹
	囃 託 福山 和人	
平成元年度	文化財主査 光家 孝一	文化財主査 松崎 真
	文化財副主査 松本 茂	文化財主事 香内 修
	文化財主事 山岸 英夫	文化財主事 丹治 秀樹
	囃 託 福山 和人	
平成2年度	文化財副主査 松本 茂	

なお、臨時的に専門文化財主査 高木 政光、文化財主事 本間 宏、囃託 安中 浩・大槻 巖の協力を得た。

- 7 本報告書の執筆は、各調査員が分担執筆し、松本が編集作業を行った。執筆者名は文末に示した。
- 8 法正瓦遺跡出土土器の胎土分析は、奈良教育大学教育学部三辻利一氏に、漆灰の付着物の分析については、国立歴史民俗博物館永島正春氏に依頼した。
- 9 本書に使用した二万五千分の一の地形図は、建設省国土地理院長の承認を得て、複製使用したものである。（承認番号：平2東環、第99号）
- 10 本文中の氏名については、敬称を略させていた。
- 11 本報告書に収録した遺跡の発掘記録および出土品は、担当調査員と臨時職員とで整理し、福島県文化センターにおいて保管の予定である。
- 12 発掘調査及び報告書作成にあたり、次の関係機関の助言と協力を得た。

磐梯町教育委員会 猪苗代町教育委員会 磐梯山麓日寺資料館 福島県立博物館

凡 例

1 本書の遺構・遺物図の用例は、次の通りである。

- (1) 方位 図中の方位は真北を示す。
- (2) 縮尺率 図の縮尺率については、掲載する遺構・遺物の大きさと性格により適宜決定した。選択した縮尺率についてはスケールの右に示してある。
- (3) ケバ 遺構内の傾斜部は「TT」のケバで表現した。「TT」の記号で表現した部分は緩傾斜部を表している。
- (4) 焼土 焼土の範囲は、アミ点で表現した。
- (5) 住居跡内小穴の番号 (P₁・P₂ …) 下段の数値は、床面からの小穴の深さ (cm) を表す。床面が攪乱。その他で欠失している場合でも、近くの床面から推定できるものには、その深さを記載した。
- (6) 住居跡や土坑内の小穴で、その住居跡・土坑等と時期を異にするものについては上端線だけで示した。攪乱穴も同様である。また、遺構が重複し、複雑な場合も、他の遺構については上端線だけで示した。
- (7) 遺構図中の水系レベルは、海拔高度を表す。
- (8) 遺物には、個別番号と出土位置(カッコ書)を示し、さらに土器については、分類の群・類名を付した。群・類名は、Ⅲ群 2類土器を「Ⅲ-2」のように略記した。

2 本文中で使用した略号は次の通りである。

登祿町……BD	法正尻遺跡……HS	グリッド……G
遺構外の自然堆積土層……L+ローマ数字	遺構内の堆積土層…… δ +アラビア数字	
住居跡……SI	土坑……SK	小穴……P
埋甕……SM		
焼土遺構……SG	性格不明遺構……SX	

- 3 遺物の分量は、原則として図中に記載した。口径については、波状口縁の土器は波頂部から波頂部、突起の付けられた土器は、突起部を除いた口端部から口端部を計測した。
- 4 写真図版中の個々の遺物に付した番号は、挿図番号と一致する。

下 卷 目 次

第2章 遺構と遺物	1
第6節 遺物包含層	1
縄文土器の分布	1
土 器	6
I群土器(6)	II群1類土器(12)
II群4類土器(99)	II群5類土器(107)
III群1類土器(134)	III群2類土器(152)
III群5類土器(169)	IV群土器(178)
II群2類土器(41)	II群3類土器(63)
II群6類土器(121)	II群7類土器(126)
III群3類土器(165)	III群4類土器(169)
石 器	179
土 製 品	241
石 製 品	252
第3章 考 察	271
第1節 縄文時代の遺物について	271
土 器(271)	石 器(301)
第2節 縄文時代の遺構について	302
竪穴住居跡(302)	炉(307)
土 坑(311)	
第3節 縄文時代の集落について	315
第4節 平安時代の遺構と遺物について	322
付 編	
1 法正尻遺跡出土土器の蛍光X線分析	419
2 法正尻遺跡出土黒曜石の原産地推定	426
3 法正尻遺跡出土土器の漆及び赤彩資料について	430

挿 図 ・ 表 ・ 写 真 目 次

[挿 図]	
図 641・642 包含層出土遺物(1)・(2)	7
I群1類土器	7
図 643 包含層出土遺物(3)	9
I群2類土器	9
図 644・645 包含層出土遺物(4)・(5)	10
I群3類土器	10
図 646～668 包含層出土遺物(6)～(28)	17
II群1類土器	17
図 669 包含層出土遺物(29)	40
II群1・2類土器	40
図 670～687 包含層出土遺物(30)～(47)	45
II群2類土器	45

図 688 ~ 718	包含層出土遺物 (48) ~ (78)		IV群土器	178
	II群3類土器	68	図 789 ~ 846	包含層出土遺物 (149) ~ (206)
図 719 ~ 725	包含層出土遺物 (79) ~ (85)			石器
	II群4類土器	101	図 847 ~ 855	包含層出土遺物 (207) ~ (215)
図 726 ~ 736	包含層出土遺物 (86) ~ (96)			土製品
	II群5類土器	110	図 856 ~ 858	包含層出土遺物 (216) ~ (218)
図 737 ~ 740	包含層出土遺物 (97) ~ (100)			石製品
	II群6類土器	122	図 859 ~ 871	土器集成図 (1) ~ (13)
図 741 ~ 748	包含層出土遺物 (101) ~ (108)		図 872	竅穴住居跡集成図
	II群7類土器	127	図 873	伊集成図
図 749 ~ 764	包含層出土遺物 (109) ~ (124)		図 874	大木 7a・7b 式期遺構配置略図
	III群1類土器	136		
図 765 ~ 776	包含層出土遺物 (125) ~ (136)		図 875	大木 8a・8b 式期遺構配置略図
	III群2類土器	153		
図 777 ~ 779	包含層出土遺物 (137) ~ (139)		図 876	大木 9・10 式期遺構配置略図
	III群3類土器	166		
図 780 ~ 783	包含層出土遺物 (140) ~ (143)			〔付編 1〕
	III群4類土器	170	図 1	胎土分析資料
図 784 ~ 787	包含層出土遺物 (144) ~ (147)			〔付編 3〕
	III群5類土器	174	図 1	分析資料
図 788	包含層出土遺物 (148)			

〔付 図〕

付図 1	法正尻遺跡遺構配置図 (1)	付図 4	土器集成図 (14)
付図 2	法正尻遺跡遺構配置図 (2)	付図 5	土器集成図 (15)
付図 3	13・23 ~ 26・29・31・32・34・36・41・45 号住居址		

〔表〕

表 5	遺物包含層出土土器分布 (総量)	2	表 12	層別別土器出土量	5
表 6	遺物包含層出土土器分布 (II群1類土器)	2	表 13	磨石重さ・長さ分布	240
表 7	遺物包含層出土土器分布 (II群2類土器)	3	表 14	石器観察表 (1) ~ (13)	257
表 8	遺物包含層出土土器分布 (II群3・4類土器)	3	表 15	形態別土坑時期区分	311
				〔付編 1〕	
表 9	遺物包含層出土土器分布 (II群5類土器)	4	表 1	法正尻遺跡出土土器の分析値	420
表 10	遺物包含層出土土器分布 (III群1・2類土器)	4	表 2	Rb-Sr 分布図	420
			表 3	K 因子	420
表 11	遺物包含層出土土器分布 (III群3・4類土器)	5	表 4	Ca 因子	420
			表 5	Fe 因子	420

表6 法正尻遺跡出土縄文土器の分析値	424	測定条件	428
表7 法正尻遺跡出土土器のクラスター分布	424	表3 黒曜石の主成分元素組成(%)-蛍光 X線分析	429
表8 縄文土器のRb - Sr 分布図 (付圖2)	425	表4 主な原産地黒曜石の主成分元素組成(%)- 蛍光X線分析	429
表1 分析資料一覧	428	表5 原産地推定結果	429
表2 エネルギー分散型蛍光X線分析の			

[写 真]

183 ~ 205	竪穴住居跡出土土器	255 ~ 267	包含層出土土器(Ⅱ群1類土器)
206 ~ 244	土坑出土土器	268 ~ 277	包含層出土土器(Ⅱ群2類土器)
245	土坑出土土器・埋甕	278 ~ 285	包含層出土土器(Ⅱ群3類土器)
246	埋甕・包含層出土土器	286 ~ 289	包含層出土土器(Ⅱ群5類土器)
247 ~ 250	包含層出土土器	290	包含層出土土製品
251 ~ 254	包含層出土土器(Ⅰ群土器)		

第2章 遺構と遺物

第6節 遺物包含層

法正尻遺跡では、調査区のはほぼ全面に遺物包含層が形成されていた。遺物包含層の土質については、第2章第1節に記載した。本節では、遺物包含層から出土した土器・石器・土製品・石製品について記載するが、それに先立って、出土遺物の主体を占める縄文時代前期末葉～中期末葉の土器の分布状態について概観する。

縄文土器の分布

法正尻遺跡の遺物包含層からは、258点の復元土器と約182,000点の土器破片が出土した。これらの土器の中で、約178,500点の土器破片については、土器の分類と出土点数の確認を行うだけで報告書には、掲載しないこととした。表5～11に示した縄文土器の数量分布は、この約178,500点の土器破片を対象として制作した。これらの表の点数には、報告書に掲載上器と未掲載土器の割合は、一定していない。特に、Ⅱ群1・2類土器については、福島県内でも資料的に少ないため、その多くを報告書掲載用として選別している。このため、実際の数量分布は表に示したものと若干違いがある。

表5には、グリッドごとの土器片総数の分布を示した。基本的には竪穴住居跡や土坑の分布密度が高い地点と、土器の出土量が多い地点が、ほぼ一致していることが分かる。この中で、テ～ノ27～32G付近に見られる土器集中地点は、遺構の密度が極めて低い。この地点は南から入る窪地状の地形をなし、土器はこの窪地の東半部から多く出土している。このことから、この地点は窪地の東側に占地する遺構と密接な関連があり、これらの遺構と関連する「捨て場」として機能していたものと考えている。

表6には、Ⅱ群1類土器の分布を示した。調査区西端の西向き緩斜面裾部に相当する、90G付近に遺物の集中地点が認められる。この付近からは、本群土器の時期の土坑が多数検出されている。台地上に相当する0Gより東からは、特に集中することなく本群土器が出土している。出土土器の内容には、この2地点で若干違いが認められる。表7にはⅡ群2類土器の分布を示した。調査区内で3地点に遺物が集中する傾向が見られる。90G付近の、西向き緩斜面部からは本群土器の時期の竪穴住居跡と土坑が検出されている。キ～ソ40～53G付近からも、本群土器の時期の竪穴住居跡が検出されている。この2地点のⅡ群2類土器の内容には、若干違いが認められる。

表5 遺物包含層出土土器片分布 (総量)

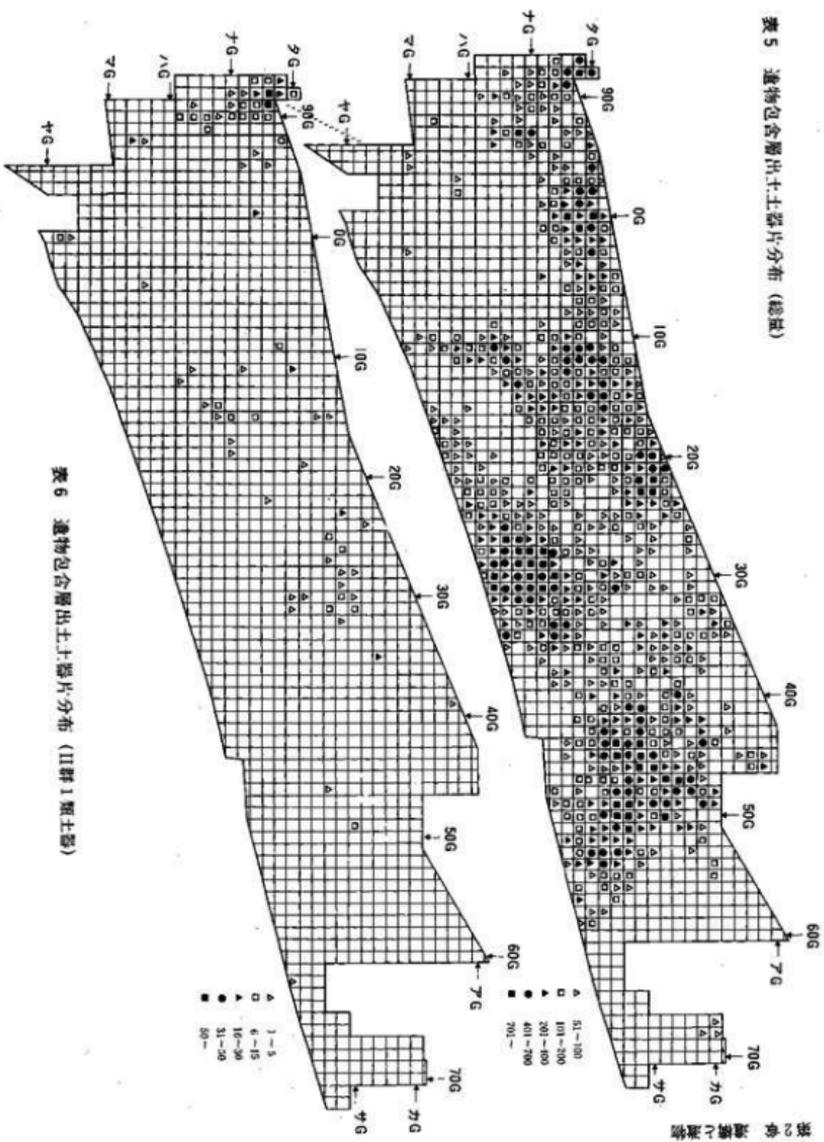


表6 遺物包含層出土土器片分布 (II群I類土器)

表6の補綴に注意

表7 遺物包含層出土土器片分布 (II群2類土器)

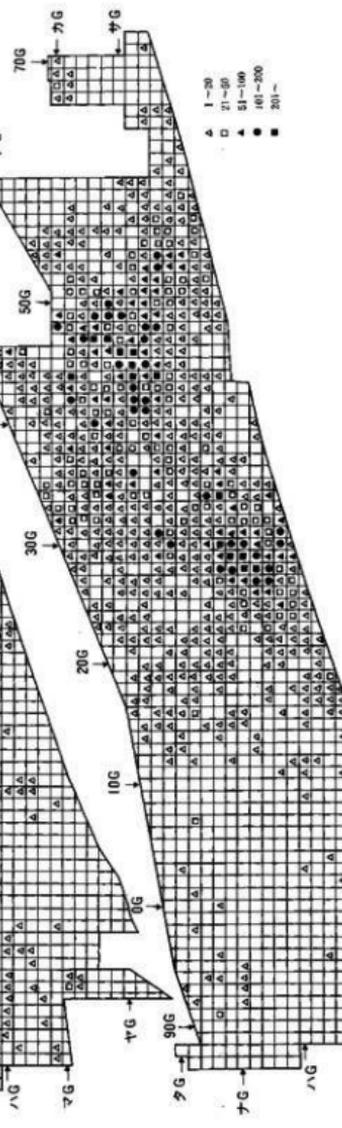
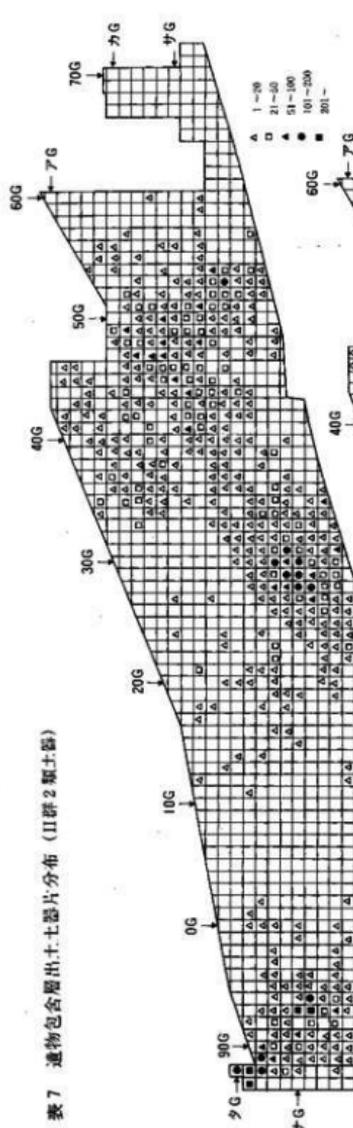


表8 遺物包含層出土土器片分布 (II群3・4類土器)

表9 遺物包含層出土土器片分布 (II群5類土器)

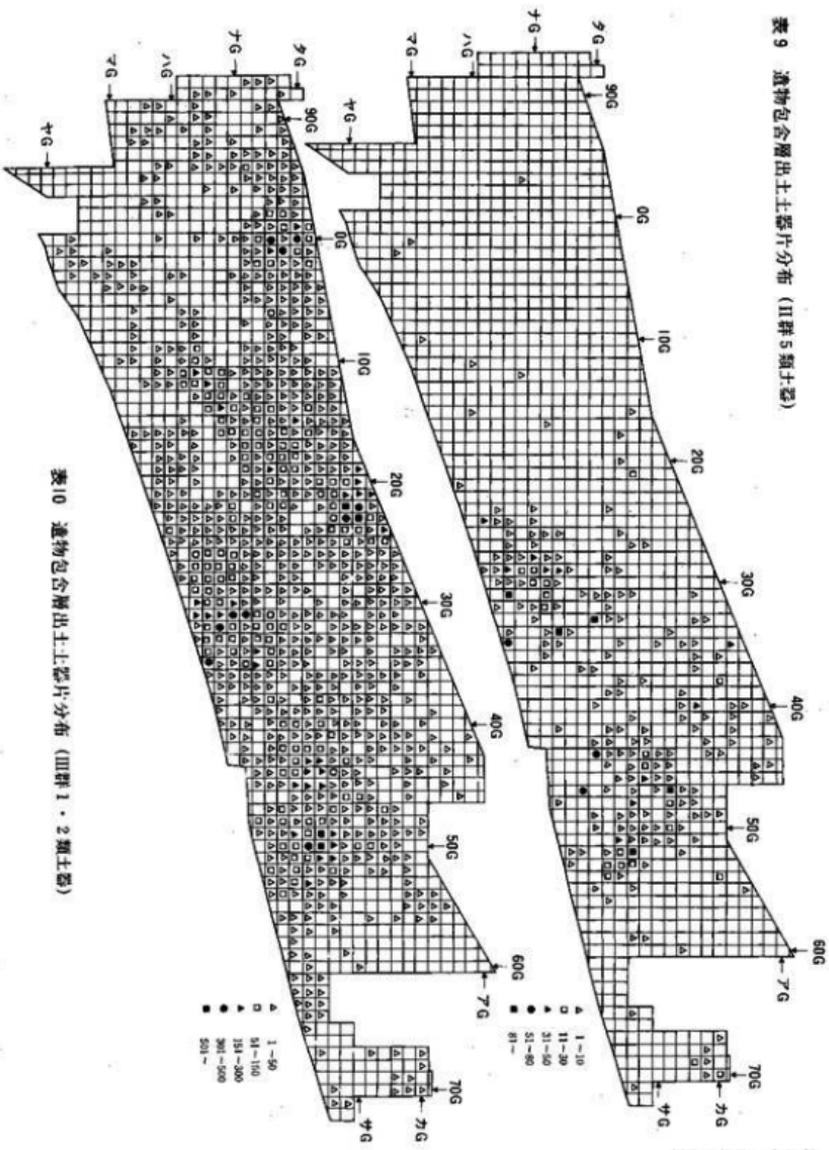


表10 遺物包含層出土土器片分布 (III群1・2類土器)

表2 科 近畿上遺物

表11 遺物包含層出土土器片分布 (山群3・4類土器)

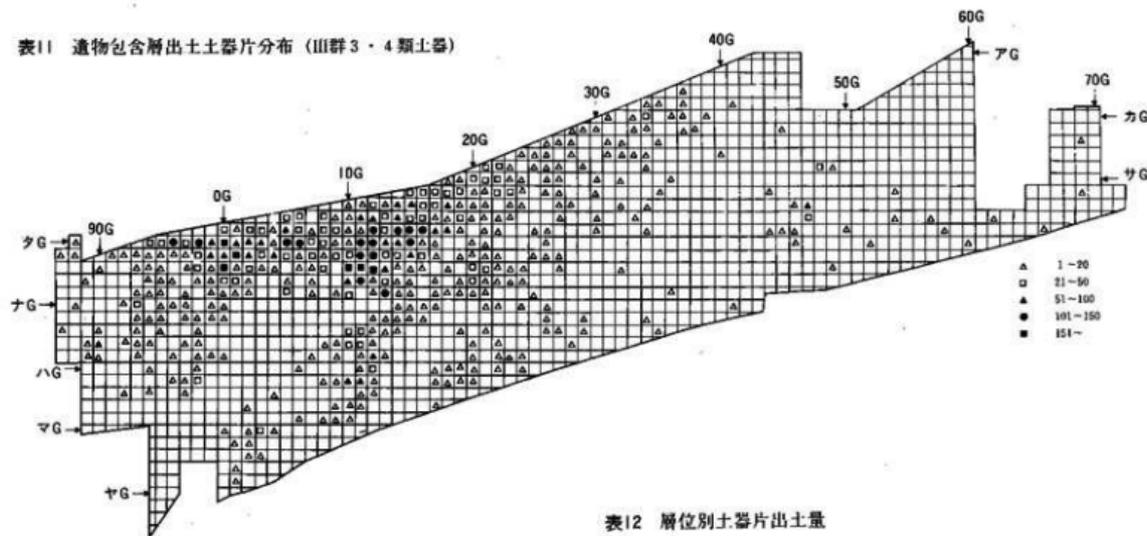


表12 層別土器片出土量

層位	分類	Ⅱ-1	Ⅱ-2	Ⅱ-3・4	Ⅱ-5	Ⅲ-1・2	Ⅲ-3・4
I. I		322点	3,425点	5,765点	638点	13,060点	4,892点
I. II		9	744	1,598	111	4,475	940
L. Ⅲa			481	1,011	57	634	5
L. Ⅲb		186	744	827	84	6,680	3,156
L. Ⅲb (上部)		7	1,894	5,510	772	4,598	231
L. Ⅲb (中部)		2	1,124	2,212	139	1,359	49
L. Ⅲb (下部)		124	1,345	3,090	457	2,623	113

第2章 遺構と遺物

ト～ノ27～32G出土土器については、Ⅱ群3類土器が含まれているかも知れない。

表8には、Ⅱ群3・4類土器の分布を示した。調査区のほぼ全域から出土しているが、0G以西の西向き緩斜面部からは、ほとんど出土していない。キ～ソ40～53G付近とト～ノ27～32G付近から集中して出土する傾向が見られ、キ～ソ40～53G付近では、本期に比定される竪穴住居跡も検出されている。表9は、Ⅱ群5類土器の分布である。基本的には、Ⅱ群3・4類土器の分布と共通するものと考えている。

表10には、Ⅲ群1・2類土器の分布を示した。0G以西からの出土量は少ないが、0G以東の台地上、ほぼ全域から出土している。本期に比定される竪穴住居跡や土坑も0G以東の台地上ほぼ全域から検出されている。表11には、Ⅲ群3・4類土器の分布を示した。本期の竪穴住居跡の分布と同じく、コ～ト0～23G付近に濃密な分布が認められる。タ94～0Gからも比較的多量に出土していることから、本期については、主として西向き緩斜面を「捨て場」として利用していたものと考えている。

土 器

Ⅰ 群 土 器 (図641～645)

縄文時代早期中葉から前期後半の土器である。法正尻遺跡では出土量は少なく、この時期に比定されると考えられる遺構は、検出されていない。施文される文様からさらに1～3類に分けた。

1類 縄文時代早期の上器で、調査区西側から散在して出土している。図641-1は尖底土器の底部である。同図2～8は太い沈線を横位を基本に多段施すものである。いずれも沈線間の一部に、縦位・斜位の短沈線文が加えられている。6では刺突文と、横位の波状沈線文も認められる。図642-13は太い凹線文様を描き、一部に円形文も加えられている。これらの土器については、施文される文様の特徴から田戸下層式と考えている。

図641-9・10は、細い有節沈線が横位を基本に施され、10では縦位の波状有節沈線文も見られる。図641-11～図642-12は細い沈線文が施されるもので、図641-12～図642-6は格子状の文様を描いている。図642-15は、沈線による区画内に貝殻腹線文を施す。同図14・16～18は、沈線に沿って刺突文が加えられている。これらの土器は、田戸上層式に比定される。

同図19～23は、器厚が5mm程と薄い土器である。19・20の口縁部には爪形文が施され、19には連続刺突文も見られる。21～23は細い平行沈線文が、縦位・山形に施されている。これらの土器は、常世Ⅰ式と考えている。同図24・25は条痕文系の土器で、口縁部にはいずれも横位の連続刺突文が施されている。

2類 縄文時代前期初頭から前葉の土器で、調査区西側から散在して出土している。すべて胎土中には、繊維を含んでいる。図643-1～5は、口縁部に一段捲りの縄の圧痕文を施している。

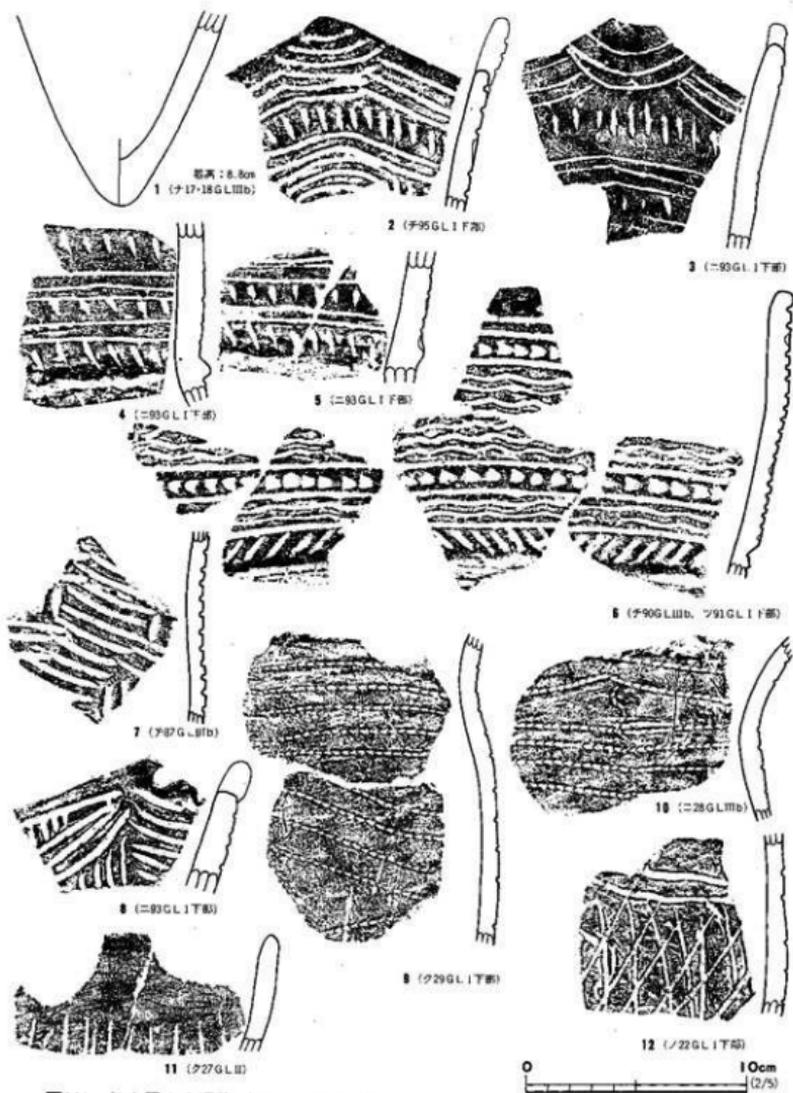


図64 包含層出土遺物 (1) I群I類土器

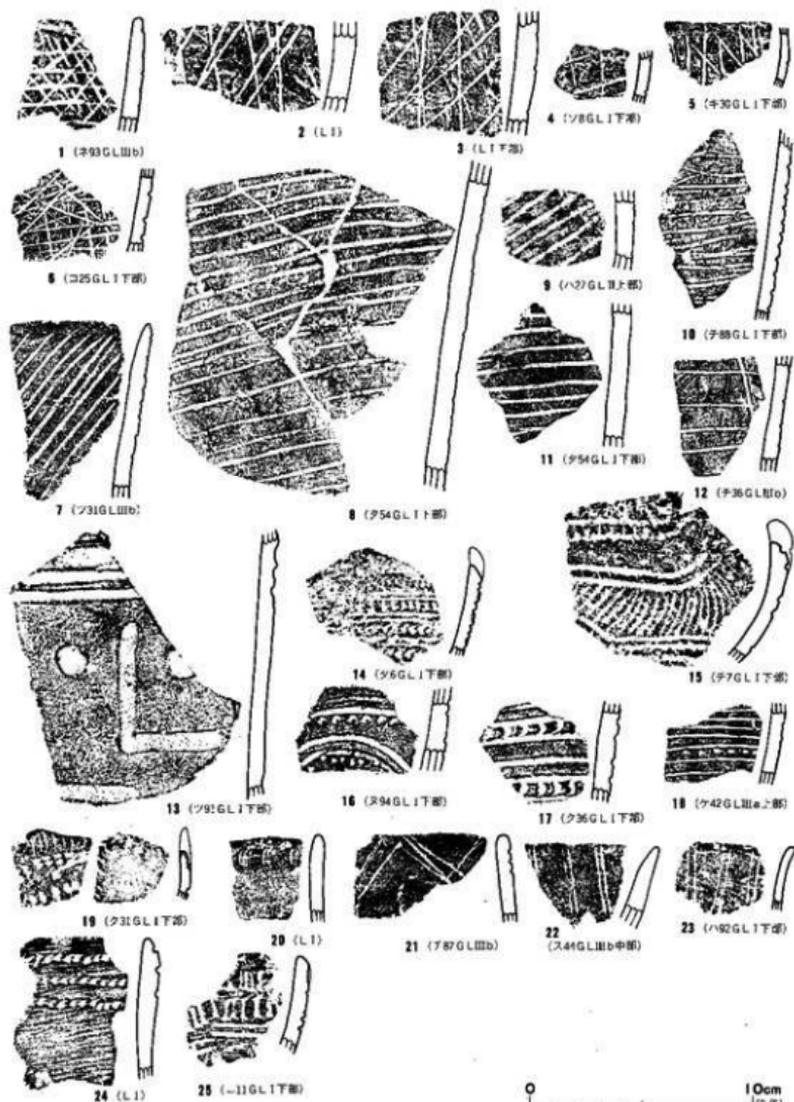


図642 包含層出土遺物(2) I群1期土器

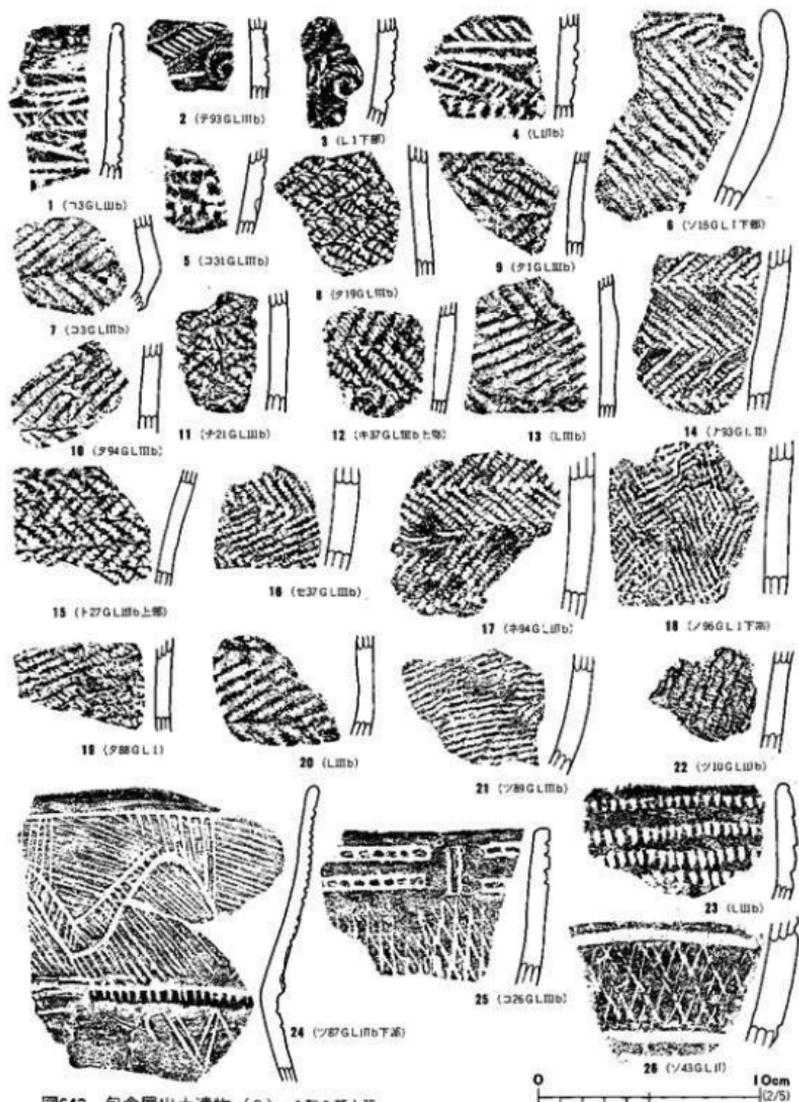


図643 包含層出土遺物(3) .I群2期土器

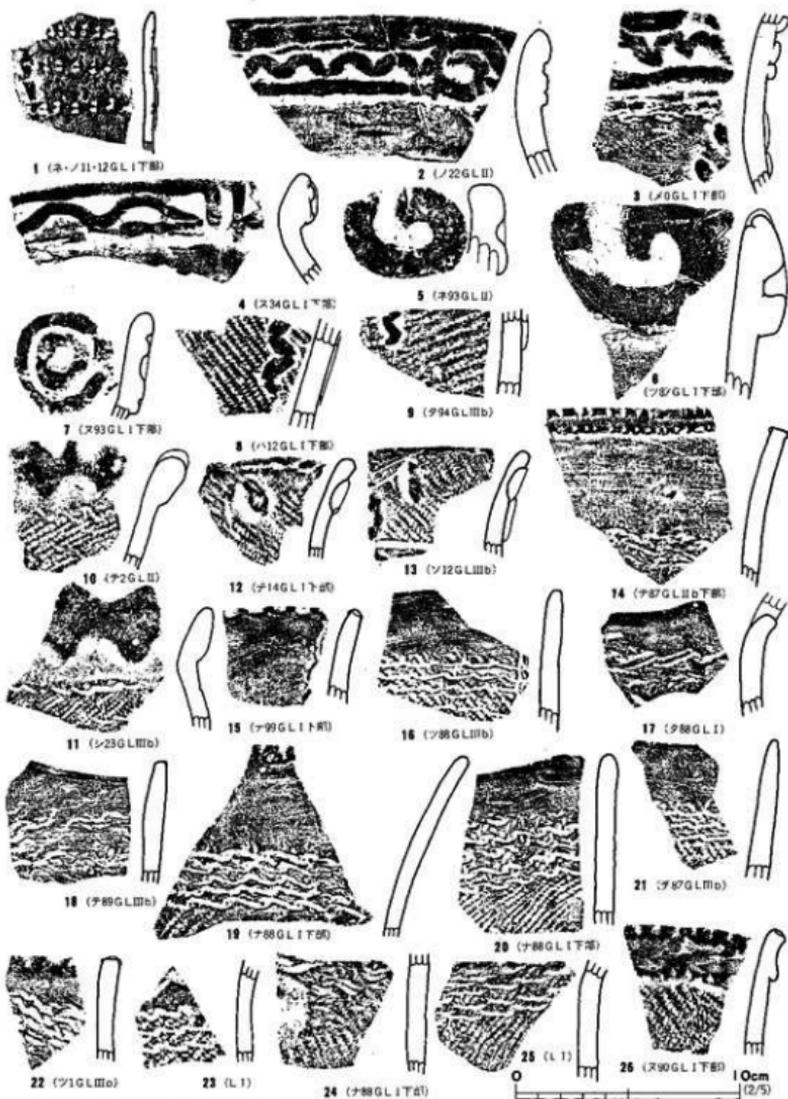


図644 包含層出土遺物(4) I群3類工器

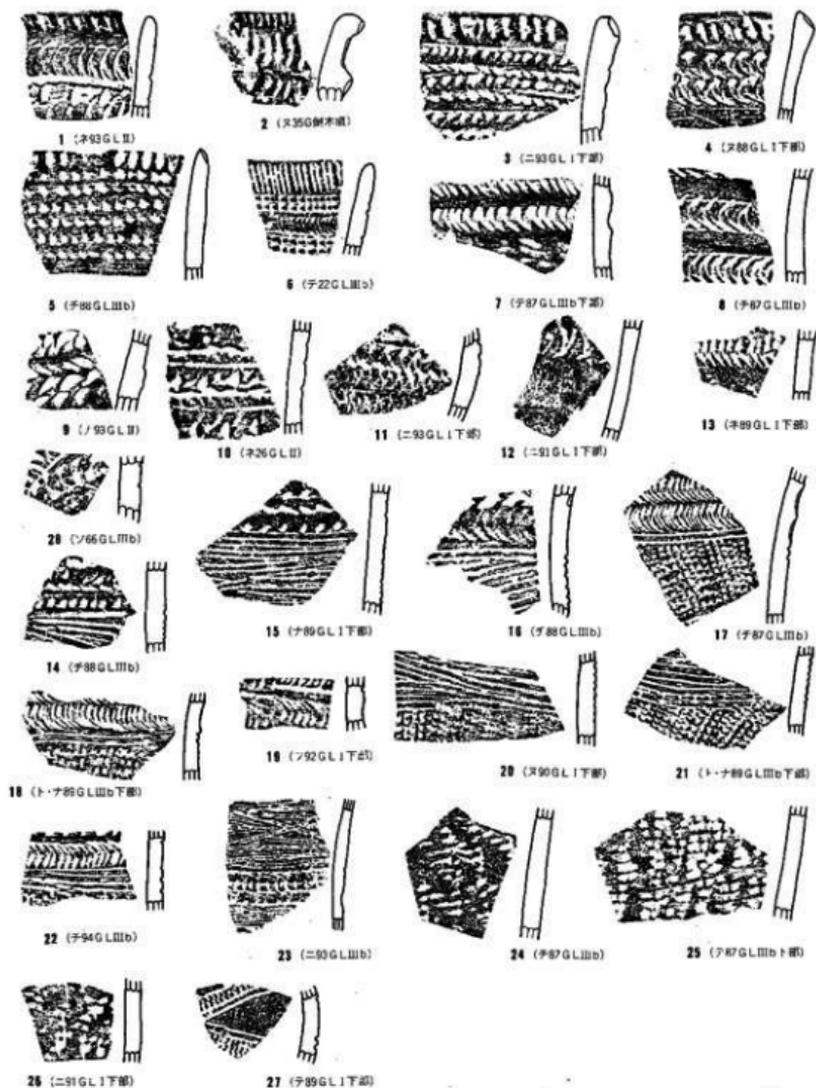


図645 包含層出土遺物(5) I群3類土器

0 10cm (2/5)

文様は渦巻文を中心とし、これを斜位の沈線で繋いでいる。この沈線の間には、刺突文的に縄圧痕文を加えている。同図6は口縁部とそれ以下で縄の回転方向を違えて、縄文を施している。同図7～13・15は、非結束の縄を用いて羽状縄文が施されている。これらの土器については、花積下層式と考えられる。

同図23は、刺突文を横位に多段施している。同図24は口縁部に沈線文を、縦位・斜位・波状に密接して施すもので、口縁部の下端は縦位の短沈線を施した隆帯で区画されている。胴部にも部分的に、V字状の沈線文が施されている。同図25・26は網目状の撫糸文が施されたもので、25の口縁部には連続刺突文が横位に2列施されている。同図14・16・17は結束された原体による羽状縄文が、18は縄の回転方向が一定しない羽状縄文が施されている。これらの土器については、大木2a式に比定されよう。

3類 縄文時代前期後葉の土器で、調査区西端の北西向き斜面下位からの出土量が多い。図644-1は縦位の隆線と横位の刺突文が施されている。同図2～4は口縁部に渦巻状・波状に隆帯が貼り付けられたもので、3と同図8・9は胴部にも隆帯を貼り付けている。同図5・7は隆帯の貼り付けによる渦巻状の口縁部突起、同図10・11は肥厚する鋸歯状の口縁部である。同図12・13の口縁部には半月状の刺突文が見られ、掻き出した粘土を片側に寄せている。同図14～25は無文の口縁部の下に、重層してアヤクリ文を施している。14・15の口唇部上には、刺突文が加えられている。図644-1は大木3式に、同図2～9は大木4式に、同図10～13は大木5式に比定される。同図14～25は大木4式期の粗製土器と考えられる。

図645には、東関東に分布の中心を持つ、浮島式・興津式系の土器を掲載した。施文される文様には、変形爪形文・平行沈線文・三角文・磨消貝殻文が見られ、浮島式・興津式土器とその内容は変わらない。図645-5のような三角文の土器や、同図1～4のように口縁部に縦位の条線が疎らに施されたものは浮島Ⅲ式、同図27のような磨消貝殻文の土器や、同図6のように口縁部に縦位の条線が密に施されるもの、同図20・21のように貝殻復縁文に似た刺突文が密接して施されるものは興津式と考えている。

II 群 土 器

縄文時代前期末葉から中期前葉の土器を一括している。さらに7類に区分した。なお、木群土器については7区分した各類土器の中に様々なバリエーションが認められるため、報告に当たっては適宜類をさらに種に区分して記載する。

II 群 1 類 土 器 (図646～669)

大木6式土器に比定されるものである。施文される文様や器形の特徴からa～1種に12区分した。

a種 縄圧痕文が施されるものである。図647-1～3, 図650-14～29, 図651-1～27, 図

655-7, 図663-1・4が比定される。器形は口縁部が丸く肥厚し複合I縁状をなすものが多い。図647-2のように胴部が円筒状をなすものもあるが、同図3のような胴部が球体状をなす深鉢が多いようである。縄圧痕文は肥厚するI縁部と、この下に施された弧状文や渦巻文を描く、隆帯の上に施されるものが、主体を占めている。図651-26は頸部に施されている。縄圧痕文は1段撚りの縄によるものが大半を占めるが、図647-2は2段撚りの縄を用いている。

図647-1は頸部が「く」の字状に屈曲する大型の深鉢で、屈曲部には押捺を加えた隆線を横位に施している。口縁部には隆帯を横位波状に2本施し、この隆帯は波頂部で互いに接している。同図2は胴部が円筒形状をなす深鉢で、肥厚する口縁部には円形の小突起が4個付く。この突起間には、縄圧痕文が施されている。同図3は波状口縁の深鉢で、胴部は球体状をなしている。文様は、波状をなす口縁部と上下対象になるように隆帯を貼り付け、波頂部下に菱形の区画を作り出している。この区画内には半円状、波底部には縦位に隆帯を貼り付けている。

図651-24は押捺を加えた隆線、図650-29, 図655-7, 図663-1・4では、幅の広い連続爪形文を頸部下端に巡らせて、胴部と口頸部を区画している。図650-15・18, 図663-1の肥厚する口縁部の下端は、部分的に三角形状に掘り込まれている。

b種 口縁部や頸部の下端に、三角形状の掘り込みが加えられるものである。図650-1~13, 図656-11・15が本種に比定される。三角の掘り込みは器壁の厚さが異なる、肥厚する口縁部の下端や頸部の下端に加えられるものが多い。図650-12は平らな器面に連続して三角文を施すもので、三角文自体も他に比べて小さく、掘り込みも浅い。

c種 口縁部が複合口縁状に肥厚し、上下幅の狭いものである。図647-5~7, 図648-1・4, 図652, 図653-1~24, 図655-23・38, 図656-16, 図659-2・8が比定される。口縁部の形態には、図652-3~7のようにa種土器と同様丸く肥厚するものもあるが、図647-7のように平坦なもの、同図6のように凹帯を挟んで稜線の施されるものも、比較的顕著に認められる。b種と同様に肥厚するI縁部の下端が、三角形・楕円形状に掘り込まれるものも多く認められる。器形は胴部が丸みを有する深鉢が多いが、円筒形の深鉢も認められる。図647-5・6のI縁部中央には、沈線文や凹帯が施され、いずれも4単位の瘤状の突起が付くものと考えられる。同図7は、口縁の一部が3単位一組の小波状I縁をなす。波頂部直下には円形文が施され、この間の口縁部下端には押捺が加えられている。口縁部と胴部を区画する隆線上にも、斜位の押捺が加えられている。

図652-12は渦巻状の突起で、本種に含まれるものか断定できない。図653-8の頸部に施された隆線には爪形文が、同図10・12・16のI縁下部には、押捺や刺突が加えられている。同図17・18は複合口縁状をなさないが、I縁部に貼り付けられた隆帯の状態が他のものと共通することから木類に含めた。同図22~24は口縁部の幅が広く、断面形が板状をなす。22は口縁部にボ

タン状の貼付文と、弧状の縄圧痕文が施されている。24には棒状の貼付文が見られる。

d種 幅の広い爪形文が施されるものである。図646-2、図649-2・5・8、図654-21~33、図655-1~6・8~22・25~34、図656-1~4、図657、図658-1~4・7~34、図661-11、図663-5、図664-1が本種に比定されよう。器形のあり方はa種土器と近い。図646-2の口縁部には、2本一組の隆帯による縦位の突起を対面する位置に4箇所付け、その間を両端がフックする弧状の隆帯で繋いでいる。胴部上半には横位の連続爪形文を重層して施し、その間に鋸歯状の沈線文を加えている。図649-2は口縁部に連弧状、胴部上半には対向する斜行渦文が、4単位施されるものと考えられる。同図5は丸く肥厚する口縁の一部と、弧状文を描く隆帯上、胴部と口縁部を区画する隆線上と、この隆線に沿って、連続爪形文を施している。胴部と口縁部を区画する隆線は、図657-9・16~27や図658-1~3にも見られ、隆線上には斜めの押捺を加えるものが多い。図649-8は口縁部に沿って連続爪形文が施されている。

図655-1は口縁部に施された太い隆帯による波状文の下位に、同図33では口唇部上面にも爪形文が施されている。図654-26、図656-1~4はb種と同様に三角形の掘り込みを持つもので、連続爪形文は、図656-1が口縁部、同図2~4は胴部上半に施されている。3の胴部上半には、図649-2と同じく対向する斜行渦文が描かれている。図658-33は連続爪形文で区画された中に、三角形の掘り込みを加えている。

e種 爪形文を施した幅5mm程の太い隆線を、横位・斜位を基本に施すものである。後述するj種土器と比較すると、描かれる文様は単純である。図662-14~22・26、図664-2が本類に比定される。図662-14・15の口縁部の形態は、a種土器と共通する。同図16は口縁部が僅かに内湾し、胴部が直線的に開く深鉢であろう。爪形文を施した隆線で、胴部上半に三角形の区画文を描くものと考えられる。区画内には、瘤状の貼付文が見られる。同図22にはボタン状の貼付文が見られる。図664-2の胴部上端の文様帯内には、沈線による渦巻文が描かれている。

f種 肥厚する上下幅の狭い口縁部に、沈線文が施されるものである。図647-4、図648-7、図656-9、図659-5・6・12・13が比定される。図647-4は円筒状をなす深鉢で、口縁部は緩い波状を呈している。波頂部の両端には円形文が、その間に3つの板状の貼付文を加えている。波頂部間には、円形文を中心に斜位の短沈線文が施されている。図648-7は頸部が緩く外反するもので、口縁部は緩い波状をなしている。波頂部の形状は図647-4に近く、波頂部間には楕円形の掘り込みを囲むように沈線がV字状に施されている。胴部には棒状の粘土の貼付文が見られる。図656-9は口縁部下端に三角形の刻みが増えられ、口縁部には細い沈線文が重層して施されている。この沈線文は、波頂部で渦巻文を描く。

g種 板状に肥厚する口縁部に、沈線文が施されたものである。図646-3、図653-26、図659-7・15~33、図660-1~23、図661-1~10・13~16、図663-6が比定される。器形は円筒

状をなすものと、胴部から口縁部にかけて直線的に開くもの多く見られる。破片の中には、図659-19・20・21・33のように、円形や渦巻状・楕円形状などの突起が付けられるものも見られる。同図27・29のように、棒状の隆帯による突起を持つものも多い。

図646-3は口縁部に斜行する沈線文、胴部上端に横位に2条の波状沈線文を施している。図659-18~20・24~26、図661-10の口縁部には、沈線による渦巻文が施されている。図659-18や図661-10には、渦巻文の間に山形文を加えている。山形の文様は、図659-16・17や図661-2~5にも認められる。図659-27・29、図660-20・23は縦位に、図661-9には弧状に、沈線文が施されている。図659-30~図660-18は、上下交互に短沈線を施すもので、図660-3・4のように、部分的に逆U字状の沈線文を加えるものも見られる。図659-31は、短沈線の代わりに三角形の文様が施されている。図660-22の胴部には、間隔をあけて横位の羽状縄文を施し、この両端にはアヤクリ文が見られる。

h種 胴部が球体状をなす深鉢で、沈線文が施されるものである。図649-1・4、図656-8、図659-9・10、図662-11・12が比定される。文様は、口縁部と胴部上端に施されるものが主体を占めている。図649-1は口縁部下端と胴部上端に沈線文を施すもので、胴部には文様帯の中心に渦巻文を描き、その間に重層する斜行沈線で1単位の山形文を描いている。口縁部には、胴部と対象をなす山形文が描かれている。同図4も胴部文様帯の中心に渦巻文を描き、その間に平行する斜行沈線文を施している。胴部文様帯を上下に区画する沈線の一部は、鋸歯文を描いている。図659-9・10、図662-11・12も、胴上半部の文様帯に渦巻文が施されている。図656-8は頸部に波状沈線文が施されたもので、口縁部の形態や胴部と口縁部を区画する隆線のあり方は、a・d種と同じである。

i種 沈線の側縁に爪形文が施されるものである。図646-1、図648-5・6、図649-7、図661-18~25、図662-1~10が比定される。器形には円筒形状をなす深鉢と、胴部が球体状をなす深鉢が見られる。

図646-1は、口縁部が板状に肥厚する円筒形状の深鉢である。口縁部の下端には、一定の間隔をあけて横長の小突起が付けられている。口縁部には沈線でU字状の文様を上下交互に8単位施し、その間に斜行沈線で繋いでいる。斜行沈線とU字文との隙間にも、小さなU字文を加えている。図649-7は渦巻状・U字状をなす突起の間に長方形の区画文を描くもので、区画内には横位に1条の沈線を加えている。爪形文は、沈線の両側縁に施されている。図648-5・6は、胴部が球体状をなす深鉢である。5は緩い波状口縁の土器で、波頂部は双頭状をなしている。口縁部には楕円形状の区画文が描かれ、区画内には横位に1条沈線を加えている。波頂部と波底部からは、棒状の隆線を垂下させている。胴部上端の文様帯には、渦巻文と斜行文が施される。同図6の文様もこれに近い。その他の上器についても、沈線を渦巻・斜行・縦位・横位に施すも

のが大半を占めている。本種上器に描かれる文様の図形は、8種と共通するものが多い。

j種 ソーメン状の細い粘土紐を貼り付けて、文様を描くものである。粘土紐上に細かな爪形文を施すものも見られるが、両者が共存している例が多いためj種として一括した。器形はI緑部が幅かに内湾する深鉢が多く、破片の中には浅鉢と考えられるもの(図664-17・18)も含まれている。これらの土器は口唇部が内側に少し張り出すものが多く、口縁部に円形や渦巻状の突起が付けられるものも顕著に認められる。図649-3、図661-26、図662-23・25・27・28、図664-3~28、図665-1~24、図666-1~25が比定される。

図649-3は胴部が円筒状をなし、頸部がラッパ状に外傾して開き、口縁部が「く」の字状に屈曲する深鉢である。口縁部には、小突起が付き、文様は粘土紐を波状・斜行させて施している。頸部には、粘土紐が横位に5条施されている。胴部は、三角文を上下交互に施して表された鋸歯文で、上下に区画されている。胴部の文様帯の中心には、沈線を重ねさせて円形文を描いている。胴下部の文様帯には、三角文が加えられている。

図662-23~25、図666-17は器面に密接して粘土紐を貼り付け、その上に爪形文を施している。図664-4・5・8・9、図665-1~10・12・13・15~17・19~24は、粘土紐の貼付文で文様を描いている。I緑部には粘土紐を短くちぎって貼り付け、鋸歯状文を描くものが多いが、図665-12・13・17・19のように、梯子状の図形を描き出すものもある。同図3は、I緑部下端に偏平な楕状の把手を付けている。同図1の胴部上端には、幾何学的な図形を横に連続させて描いている。同図24の地文には、間隔をあけて縦位の縄文が施されている。粘土紐上に爪形文を施すものについても、基本的な文様の図形に違いは見られない。図664-21・26は、幾何学的な図形を描いている。同図27や図666-25の胴部上端の文様は、h種としたものとほぼ同じである。図665-3、図666-6にはボタン状の貼付文が見られる。

k種 幅の広い口縁部文様帯を持つもので、ここに縄圧痕文が施されるもの。図648-8が比定される。8は口縁部に横位の縄圧痕文が4条施されている。胴部には結束された原体を横に回転して施文した、羽状縄文が施されている。この他に、II群1・2類としたものの中に、これと類似するものが含まれている。

l種 粗製土器や胴部の縄文だけの土器を一括した。図647-8、図648-2・3、図649-6、図653-25、図654-1~14・17、図655-36・37、図659-3・4、図663-2・7~9、図667、図668が比定される。胴部の縄文は原体を横に回転させて施されており、中には結束された原体による羽状縄文が施されるものも見られる。部分的にアヤクリ文が見られるものもあり、図654-8・11などには、重層してアヤクリ文が施されている。I緑部の形態には丸く肥厚するもの(図663-8)、板状に肥厚しI緑部の幅が広いもの(図653-25、図654-1~6)、「コ」の字状をなすもの(図654-7・8)、特に変化のないI緑部をもつもの(図648-3)が認められる。図648-3は口縁部に棒

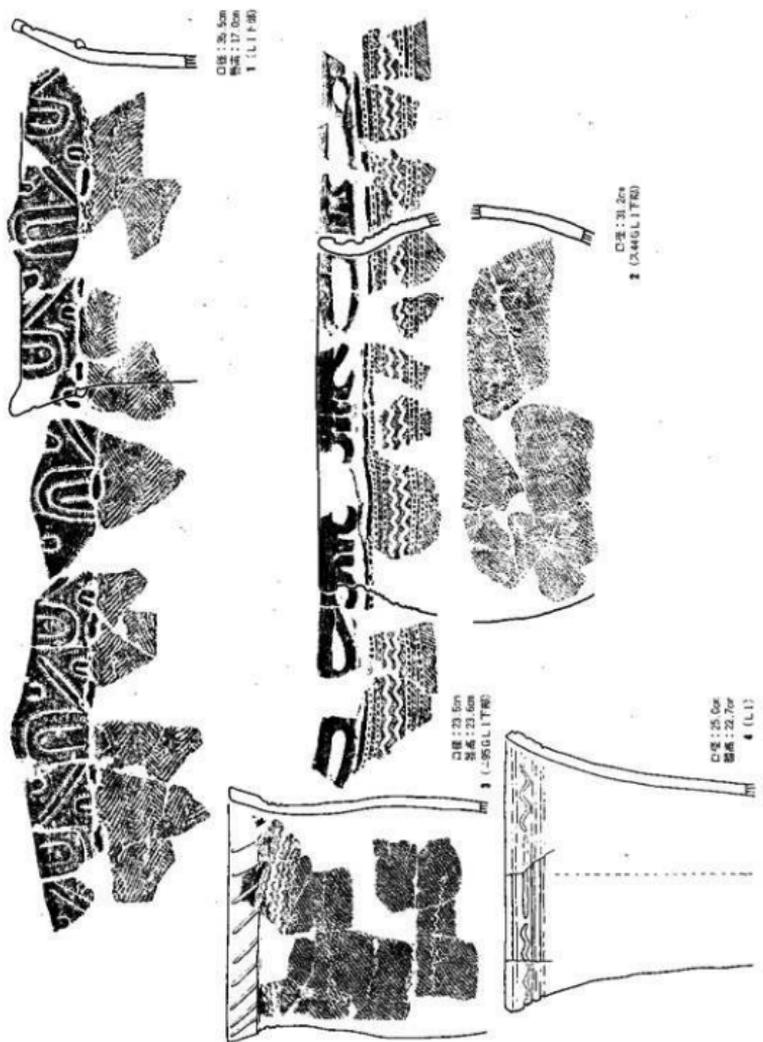


图646 包含層出土遺物 (6) II群I類土器

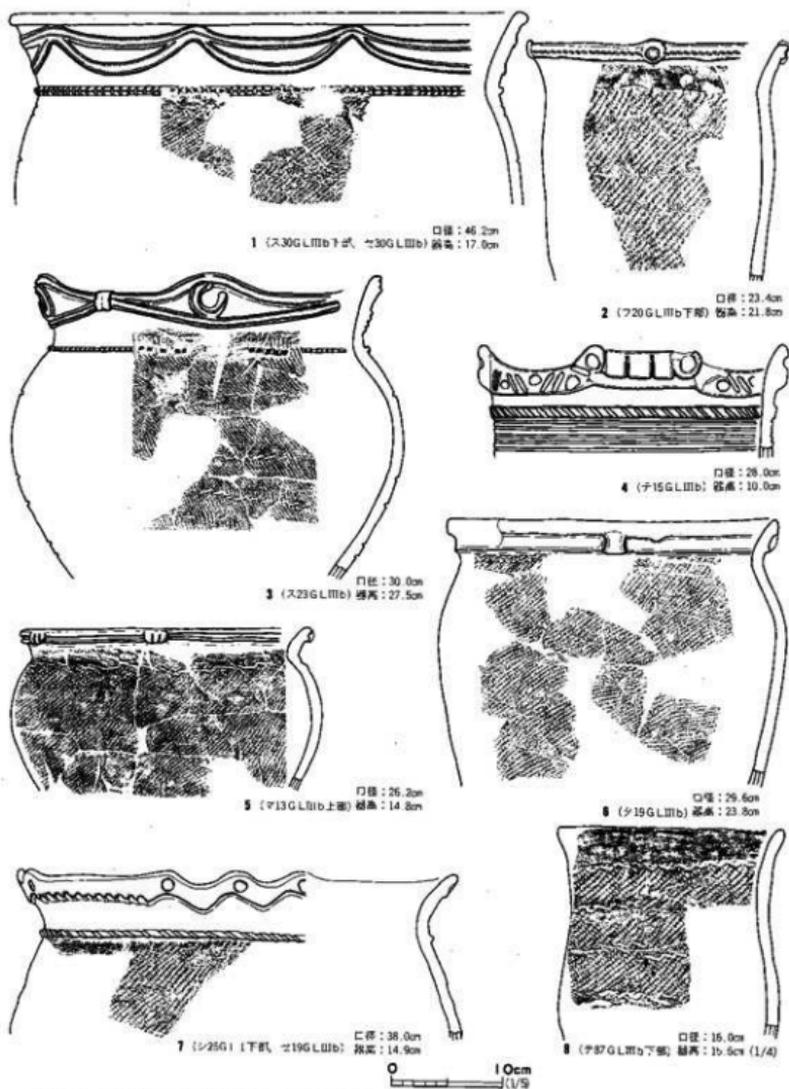


図647 包含層出土遺物 (7) Ⅱ群1類土器

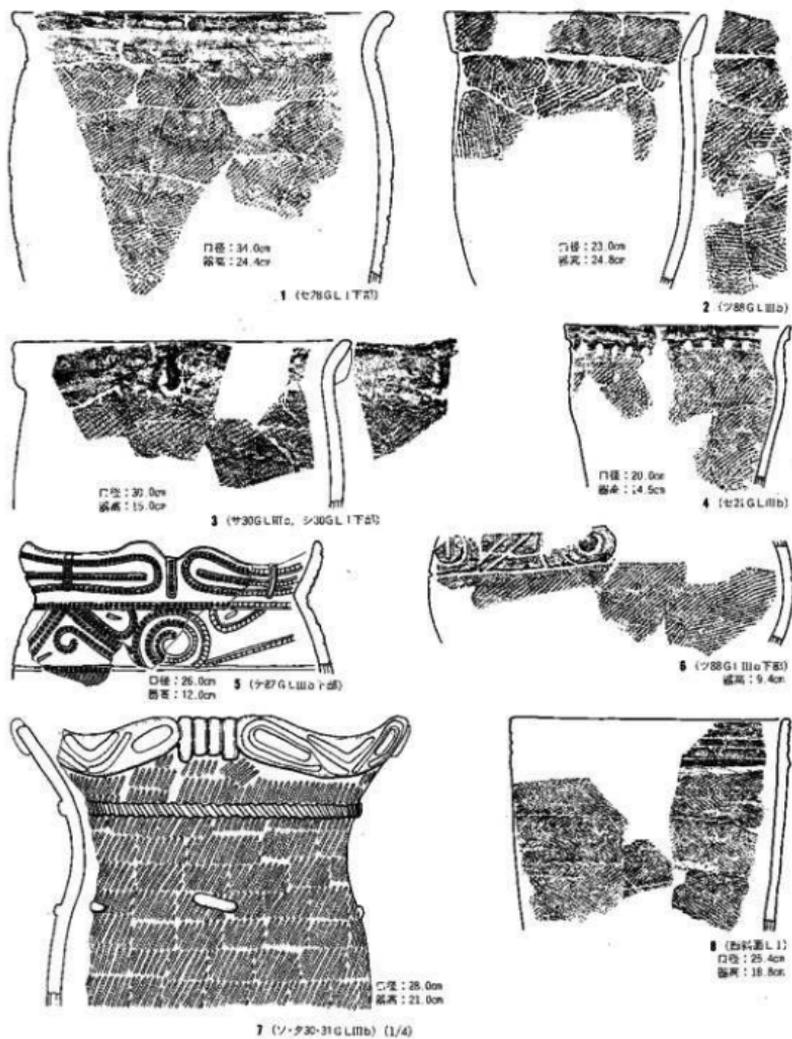


図648 包含層出土遺物(8) II群I類土器

0 1.0cm (1/5)

第2章 遺構と遺物

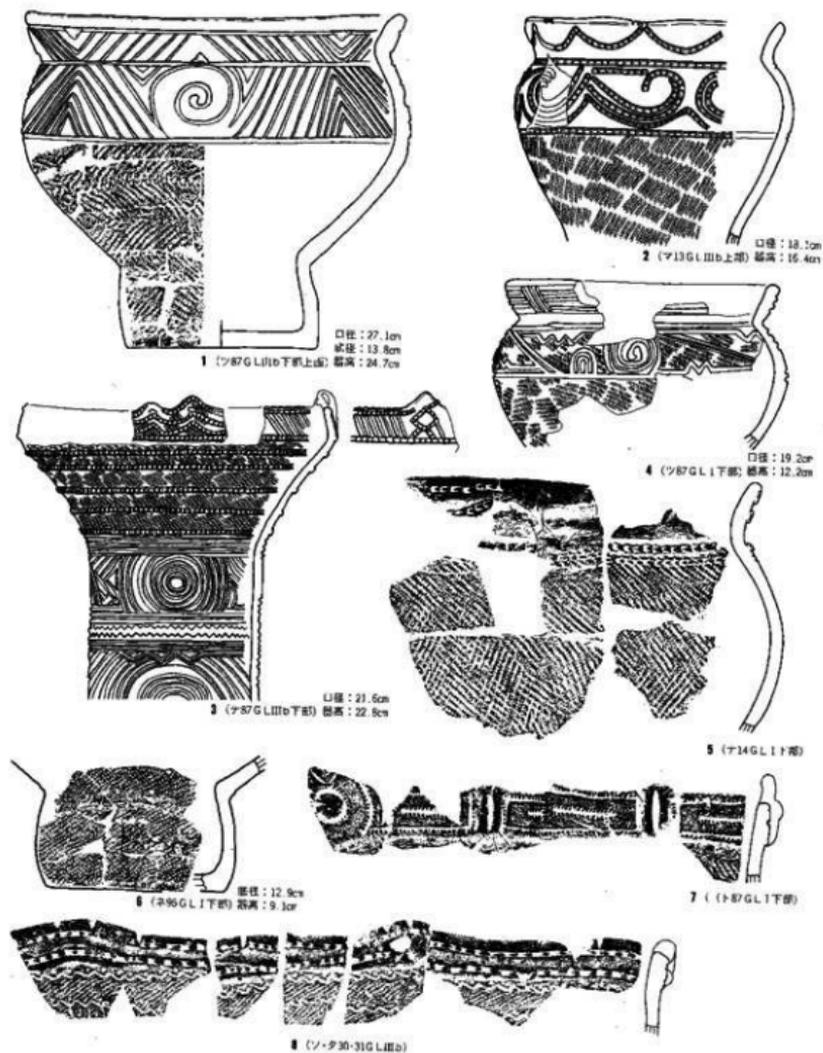


図649 包含層出土遺物(9) II群1類上器

0 10cm (1/4)

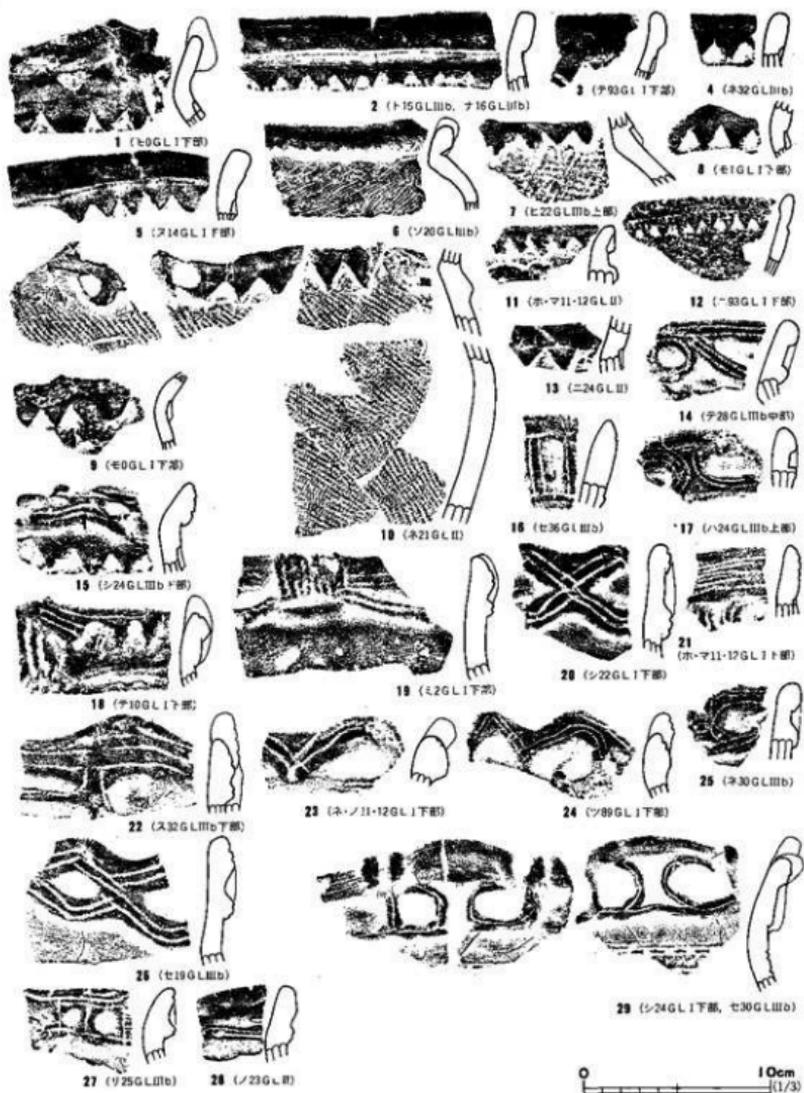


図650 包含層出土遺物 (10) 日群1類土器



図651 包含層出土遺物 (11) II群I類土器

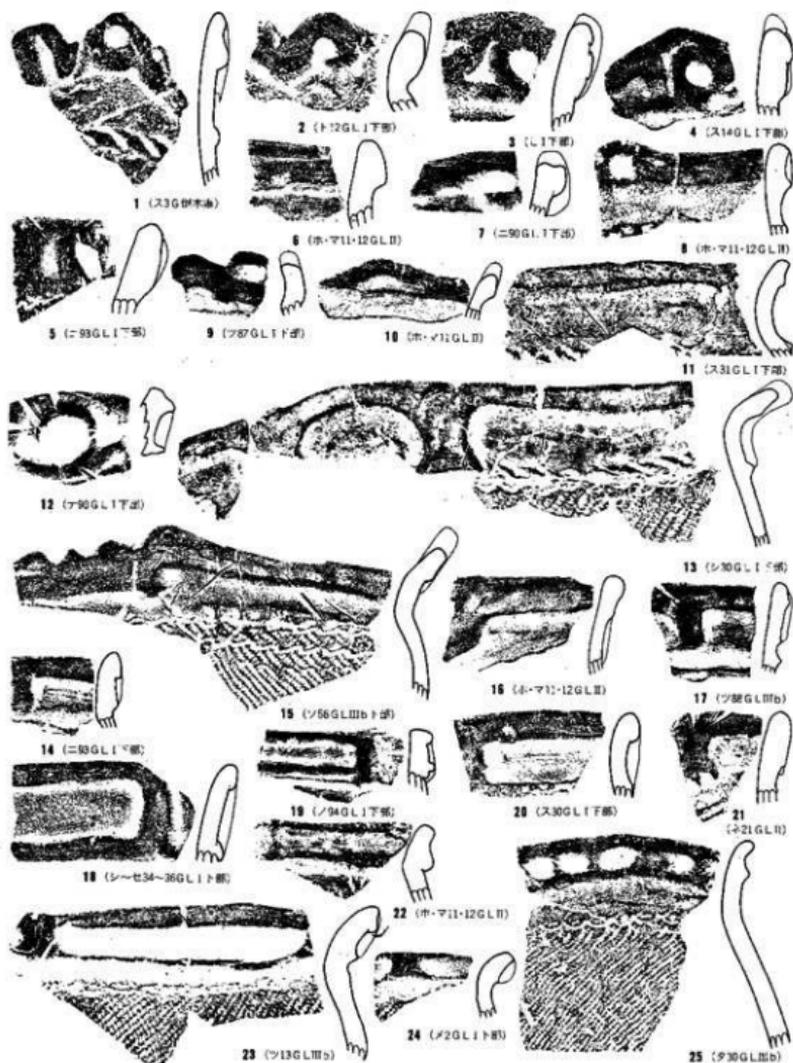


図652 包含層出土遺物 (12) II群1類土器

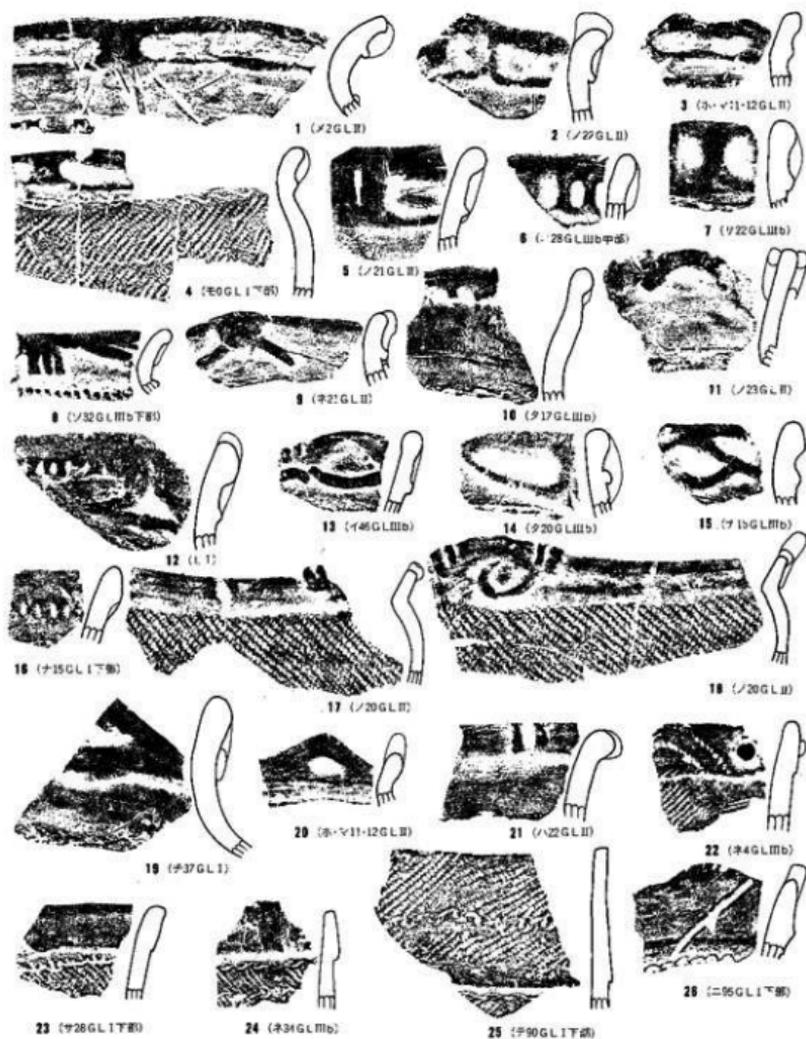


図653 包含層出土遺物 (13) Ⅱ群1類子器

0 10cm
1(1/3)



図654 包含層出土遺物 (14) II群I類土器

0 10cm
1/13

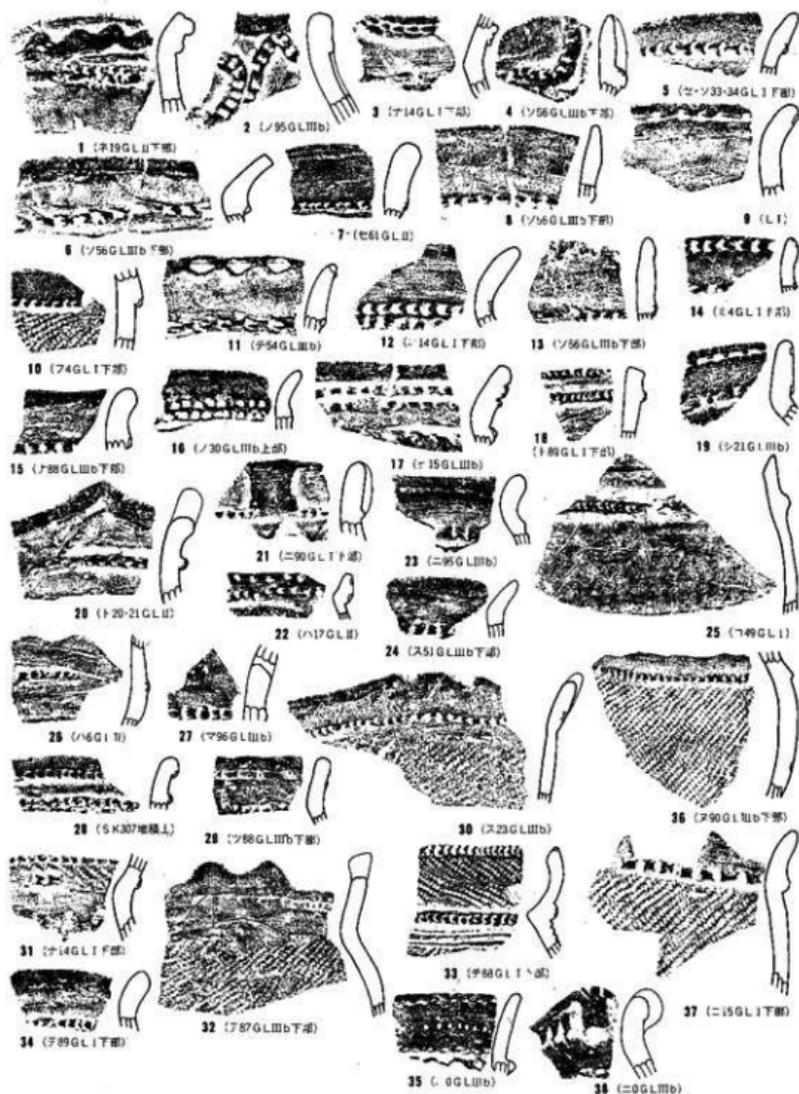


図655 包含層出土遺物 (15) Ⅱ群1類土器

0 10cm (1/3)

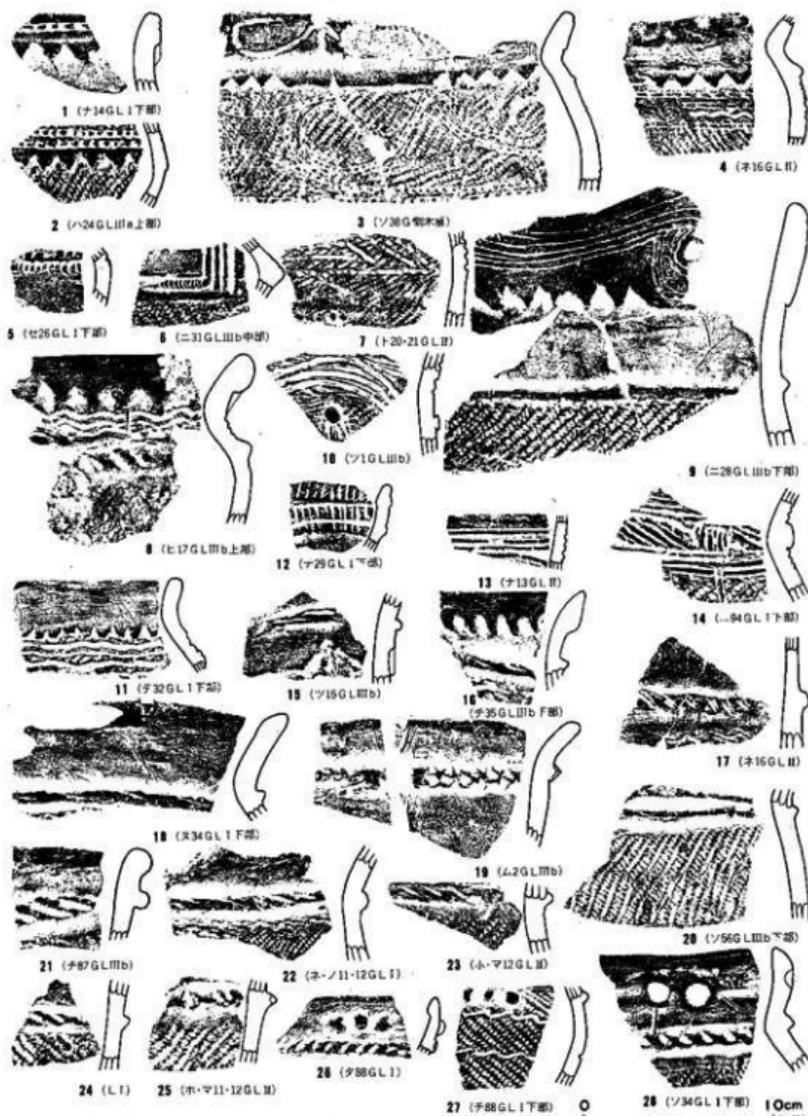


図656 包含層出土遺物 (16) II群1類土器

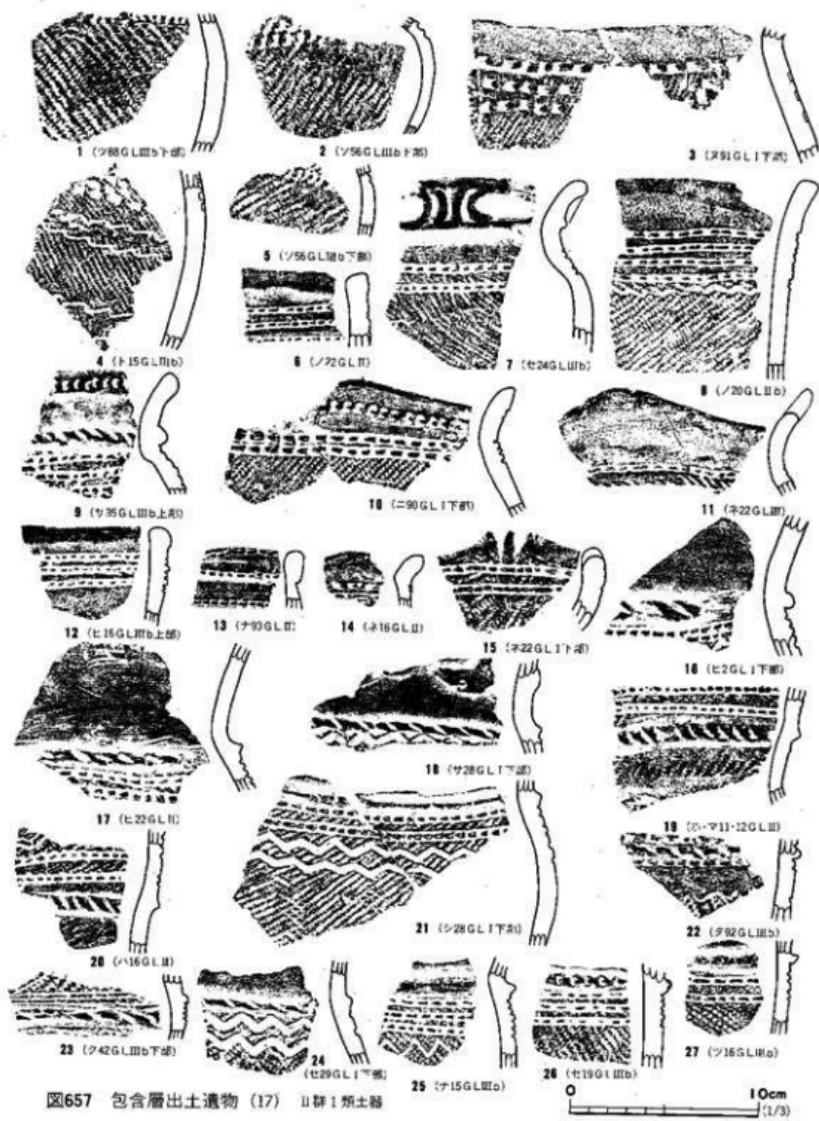


図657 包含層出土遺物 (17) II群I類土器

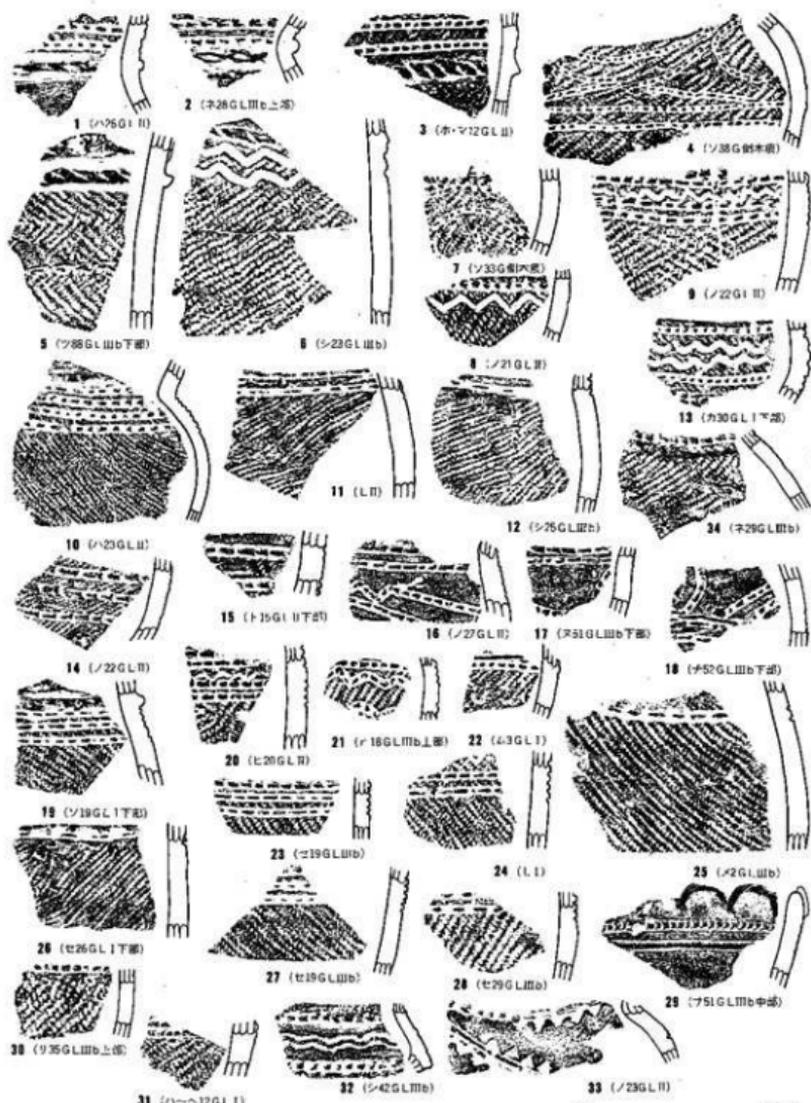


図658 包含層出土遺物 (18) II群1類土器

0 10cm
1/3



図659 包含層出土遺物 (19) Ⅱ群1類土器

0 10cm
1/3

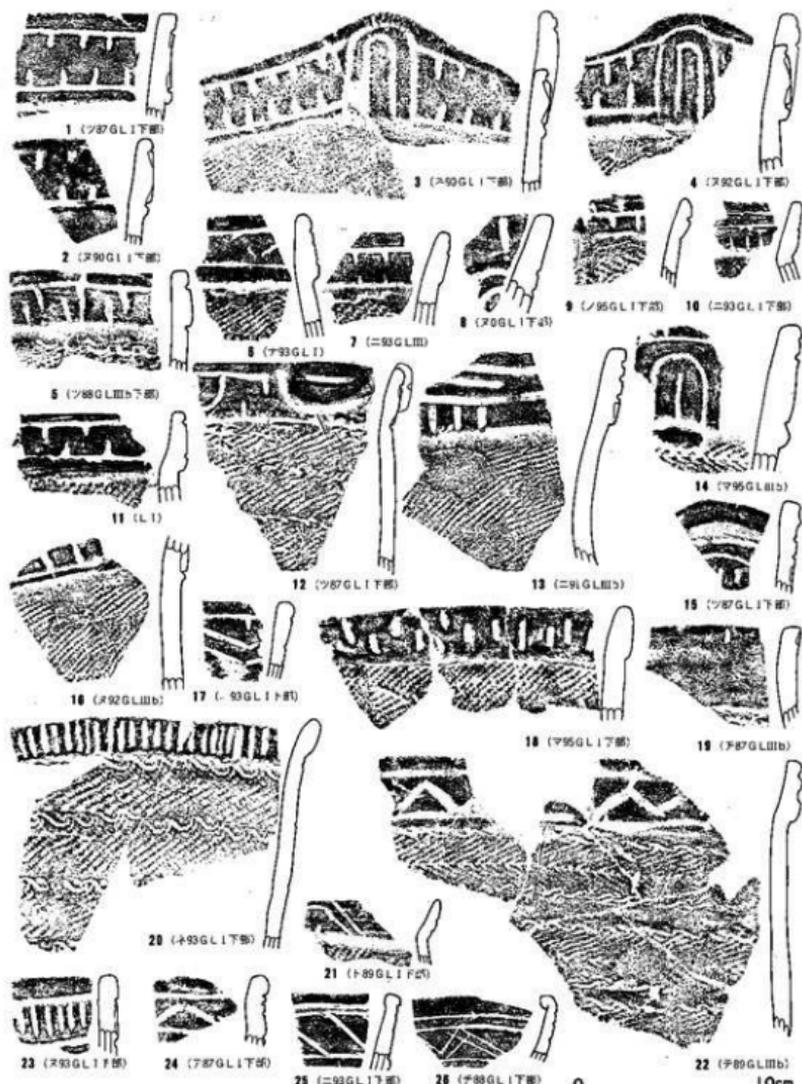


図66 包含層出土遺物 (20)

11對1 土器

0 10cm (1/3)

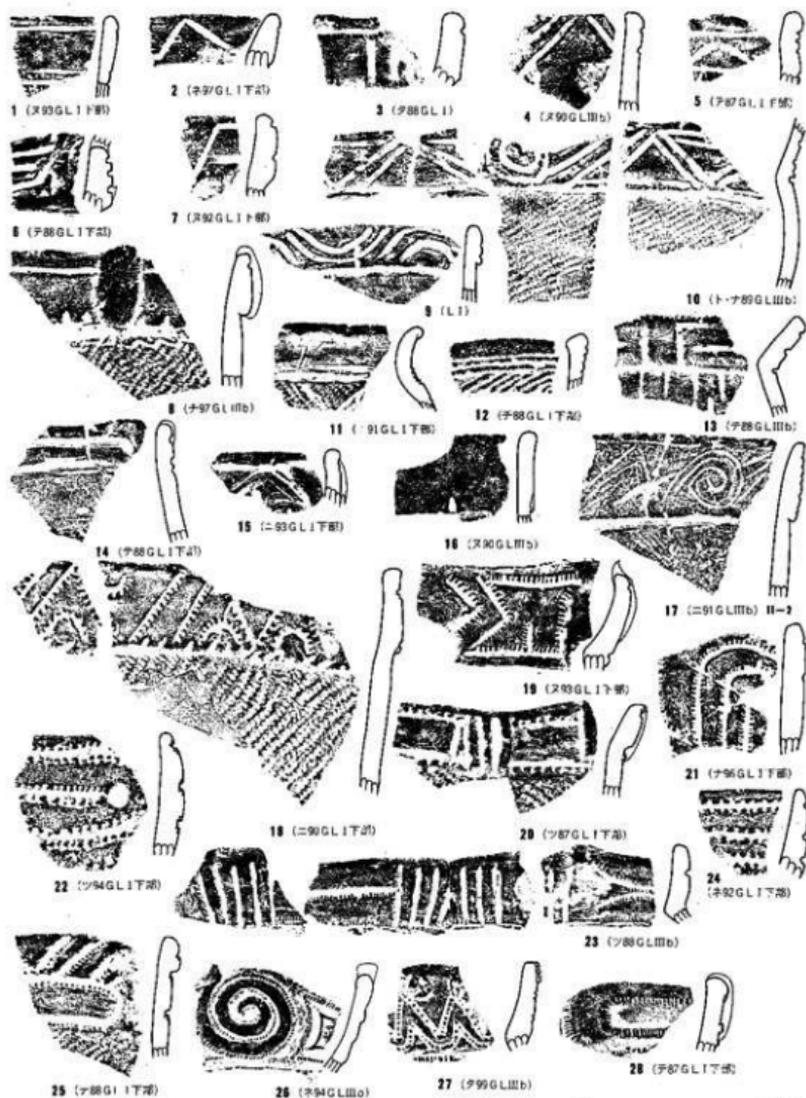


図661 包含層出土遺物 (21) II群1期土器

0 10cm
(1/3)

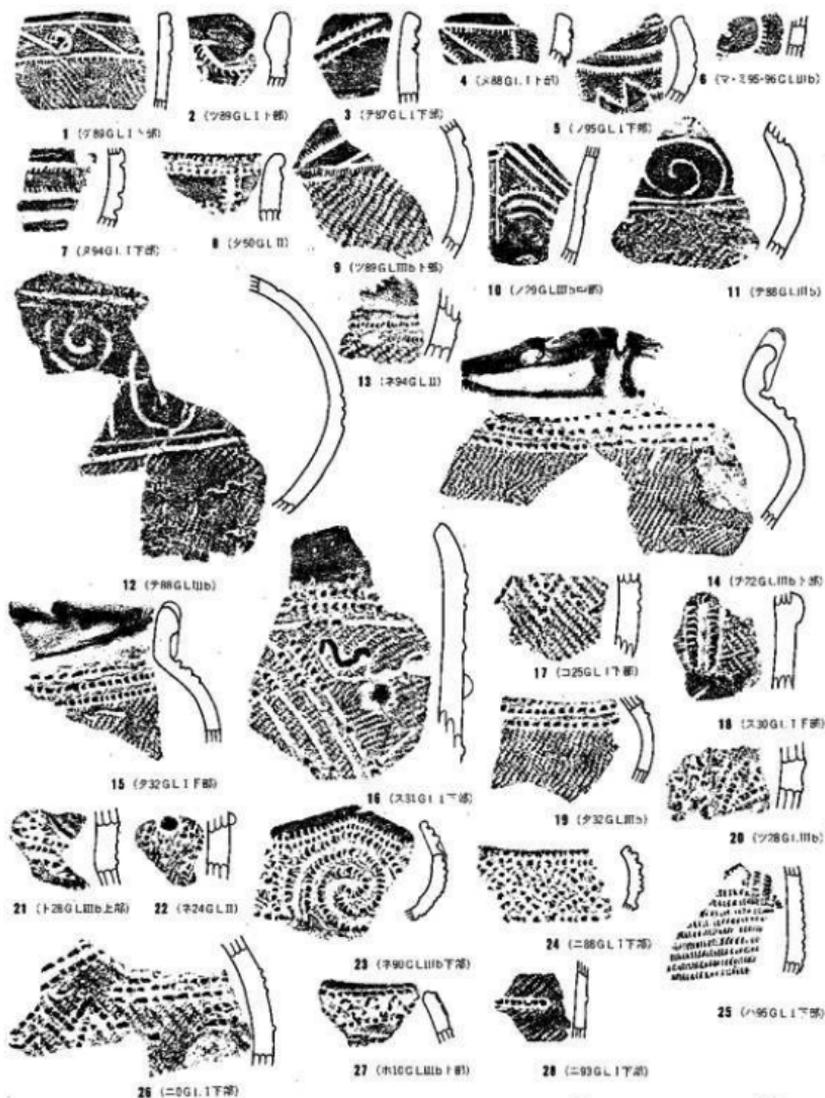


図662 包含層出土遺物 (22) II群I類之器

0 10cm
1/13

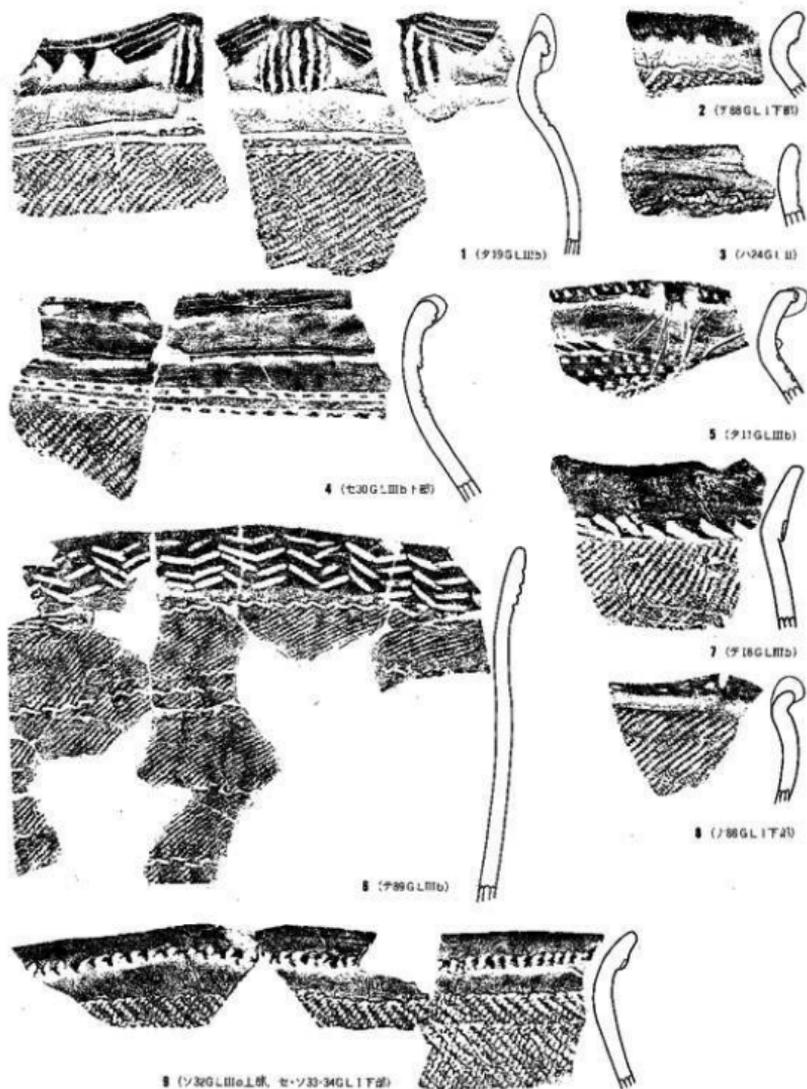


図663 包含層出土遺物(23) II群1類土器

0 10cm (1/3)



図66 包含層出土遺物 (24) II群1類土器



図665 包含層出土遺物 (25)



図666 包含層出土遺物 (26) Ⅱ群1類土器

0 10cm
1/3

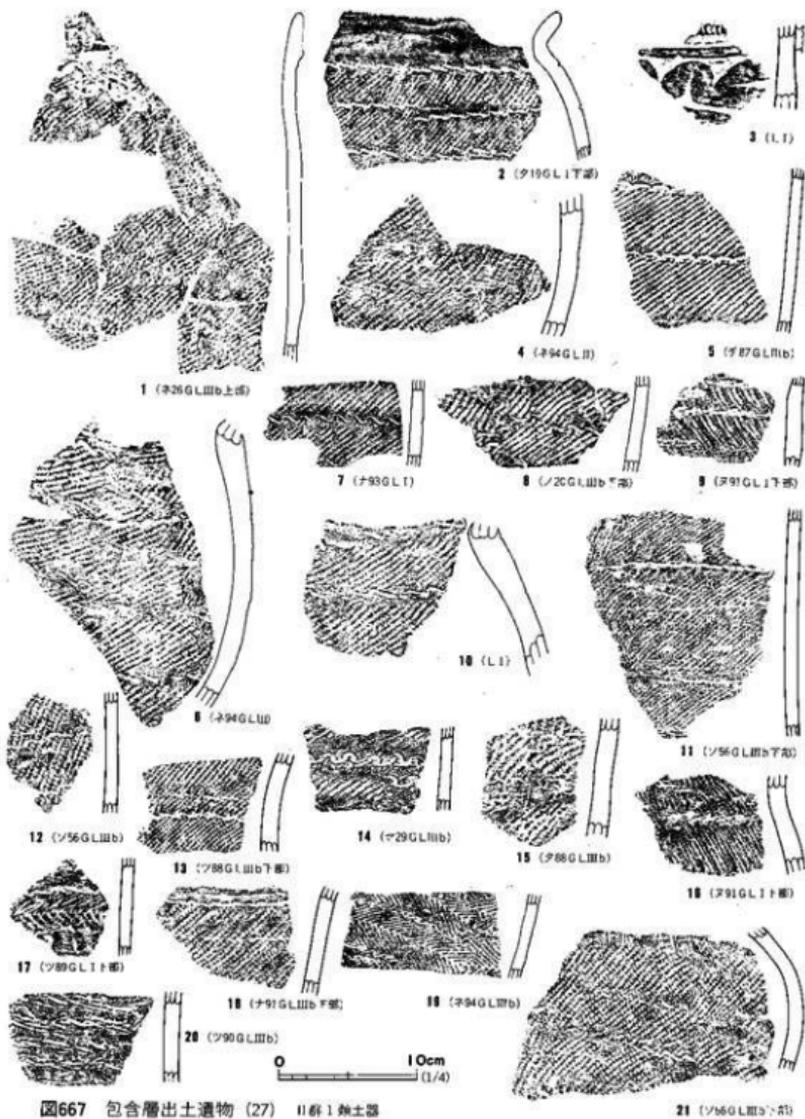


図667 包含層出土遺物 (27) II群1類土器

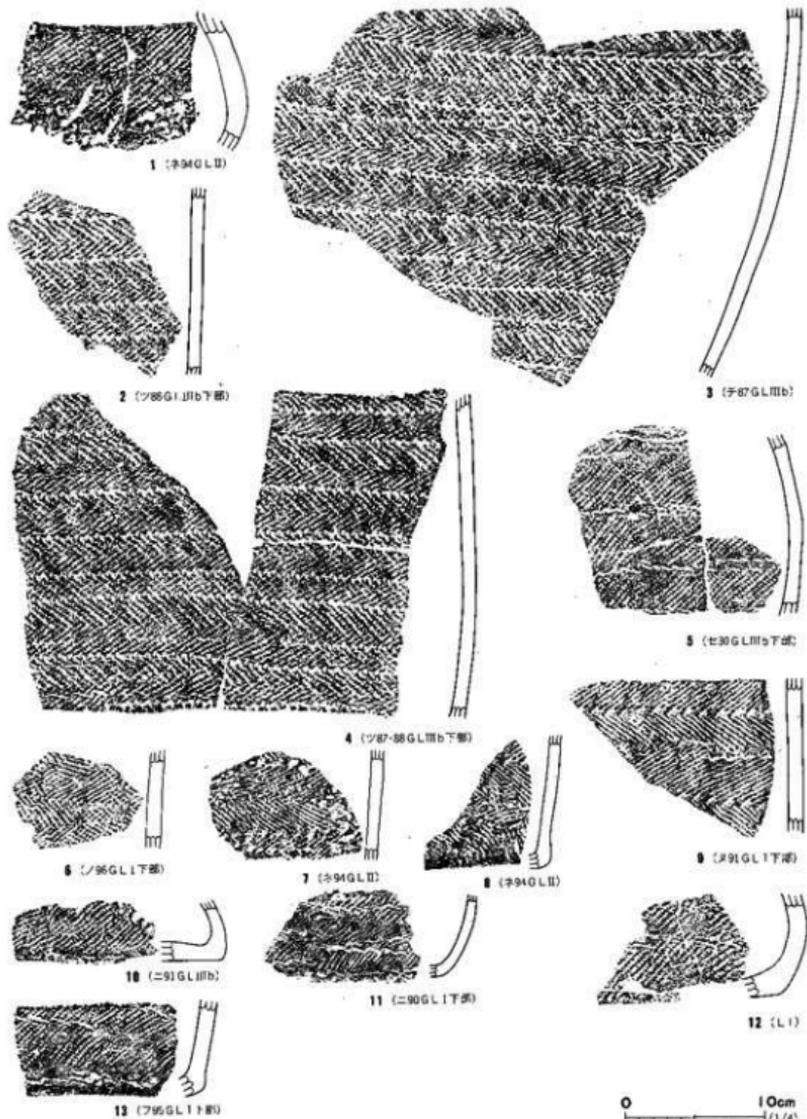


図668 包含層出土遺物 (28) II群I類土器



図669 包含層出土遺物(29) Ⅱ群1・2類土器

状の突起が付けられている。

この他に、上記の分類に若干当てはまらないものが見られる。図654-15・16・20は口縁部が板状に肥厚するもので、15・16には連続刺突文、20には刺突文が施されている。同図18は円形状をなす口縁部の突起、同図19は口縁部に肥厚する突起が付けられている。図655-24は口縁部下端に刻みが、図656-13・14は平行沈線文が密に、同図10には弧状の沈線文とボタン状の貼付文が見られる。同図17~28と図658-5・6は口縁部と胴部を区画する隆線が見られるもので、隆線上に斜めの押捺を加えたものが多い。図656-26・27にはボタン状の貼付文、同図28には2個一對の円形文、図658-6の胴部上端には波状沈線文が施されている。図660-24~25は斜位の沈線文が施されるもので、同図25・26の口縁部の形態は、j種土器と共通する。図661-27には細かな連続爪形文が、同図28の肥厚する口縁の下端には、細かな爪形文が施されている。

II 群 2 類 土 器 (図670~687)

縄文時代中期初頭、大木7a式と五領ヶ台式に比定されるものを本類とした。施文される文様や器形の特徴から、a~n種に14区分した。

a種 細密な沈線を密接して施すものである。図671-1~14が比定される。5~9は同一個体であろう。胴部には格子状の沈線文を施し、一部に浅い三角形の掘り込みや、粘土板を貼り付けたような突起が付けられている。1・2・4・13には、三角文が見られる。

b種 沈線間に短沈線を加えた、梯子状の沈線で文様を描くものである。平口縁の深鉢が多いが、波状口縁の土器も1点(図672-15)出土している。器形は口縁部が僅かに内湾する深鉢が多いが、口縁部が直線的に開くものも少なからず見られる。胴部は球体状をなすものと、直線的に開くものがある。図670-1・5, 図671-15~40, 図672, 図673, 図674-1~5・7・25・27・28・33~35, 図675-27, 図676-3が比定される。

口唇部直下が直線的になるものでは、この部分に縦位の単沈線文を施すもの(図670-1・5, 図671-14~20, 他)が顕著に認められる。口縁部文様帯の下端は、断而三角形の隆線で区画されるものが多く、この隆線の上辺にはほとんど例外なく、縦位の短沈線文が施されている。図670-5, 図671-16・19・36, 図672-17・31・41のように薄い粘土板を貼り付けたような、低い橋状の把手が付くものもや、口縁部に渦巻状の小突起を持つもの(図671-15・16・24・31・他)も認められる。

口縁部文様帯に描かれる図形には、梯子状の沈線で渦巻文と斜行文を描くもの(図671-25・32・他)と、弧状文を上下交互に入り組ませて、その中を横位の沈線文で充填するもの(図671-18・24・他)が主体を占めている。文様を描く要素には沈線の他に、口縁部文様帯を区画する偏平な隆帯(図670-1, 図671-37, 図672-23・40, 図673-2~4)と、三角文・矢羽状の刺突文(図673-6・12・13・他)がある。三角文は沈線の隙間に施されるものが多いが、図672-12・13・24, 図673-

9・21のように連続して施すもの、同図22～27のように頸部の括れ部に加えるものもある。図670-5では、口縁部と頸部に三角文を上下交互に施している。

図673-31～40は、胴部破片である。球体状をなす深鉢では、胴上部に渦巻状やV字状の図形を単発的に施すだけで、胴部を区画する隆線や沈線は見られない。円筒状をなす胴部の中には、図670-5や図673-35のように、沈線や隆線で胴部を区画するものも散見される。

c種 沈線で文様を描くものである。図670-2・4、図674-9～24・26・29～32・36～45、図675-1～26、図676-36が比定される。器形は口縁部が直線的に開くもの他に、図670-2のように口縁部が大きく開くものも見られる。図670-2は口縁部に5個一対の小突起が付けられる深鉢で、図674-21・26と同様に口縁部には、横位波状の沈線文を重層して施している。図670-4は口縁部に斜格子状の沈線を施している。

図674-9・10は縦位・弧状に沈線を施すもので、口縁部下端には横長の突起が付けられている。同図11～20・22～24は短沈線を重層して施すもので、11には三角文、19には列点文が加えられている。同図29・32の口縁部文様帯は、隆線で区画されている。同図43は、図671-18とほぼ同じ文様が描かれている。図674-44、図675-1～8・20・22～25は、沈線を横位・斜位・格子状に施している。1・23は板状、6・22は逆U字状、20・24は押捺を加えた隆線で、口縁部を区画している。同図9・10は沈線で連続山形文を描き、その隙間に横位の沈線文を施している。同図11～16は縦位に沈線文を施すもので、13・14には波状文、15・16には地文に縄文が施されている。

d種 沈線文と列点文で文様を描くものである。図675-28・30～32、図676-2・4・7・8・10・12・13が比定される。図676-13は口縁部が複合口縁状をなし、胴部上半が強く屈曲する深鉢である。口縁部中央と下縁部、胴上半部に施された平行沈線文に沿って、列点文が施されている。口縁部には、ボタン状の貼付文が加えられている。同図10は、沈線で区画された中を列点文で充填している。

e種 交互刺突文が施されるものである。文様の一部に部分的に交互刺突文が施されたものについては、本類に含めていない。図665-25・26、図675-29・33、図676-5・6、図677-7・8、図680-10～12、図681-1・5～7・9・10が比定される。図665-25・26は胴部が球体状をなす深鉢で、交互刺突文は隆線で区画された胴上部の文様帯の中に施されている。三角文を上下に施しているが、個々の三角文は上下にほぼ並んでいる。図675-29・33、図676-5・6、図681-1は三角文を上下交互に施しているが、その他のものは、棒状工具の刺突で交互刺突文を描いている。図681-1は横位・縦位の交互刺突文帯で胴部を区画するもので、沈線文と列点文が交互刺突文に沿って施されている。図677-7・8は小型の土器で、7の胴部には、横位に重層して交互刺突文が施されている。

f種 縄圧痕文が施されたものである。図676-21, 図680-24~26が比定される。図669-26~34は本種に含まれるものか, 1類j種に含まれるものかはっきりしない。図676-21は口縁部に2段撚りの異種の縄を結束した原体で, 横V字状の縄圧痕文が施されている。この原体は, 胴部の地文施文原体と同じである。胴部には, アヤクリ文の見られる羽状縄文が間隔をあけて施されている。図680-24~26は口縁部に横位の縄圧痕文が施されるもので, 26には胴部を区画する隆線が見られる。口唇部にはスリットが加えられている。図669-26~34では, 横位・斜位に縄圧痕文が施されるものが多い。

g種 アヤクリ文が顕著に施される粗製土器と, 胴部破片を一括した。図670-3, 図676-18~20・22~35が比定される。粗製土器には, 図676-18・19のように複合口縁状をなすものが多い。同図18・19・22の口縁部には, アヤクリ文が横位に重層して施されている。胴部には両端にアヤクリ文を持つ縄文が, 間隔をあけて縦位に施されている。

h種 口縁部が緩く内湾し, 胴部が直線的に開くキャリバー状の深鉢である。図677-1・3, 図682-5, 図684-3, 図687-2・9・11・15が比定される。図677-1は口縁部に有節沈線により, 弧状文を連続して施している。弧状文の中には三角文を加えている。同図3の口縁部には, 1と同じ弧状文が沈線で描かれている。弧状文の上端には, 部分的に交互刺突文が加えられている。胴部はY字状の隆線で区画され, この隆線上には縄文が施されている。図682-5は沈線で楕円形状の区画文を描くもので, 区画文が接する僅かな隙間に三角文を加えている。図687-15は, 隆沈線で弧状文が描かれるものであろう。弧状文の頂部には縦位の押捺を加えた, 瘤状の突起が付けられている。口唇部直下と頸部には, 交互刺突文が施されている。

i種 底部から口縁部まで直線的に開く深鉢で, 口縁部が複合口縁状に肥厚するものである。図677-2・4, 図680-14, 図682-12~18, 図683-1~11, 図684-4, 図685-12・15・18が比定される。口縁部には, 図682-14に見られるような, 左右非対象の低い突起が付けられるものが多い。

図677-4は, 口縁部に横位の沈線文が施される。横位の隆帯で下端を区画される幅の狭い頸部には, 突起間の中央に相当する部分で収束する長方形の区画文を描く。胴部には口縁部の突起下位にY字状の隆線を施し, 胴部を区画している。この隆線に沿って, 沈線文が施される。胴部の沈線の一部は渦巻状や三角形の図形を描き, ここに三角文が加えられている。突起下には, 三角文が施されるもの(図682-14~18, 図683-4・8)も多い。図682-14, 図683-1の突起間の中央には, 部分的に交互刺突文が加えられている。図682-15・17, 図683-8の突起内面には, 三叉文が施されている。図682-16, 図683-4の突起上面には沈線文が, 図682-15・17, 図683-1・2の口唇部には短単沈線が施されている。

頸部に幅の狭い文様帯を持つもの(図682-14・15, 図683-1~3・6・8・9)も多く, ここにX字

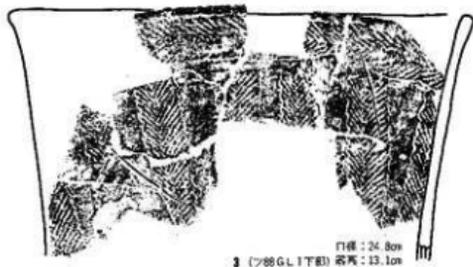
状の隆線で区画された、楕円形状の区画文を配すものが多い。図682-14では、縦位の沈線文と三角文も加えられている。本種土器の胴部は、突起下位に施された縦位の隆線と、それに沿って施される沈線で区画されている。一部に三角文(図685-18)や、図683-3のように区画内にも隆線による三角文や横位の文様を施すものもある。図683-11の胴部を区画する隆線の頂部は、双頭渦巻文を描いている。沈線に変わって有節沈線が施されるものも、少なからず見られる。

j種 円筒形状をなす深鉢である。小型のものが多い。図677-5、図678-1、図680-2・16が比定される。図678-1の口縁部直下には隆線をX字状に貼り付けて区画された、楕円形状の無文帯が見られる。口唇部には短沈線を施し、胴部は縦位に施された複数の沈線や有節沈線で区画されている。区画の上端には三角文を加え、それを囲むように沈線や有節沈線を施している。区画の中央には、縦位の波状沈線文が加えられている。図677-5は、口端部に刻み加えられている。頸部には幅の狭い無文帯を配し、胴部は「I」字状の隆線と沈線で区画されている。隆線の接点部は瘤状に肥厚している。

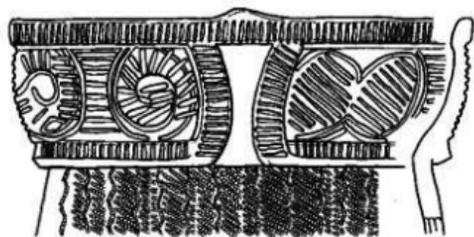
k種 波状口縁の上器である。図679、図680-1・3~9、図681-2・11・14、図682-11、図684-5、図685-17、図687-1が比定される。波頂部に土頭形の突起が付くもの(図679-1~3・9)と山形の波頂部をなし、波頂部上面に沈線文が施されるもの(図679-4・7・8、図685-17)が見られる。口唇部には、短沈線が施されるものが多い。

波頂部の文様は、頂部から隆線を垂下させるもの(図679-1~3)や、渦巻文を施すもの(図679-5・7・8・10、図685-17)など、波頂部下位に独立して施されるものと、口縁部文様帯の区画内を充填していくようなもの(図679-4・6)が見られる。渦巻文を描くものには、三角文がその縁辺に加えられるものも多い。図680-1の外面には大きな三角文が、内面には円文を抱くように三叉文が施されている。図681-11の口縁部には連続する弧状文が施され、弧状文の頂部には交互刺突文が加えられている。図680-3~9、図682-11は、波底部付近の破片であろう。ほとんどのものに、交互刺突文が施されている。

l種 口縁部が外反して開くもの。図678-2、図684-1・2・18、図685-13、図687-4・5が比定される。図678-2は緩い波状口縁の深鉢で、口唇部には短沈線が施されている。口縁部下に無文帯を配し、胴部の上端には隆線と有節沈線で、楕円形状や三角形形状の区画文を描いている。区画文が接する部分には、ボタン状の貼付文が付けられている。胴部は、三角文の下端から垂下する隆線で区画されている。図684-1・2も口縁部に短沈線文が施されている。これらのものには、地文に縄文が施されている。同図18は波頂部が双頭状をなす深鉢で、波頂部両端には円形の突起が付く。文様は有節沈線を横位を基本に施している。波頂部中央には円孔が見られ、口縁部内面にはこれを抱くように三叉文が加えられている。図685-13は口縁部外面に部分的に交互刺突文、内面に三叉文が施されている。



3 (788GL1T底) 口径: 24.8cm
器高: 13.1cm



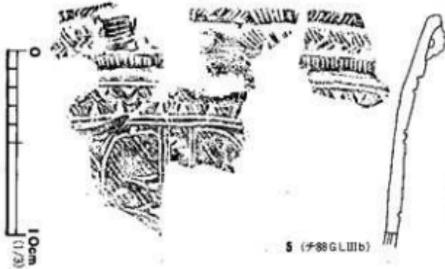
1 (988GL1) 口径: 20.5cm
器高: 9.8cm
(2/5)



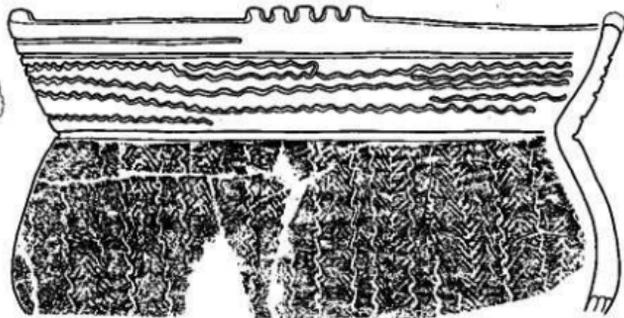
4 (二33GL1F底) 口径: 14.8cm
器高: 10.3cm



1の文様部分



5 (788GL11b)



2 (791GL11bT底) 口径: 31.5cm
器高: 16.2cm

第2章 遺構と遺物



図671 包含層出土遺物 (31) 計2類上層

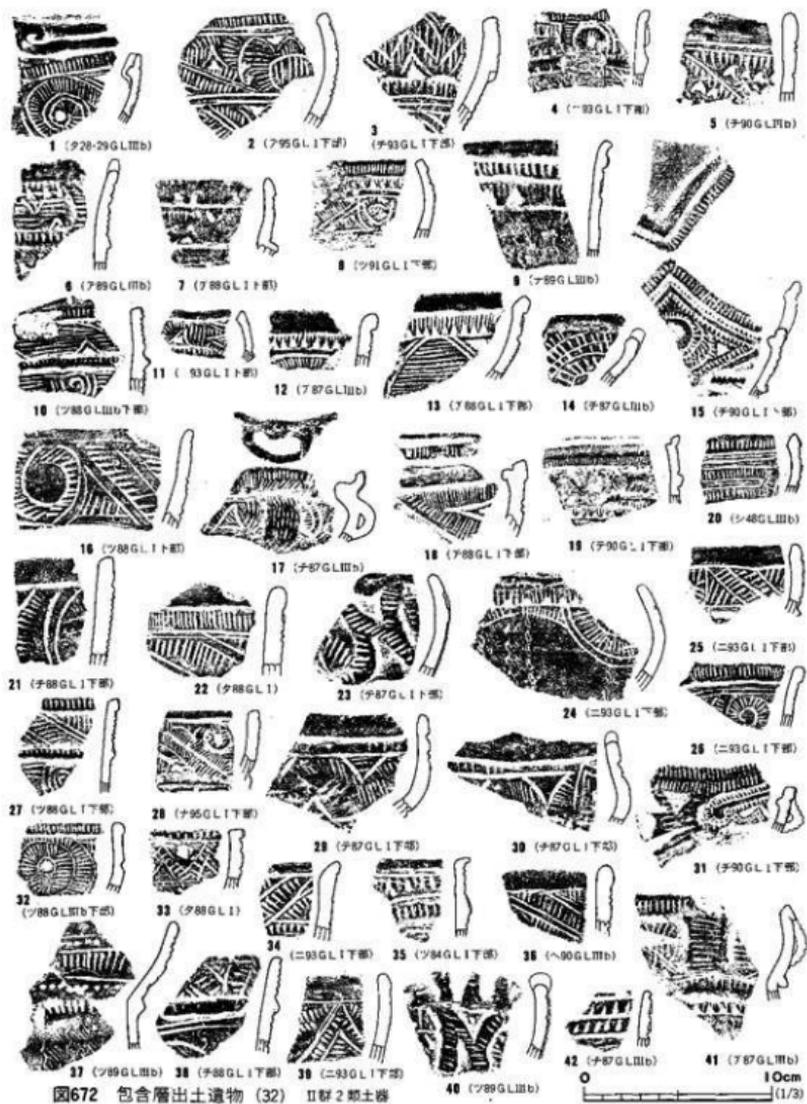


図672 包含層出土遺物 (32) II群2期土器

第2章 遺構と遺物

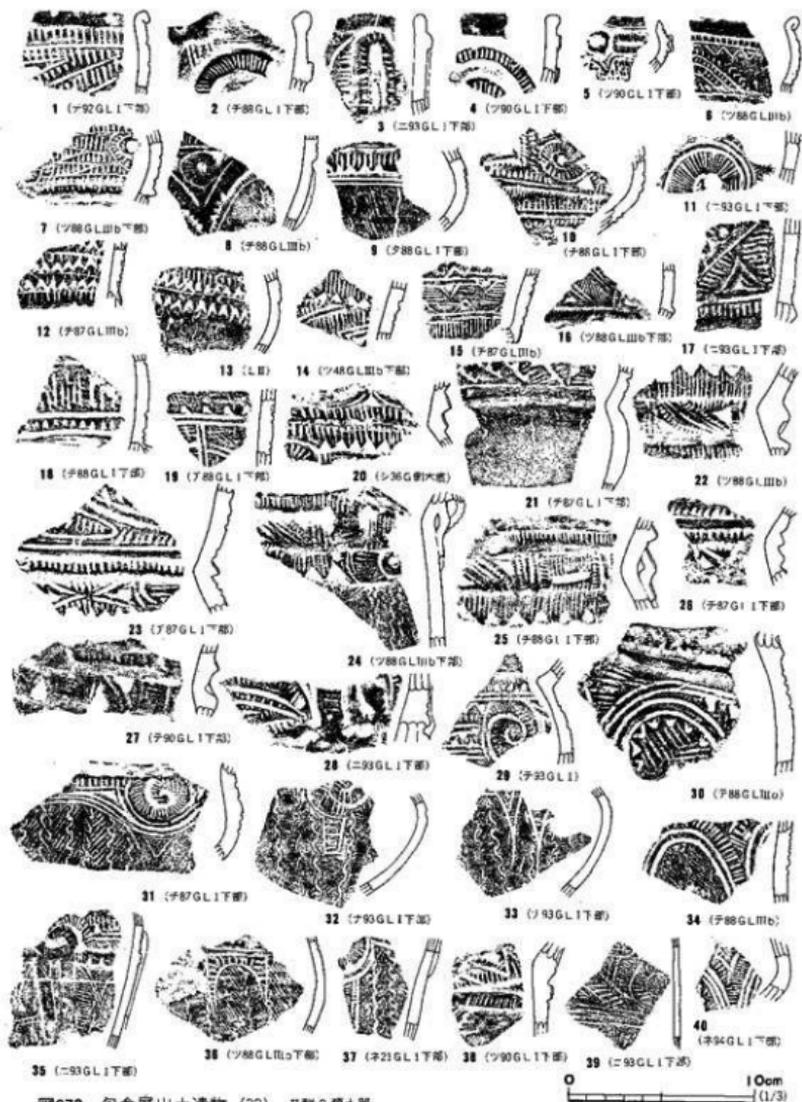


図673 包含層出土遺物 (33) II群2類土器



図674 包含層出土遺物 (34) II群2類土器



図675 包含湾出土遺物 (35) Ⅱ期2類1型

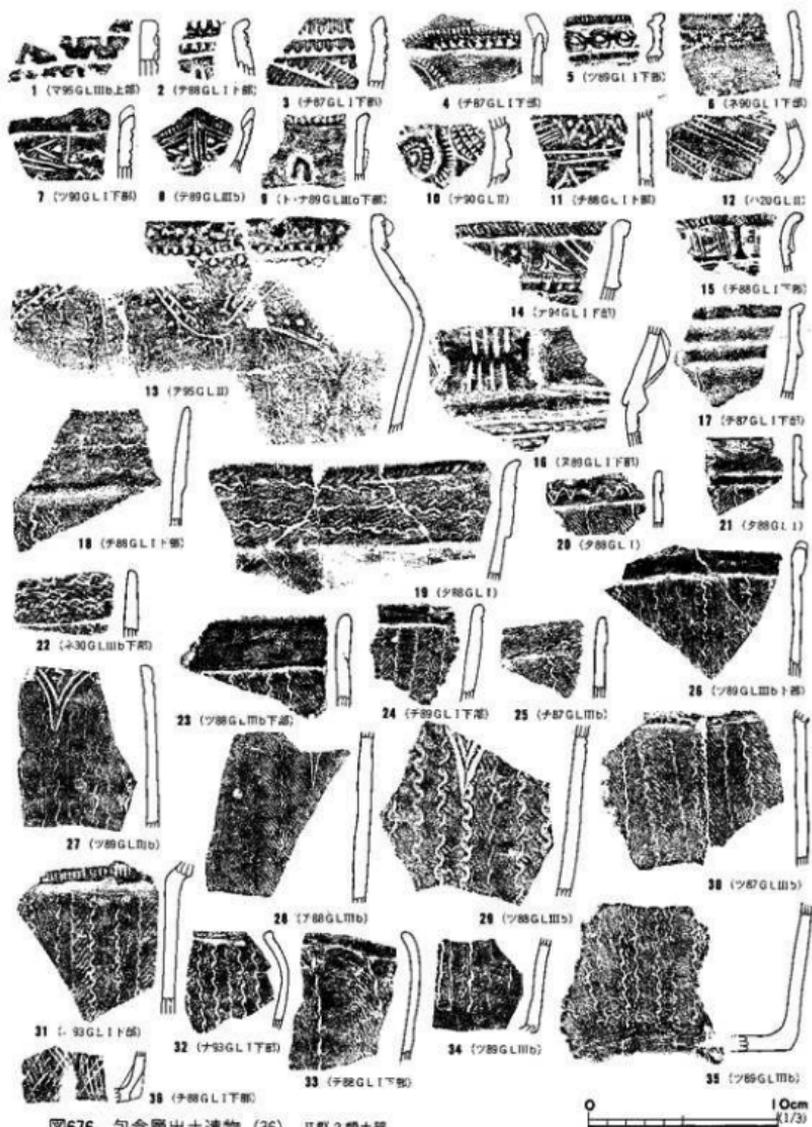


図676 包含層出土遺物(36) II群2類土器

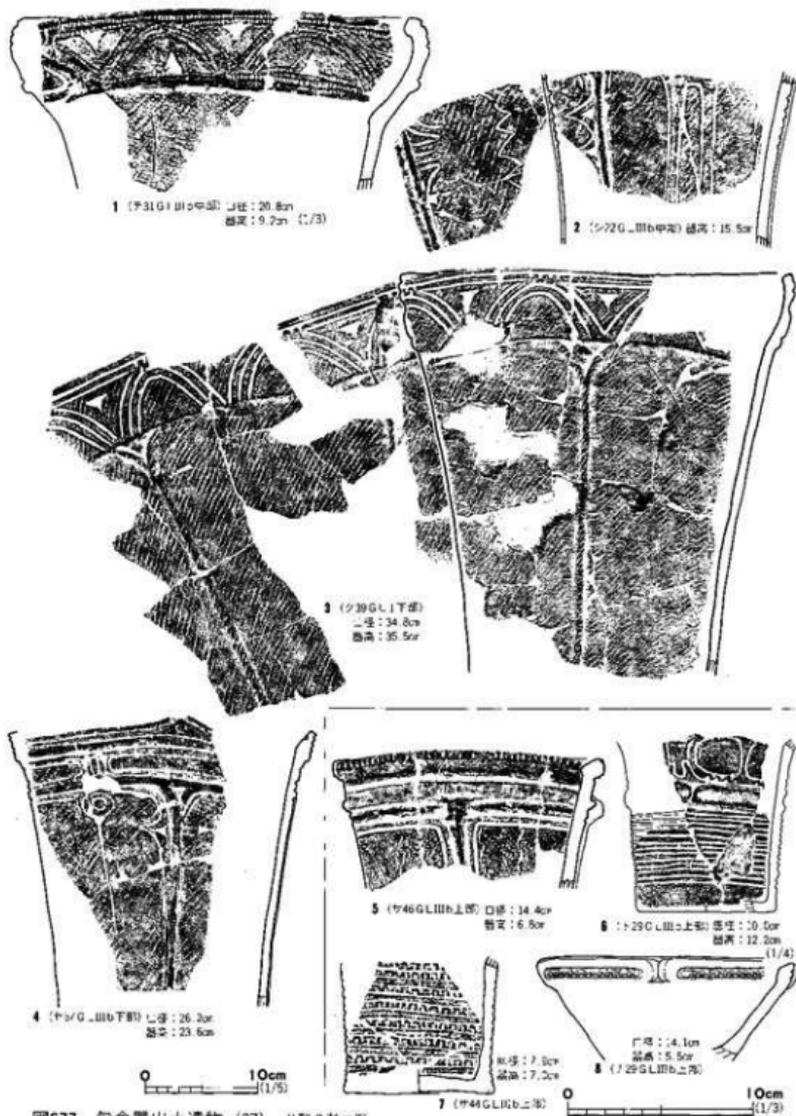


図677 包含層出土遺物 (37) II群2類ニ属

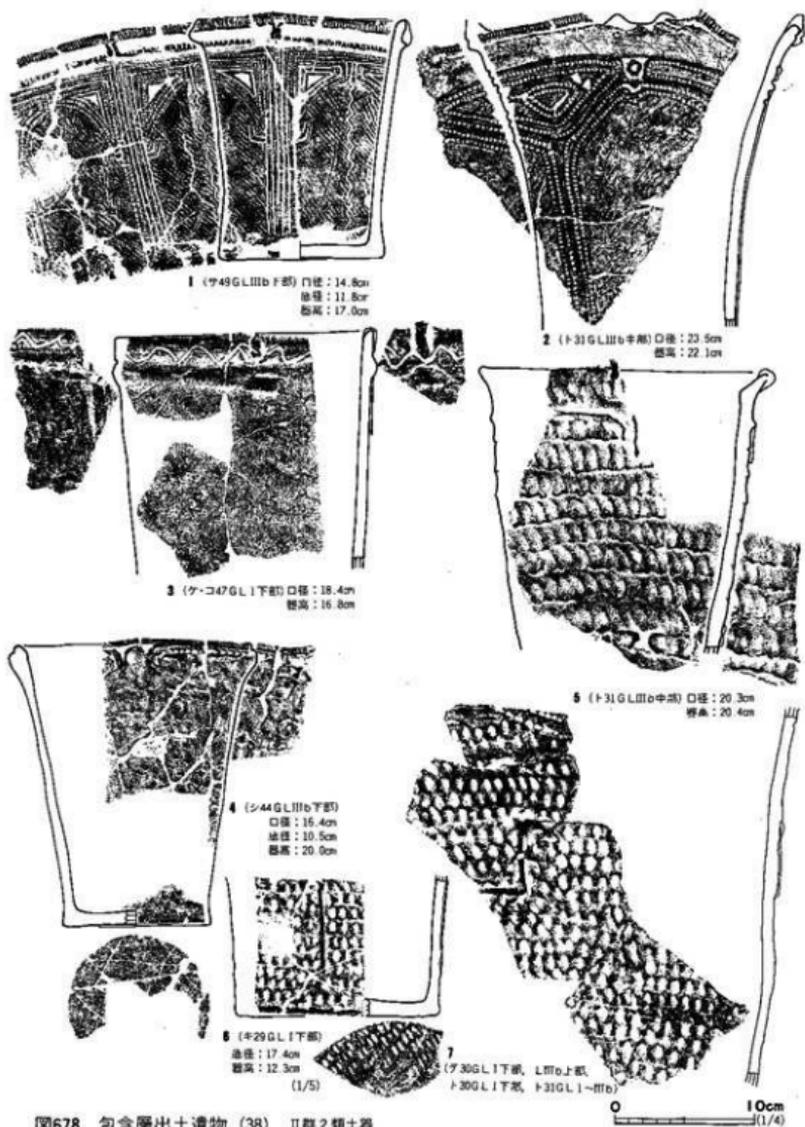


図678 包含層出土遺物 (38) II群2類土器

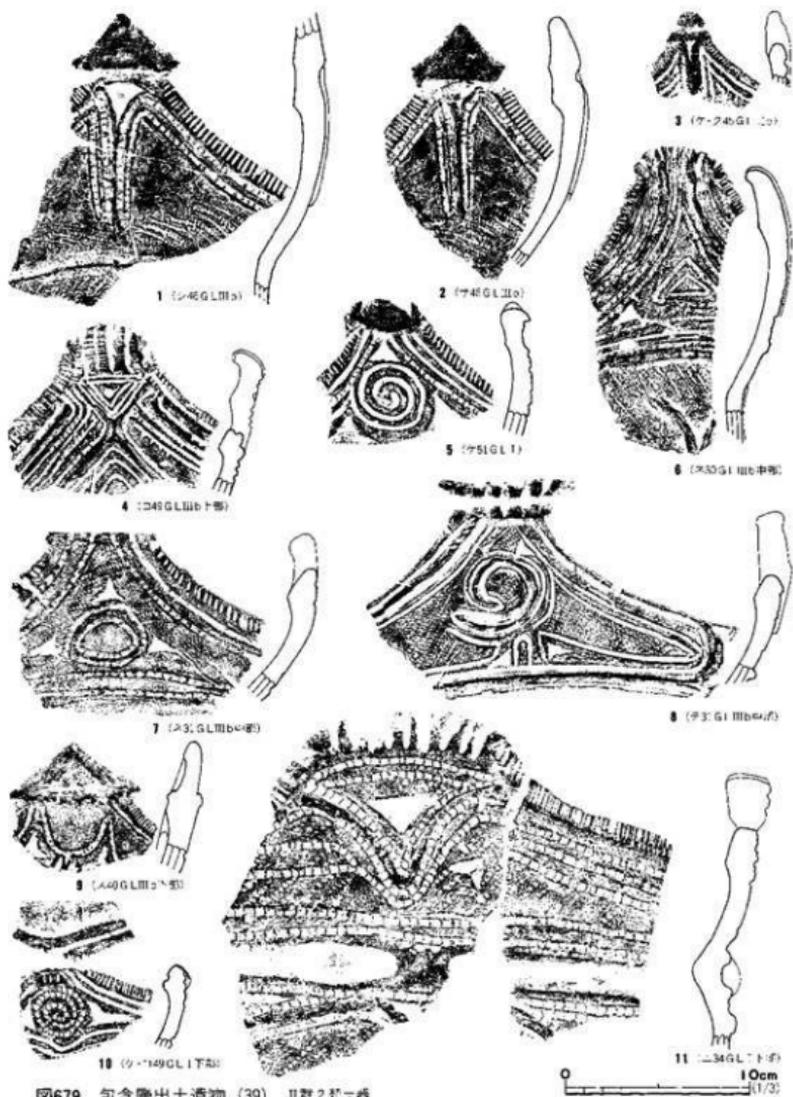


図679 包含層出土遺物 (39) II群 2期 西

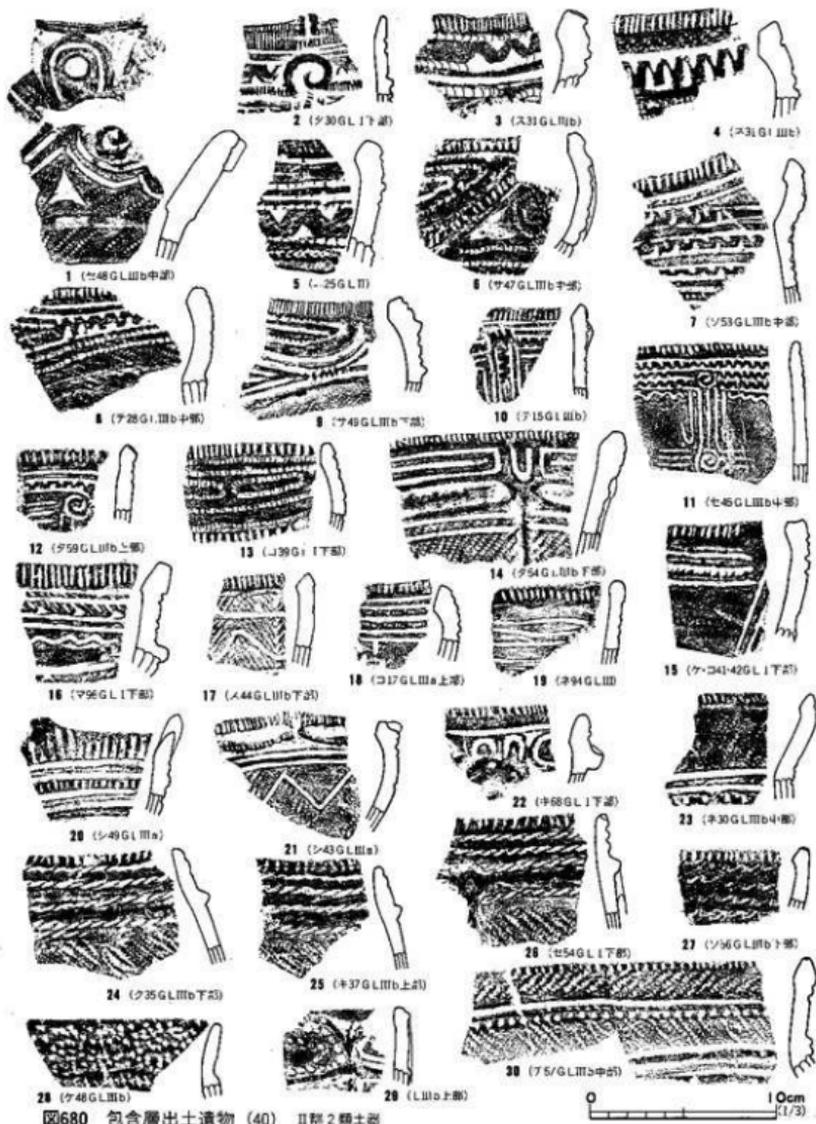


図680 包含層出土遺物 (40) II群2類土器

0 1.0cm
1/3

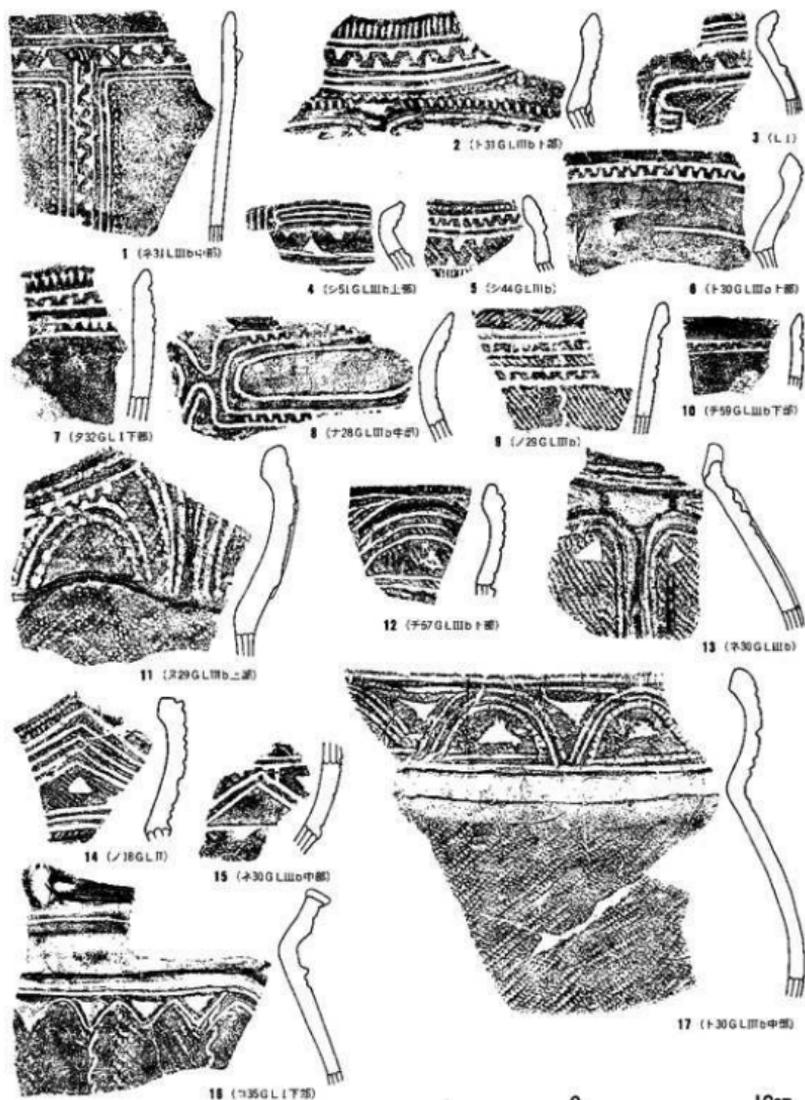


図681 包含層出土遺物(41) II群2類土器

0 10cm (1/3)

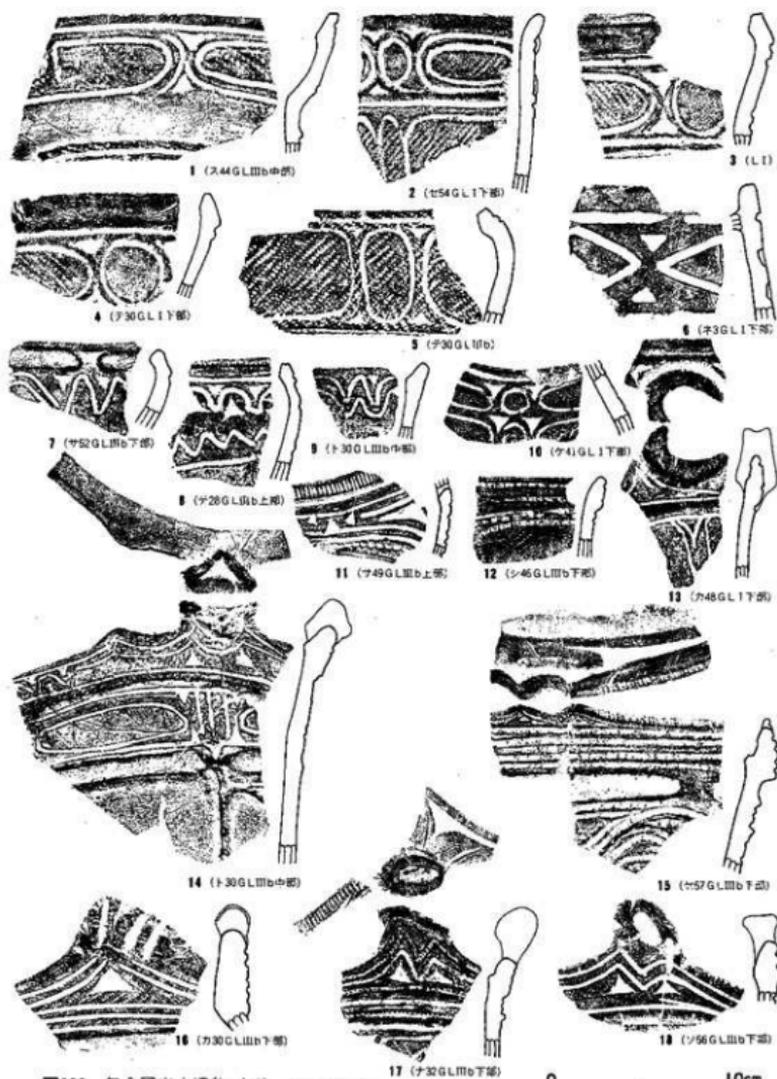


図682 包含層出土遺物(42) II群2類土器

0 10cm
0/3



図683 包含層出土遺物 (43) II群2類土器

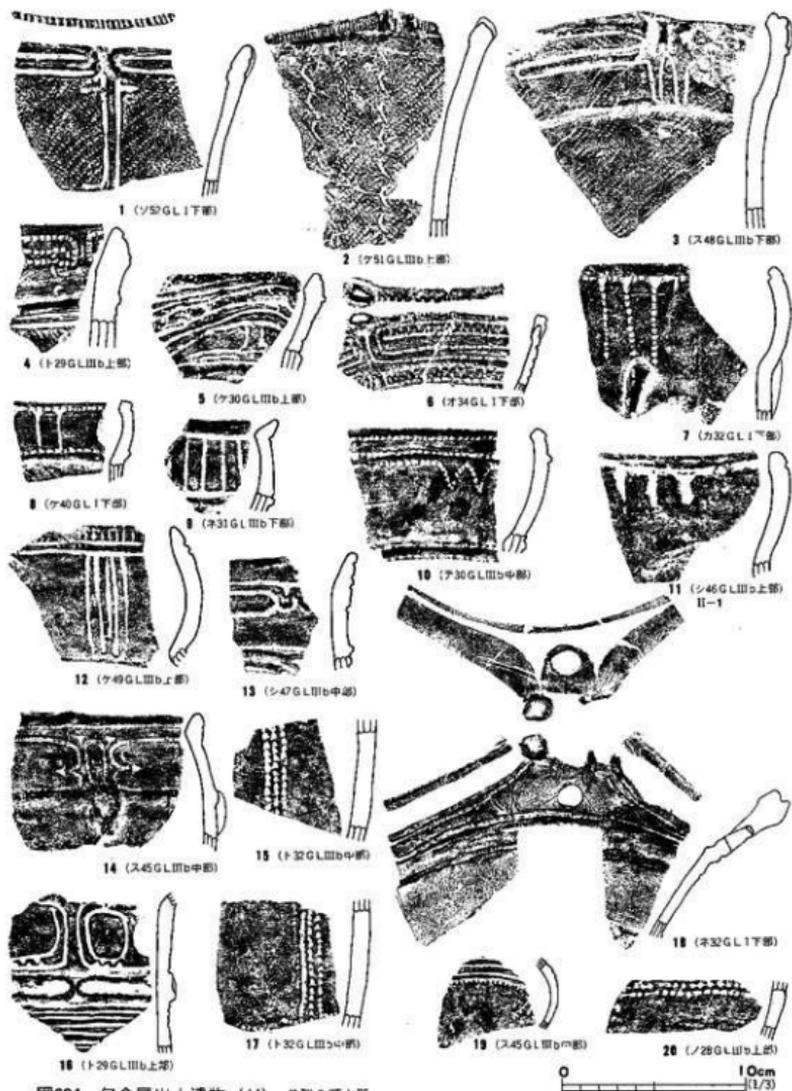


図684 包含層出土物(44) Ⅱ群2類土器



図685 包含層出土遺物 (45) II都2期土葬

0 10cm
0/31

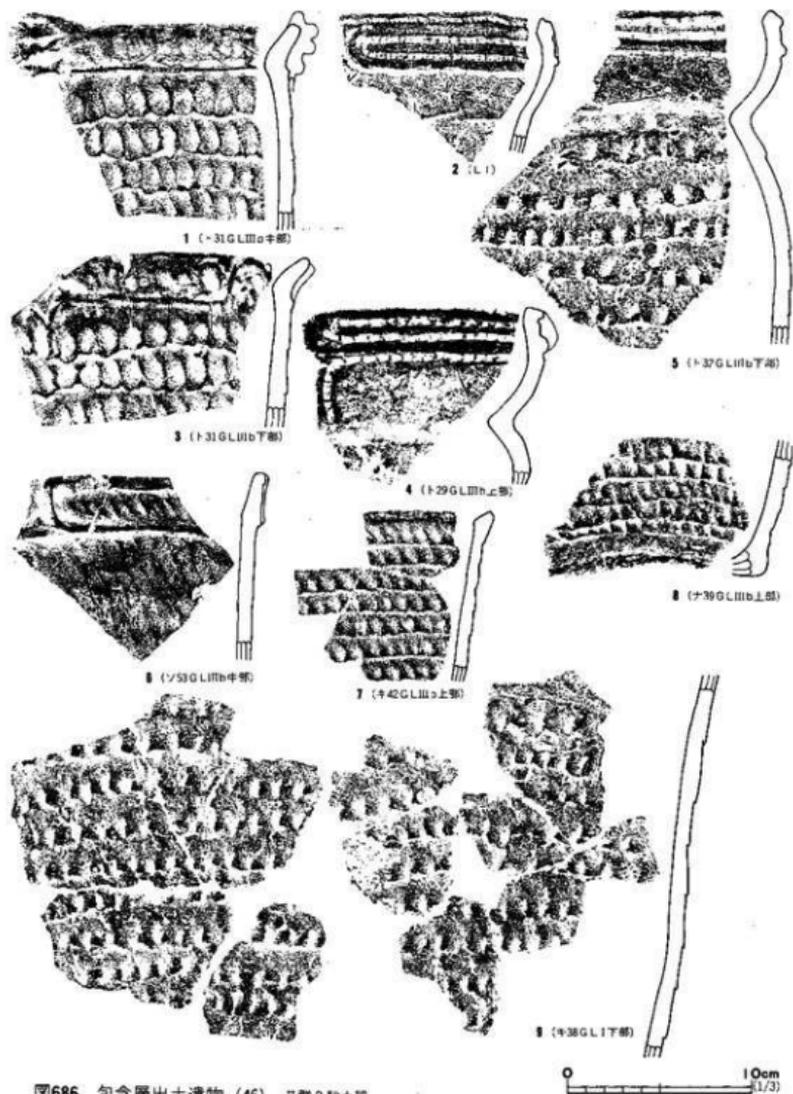


圖686 包含層出土遺物 (46) II群2類土器

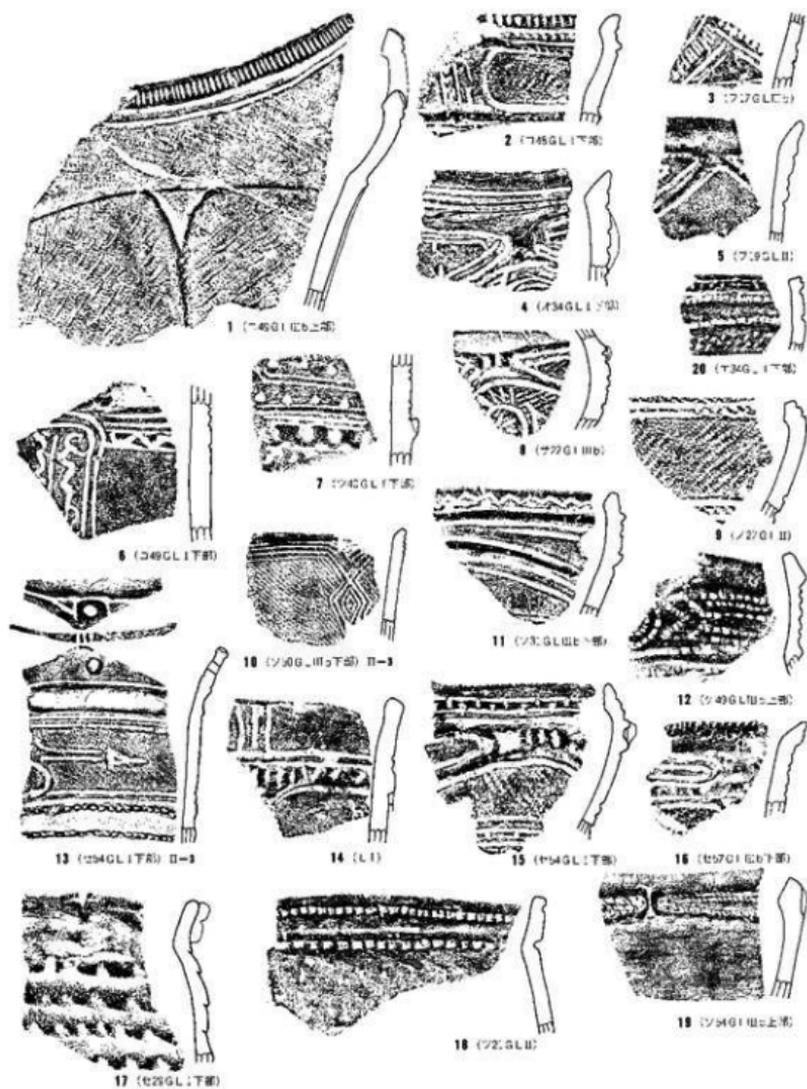


図687 包含層出土遺物 (47) II群2類土器

m種 胴部が球体状をなすものである。図681-13・16・17が比定される。17は内湾する口縁部に、弧状文と三角文が施され、頸部には無文帯が認められる。13は短口縁の深鉢で、胴部はY字状の隆帯と有節沈線とで区画されている。区画の上端には、三角文を加えている。16は胴部上端に三角文を連続して加えている。

n種 地文に縄文が施されないものである。図677-6、図678-3~7、図680-13・22・28、図681-8、図682-6~10、図683-12、図684-6~17・19・20、図685-4・7・9・14、図686、図687-6・14・17~19が比定される。図677-6は小型の土器で、胴上部には沈線による楕円形区画文、その下には楕円形の無文帯と横位の沈線文を施している。図681-8と同じく、区画文の一部には交互刺突文が加えられている。図678-4は、口縁部の隆線に沿って連続刺突文が施されている。同図3は円筒形状の深鉢で、口縁部には4単位の棒状突起が付くものと考えられる。文様は口縁部に波状沈線文が施されている。同図5~7、図686、図687-17・18は胴部の粘土紐積み上げ痕上に、押捺を加えているものである。図686-2・4~6には隆線による楕円形区画文が施され、区画内には有節沈線文が施されている。胴部には隆線を不規則に施すもの(図678-5~7)も見られる。図682-6~10と図684-14は、沈線文と有節沈線文と三角文が施されるものである。6は特殊な器形をなしている。

この他に、上記の分類に当てはまらないものが若干見られる。図676-14・15、図685-10・11は、口縁部直下に平行沈線を縦位・斜位に施している。図676-16と図685-3は深鉢の頸部破片で、16では上面に沈線を施した突起が、3ではボタン状の貼付文が付けられている。図680-15・17~19・21・23は、口縁部が内湾するものである。17にはまのびした波状沈線が、21には楕円形の区画文と、山形の沈線文が施されている。同図30は口端部に刺突、口縁部中央に横位の沈線と列点文を加えている。図681-3・4は、肥厚する口縁部の下端に三角文を上下交互に施している。図682-1~4は口縁部に沈線で楕円形の区画文が施されるもので、区画文の接する部分には三角文を加えている。

II 群 3 類 土 器 (図688~716)

縄文時代中期前葉、大木7b式土器に比定されると考えられるものである。施文される文様と器形の特徴からa~g種に7区分した。

a種 波状口縁の土器を本種とする。図688~693と図708-1~4、図715-12が比定される。図688-1は山形の大波状口縁の土器で、波頂部の上端には沈線文が、右側縁には小突起が2個付けられている。口縁部の文様は、沈線でひしゃげた三角形の区画文を描き、波頂部下位には隆線による円形文を加えている。口縁部と胴部は横位の隆線と沈線とで区画され、波頂部下位の隆線上には、横長の瘤状突起が付けられている。この突起上には、縄文痕文が施されている。胴部は波底部下位からY字状の隆線を垂下させて区画し、区画の中央にはY字状の沈線文を連続して

施した、アクセント文が見られる。同図2は波頂部に主頭状の突起、波底部には逆W字状の小突起が付けられている。口縁部には有節沈線文が施され、波頂部下位では隆線と共に渦巻文を描き、波底部では縦位に数条施されている。口縁部中央と口縁部に沿って施された有節沈線の一部は波状文を描き、胴部は波頂部下位に施されたY字状の隆線で区画されている。

同図3は山形の波状口縁の土器で、波頂部には沈線文が、波底部には刻みを加えた棒状の小突起が付く。口縁部に沿って斜め方向からの刺突による交互刺突文が施され、波頂部下位には独立する渦巻文を施している。胴部は波底部下位から垂下するY字状の隆線と、これに沿って施される沈線で区画される。この沈線の一部は、C字状のアクセント文を描いている。同図4は波頂部に交互刺突文を加えた三日月状の突起、波底部に棒状の小突起が付く。口縁部には沈線でひしゃげた三角形の区画文を描いているが、沈線の一部は横に流れて区画文は完結しない。

図689-1は波頂部からクラック状に隆沈線を下ろし、頸部には偏平な楕円形区画文を配している。胴部は波底部から垂下するY字状の隆線で区画され、区画の中央には、隆線による渦巻文を加えている。同図2は隆線と交互刺突文で、横に連続しない文様を描くものと考えられる。胴部は波底部下位から垂下するY字状の隆線で区画されている。同図3・4は口縁部に窓枠状の区画文が描かれるもので、頸部には幅の狭い無文帯が見られる。胴部は波頂部下位から垂下する、T字状の隆線によって区画されている。同図5は波頂部に主頭状の突起が付くもので、波頂部の片側縁には小突起が付けられている。

図690-5~13は波頂部に主頭状の突起が、同図14・15には渦巻状の突起が付けられている。波頂部の文様には、波頂部中央から隆線を垂下させ区画文を描くと考えられるもの(10・13)、2対のY字状の隆線を垂下させるもの(6・14)、隆線が上部で蛇行・渦巻文を描いて垂下するもの(7~9・16)が認められる。16の口縁部内面には、三又文状の文様が施される。図691-1~11と図693-2は、山形の波状口縁である。波頂部には、沈線文や刻みを加えている。波頂部に施される文様は、図690-5~13とほぼ共通している。図691-1は波頂部中央に縦位、頸部に横位の無文帯が見られ、この無文帯はX字状の隆線で区画されている。同図2には三又文、同図3の波頂部から垂下するY字状の隆線の下には、アクセント文が見られる。

図692-1~5、図693-3は、緩い波状口縁の土器である。図692-1の波頂部両端には円形の小突起が付き、口縁部には窓枠状の区画文が見られる。同図2・3は波頂部下に渦巻文が施され、2ではこの下にアクセント文を加えている。同図6・10の波頂部には、刺突文や交互刺突文が施されている。同図11・12、図693-1・9は波頂部が三角形をなすもので、図692-11の波頂部には棒状の小突起、同図12の右側縁部には袂りを加えている。図693-9には波頂部から連続爪形文を垂下させ、その中位には横長の突起が付けられている。連続爪形文は撚糸文を地文とする、同図5の口縁部にも認められる。同図7には端部が渦巻文を描く隆線が、同図8の波頂部

からはH字状の隆線が垂下している。

㊦種 縄圧痕文が施されたものである。図694～697と図702-6・7・12、図714-6、図715-3・6、図744-1、図747-2が比定される。深鉢の器形には、種々のバリエーションが認められる。図694-1は口縁部が僅かに内湾する深鉢で、文線帯は口縁部・頸部・胴部に三区画されている。口縁部には2個一対の小突起が付き、その下には隆線をH字状に貼り付けて文線の起点とし、その間に縄圧痕文を横位を基本に施している。頸部には幅の狭い無文帯を配し、これをX字状の隆線で4分割している。胴部と頸部は、上下から交互に刻みを加えた隆線で区画されている。胴部はY字状の隆線で区画され、区画の上端には縄圧痕文で鋸歯状の文線を描いている。Y字状の隆線上には、縄文が施されている。

同図2は口縁部が僅かに開く波状口縁の深鉢で、波頂部から隆線を底部付近まで垂下させている。口縁部に沿って3条の縄圧痕文を施し、その下には縄圧痕文を鋸歯状に施している。この鋸歯状文の下端からは縄圧痕文を垂下させ、胴部を短冊状に細分割している。同図3～5は、口縁部が緩く外反する深鉢である。3の口縁部には、押捺を加えた隆線とこれに沿って施される縄圧痕文で、三角形の区画文が描かれるものと考えられる。4は2個一対の小突起の下に縦位を基本に縄圧痕文を施し、その間を横位の縄圧痕文で繋いでいる。5は縦位の隆線で区画された口縁部に、横位の縄圧痕文を施している。胴部には平行沈線で、方形状の区画文を描いている。同図6～8は胴部が樽状をなす深鉢で、6の胴部上端には隆線とこれに沿って施された縄圧痕文で、対弧文を描いている。この対弧文の両端は菱形の区画文を描き、区画文下端からは、波状の隆線を垂下させている。7の縄圧痕文は、口縁部に横位、胴部では曲線的な図形を描いている。

図695-1は隆線で描かれた渦巻文に沿って、縄圧痕文が密接して施されている。同図13・15は器面に指頭圧痕を残すもので、13は波頂部にも縄圧痕文が加えられている。同図14は鉢であろうか。口縁部を区画する隆線に沿って、縄圧痕文が施されている。胴部は隆沈線で区画され、その間を横位の沈線で繋ぐようである。同図12と図696-1・2は、口縁部が肥厚する深鉢である。図696-1は、頸部と胴部に隆線で区画された幅の狭い無文帯を配している。同図14・15にはボタン状の貼付文が見られる。図697-1～6・12は胴部が樽状をなす深鉢で、口縁部に横位の縄圧痕文を施している。口縁部文線帯は縦位の隆線で区画されるものが多いが、1には刻みを施した樽状の突起が付けられている。2～5・12の胴部は、Y字状の隆線で区画されている。図702-6・7・12は口縁部に縄圧痕文、胴部上半に交互刺突文や沈線文が施されている。

㊧種 胴部が樽状をなす深鉢で、図698～701と図702-1～5・8～11・13～15、図706-2・5・6、図717-16が比定される。口縁部は「く」の字状に屈曲するものが多い。文線は胴部上半に隆線や隆沈線で楕円形区画文を描き、その下はY字状の隆線で区画されるものが主体を占める。口縁部には渦巻状などの突起、この下に橋状の把手が付くものが多い。

図698-1は口縁部に環状の突起、その下に橋状の把手が付き、11端部には爪形文が施されている。胴部は押捺を加えた隆線で区画される。この区画内は横位の沈線で上下に区分され、上部には、端部が渦巻文を描く山形の図形が描かれている。同図2・3、図699-1にも橋状の把手が付けられ、2・3には突起も付けられている。3の胴部上半には、2段の楕円形区画文が描かれている。これらの土器の口縁部直下や楕円形区画文内には、交互刺突文が施されている。

図698-4は口縁部が短く外反し、同図5の隆線上には縄文が施されている。同図6は口縁部に渦巻状の突起が付けられ、胴部上半には沈線で対弧文を描いている。胴部の区画内は横位の沈線文とC字状の沈線で上下に区分され、上部には楕円文と、上端が渦巻文を描く縦位の文様が施されている。図699-2のY字状の隆線で区画された胴部は、上下2段の楕円文で細分割されている。同図3の口唇部直下には連続爪形文が施され、胴部には任意に沈線文が施されている。同図4の胴部は沈線で区画され、胴部上半には交互刺突文が施されている。同図5の胴部区画の中央に垂下している沈線の下端には、菱形のアクセント文が加えられている。図700-2は、縦位・鋸歯状の沈線で胴部を区画している。

図706-2は口縁上端に幅の狭い楕円形状の無文帯を配し、その下に沈線で長方形の区画文を描いている。胴部はY字状の隆線で区画され、区画内は沈線で長方形に4区画されている。同図5は口縁部に棒状の突起が付けられ、胴部上半には横位に3条、交互刺突文が施されている。同図6は口縁部に小突起が付き、胴部は沈線で区画されている。区画の中央には、菱形のアクセント文が加えられている。胴部を区画する沈線は、胴部中位で渦巻文やC字文を描いている。

図701-3は胴部のほぼ全面に、隆線・沈線・交互刺突文を施している。同図9の口縁部には押捺を加えた突起が、図702-3には幅の狭い無文帯が認められる。同図8・9は地文が施されないもので、8は粘土の積み上げ痕を隆線に残している。同図10は、沈線で区画された内部に三角文が施されている。Ⅱ群2類土器であろう。

d種 胴部が直線的に開き、僅かに内湾する口縁部が外傾して開く深鉢である。図703-3、図704、図705-2~5、図708-5~12、図709-3~17、図710-2~8・10~12、図711-1~8・10~14・16~21、図713-16、図716-12~18、図717-5~8が比定される。本種土器には、図704-1~4のような比較的小型の土器も多く見られる。

図703-3は口縁部に隆沈線による楕円形区画文が施されるもので、区画文上部の隆線上には交互刺突文が施されている。胴部はT字状の隆線で8区画され、この隆線は胴部中位で菱形文やC字文を描いている。同図1は口縁の一部が小波状をなす。その下にはX字状の隆線で区画された、幅の狭い無文帯を配している。口縁部には円形文を中心として、沈線で波状文を描いている。波状文の隙間には部分的に三角文が加えられ、胴部はT字状の隆線で区画されている。Ⅱ群2類土器に比定されるものであろう。

図704-1~4の口縁部には、小突起が付けられている。1~3の口縁部直下には、交互刺突文が施されている。口縁部には沈線で方形・楕円形状の区画文を描き、3にはT字状のアクセント文が加えられている。4の胴部は隆線で区画され、この脇にV字状の隆線を加えている。1の胴部はV字状の隆線を起点として、長方形の区画文を沈線で上下2段描き出している。頸部には隆線で区画された楕円形の区画文が見られる。3の胴部には沈線により、短冊状の文様が施されている。図705-2・3の口縁部直下にも交互刺突文が施され、3の突起下には、沈線で渦巻文が描かれている。同図5の頸部には楕円形区画文、胴部にはY字状の隆線が施されている。破片には口縁部直下に交互刺突文を施すもの(図708-5・8・他)が多く見られ、その下に沈線を、横位・縦位・波状・弧状に施すものも見られる。

●種 円筒形状をなす深鉢や、胴部から口縁部が直線的に開く深鉢である。図703-2、図705-1、図706-4、図707-1~4、図713-3・4・7・8・10・14・17~19、図714-7・9・12・14・20が比定される。

図703-2は口縁部に沈線で方形の区画文を描くものと考えられ、胴部は刺突を加えたT字状の隆線で区画されている。胴部の区画の中央には、列点文が縦位に施されている。図705-1は口縁部が複合口縁状に肥厚し、口縁部には小突起が付く。図706-4は口縁部の楕円形区画文内に、交互刺突文が施されている。図707-1は口縁部を無文とし、胴部に2本一組の隆線とそれに沿って施された沈線で、方形の区画文を描いている。縦位の沈線は、連弧状の図形を描く。同図4は胴部を沈線で長方形に区画し、区画の中央には渦巻文を加えている。同図2は、口縁部に横位の沈線を施している。図713-3には刻みを加えた隆線による、弧状の突起が付けられている。図714-7には交互刺突文と沈線文が重層して施され、同図20の口縁部直下には、斜位の押捺を加えた隆線が通っている。

f種 頸部が「く」の字状に強く屈曲するものである。図706-1、図710-9・13~15、図712-1・2・6・9・11・12、図713-2・5・6・20、図714-5・21が比定される。

図706-1は胴部上半にも屈曲の見られる深鉢で、口縁部の上下端には交互刺突文が施されている。図710-14・15は口縁の一部が連続する小波状をなすもので、14の口縁部には、楕円形や円形の文様が描かれている。14と同図9の楕円形区画文の上部には、交互刺突文が加えられ、頸部には無文帯が見られる。14の頸部無文帯は端部が肥厚し、図712-1と同じ楕円形状の区画文を描いている。図712-11は口縁部下端に列点文が、同図12の口縁部には交互刺突文が施されている。図713-2の口縁部には小突起が付き、頸部無文帯下の胴部には、隆沈線で三角形の区画文を描くものと考えられる。同図20は口縁部に刻みを加えた小突起が付き、この下には、隆線で小さい連弧文を加えている。胴部には、隆線と有節沈線で楕円形の区画文が描かれている。同図5の胴部文様もこれに近い。

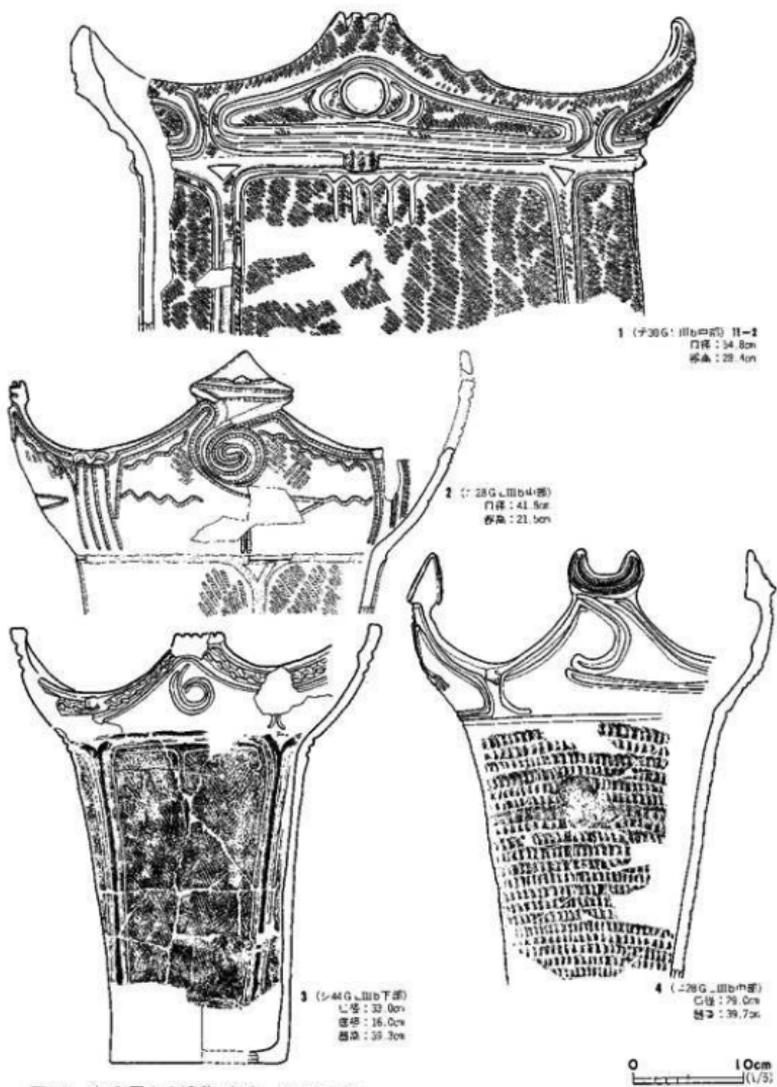


図688 包含層出土遺物 (48) 耳群3銅土器

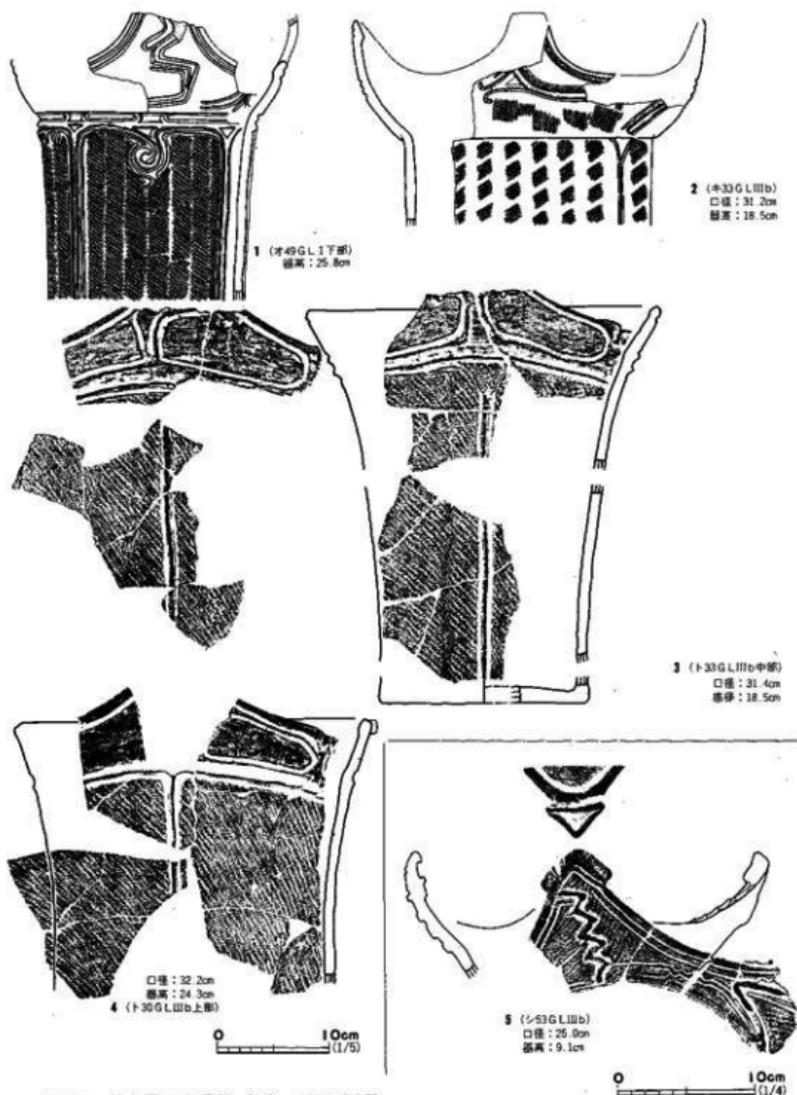


圖689 包含層出土遺物 (49) II群3期土器



図690 包含層出土遺物 (50) II群3 熟土部

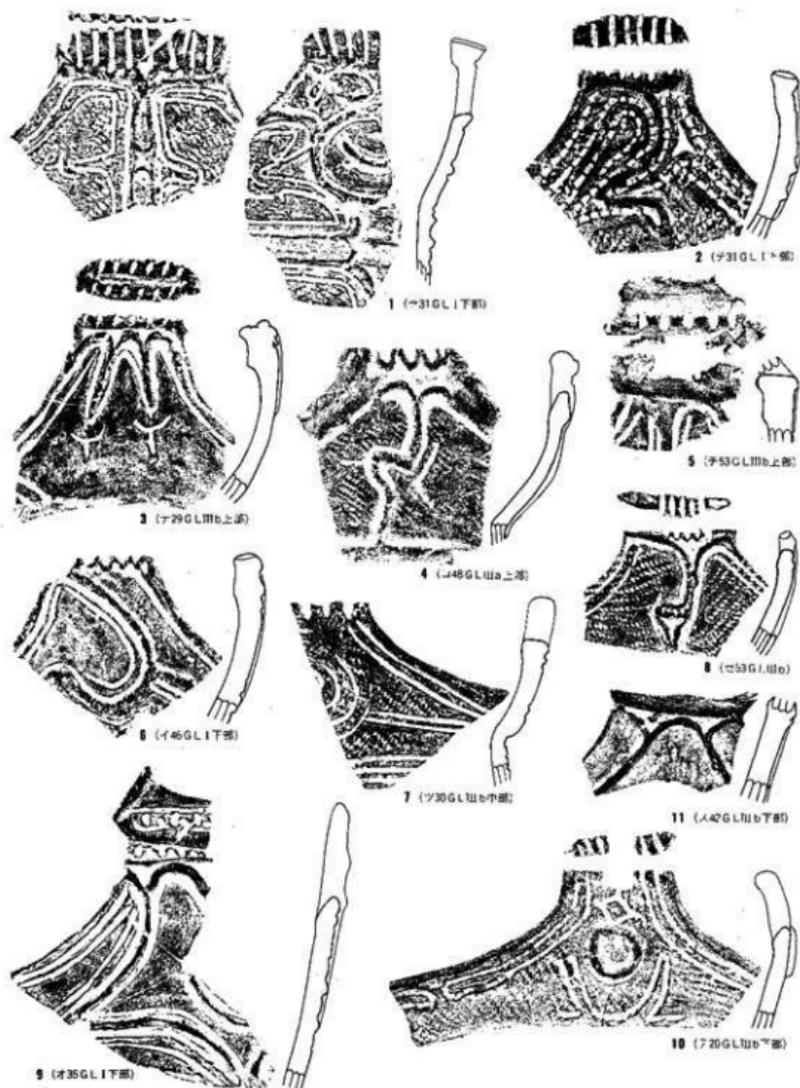


図691 包含層出土遺物 (51) II群3類土器

0 10cm (1/3)



図692 包含層出土遺物 (52) II群3類土器

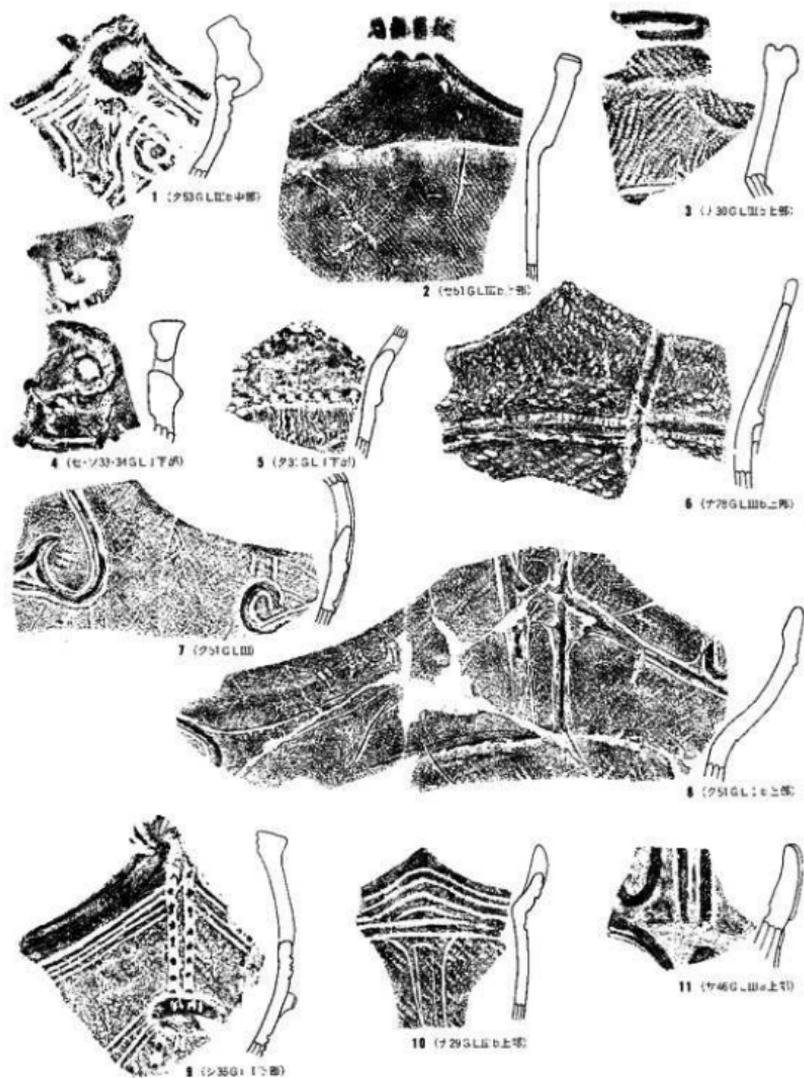
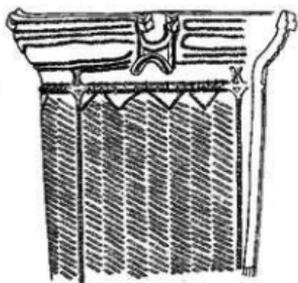
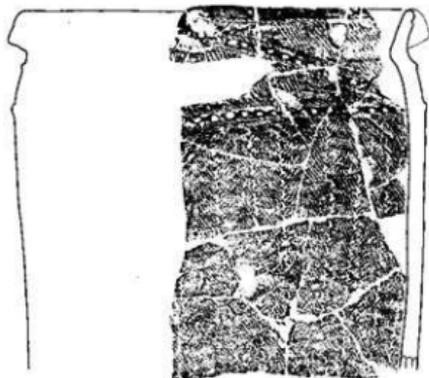


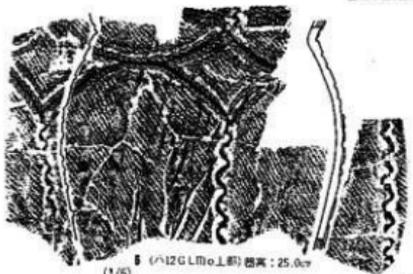
圖693 包含層出土遺物 (53) II群3期土器



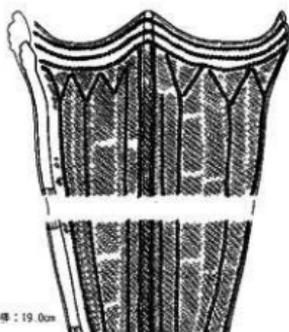
1 (748GLIIIb下部) 口径: 23.8cm
器高: 25.4cm



3 (749GLIIIb中部) 口径: 35.0cm
器高: 33.0cm



6 (742GLIIIa上部) 器高: 25.0cm
(1/5)



口径: 19.0cm

2 (749GLIIIb)



4 (738GLIII) 口径: 21.0cm
器高: 12.2cm



5 (746GLI F2) 口径: 16.3cm
器高: 7.8cm



7 (734GLIIIa上部) 口径: 13.2cm
器高: 16.0cm



8 (747GLIIIa上部)
口径: 9.2cm
器高: 5.9cm



図694 包含層出土遺物 (54) II群 3期土器

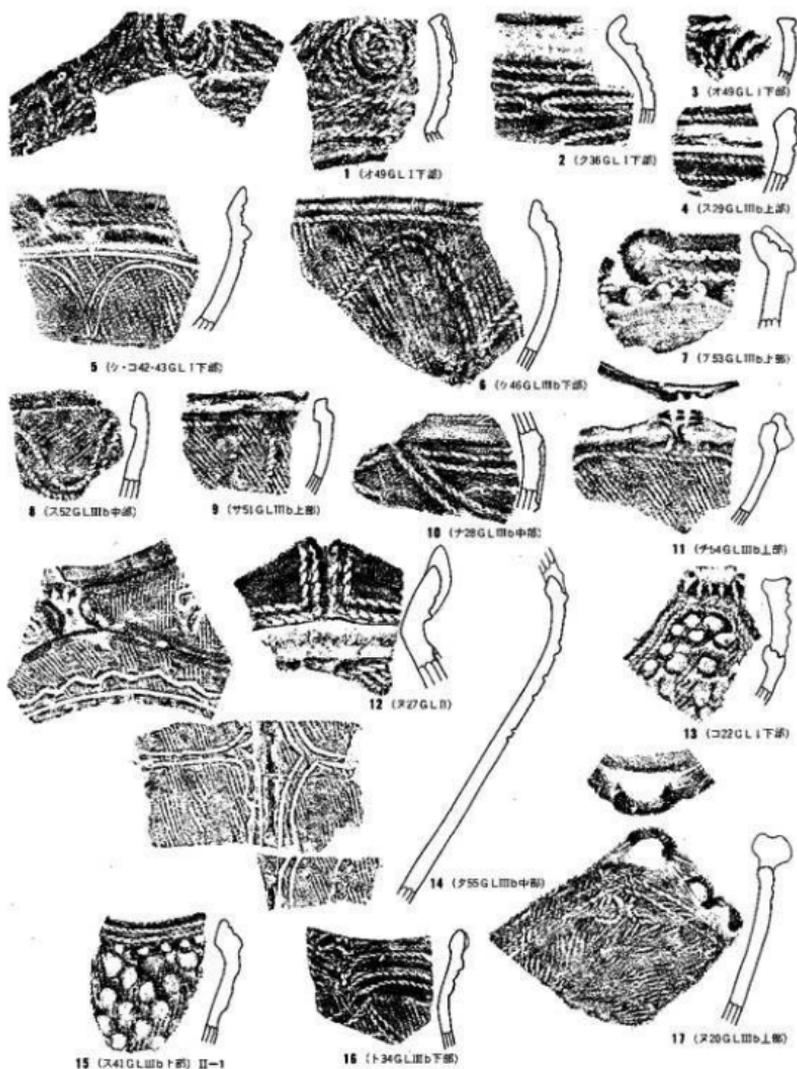


図695 包含層出土遺物 (55) II群3類土器

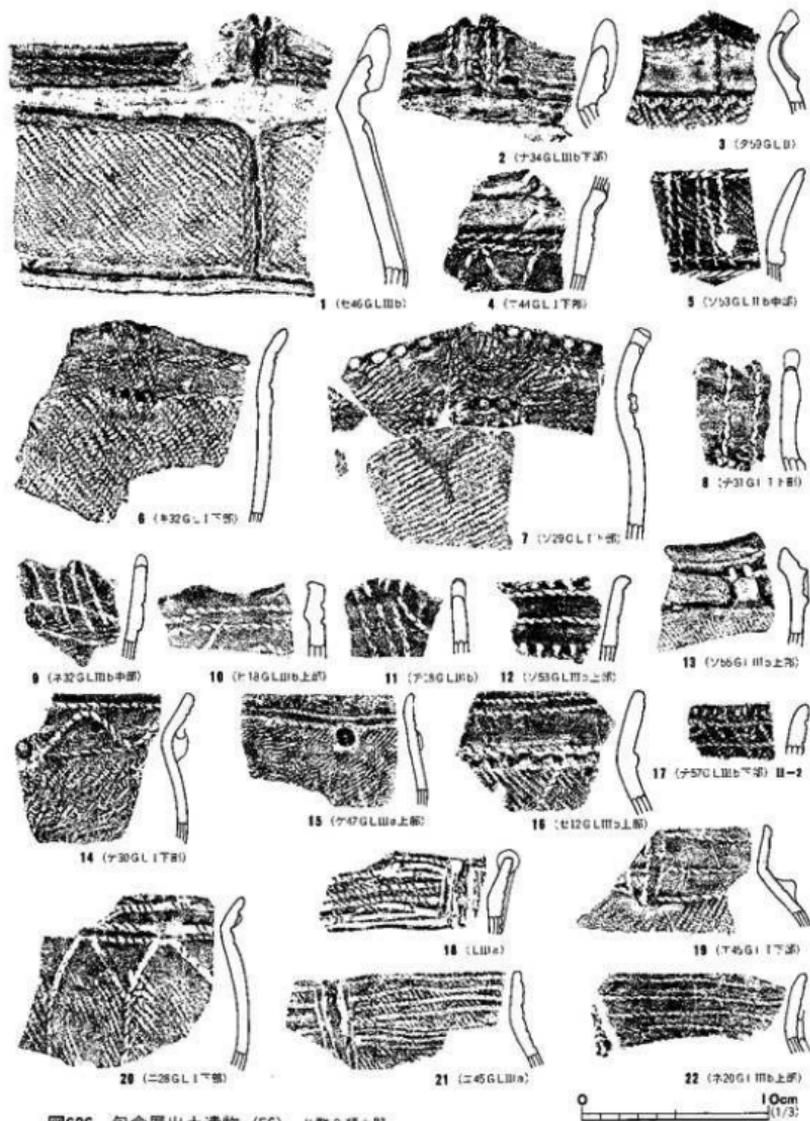


図696 包含層出土遺物 (56) II群3期土器

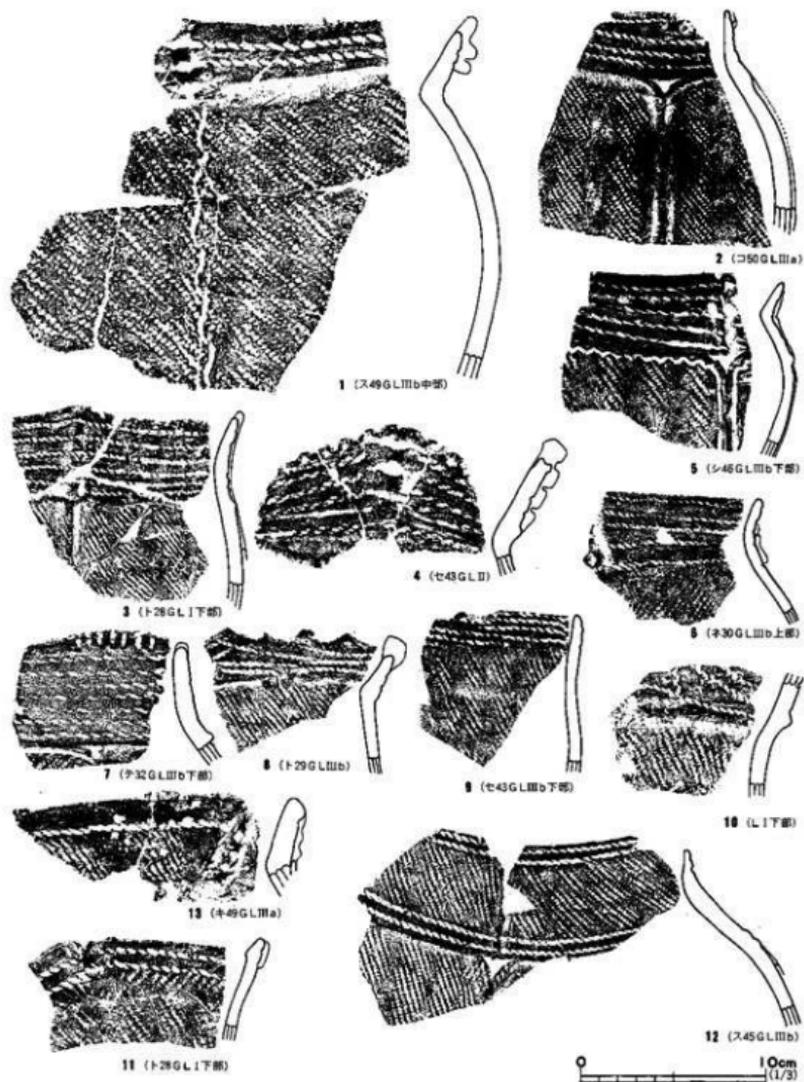


図697 包含層出土遺物 (57) II群3類土器

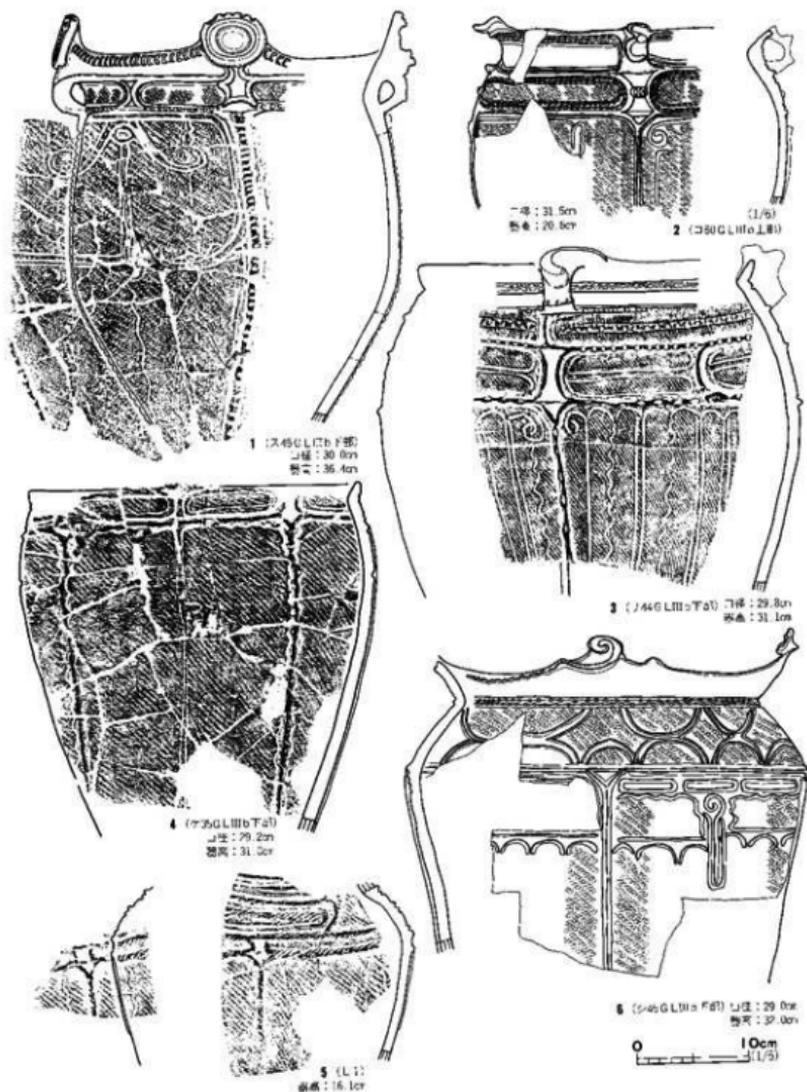


図698 包含層出土遺物 (58) II群3類: 銅

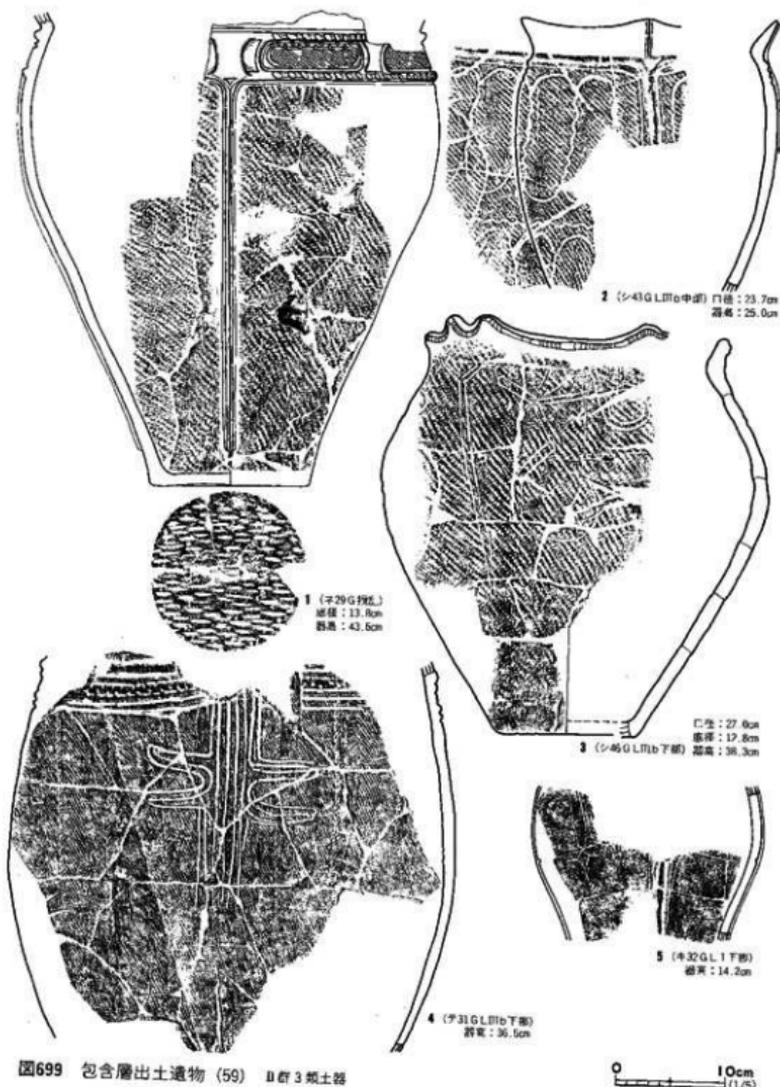


图699 包含層出土遺物 (59) II 群 3 類土器

第2章 遺構と遺物



図700 包含層出土遺物 (60) II群3類土器



図701 包含層出土遺物 (61) II群3類土器

第二章 遺構と遺物

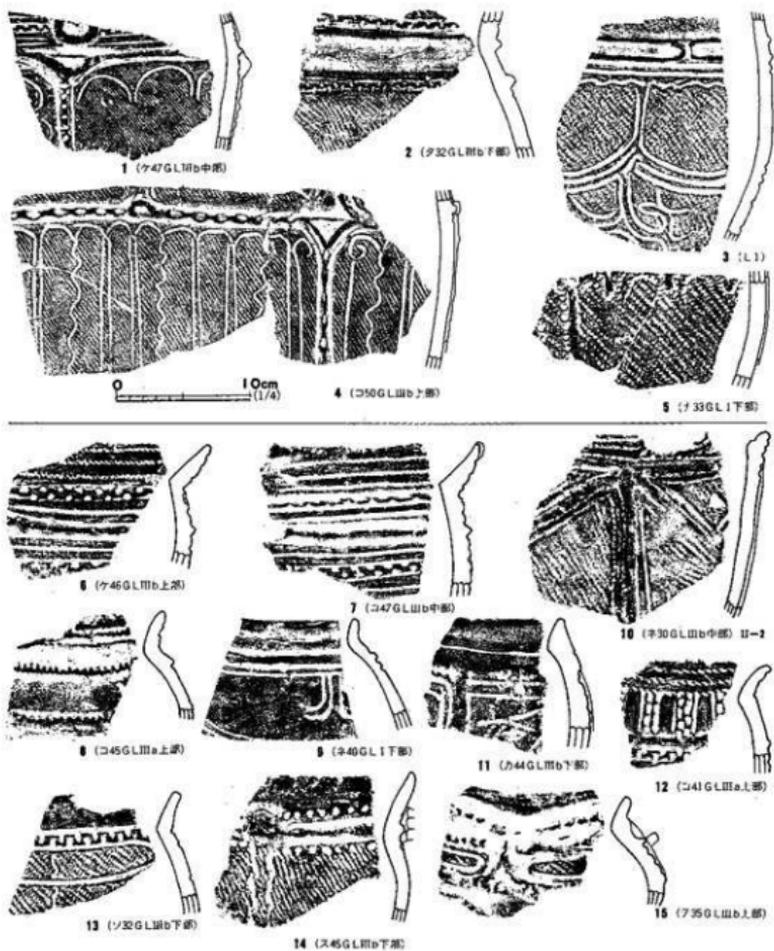


図702 包含層出土遺物 (62) II群3類土器



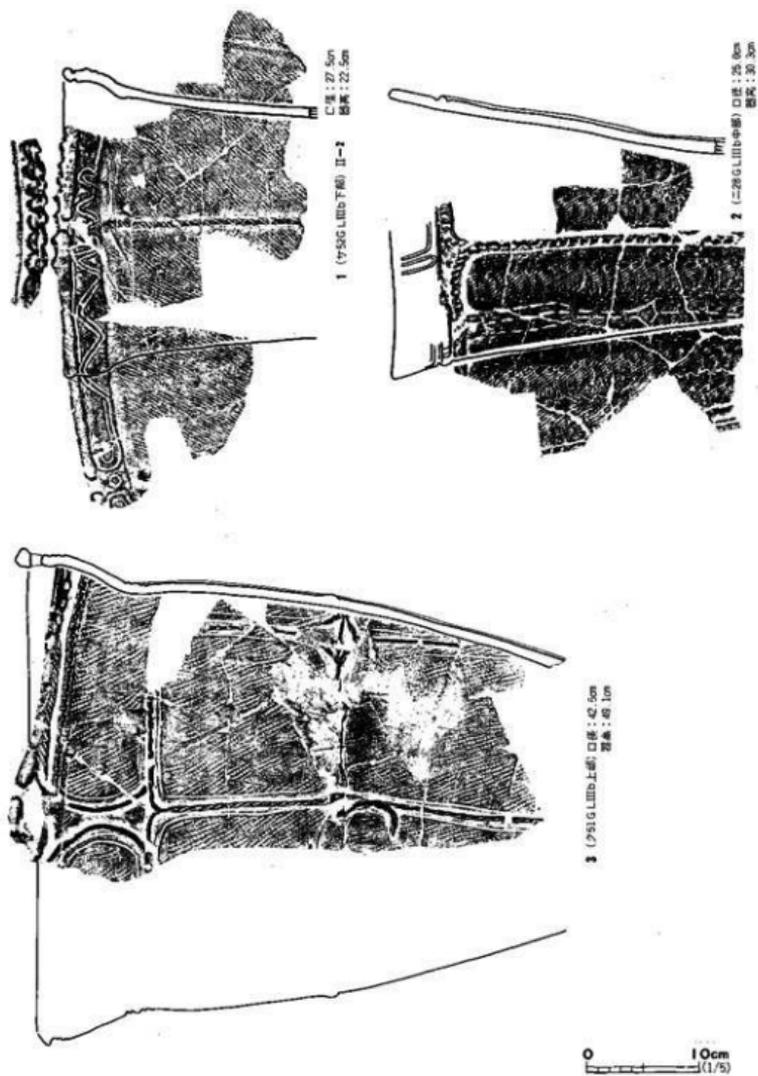
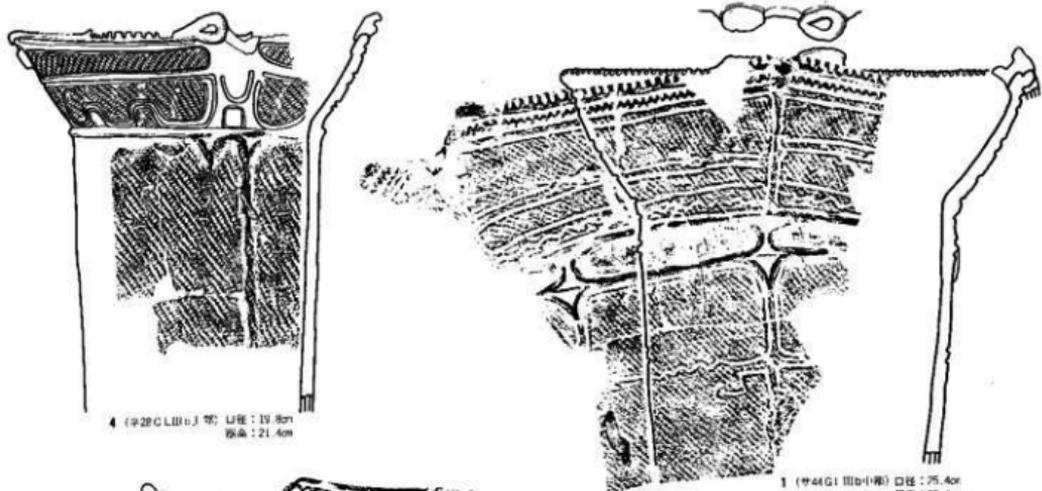
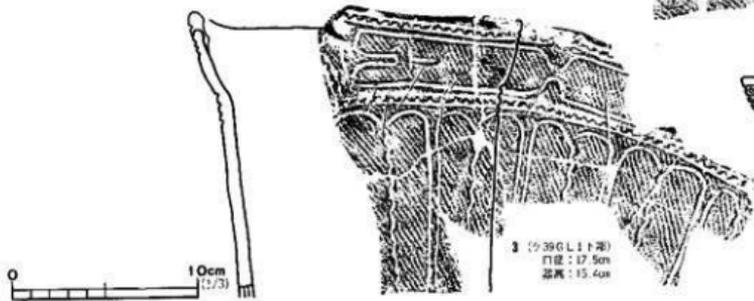


图703 包含層出土遺物 (63) II群3類土器



1 (944G1 IIIb中層) 口径：75.4cm
器高：22.4cm

4 (928G1 IIIb中層) 口径：19.8cm
器高：21.4cm



3 (939G1 I中層) 口径：17.5cm
器高：13.4cm

2 (750G1 IIIb1中層) 口径：22.3cm
器高：9.9cm (1/4)



図704 包含層出土遺物 (64) II層3層土器

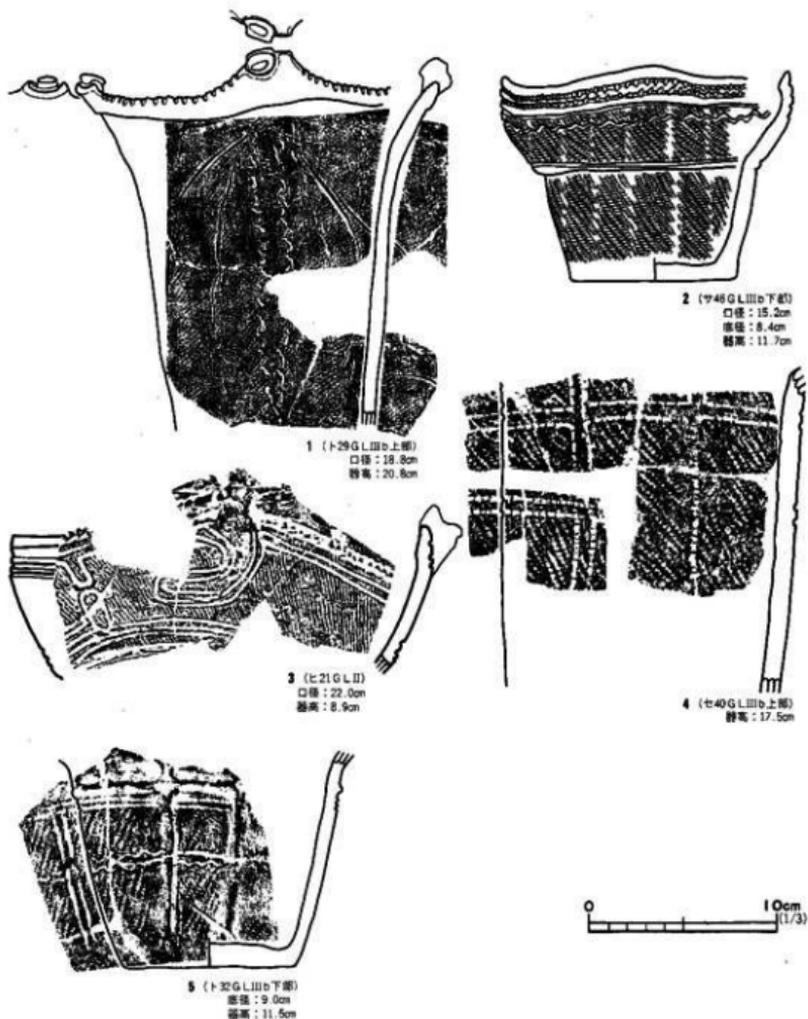
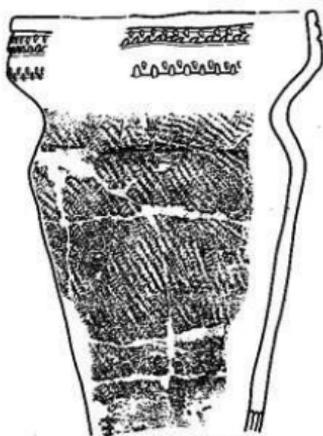
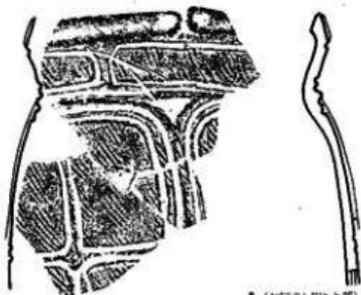


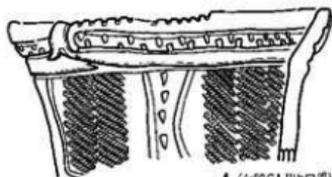
圖705 包含層出土遺物 (65) II群3類土器



1 (二29 G.L. IIIb 中節)
口徑：16.4cm
器高：22.8cm



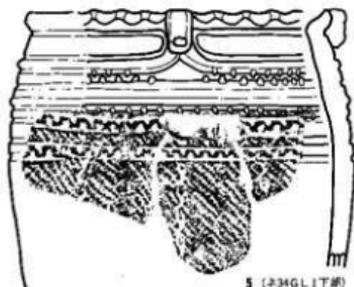
2 (七56 G.L. IIIb 上部)
口徑：19.4cm
器高：14.5cm



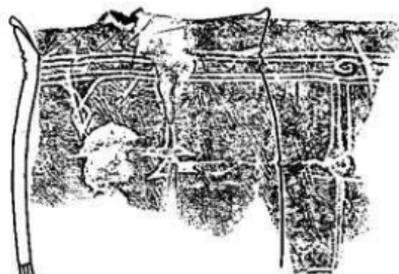
4 (五49 G.L. IIIb 中節)
口徑：17.4cm
器高：7.9cm



3 (七44 G.L. IIIb 上部)
口徑：18.9cm
器高：4.9cm



5 (二34 G.L. I 下部)
口徑：15.6cm
器高：15.0cm



6 (五49 G.L. IIIb 中節)
口徑：13.5cm
器高：14.0cm

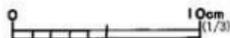


圖706 包含層出土遺物 (66) II群3類土器

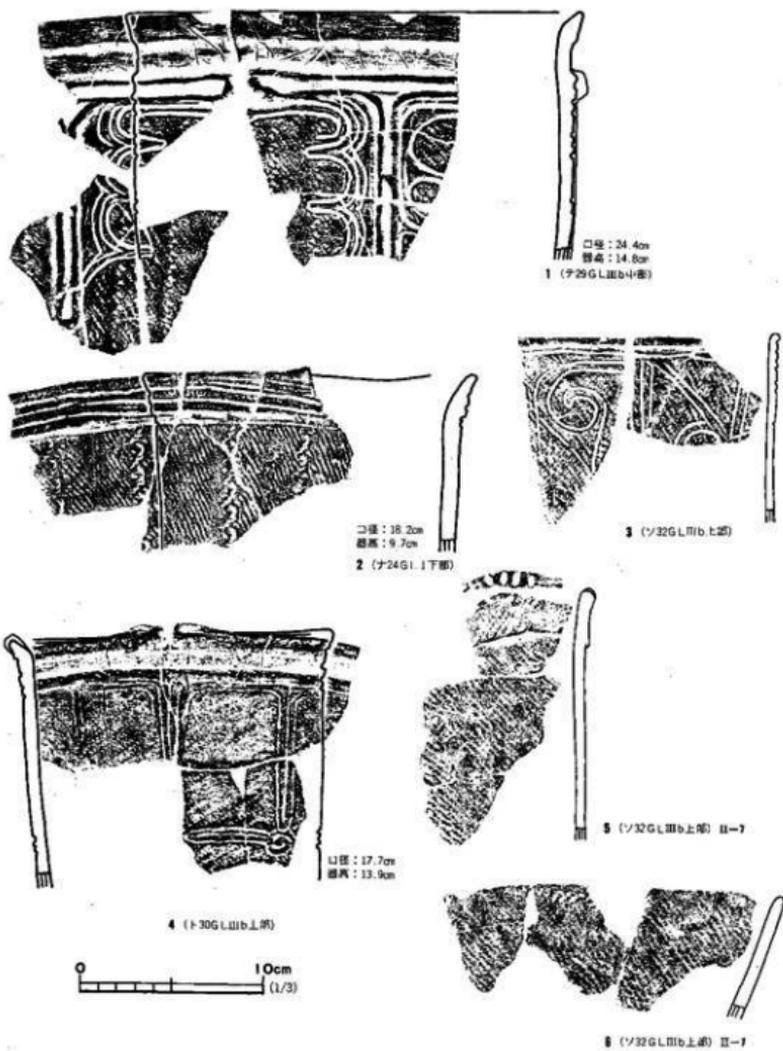


圖707 包含層出土遺物(67) II群3類土器

第2章 遺構と遺物

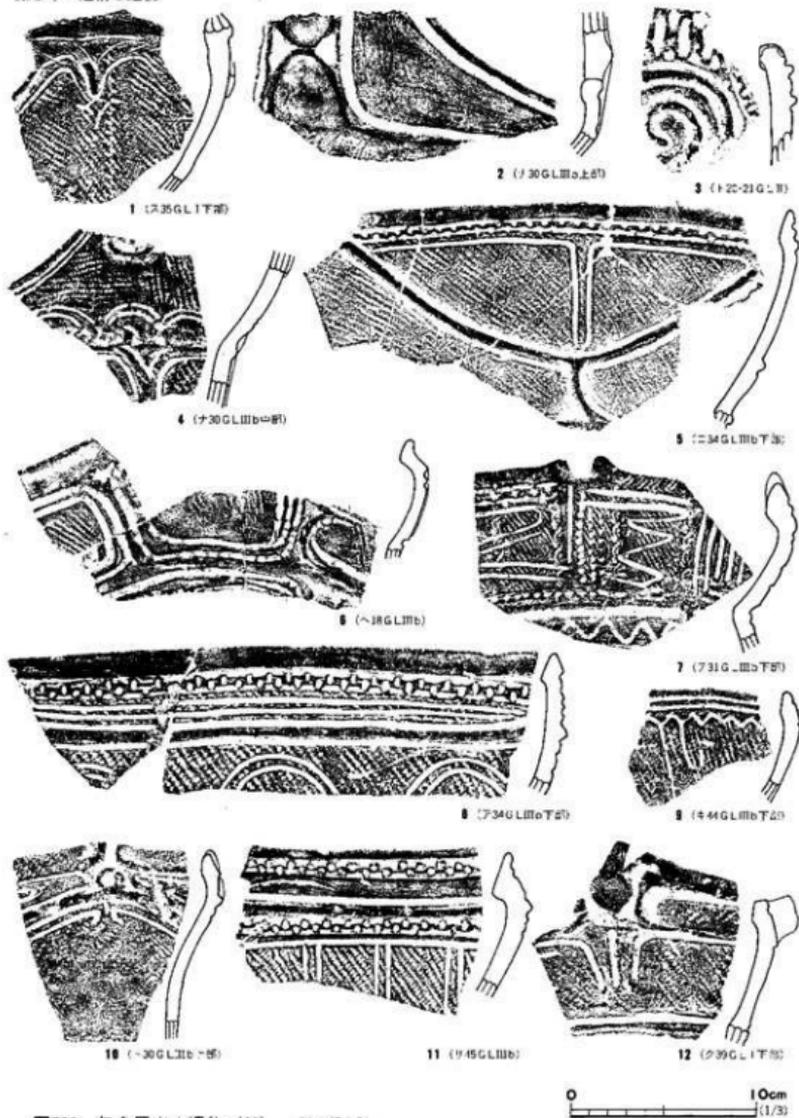


図708 包含層出土遺物 (68) II群3類土器

第6層 遺物包含層

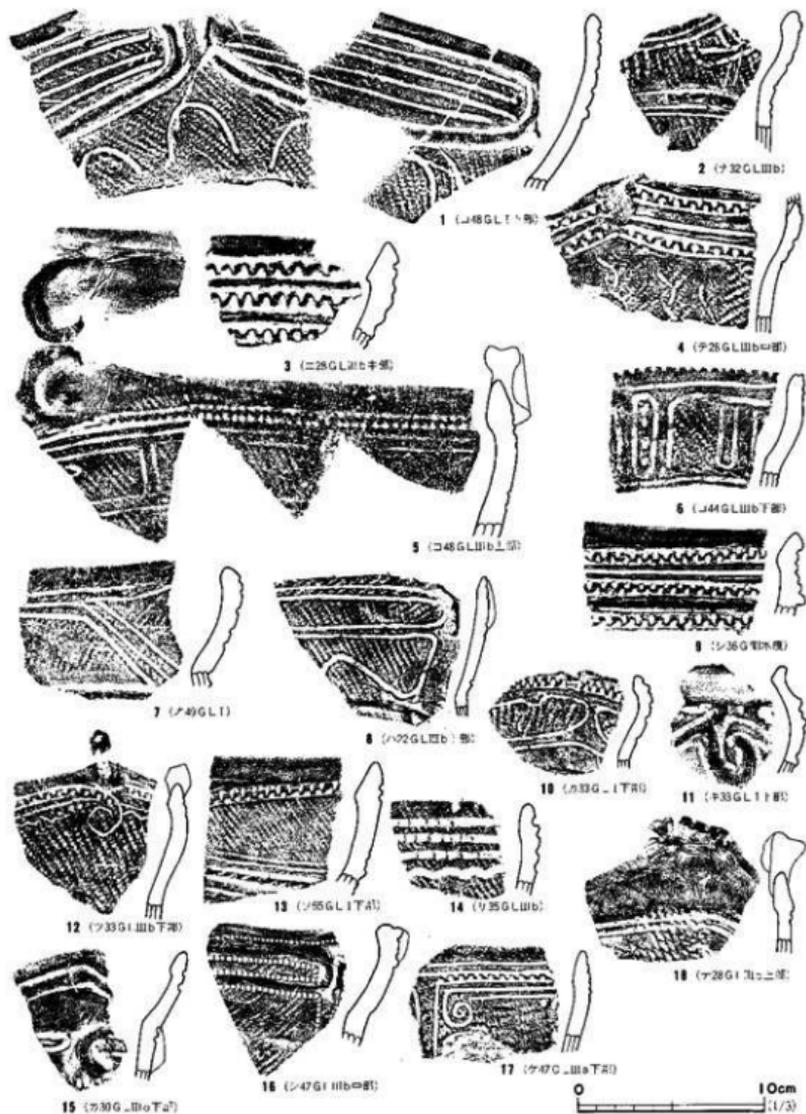


图709 包含層出土遺物 (69) II群3新土炭

第2章 遺構と遺物

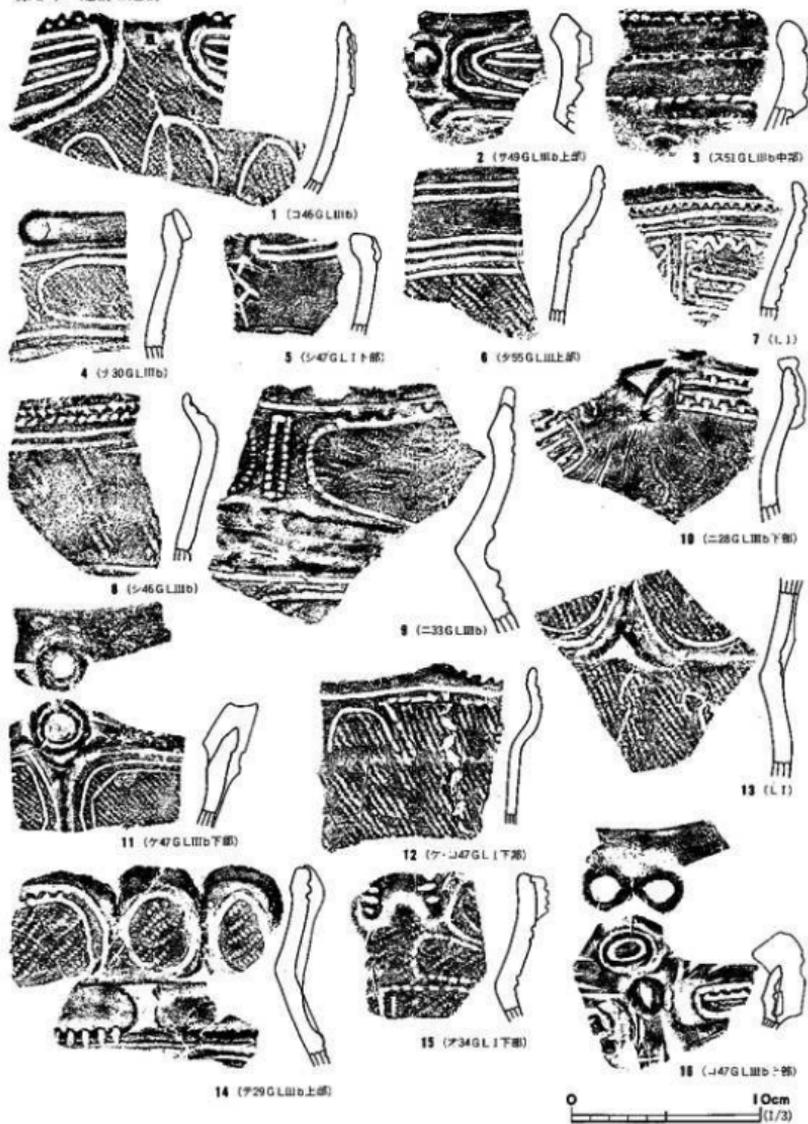


図710 包含層出土遺物 (70) II群3如土器



図71 包含層出土遺物 (71) II群3類1器

第2章 遺構と遺物

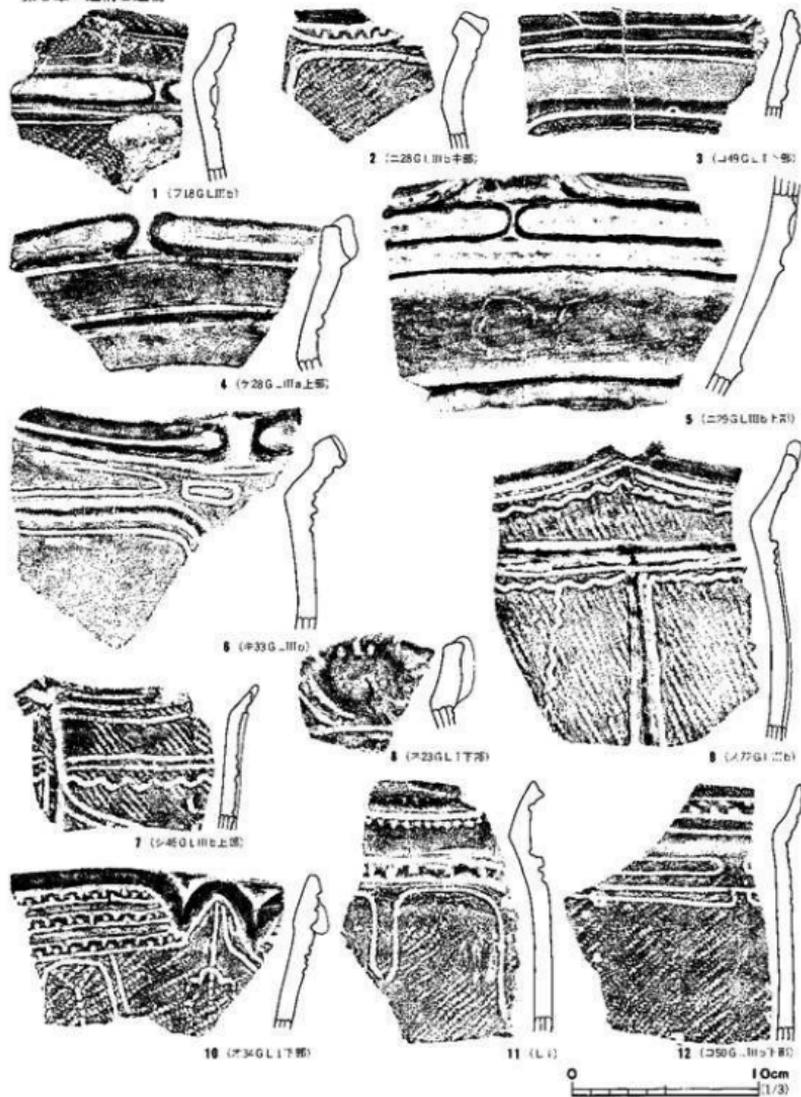


図712 包含層出土遺物 (72) II群3墳土器



図713 包含層出土遺物 (73) II群3類土器



図714 包含層出土遺物 (74) II群3期土器

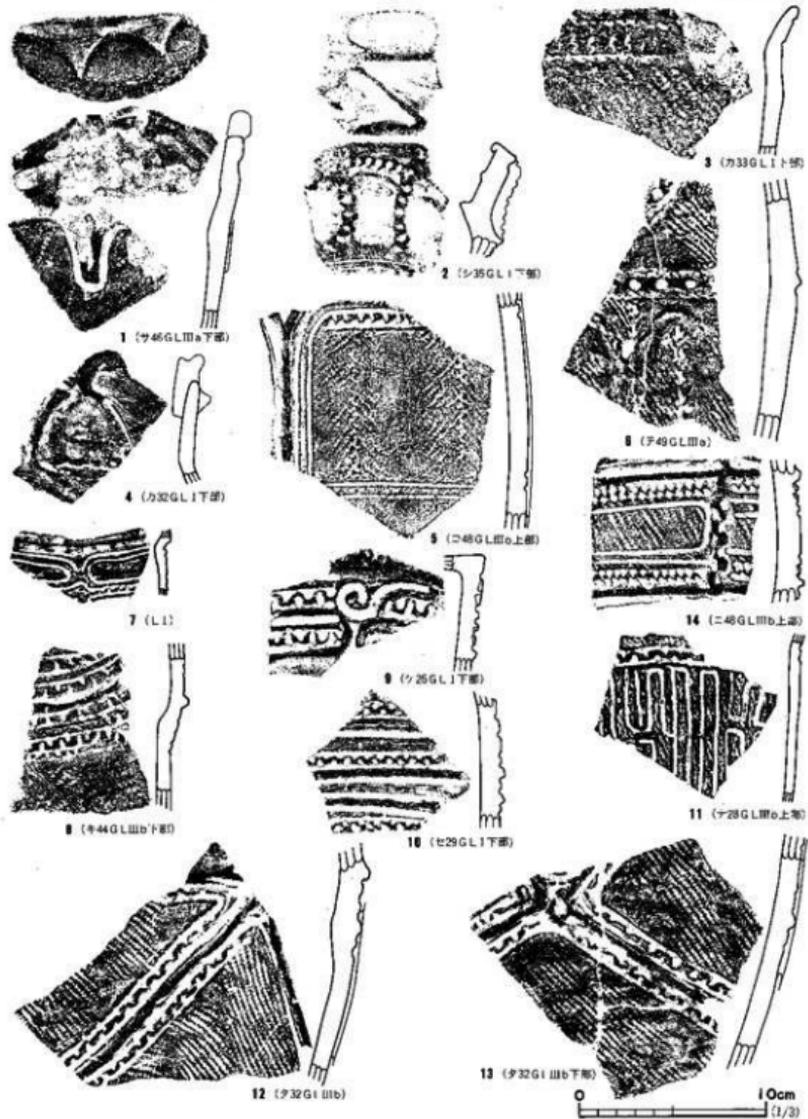


図715 包含層出土遺物 (75) II群3期土器

第2章 遺構と遺物

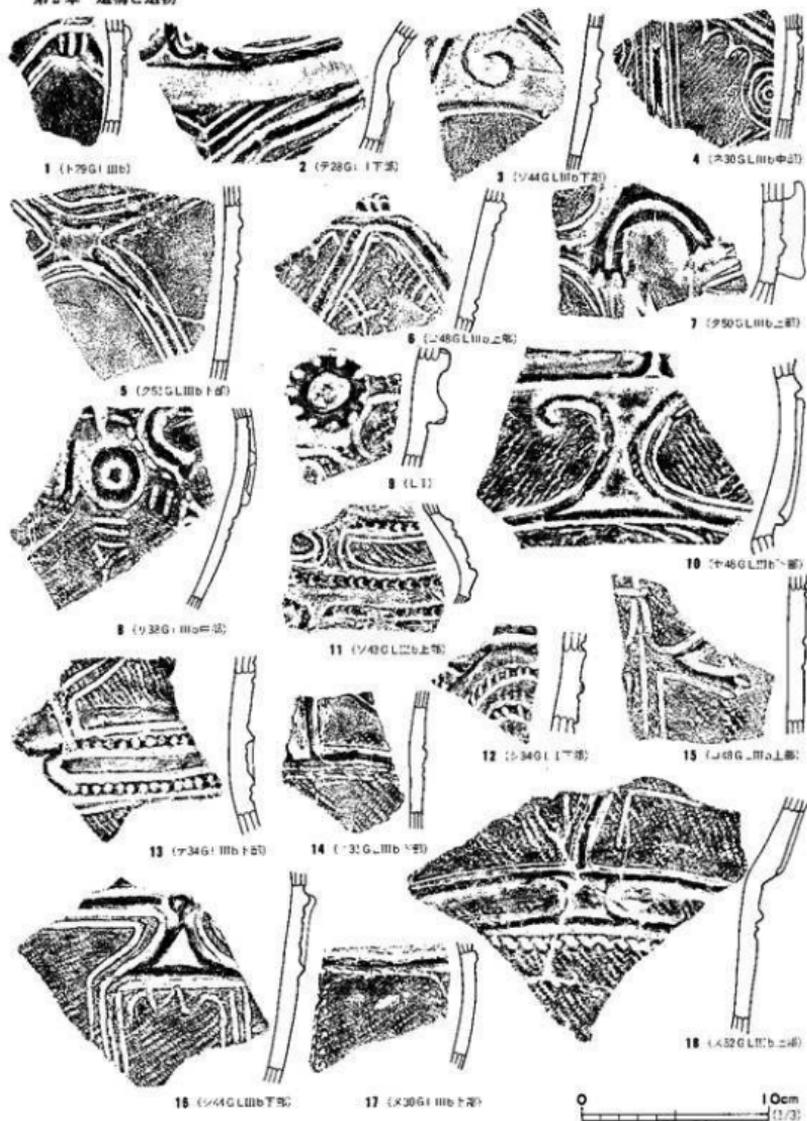


図716 包含層出土遺物 (76) II群3類ニ属

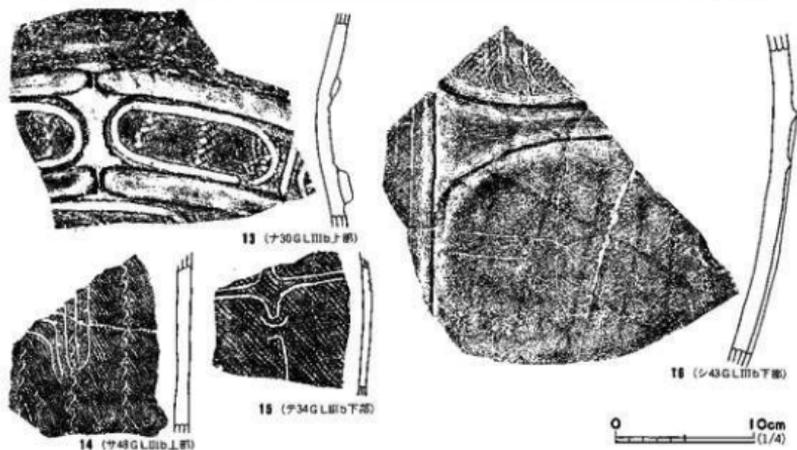
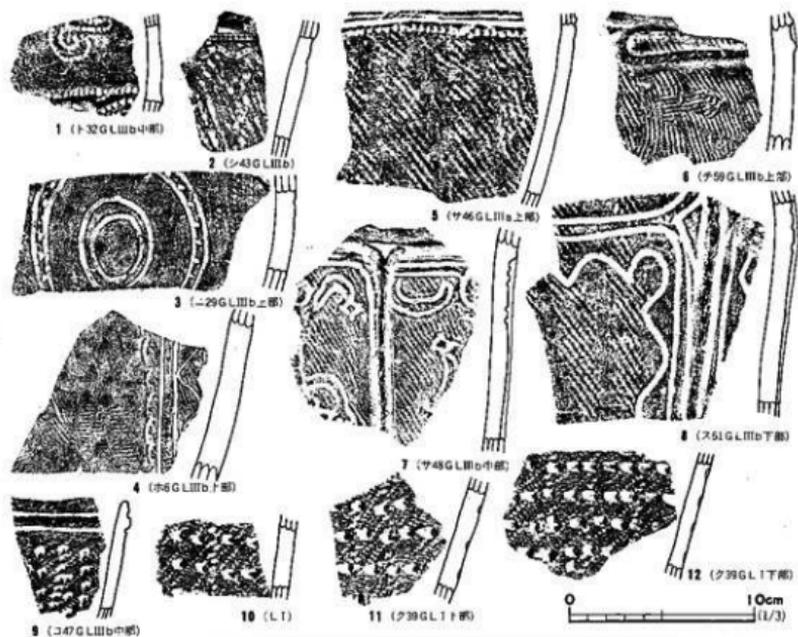


図717 包含層出土遺物 (77) II群3類土器

第2章 遺構と遺物

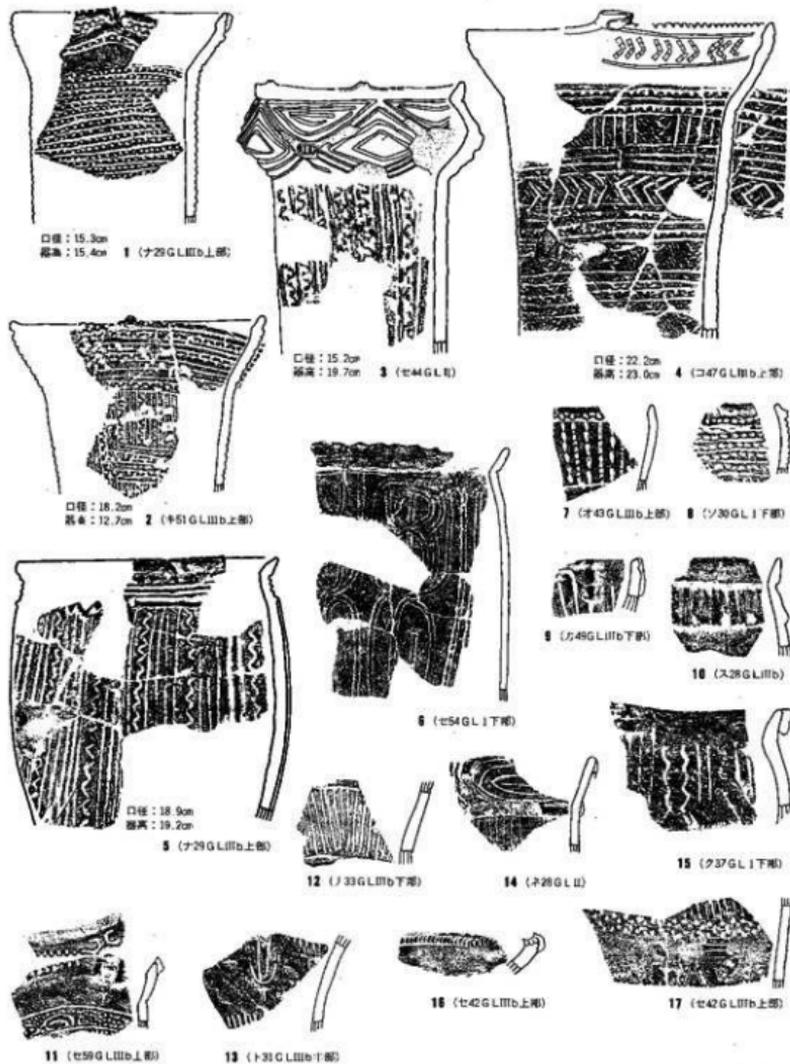


図718 包含層出土遺物 (78) II群3類土器

0 1.3cm (1/4)

8種 器面に沈線文や列点文を密に施すものである。図715-11、図718-1~17が比定される。深鉢には口縁部が外傾するもの(図718-1・2・4)と、キャリパー状をなすもの(同図3)、胴部が紡錘形状をなすもの(同図5-6)が見られる。

図718-1は口縁部に棒状の小突起が付き、口唇部直下には2列の交互刺突文が施されている。胴部は横位に重層して沈線を施し、その間に列点文を施している。同図2は口縁部に横位、胴部は縦位を基本に沈線と交互刺突文を交互に施している。同図3は口縁部に隆線で菱形の区画文を描き、隆線に沿って沈線文を密に施している。区画文の接点には、瘤状の突起が付く。胴部には縦位に沈線を施し、この一部は交互刺突文を描いている。同図4は口縁部に有節沈線で矢羽根状の文様を描き、胴部には一部に列点文を沿わせた数本一組の沈線を、間隔を空けて横位に施している。この沈線間には、縦位・矢羽状の沈線文が施されている。

同図5・6・15の胴部には縦位の沈線、5・15は一部に波状沈線文、6は円形文が施されている。同図8の口縁部には縦位の有節沈線文と列点文が、同図14は口縁部に楕円形、胴部に縦位の沈線文が施されている。同図11の沈線で区画された頸部は、刺突文で充填されている。

この他に上記の種別に当てはまらないものが認められる。図706-3、図709-1、図710-1、図711-22は口縁部の湾曲が強い。図706-3、図709-1、図710-1は口縁部に隆線で楕円形区画文を描き、区画文内には沈線文・列点文を施す。図709-1、図710-1の楕円形区画文下位には、弧状文が見られる。図711-22も、口縁部に弧状文が描かれる。図712-7は口端部が僅かに外反する深鉢である。口縁部は縦位の隆線で区画され、その間に有節沈線文を横位・波状に施している。同図10の交互刺突文下位の弧状文内には、Y字状の有節沈線文が見られる。

図713-1、図714-22、図716-8・9には、環状・三日月状の突起が付いている。図713-9・11~13は口縁部が外反するもので、9には横位の沈線文とアヤクリ文、12には渦巻文が施されている。11・13の楕円形区画文の一部には、交互刺突文が施されている。図714-1・2・13は口縁部が小波状をなすもので、13には縦位の三叉文が施されている。同図4の口縁部下位には、鋸歯状の隆線が巡っている。同図10の突起左側縁には抉り加えられ、同図16の双頭状の口縁部からはY字状の隆線が垂下している。同図11、図715-1・2の内面には、文様が施されている。同図9は口縁部がほぼ直角に屈曲する深鉢で、渦巻文と交互刺突文が施されている。図716-11は区画文を描く隆線上に、図717-9~12は胴部に爪形文が施されている。

II群4類土器(図719~725)

大木7b式から大木8a式の古い部分に相当すると思われるものである。図719-1は口縁部中央が「く」の字状に屈曲する深鉢で、口縁部には4単位の中空の把手が付けられている。口縁上部には隆線文で区画文を描き、区画内には波状沈線文を施している。頸部と胴部は横位3条の隆線で区画され、この隆線上には縄文が施されている。同図2・4は口縁部が短く直立し、頸部が

第2章 遺構と遺物

外傾して開く深鉢である。いずれも頸部には縦位の縄文が施され、胴部は無文帯で区画されている。4には突起が付き、口縁部には隆線による波状文が施されている。頸部文様帯は、押捺を加えた隆線で上下を区画されている。胴部は隆線に沿って沈線を施し、沈線の一部はC字文を描いている。2の口縁部には縦位の刻みが施され、口縁部の下端は隆線で区画されている。同図3は胴部が樽状をなす深鉢で、口縁部にはS字状の突起、その下に橋状の把手が付けられている。胴部上端には、横位・波状・C字状に沈線が施される。

図719-5と図720-1・2は、口縁部が内湾する深鉢である。図719-5の口縁上には板状の突起とその右脇に小突起が2個付く。口縁部文様帯は上下に2分され、上部には隆沈線で楕円形区画文を描いている。区画内には2条の沈線が施され、区画文の上端には列点文を加えている。下部の文様帯は沈線により部分的に上下に区画され、上部はX字状の沈線で区画されている。突起下位には、沈線を縦位・弧状に施している。胴部はY字状の隆線で区画され、隆線に沿って横位・C字状に沈線を施している。図720-1は口唇部に沿って横位に4条沈線を施し、その下には沈線で円形の図形を描いている。胴部は隆線で区画され、区画内をさらに横位・縦位の沈線で4区分している。同図2は有節沈線で横に連続展開する弧状文を描くもので、一部に渦巻文が見られる。同図3・4は、上記の土器と類似するものの胴部であろう。3は隆線と有節沈線で、4は隆線で画された無文帯で胴部を区画している。4の無文帯内には、ボタン状の貼付文が見られる。いずれも隆線間を繋ぐように文様が施されている。

同図5は口縁部に縦位の縄文、同図6は胴部下半が屈曲するものであろう。屈曲部より上は隆沈線で4区画されている。同図7は小型の土器で、口縁部には有節沈線文が施されている。図721-1はキャリバー状の深鉢で、口唇部直下には無文帯を配し、その下に隆沈線による楕円形区画文を施している。頸部には押捺を加えた隆線が巡り、胴部はY字状の隆線で区画されている。口縁部・胴部ともに、区画内には端部が渦巻文を描く連弧状の沈線文が施されている。同図2・3の口縁下部には、有節沈線により曲線的な図形が描かれている。同図4は隆線と有節沈線で楕円形区画文を描き、区画内にも楕円形状に沈線を加えている。この沈線の一部は、C字文を描いている。同図7は、内面に獣面を現した突起である。

図722-1~4は波状口縁の土器で、4は山形の大波状をなすものと考えられる。沈線を縦位・斜位に施すものが多く、沈線の末端は一部で渦巻文を描いている。3は隆線に沿って交互刺突文が施されている。同図5~10には有節沈線文が、同図12の口唇部直下には交互刺突文が施されている。同図14、図723-1・6・10の隆線は上下交互に刻まれている。図722-11は緩い波状口縁の深鉢で、波頂部にはS字を基調とする突起が付く。同図15の幅の狭い口縁部と、橋上把手の上、図724-1の口縁部直下の隆帯上には、爪形文が施されている。図723-12・13は、沈線で連続してU字文を描いている。図724-2~4・7は縄文が施されるもので、4には対弧状の有節

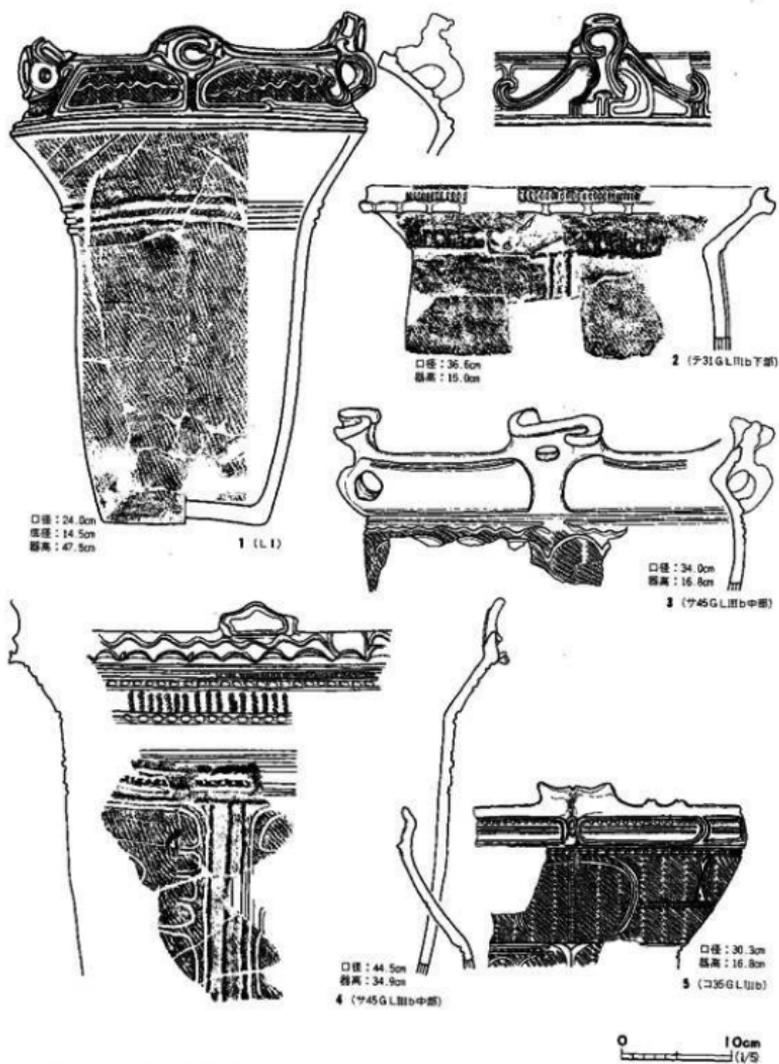


圖719 包含層出土遺物 (79) II群4類土器

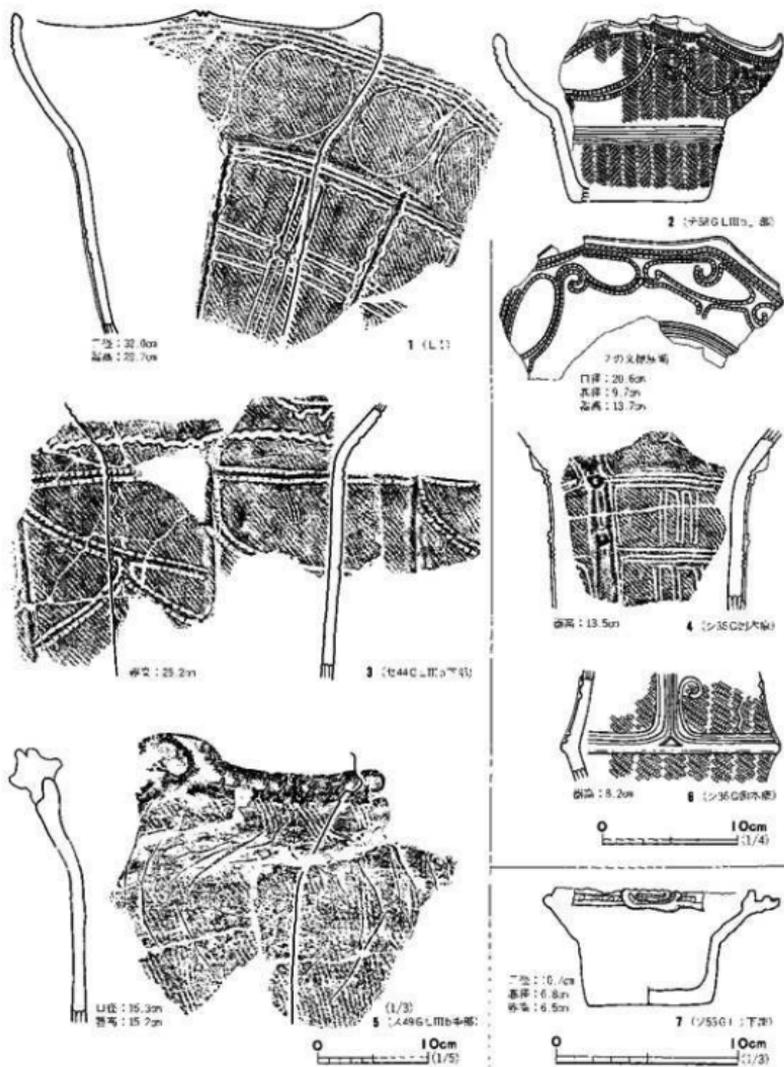


图720 包含層出土遺物 (80) II群4號土葬

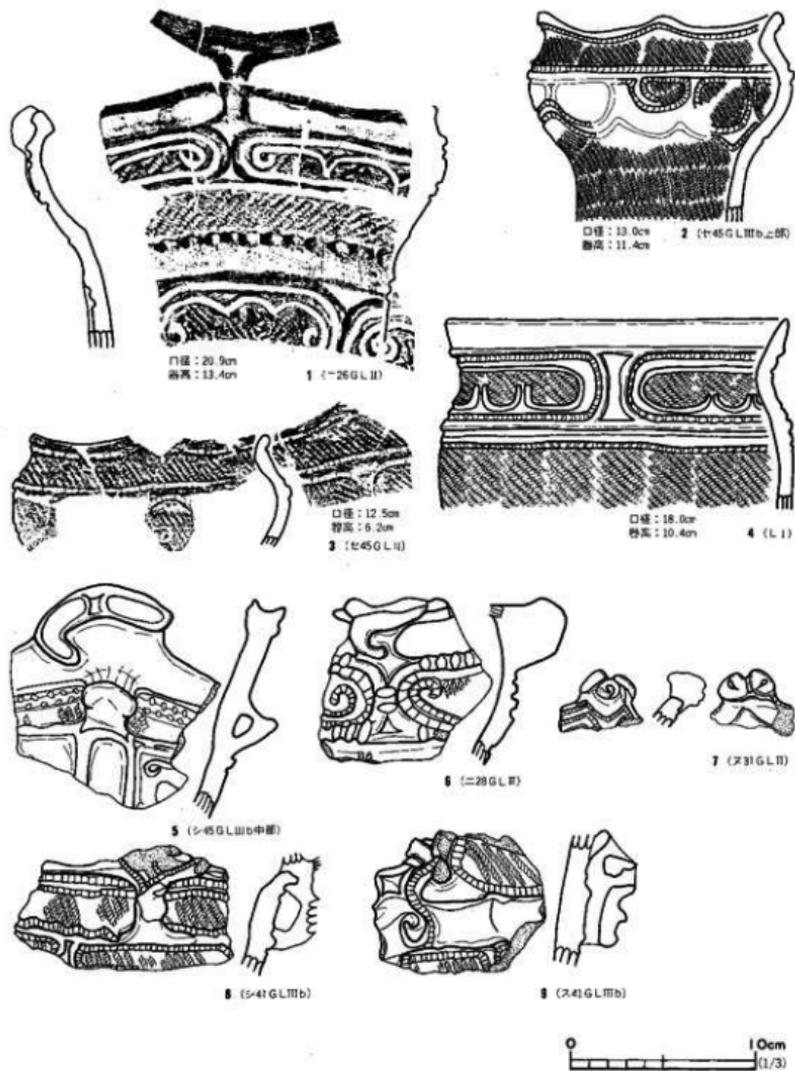


图721 包含層出土遺物 (81) II群4期土器

第2章 遺構と遺物

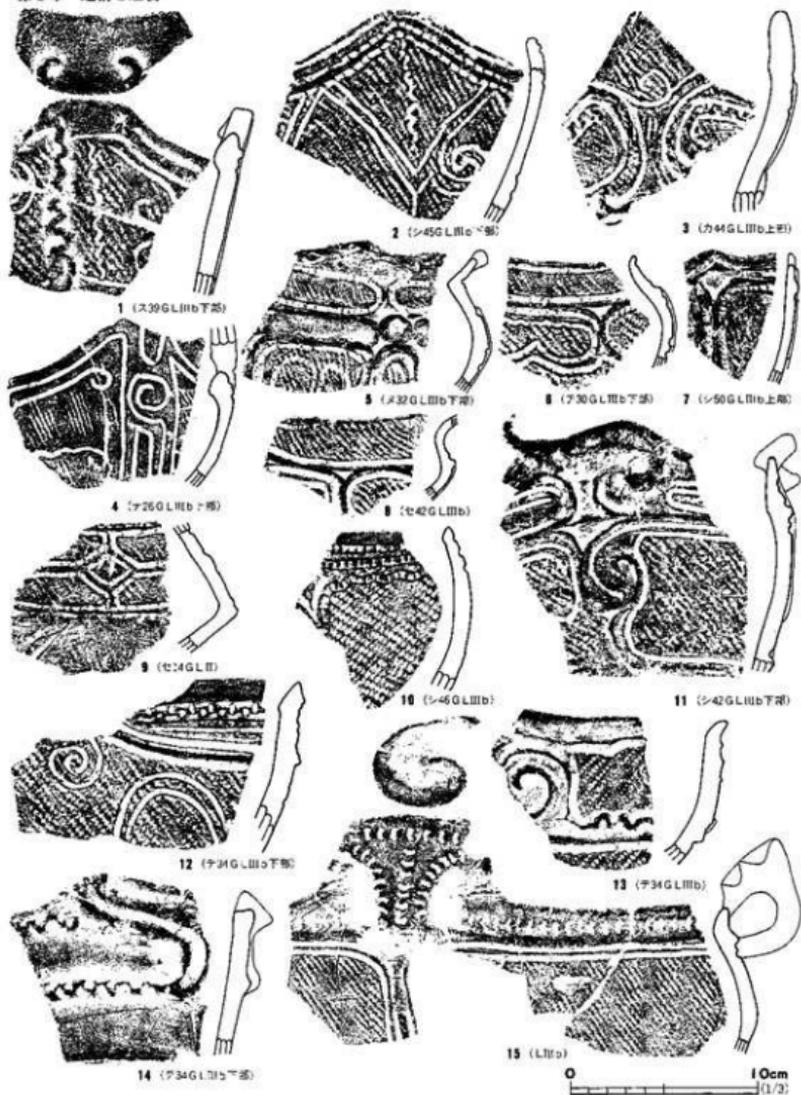


図722 包含層出土遺物 (82) II群4項上器

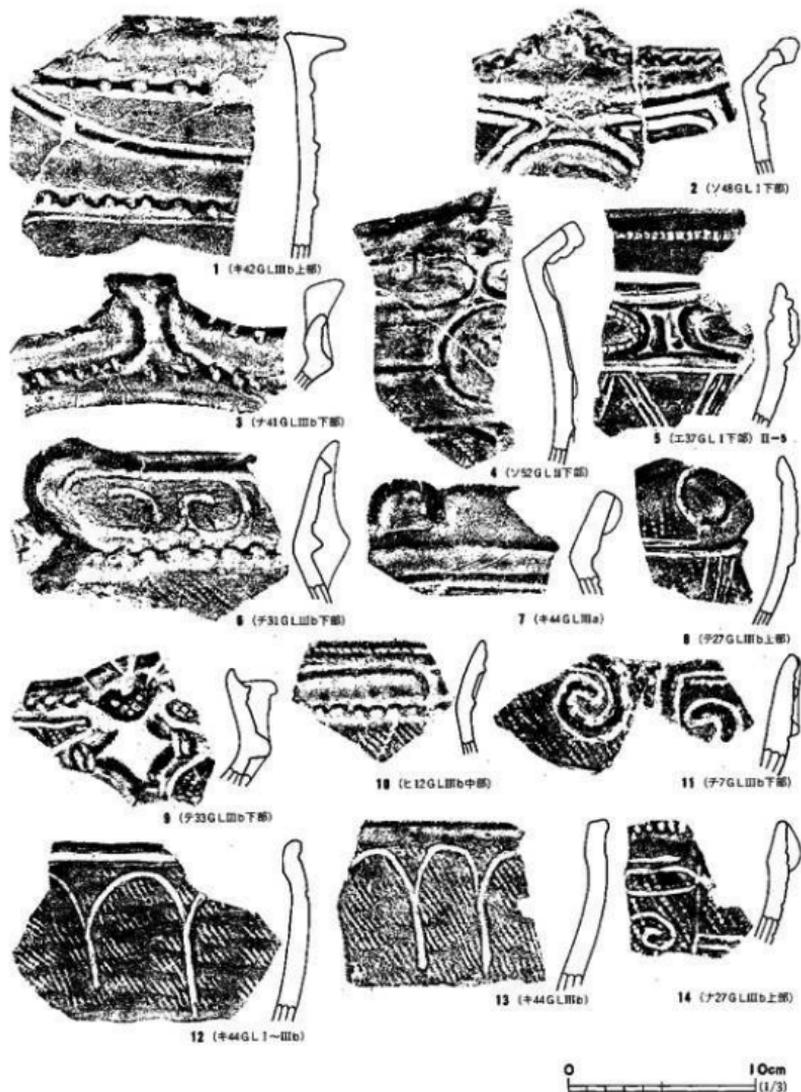


図723 包含層出土遺物 (83) II群4類土器

第2章 遺構と遺物

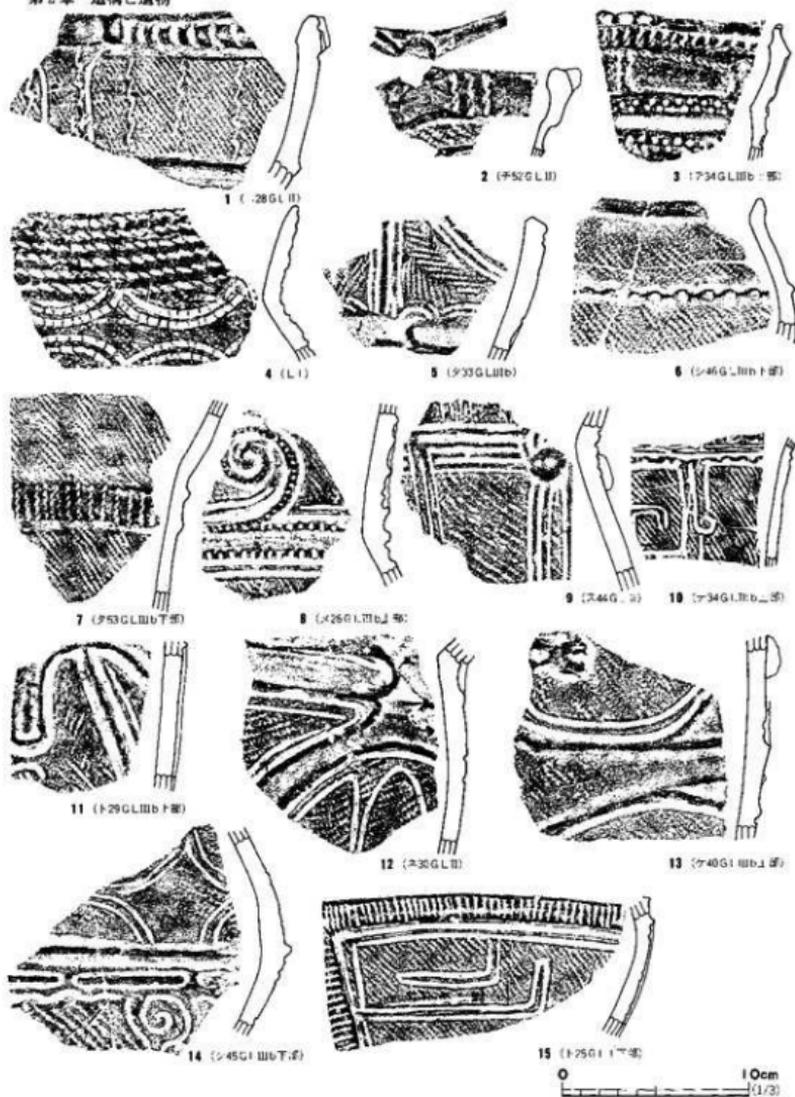


図24 包含層出土遺物 (84) II群4 埴土器

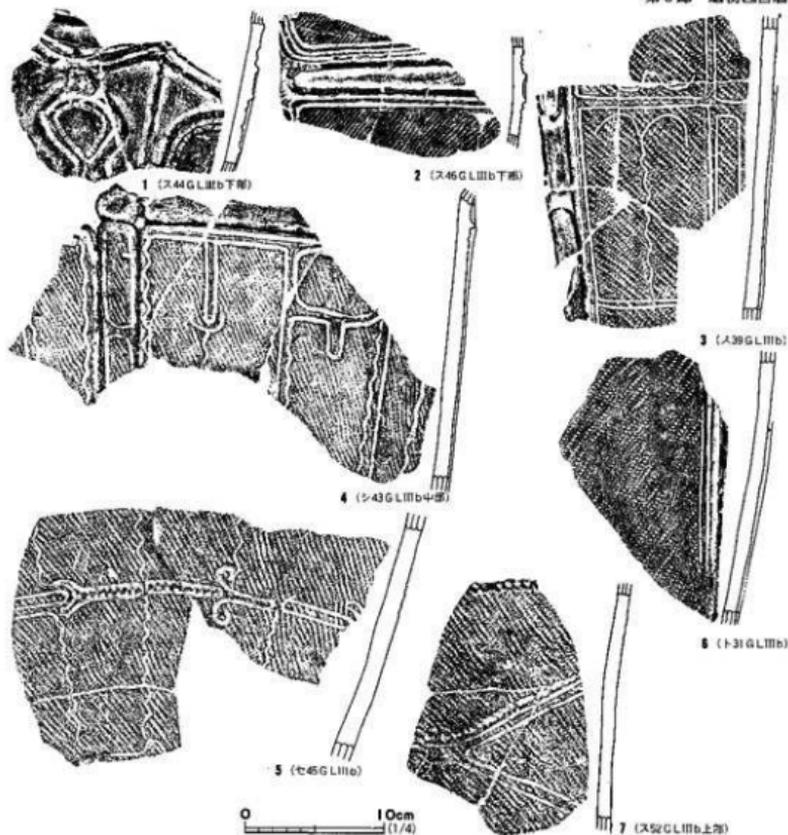


図725 包含層出土遺物 (85) II群4類土器

沈線文も施されている。同図8は押捺を加えた隆線の一部が渦巻文を描き、同図9は胴部にボタン状の貼付文が付けられている。同図11・12・14と図725-1・2は、胴部に隆線で区画された無文帯を配するものである。

II群5類土器 (図726~736)

阿玉台式土器と考えられるものである。施文される文様からa~c種に3区分した。

a種 口縁部や隆線に沿って、あるいは単独で1列の有節沈線文や沈線文を施すものである。

図726～729、図730-1～4・6、図731-2～5、図734-3～9、図735-3・10、図736-1～7が比定される。

図726-1・2、図727-4・5、図728-1・9は、波頂部が三角形状をなす深鉢で、波頂部直下の側縁には袈りを加えている。口縁部と胴部の区画の意識は弱く、図726-2のように、波頂部から降りる隆線を口縁部下端で屈折させ、部分的に口縁部の下端を区画するものが大半を占めている。胴部は縦位の隆線で区画されるが、図726-1・2では口縁部と胴部を部分的に区画している隆線を、波底部下位から垂下させ胴部の区画線としている。波底部下には縦位に有節沈線文を施している。図728-1は沈線文が施され、口縁部内面には三又文を加えている。

図726-3・5、図728-2・11～13、図730-1、図734-3は、波頂部が山形をなす深鉢である。図726-3、図728-13の波頂部上面には沈線文が、同図11・12、図730-1の口端部には、刺突が加えられている。図726-5の波頂部には突起が付き、図728-2は波頂部が双頭状をなしている。図726-5の文様は、同図2に極めて類似している。同図3、図728-13の口縁部文様帯は、一応波頂部から垂下する隆線で区画されている。この区画内は、さらに隆線でランダムに分割され、このような区画のあり方は、図728-2・11にも認められる。2では内面にも有節沈線文が施されている。図728-12、図730-1では区画内の分割は見られない。しかし、2点とも口縁部と胴部を区画する隆線のあり方は、図726-2と同じである。胴部には押捺文が施され、図730-1は押捺を加えた隆線で胴部を区画している。

図726-4は口縁部が僅かに内湾する平口縁の深鉢で、口縁上には左右非対象の突起が付き、この下には2本一組の棒状突起が付けられている。突起上面には、玉抱二又文が施されている。棒状突起間には連弧文・方形文、口縁部下端には3条の波状文が、有節沈線文で描かれている。口縁部下端の波状文間には、刺突文が加えられている。胴部には押捺文が施されている。図729-2もこれに近く、口唇部には有節沈線文が施されている。図727-2・3は口縁部が内湾する深鉢で、棒状突起を4単位施す。3の突起間には、有節沈線で連弧文が描かれている。図728-7もこれに近い。図727-1は大きな扇状把手を持つ上器で、胴部上半は「く」の字状に括れている。扇状把手中央には側縁部から伸びてきた隆線で、渦巻文が描かれている。胴部の屈曲部上位には、有節沈線で長方形の区画文が描かれ、この中央には渦巻文も見られる。波底部下位に相当する屈曲部下端には、環状の突起も付けられている。胴部は縦位の隆線で区画され、器面全面には押捺文を施している。

図727-6、図728-6・7・10、図729-1・5は、波頂部が低い三角形状をなす深鉢であろう。図727-6の波頂部下位には棒状の突起が付き、図728-7の波頂部右側縁にも袈りが加えられ、同図10は口縁部を区画している隆線の端部に小突起が付く。図729-1の胴部では隆線が横方向に展開し、この隆線に沿って1列の有節沈線文を施している。口唇部上面に有節沈線文を施すも

のも見られる。図728-3・5・8・15、図729-3・4・6・9・14、図730-4、図736-1・2は、平口縁の深鉢である。口縁部には棒状の突起が付くものが多く見られ、この間に1列の有節沈線文で楕円形の区画文を描くものが多い。図728-15の突起には芯が、図736-1・2の突起上面には渦巻文が見られる。図728-3の区画文内には連弧状に有節沈線文を加えている。同図8や図729-7は、隆線で楕円形区画文を描き出している。

図729-10~13は、口縁部に2本一對の棒状突起の付くもので、突起間には板状の把手が付く。把手内には1列の有節沈線で円形文、把手間には隆線と有節沈線で楕円形区画文を描くものが多い。図729-12・13は、把手内面にも有節沈線文が施されている。図730-3の把手内は、細密な沈線文で充填され、把手間の楕円形区画文内は、斜位の矢羽状沈線文で充填されている。図729-10の胴部には、押捺文と波状沈線文が上下交互に施されている。

図730-2は波頂部が双頭状をなす深鉢で、波頂部側縁には袈が見られる。口縁部には楕円形状の区画文が描かれるが、この区画文は左右非対象になるように配置されているものと考えられる。図736-3~7は鉢・浅鉢であろう。3~5は区画文内に連弧状に有節沈線文を施している。同図7の口縁部には、ボタン状の突起が付けられている。図734-4・6の波頂部には獣面状、渦巻状の突起が付けられている。同図7・8は波頂部が左右非対象となるもので、内面には玉抱三叉文や沈線文が施されている。同図5、図735-3は環状の突起が付くもので、5ではこれを中心に楕円形区画文が描かれ、区画文内には端部が渦巻文を描く有節沈線文が横位に施されている。図729-15、図730-6、図731-2~5は、本種土器の胴部破片であろう。すべて器面に押捺文を施している。

b種 隆線に沿って、複列の有節沈線文や沈線文が施されるものである。図730-5、図731-6~11、図732、図733-13~15、図735-9、図736-8が比定されよう。図730-5、図731-11、図735-9は楕円形区画文を描く隆線に沿って、2列の有節沈線文を施すもので、図730-5には棒状の突起が付けられている。図731-6~9は波頂部が双頭状をなすもので、中央から棒状の突起を垂下させ、口縁部を楕円形状に区画している。9の区画文内は、斜位の有節沈線で充填されている。同図10、図732-4は山形波状をなす深鉢であろう。10は波頂部中央から隆線を垂下させて口縁部を区画し、区画文内には横位に爪形文を加えている。図732-4の波頂部内面には、沈線文が施されている。図732-1~3は三角波状口縁の土器で、1の波頂部には環状の突起が付く。口縁部は波頂部から垂下する隆線で区画され、1の区画中央には横位の有節沈線文が、3の区画内には横位の爪形文が施されている。

同図6・7は平口縁の深鉢で、楕円形区画文内には沈線文が施されている。7の口縁部には、押捺を加えた棒状の突起が付く。図736-8は浅鉢であろうか。肥厚する隆帯で描かれた区画文の中に、沈線文を施している。図733-13~15は、本種土器の胴部破片であろう。14・15には爪形

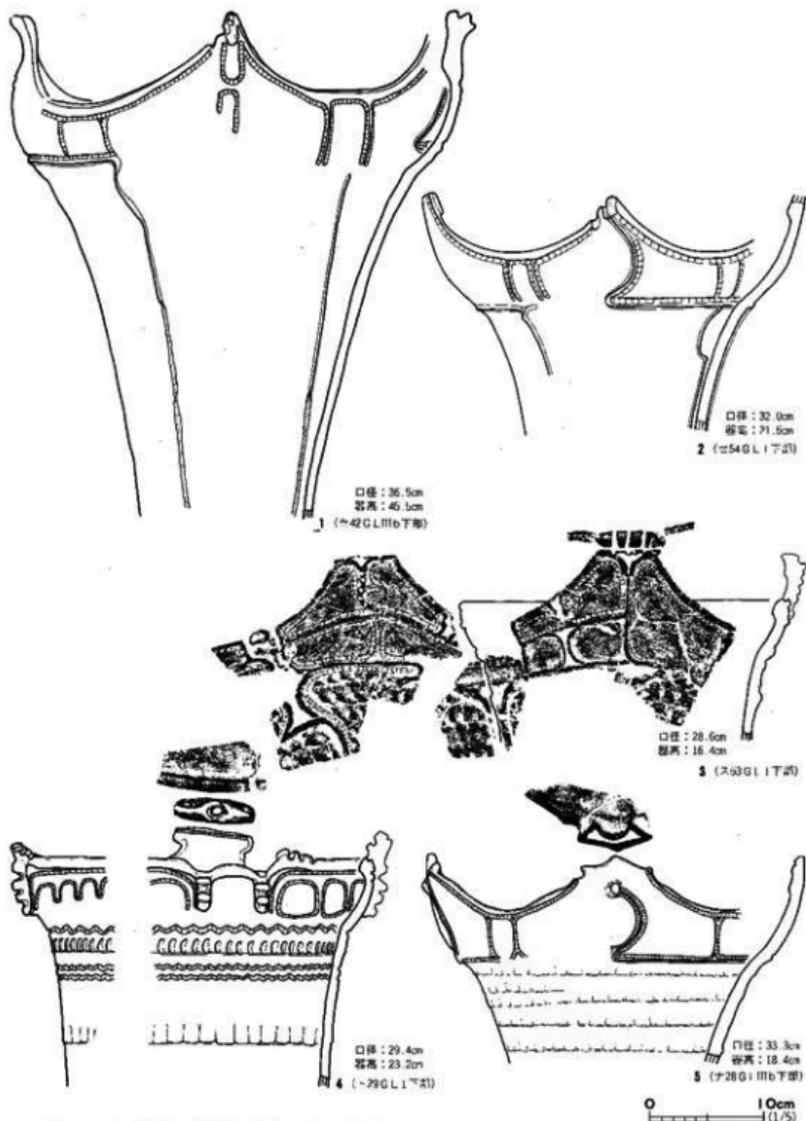
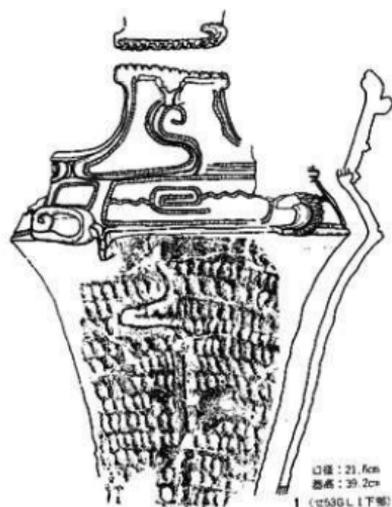


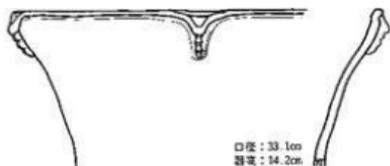
図726 包含層出土遺物 (86) 11群5類土器

第6節 遺物包含層



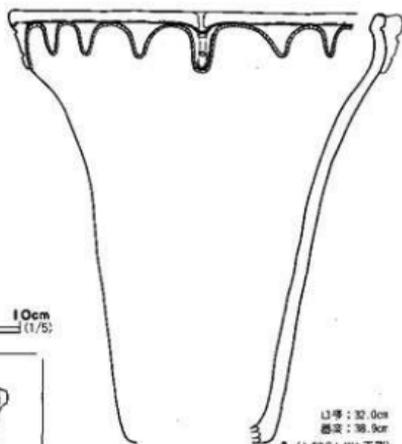
口径：21.6cm
器高：39.2cm
1 (t53GL1下部)

0 10cm
(1/5)

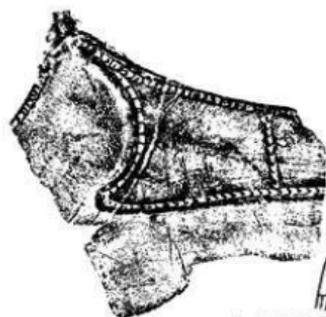


口径：33.1cm
器高：34.2cm

2 (t32GLIIIb下部)



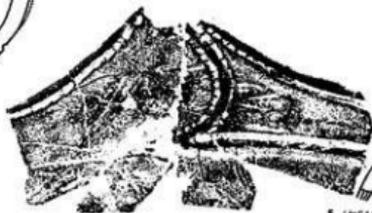
口径：37.0cm
器高：36.9cm
3 (t52GLIIIb下部)



4 (t48GLIIIb下部)



5 (t56GLIIIb4部)



6 (t54GLI下部)

0 10cm
(1/3)

図727 包含層出土遺物 (87) II群S類土器

第2章 遺構と遺物

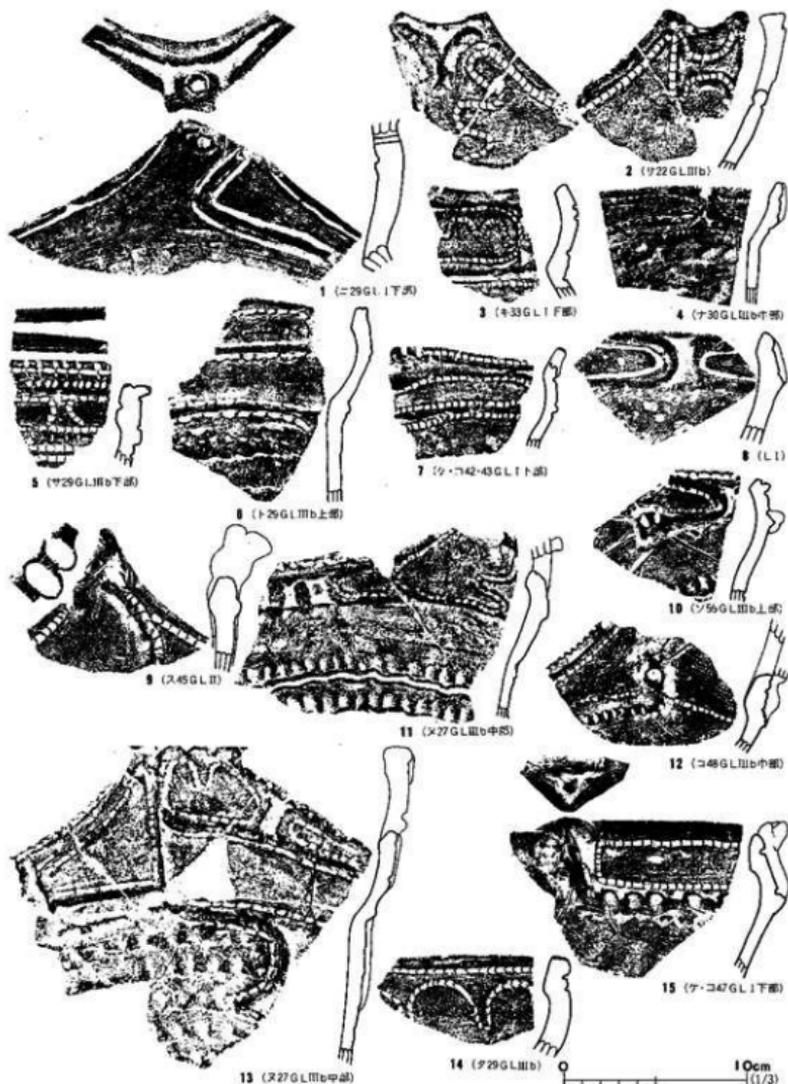


図228 包含層出土遺物 (88) II群5期土器

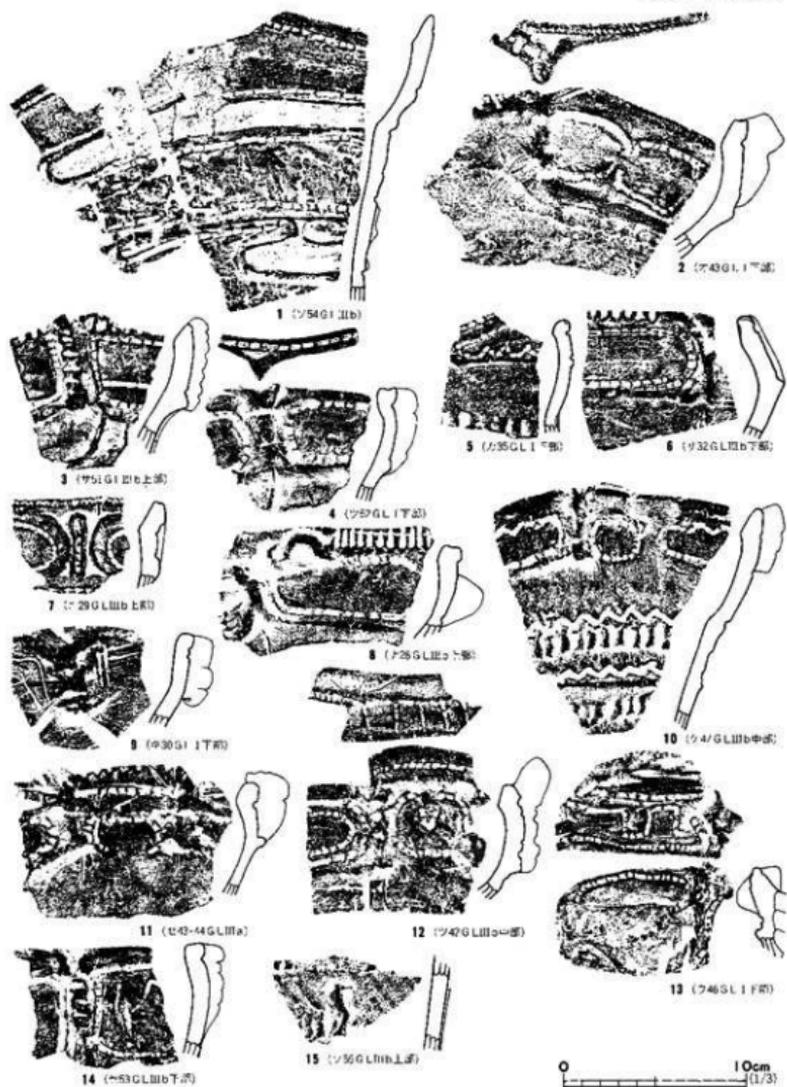


圖729 包含層出土遺物 (89) 15群5種土器

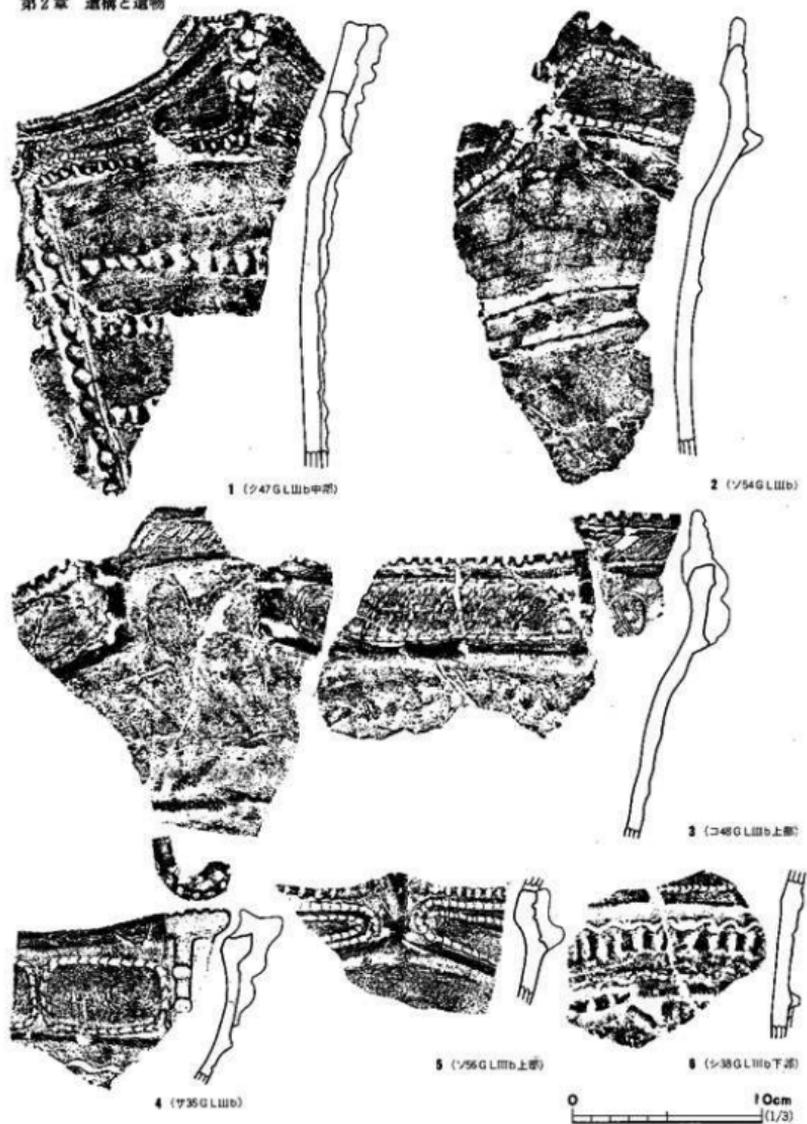


図730 包含層出土遺物 (90) II群5類土器

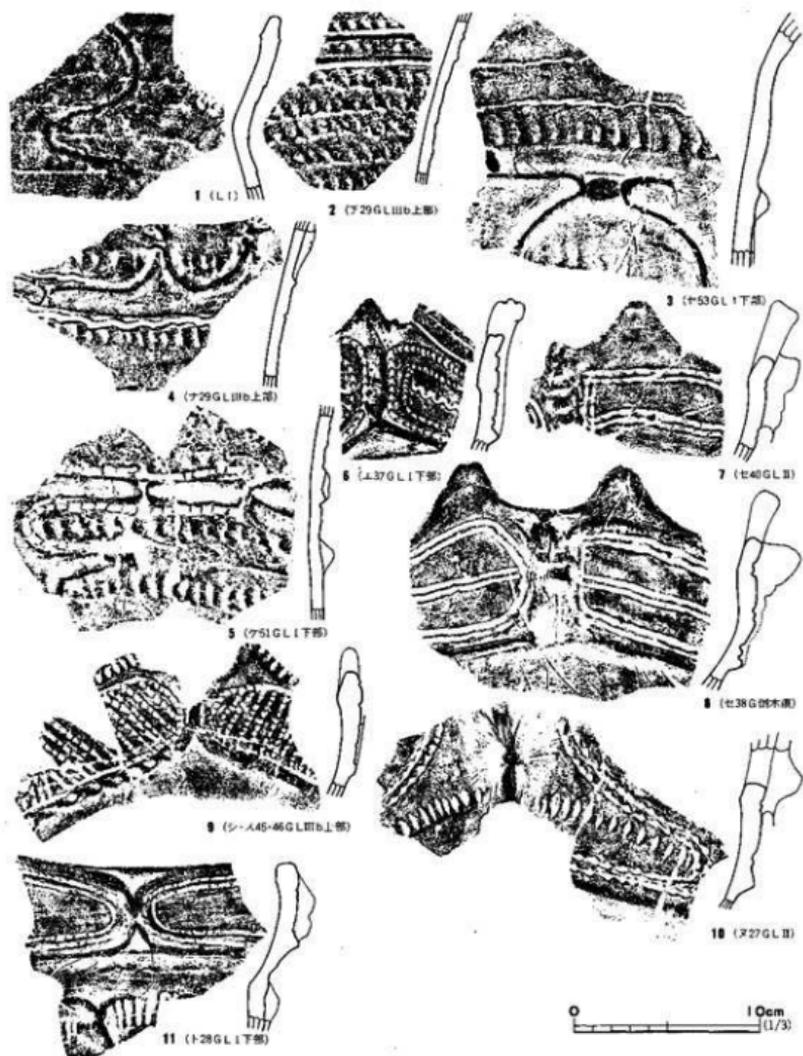


図731 包含層出土遺物 (91) II群5類土器

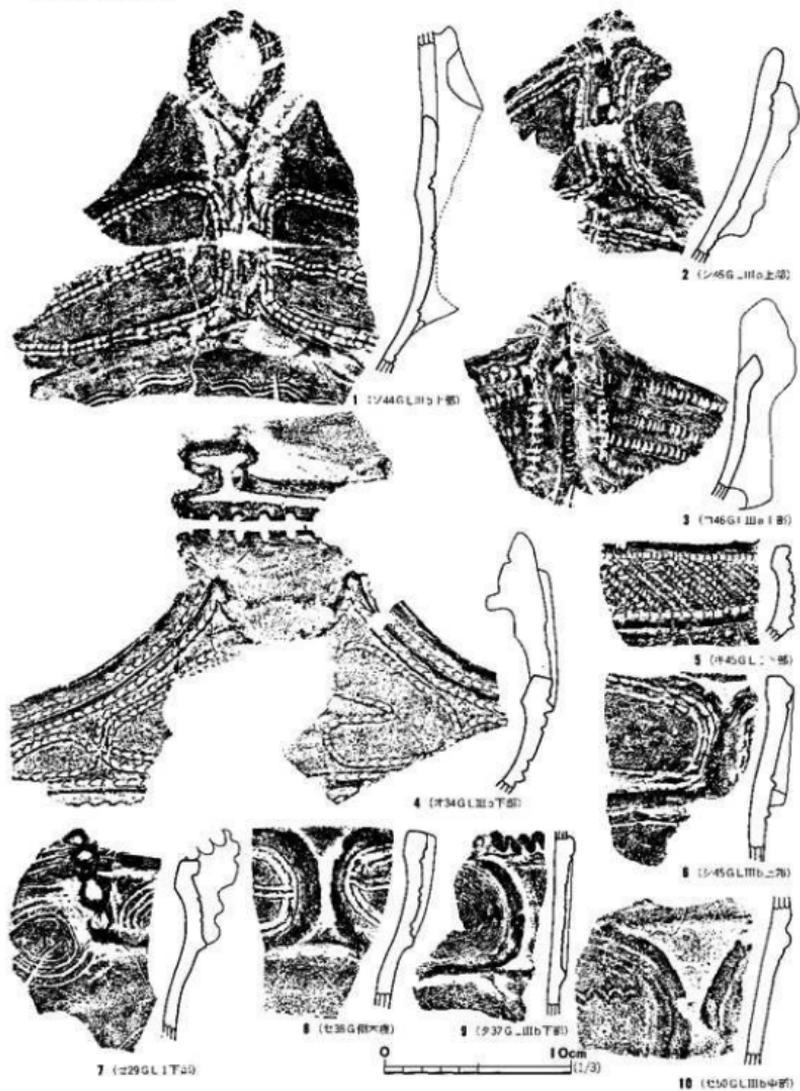


図732 包含層出土遺物 (92) II群5類1器

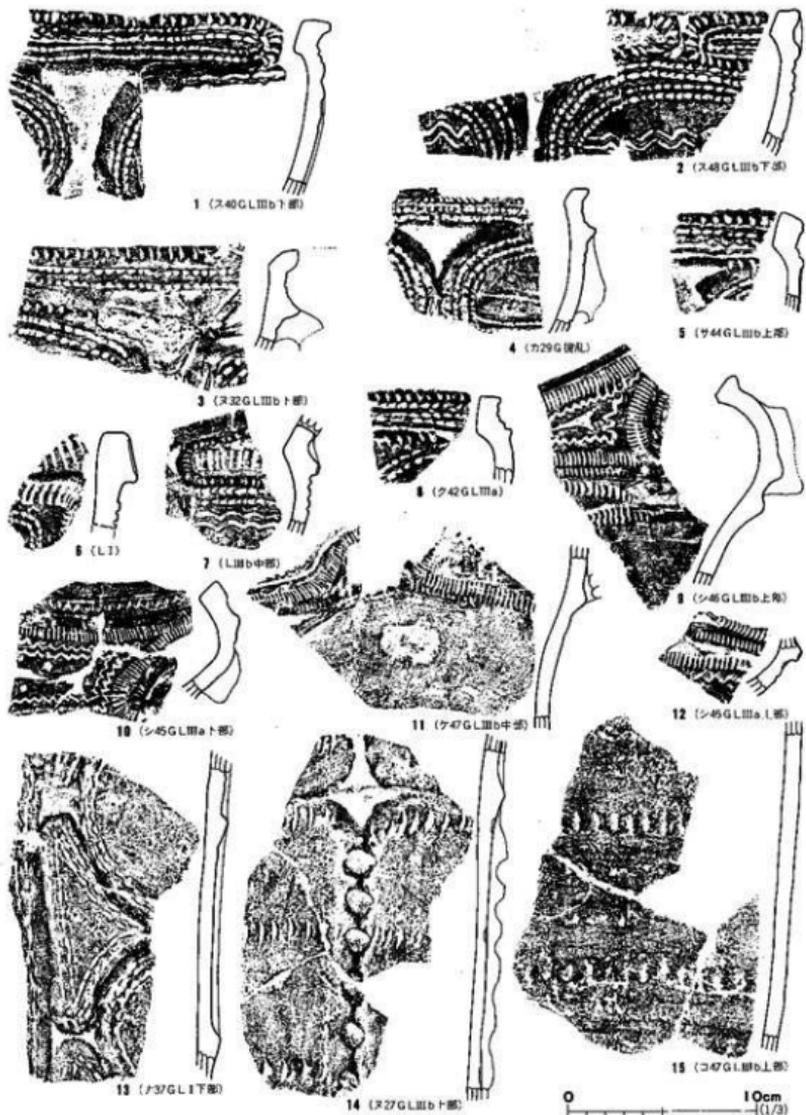


圖733 包含層出土遺物 (93) II群5期土器



図734 包含層出土遺物(94) (群5類上表)

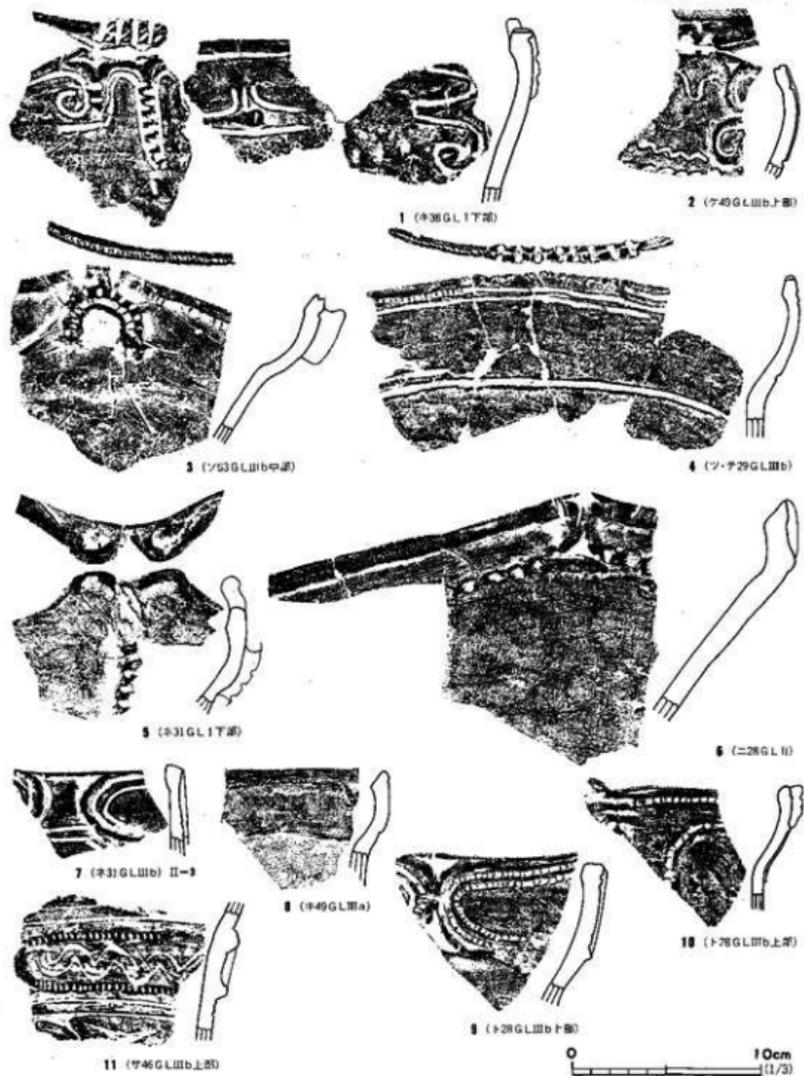


圖735 包含層出土遺物 (95) II群5類土器

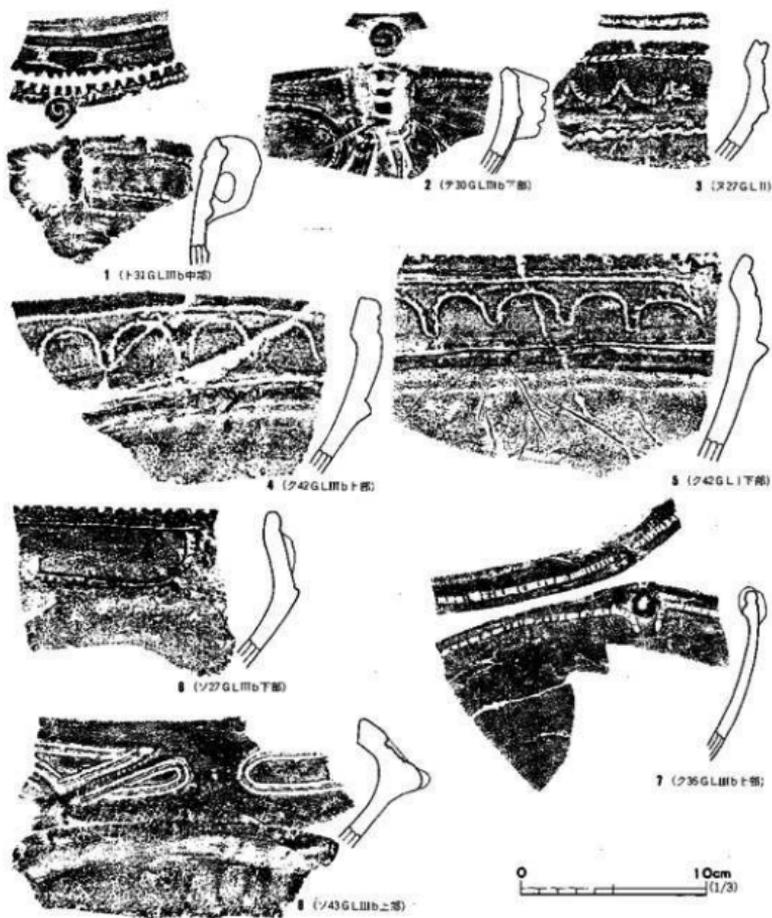


图736 包含層出土遺物 (96) II群5類土器

文が施されている。

c種 列点状・キャタピラ状の刺突文が、施されるものである。図733-1~12, 図735-11が比定されよう。図733-1~5・8は、列点状の刺突文が施されるもので、口縁部直下に幅の狭い、その下に幅の広い楕円形の区画文を配している。2の楕円形区画文内には、波状沈線文を施している。同図6・7・9~12はキャタピラ状の刺突文が施され、9の口縁の区画文内には三又文と、これを囲むように有節沈線で波状文が施されている。図735-11は、本種土器の胴部破片であろう。胴中央に楕円形区画文を施している。この区画文内には波状沈線文を描き、区画文下位には三又文が加えられているものと考えられる。

この他に、上記の分類に当てはまらないものが若干認められる。図734-1は円筒形状をなす大型の深鉢で、口縁部と胴部上端に横位の沈線文を施している。口縁部と胴部は、押捺を加えた隆帯で区画されている。図735-1の口縁部には2本一組の棒状突起が付けられ、突起上には押捺文・交互刺突文が加えられている。突起間の口唇部には沈線文を施し、口縁部には沈線で渦巻文などを単発的に施している。同図2の口縁部には隆線と沈線が施され、一部の沈線は波状文を描いている。同図4は口唇部に押捺文と有節沈線文が、同図8は口縁に沿って幅の狭い有節沈線文が施されている。同図6は浅鉢で、口縁部に押捺を加えた隆帯で楕円形区画文を配する。

II群6類土器(図737~740)

II群土器と併行する新崎式・円筒式系の土器を一括した。施文される文様からa・b種に2区別した。

a種 地文に木目状摺糸文が施されるものと、刻みを加えた隆線で小波状文を描くものを円筒式系土器とした。図737が比定される。1は頸部がほぼ水平に張り出し、口縁部が短く直立する深鉢である。口縁部には、瘤状の突起が付く。口縁部と頸部には斜位の縄圧痕文が施され、突起上にも楕円形状・渦巻状に縄圧痕文が加えられている。胴部には木目状摺糸文が施されている。2は円筒状をなす深鉢で、口縁部下端は刺突を加えた隆線で区画されている。口縁部は縦位に施された棒状の突起で4区画されるものと考えられ、この上には刻みが加えられ、突起下端部は瘤状に突出している。口縁部の区画内には、細密な沈線で格子状の文様を描いている。口端部には、縄圧痕文を施している。胴部には、網目状の摺糸文が施される。4は口縁部が「く」の字状に屈曲する深鉢で、口唇部には2と同じく格子状に沈線文が施されている。9~14は木目状の摺糸文の施された、深鉢の胴部破片である。

3・5~7は刻みを加えた小波状の隆線が見られるもので、3の口縁部には渦巻状の突起が付けられている。小波状の隆線は3では口縁部の区画文内、5・7では口唇部に、6は口唇部の一部と口唇部の直下に見られる。6の頸部には、縦位の縄圧痕文が施されている。

b種 竹管の凹面を用いた連続爪形文と、平行沈線文で文様を描くものを新崎式系土器とした。

第2章 遺構と遺物

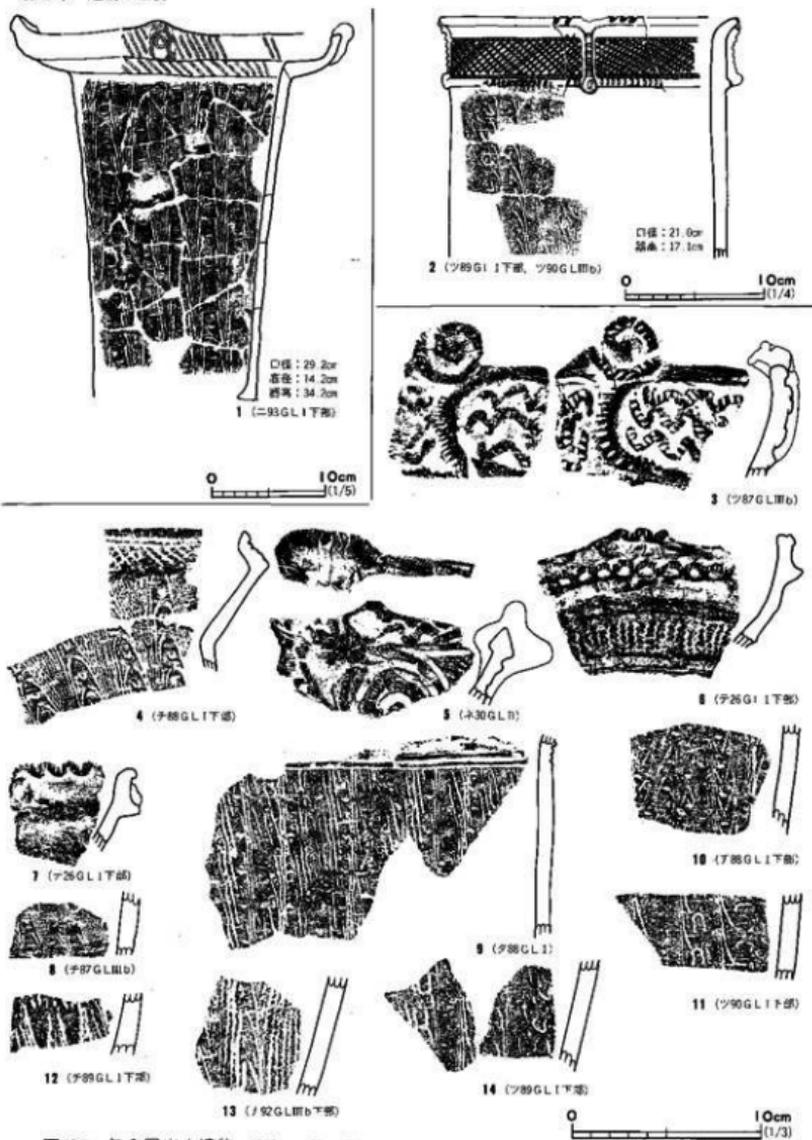


図737 包含層出土遺物 (97) II群6類土器

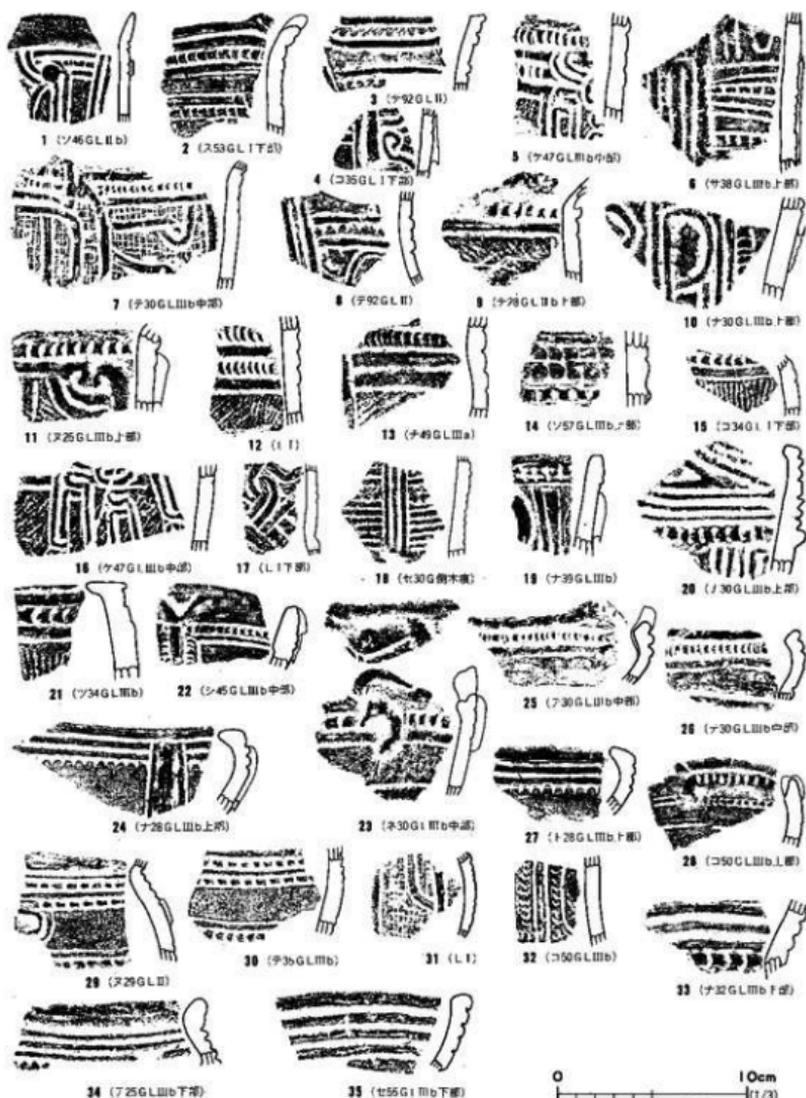


図738 包含層出土遺物(98) II群6類土器

第2章 遺構と遺物

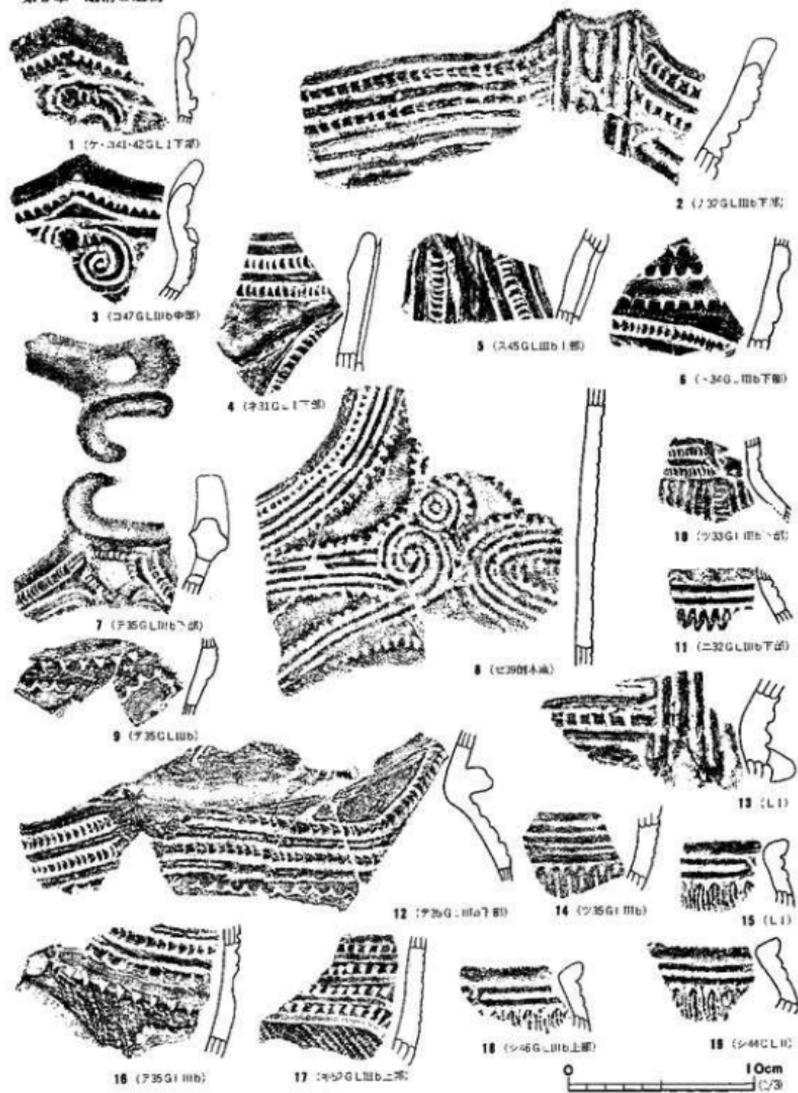


図739 包含層出土遺物 (99) II葬6副土器

第6節 遺物包含層

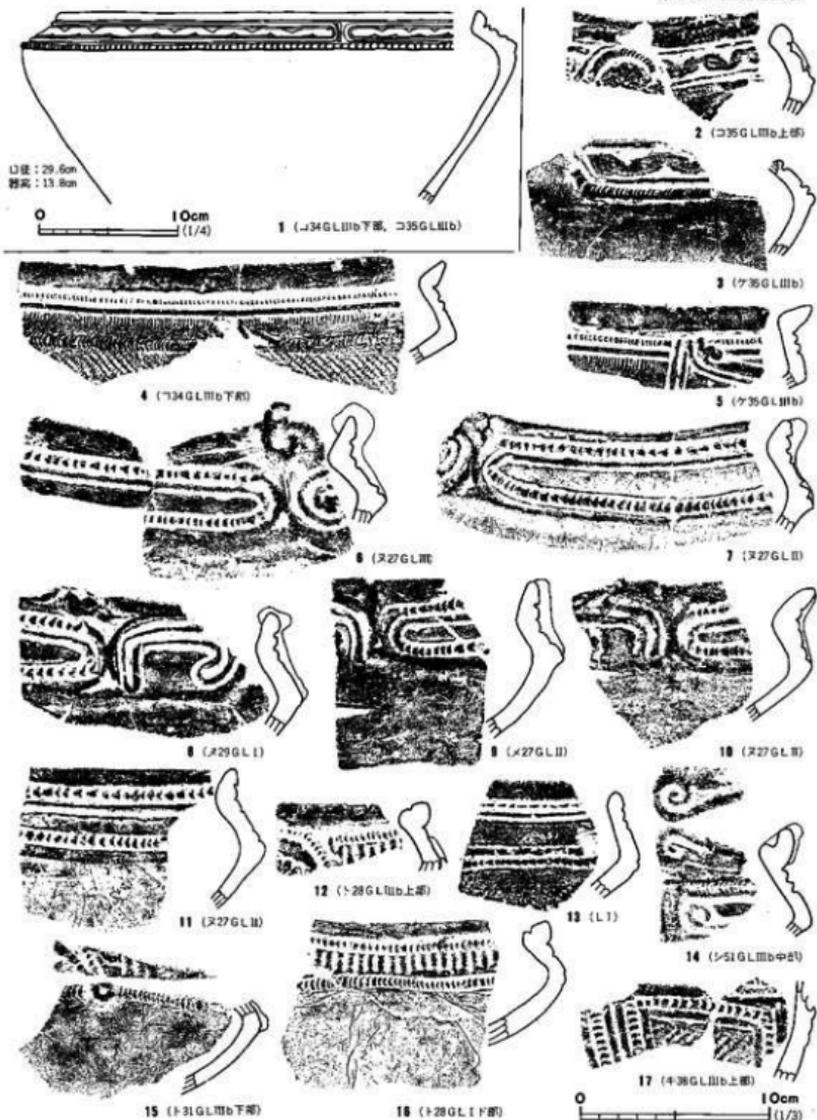


圖740 包含層出土遺物 (100) II群6類土器

図738～740が比定される。図738-1～23は円筒形状をなす深鉢と考えられるもので、破片からは比較的小型の深鉢が多いものと考えられる。1にはボタン状の貼付文が、23には弧状の突起が付けられている。7は平行沈線で区画された中に、格子状に沈線を加えている。同図25～28はI縁部が内湾するもので、27は爪形文を横に連続させて施している。同図29は、円形の突起が付けられた胴部破片である。図739-1～8は波状I縁の土器で、1・2は沈線の1側縁に刻みを加えている。3は低い三角の波状I縁、7は波頂部に突起が付けられている。6・8は横に連続する爪形文で、交互刺突文と同じ文様効果を現している。8の沈線端部は渦巻文を描いている。同図12・13は「く」の字状に屈曲する頸部の破片で、瘤状の突起が付けられている。

図740にはI縁部下端が「く」の字状に屈曲する、浅鉢・鉢と考えられるものを一括した。1はI縁部に幅の狭い楕円形状の文様帯を配し、この中に上下交互に二又文状の掘り込みを加えて、波状文を描き出している。屈曲部には爪形文が施されている。2・3も同じ個体の破片であろう。2の口縁部には弧状の隆線が加えられている。6～10も口縁部に楕円形の区画文が見られ、区画文間には渦巻状・弧状の文様が施されている。6・14には渦巻状の突起が付けられ、15は口縁部下端の屈曲部に、ボタン状の貼付文が見られる。16は連続爪形文で区画された口縁部文様帯内に、縦位の短沈線を施している。

Ⅱ群7類土器(図741～748)

粗製土器・粗文の上器を一括した。出土地点・器形・細部の文様の特徴から、そのほとんどはⅡ群2類h～n種、同3類土器と併工するものと考えられる。

図741-1・3～5、図742-2～4、図747-1・4、図746-12・13は、胴部が樽状をなす深鉢である。図741-1の口縁には小波状の突起が付き、同図3には楕状の把手が付けられている。図742-2はI縁部に幅の狭い楕円形区画文、胴部には整形痕を残している。同図3の口縁部にはX字状の突起、4は胴部をクランク状の隆線で区画している。図747-1はY字状の隆線で胴部を区画し、同図4は口縁部に楕円形状の無文帯が見られる。図741-2、図743-1・4・5、図744-5・6、図745-16～19、図746-5～8は、円筒形状をなす小型の深鉢である。図743-1には縦位のアヤクリ文が施され、同図5の突起上には刺突文が加えられている。5の地文は口縁部が横回転、以下は縦回転の縄文が施されている。図744-5・6、図745-17・18、図746-5の胴部上位には瘤状、図743-4の口縁部には2個一対の樽状の突起が付けられている。樽状の突起は図743-3、図745-10、図747-8にも見られる。

図742-1、図746-1はキャリバー状の深鉢で、I縁部には連弧状の突起が付き、胴部はY字状の隆線で区画される。図743-11は粘土の積み上げ腹上に押捺を加えたもので、口唇部には沈線を描いている。図744-4は波状口縁の深鉢で、波頂部左側縁には挟りが加えられている。同図2は左右非対象をなす双頭状の波状口縁の深鉢、同図11は口縁部に隆線による楕円形区画文

第6節 遺物包含層



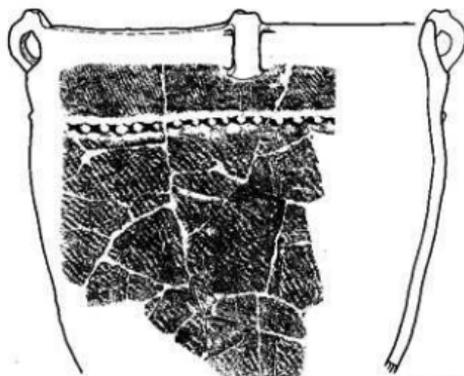
口径：35.0cm
器高：19.2cm

1 (946GLIIIb上部)



口径：24.2cm
器高：18.0cm

2 (F28GLIIIb上部)



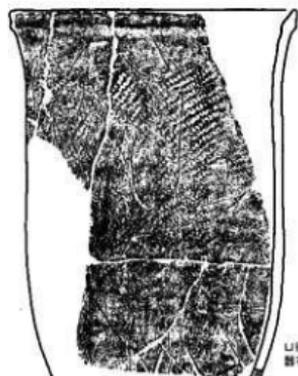
口径：24.6cm
器高：37.2cm

3 (947GLIIIe下部)



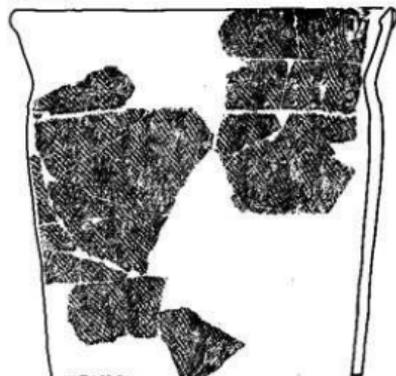
口径：73.3cm
器高：25.6cm

4 (L1)



口径：24.9cm
器高：33.0cm

5 (S41-44LIIIb中部)



口径：33.2cm
器高：33.5cm

6 (S50GLIIIb中部)

0 12.5cm
(1/5)

图741 包含層出土物 (101) II群7類土器

第2章 遺構と遺物

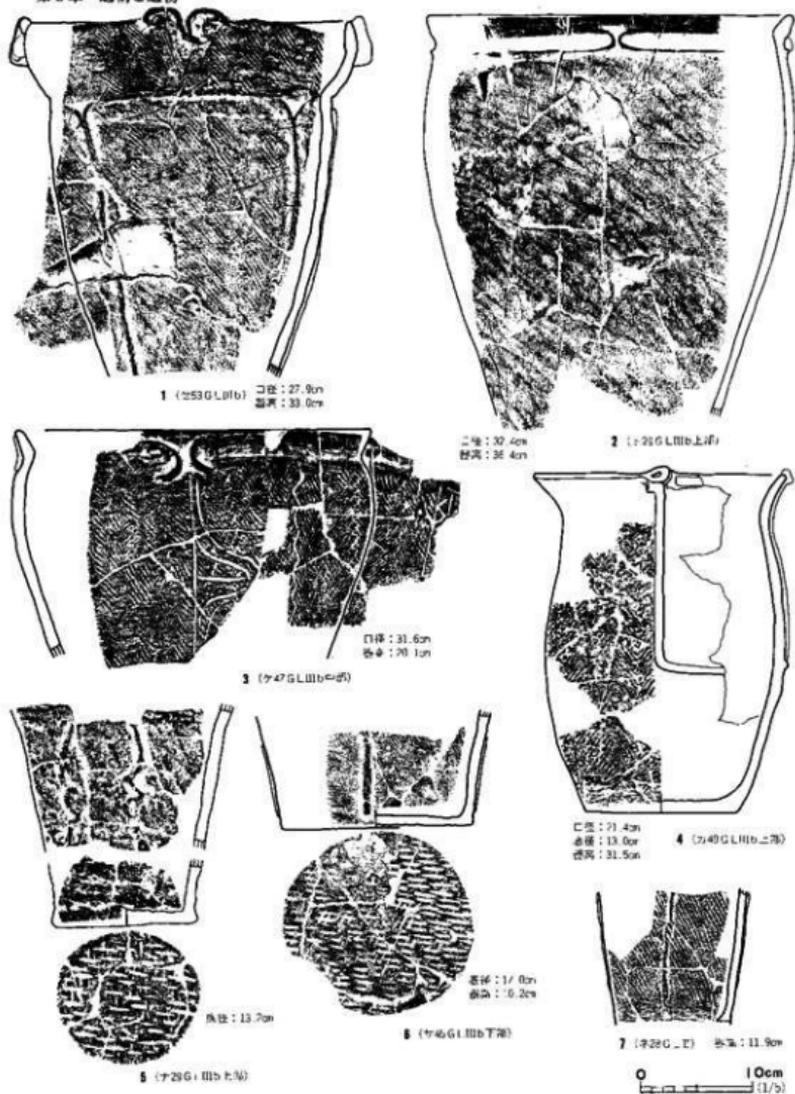


図742 包含層出土遺物 (102) Ⅱ群7類土器

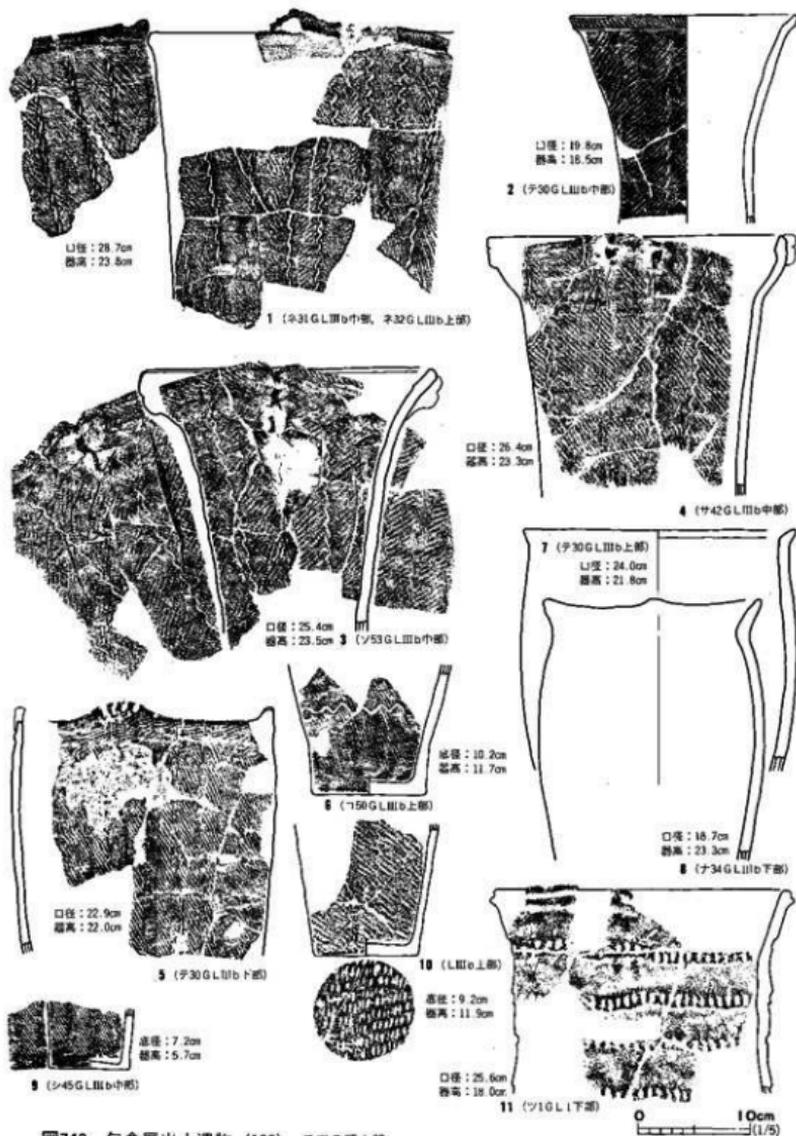


圖743 包含層出土遺物 (103) II群7類土器

第2章 遺構と遺物

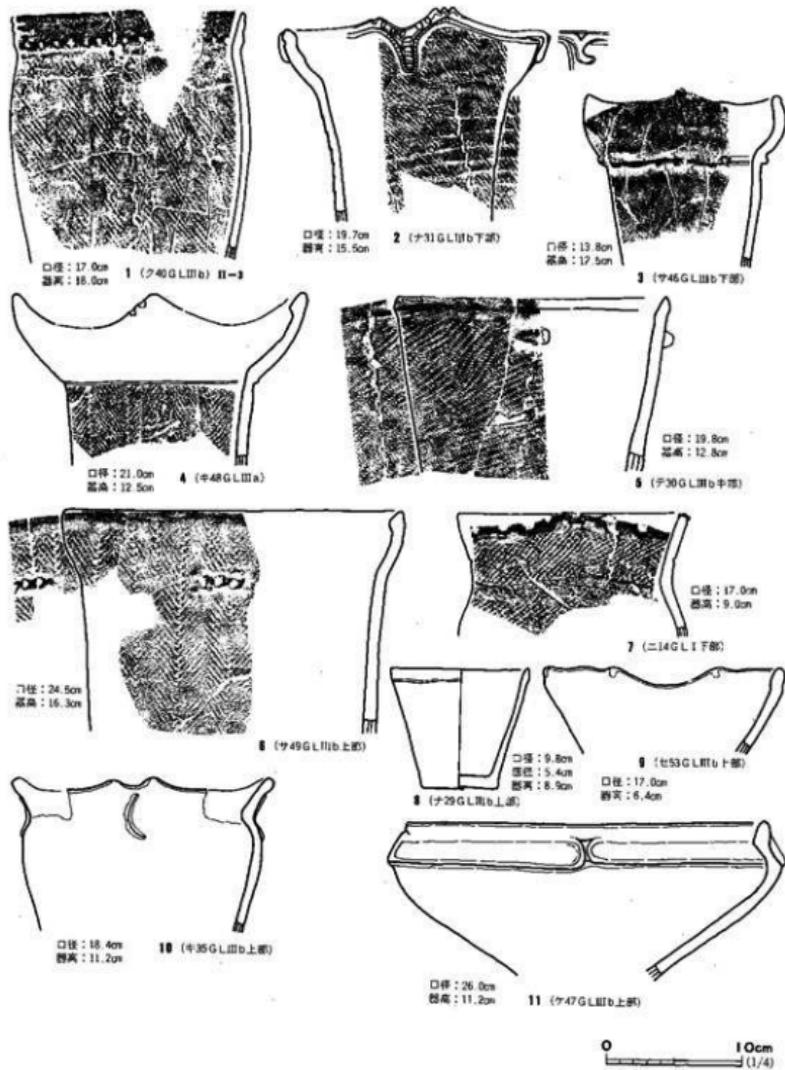


図744 包含層出土遺物 (104) II群7期土器

第6節 遺物包含層

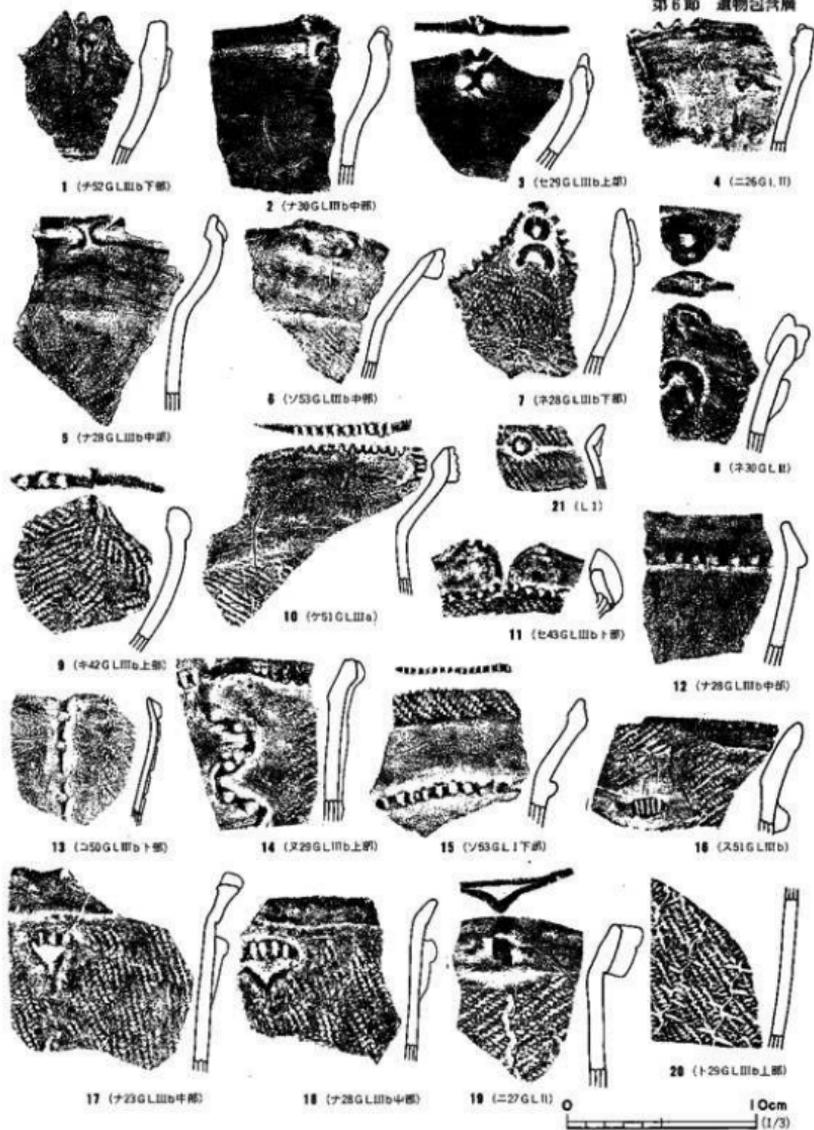


図745 包含層出土遺物 (105) II群7類土器

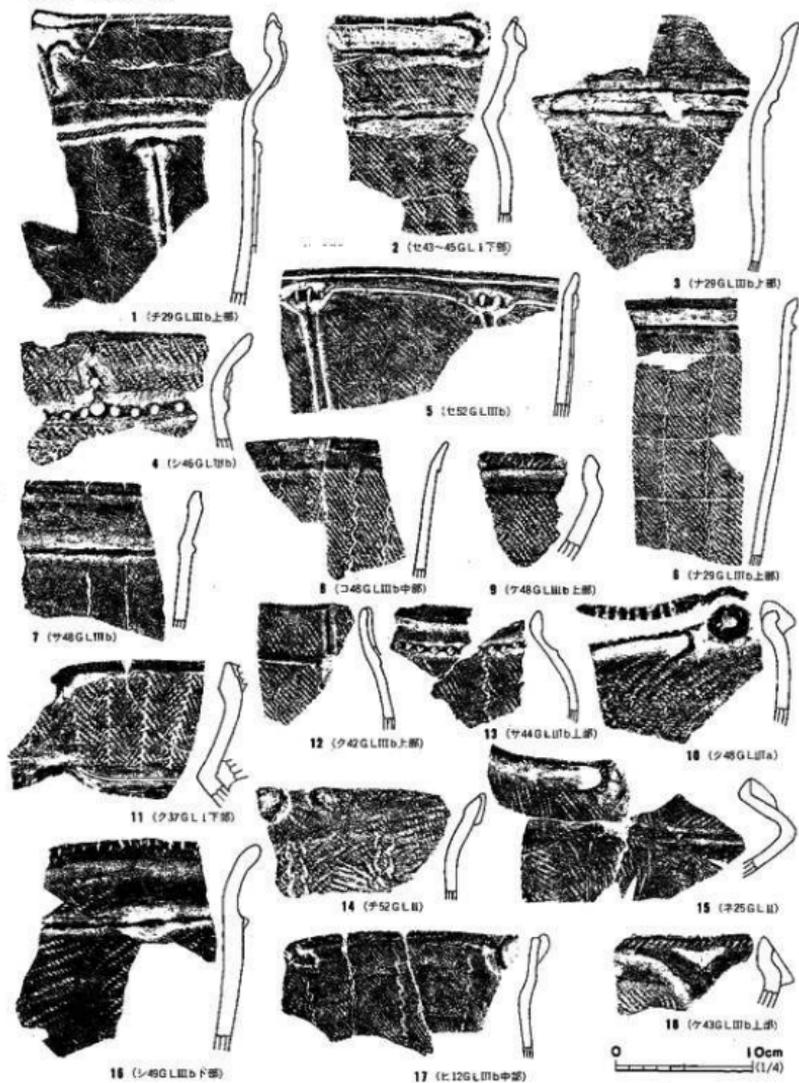


図746 包含層出土遺物 (106) II群7類土器

第6節 遺物包含層

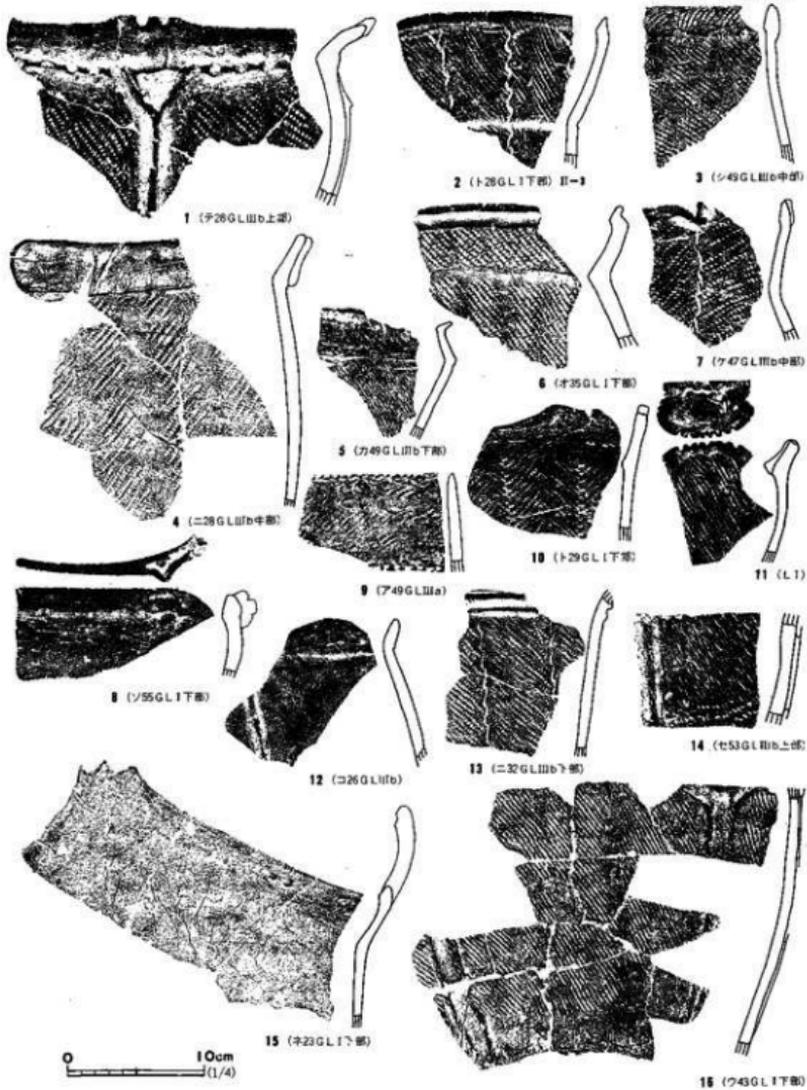


図747 包含層出土遺物 (107) II群7類土器

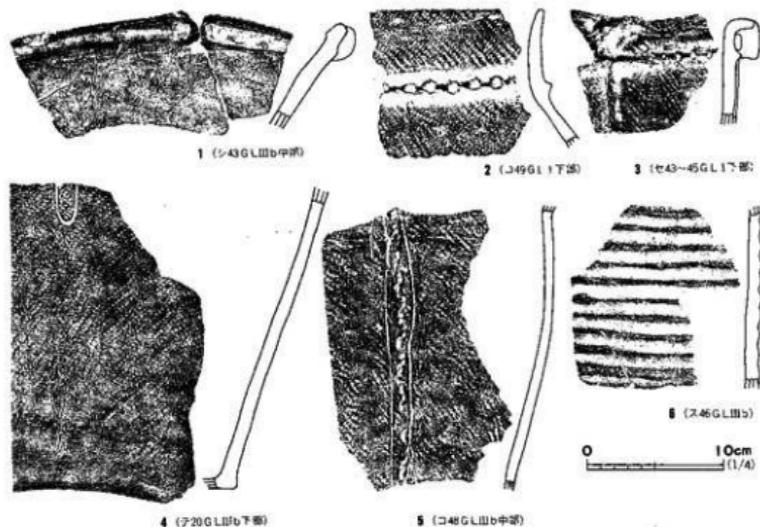


図748 包含層出土遺物 (108) II群7類土器

が施された浅鉢である。図745-1~3・7・9は波頂部下に小突起がつけられ、9の波頂部左側縁には押捺が加えられている。

Ⅲ 群 土 器

縄文時代中期前半~終末のものを本群とした。施文される文様の特徴から、1~5類に区分している。

Ⅲ群1類土器(図749~764)

大木8a式と考えられるものである。施文される文様の特徴から、a・b種に区分した。b種土器については一部、Ⅲ群2類土器に伴うものも含まれているが、これらを総括してⅢ群1類b種と呼んでいる。

a種 地文に縄文が施されるものである。図749~761を本種土器と考えている。図749-1は円筒形状の深鉢で、口縁部には4単位の突起が付き、突起間の口唇部には、波状に粘土紐を貼り付けている。口縁部直下の狭い文様帯内には刺突文が、頸部には交互刺突文が施されている。胴部には縦位を基本に沈線文が施されるが、この一部は横位に展開する。沈線文の末端は、渦巻文を描いている。同図2は口縁部に棒状の突起が付き、その脇には部分的に小波状の突起を付けている。幅の狭い口縁部文様帯の下端は、押捺を加えた隆帯で区画され、これに沿って縄直線文を

施している。頸部は横位、胴部は縦位の沈線で区画されている。同図3は口縁部が開く深鉢で、口縁直下と頸部に横位の沈線文を施す。口縁部と胴部は、それぞれ縦位の波状沈線で区画されている。同図4の口縁上部は、同図1に近似する。口縁部には斜位・クランク状に沈線文を施し、その隙間を平行沈線で充填している。同図5は器形・文様とも同図3に近いが、口縁部には円形刺突文を加えた突起が付き、口縁直下には1条の繩辻直文を加えている。同図6はキャリバー状の深鉢で、口縁部には突起が付けられている。口縁下部には沈線でまのびした波状文を描き、この波頂部・波底部には渦巻文を加えている。頸部は横位、胴部は縦位の沈線で区画され、胴部の区画内には波状沈線も加えられている。地文に燃糸文が施されている。

図750-1は口縁部直下に隆帯を巡らし、この隆帯の上には楕円形・円形・S字状の文様を描く。一部に橋状の把手が取り付けられている。頸部は横位、胴部は渦巻文を描いて横に展開する沈線文が施されている。同図2は口縁部直下に下端を波状の隆帯で区画された、幅の狭い文様帯を持つ。ここにはS字状の突起が付けられ、突起間には縦位の短沈線が加えられる。頸部には横位、胴部には渦巻文状に、有節沈線文が施されている。同図3の口縁部文様帯も幅が狭く、ここに渦巻状の突起と、縦位の短沈線文が施されている。同図6はキャリバー状の深鉢で、口縁部には中空の突起が付き、この間を弧状の沈線で繋いでいる。突起下には、縦位の沈線文が施される。頸部には波状沈線文、胴部は縦位の沈線で区画され、この中には波状沈線文を加えている。同図7の口縁上部の文様は、同図3に近い。口縁下部には縦位の繩辻直文が施され、胴部は隆沈線で方形に区画されている。胴部に施された沈線の一部は、C字状のアクセント文を描く。

図751-1は口縁部が肥厚するもので、この上に沈線文を施している。肥厚する口縁の一部は、渦巻状の突起を作る。同図3もこれに近い。同図2は頸部に沈線文、地文には羽状繩文を施している。同図5はキャリバー状の深鉢で、口縁部には波状、波頂部下には縦位に粘土紐を貼り付けている。この粘土紐の一部は突出し、渦巻状の突起を作る。同図6は口縁部が内湾し、胴部が樽状をなす大型の深鉢である。口縁部には中空の突起を全周させ、その一部は波状口縁状に突出し、4単位の大ぶりの把手を作り出す。口縁下部は粘土紐で波状文を描き、把手の下位には、渦巻文が付き。頸部には平行沈線文が施され、その間に波状の粘土紐貼付文を配している。胴部は平行沈線で横に展開する文様を施し、その一部は渦巻文を描いている。

図752には、本種土器の口縁部突起を示した。2~4の内面にはS字状の図形が見られ、7の内面には有節沈線文が施されている。図753~757に示した破片には、口縁部の文様がS字状の突起を起点に描かれるもの(図753-4、図754-1・10~12)や、渦巻文を起点に描かれるもの(図753-1・12・13)が見られる。図753-12では、口縁部内面にも渦巻文を主体とする文様が施されている。口縁直下に幅の狭い文様帯を有するものには、この中に縦位の短沈線を加えるもの(図754-1・5・8)や、刺突文を施すもの(図754-3・8・9・15)がある。図754-6は、ここに楕円形状の無

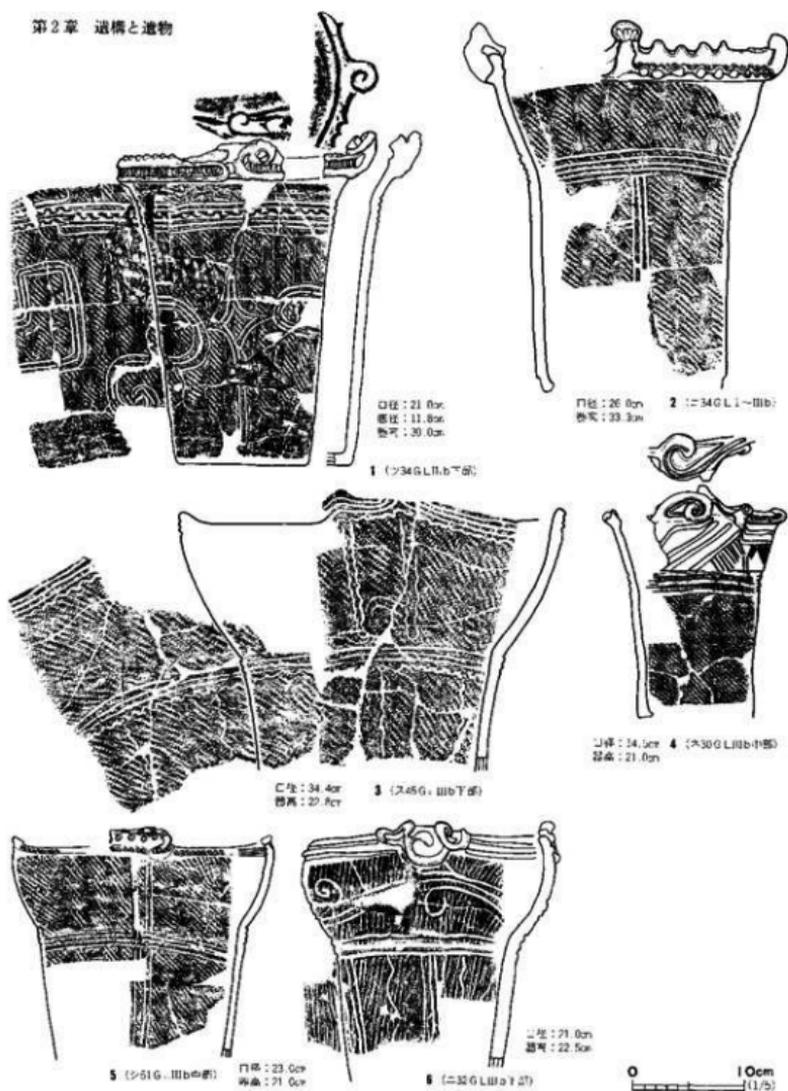
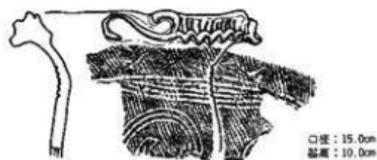


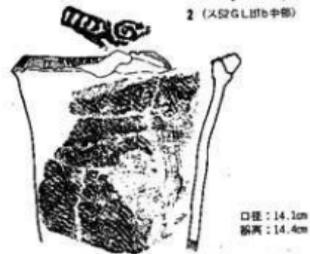
図749 包舎層出土遺物 (109) III群1類I種



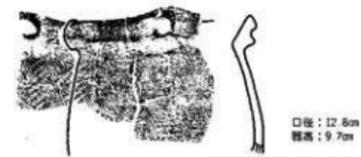
1 (A47GL1下部)



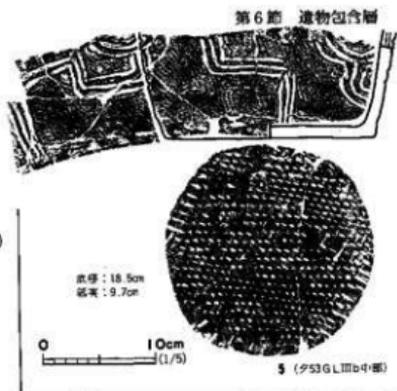
2 (A52GLIIIb中部)



3 (A46GLIIIb上部)



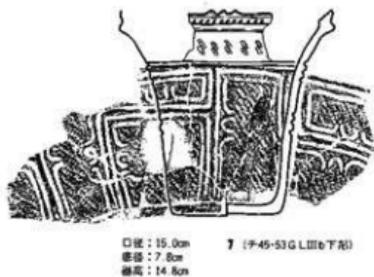
4 (A55GLIIIb中部) II-7



5 (A53GLIIIb中部)



6 (A31GL1下部)



7 (A45-53GLIIIb下部)



圖750 包含層出土遺物 (110) III群1類土器

第2章 遺構と遺物

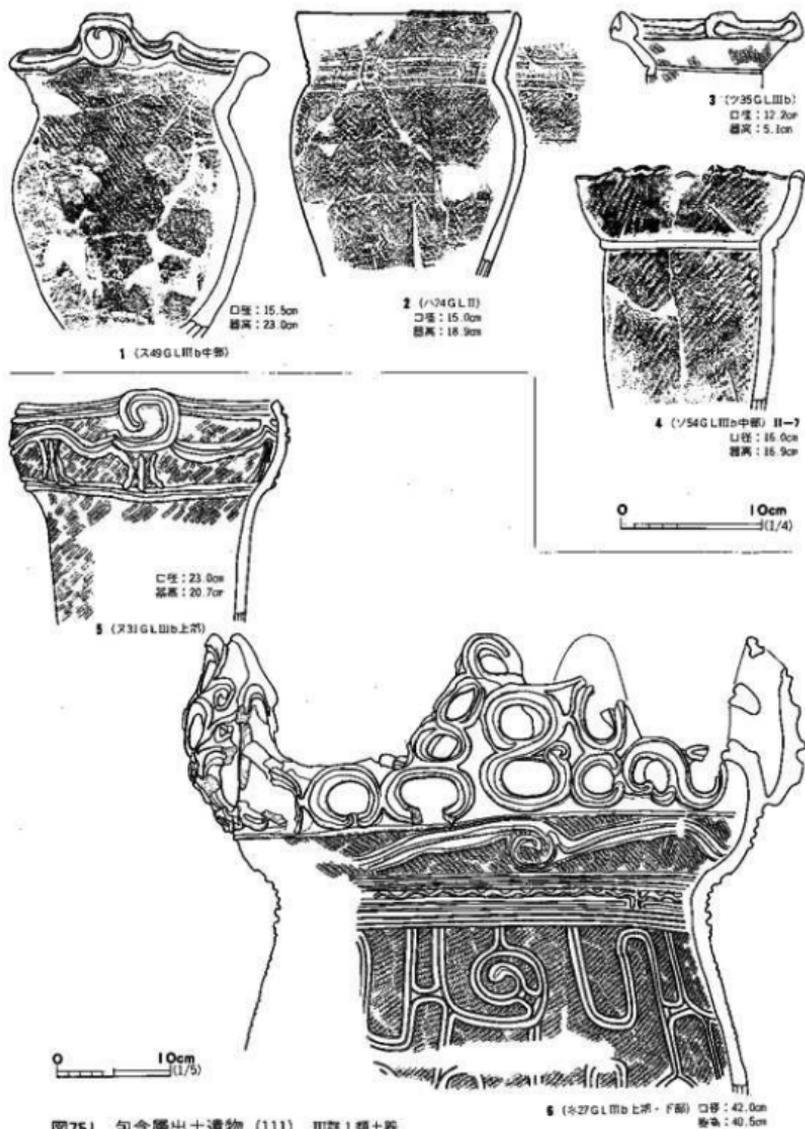


図751 包含層出土遺物 (111) Ⅲ群1類土器

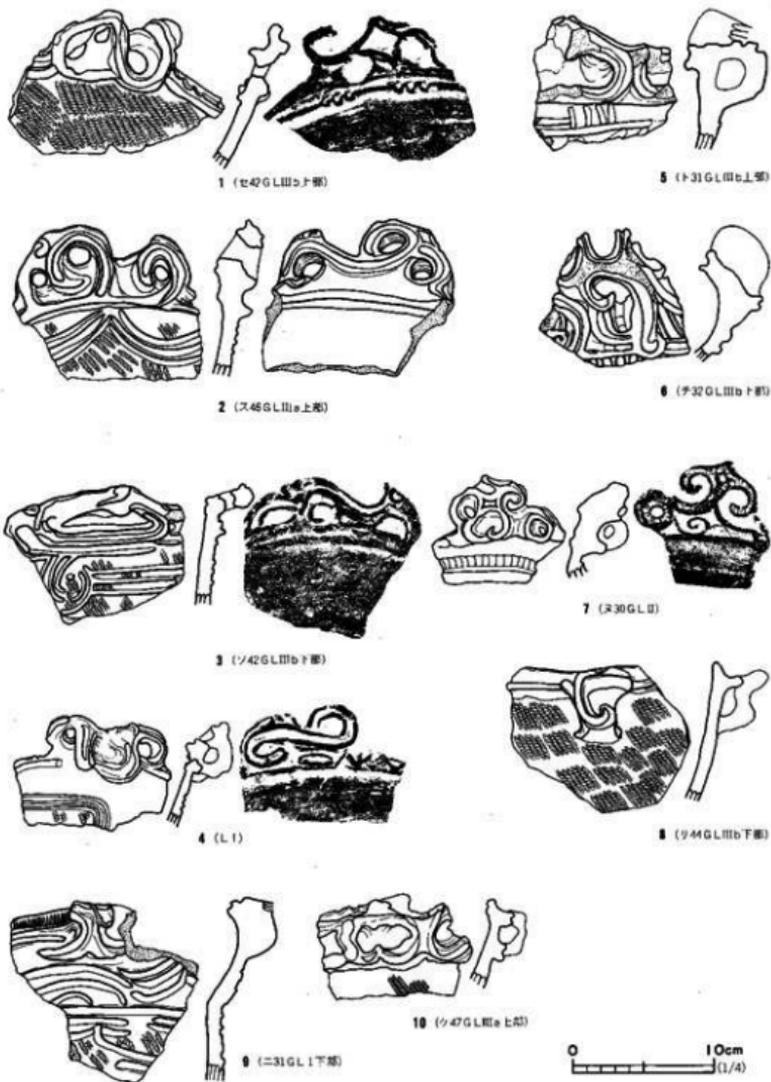


図752 包含層出土遺物 (112) III群I類土器

第2章 遺構と遺物



图753 包含層出土遺物 (113) III期1類土器



図754 包含層出土遺物 (114) Ⅲ群1類土器

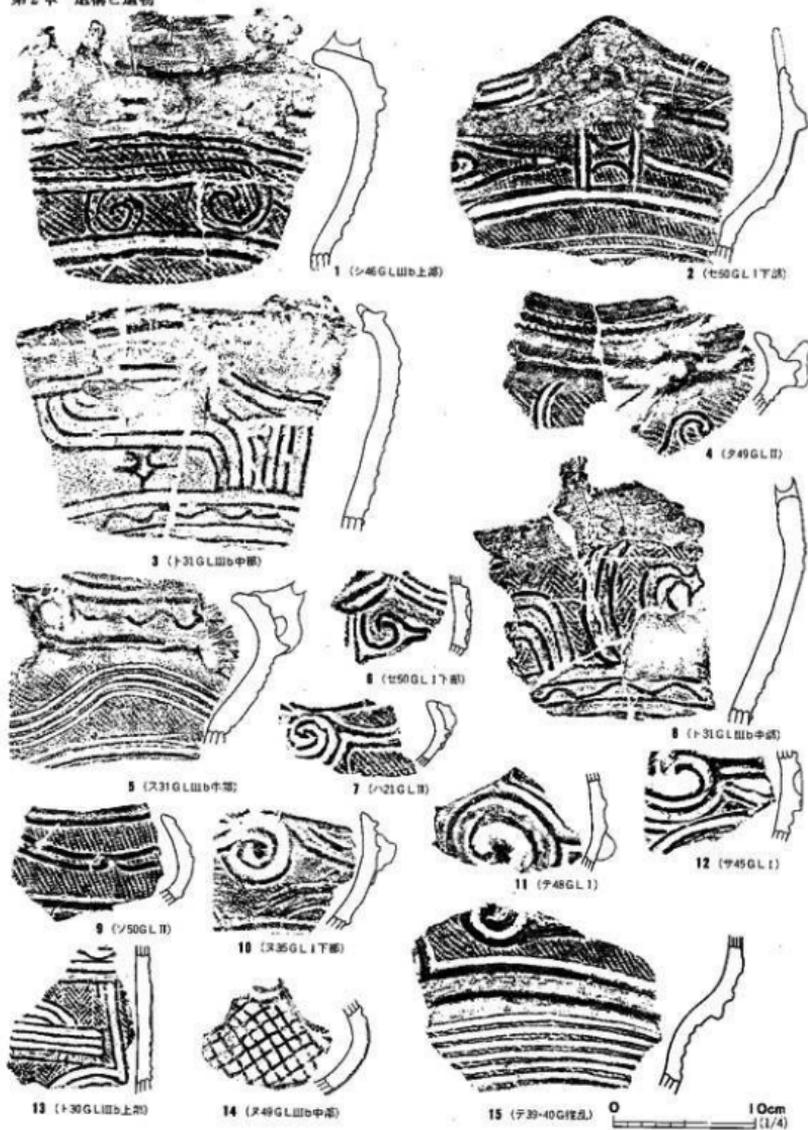
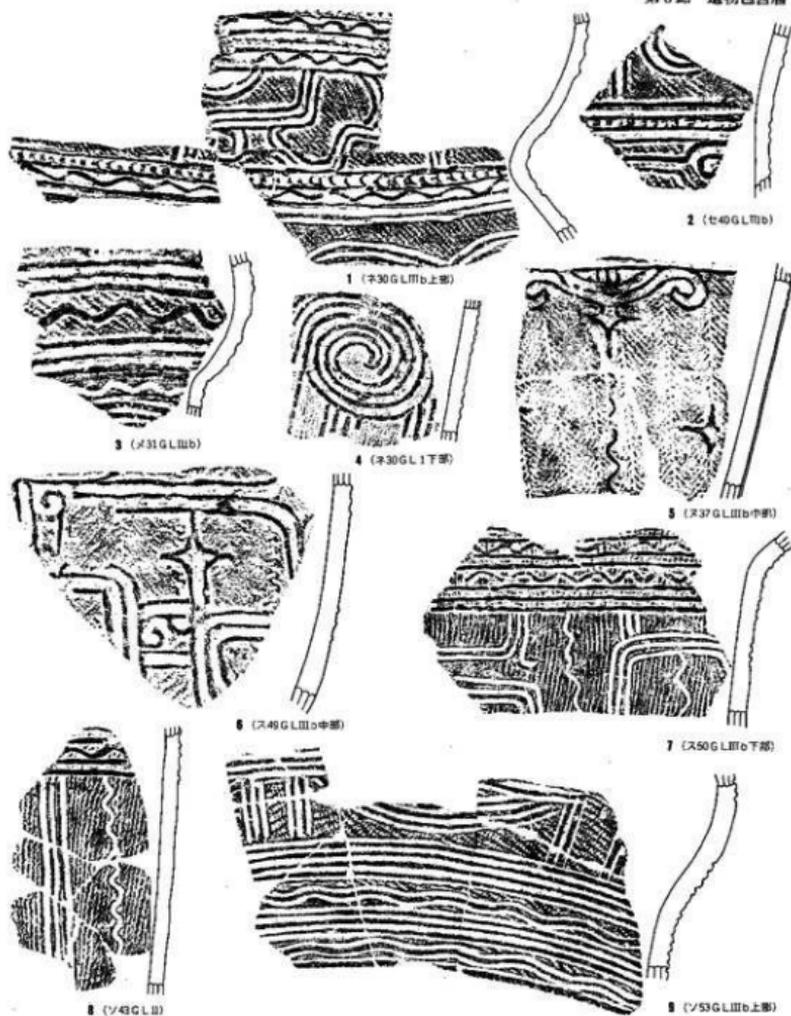


図755 包含層出土遺物 (115) III群1類土器



0 10cm
(1/4)

圖756 包含層出土遺物 (116) 印群1類土器

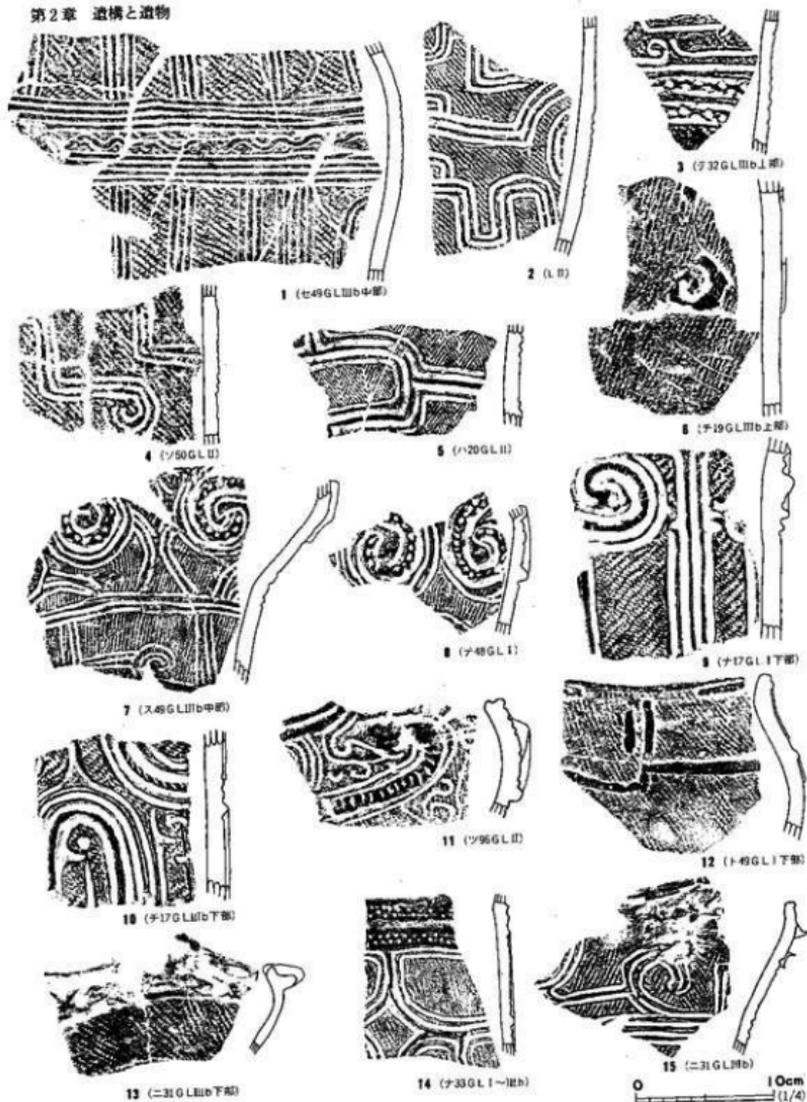


図757 包含層出土遺物 (117) Ⅲ群1類土器

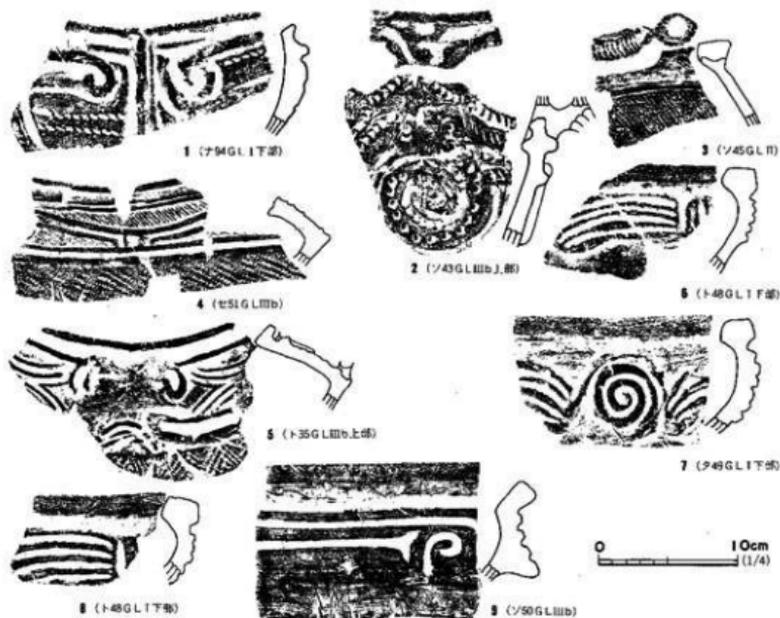


図758 包含層出土遺物(118) III群1類土器

文帯が、図753-8は矢羽状の沈線文が施されている。口縁部が内湾したり、キャリパー状をなす深鉢には、図753-9・11・16のように、渦巻文とこれから伸びる文様を描き出すものが見られる。これらの文様は、III群2類土器に近似するが、基本的には隆沈線ではなく粘土紐で文様が描かれていることから、これと分離して考えている。

図756、図757-1~5は、頸部や胴部の破片である。頸部には、横位に沈線や粘土紐を貼り付けるものが多いが、その中に波状文を加える例も少なくない。胴部は沈線で横に展開する文様が描かれるもの(図756-6・7、図757-2・4・5)と、縦位の沈線で胴部を区画するだけのもの(図756-8)が見られる。地文には縄文・羽状縄文・摺糸文が施されている。図757-7~11、図758-2は各種土器と関連するもので、渦巻文を描く隆帯に沿って沈線を重層させて施すものや、沈線の一部を短沈線で刻み、部分的に三又文のような図形を描き出すものがある。図757-10は、玉抱三又文状の文様が見られる。図758-4~9は浅鉢である。4・5は地文に縄文が施され、口縁部には粘土紐で文様が描かれている。6~8は口縁部に密接して沈線文が施され、7には渦巻文が描か



図759 包含層出土遺物 (119) 山形1類二器

第6節 遺物包含層

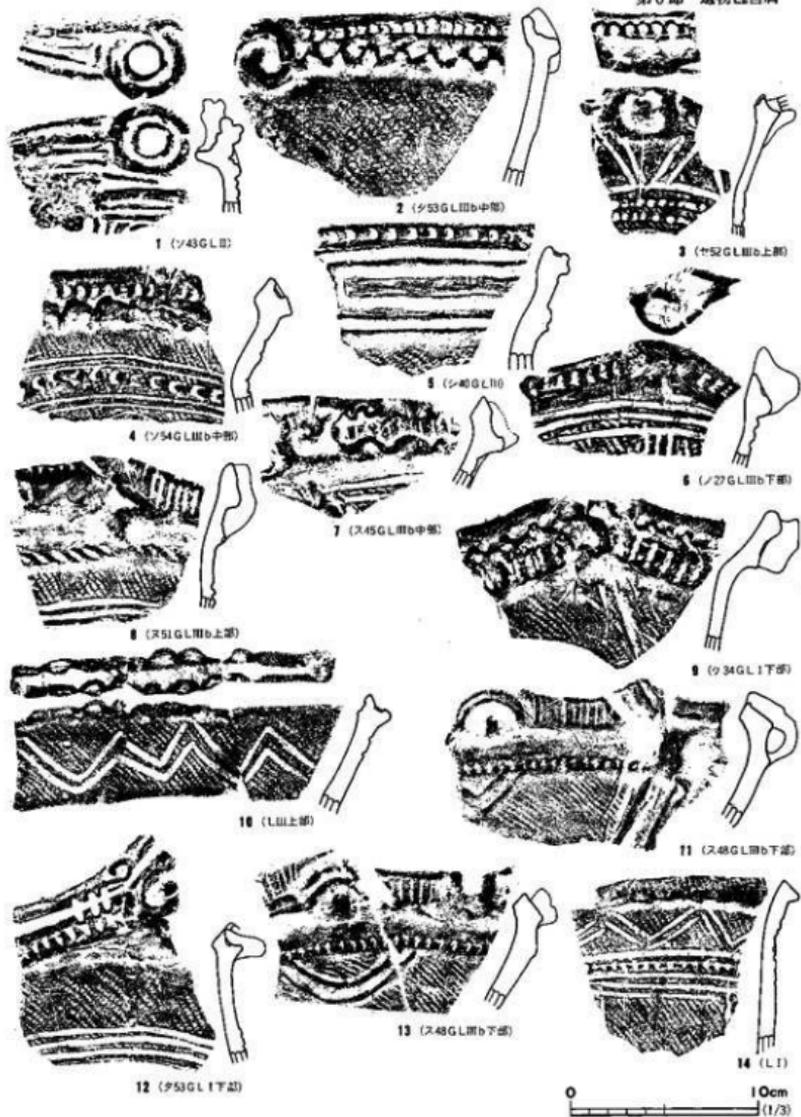


图760 包含層出土遺物 (120) III群I類土器

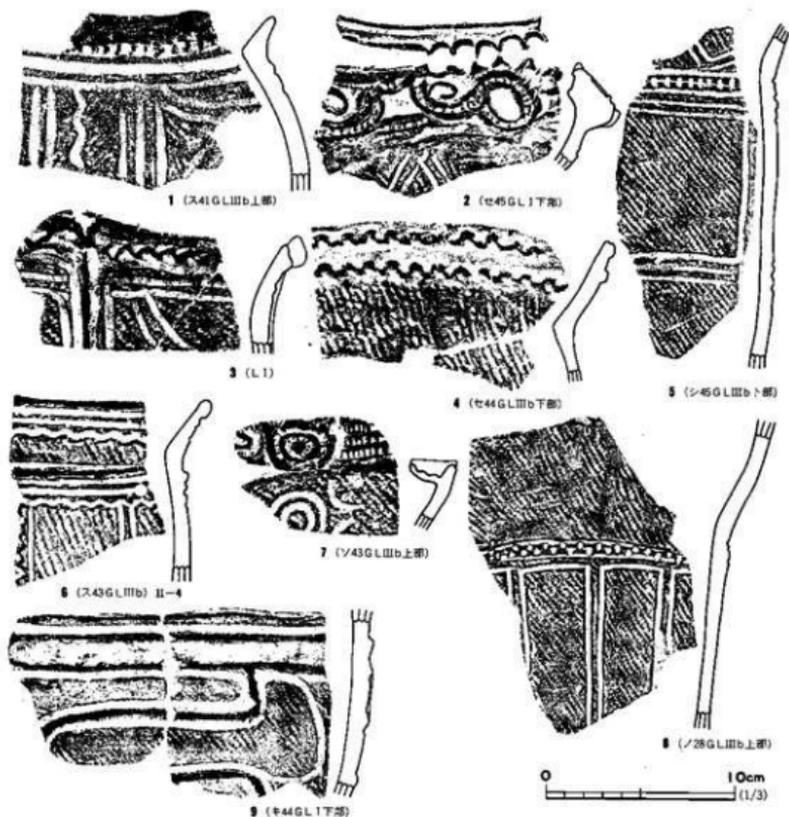


図76 包含層出土遺物 (121) III群1類土器

れている。9は渦巻文と、端部が三又文状をなす横位の沈線文が施されている。

図754-4、図759~761に示した土器については、一部、II群4類土器に含まれるものがあるかも知れない。図754-4、図759-2・4・5は、山形をなす波状口縁の土器と考えられる。図759-4は波頂部下に渦巻文を配し、口縁部直下には刺突文を加えている。波頂部内面も隆線を貼り付けている。図754-4もこれに近い。図759-2も波頂部の下に渦巻文を配し、ここから口縁部に沿って波状の隆線が伸びている。口縁部は上下に区画され、いずれにも縦位の縄瓦痕文が施されている。同図5は口縁直下に縦位の短沈線を施すもので、波頂部内面には沈線文が加えられてい

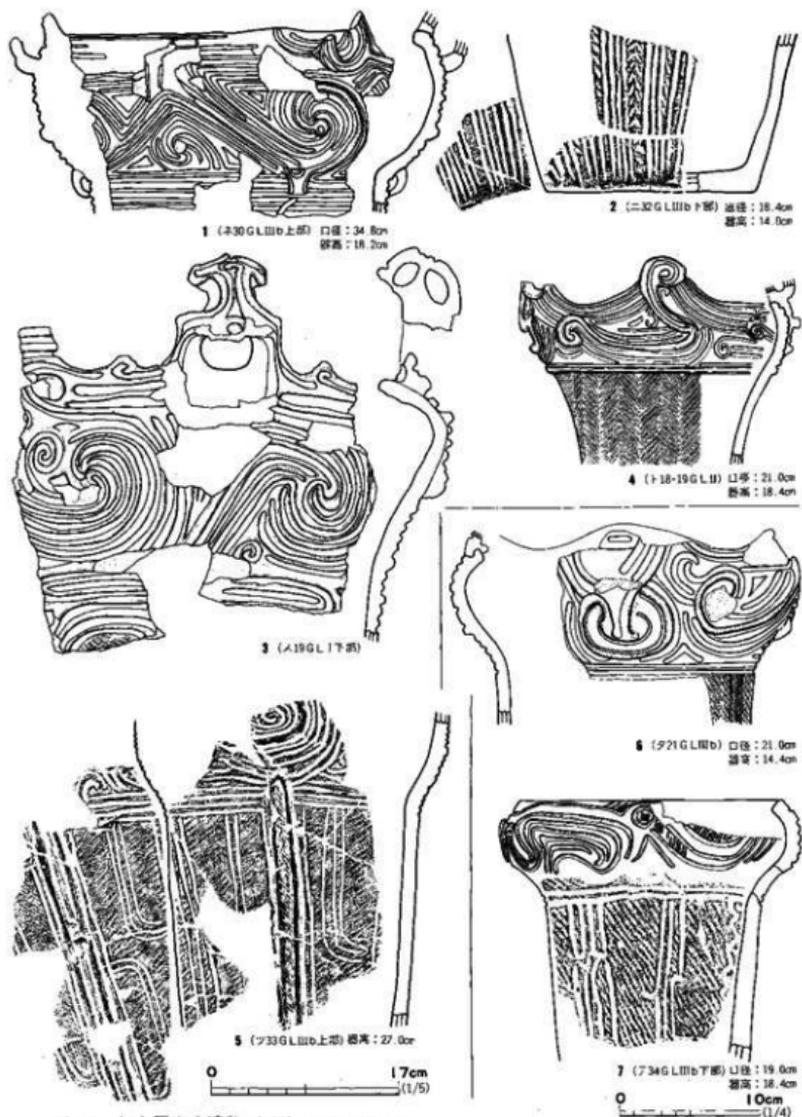


図762 包含層出土遺物 (122) III群 I類土器



図763 包含層出土遺物 (123) 田群1粘土器



図764 包含層出土遺物 (124) 山群1類土器

る。同図1・3・6・7・10は波状口縁の土器であろう。1の内面の状態は同図4に近似する。3の内面、6の内外面には渦巻文が描かれている。

図759-8・12・13、図760-2・4~8・11~13は、口縁直下に縦位の短沈線や刺突文を施すもので、この下端を波状の隆線で区画するものも見られる。図759-11、図761-2は、口縁部に円形状やS字状の突起を全周させるもので、突起上には有筋沈線文を施し、その下には連続山形文を描いている。この山形文は、図759-9や図760-3・10・14にも見られる。図760-9の口縁部直下を走る波状隆線の下には、縦位の縄文が施されている。図761-1の頸部には刺突文が、同図3の口縁部直下には波状隆線が施されている。同図8は頸部に交互刺突文が、同図9は2隆線で区画された無文帯が横位に施されている。

b Ⅱ いわゆる火炎土器と呼ばれるもので、口縁部には渦巻文を描く隆線に沿って、沈線を密に施している。図762~764が比定される。

図762-1は口縁部に中空の突起、頸部には小さい楕上把手が付く。口縁部に施された隆線による渦巻文の端部は、瘤状に肥厚している。同図3の口縁部にも突起が付けられ、口縁部の隆線による渦巻文の末端は、突起状に器外面に突出する。胴部には縄文が施されるようである。同図4は波状口縁の土器で、波頂部から「ノ」の字状に隆線を垂らし、この下端から波底部下位まで隆線を横位に延ばしている。この隆線の端部は渦巻文を描いている。胴部には羽状縄文が施される。同図5の胴部は、縦位に施された2本一組の隆線で区画され、隆線間には斜位の沈線文が施されている。区画内には、縦位に沈線を加え細分割している。地文には縄文が施されている。同図6は橋状の把手を起点に、隆線が施されている。胴部は縦位の沈線で区画され、地文に縄文を施す。同図7の口縁部に施された沈線の間には、一部短沈線を加えている。胴部は縦位の沈線で区画され、縦位の波状沈線文も施されている。同図2は縦位に密接して沈線文が施され、一部の沈線文間には矢羽状の沈線文を加えている。図763-6~8、図764-4は波状口縁の土器で、6・7の波頂部には橋状の、8には半円状の把手・突起がつけられている。6の沈線は、半截竹管で描かれている。図764-4の波頂部下位には、玉抱二又文が施されている。

Ⅲ 群 2 類 土 器 (図765~776)

大木8b式と考えられる。器種には、キャリバー状と円筒形状や樽状の深鉢と、鉢・浅鉢の他に、小型の上器も多く見られる。口縁部の文様は隆沈線で描かれるものが多い。

図765-1は円筒形状をなす深鉢で、口縁部は4単位の小波状をなしている。口唇部には波頂部で渦巻文を描く沈線文を施す。頸部には2列の刺突文を加えている。胴部は隆沈線で区画され、隆線の上端では渦巻文・円文を描いている。同図2の口縁部には、渦巻文を起点に長方形の区画文が、頸部には沈線文が施されている。同図3は口縁部中央に横位の隆沈線文が施されている。同図4は低い波頂部下位に渦巻文を加え、その間を横位の隆沈線で繋いでいる。同図5は口縁部

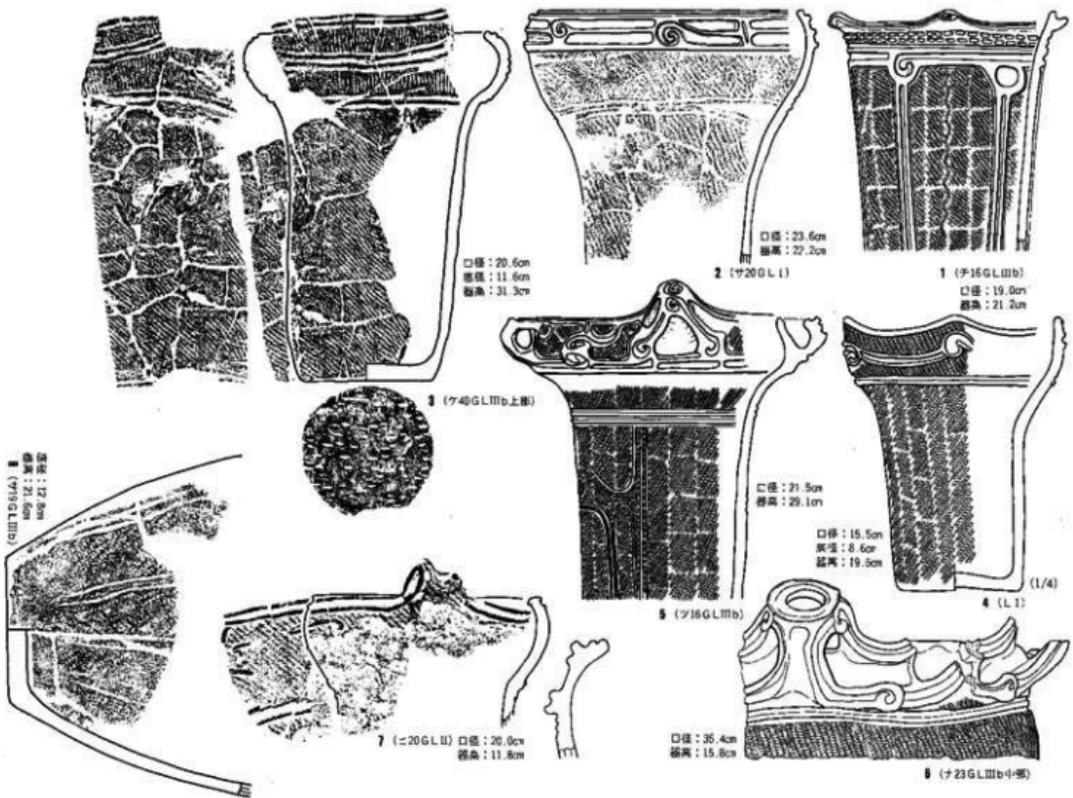


图765 包含層出土遺物 (125) III群2號土器

第2章 遺構と遺物

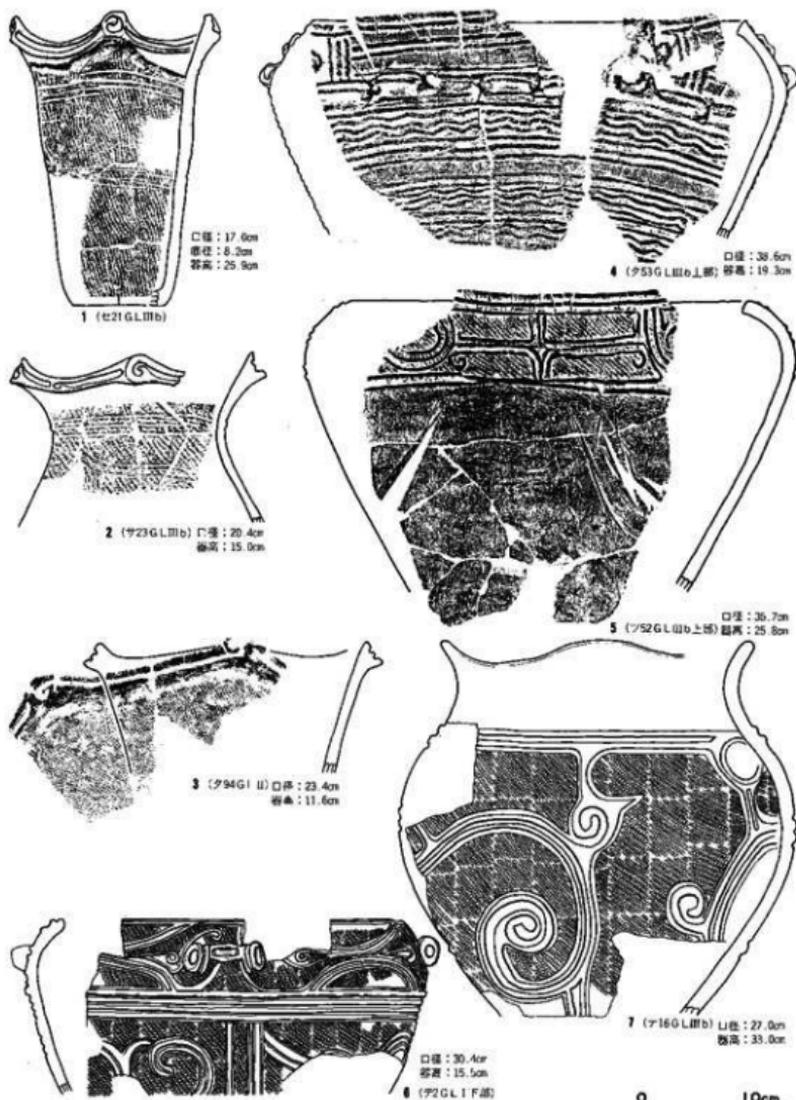


图766 包含層出土遺物 (126) Ⅲ群2類土器

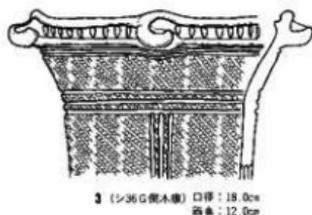
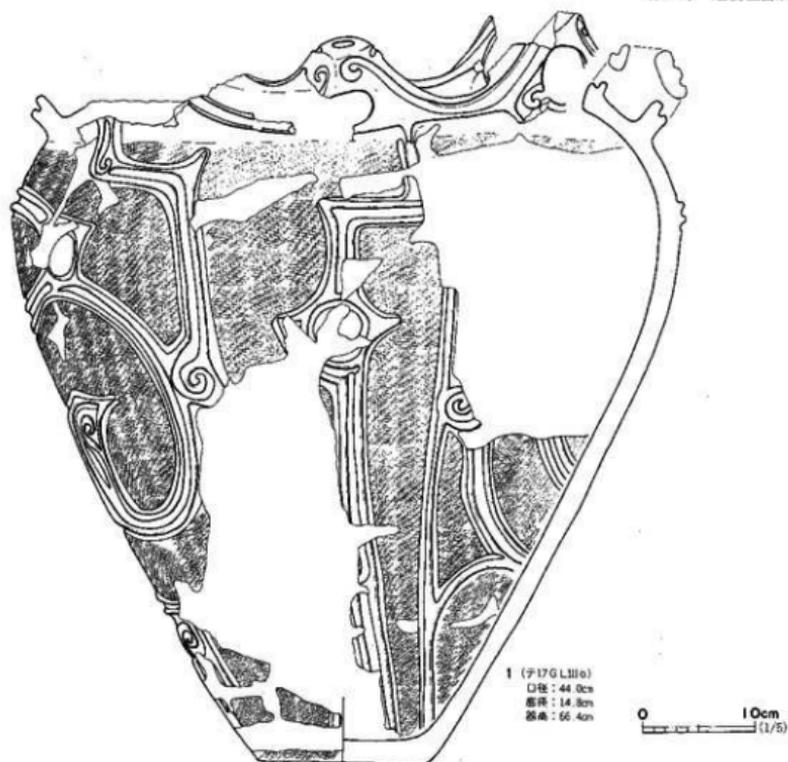


図767 包含層出土遺物 (127) III群2類土器

第2章 遺構と遺物

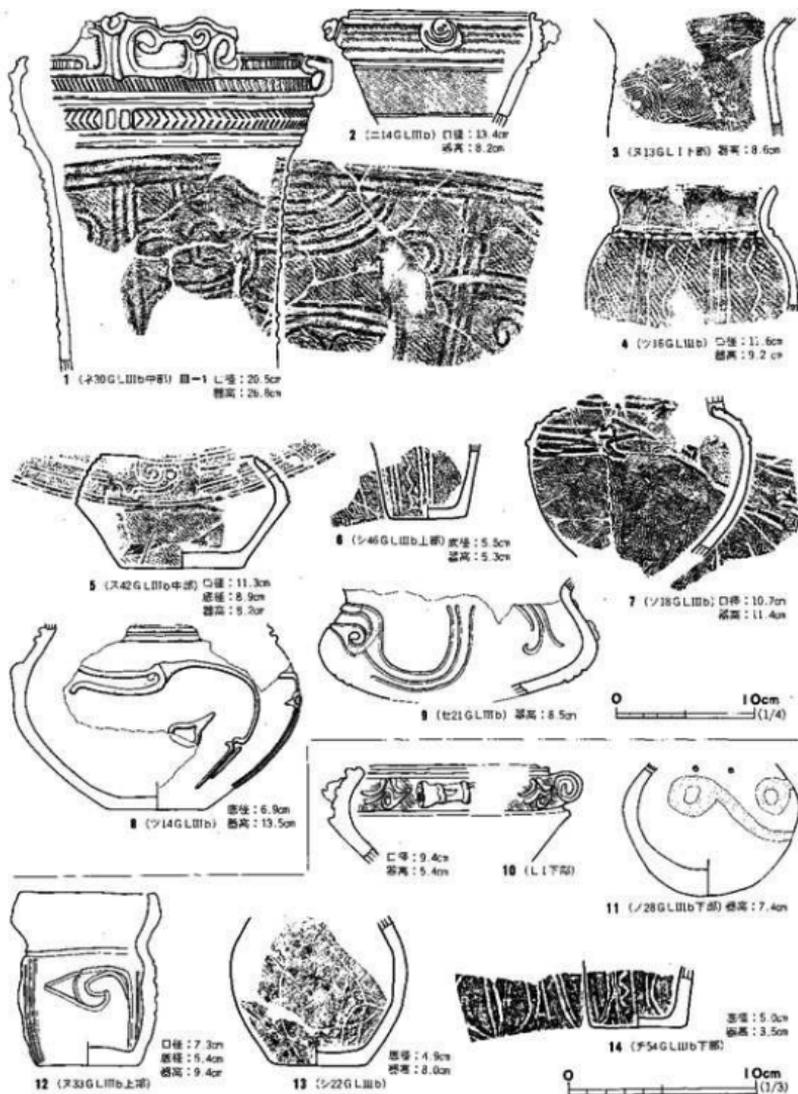


圖768 包含層出土遺物 (128) III群2類土器

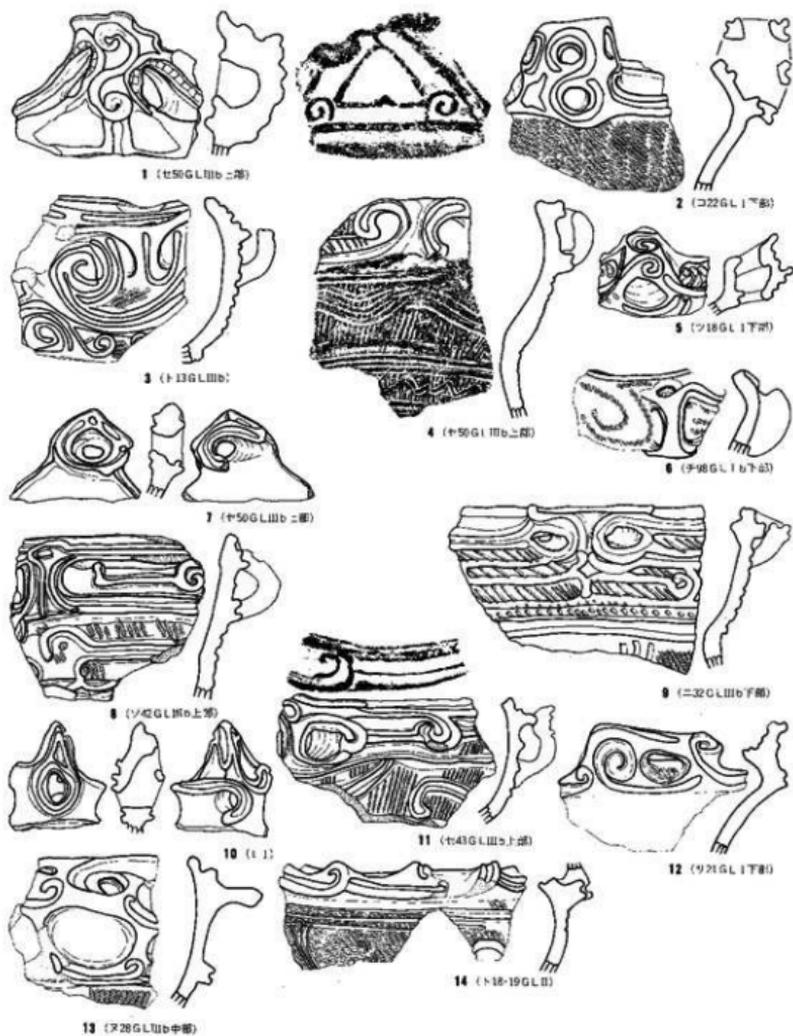


图769 包含層出土遺物 (129) III群2類土器

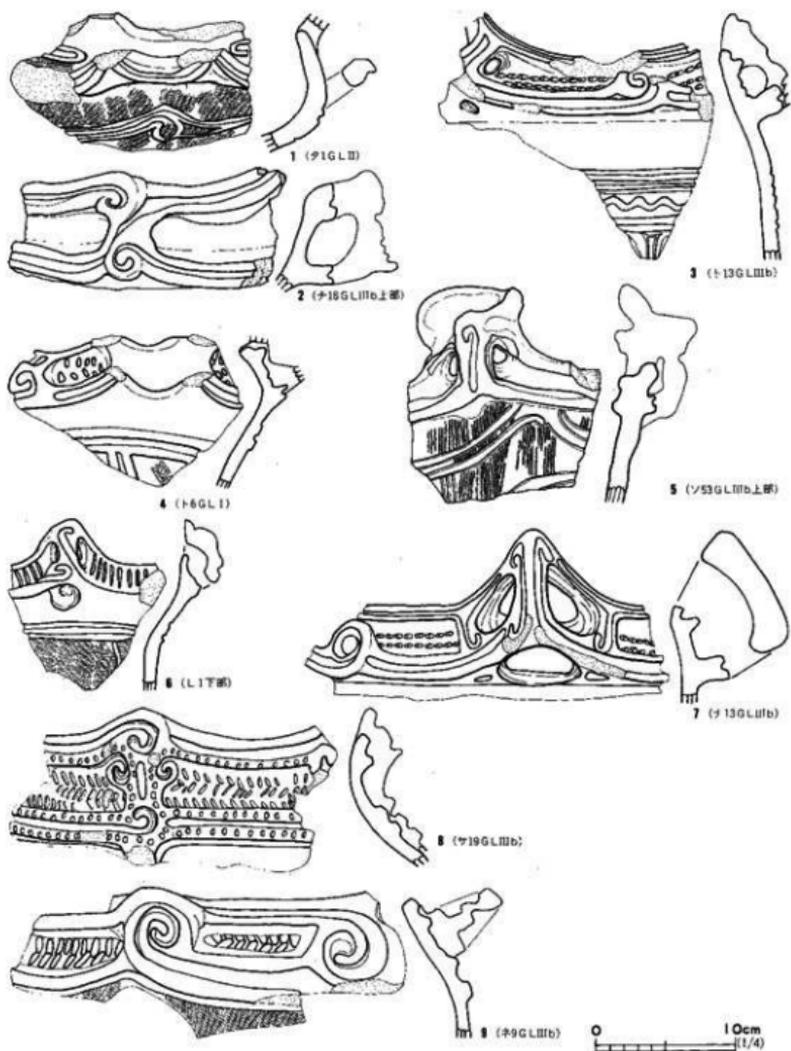


図770 包含層出土遺物 (130) III群2期土器

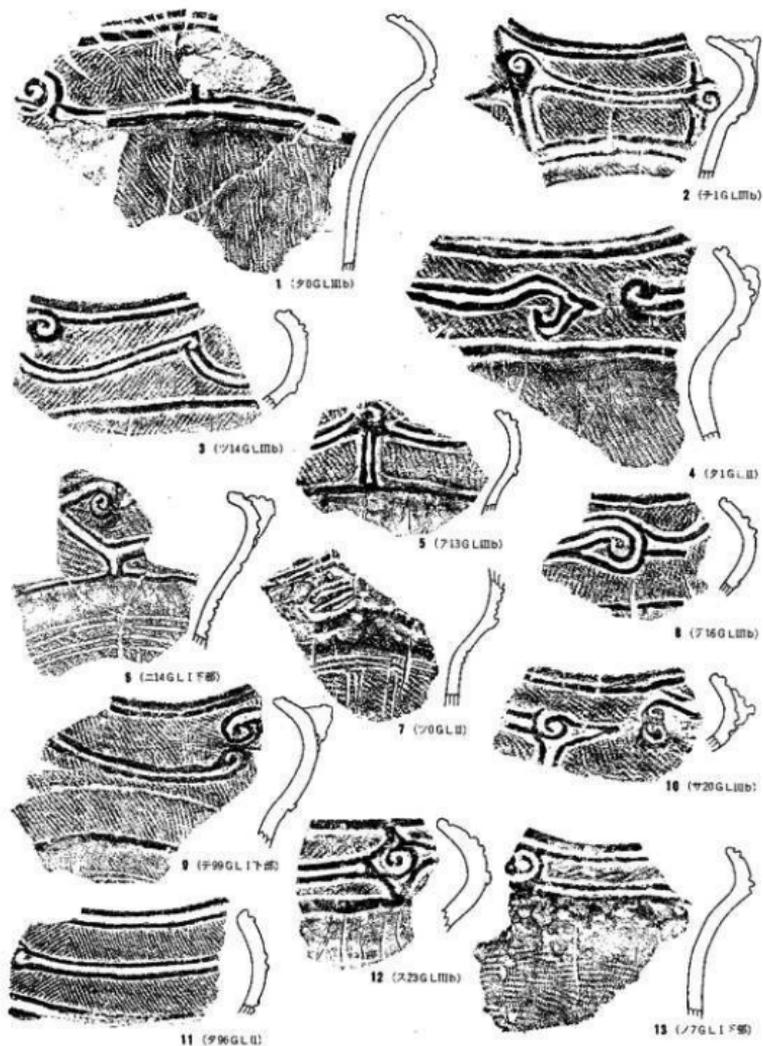


図771 包含層出土遺物 (131) Ⅲ群2期土器

0 10cm
----- (1/4)

第2章 遺構と遺物

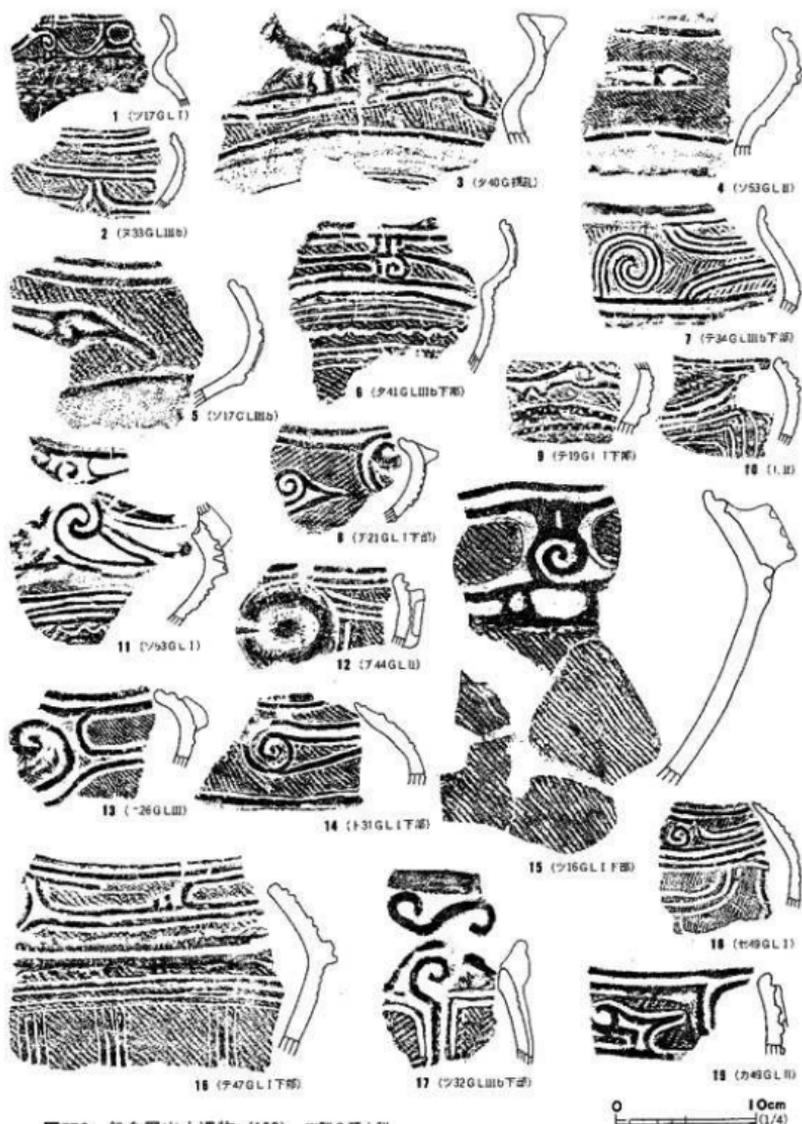


図772 包含層出土遺物 (132) III群2類土器

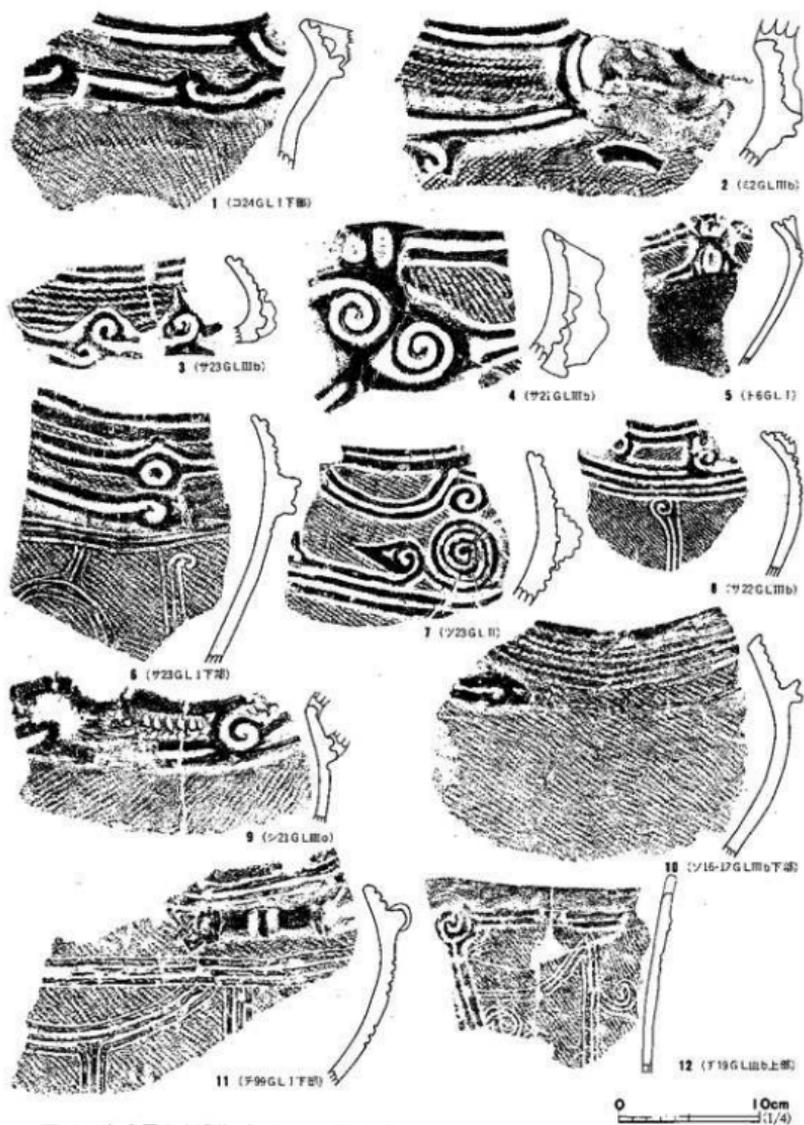


圖773 包含層出土遺物 (133) III群2類土器

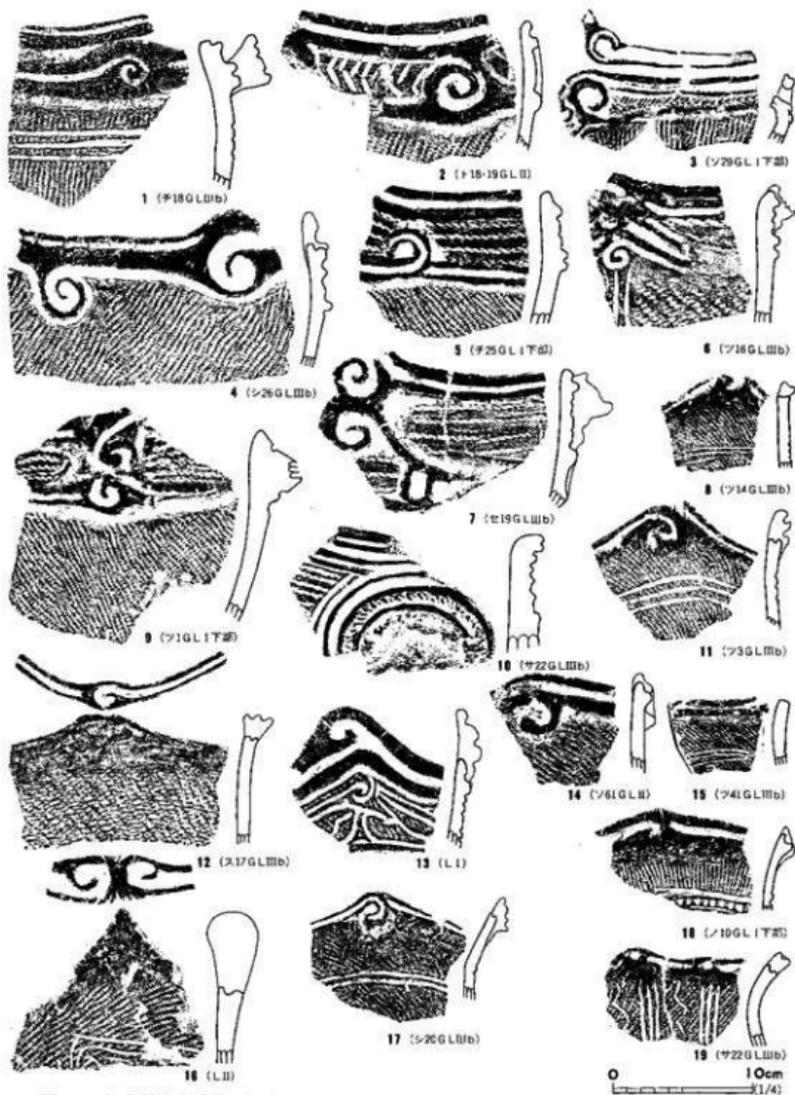


図774 包含層出土遺物 (134) Ⅲ群2期土器



図775 包含層出土遺物 (135) 山崎2須土器

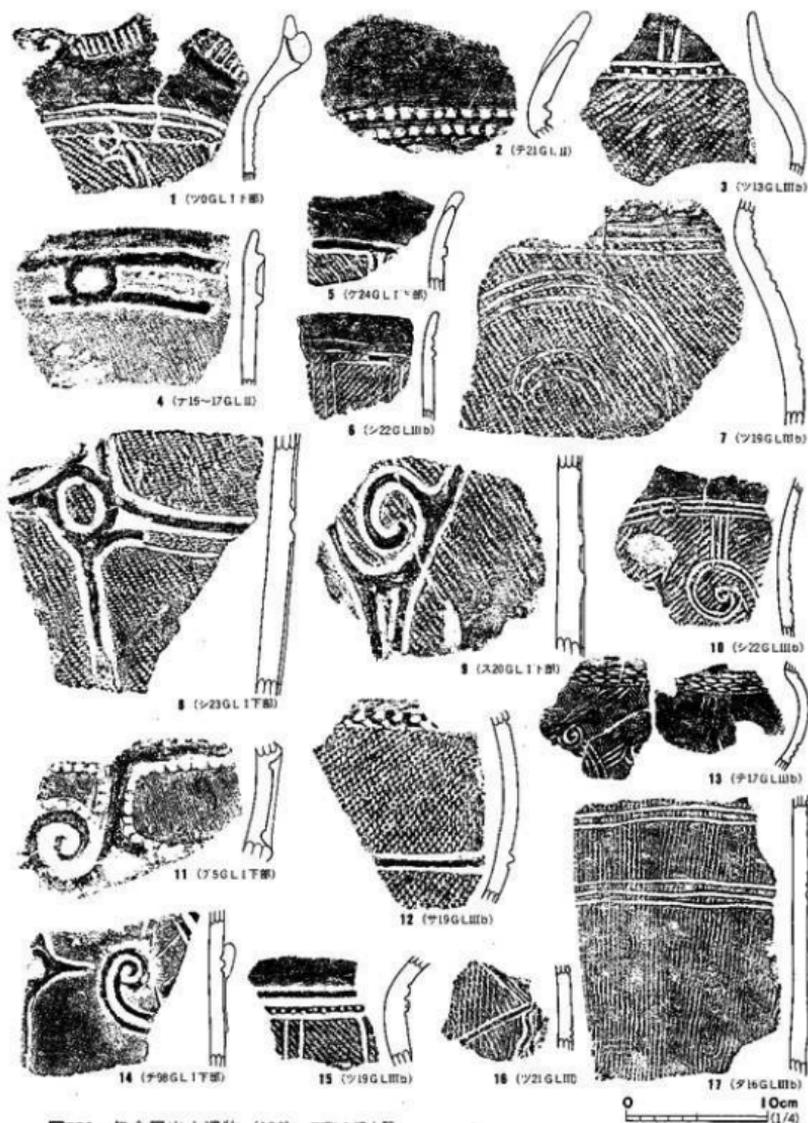


図776 包含層出土遺物 (136) III群2類土器

に中空の把手が付き、把手間に不定形の小区画文を描いている。把手の間には、渦巻状の突起が付く。頸部上位には無文帯を配し、胴部と頸部を沈線で区画している。胴部には縦位に沈線を施すが、その一部は横にのびている。6は口縁部に中空の把手が、相当数付くものと考えられる。図766-1~3は口縁上に沈線文を施し、波頂部には渦巻文を描き出している。1・2は頸部に沈線文を施し、2の胴部には横に展開するクランク文が描かれている。同図7は胴部全面に大ぶりの渦巻文を描く。同図6は口縁部に横長の棒状突起が付き、この間に対弧文を施している。口縁部下端は沈線で区画され、胴部には縦位・渦巻状の沈線文を施している。

図767-1は、口縁部に8単位(?)の中空の把手が付くものと考えられる。胴部の文様は図766-7と同じである。図768-2は渦巻文を描く瘤状突起を起点に、横位の縄瓦痕文が施されている。同図3の胴部には、渦巻文を描いて横に展開する文様が施されている。同図4は胴部に縦位・波状の沈線文が施され、頸部には列点文が通っている。同図5・10は小型の浅鉢、同図7・8・10・11は球形状の土器である。施される文様は他の土器と共通する。11の上端には、小孔が一定間隔で開けられている。同図9は胴部が偏平な土器、同図12は極めて小さい深鉢である。

図765-7、図766-4・5、図767-2・3、図768-1は、粘土紐の貼付文で文様を描くもので、Ⅲ群1類土器かも知れない。図766-4は、胴部に横位・波状の粘土紐を重層して施している。図768-1は隆線で上下に3区画された口縁部に、縦位の短沈線や矢羽状の沈線を施している。図767-2は口縁部に大ぶりの突起が付き、胴部には渦巻文を描いて横に展開する沈線文が施されている。同図3の口縁直下には、刺突文を施した幅の狭い文様帯が見られる。

図770-8は、矢羽状の沈線文や刺突文が全面に施されている。図773-1~3・6などのように、口縁部文様帯内に縄瓦痕文を施すものも少なくない。同図9、図774-2の口縁部文様帯内には、刺突文や矢羽状の沈線文が施されている。図775-17~22、図776-17は、地文に摺糸文が施されている。同図11は、隆帯に沿って円形の刺突文が施されている。(松本)

Ⅲ群3類土器(図777~779)

大木9式に比定される。図777-1・2・15・20、図778-1~3、図779-1~3は、キャリバー状の深鉢である。口縁部には、隆帯と幅の広い凹縁で渦巻文や楕円形区画文を描いている。胴部には、沈線によって区画された縦位の縄文帯を垂下させている。胴部の縄文帯の下端は、図778-2のように閉じない傾向が見られる。図777-13・14は、口縁部が強く内湾する鉢であろう。渦巻状の沈線で縁取られた隆帯は、庇状に器外面に突出している。図777-15・20、図778-3は口縁部を無文とし、胴部には沈線によって区画された縄文帯を垂下させている。

図777-19・22、図778-4・5・8~11は、口縁部直下に幅の狭い無文帯や縄文帯が見られる。胴部には、沈線によって区画された縄文帯を垂下させている。図778-7・12・14~16、図779-4~13は、胴部上半が円筒形状をなす深鉢である。口縁部と胴部の区分は不明瞭である。文様は

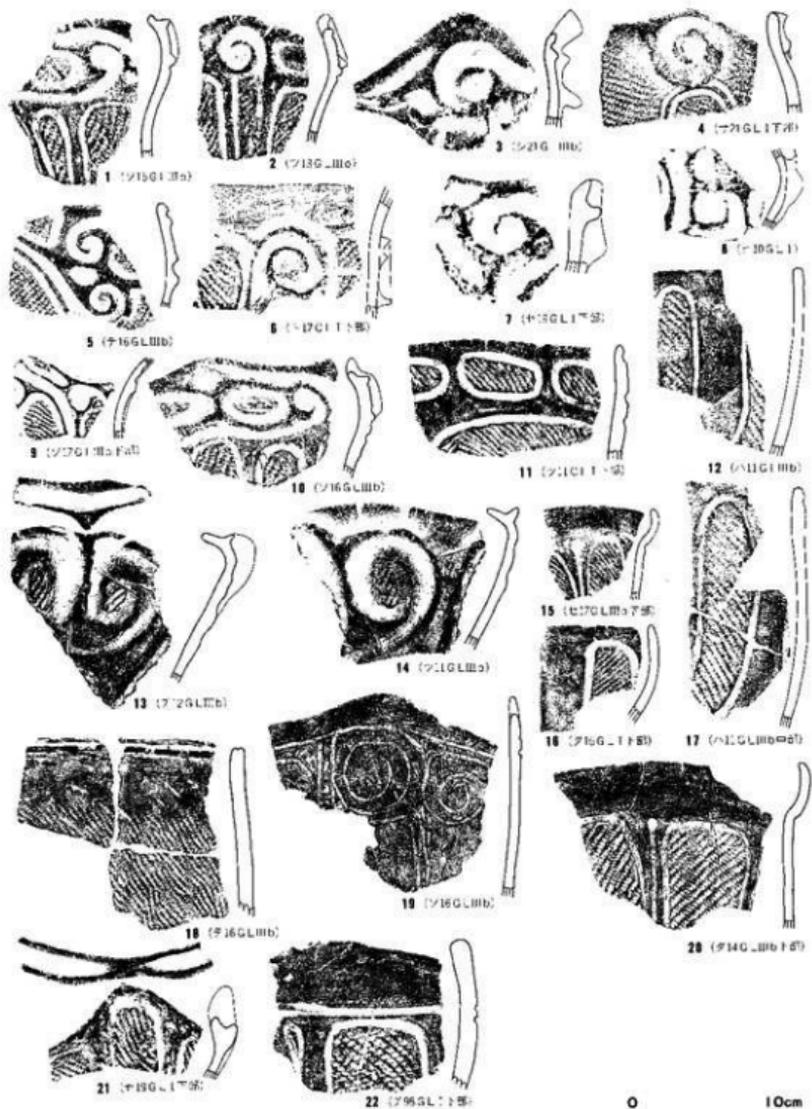


図77 包含層出土遺物 (137) 田原3期土器

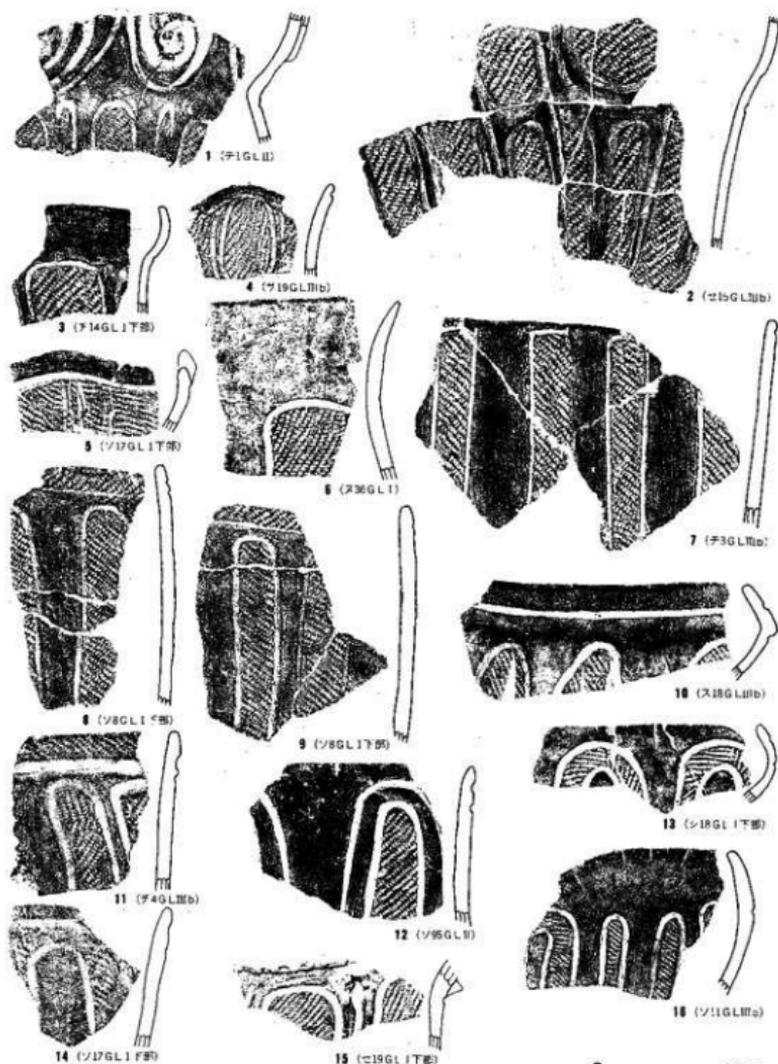


図778 包含層出土遺物 (138) Ⅲ群3類土器

0 10cm
(1/4)

第2章 遺構と遺物

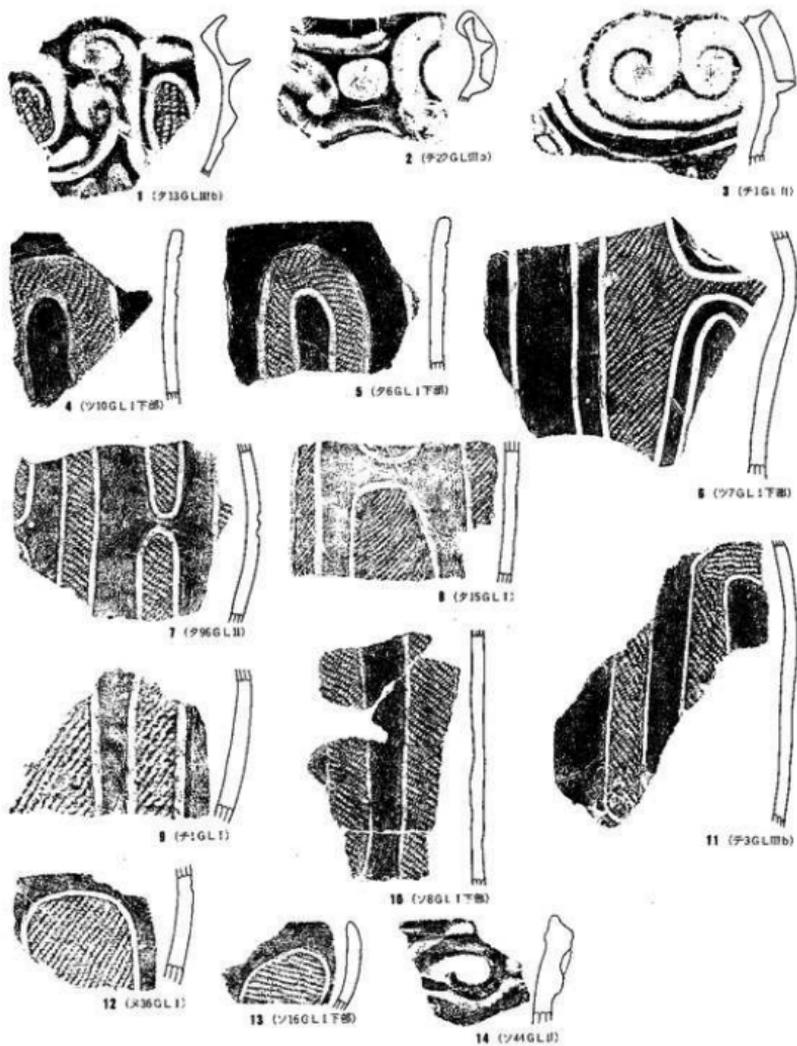


図779 包含層出土遺物 (139) III群3類+級

0 10cm
(1/4)

沈線によって区画された縄文帯で、縦位・逆U字状の図形を描いている。

Ⅲ群 4類土器(図780~783)

大木10式に比定される。図780-1は円筒状をなす深鉢で、凹線で区画された縄文帯で文様を描いている。口縁部直下に横楕円形の縄文帯、その下に渦巻状の単位文を4単位施している。この単位文帯とそれ以下は、横位の凹線で区画され、この凹線の一部は渦巻文を描いている。凹線で区画された胴部下位には、縄文が施される。口縁部直下の横楕円形の縄文帯は、図783-2~6にも見られる。これらはすべて、楕円形の接点部分に瘤状の突起が付いている。

図781-2・4・5・8・10・12~15、図782-1~5・8・11~20も同じ器形の深鉢である。図781-2・4・5・8・10・12~15は、沈線や凹線で区画された縄文帯で、独立したアルファベット状の単位文を描いている。図781-8は縄文帯を区画する細い沈線が、口縁部直下の無文帯も切っている。図782-1~5・8・11~20は、稜線で区画された縄文帯でアルファベット状の単位文を描いている。縄文帯に挟まれた無文帯は、3・17・18のように台形状に肥厚するものもある。

図780-5、図781-1・3・9・16、図782-6・7・9は、口縁部下端に括れの見られる深鉢である。図781-1・3・9・16は沈線や凹線、その他は稜線で区画された縄文帯で、単位文を描いている。図781-7には、波頭状の図形が描かれている。同図1は、縄文帯と無文帯の関係が、ネガ・ポジ逆転している。

図780-3・4・8、図781-6、図782-22~25、図783-1・10は、鉢・浅鉢である。図780-3、図782-22~25、図783-1は、稜線で区画された縄文帯で文様を描いている。図780-8の内面には、2条の稜線が認められる。

図780-2は、口縁部直下に凹線を施した粗製土器である。同図7は球体状をなす小型の土器で、口縁部直下には上下から穿孔された、鈎状の隆帯が逡っている。胴部には沈線で渦巻状の単位文を4単位施し、単位文帯の下端は沈線で区画されている。同図6は注口部の破片である。図783-8・9・12は、凹線で区画された肥厚する無文帯で、曲線的な図形を描くものである。同図13~15は波状口縁の深鉢で、波頂部にはひねりをもつ突起が付けられている。13には円形の刺突文が加えられている。

(山岸)

Ⅲ群 5類土器(図784~787)

粗製土器と、時期を限定できない土器を一括した。図784-1は縄文、同図4は条線文が施された粗製土器である。同図5~7は無文の浅鉢、同図8は鉢であろうか。底部に4つの短い足が付けられている。図785-2~19、図786-1は脚である。図785-3は図784-8と同じく短い。これらの脚は図785-2・4・5のように高台状をなすものと、同図6~14のように古墳時代の高杯の脚部のようなもの、同図15のように棒状をなすもの、図786-1のように大きなものが認められる。高杯の脚部のような図785-6・8・14には、円孔が開けられている。6には稜線文が施

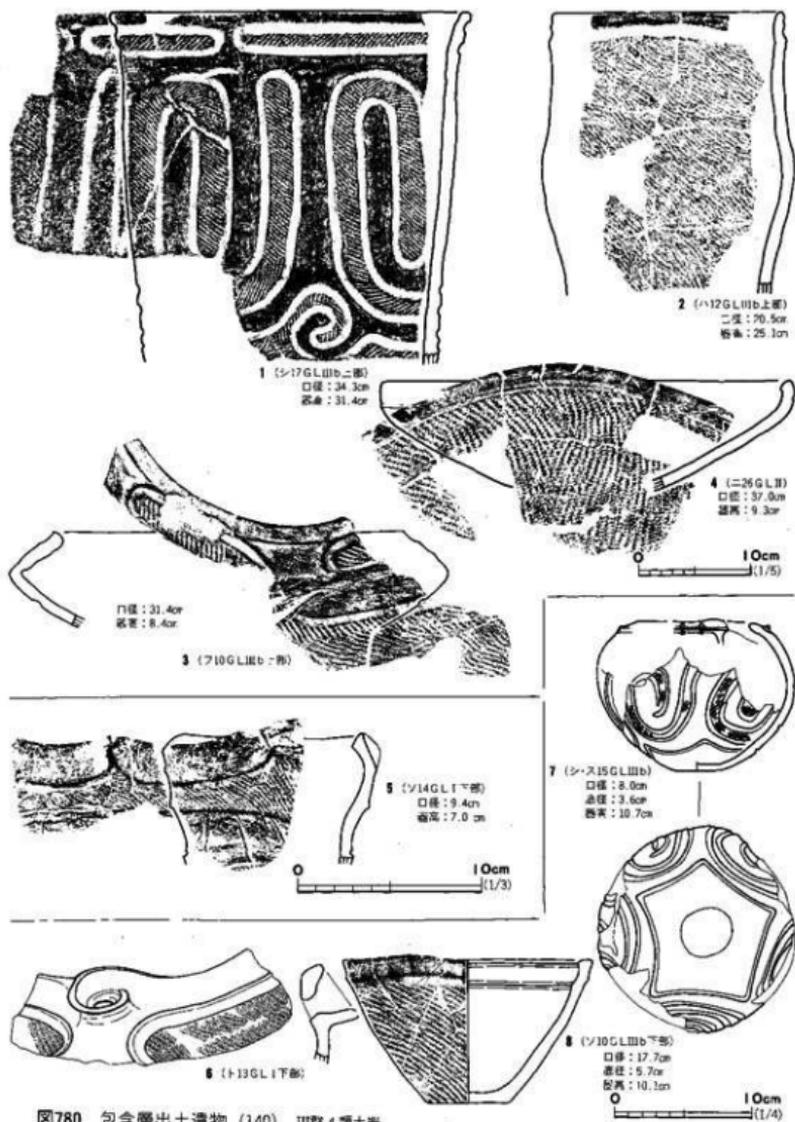


図780 包含層出土遺物 (140) III群4類土器

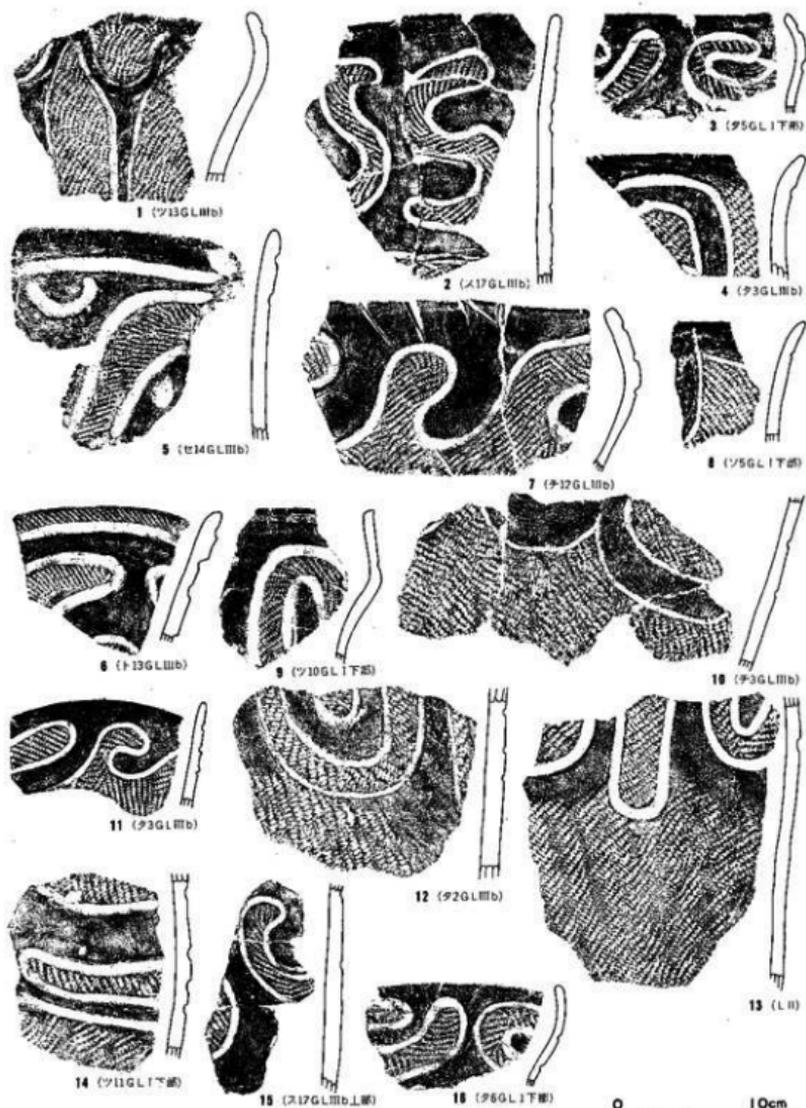


図781 包含層出土遺物 (141) III群4類土器

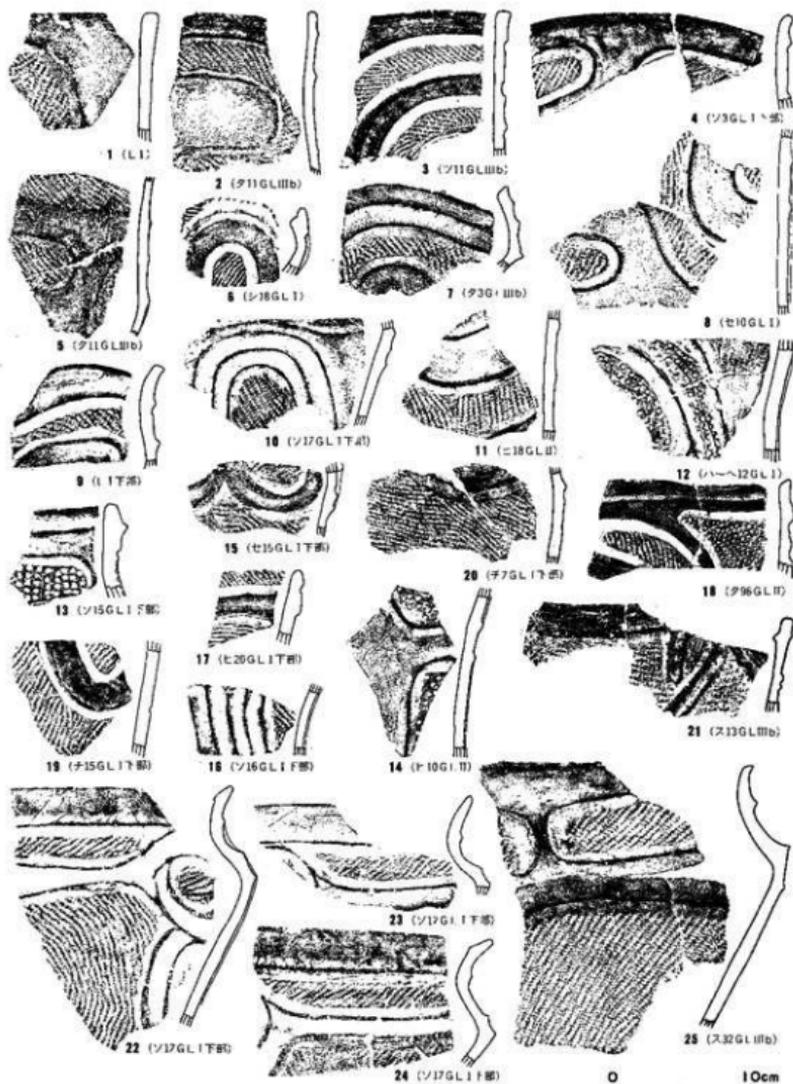


図782 包含層出土遺物 (142) 皿群4類土器

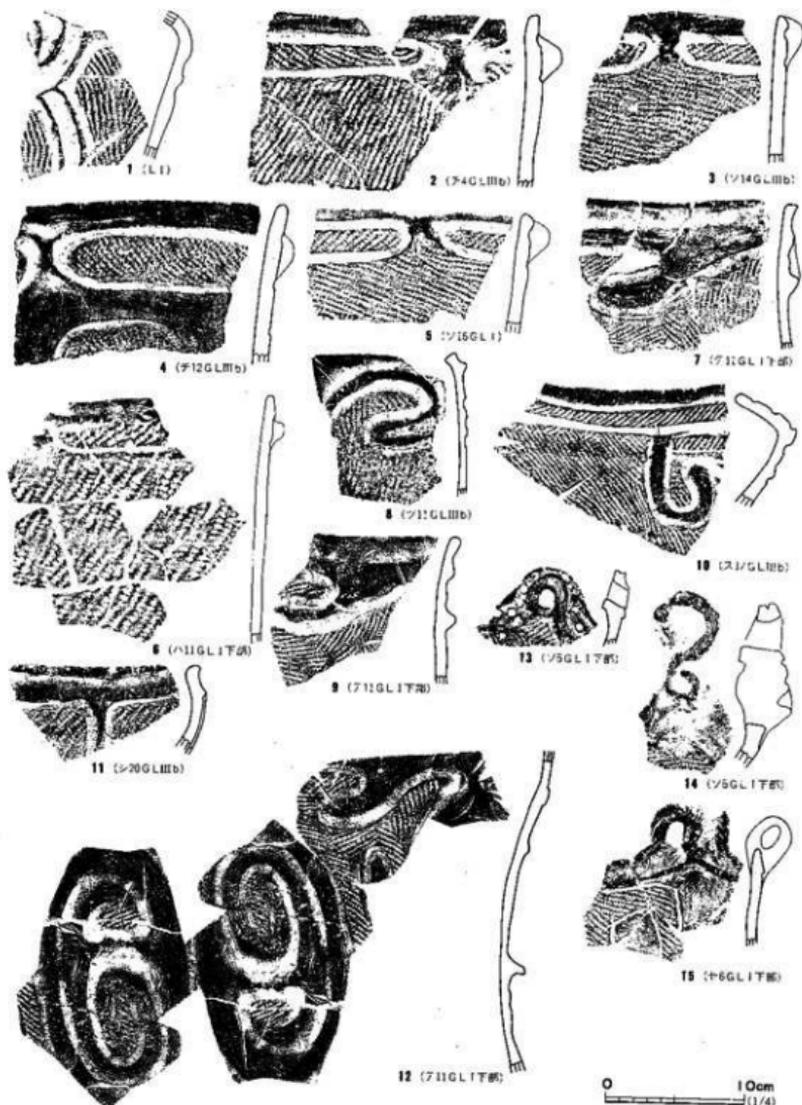


图783 包含層出土遺物 (143) Ⅲ群4類土器

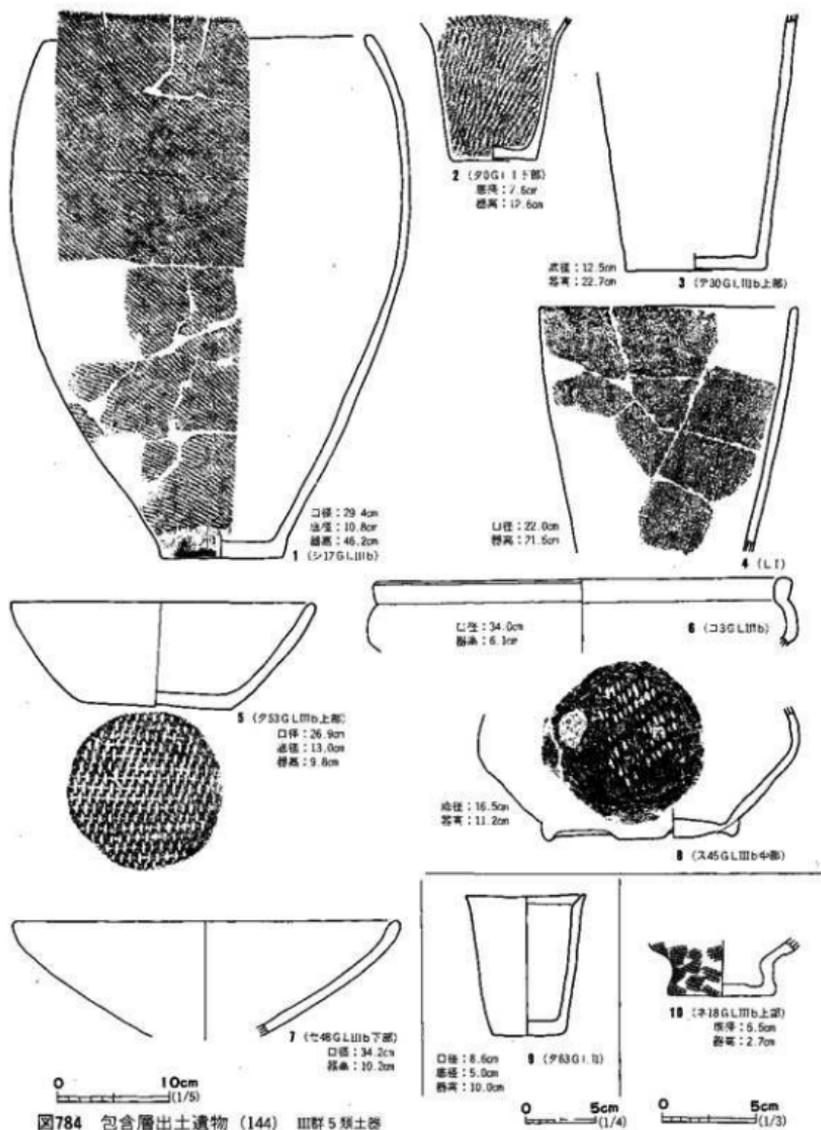


図784 包含層出土遺物 (144) III群5類土器

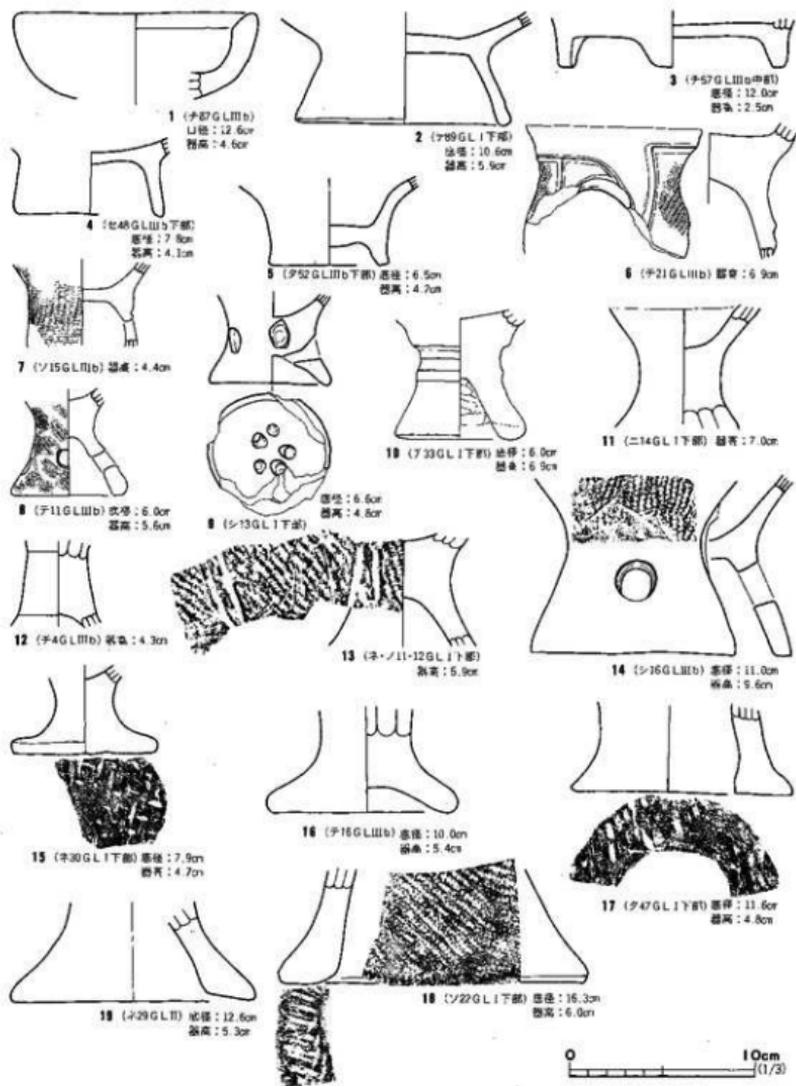


圖785 包含層出土遺物 (145) Ⅲ群5類土器

第2章 遺構と遺物

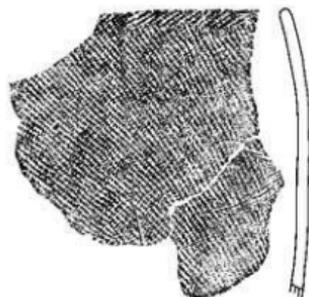
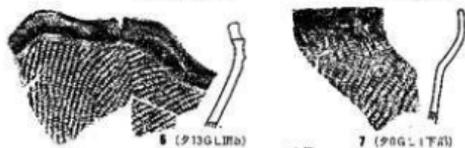
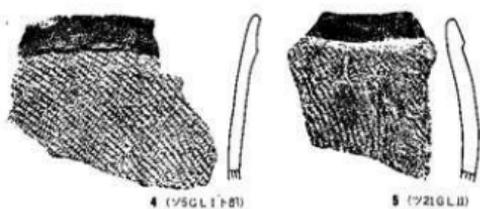
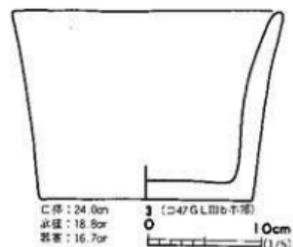
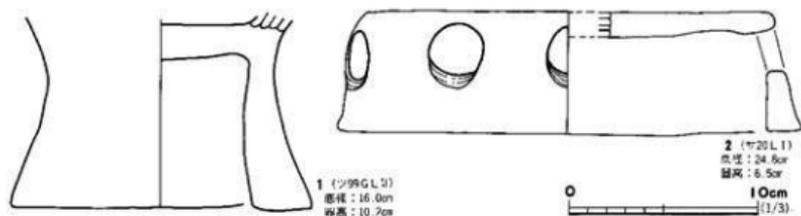


図786 包含層出土遺物 (146) 川野5類土器

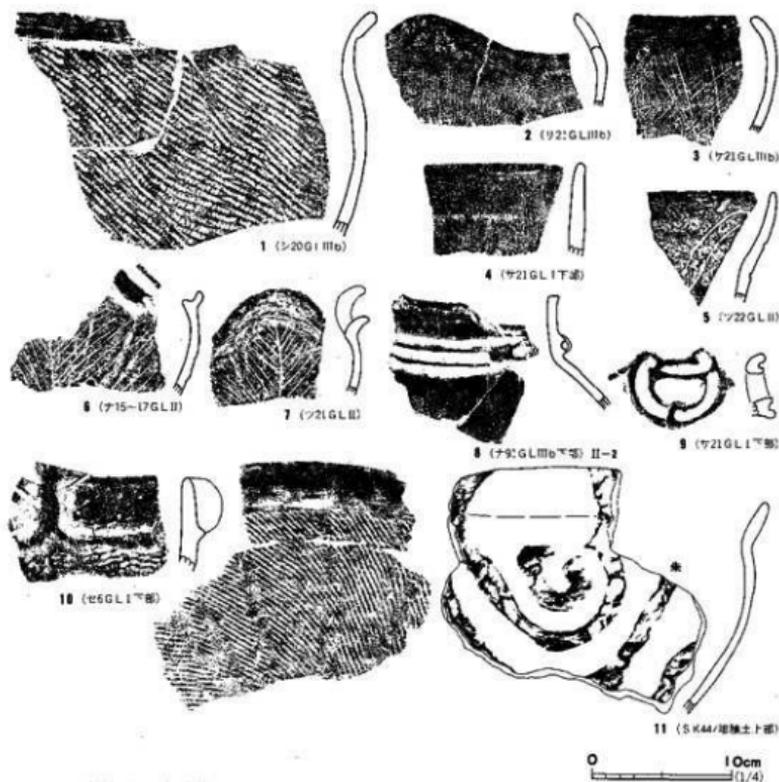


図787 包含層出土遺物 (147) III群5類土器

されていることから、III群4類土器に伴うものと考えている。図786-2は器台で、8ヶ所の円孔を有するものと考えている。同図3は無文の鉢である。同図4~12、図787-1は縄文の施された粗製土器で、図786-8は原体を口縁部直下は横、それ以下は縦に回転させている。図787-2~4は、条線文が施されている。同図6・7は丸を持つ波状口縁部の破片で、沈線で葉脈状の文様が描かれている。同図8には小さな橋状の把手が付き、同図10の口縁部には板状に突出する突起が付けられている。同図11は口縁部が屈曲する浅鉢で、内面には朱で渦巻文が描かれている。

IV 群土器 (図788)

縄文時代後期・晩期の土器である。出土量は極めて少ない。図788-1~10は縄文を地文とし、ここに横位の沈線を多段施している。この沈線は、縦位の短沈線や波状沈線で区切られている。加曾利B1式土器と考えられる。同図11・12は条線文の施されるもので、12では波状文を描い

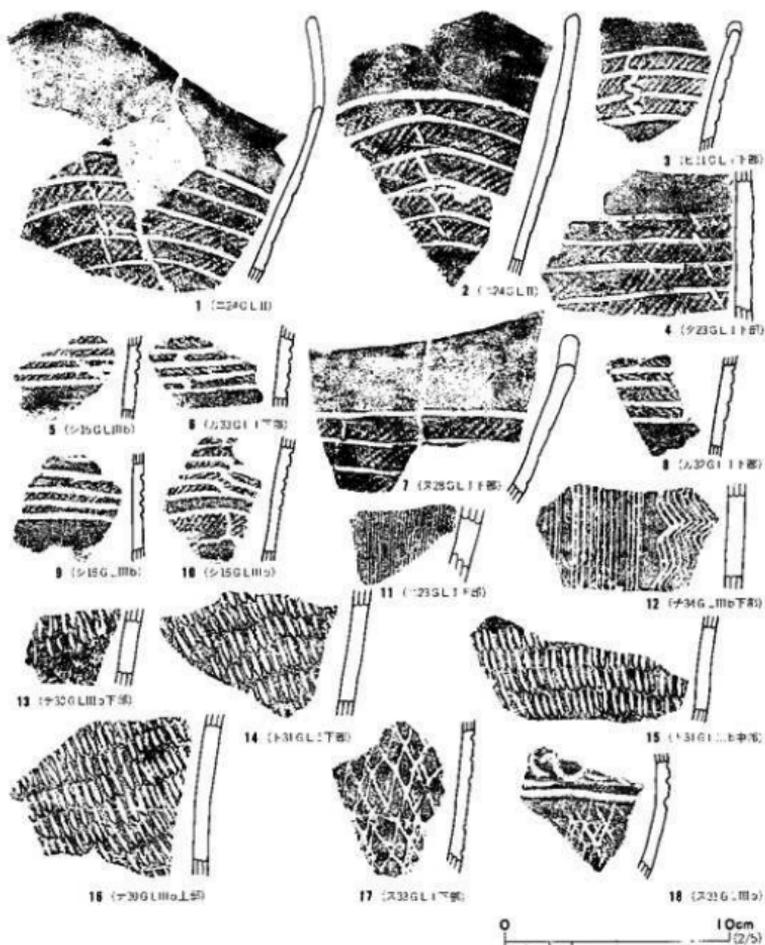


図788 包含層出土遺物 (148) IV群土器

ている。同図13～16は刺突刃が施されている。同図17・18には網目状捺糸文が施され、18には肉彫的な文様が描かれている。17・18は人河C1式に比定されよう。

石 器 (図789～846)

法正瓦遺跡の遺物包含層からは、約2,350点の石器が出土した。出土石器の器種には、ナイフ形石器・石鏃・尖頭器・石錐・石鎧・石匙・搔器・不定形石器・石核・磨製石斧・剥片・打製石斧・鏃器・石錘・有溝石器・石皿・磨石が見られる。この他に、三脚石器や垂飾り、器状の石器等があるが、これらについては石製品として報告する。石器の内訳は、剥片が約950点と最も多く、磨石が約710点と、この2器種で出土石器の70%強を占めている。

ナイフ形石器 図789-1が比定される。石刃を素材とするもので、刃潰し加工は石刃を斜めに切断するように加えられている。

石 鏃 図789-2～7の6点である。6は石鏃の未製品と考えている。その他は、すべて凹基の石鏃である。7の先端部は欠損している。

尖頭器 図789-8・9の2点である。石鏃に比べて厚い剥片を素材としている。調整剥離は粗く、8は先端を尖らせているだけである。

石 錐 図789-10～14、図823-8の6点である。厚い剥片を素材とし、刃部の長さは短いものが多い。13の刃部先端は磨滅が著しく、剥離痕の稜線は消滅している。

石 皿 図789-15～図790-5の8点である。厚い縦長剥片を素材とするものが多く、表裏面に調整を加え、丁寧に作られている。刃部は片刃をなすものが多い。図790-5の側縁部は、僅かに括れている。

石 匙 図790-8～10、図791-1～図793-2、図794-11・12、図801-1、図806-1・2、図814-1、図815-1の36点である。図790-8・9、図791-2、図815-1は柳葉形状をなし、尖頭器とも考えられる。しかし、先端部の作り出しは弱く、器体も薄いことから石匙に含めた。これらの石匙の刃部は両刃である。その他の石匙には、縦長と横長のものがある。石器の長軸と直角をなすように摘みが作られているものを横長石匙、石器の長軸と一致、あるいは平行するように摘みが作られているものを縦長石匙とした。横長石匙は、図792-10～図793-2の5点だけで、他はすべて縦長石匙である。縦長石匙の刃部は、側縁に鋭角、他側縁と下縁に搔器に近い鈍角の刃部を作り出すものが一般的である。横長石匙の図792-12と図793-1は、下縁部に鋭角、上縁部の一部に鈍角の刃部を作り出している。

搔 器 剥片の縁辺部に、鈍角の刃部を連続して作り出しているものを搔器とした。中には、摘みさえ付けば石匙に分類し得るようなものも見られる。図790-11、図793-3～図794-10、図795-1～6、図796-1～3、図797-1、図799-1～3、図800-15、図802-1、図803-1、図

804-14・15, 図805-12, 図806-3, 図809-1・13, 図814-2・6, 図820-1を考えている。総数46点を数え、定型的な石器の中では最も出土量が多い。

図793-11は分厚い剥片を素材とし、全周縁部に刃部を作り出した搔器である。形態的な特徴から、図789-1のナイフ形石器に伴う可能性がある。刃部が作り出される部位は、ほぼ全周縁部に作られるものが5点、下縁部に作られるものが11点、側縁部に作られるものは26点である。図794-7, 図797-1, 図799-1・2は下縁部が尖るもので、この部分に鈍角な刃部を作り出している。

不定形石器 剥片の周縁の一部に、調整が加えられたものを不定形石器とした。総数314点出土し、剥片石器の中では最も数が多い。図799-10, 図801-10・14は側縁に鈍角な刃部が作られたもので、搔器に近い石器である。図800-10は、表裏面全面に粗い調整が加えられている。石筈と考えるのが妥当かも知れない。

不定形石器の中には、定型的な石器の未製品と考えられるものが見られる。図795-10, 図796-5, 図798-16, 図801-8・11, 図808-7は、石鏃あるいは尖頭器の未製品であろう。先端部を尖らすために、調整を加えているものが多く見られる。図798-5は、棒状の刃部を作り出そうとしていることから、石鏃の未製品と考えている。図798-10, 図803-8, 図811-2は、石鏃の未製品と考えている。いずれも、摘み部を作り出すために調整を加えている。これらの石器未製品については、素材とした剥片自体の形状から、最終的に意図する石器は作れないものと考えている。制作途中で放棄された失敗作であろう。

不定形石器で、鈍角の刃部が作り出されているものは21点、ほぼ同じ部位に表裏面から調整を加えて刃部を作り出しているものは27点である。器面に粗い調整が加えられるものは18点である。図810-4の下縁部は磨滅がいちじるしく、剝離痕の稜線は消滅している。

石核 図805-8, 図820-2, 図822-9, 図823-9～図825-3・5, 図827-3・6・7の37点である。この中には、分厚い剥片を素材とするものが16点ある。粗い調整が施された不定形石器の中で、図803-5・10は石核とすべきかも知れない。石核の形態は、多面体をなすものが7点(図824-1, 図825-6・9, 図826-4, 図827-3・7)である。その他の石核は、側縁部に稜線が認められ、チョッピングツール状をなしている。

磨製石斧 図828-1～図830-7の42点である。図828-11は、表裏面が顕著に磨かれていることから磨製石斧と考えたが、形態は不明である。その他の磨製石斧は、すべて定角式の磨製石斧である。図829-10, 図830-3は楕円形状の礫に僅かに磨きを加えただけの石斧で、図830-3の表裏面は凹口状をなしている。図828-16・17, 図829-6・7は小型の磨製石斧、図828-3は器厚が極めて薄い。図829-15の欠損部は磨滅し、中央が窪んでいる。同図1の左側縁下部は、欠損後に磨かれている。

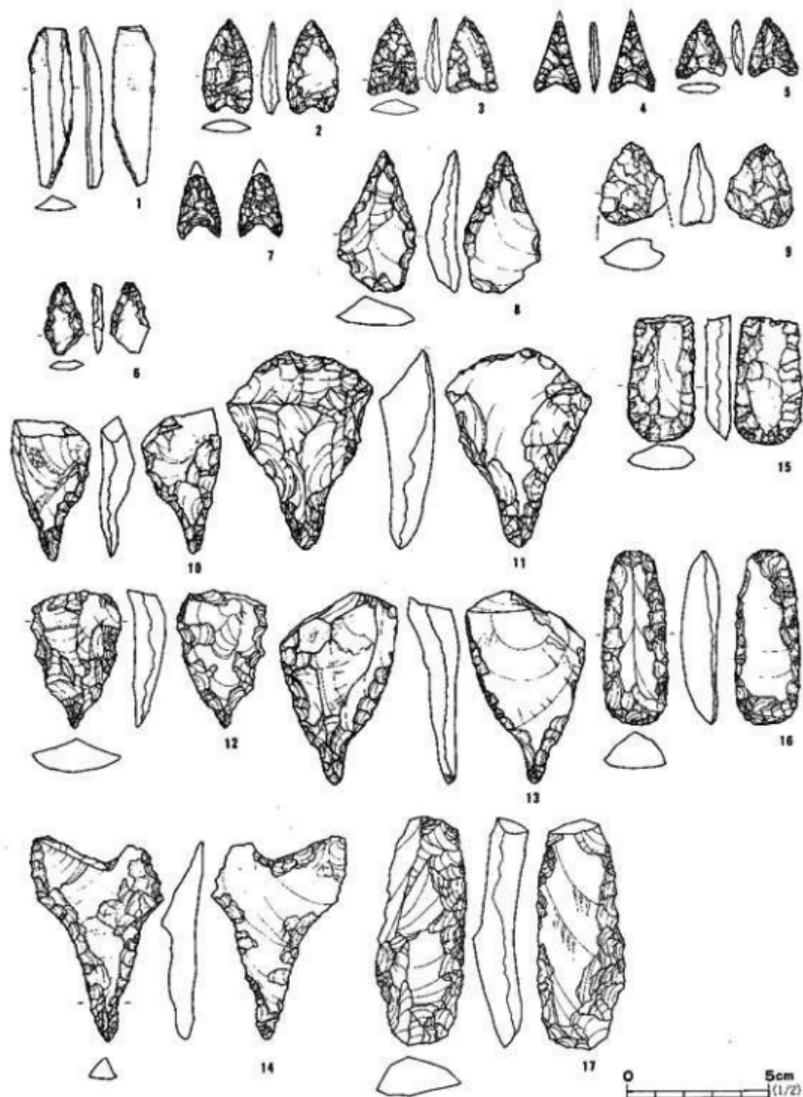


圖789 包含層出土遺物 (149) 石器

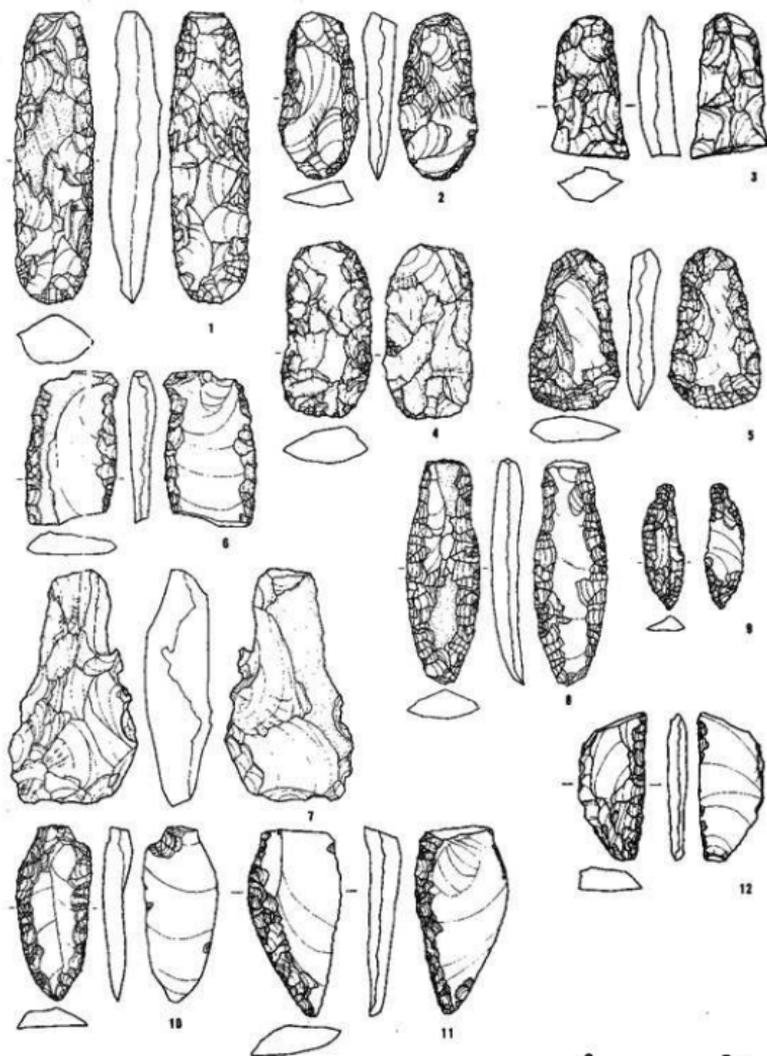


图790 包含層出土遺物 (150) 石器

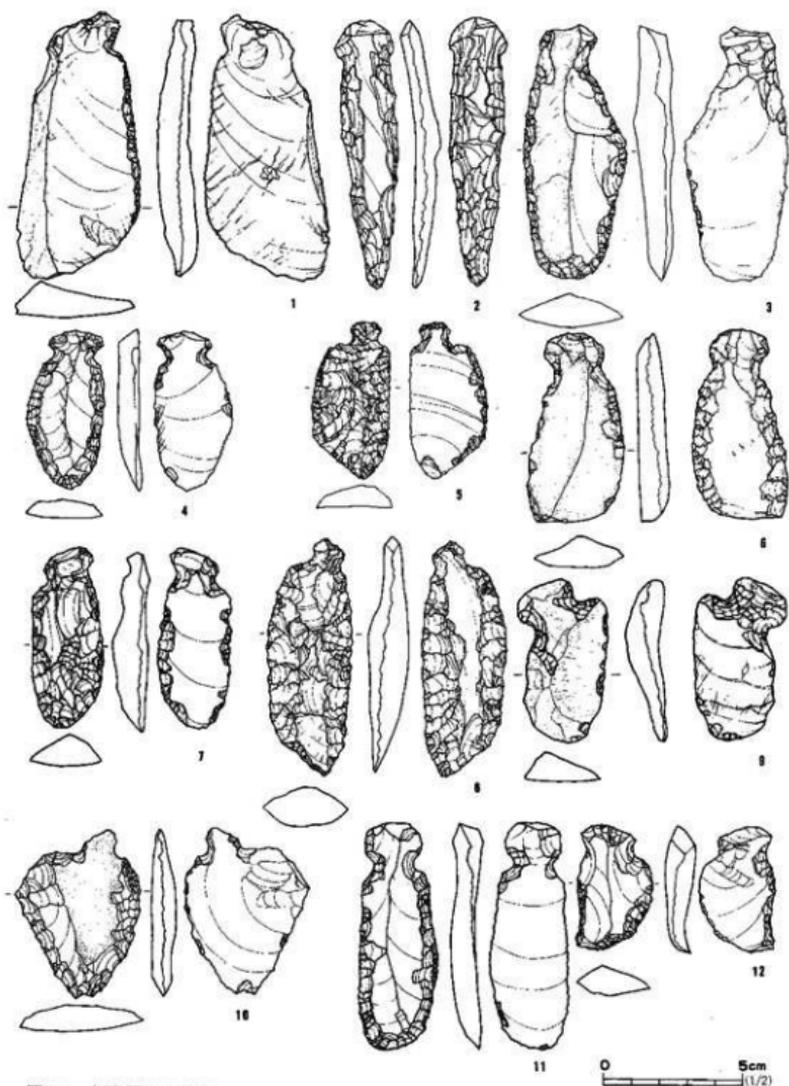


图791 包含層出土遺物 (151) 石器

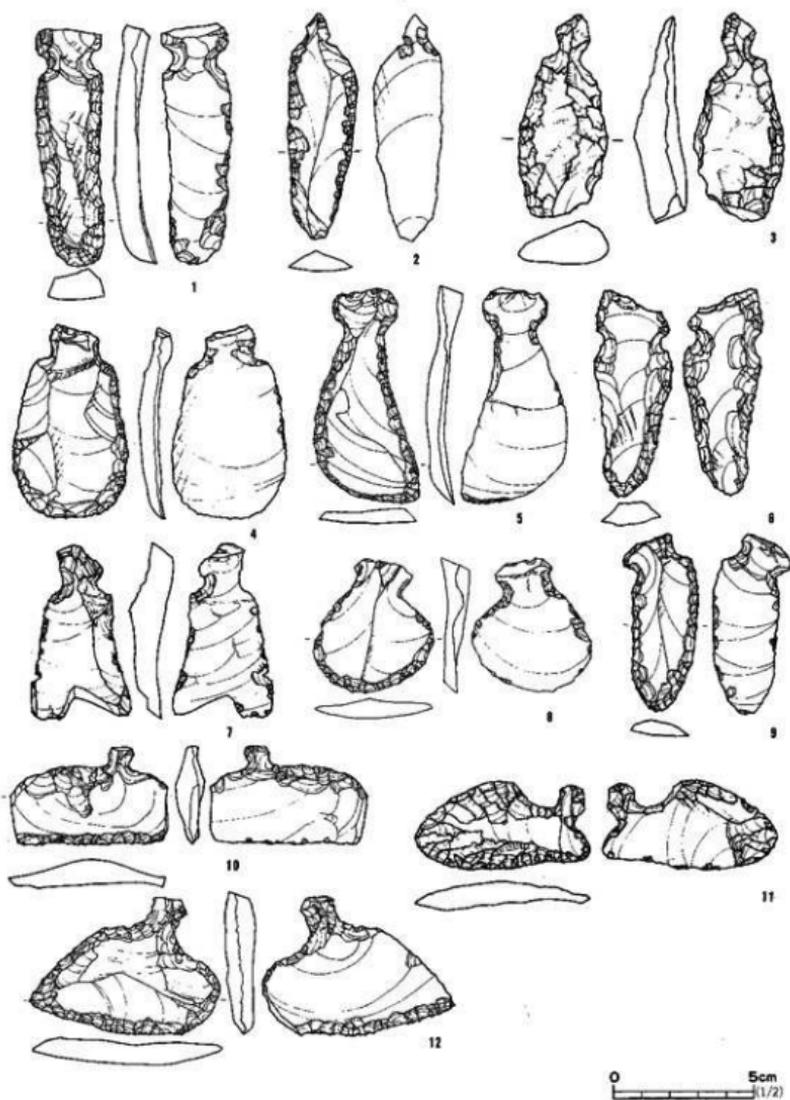


図792 包含層出土遺物 (152) 石器

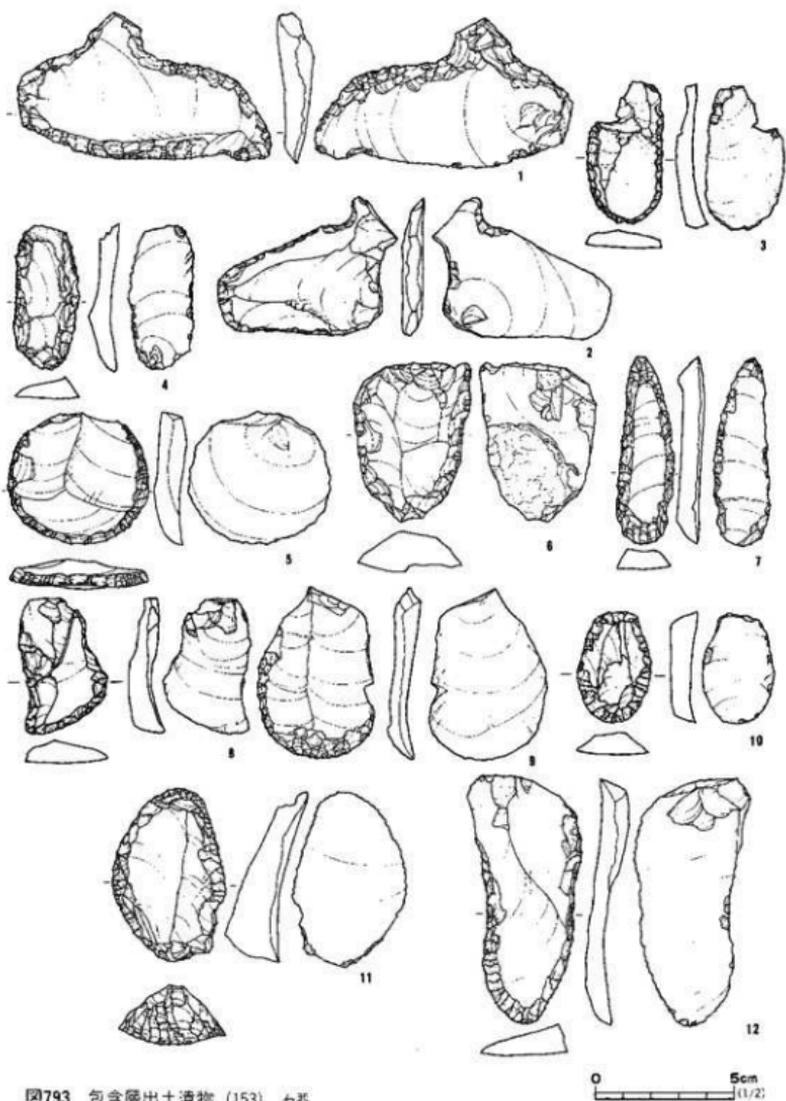


圖793 包含層出土遺物 (153) 石器

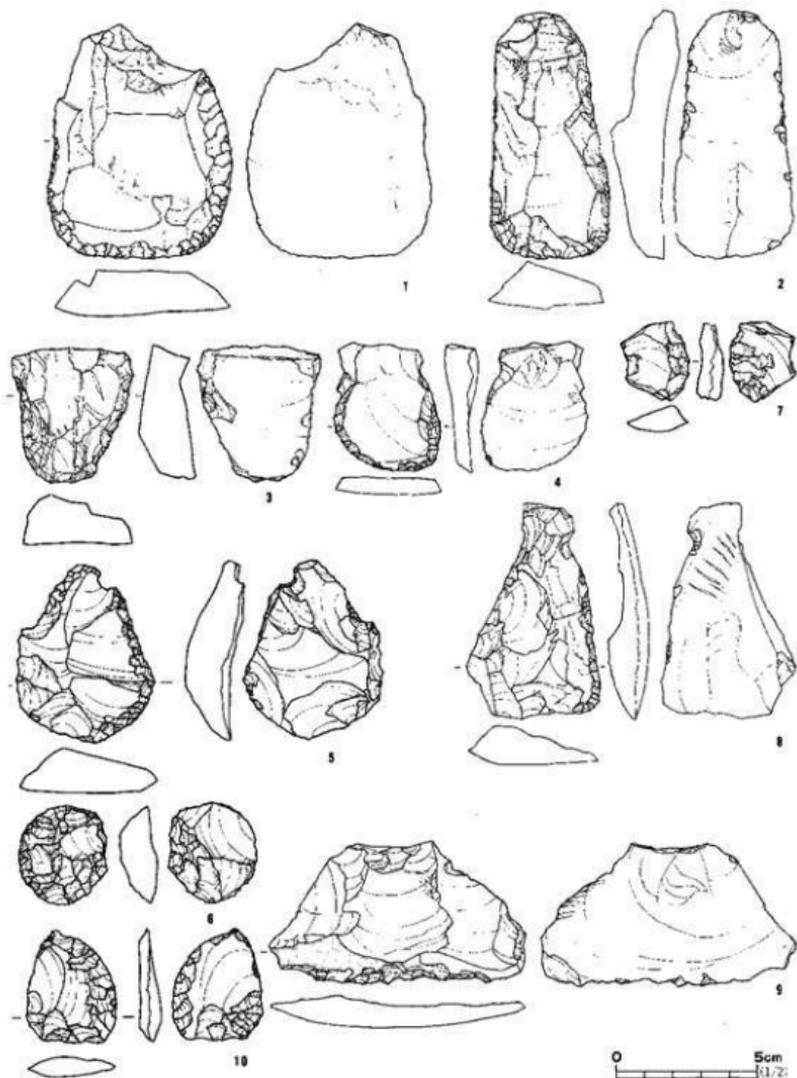


圖795 包含層出土遺物 (155) 石器

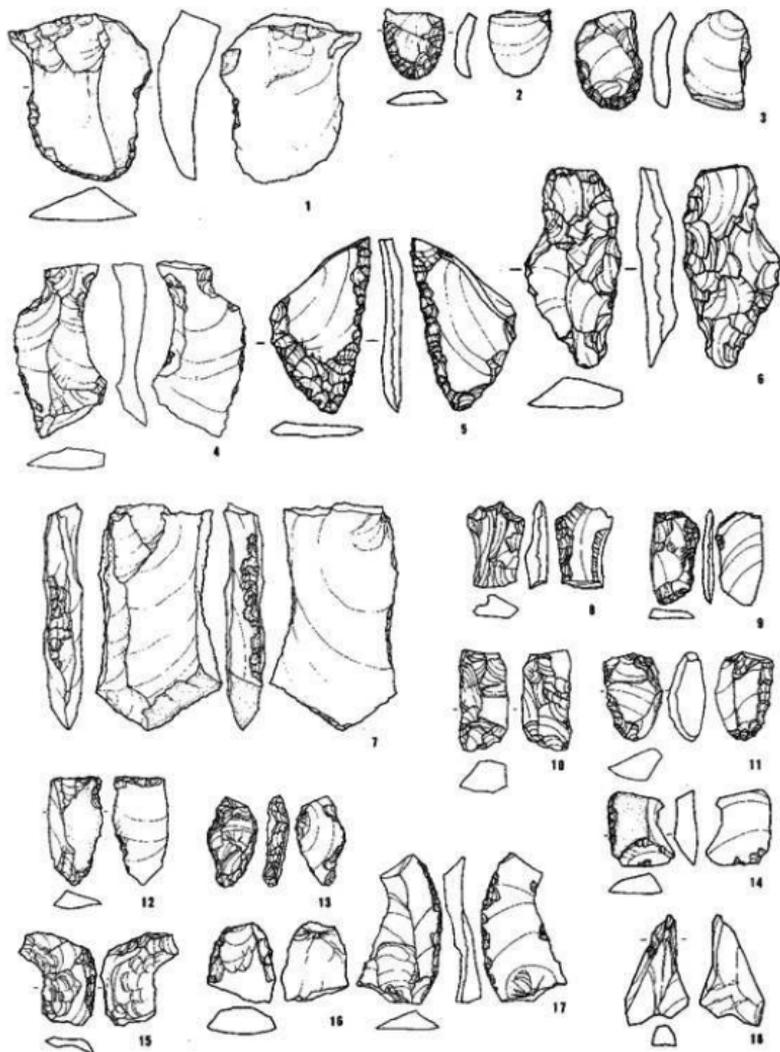


图796 包含層出土遺物 (156) 石器

0 5cm (1/2)

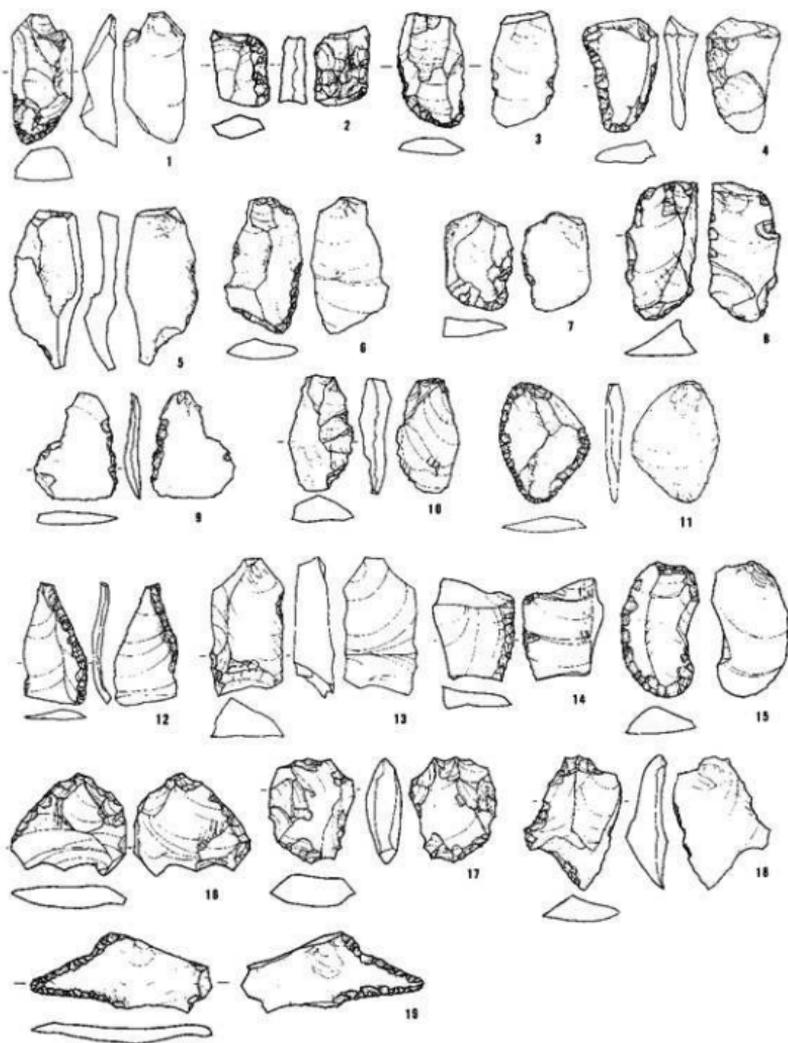


图797 包含層出土遺物 (157) 石器



图798 包含層出土遺物 (158) 石器

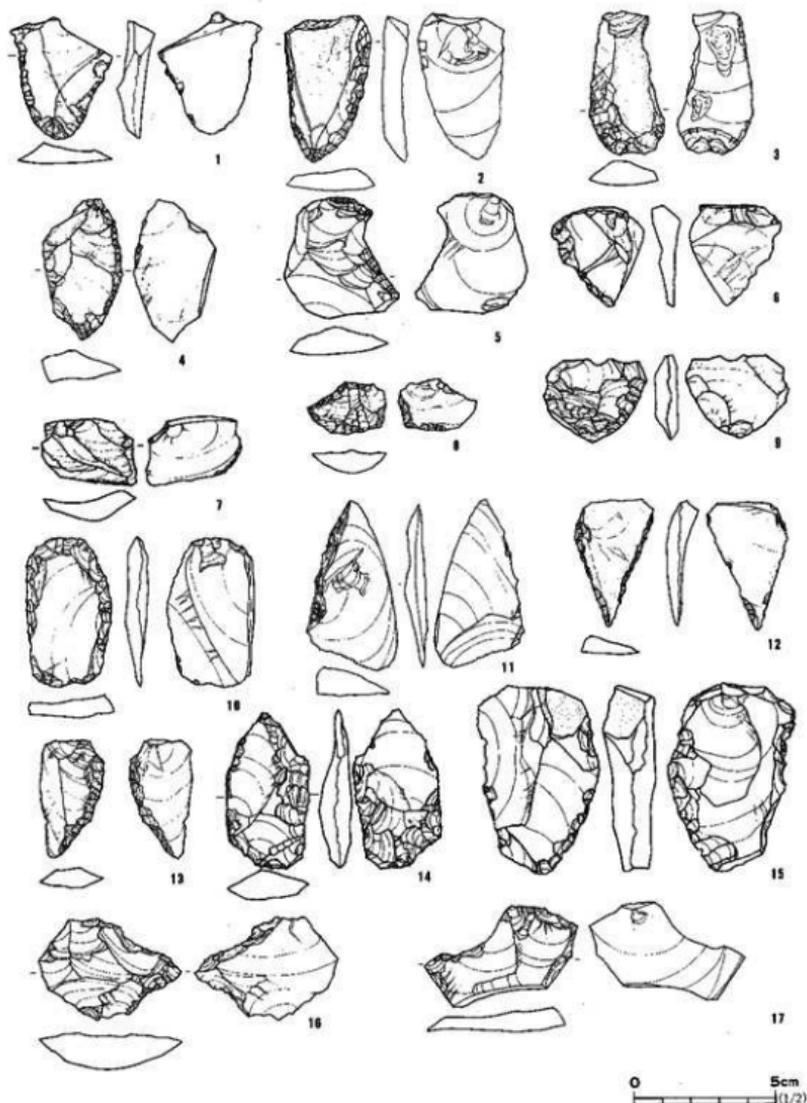


圖799 包含層出土遺物 (159) 石器

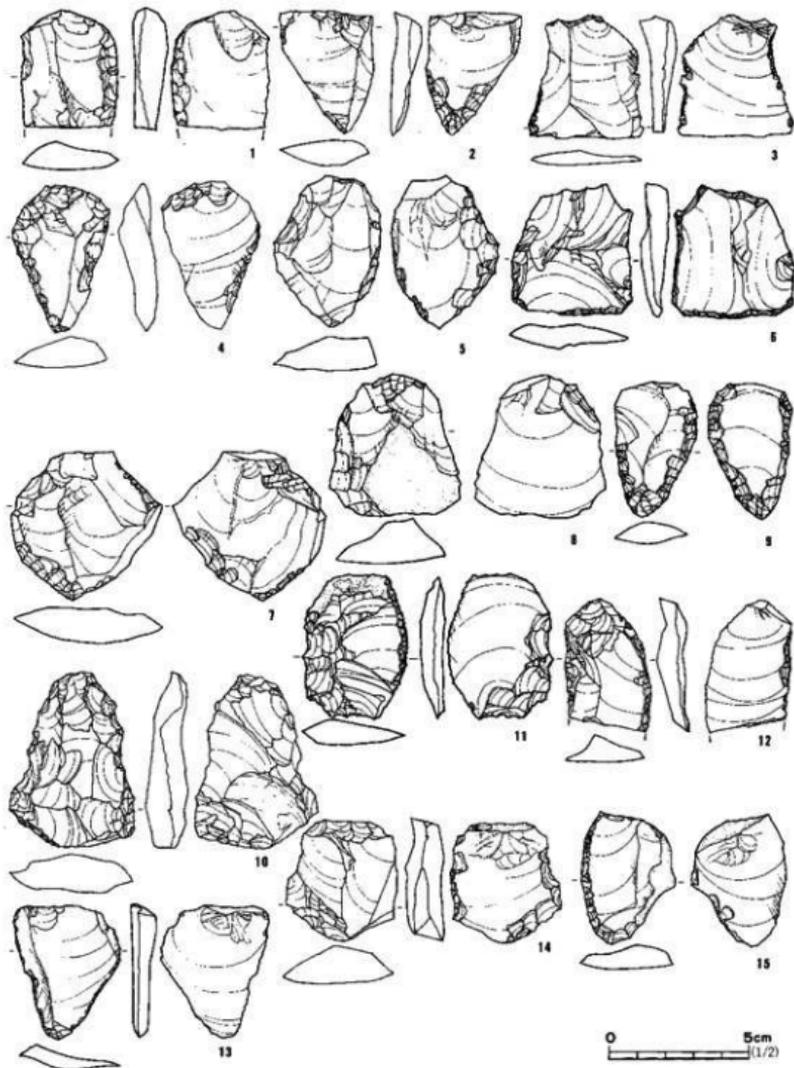


図800 包含層出土遺物 (160) 石器

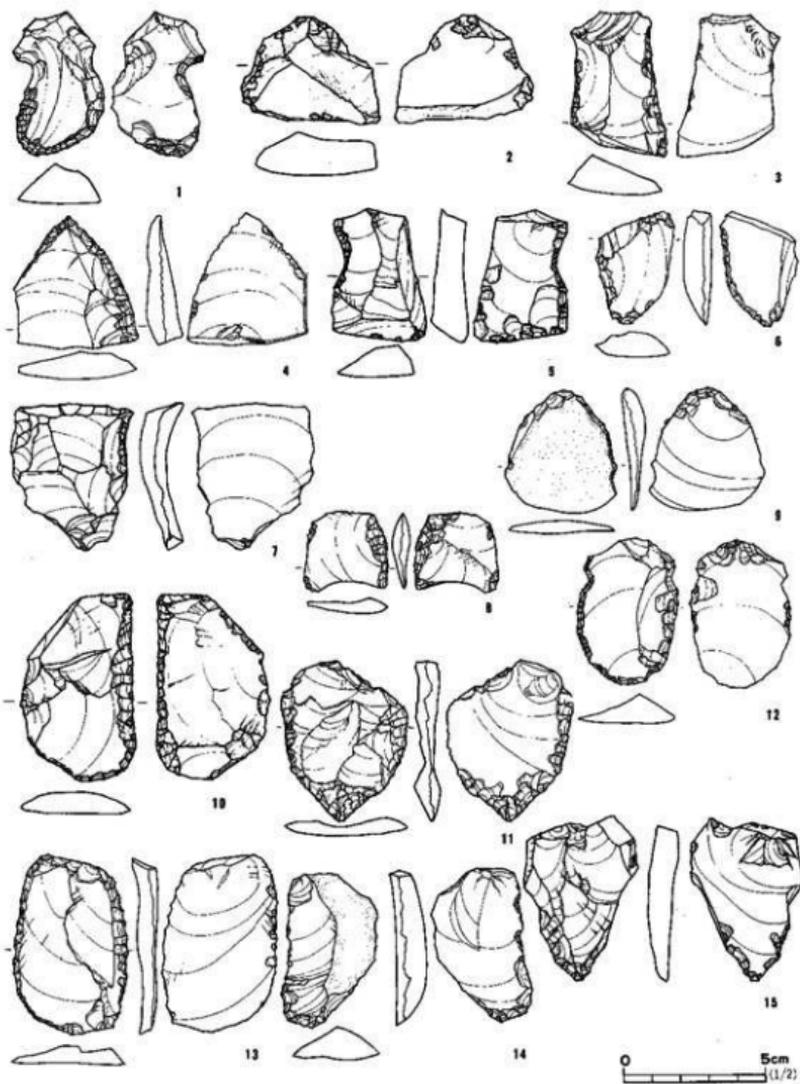


图801 包含層出土遺物 (16) 石器

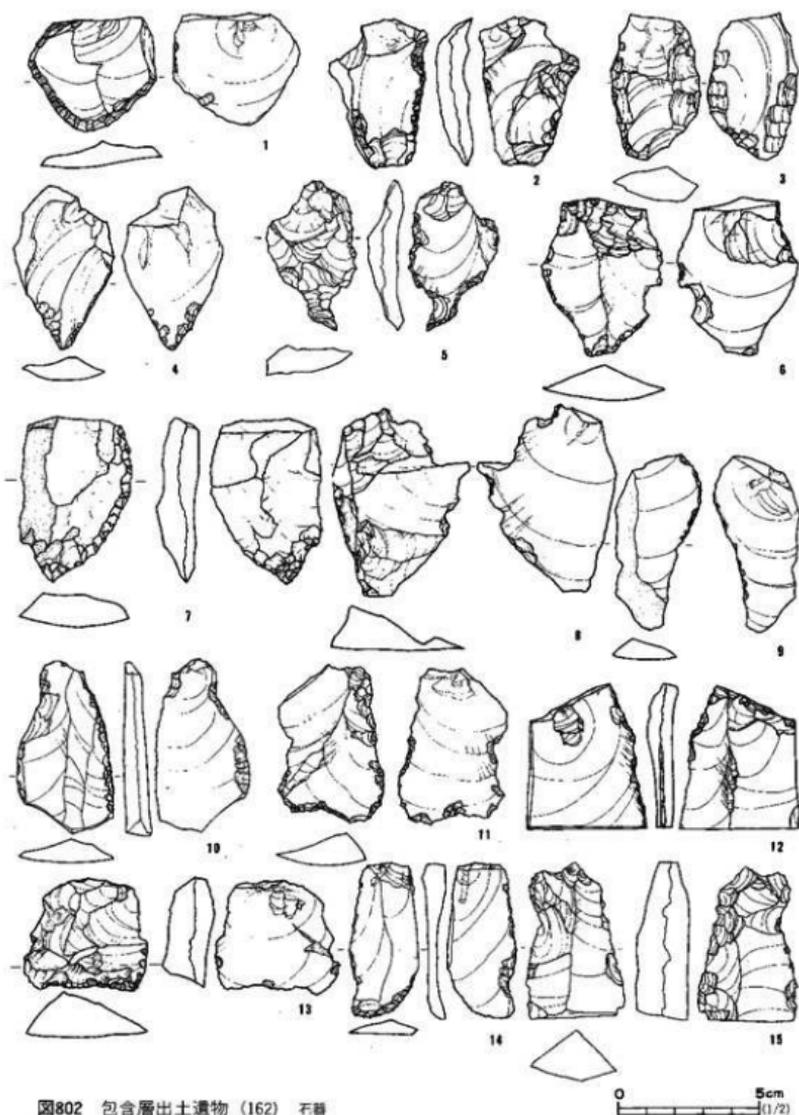


図802 包含層出土遺物 (162) 石器

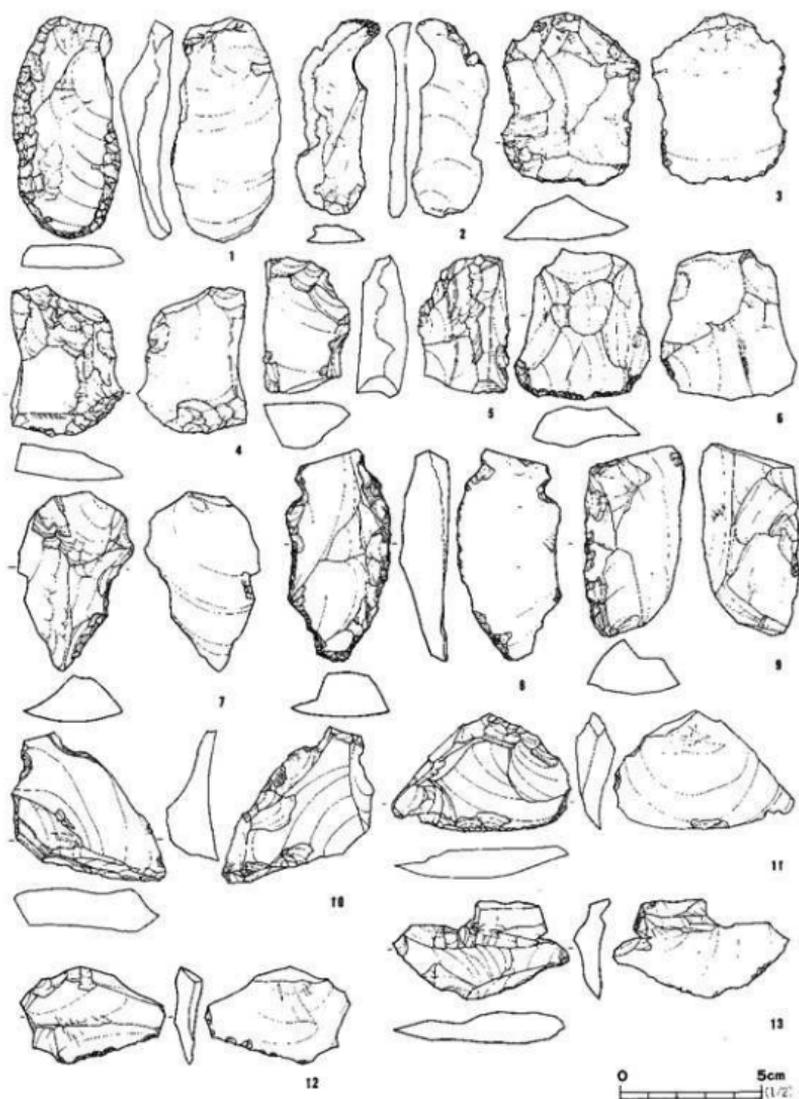


圖803 包含層出土遺物 (163) 石器

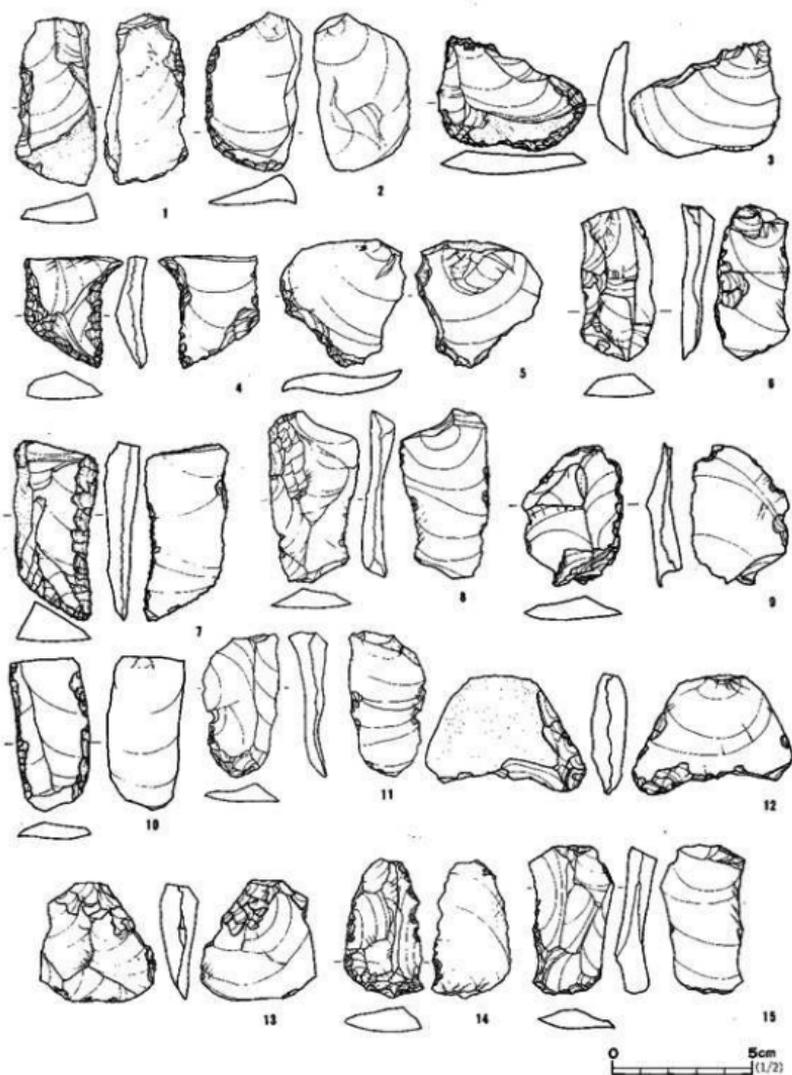


図804 包含層出土遺物 (164) 石器

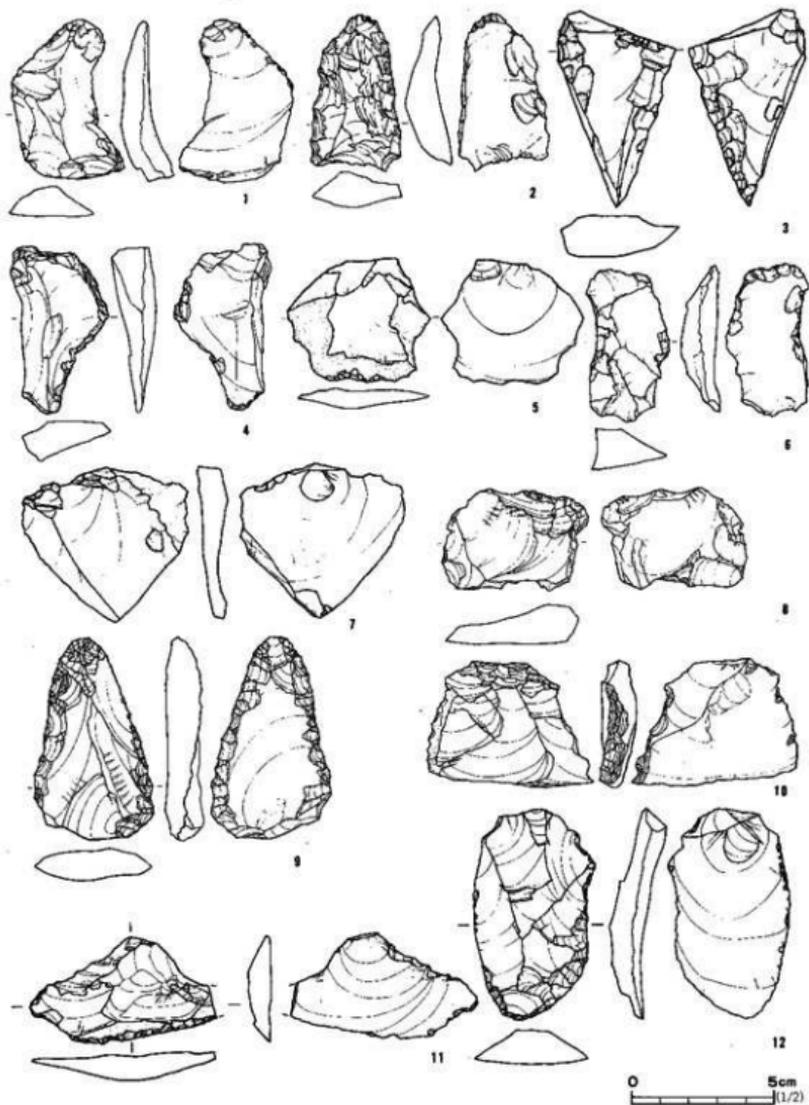


图805 包含層出土遺物 (165) 石器

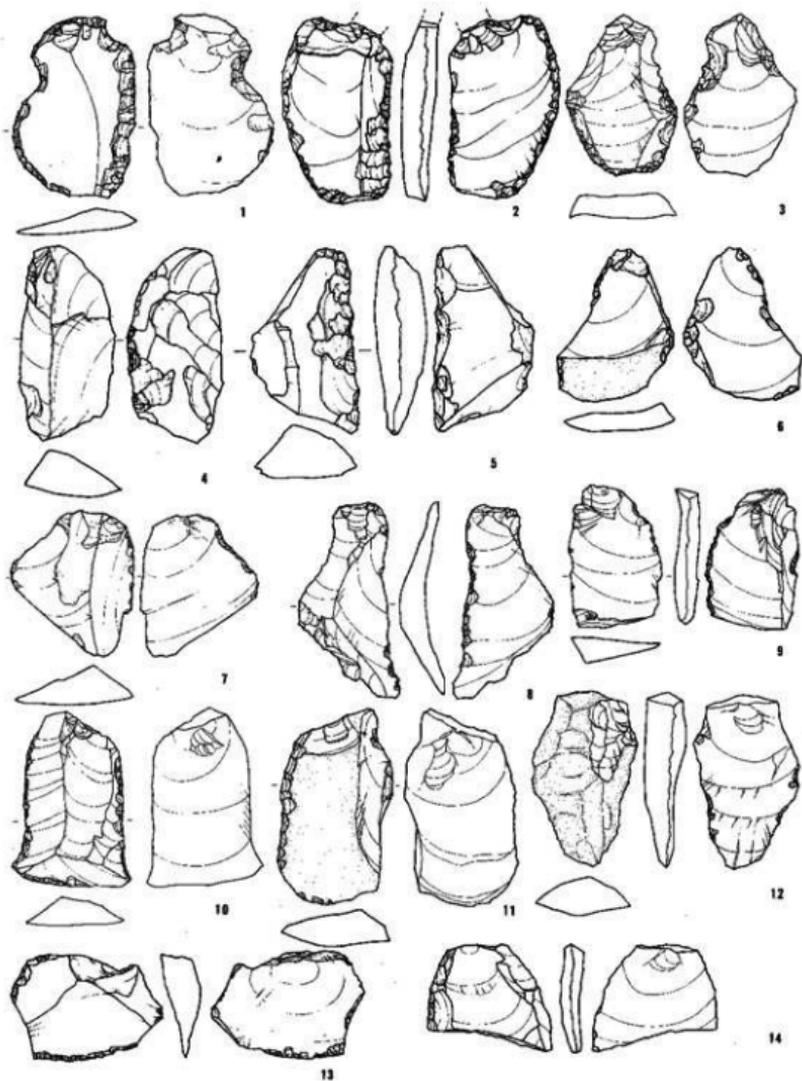


図806 包含層出土遺物 (16) 石器

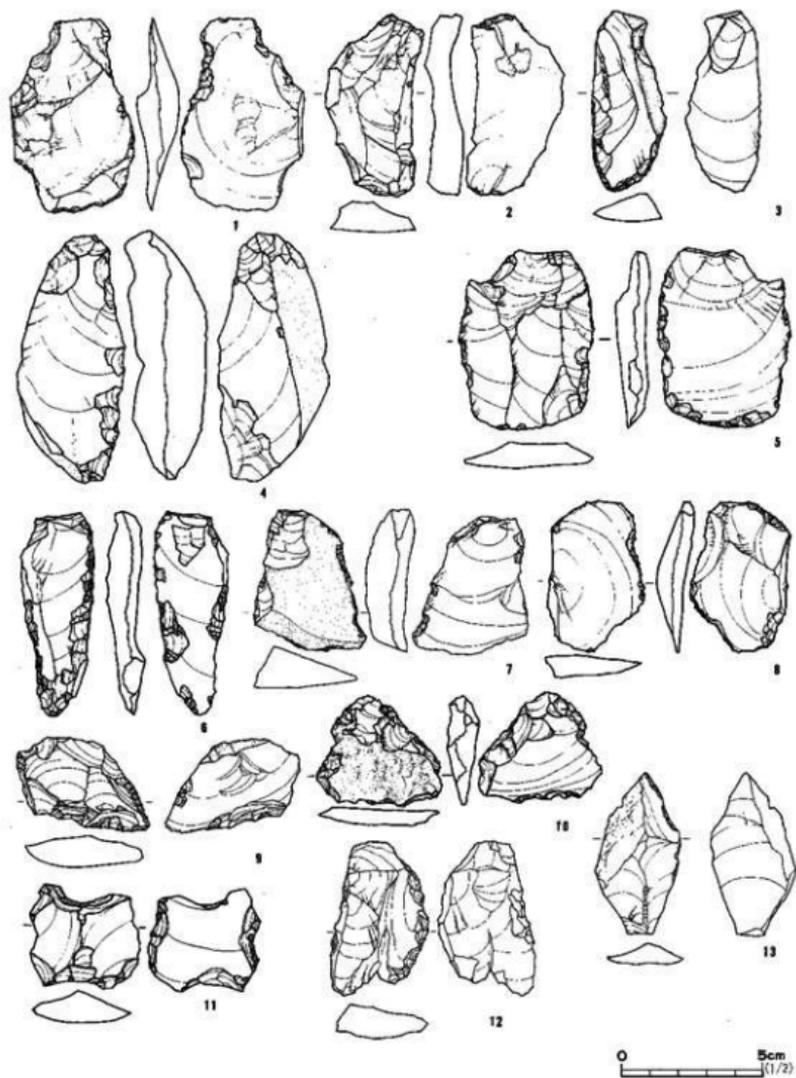


图807 包含層出土遺物 (167) 石器

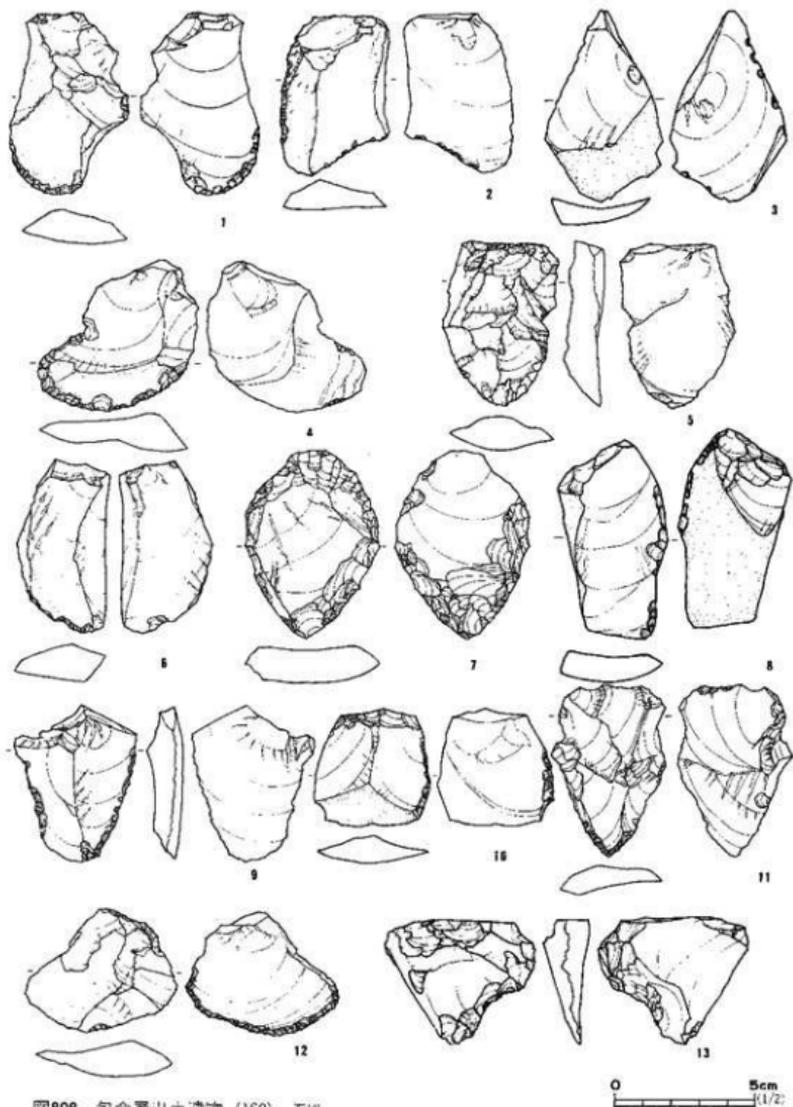


図808 包含層出土遺物 (168) 石器

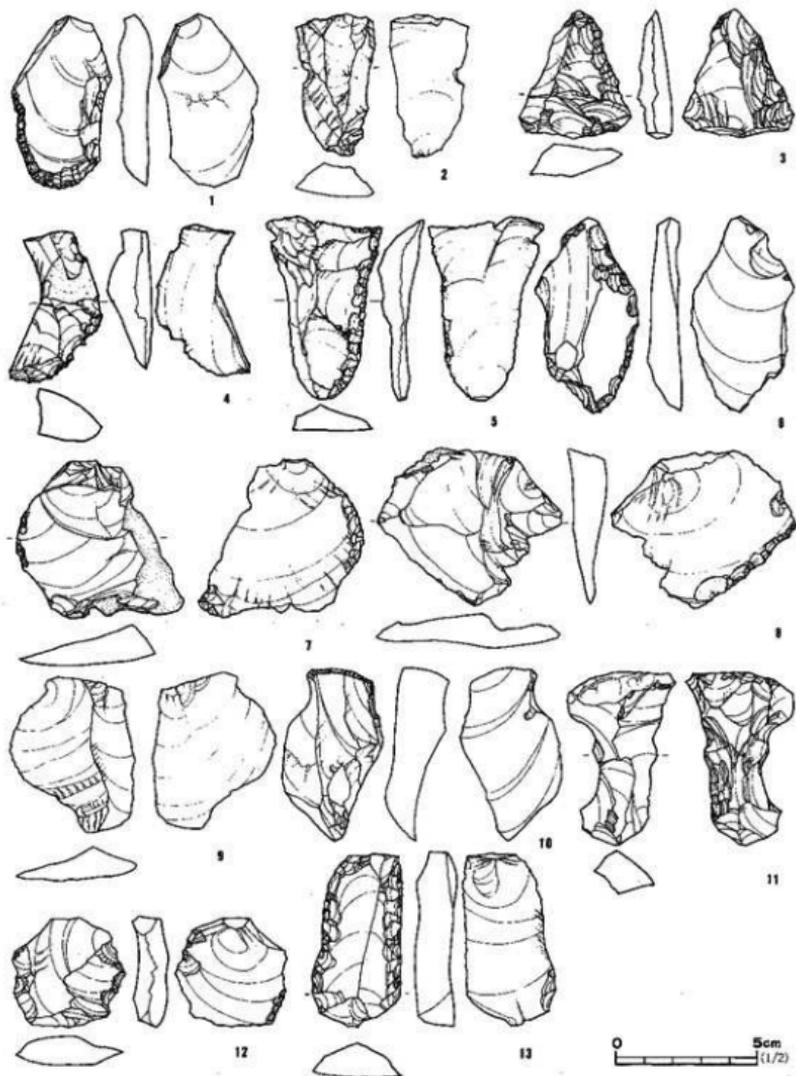


圖809 包含層出土遺物 (169) 石箭

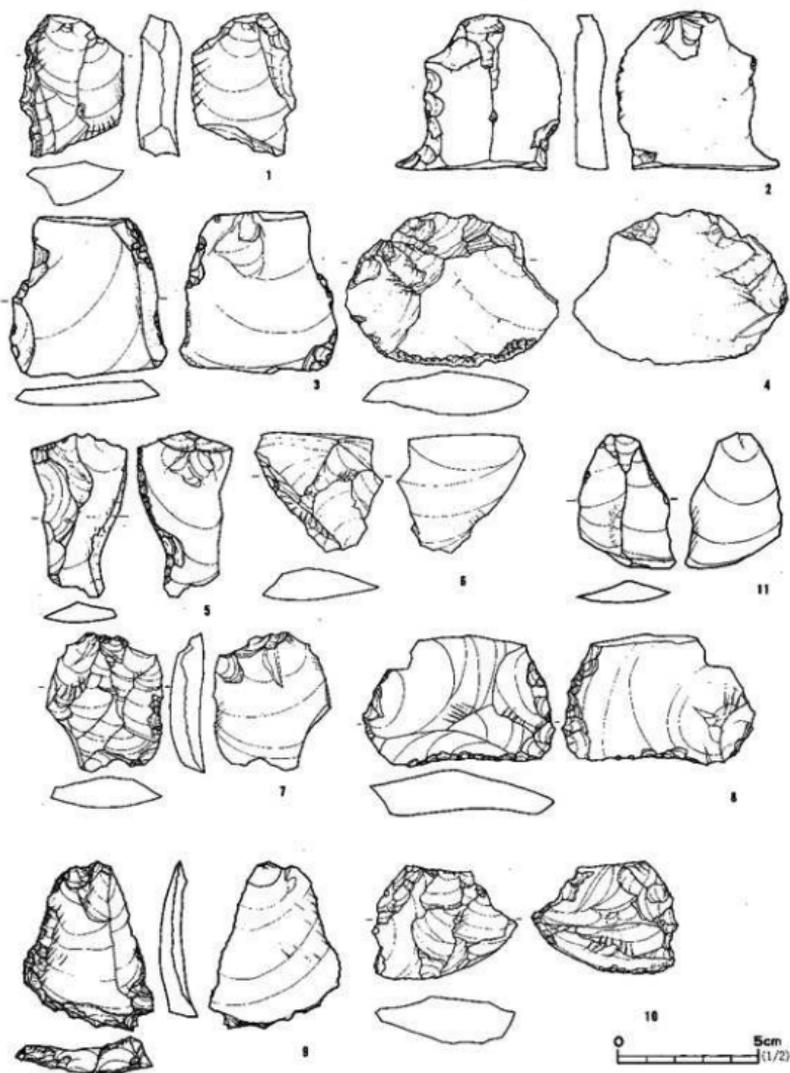


図810 包含層出土遺物 (17) 石器

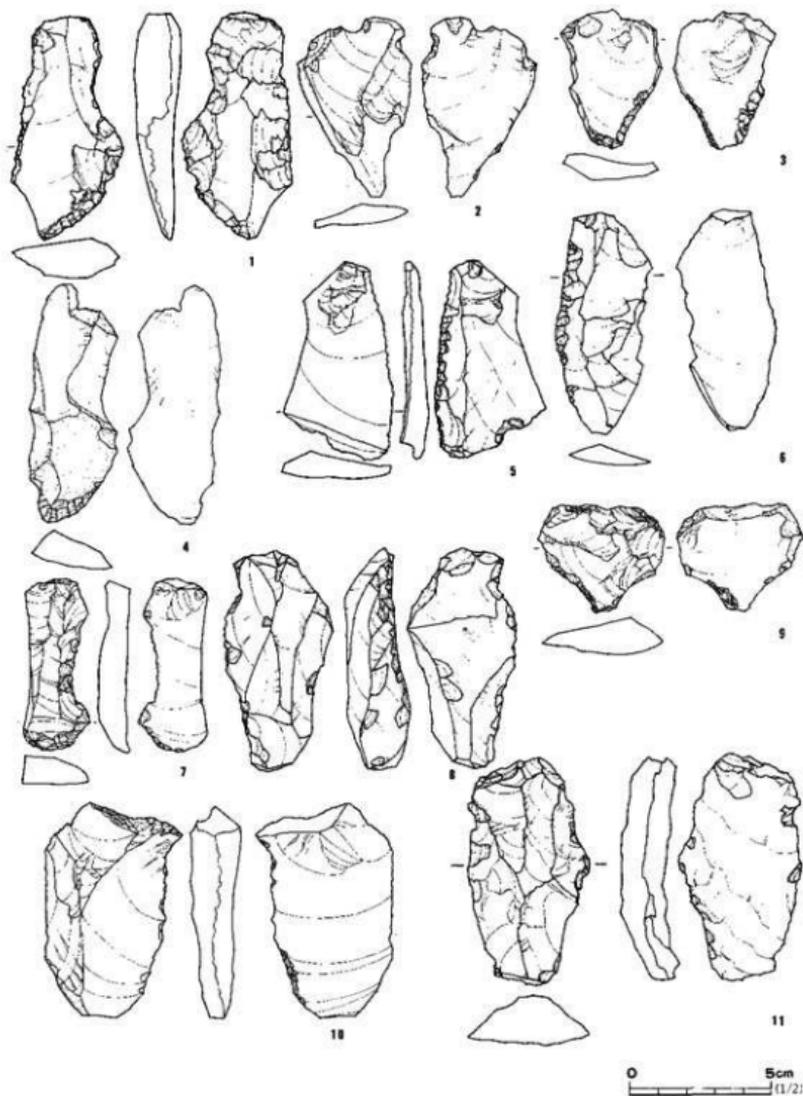


图811 包含層出土遺物 (171) 石器

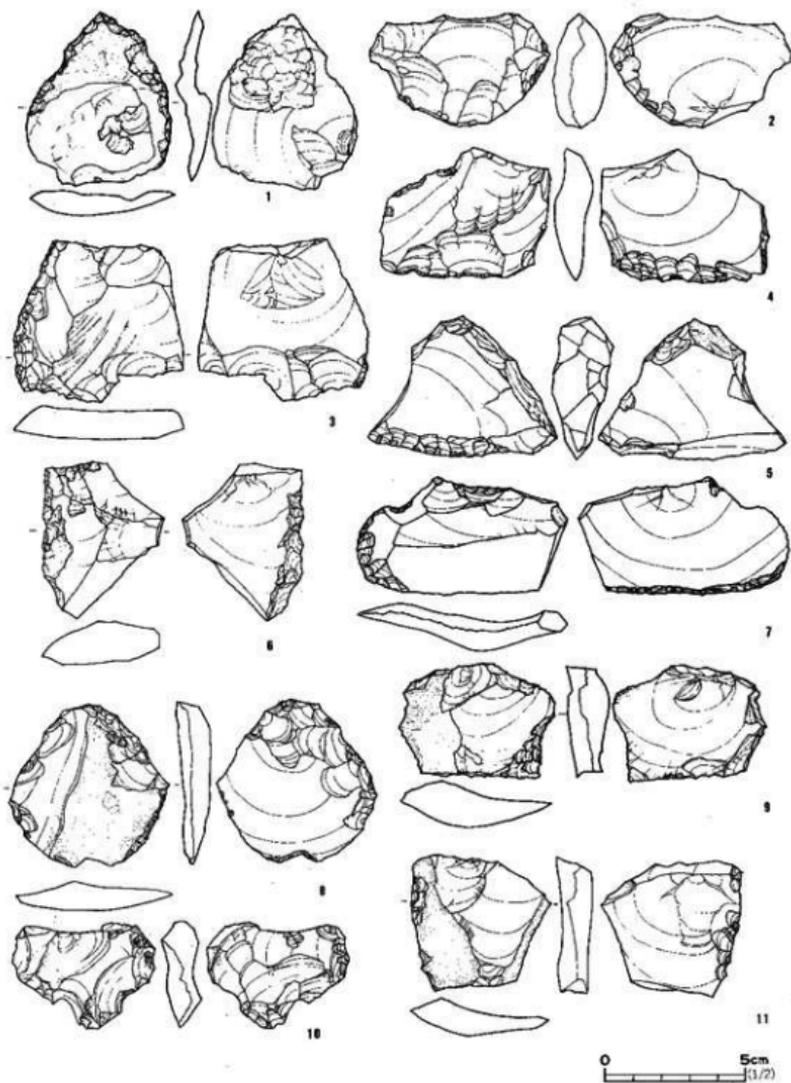


図812 包含層出土遺物 (172) 石器

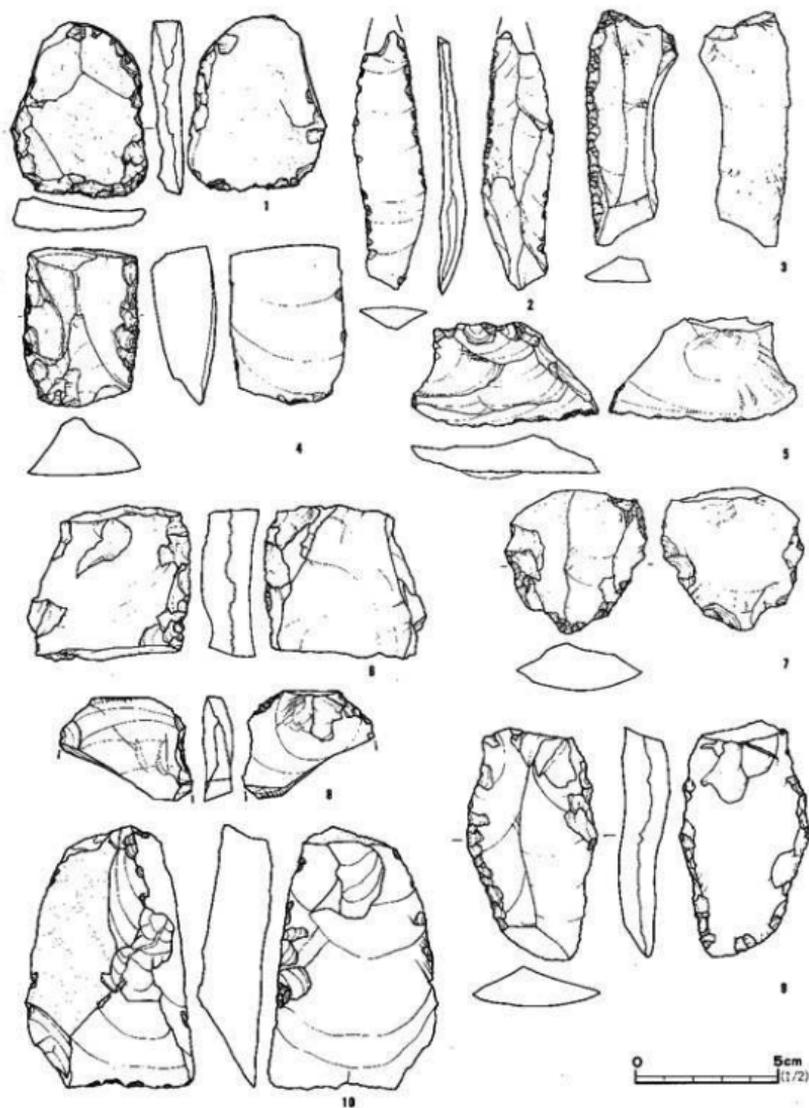


图813 包含層出土遺物 (173) 石器

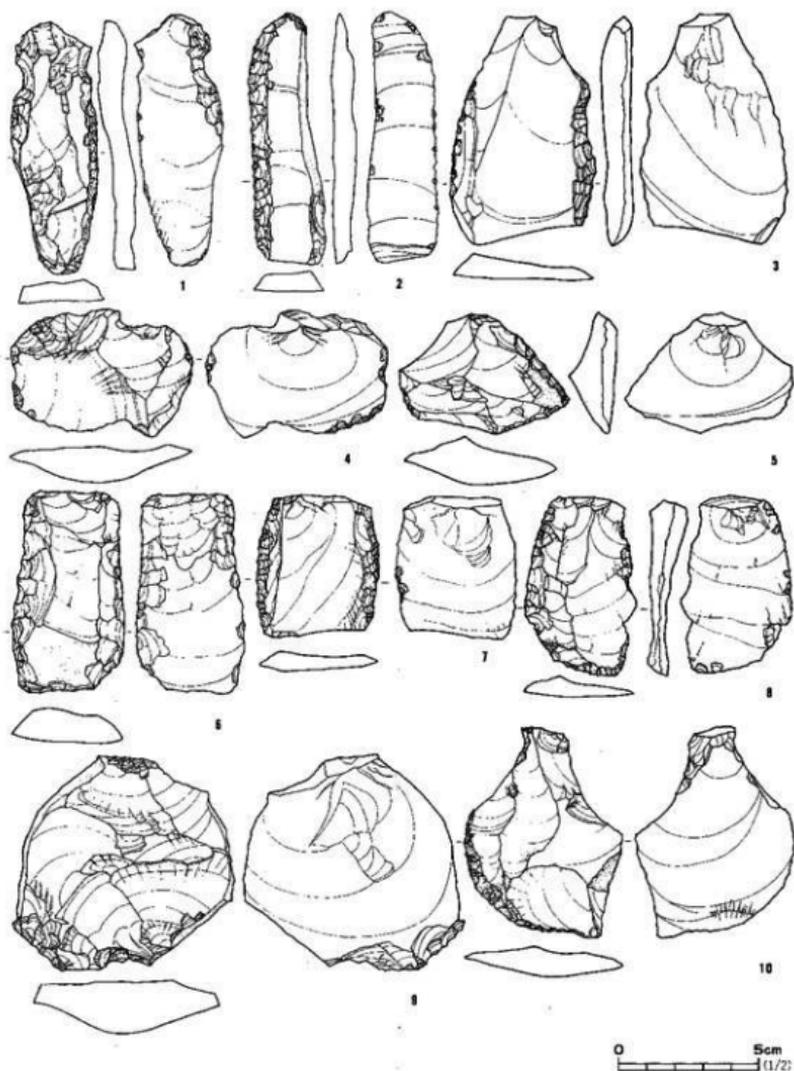


図814 包含層出土遺物 (174) 石器

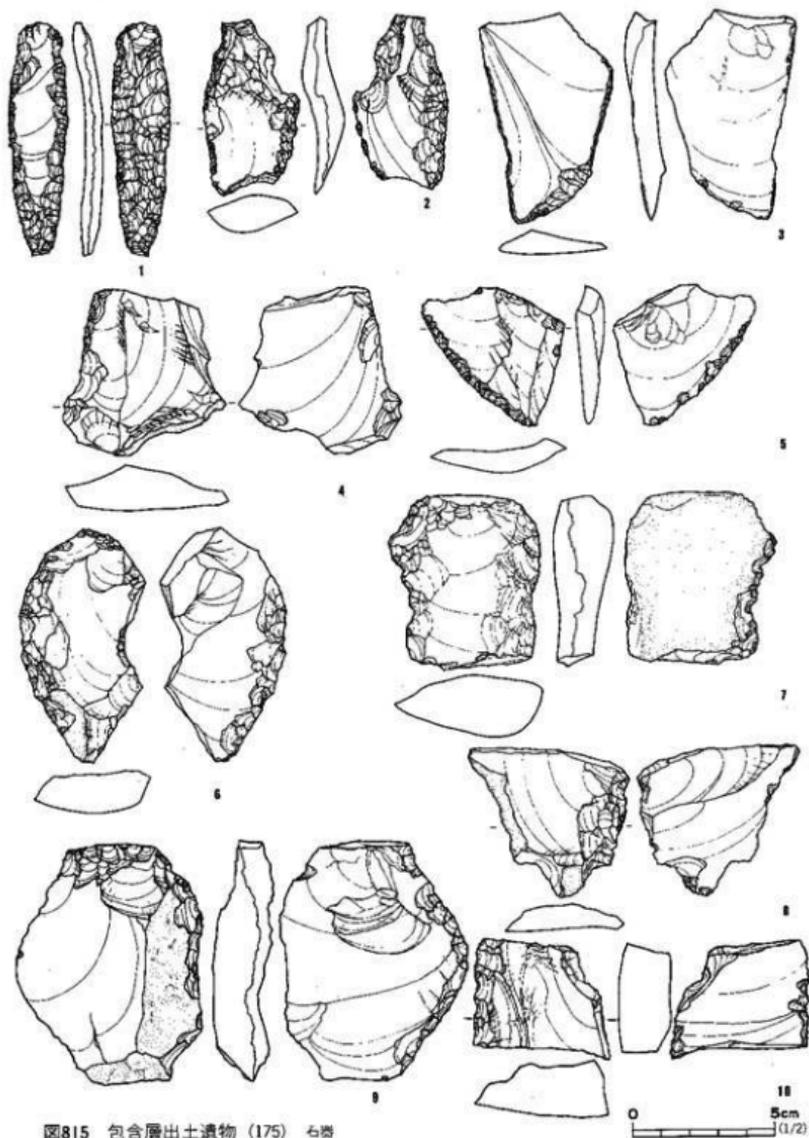


图815 包含層出土遺物 (175) 石器

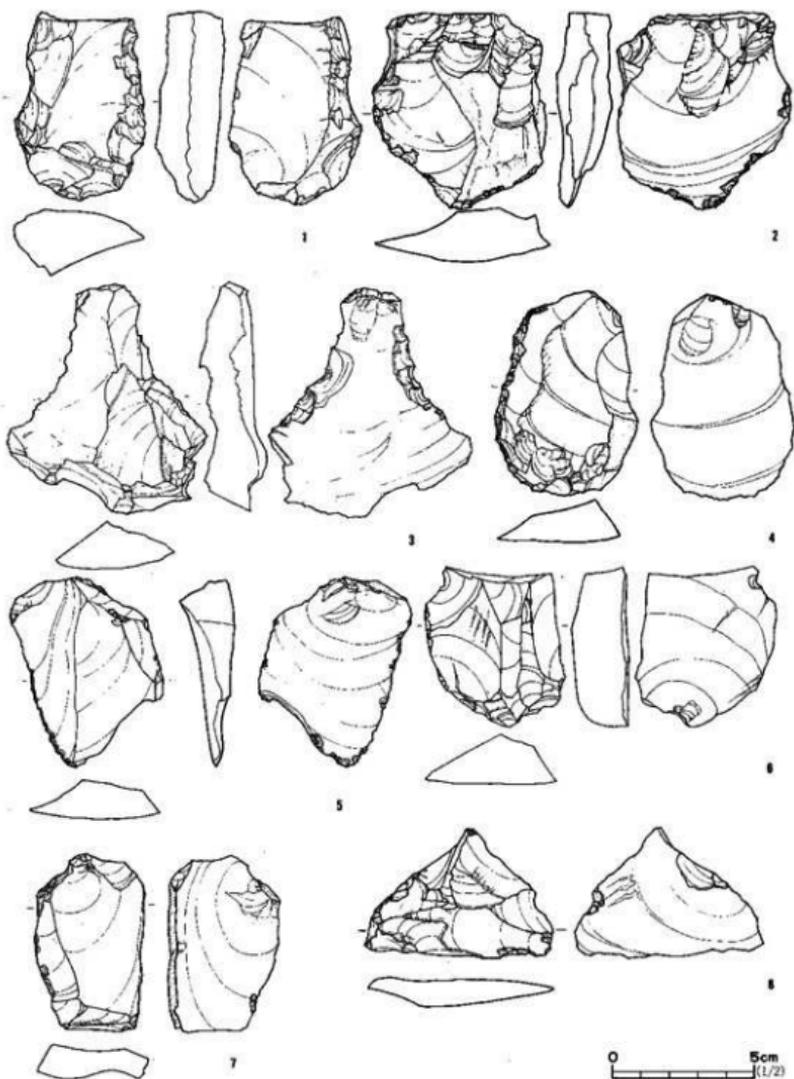


図816 包含層出土遺物 (176) 石器

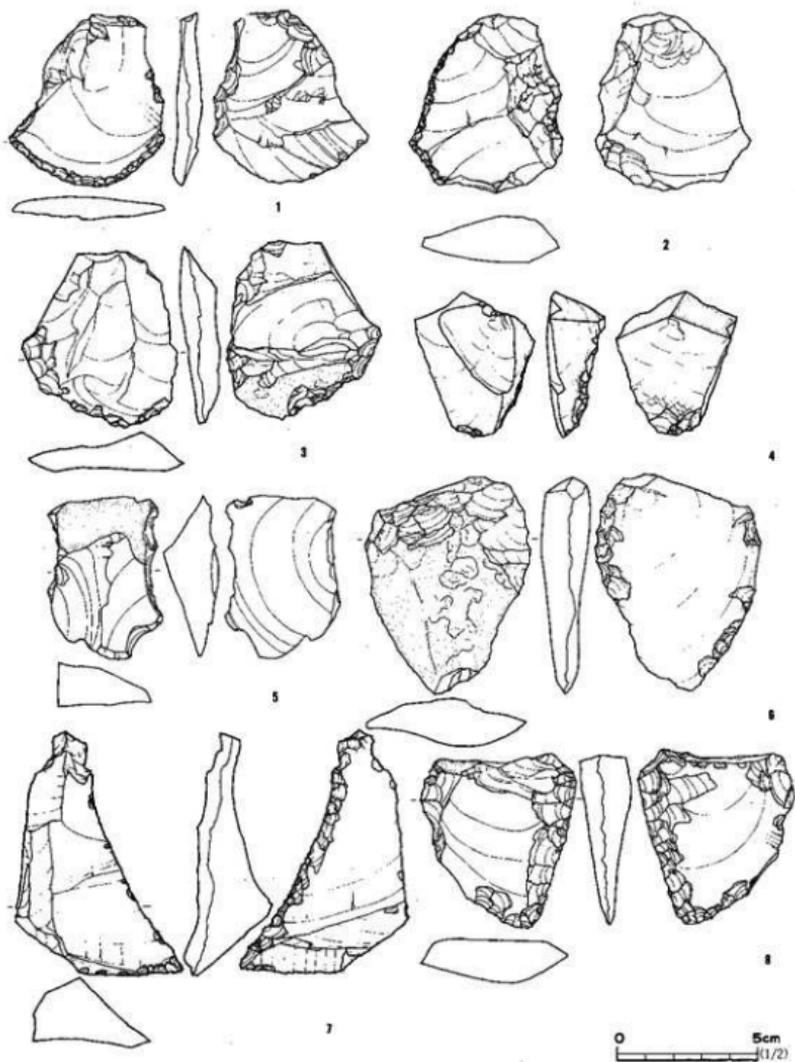


圖817 包含層出土遺物 (177) 石器

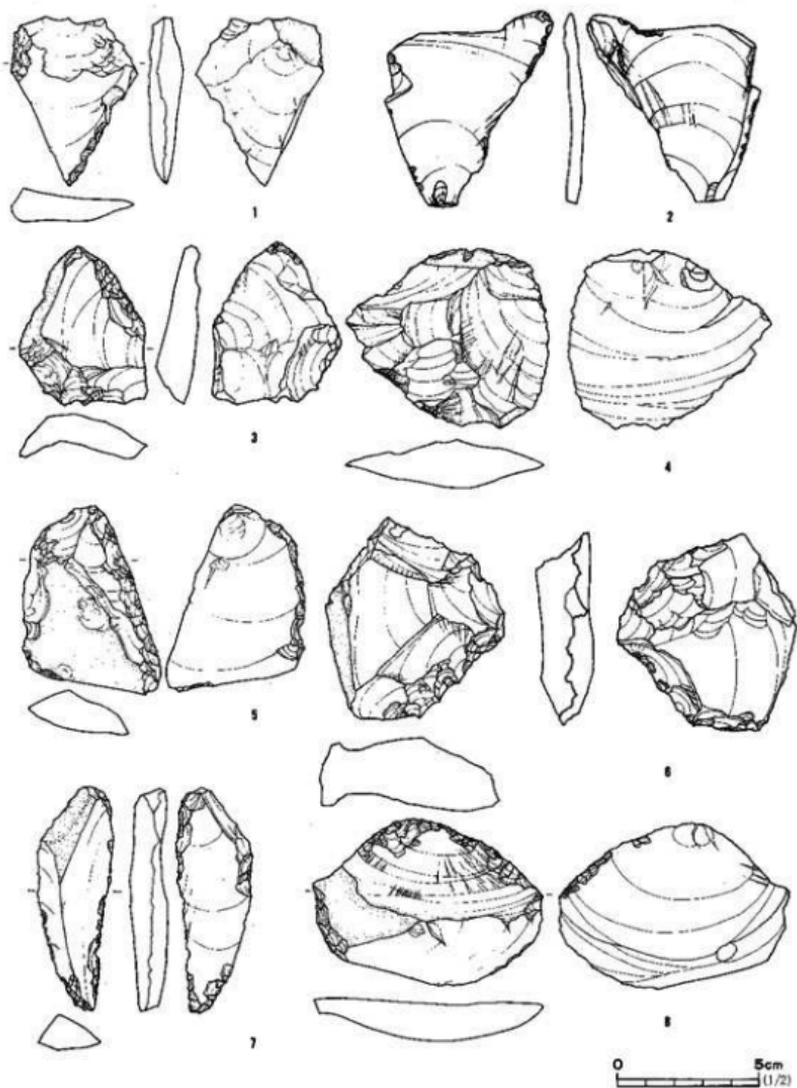


図818 包含層出土遺物 (178) 石器

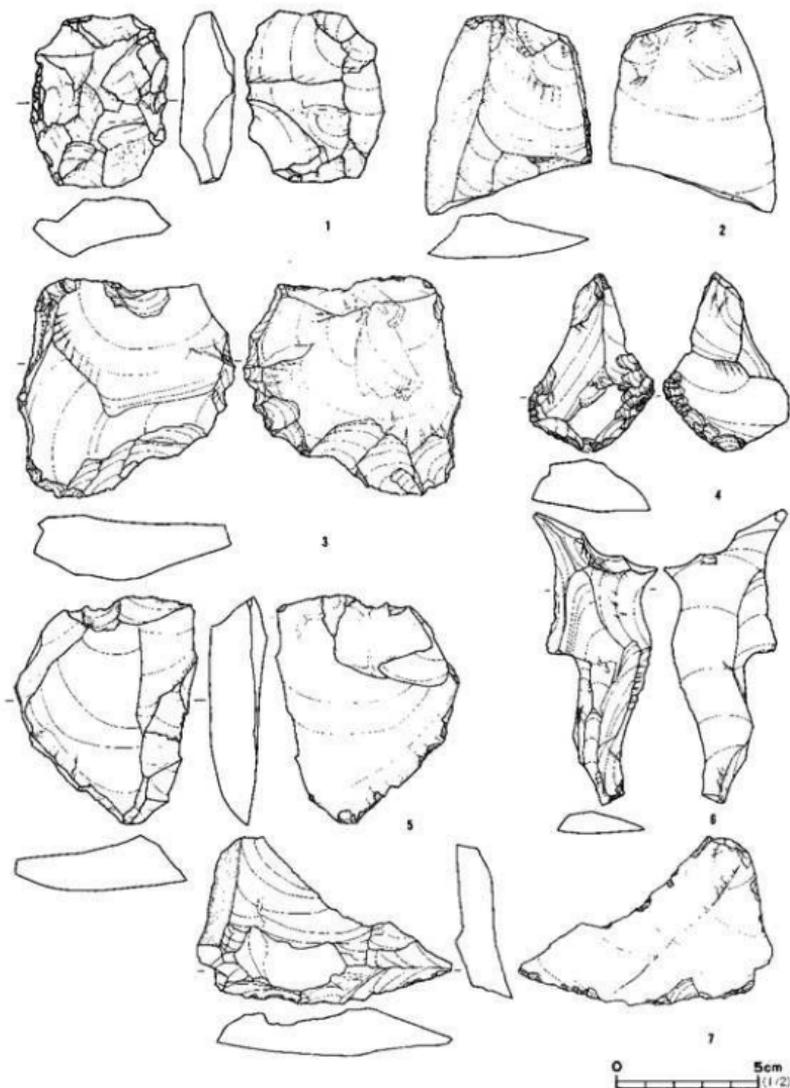


图819 包含層出土遺物 (179) 石器

第2章 遺構と遺物

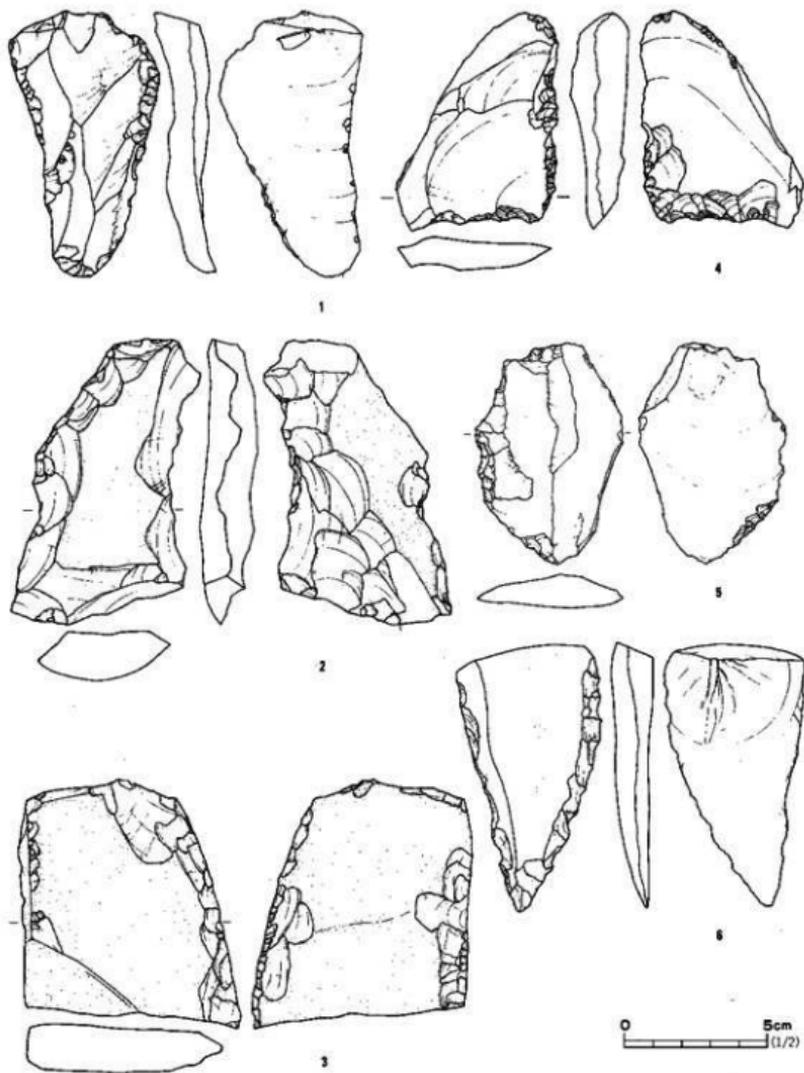


図820 包含層出土遺物 (180) 石器

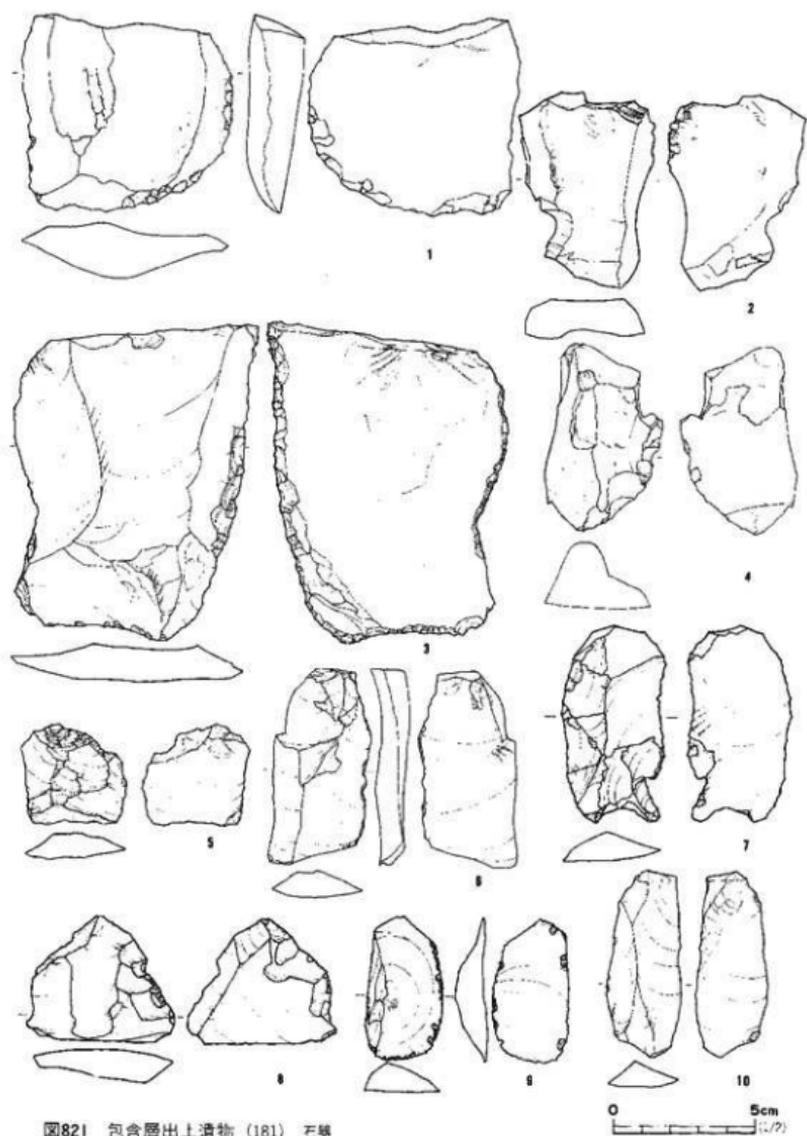


圖821 包含層出土遺物 (181) 石類

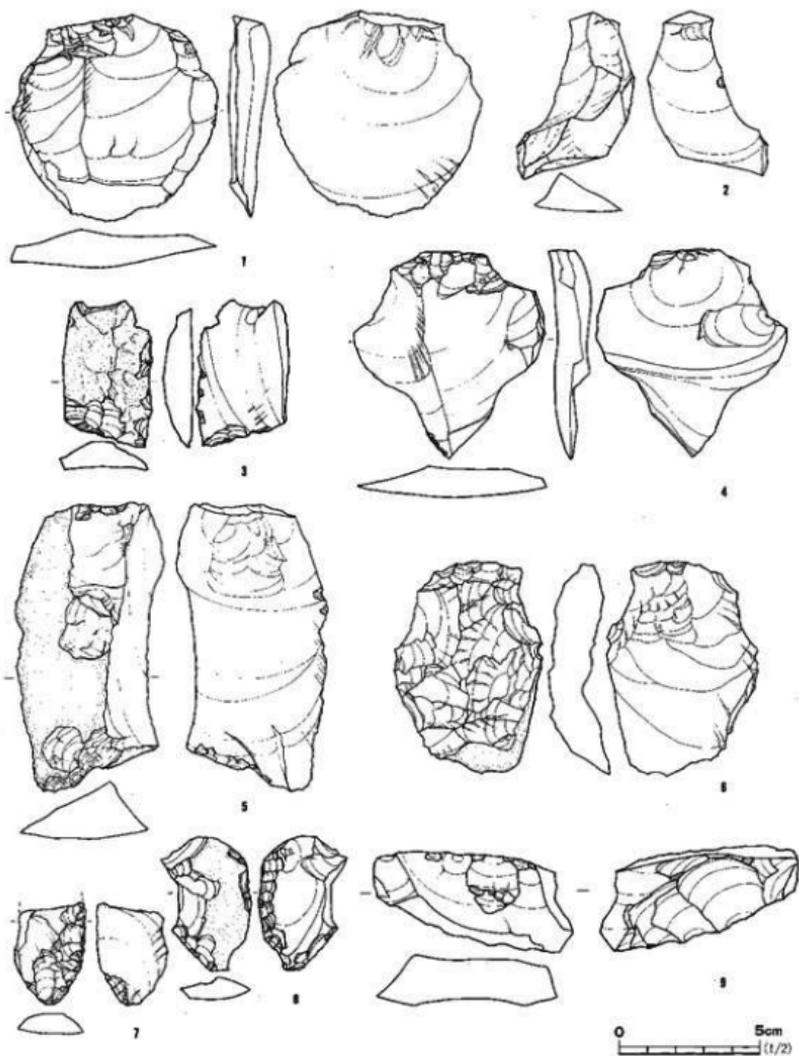


図822 包含層出土遺物 (182) 石器

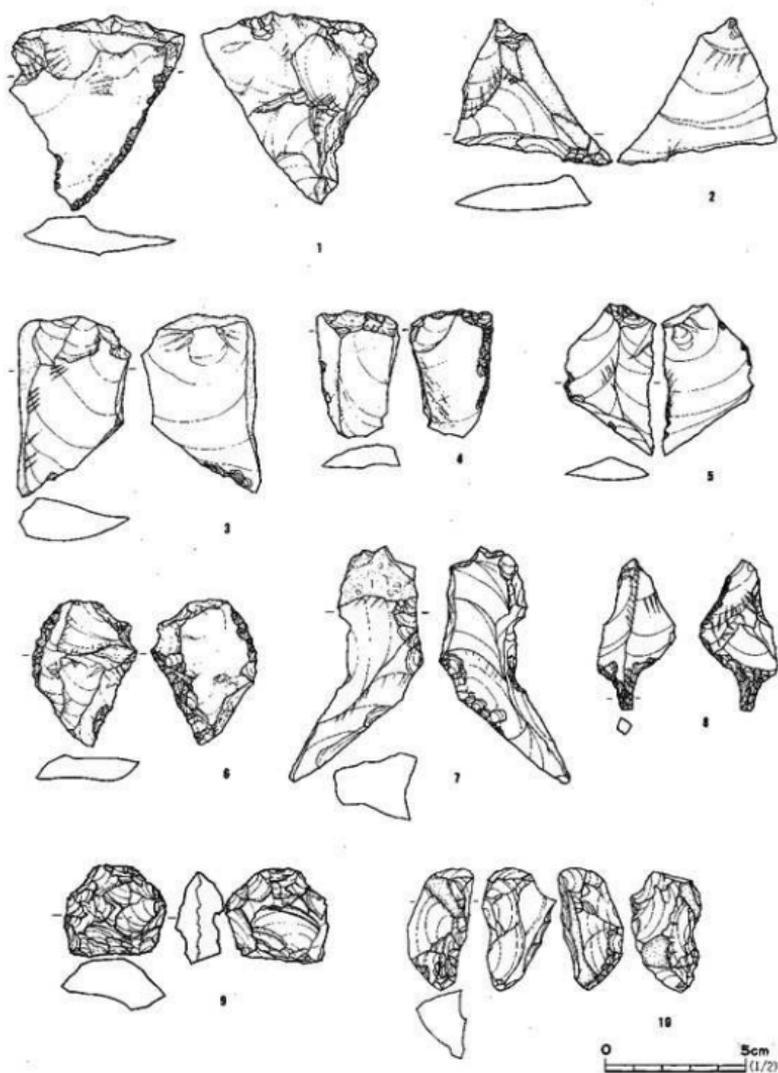


圖823 包含層出土遺物 (183) 石器

第2章 遺構と遺物

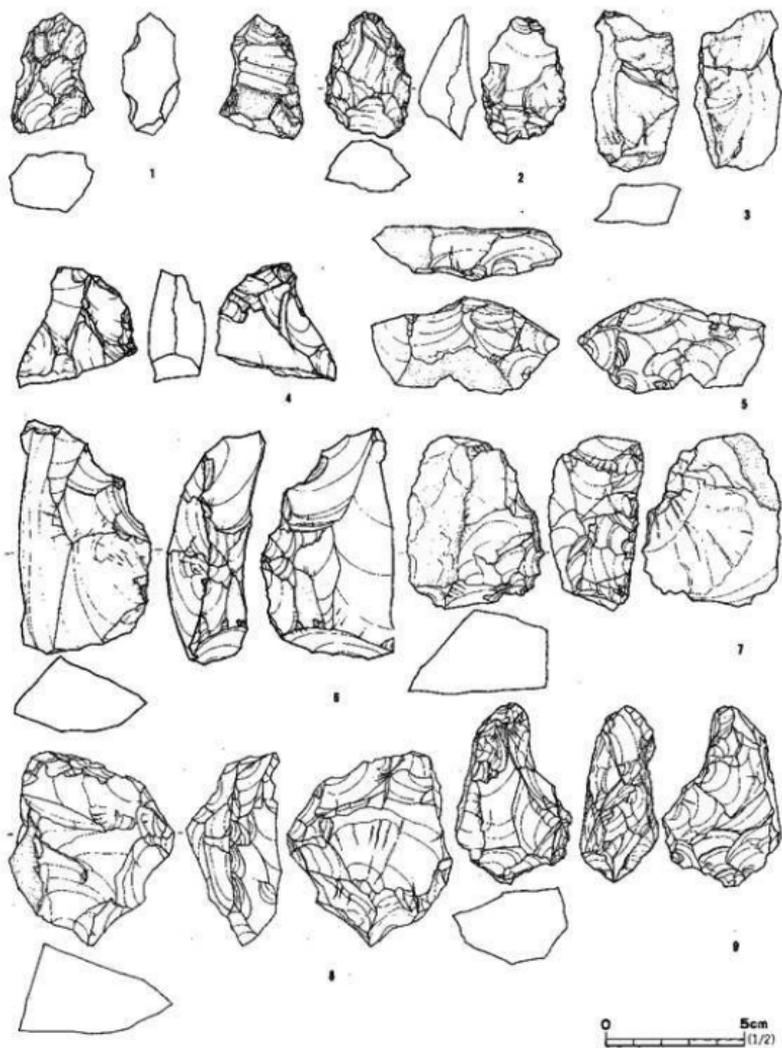


図824 包含層出土遺物 (184) 石器

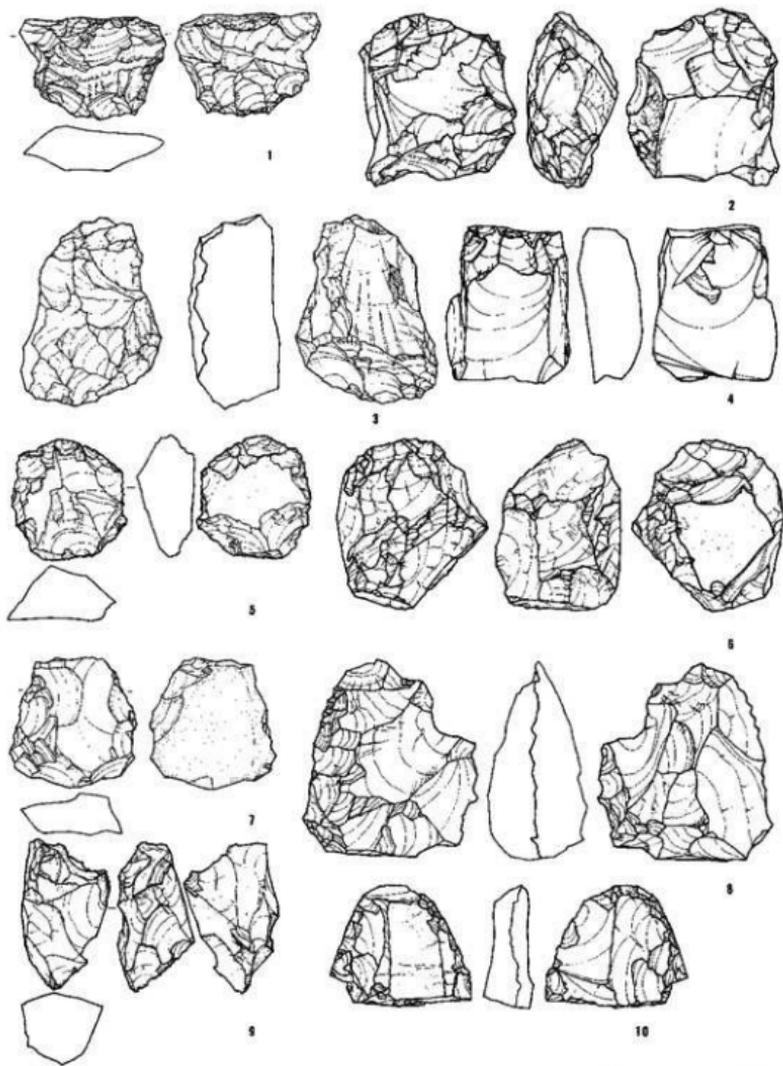


图825 包含層出土遺物 (185) 石器

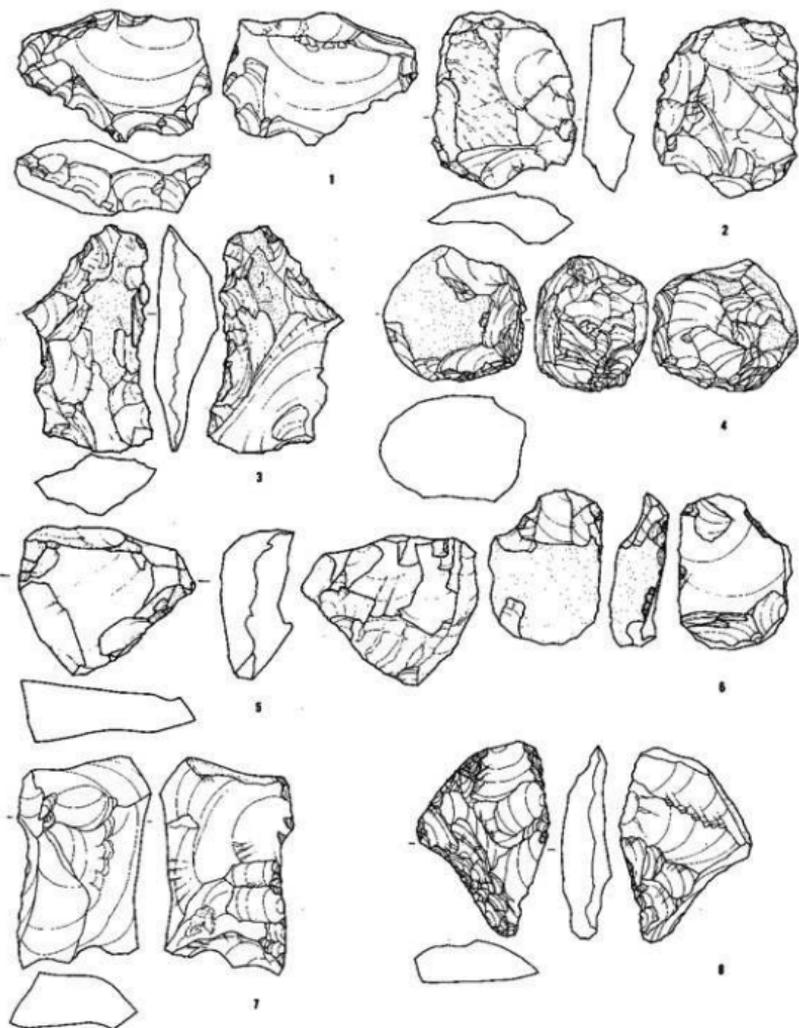


図826 包含層出土遺物 (186) 石器

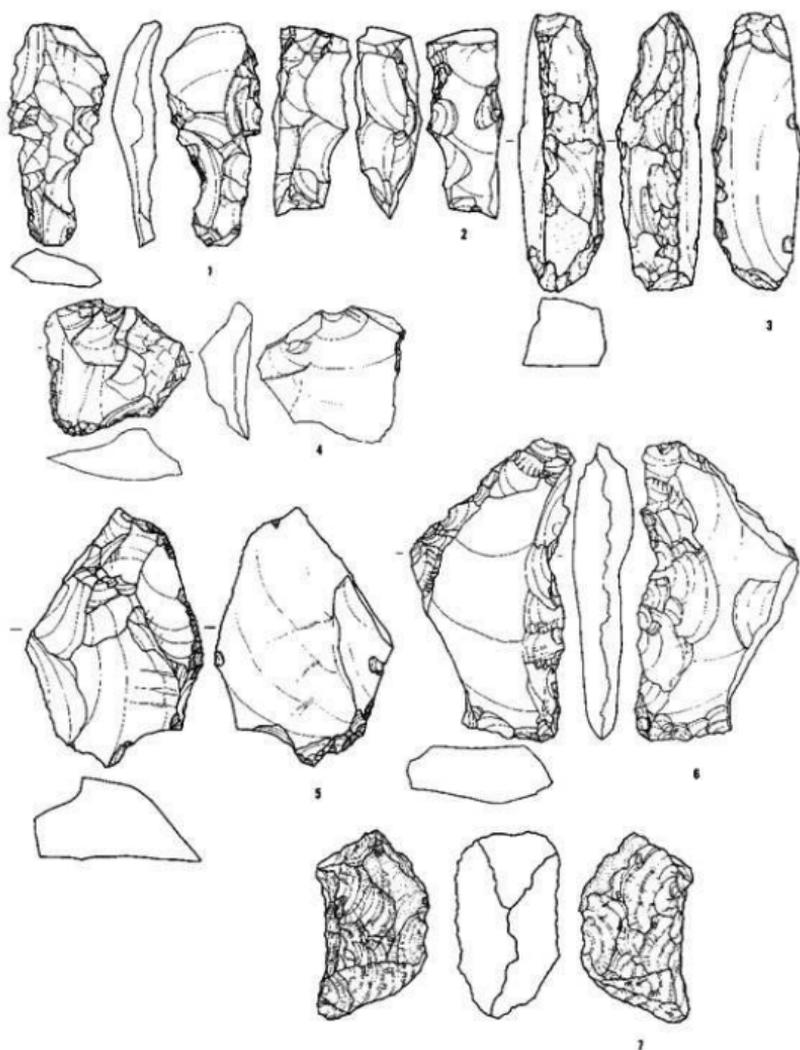


圖827 包含層出土遺物 (187) 石類



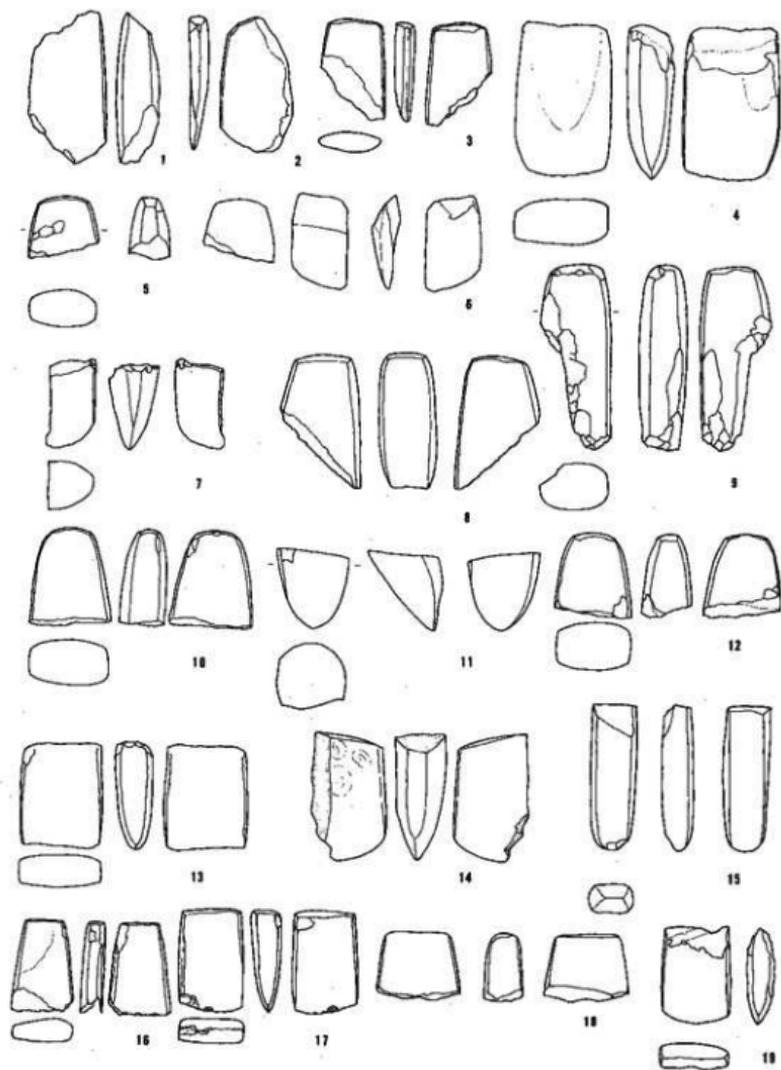


図828 包含層出土遺物 (188) 石器



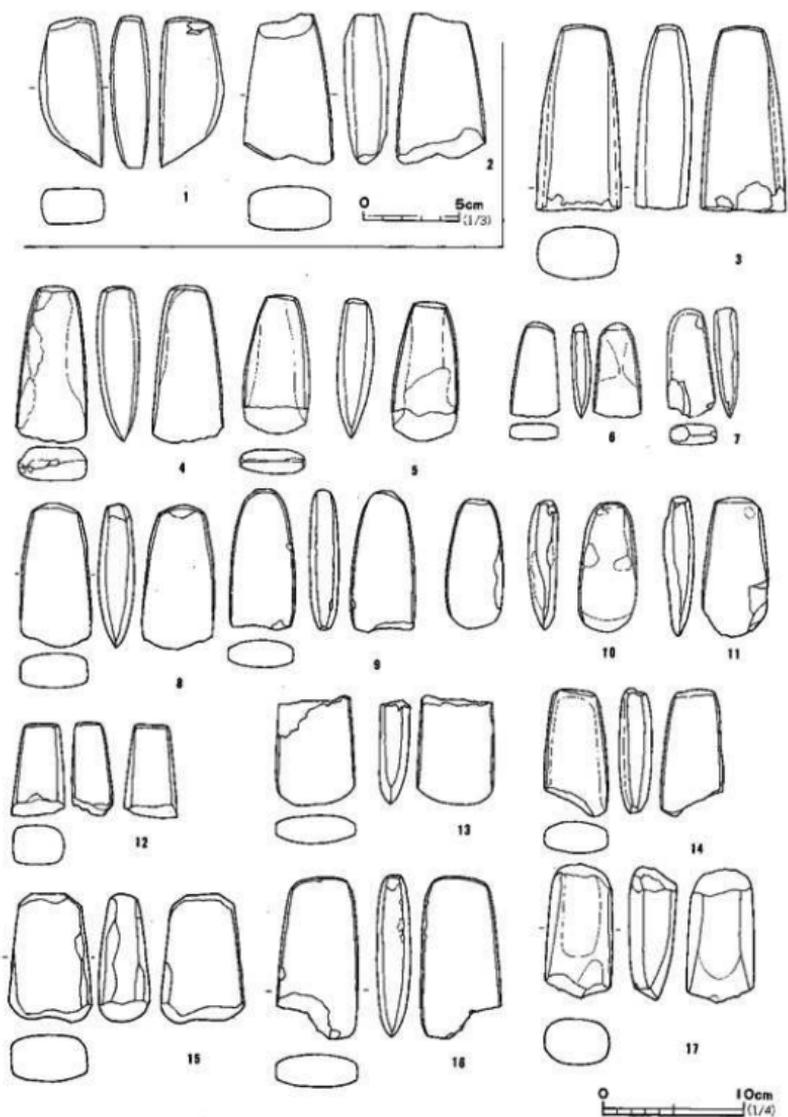


圖829 包含層出土遺物 (189) 石器

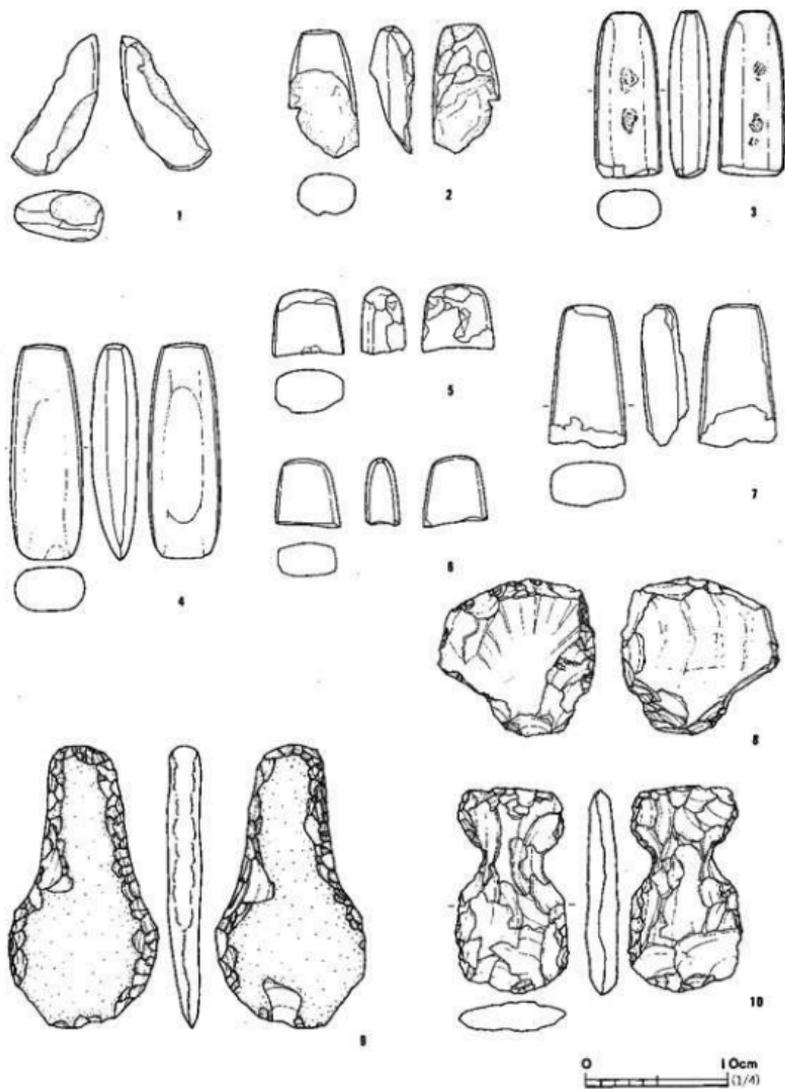


図830 包含層出土遺物 (190) 石器

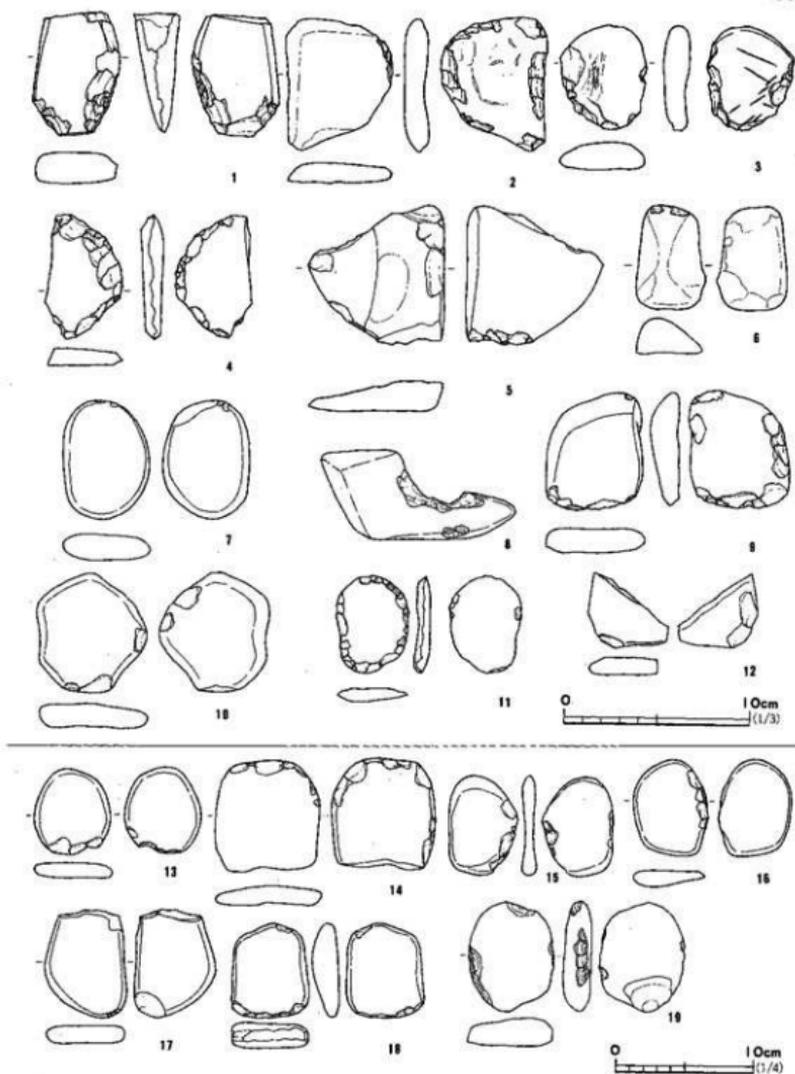


图831 包含層出土遺物 (191) 石器

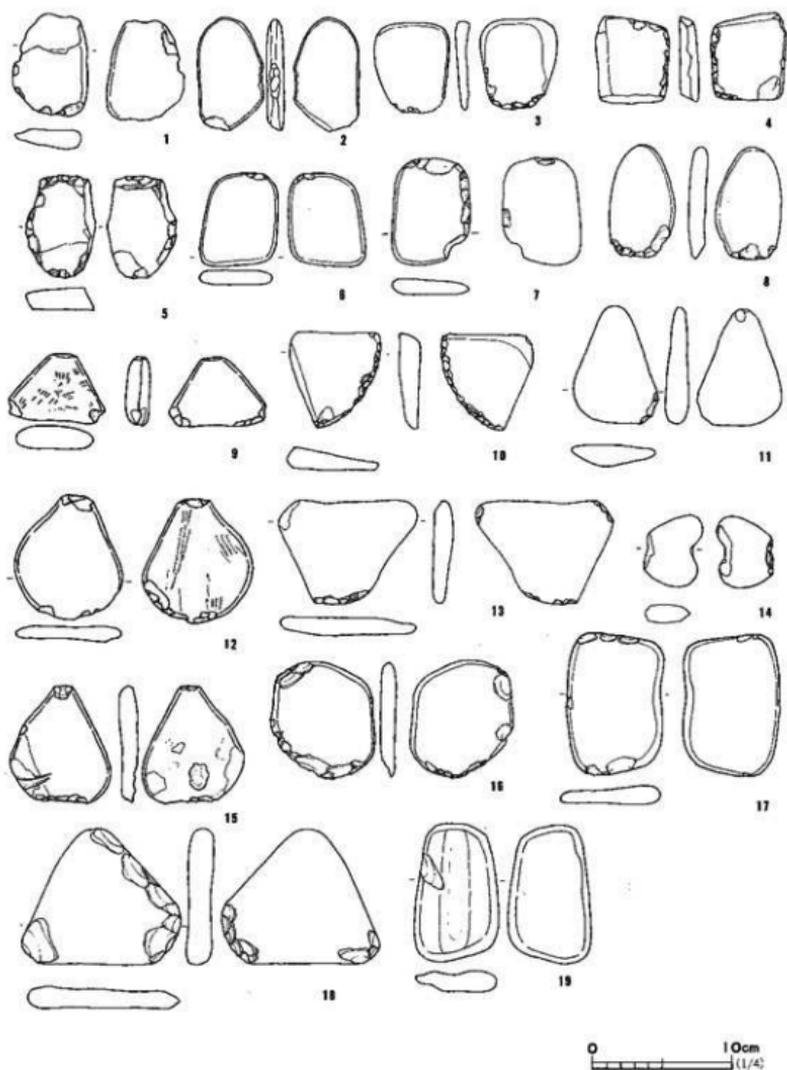


図832 包含層出土遺物 (192) 石器

第6節 遺物包含層

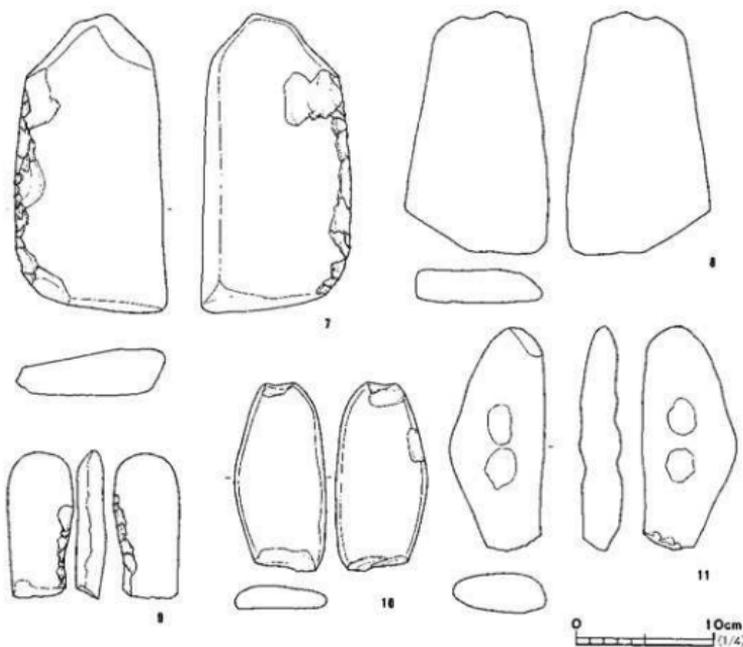
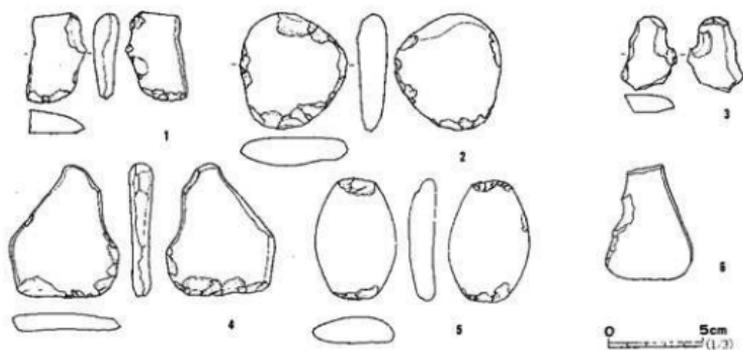


圖833 包含層出土遺物 (193) 之新

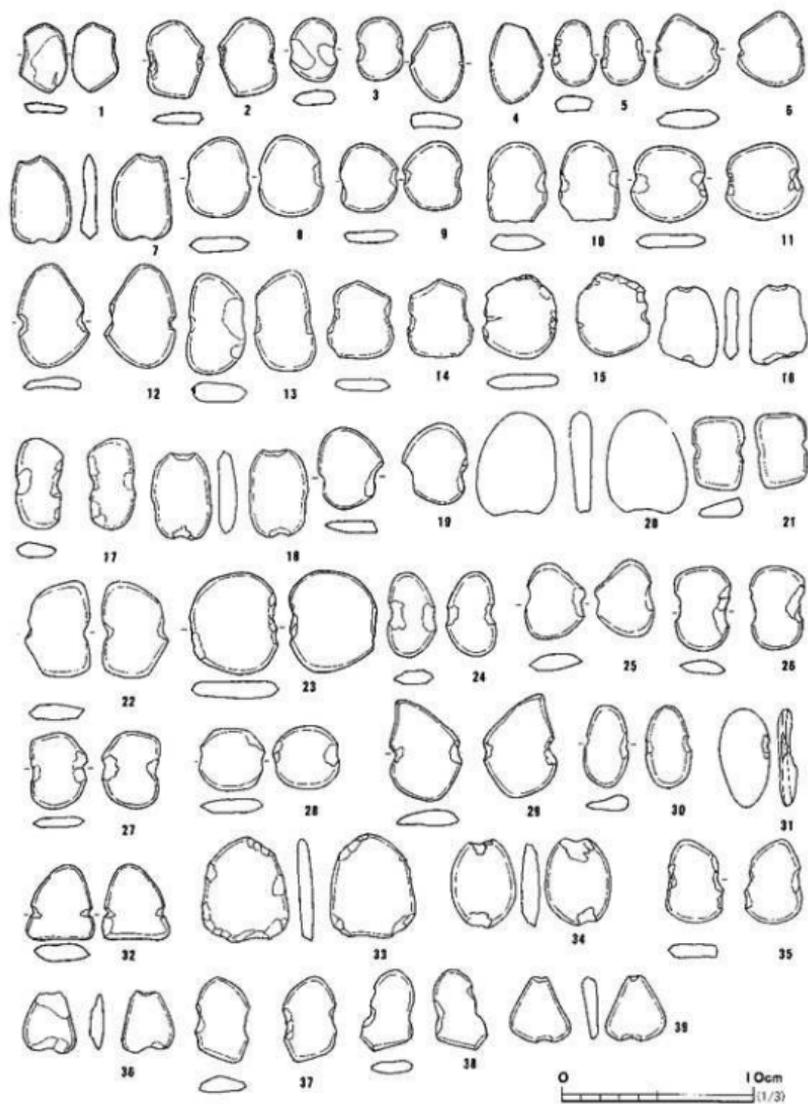


図834 包含層出土遺物(194) 石器

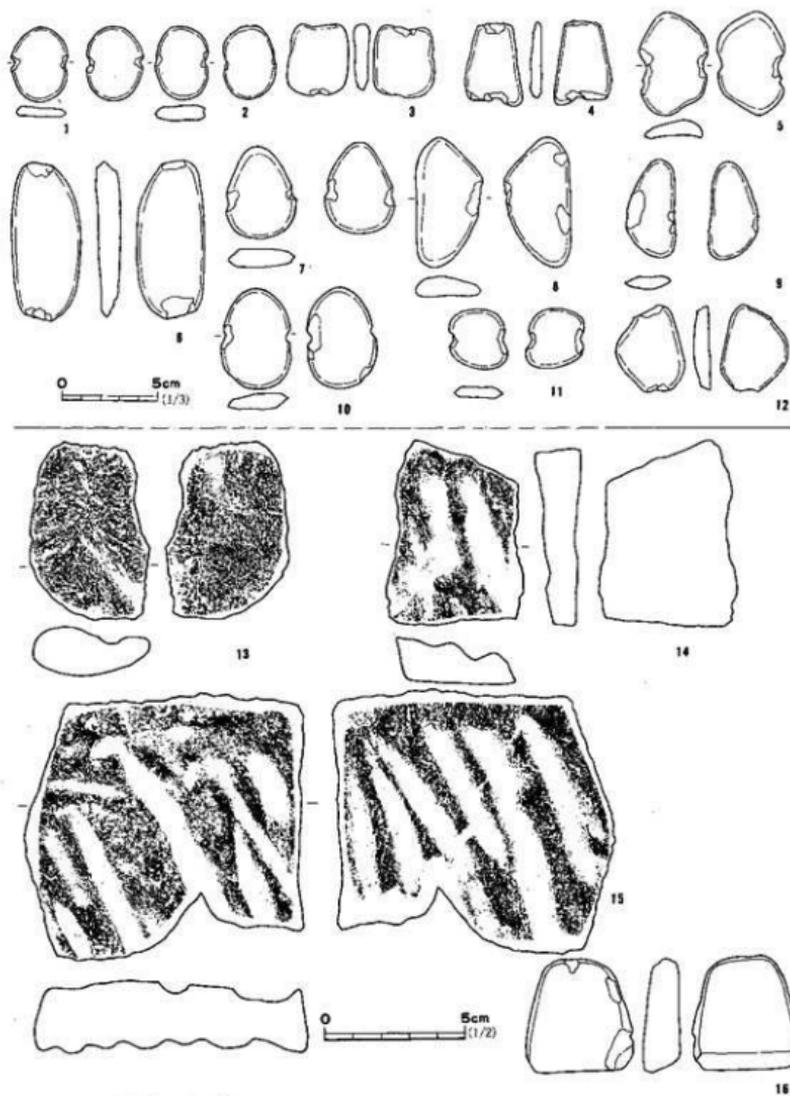


圖835 包含層出土遺物 (195) 石製

第2章 遺構と遺物

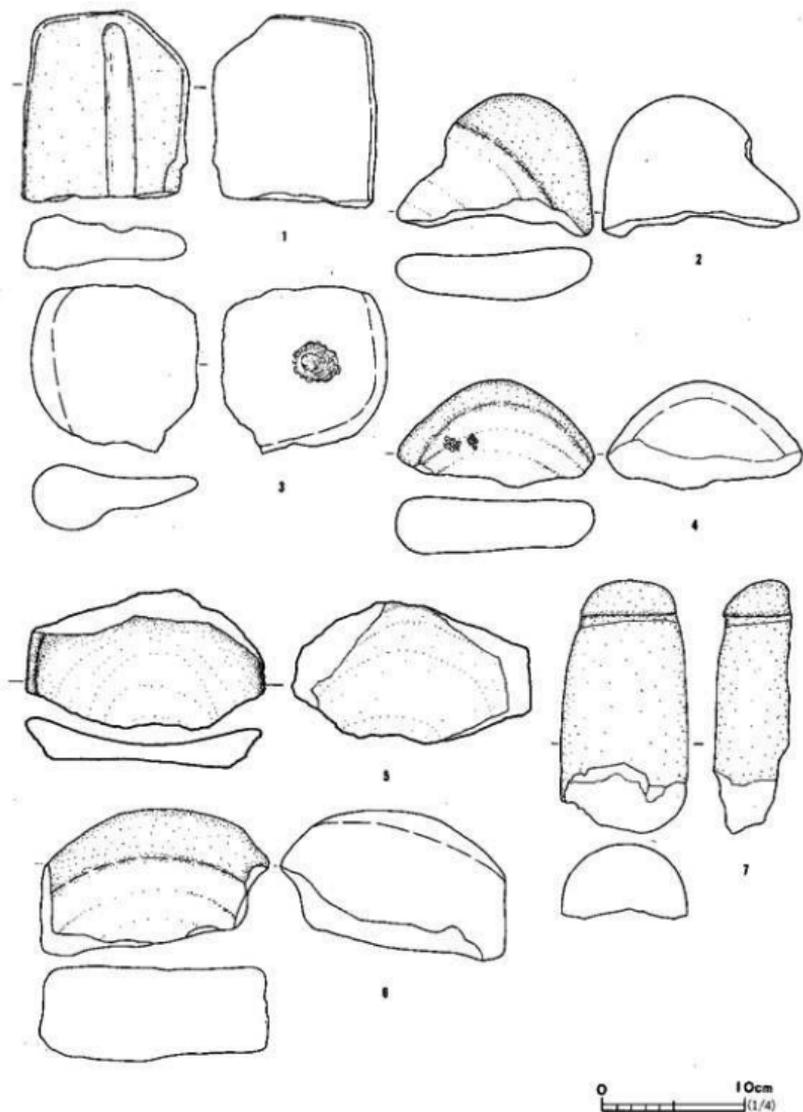


図836 包含層出土遺物 (196) 石器

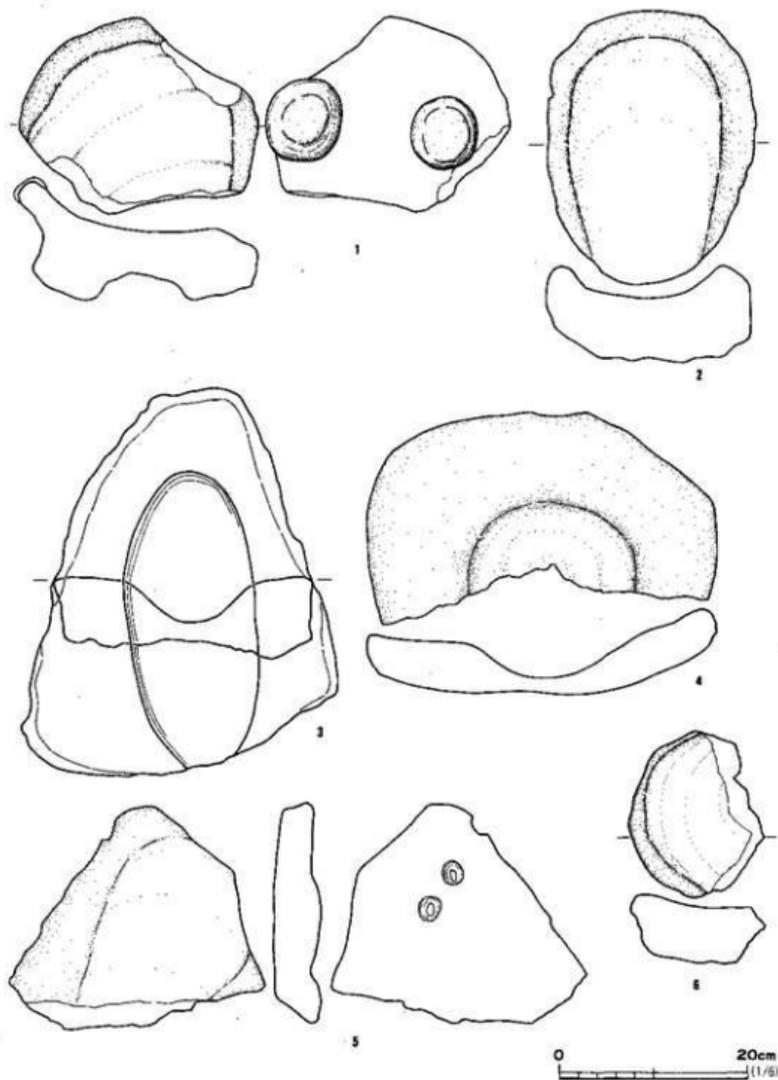


圖837 包含層出土遺物 (197) 石鏃

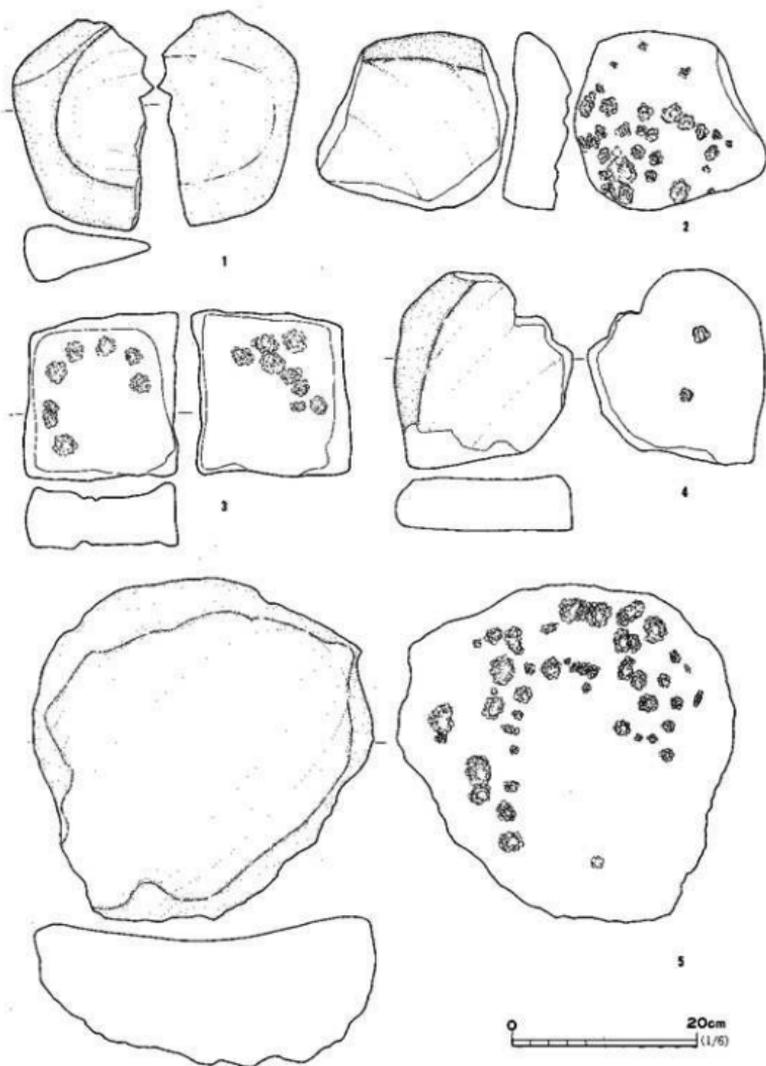


図838 包含層出土遺物 (198) 石碇

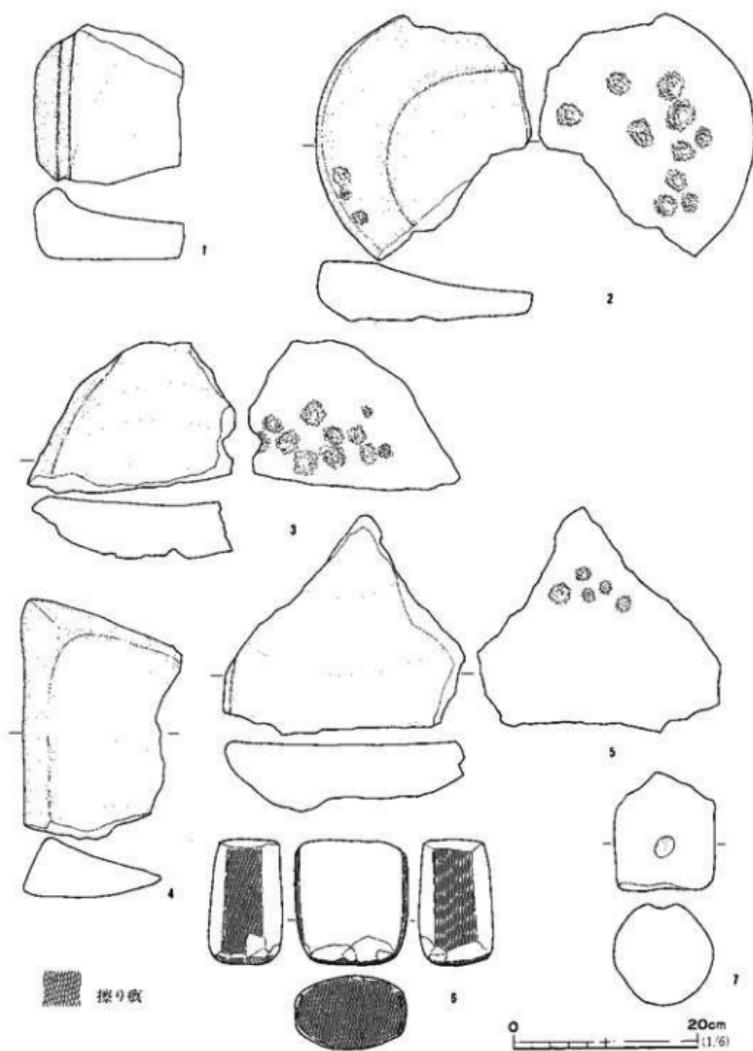


図839 包含層出土遺物 (199) 石片

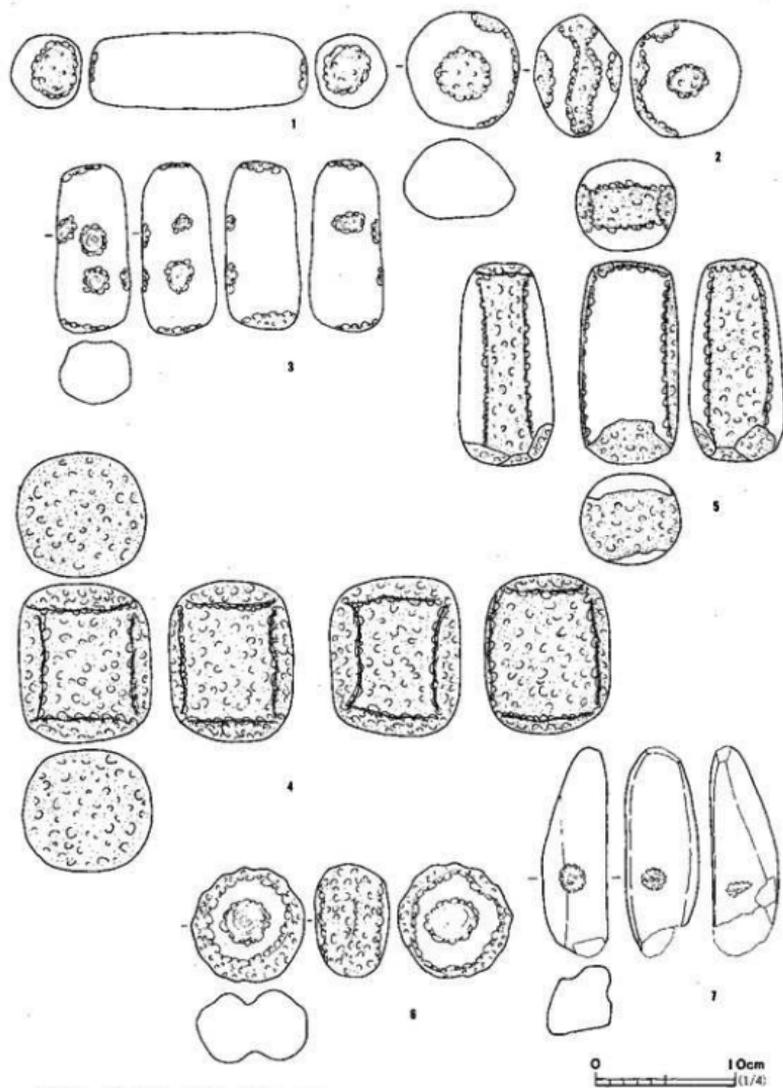
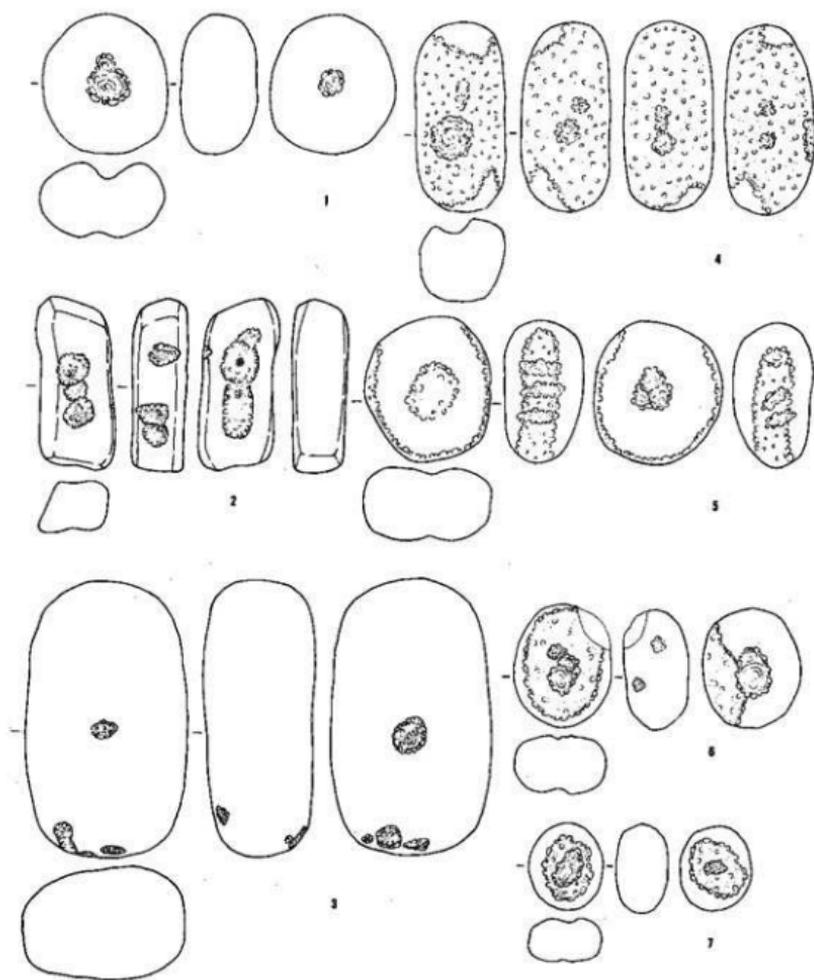


図840 包含層出土遺物 (200) 石罫



0 10cm
(1/4)

图841 包含層出土遺物 (201) 石器

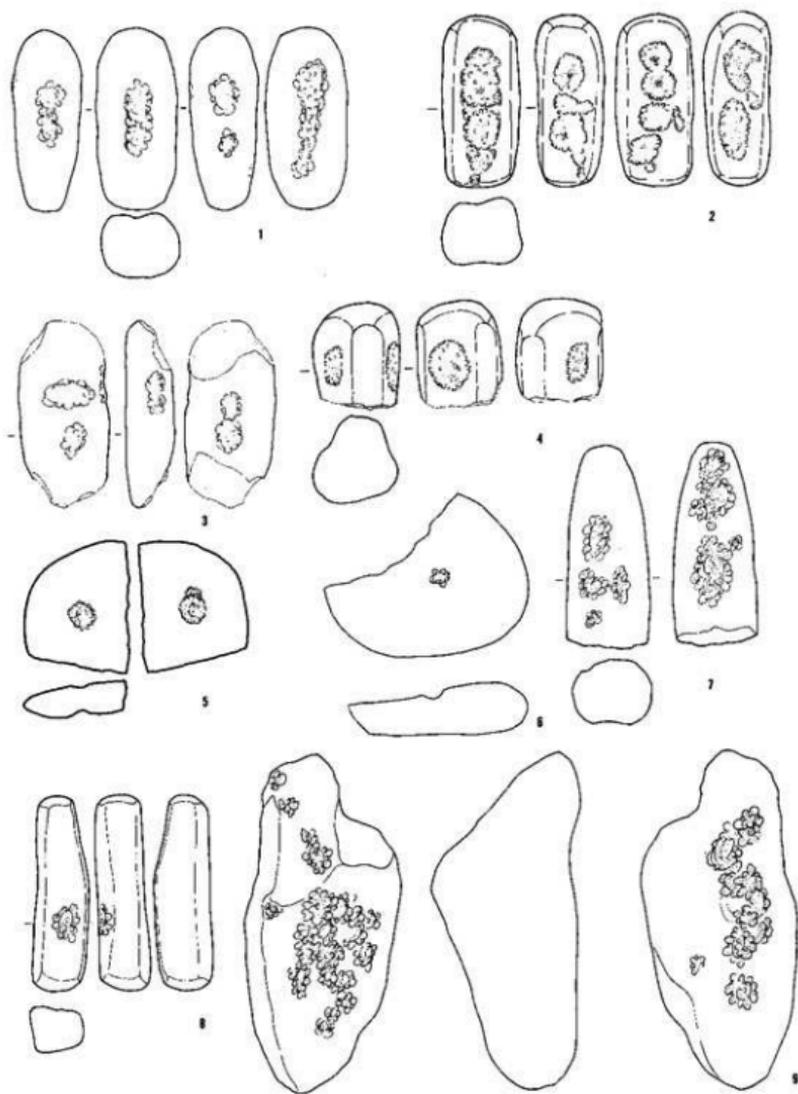
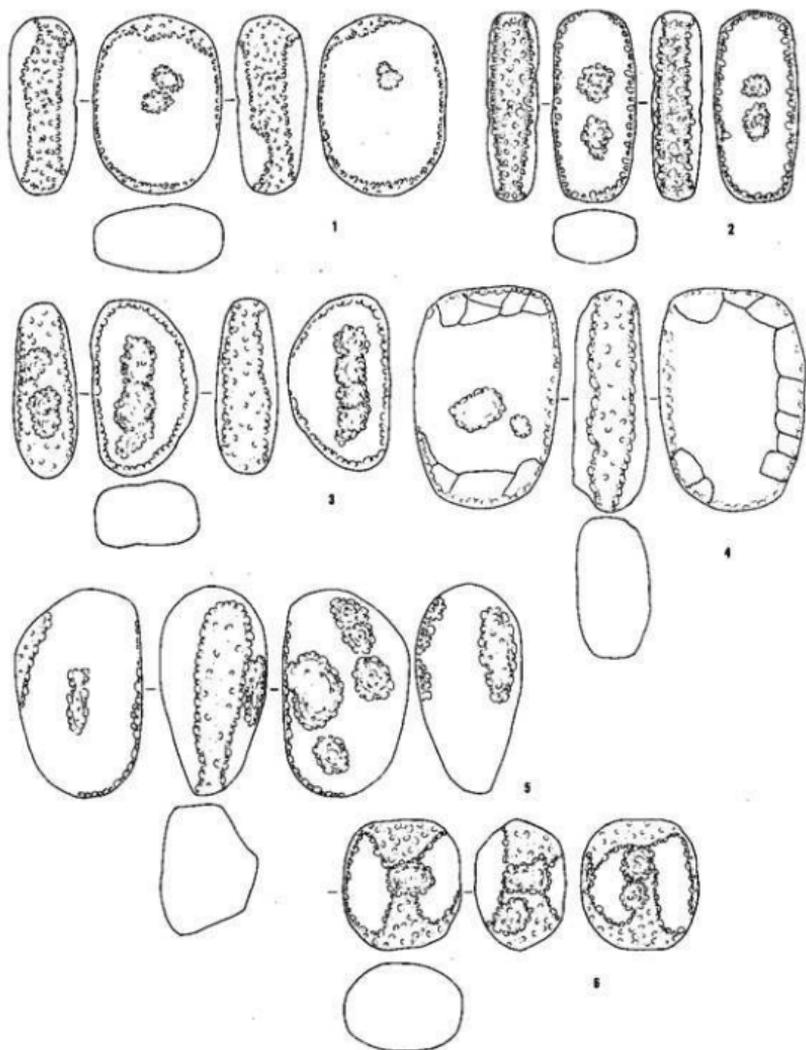


図842 包含層出土遺物(202) 石類

0 10cm
1:2/4



0 10cm (1/4)

圖843 包含層出土遺物 (203) 石器

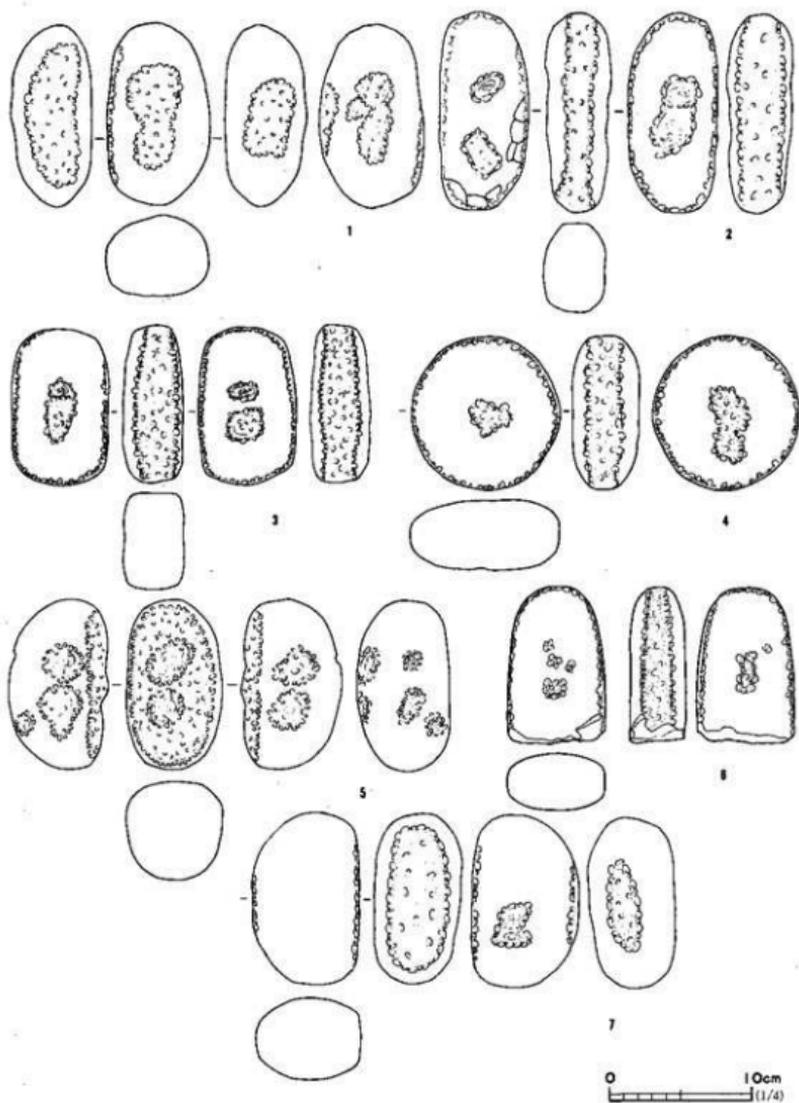


図844 包含層出土遺物 (204) 石器

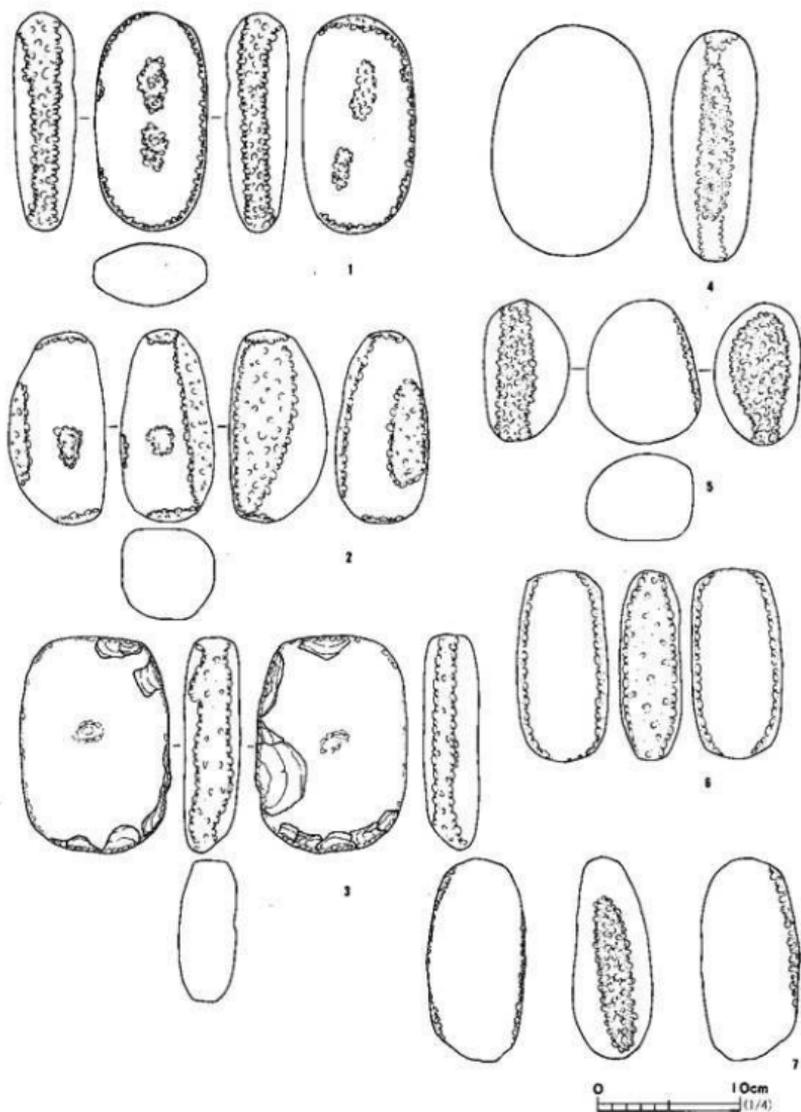


图845 包含层出土遗物 (205) 石器

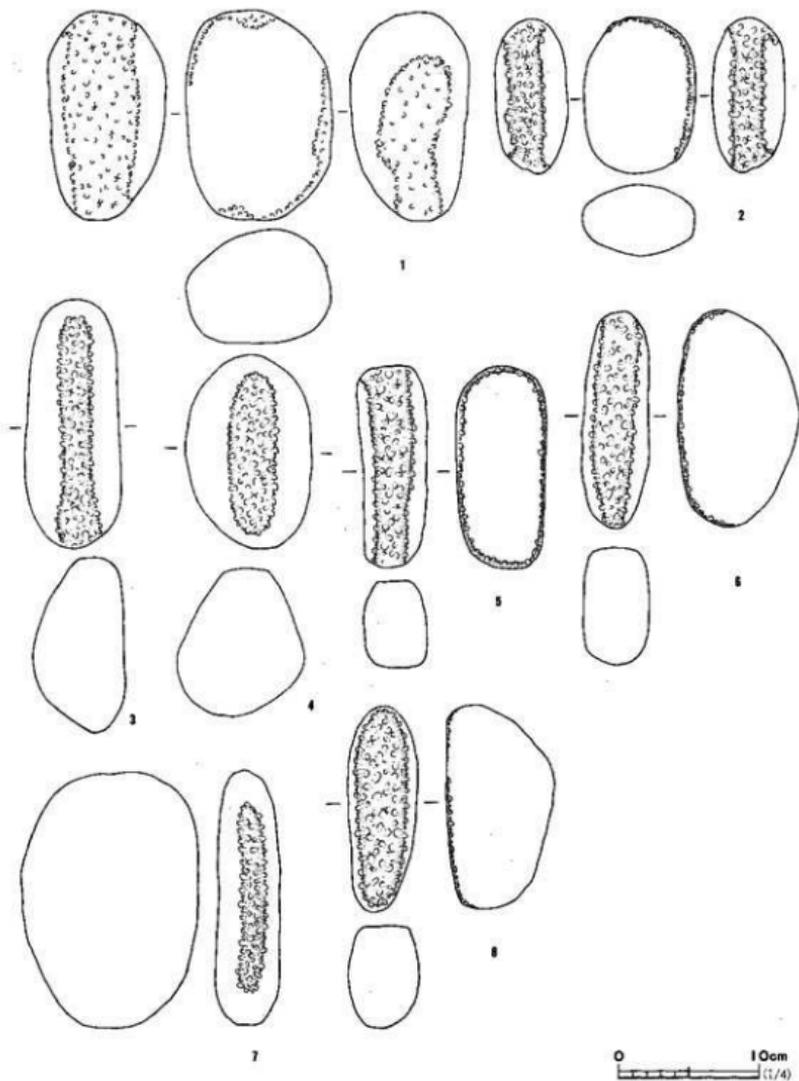


図846 包含層出土遺物 (206) 石鏃

打製石斧 図790-7, 図830-9・10の3点で, 法正尻遺跡では出土量が極めて少ない。図790-7, 図830-9は, 基部が棒状をなしている。図830-10は分銅型の打製石斧である。

礮 礮の周縁部に, 部分的に剝離を加えたものを礮器とした。大型の礮を用いたものについては石核, 小さい偏平な礮を用いたものについては, 石錘との区分は微妙である。図820-3, 図830-8, 図831-1~図832-13・15~18, 図833-1~10, 図834-33の49点を考えている。図820-3, 図830-8, 図831-1, 図833-7~9では, 表裏面から剝離を加えて刃部状の稜線を作り出している。石錘状の偏平な礮を用いたもので, 刃部状の稜線が作り出されているものは, 図831-2~4・11~14, 図832-1・4・5・10・16, 図834-33である。その他のものには, 刃部は見られない。図831-17の下縁部側縁は磨かれ, 平坦になっている。図832-9・11・15には, 細い沈線状の筋が見られる。9は, 三脚石器を意識して作っている可能性がある。

石錘 図832-14, 図834-1~32・34~39, 図835-1~12の51点である。いずれも円形・楕円形状をなす偏平で小さな礮を用い, 側縁部の相対する位置に袂りを加えている。この袂りは剝離によって作られるものが多いが, 図834-3・6・32では鋭い工具でV字状に刻まれている。

有溝石器 矢柄研磨器と考えている石器である。平らな礮の表面に幅1cm程の凹線状の溝が見られるものである。図832-19, 図835-13~15, 図836-1の5点出土している。

石皿 図836-2~6, 図837-1~図839-5の21点である。図837-1の裏面には, 円形の脚が付いている。図837-2・3・5, 図838-2・3・5の裏面には, 窪みが数多く認められる。

磨石 総数713点出土した。この内, 54点を掲載した。その他のものについては, 使用痕をもとに以下のようにA~D類に4分類し, 各分類ごとの出土点数を確認した。また, A~C類については, ほとんど欠損していない326点(内訳: A類151点, B類120点, C類55点)を対象として, 法量を計測し, その整理した結果を表13に示した。

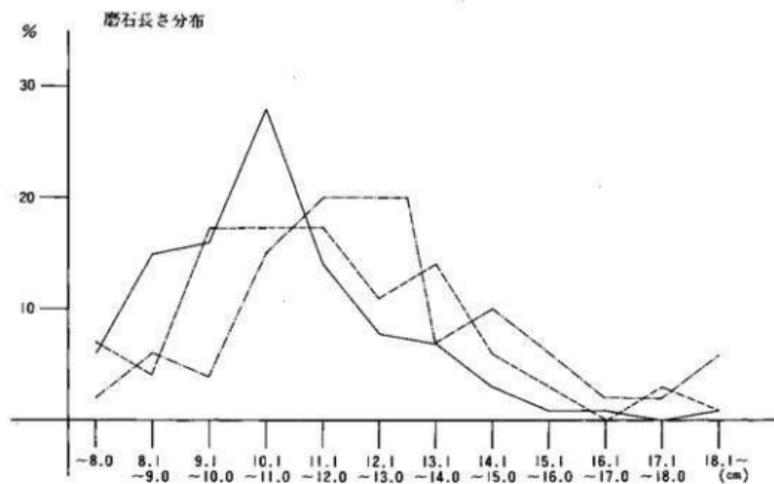
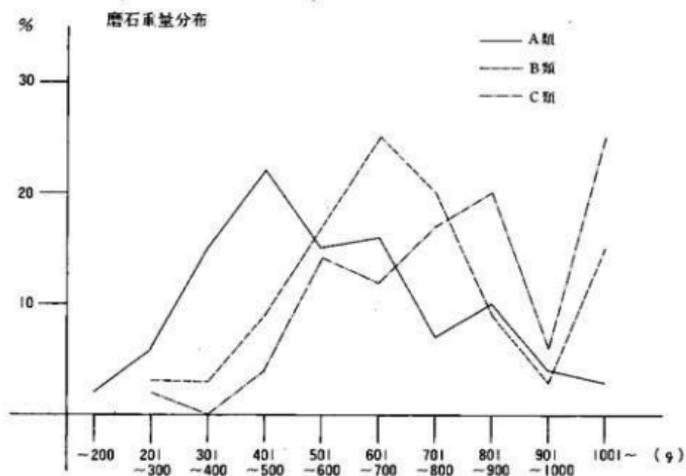
分類の基準とした使用痕は, 窪み部と, 敲打痕状をなす表皮の禿げたザラザラした面である。礮の表裏面に見られる磨耗したような平滑面については, 自然面と考えている。これは, 従来言われている磨石の使用面の認識とは正反対のものである。法正尻遺跡から出土した磨石には, 使用により磨かれたような面を持つものはほとんど見られないが, 図839-6の側縁部と下面は, 擦りによって平坦になっている。

A類 いわゆる凹石で, 総数197点出土している。図833-11, 図840-7, 図841-1~3, 図842-1~9が比定される。窪み内面には凹凸が見られ, 磨かれ, 平滑になった状態が観察されたものはない。

B類 凹石で, 敲打痕状の表皮の禿げたザラザラした面を持つ磨石である。総数148点出土した。図840-2・3・6, 図841-4~7, 図843-1~図845-3が比定される。敲打痕状の使用面は, 磨石の側縁部に見られるものが多く, 定角式の磨製石斧の側縁部のような, 平坦面になって

第2章 遺構と遺物

表13 磨石重量・長さ分布



いるものも多く認められる。

C類 敲打痕状のザラザラした面を持つ磨石で、総数100点出土した。図840-1・4・5、図845-4～図846-8が比定される。側縁部に使用面が見られるものが大半を占めているが、図840-1は丸棒状をなす鏝の両端に、同図4・5は全面に使用面が見られ、立方体状をなしている。

D類 使用痕跡が認められないものである。総数215点出土している。中に器面全面やその一部が、C類の使用面のようにザラザラしたものが何点かある。これらについては、面としての範囲が認められないことから本類に含めた。

表13には重さと長さの集計結果を示した。集計にあたっては、各類型ごとに横軸に示した範囲で点数を数え、それを各型の計測総点数で割って百分率を求めている。幅・厚さについても同様な検討をしたが、各型の分布状態は極めて一致していることから表としては示さなかった。幅は6～10cmのものが8割以上、厚さは3～6cm程のものが7割以上を占めている。重さの分布には、A・B・C類で%のピークを示す重さに200gずつの違いが認められ、重さと各型磨石の間にある程度の相関関係があるものと考えている。しかし、どの型の磨石にも特定の重さのものが意識的に選択された様子は見られず、この相関関係については、比較的ルーズな規制のもとで現れた相対的な傾向の違いと考えている。

その他の石器 図835-16は、軽石を素材としている。側縁部から下縁部には、擦りにより幅の狭い平坦面が作られている。図836-7は石棒の欠損品であろうか。先端部には僅かに括れが認められる。

土 製 品

法正尻遺跡の遺物包含層からは、土偶・土製円盤を始めとして各種の上製品が多量に出土した。本項ではこれらのものについて、器種ごとに報告する。実用品とは考えずらいミニチュア上器や上器の面状・獣面状の突起についても合わせて報告する。

土 偶 (図847～853)

法正尻遺跡の包含層からは総数39点の土偶が出土している。これらの土偶は脚部以外のはすべて板状土偶に分類される。顔の表現はリアルで、図847-1・2は耳まで表現されている。体部は例外なく胸に乳房を現している。下腹部については妊娠状態を現すものが大半を占めている。その表現には、図847-6や図848-1、図849-1のように、器面が円錐形状に突出するものと、図847-5や図848-3・5、図852-2のように、瘤状の貼付文で表現されるものがある。図848-2や図852-4では妊娠状態は表現されていない。手の表現は稚拙で、図847-1・5や図849-2～4のように、体部から水平に僅か突出するだけであるが、図850-2・4には何かを抱き抱えているように手が表現されている。脚部のあり方については不明であるが、検出されているものはす

べて、円柱状をなしている。これらの中には、脚の下に台状のものが取り付けいていたと考えられるものは見られない。

器面に沈線や有節沈線によって文様を施すものは多い。図847-1・6、図848-1・3、図849-1~5、図850-1~3・5、図851-2には、腹面・背面に正中線が表現され、これを挟んで左右対象になるように文様が施されている。図852-3は地文に縄文が施され、腹面に1条、背面に4条の沈線を横位に施している。この他に、法正尻遺跡では穿孔された土偶が5点出土している。図847-1は前額部に2箇所、後頭部に1箇所、同図2は耳、同図4は額、図851-9と図852-1は、腕の部分にそれぞれ穿孔が見られる。図847-1は耳の穿孔の具体的な表現かと考えられるが、他のものについては紐ずれの痕跡が見られることから、実用的な用途を持つ孔と考えている。

土版・三角柱状土製品 (図853)

土版が2点、三角柱状土製品は1点出土した。図853-5・6は、土版であろう。いずれにも瘤状の貼付文が認められる。6ではこの貼付文を中心に沈線文・刺突文が施されている。同図7は三角柱状の上製品である。文様は器面全面に施されている。表裏面には菱形文とこの一辺に平行するように「く」の字状に、側縁部には山形に、底面には槽門形状に沈線文が施されている。底縁部の上位には、短軸方向2箇所、長軸方向1箇所穿孔されている。穴の周縁には紐ずれによると思われる磨減が認められる。

耳 栓 (図853)

総数4点(図853-8~11)出土した。すべて無文の耳栓で、断面形は中央部が円筒状を呈し、両側縁がこれより若干大きい鼓状をなしている。

ミニチュア土器・他 (図853)

ミニチュア土器が3点(図853-12~14)、皿状の上製品が1点(同図15)出土した。図853-14は、波状口縁をなすミニチュア土器である。同図15は皿状の上製品で、遺存部から対角線1に4つの孔を有するものと考えられる。孔の周縁には、紐ずれによると思われる磨減が認められる。この磨減はいずれも対角線の交点方向を向いている事から、本土器は相対する孔に紐を通して使用されていたものと考えられる。

獣面状・人面状突起 (図854)

獣面状の突起は5点(図854-1~5)、人面状の突起は1点(図854-6)出土した。図854-6以外のもは、すべて土器の内面を向いて作られている。これらには有節沈線文や交互刺突文が施されたものが多く見られることから、II群3・4類土器に付けられた突起と考えられる。

土製円盤 (図854・855)

総数75点出土した。いずれも土器破片を2次的に使用して作られている。大きさは直径6cm程の大きなものから、直径2cm程の小さなものまで認められるが、直径が3cm以下のものはごく

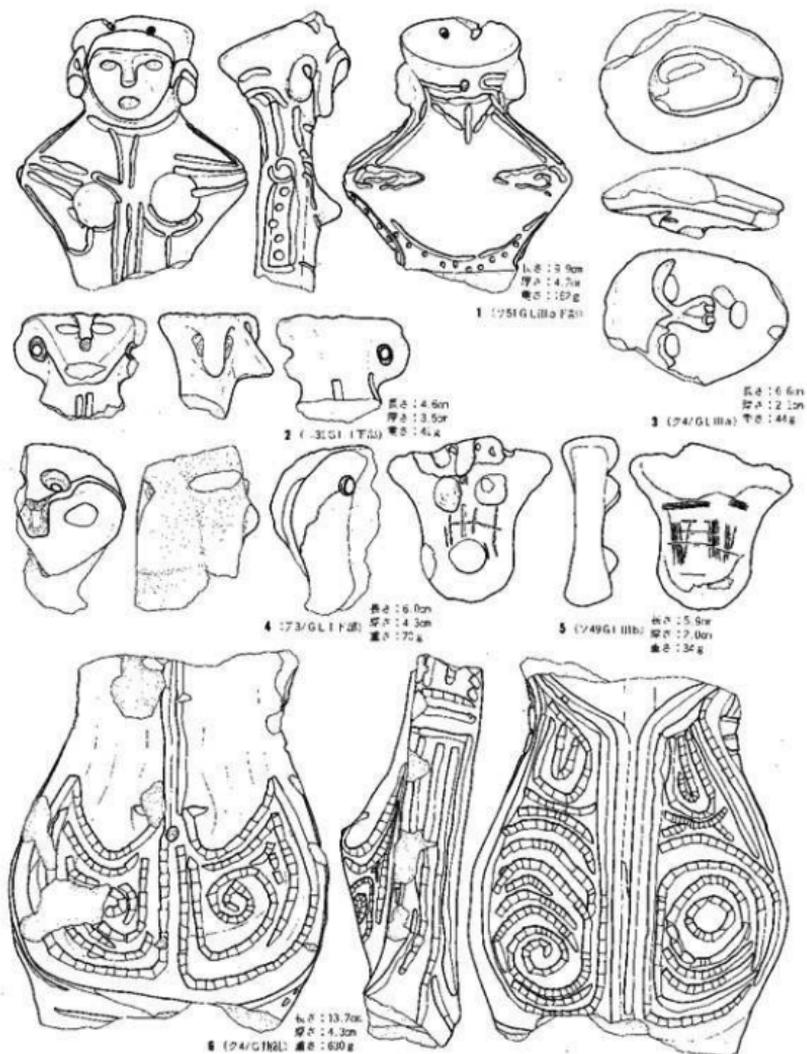


図847 包含層出土遺物 (207) 土製品



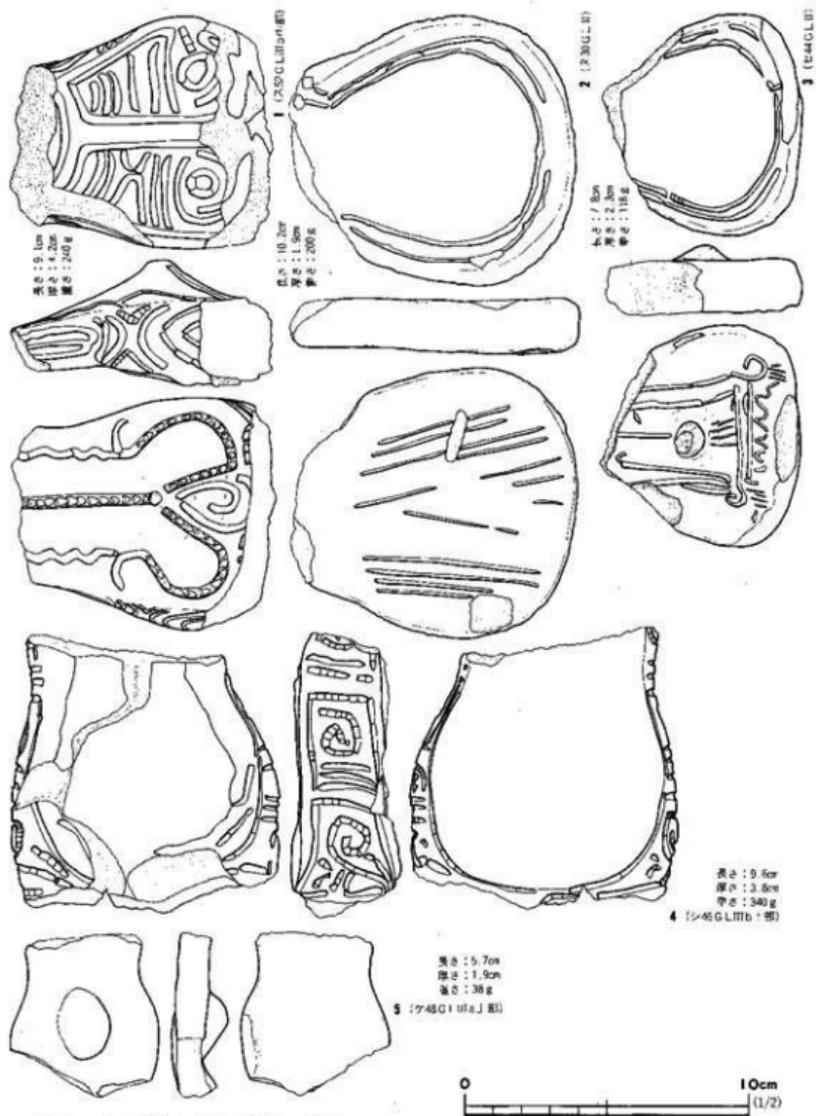


图848 包含層出土遺物 (208) 二製品

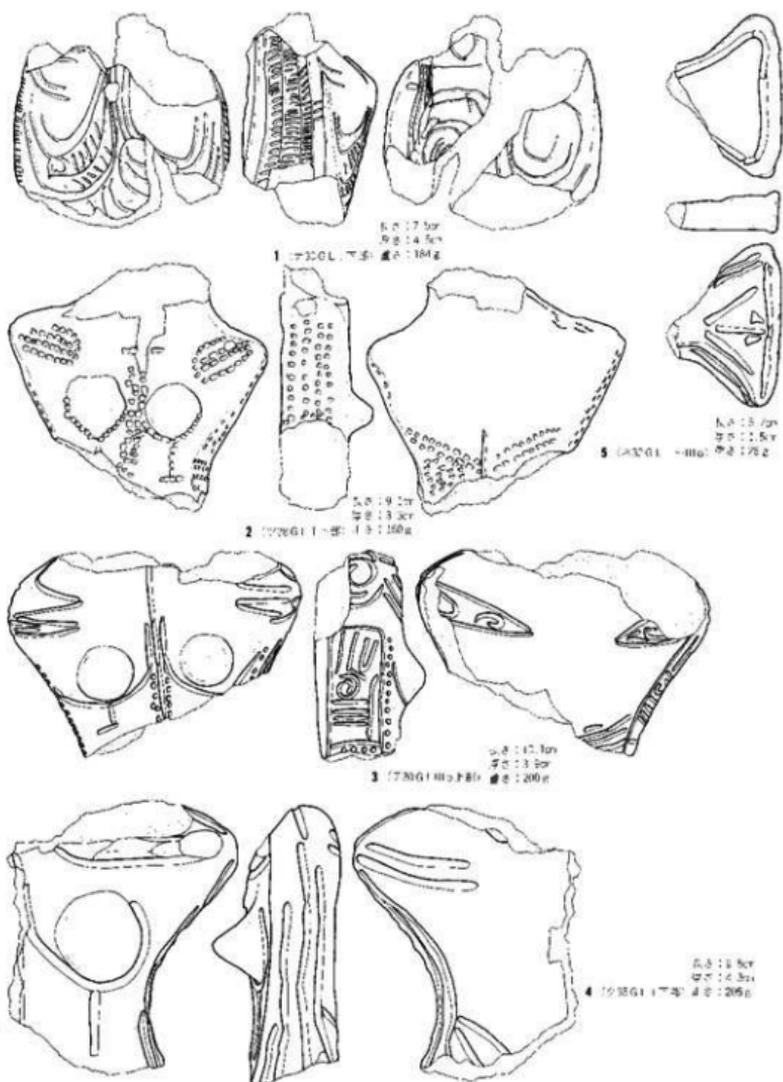
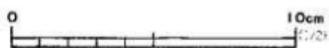


图849 包含層出土遺物 (209) 土器



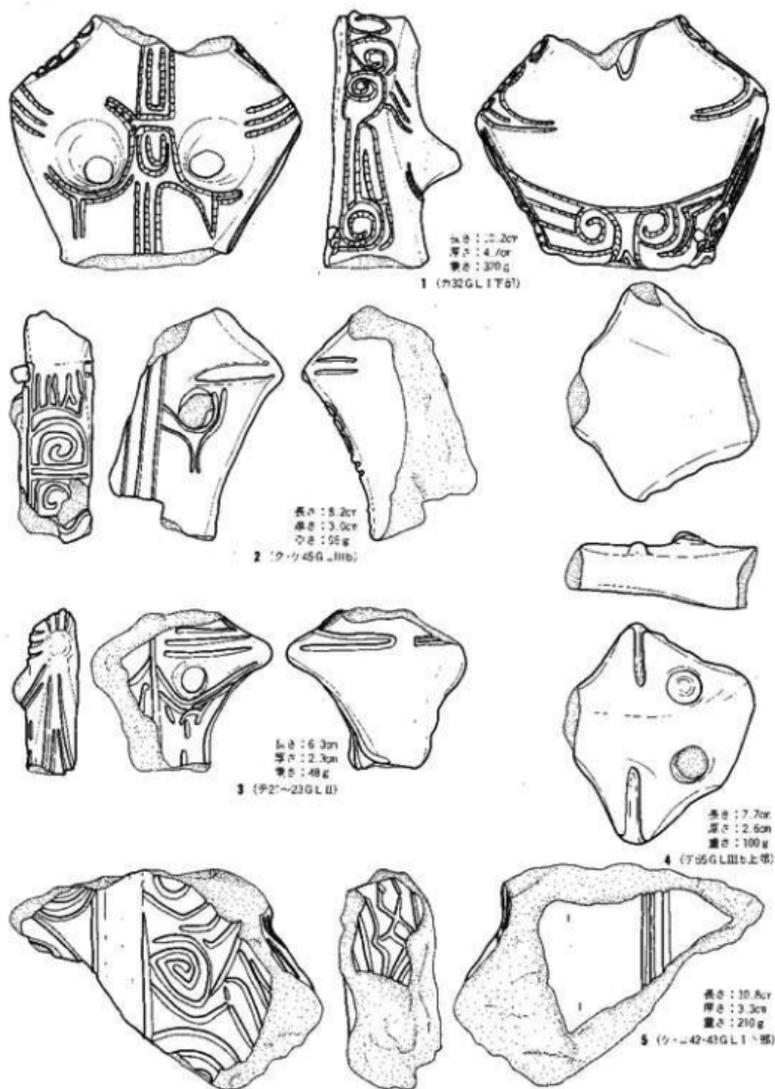
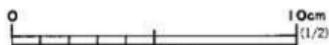


図850 包含層出土遺物 (210) 1製品



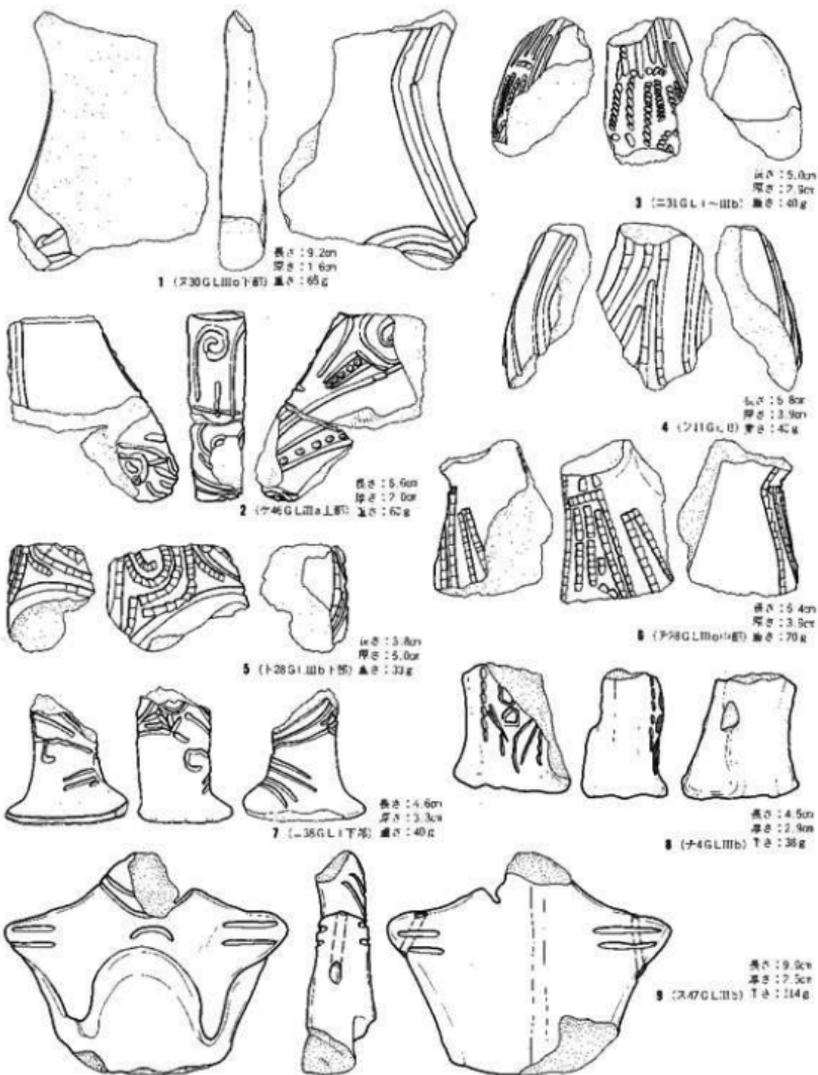


図851 包含層出土遺物 (211) 土製品

0 10cm (1/2)

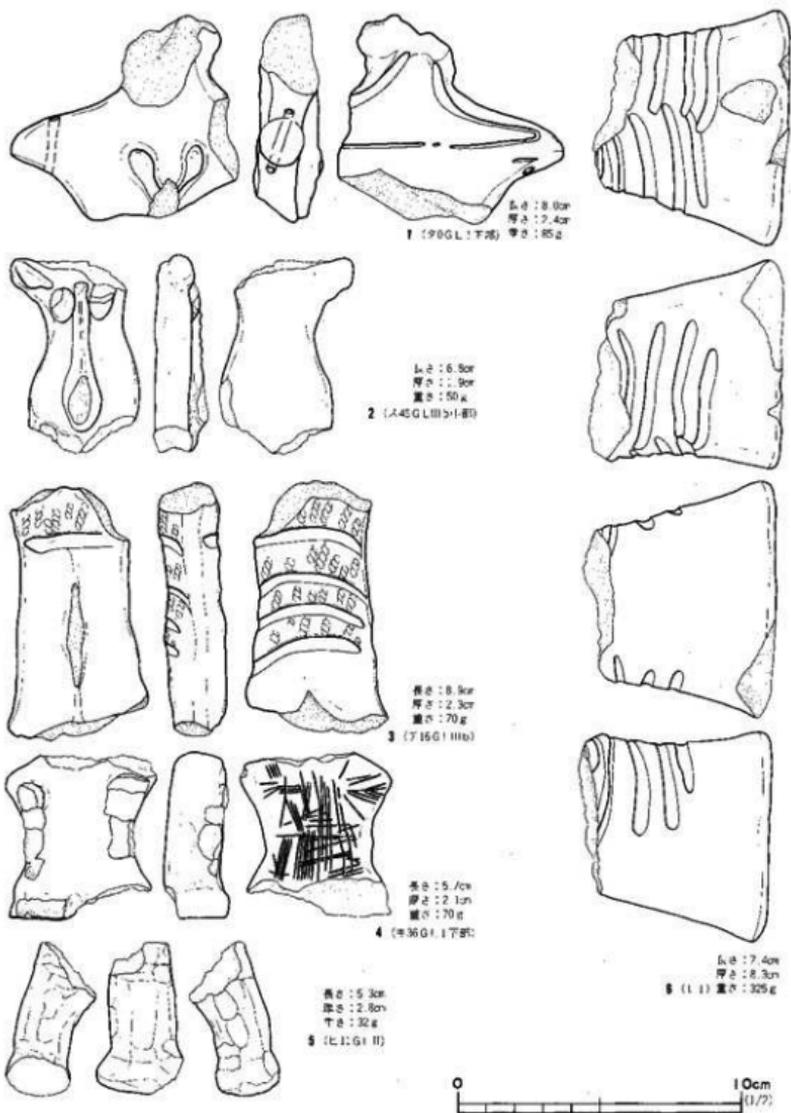
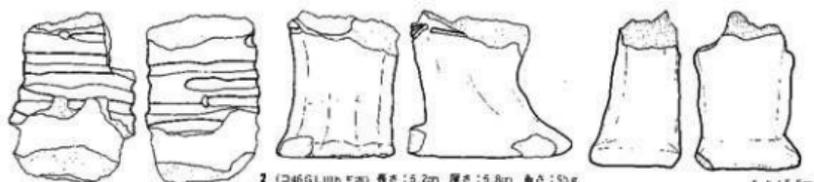
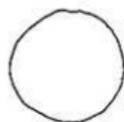


図852 包含層出土遺物 (212) 土製品



2 (D46GLIIIb F面) 長さ: 5.2cm 厚さ: 5.8cm 重さ: 50g



長さ: 3.6cm
厚さ: 3.0cm
重さ: 79g

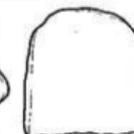
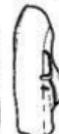
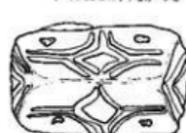


長さ: 5.6cm

厚さ: 3.7cm

重さ: 46g

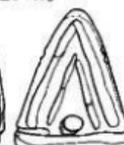
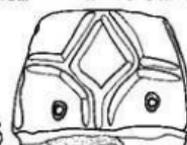
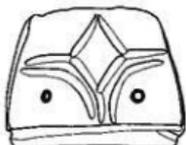
1 (F38GLI下側) 厚さ: 100g



6 (F1GLIII) 長さ: 4.6cm 厚さ: 2.0cm 重さ: 36g

長さ: 4.6cm

厚さ: 1.3cm



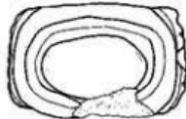
長さ: 2.7cm

厚さ: 2.6cm

重さ: 10g



7 (F46GLIIIb中側) 長さ: 6.3cm 厚さ: 4.1cm 重さ: 132g



長さ: 3.4cm

厚さ: 1.8cm

重さ: 13g

8 (F15GLI下側) 長さ: 3.6cm 厚さ: 2.7cm 重さ: 34g



長さ: 3.2cm

厚さ: 1.9cm

重さ: 15g

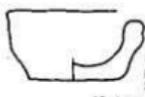
長さ: 3.1cm

厚さ: 1.0cm

重さ: 17g

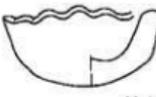
11 (F244GLI下側) 重さ: 15g

12 (F31GLIIIb下側)



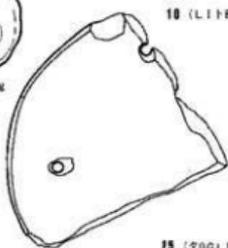
口径: 5.7cm
底径: 3.0cm
器高: 2.4cm

13 (F28GLIIIb下側)



口径: 5.5cm
器高: 2.8cm

14 (F74GLI下側)



15 (F96GLI) 口径: 10.2cm
器高: 1.7cm

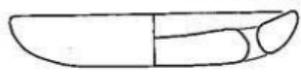


図853 包含層出土遺物 (213) 複製品

第2章 遺構と遺物



図854 包ヶ谷出土遺物(214) 土表片

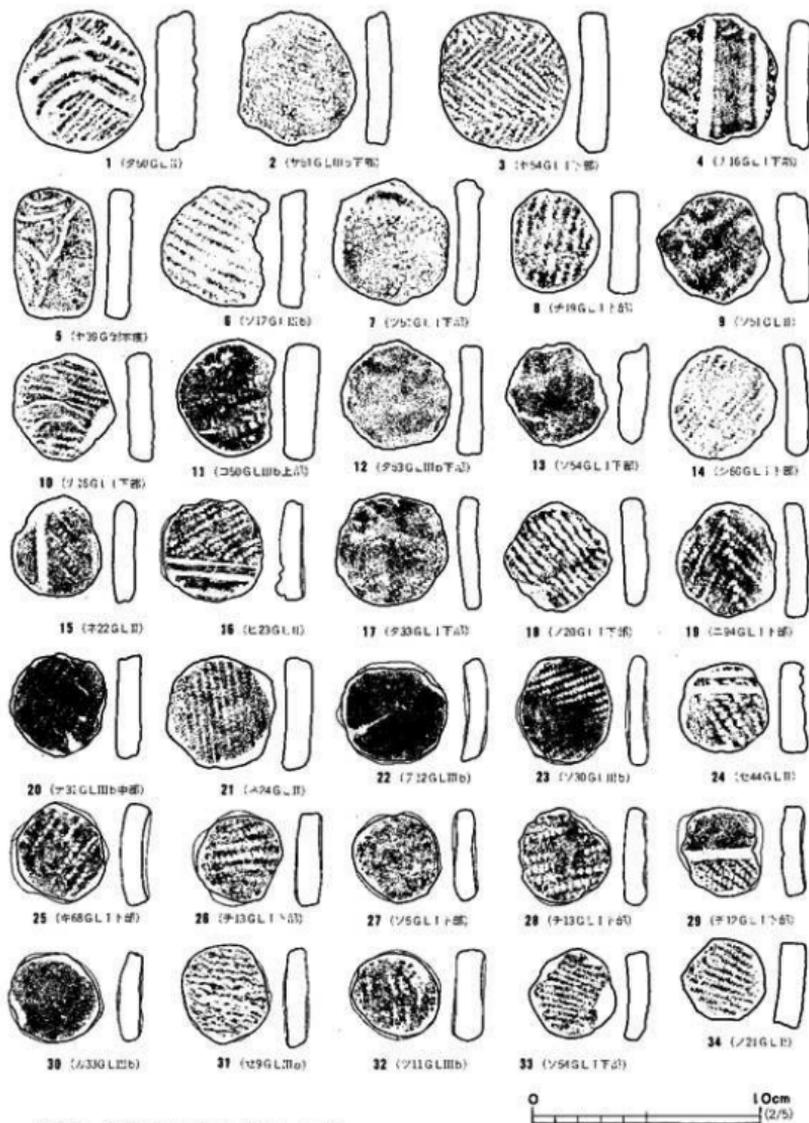


図855 包含層出土遺物 (215) 土製品

少ない。

石 製 品

法正灰遺跡からは三脚石器・垂飾り・岩隅や器状の石製品が出土している。本項ではこれらの石製品について器種ごとに報告する。

三脚石器(図856)

総数6点(図856-1~6)出土している。図856-1・2を除く5点の頂点部には石棒の頭部と近似する三角形の突起が作り出されている。図856-1・2は側縁部に、1では頂点の突起下部にも隆帯状の高まりを作り出している。同図3・4には細い沈線文が施され、3の器表面中央には浅い窪みが見られ、沈線はこれを中心に放射状をなすように施されている。原材にはいずれも柔らかい凝灰岩系統の石が用いられている。図856-1・2は各頂点部に突起は作られていないが、石器自体の断面形が他の三脚石器と同じであることからこれに含めて考えている。これらの石器はいずれも、器面に擦りが加えられている。

打製三脚石器(図856・857)

総数7点(図856-7~857-4)出土した。器面全面に調整剥離が加えられ、裏面と側縁部は特に丁寧に調整している。突出する脚部の断面形は台形状をなしている。図856-8と図857-1の側縁部は、他のもの比べて深く抉られている。

垂 飾 り(図857)

総数3点(図857-9~11)出土している。図857-11は楕円形状を呈するもので、上端部には表裏面から穿孔された穴が見られる。この孔から頂点に向かって溝が作られ、これと対応する下縁部にも刻みを持つ。器面は擦りを加え平滑に仕上げられ、表面には断面がV字状をなす細い沈線が施されている。同図10は三角形をなすもので、上端部に僅かであるが孔の痕跡を残している。遺存部の状態から孔の周辺は擠み状に僅かに突出するものと考えられる。同図9は偏平な円形の小礫の側縁部を穿孔している。いずれも、器面全面に擦りが加えられている。

器 状 石 製 品(図857・858)

総数3点(図857-13~858-2)出土している。いずれも柔らかい石を原材とし、削りによって形を整えている。図858-1の窪みの内面には、工具痕と考えられる弧状の沈線が残っている。同図2の窪み内面は擦りにより平坦になっている。図857-13は底縁部に近接して1条の沈線が施されている。

岩 版(図858)

図858-4・5の2点出土している。いずれも、偏平な礫の一部に沈線文を施すものである。顔・手・足などの表現はなく、沈線による文様もある特定なものを表現しているとは考えられない。

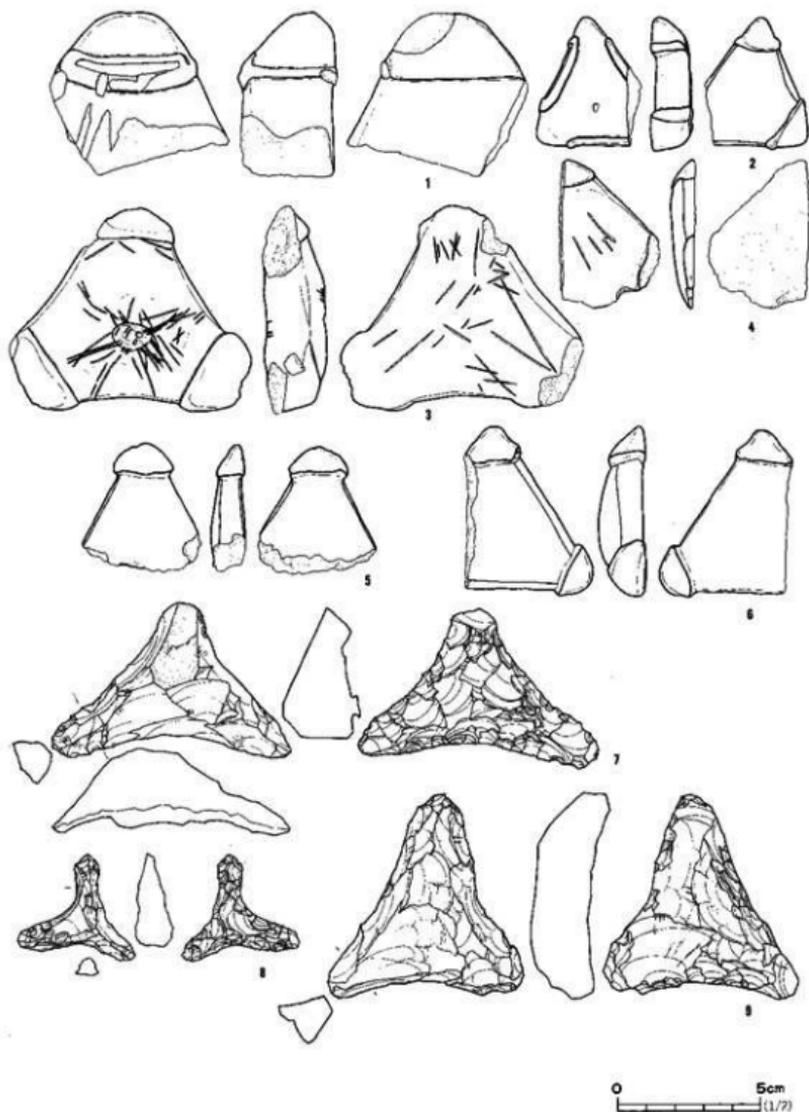


圖856 包含層出土遺物 (216) 石製品

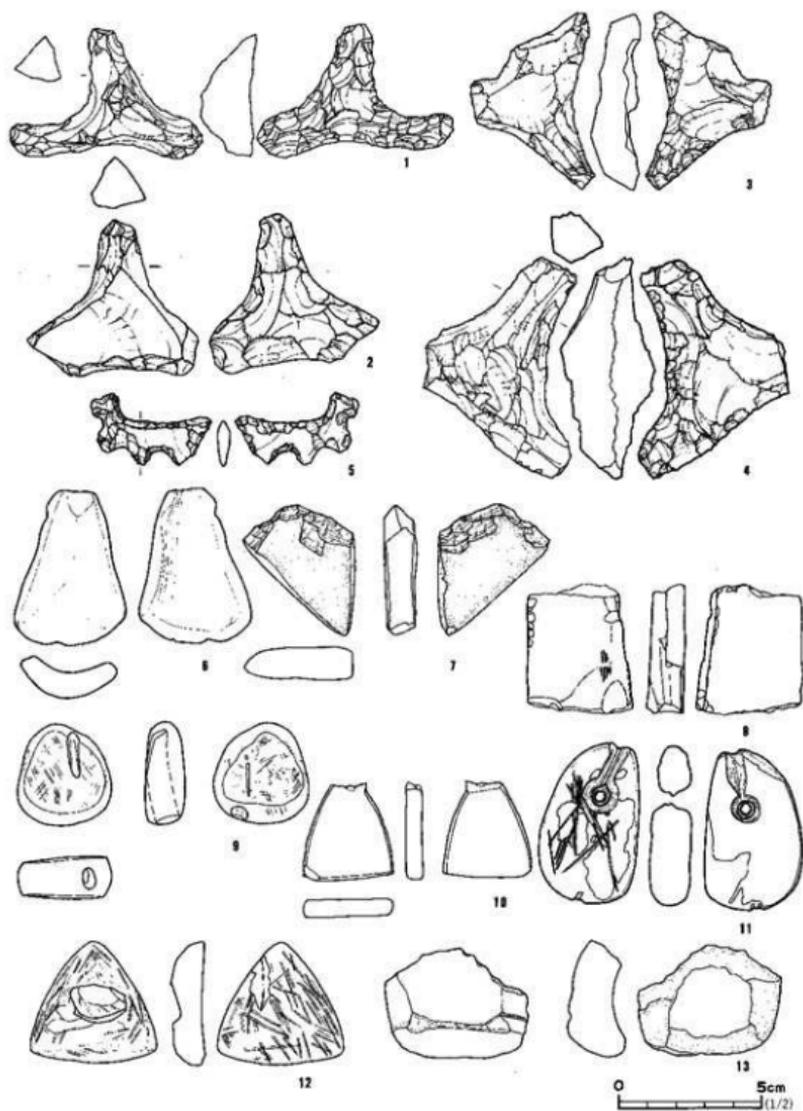


図857 包含層出土遺物 (217) 石製品

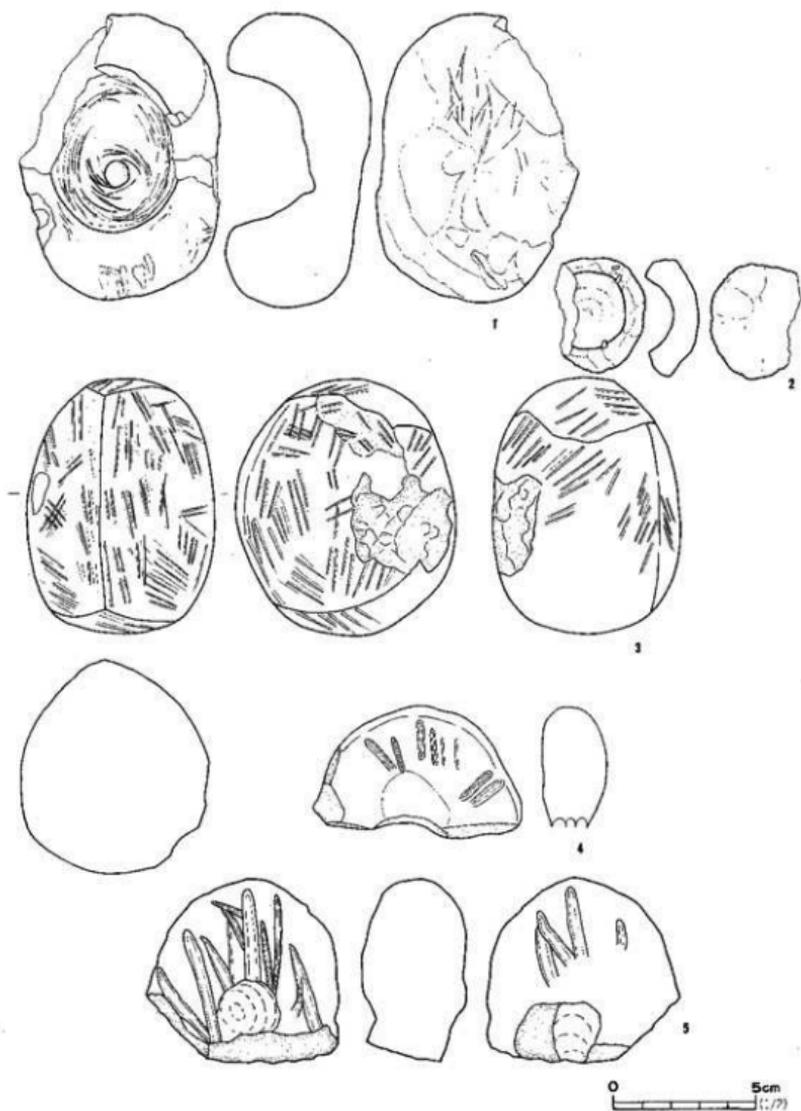


圖858 包含層出土遺物 (218) 石製品

第2章 遺構と遺物

とから岩版とした。

その他の石製品 (図857・858)

図857-5は動物の形態を模した石器であろうか、調整剝離を加えて頭部・手・足を作り出している。同図6は靴べら状の石製品で、断面は緩く湾曲している。同図7・8は板状を呈するもので、7の右側縁、8の両側縁には擦りが加えられている。いずれも断片であるため、もとの形態は不明である。図858-3は三角形に近い断面形を持つ石製品で、上面中央の稜は強い。形態的には三角柱状土製品に近似するものと考えている。器外面には削りの時に着いたと考えられる、沈線状の工具痕が見られる。

表 14 石器観察表(1)

図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
図 19-2	3111断面	石鏃	1.8	1.7	0.2	0.8	硬質頁岩	図 56-2	3124北側面	磨石	8.8	7.5	5.4	570	安山岩
8	3112	石鏃	2.2	1.5	0.3	5.6	硬質頁岩	図 60-1	3125上	石鏃	7.9	2.7	1.0	38.1	硬質頁岩
4	3112上	石鏃	2.0	1.8	0.3	1.9	硬質頁岩	2	3125上	石鏃	5.7	2.8	0.7	8.2	硬質頁岩
5	3112北側面	石鏃	1.9	2.0	0.6	1.9	硬質頁岩	3	3125上	不定形石鏃	5.0	4.9	2.1	23.9	硬質頁岩
6	3112断面	石鏃	4.4	2.3	0.7	5.0	硬質頁岩	4	3125上	不定形石鏃	7.4	6.0	1.0	37.9	硬質頁岩
7	3111	石鏃	4.3	2.9	0.7	15.3	硬質頁岩	5	3125上	石鏃	6.1	4.7	2.1	11.7	硬質頁岩
8	3111	石鏃	7.5	2.6	1.0	30.5	硬質頁岩	6	3125上	磨石	5.4	3.9	0.9	25.3	細粒凝灰岩
9	3111	不定形石鏃	5.6	4.5	1.3	23.9	硬質頁岩	7	3125上	磨石	9.8	8.4	5.4	430	安山岩
10	3111	不定形石鏃	4.1	1.7	1.0	8.6	凝灰岩	図 62	3125断面	磨石	12.3	8.9	6.4	300	安山岩
11	3117	不定形石鏃	5.0	2.9	0.5	10.0	凝灰岩	13	3125断面	磨石	14.7	7.9	6.0	1250	安山岩
12	3111	不定形石鏃	3.4	1.6	0.5	3.6	硬質頁岩	12	3125断面	磨石	13.2	6.7	4.4	550	安山岩
13	3111	不定形石鏃	5.4	2.2	1.2	15.1	硬質頁岩	13	3125断面	磨石	6.2	3.7	1.3	25.9	硬質頁岩
14	3111	不定形石鏃	4.6	4.4	0.7	17.8	硬質頁岩	14	3125断面	不定形石鏃	4.6	2.0	0.6	3.7	凝灰岩
15	3111	不定形石鏃	3.0	2.5	1.1	6.2	硬質頁岩	15	3125断面	不定形石鏃	7.6	4.5	0.8	21.2	硬質頁岩
16	3111	石鏃	3.3	3.4	2.0	25.5	硬質頁岩	16	3125断面	不定形石鏃	4.5	2.1	0.6	6.9	硬質頁岩
17	3111	石鏃	5.8	5.4	3.0	103.8	凝灰岩	17	3125断面	不定形石鏃	4.6	3.4	1.1	9.1	凝灰岩
18	3117	磨石	6.1	7.1	2.0	130	粗粒凝灰岩	図 60-2	3129上	磨石	28.6	9.3	7.1	2000	安山岩
19	3111	磨石	10.5	6.7	3.8	460	安山岩	3	3129断面	磨石	16.0	4.6	3.5	370	安山岩
20	3111	磨石	12.7	7.6	4.1	460	安山岩	4	3129上	磨石	17.8	3.9	2.8	250	シムト岩
図 20-1	3112上	磨石	14.1	5.9	3.7	1130	安山岩	5	3129上	磨石	10.4	3.4	6.3	890	安山岩
2	3124上	磨石	10.5	7.4	4.6	470	安山岩	6	3129断面	磨石	11.5	5.9	5.4	610	安山岩
3	3112上	石鏃	16.7	9.0	3.0	490	中粒砂岩	図 70-2	3130上	磨石	10.0	5.8	2.0	119.9	硬質頁岩
4	3121上	石鏃	14.9	10.8	4.9	1030	安山岩	3	3130上	不定形石鏃	10.3	6.0	2.3	36.8	硬質頁岩
図 21-1	3132上	石鏃	2.5	1.8	0.6	1.6	硬質頁岩	4	3130上	不定形石鏃	11.7	8.9	1.8	120.7	硬質頁岩
2	3132上	磨石	3.4	2.7	0.7	9.1	硬質頁岩	5	3130断面	石鏃	3.7	2.2	0.7	5.7	硬質頁岩
3	3132上	不定形石鏃	3.7	4.0	0.7	14.3	凝灰岩	6	3130上	磨石	10.3	7.3	6.4	470	安山岩
4	3132上	磨石	8.5	3.9	1.1	42.3	硬質頁岩	7	3130上	磨石	12.0	8.2	6.3	780	安山岩
5	3132上	石鏃(未)	3.4	2.4	0.4	2.8	細粒凝灰岩	8	3130上	磨石	9.0	8.4	6.4	690	安山岩
図 22-2	3134断面	磨石	8.7	6.9	3.6	410	安山岩	9	3130上	磨石	14.8	8.2	3.4	480	細粒凝灰岩
図 22-3	3149上	磨石	11.6	5.6	3.8	630	安山岩	10	3130上	磨石	11.1	6.0	5.8	800	花崗閃緑岩
図 23-10	3157上	磨石	8.0	7.7	4.1	380	花崗閃緑岩	図 74-1	3158断面	磨石	3.2	2.4	1.4	21.2	硬質頁岩
11	3158上	尖頭器	6.4	3.7	1.6	22.8	凝灰岩	2	3158上	不定形石鏃	4.0	2.5	1.1	16.0	凝灰岩
12	3158断面	尖頭器	5.0	2.6	1.1	9.8	硬質頁岩	3	3158上	不定形石鏃	4.7	4.1	0.1	14.3	硬質頁岩
13	3157上	磨石(石)	3.8	3.5	1.2	15.0	安山岩	4	3158上	石鏃	3.4	2.1	0.5	3.8	凝灰岩
図 24-2	3159上	磨石	6.2	3.9	0.9	10.9	砂質凝灰岩	5	3157上	磨石	5.0	3.8	1.4	81.0	凝灰岩
3	3158断面	磨石(石)	9.0	3.1	2.6	324	凝灰岩	6	3158上	磨石	7.7	7.6	1.6	49.5	凝灰岩
4	3159上	磨石	9.2	8.3	5.2	540	安山岩	7	3158上	石鏃	4.6	3.2	0.8	8.6	凝灰岩
5	3158断面	不定形石鏃	6.3	2.9	1.2	30.6	硬質頁岩	8	3158上	磨石	9.5	6.4	4.0	400	安山岩
図 25-5	3161断面	磨石	8.3	6.7	2.6	350	安山岩	9	3162上	磨石	6.0	5.8	4.5	380	安山岩
6	3161断面	不定形石鏃	3.2	3.0	1.1	8.6	硬質頁岩	10	3162上	石鏃	4.0	25.7	6.5	2750	安山岩
図 27-8	3163断面	磨石	15.1	7.6	5.9	860	安山岩	11	3162上	磨石	24.4	20.3	8.3	11900	安山岩
9	3163断面	磨石	10.5	8.1	4.8	630	安山岩	図 79-2	3163断面	不定形石鏃	5.5	5.8	1.3	42.8	硬質頁岩
10	3163断面	石鏃	13.5	7.2	6.4	470	安山岩	3	3163上	石鏃	7.5	3.4	1.5	19.3	硬質頁岩
図 27-7	3163断面	磨石	11.6	7.7	4.3	500	安山岩	4	3163上	磨石	7.3	4.4	1.1	24.0	硬質頁岩
3	3163断面	不定形石鏃	3.3	2.8	0.5	4.6	硬質頁岩	5	3163上	磨石	5.8	5.3	1.2	22.5	硬質頁岩
図 31-14	3167上	磨石	6.7	4.4	1.0	35.7	砂質凝灰岩	6	3163上	磨石	12.0	9.4	3.3	550	安山岩
15	3173上	磨石	8.5	5.9	1.5	38.3	凝灰岩	7	3163上	磨石	11.7	6.9	4.9	470	安山岩
16	3167上	磨石	10.3	7.7	4.4	510	安山岩	8	3163上	磨石	10.7	8.7	7.9	1050	花崗閃緑岩
17	3173断面	石鏃	18.1	18.1	9.6	2680	安山岩	9	3163断面	磨石	12.3	8.5	6.9	720	安山岩
図 33-5	3183断面	不定形石鏃	5.9	4.4	3.0	43.4	硬質頁岩	図 79-12	3184断面	磨石	12.2	6.7	4.4	490	安山岩
6	3182上	磨石	6.4	5.9	3.6	350	安山岩	13	3184断面	磨石	11.4	6.8	5.1	620	安山岩
図 34-1	3184北側面	不定形石鏃	4.0	5.3	1.9	27.4	凝灰岩	14	3184断面	磨石	12.3	8.4	6.4	960	安山岩
9	3184断面	不定形石鏃	6.5	3.9	1.3	20.2	硬質頁岩	15	3184断面	磨石(石)	6.6	6.5	1.8	100.4	砂質頁岩

表14 石器観察表(2)

図号	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石種	産地	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	石種	産地	
図79-16	S104-E2	不定形石鏃	3.7	3.0	0.5	5.0	硬質頁岩	図102-15	S104-E1	不定形石鏃	3.1	3.0	1.3	10.0	硬質頁岩
図80-6	S104E面出土	磨石	30.9	8.3	6.7	850	安山岩	図102-1	S104E面出土	不定形石鏃	4.4	4.7	1.1	27.0	硬質頁岩
8	S104-E2	不定形石鏃	4.8	3.2	0.6	10.5	硬質頁岩	2	図104伊与麻橋	磨製石鏃	5.3	6.0	3.3	330	粘板岩
図81-14	S104E面出土	不定形石鏃	4.5	1.3	0.4	4.6	硬質頁岩	3	S104-E1	磨製石鏃	8.3	5.8	2.6	190	粘板岩
14	S104E面出土	不定形石鏃	4.4	3.0	1.0	22.4	硬質頁岩	4	S104E面出土	磨製石鏃	5.8	4.1	2.4	90	粘板岩
19	S104E面出土	磨石	9.6	7.8	5.1	560	安山岩	5	S104E面出土	磨石	14.0	7.9	4.5	830	安山岩
図85-1	S104-E1	石鏃	6.9	3.1	1.3	20.5	硬質頁岩	6	S104E面出土	磨石	10.0	7.1	4.5	200	安山岩
図88-23	S104E面出土	多角石	10.4	9.2	6.2	690	安山岩	7	S104E面出土	磨石	7.5	6.1	4.0	320	安山岩
図90-16	S104E面出土	磨石	11.0	6.6	4.4	460	安山岩	8	S104-E1	磨石	13.9	9.6	4.7	890	安山岩
図92-2	S104-E2	不定形石鏃	4.1	3.6	1.3	22.2	硬質頁岩	9	S104-E1	磨石	11.9	9.6	6.1	720	粘板岩
8	S104E面出土	不定形石鏃	4.4	1.9	0.7	7.5	粘板岩	10	S104E面出土	磨石	12.7	9.2	8.2	1270	安山岩
9	S104-E1	磨石	11.4	9.9	5.8	730	安山岩	11	S104-E1	磨石	8.1	8.1	4.8	410	安山岩
図94-8	S104-E1	不定形石鏃	4.4	2.3	0.3	5.0	硬質頁岩	12	S104E面出土	磨石	12.7	9.2	5.9	830	安山岩
図98-10	S104-E1	不定形石鏃	4.8	3.1	1.3	15.3	硬質頁岩	13	S104E面出土	磨石	10.2	7.2	4.4	560	安山岩
11	S104-E1	不定形石鏃	5.4	2.3	1.5	17.8	硬質頁岩	図103-14	S104E面出土	磨石	10.4	8.1	5.8	670	安山岩
12	S104-E1	不定形石鏃	2.5	4.3	1.1	8.1	硬質頁岩	13	S104E面出土	磨石	8.0	4.7	4.7	800	安山岩
13	S104-E1	磨石	11.2	8.1	6.0	720	安山岩	図103-1	S104-E1	磨石	12.3	9.0	4.9	650	粘板岩
図100-1	S104E面出土	磨石	10.2	9.2	6.0	680	安山岩	2	S104-E1	磨石	13.9	7.5	4.5	640	安山岩
5	S104E面出土	磨石	10.4	8.7	5.6	650	安山岩	図103-15	S104-E1	磨製石鏃	4.6	4.4	1.0	50	粘板岩
図104-1	S104-E1	不定形石鏃	2.8	5.0	2.8	8.5	粘板岩	11	S104-E1	磨石	11.5	7.7	5.9	860	安山岩
6	S104-E1	不定形石鏃	2.4	2.6	0.6	2.4	硬質頁岩	15	S104-E1	磨石	12.0	8.5	4.9	550	安山岩
又100-4	S104-E2	不定形石鏃	2.8	6.5	2.2	16.9	硬質頁岩	16	S104-E1	磨石	13.0	10.0	5.1	1050	安山岩
9	S104-E2	石鏃	4.3	3.8	2.0	13.5	粘板岩	図107-12	S104-E1	磨石	10.3	9.6	5.1	590	安山岩
4	S104-E1	磨石	4.9	2.7	1.0	14.2	硬質頁岩	15	S104-E1	磨石	12.4	8.3	5.3	940	安山岩
5	S104-E1	不定形石鏃	6.1	3.0	1.1	18.0	粘板岩	14	S104-E1	磨石	9.9	3.3	3.0	895	安山岩
6	S104-E1	不定形石鏃	5.2	3.2	1.0	12.4	硬質頁岩	13	S104-E1	磨石	10.1	8.1	4.1	580	安山岩
7	S104-E1	不定形石鏃	8.0	4.8	1.4	27.1	硬質頁岩	16	S104-E1	磨石	10.2	3.6	5.8	195	粘板岩
8	S104-E1	不定形石鏃	5.7	4.1	1.0	15.0	粘板岩	図103-13	S104-E1	磨石	11.4	10.0	6.1	1160	安山岩
5	S104-E1	磨製石鏃	14.6	5.7	1.6	190	玄武岩	26	S104-E1	磨石	8.4	8.4	4.8	360	安山岩
10	S104E面出土	磨石	12.0	8.3	5.3	520	安山岩	7	S104-E1	磨石	4.2	8.6	4.3	280	安山岩
11	S104E面出土	磨石	11.3	10.9	7.0	1200	安山岩	図102-1	S104-E1	磨石	8.4	7.3	4.2	470	安山岩
図111-8	S104E面出土	石鏃	6.7	3.0	1.3	18.2	硬質頁岩	2	S104-E1	磨石	10.6	7.0	4.3	560	安山岩
9	S104-E1	不定形石鏃	7.9	2.6	1.1	19.4	硬質頁岩	3	S104-E1	磨石	2.6	4.7	3.2	180	粘板岩
10	S104-E1	不定形石鏃	4.6	3.2	1.3	11.9	硬質頁岩	4	S104-E1	石鏃	7.6	3.7	5.9	11.3	硬質頁岩
11	S104E面出土	不定形石鏃	3.2	5.2	1.4	24.7	硬質頁岩	5	S104E面出土	不定形石鏃	4.4	4.1	2.6	19.2	硬質頁岩
12	S104E面出土	磨石	7.6	4.4	2.4	19	玄武岩	6	S104-E1	石鏃	3.6	2.1	2.4	5.0	玄武岩
13	S104-E1	有角石	5.4	4.0	1.9	8.0	粘板岩	7	S104-E1	石鏃	4.2	2.8	2.1	7.5	玄武岩
図114-2	S104-E1	磨石	10.3	9.1	6.2	810	安山岩	8	S104E面出土	石鏃	2.5	2.0	0.7	6.1	粘板岩
23	S104-E1	磨石	9.2	7.4	4.4	540	安山岩	図108-19	S104-E1	石鏃	10.6	7.6	2.1	170	粘板岩
25	S104-E1	磨石	8.1	2.7	2.0	450	安山岩	13	S104E面出土	磨石	11.9	15.1	1.0	200	安山岩
26	S104E面出土	磨石	14.1	6.7	4.4	770	安山岩	14	S104E面出土	磨石	8.6	6.3	4.0	460	安山岩
図112-1	S104-E1	石鏃	4.0	1.9	1.1	5.4	硬質頁岩	16	S104-E1	磨石	9.0	8.7	5.9	570	安山岩
2	S104-E1	不定形石鏃	5.3	4.8	1.1	16.0	硬質頁岩	16	S104E面出土	磨石	11.3	9.8	5.5	630	安山岩
3	S104-E1	不定形石鏃	5.2	2.6	1.8	12.0	粘板岩	図108-1	S104E面出土	磨石	2.6	4.4	3.9	400	安山岩
4	S104-E1	打製石鏃	8.3	5.9	2.9	140	粘板岩	12	S104E1	磨石	9.5	7.9	6.8	680	安山岩
図122-5	S104-E1	磨石	8.5	7.0	4.1	320	安山岩	13	S104-E1	磨石	11.0	9.0	3.1	860	安山岩
6	S104-E1	磨石	11.0	8.5	4.9	490	安山岩	24	S104-E1	磨石	22.6	29.7	8.8	950	安山岩
7	S104-E1	磨石	10.2	8.6	5.0	740	安山岩	図107-7	S104-E1	磨石	11.2	7.3	4.8	700	安山岩
8	S104-E1	磨石	13.5	12.6	4.2	580	安山岩	7	S104-E1	磨石	11.4	10.0	6.0	920	安山岩
9	S104-E1	磨石	10.2	9.5	5.1	720	安山岩	9	S104-E1	磨石	12.0	9.8	4.8	980	安山岩
10	S104-E1	磨石	11.7	10.4	6.7	1170	安山岩	10	S104-E1	磨石	13.6	9.6	6.4	1260	安山岩
11	S104E面出土	不定形石鏃	5.6	3.7	0.8	9.3	硬質頁岩	図102-3	S104-E1	石鏃	4.4	3.3	1.0	5.4	玄武岩
12	S104-E1	石鏃	9.7	3.9	1.2	19.0	硬質頁岩	4	S104-E1	磨石	3.0	3.6	4.4	200	安山岩

表 14 石器観察表(3)

図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	石質	図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	石質										
図106-1	S279 #1-2	1 磨石	6.5	3.6	1.6	25.6	硬質頁岩	安山岩	M070-11	S279 #1-2	1 磨石	11.1	6.2	4.8	410	安山岩	M070-11	S279 #1-2	1 磨石	8.3	7.6	3.5	300	安山岩			
		2 S279 #1-2	磨石	10.3	9.5	5.1	720	安山岩			2 S279 #1-2	磨石	10.9	9.2	5.5	760			安山岩	3 S279 #1-2	磨石	4.2	4.7	1.6	23	硬質頁岩	
		3 S279 #1-2	磨石	8.8	7.1	5.0	400	安山岩			4 S279 #1-2	磨石	10.9	9.2	5.5	760			安山岩	5 S279 #1-2	磨石	10.9	9.2	5.5	760	安山岩	
図106-10	S279 #2	10 S279 #2	10.1	7.6	4.7	400	安山岩	安山岩	M070-13	S279 #2	10 S279 #2	磨石	10.9	9.2	5.5	760	安山岩	M070-13	S279 #2	10 S279 #2	磨石	10.9	9.2	5.5	760	安山岩	
		11 S279 #2	磨石	10.1	7.7	4.7	410	安山岩			11 S279 #2	磨石	10.9	9.2	5.5	760	安山岩			12 S279 #2	磨石	10.9	9.2	5.5	760	安山岩	
図106-17	S279 #1	17 S279 #1	9.7	7.4	4.0	480	安山岩	安山岩	M070-15	S279 #1	17 S279 #1	磨石	4.6	3.9	1.0	17.3	硬質頁岩	M070-15	S279 #1	17 S279 #1	磨石	4.6	3.9	1.0	17.3	硬質頁岩	
		18 S279 #1-2	心臓	5.1	4.1	4.0	43.9	硬質頁岩			安山岩	18 S279 #1-2	心臓	4.2	4.1	0.9	18.5			シルト岩	19 S279 #1-2	心臓	4.2	4.1	0.9	18.5	シルト岩
図106-3	S279 #1-2	3 S279 #1-2	7.8	7.5	4.7	530	安山岩	安山岩	M070-17	S279 #1-2	3 S279 #1-2	心臓	4.6	2.8	0.7	12.2	シルト岩	M070-17	S279 #1-2	3 S279 #1-2	心臓	4.6	2.8	0.7	12.2	シルト岩	
		4 S279 #1-2	心臓	4.2	2.0	0.7	10.9	シルト岩			4 S279 #1-2	心臓	13.6	7.6	2.2	225	シルト岩			5 S279 #1-2	心臓	4.4	3.7	0.9	18.2	シルト岩	
図106-1	S279 #1	1 不定形心臓	5.3	4.5	1.7	10.6	褐色灰岩	安山岩	M070-2	S279 #1	1 不定形心臓	5.3	4.5	1.7	10.6	褐色灰岩	安山岩	M070-2	S279 #1	1 不定形心臓	5.3	4.5	1.7	10.6	褐色灰岩	安山岩	
		2 S279 #1	不定形心臓	3.7	3.6	1.7	9.3	硬質頁岩			安山岩	2 S279 #1	不定形心臓	11.0	9.0	4.1	710			安山岩	3 S279 #1	不定形心臓	11.0	9.0	4.1	710	安山岩
		3 S279 #1	不定形心臓	8.0	4.1	2.4	80	磨石			安山岩	3 S279 #1	不定形心臓	13.3	18.1	5.5	1380			磨石	4 S279 #1	不定形心臓	13.3	18.1	5.5	1380	磨石
		4 S279 #1	磨石	13.1	8.0	4.2	690	安山岩			安山岩	4 S279 #1	磨石	11.0	9.7	5.8	760			安山岩	5 S279 #1	磨石	11.0	9.7	5.8	760	安山岩
図106-5	S279 #1	5 S279 #1	13.2	9.7	4.8	830	安山岩	安山岩	M070-13	S279 #1	5 S279 #1	磨石	8.8	8.0	3.7	1850	安山岩	M070-13	S279 #1	5 S279 #1	磨石	8.8	8.0	3.7	1850	安山岩	
		6 S279 #1	磨石	8.9	7.1	5.4	380	安山岩			6 S279 #1	磨石	5.0	3.4	0.7	140	安山岩			7 S279 #1	磨石	5.0	3.4	0.7	140	安山岩	
図106-10	S279 #2	10 S279 #2	9.2	8.9	3.5	200	安山岩	安山岩	M070-16	S279 #2	10 S279 #2	磨石	2.6	2.6	1.9	40.7	磨石	M070-16	S279 #2	10 S279 #2	磨石	2.6	2.6	1.9	40.7	磨石	
		11 S279 #2	磨石	9.0	8.1	4.8	830	安山岩			11 S279 #2	磨石	11.7	5.1	2.6	790	磨石			12 S279 #2	磨石	11.7	5.1	2.6	790	磨石	
図106-12	S279 #1	12 S279 #1	4.1	1.9	0.6	4.5	流紋岩	安山岩	M070-17	S279 #1	12 S279 #1	磨石	8.5	6.9	3.7	240	安山岩	M070-17	S279 #1	12 S279 #1	磨石	8.5	6.9	3.7	240	安山岩	
		13 S279 #1	磨石	8.7	7.9	3.8	480	安山岩			13 S279 #1	磨石	11.1	8.7	6.1	860	安山岩			14 S279 #1	磨石	11.0	8.6	4.6	740	安山岩	
図106-16	S279 #1	16 S279 #1	6.6	10.1	2.0	190	安山岩	安山岩	M070-7	S279 #1	16 S279 #1	磨石	9.9	7.8	4.5	440	安山岩	M070-7	S279 #1	16 S279 #1	磨石	9.9	7.8	4.5	440	安山岩	
		17 S279 #1	磨石	16.8	9.7	5.3	770	安山岩			17 S279 #1	磨石	5.0	3.4	0.7	140	安山岩			18 S279 #1	磨石	5.0	3.4	0.7	140	安山岩	
M070-1	S279 #1	1 S279 #1	15.1	18.2	3.9	820	安山岩	安山岩	M070-12	S279 #1	1 S279 #1	磨石	4.1	3.7	0.6	8.2	シルト岩	M070-12	S279 #1	1 S279 #1	磨石	4.1	3.7	0.6	8.2	シルト岩	
		2 S279 #2	不定形心臓	6.3	2.0	1.7	17.5	磨石			安山岩	2 S279 #2	不定形心臓	5.9	3.8	0.9	32.5			硬質頁岩	3 S279 #2	不定形心臓	4.6	4.9	1.0	24.0	硬質頁岩
図106-2	S279 #1	2 S279 #1	6.2	5.9	1.9	60.0	磨石	安山岩	M070-14	S279 #1	2 S279 #1	磨石	8.8	8.0	2.8	220	安山岩	M070-14	S279 #1	2 S279 #1	磨石	11.5	10.0	4.9	760	安山岩	
		3 S279 #1	磨石	7.5	6.3	4.2	360	安山岩			3 S279 #1	磨石	7.9	6.4	4.7	320	安山岩			4 S279 #1	磨石	4.9	3.2	0.8	15.2	シルト岩	
図106-3	S279 #1	3 S279 #1	9.1	8.5	4.0	420	安山岩	安山岩	M070-7	S279 #1	3 S279 #1	磨石	10.9	9.0	5.1	530	安山岩	M070-7	S279 #1	3 S279 #1	磨石	10.9	9.0	5.1	530	安山岩	
		4 S279 #1	磨石	11.6	9.6	2.0	420	安山岩			4 S279 #1	磨石	11.6	9.6	2.0	420	安山岩			5 S279 #1	磨石	11.6	9.6	2.0	420	安山岩	
図106-1	S279 #1	1 S279 #1	8.8	2.1	0.6	12.8	硬質頁岩	安山岩	M070-18	S279 #1	1 S279 #1	磨石	7.9	6.4	4.7	320	安山岩	M070-18	S279 #1	1 S279 #1	磨石	7.9	6.4	4.7	320	安山岩	
		2 S279 #1	磨石	4.9	3.4	0.9	13.2	硬質頁岩			安山岩	2 S279 #1	磨石	4.9	3.2	0.8	15.2			シルト岩	3 S279 #1	磨石	5.8	4.2	1.0	32.9	シルト岩
図106-5	S279 #1	5 S279 #1	5.9	5.0	0.8	74.0	シルト岩	安山岩	M070-7	S279 #1	5 S279 #1	磨石	10.9	8.0	5.1	530	安山岩	M070-7	S279 #1	5 S279 #1	磨石	10.9	8.0	5.1	530	安山岩	
		6 S279 #1	磨石	3.7	3.6	0.7	5.8	シルト岩			安山岩	6 S279 #1	磨石	16.6	16.9	6.9	1900			安山岩	7 S279 #1	磨石	3.4	2.6	0.7	6.1	シルト岩
図106-9	S279 #1	9 S279 #1	2.3	5.3	2.1	40.9	硬質頁岩	安山岩	M070-8	S279 #1	9 S279 #1	磨石	3.7	3.2	2.3	110	安山岩	M070-8	S279 #1	9 S279 #1	磨石	3.7	3.2	2.3	110	安山岩	
		10 S279 #1	磨石	8.9	7.9	3.7	330	安山岩			10 S279 #1	磨石	8.2	8.2	3.0	300	安山岩			11 S279 #1	磨石	11.5	8.0	4.6	570	安山岩	
図106-11	S279 #1	11 S279 #1	7	5.7	3.4	1.3	12.8	磨石	安山岩	M070-4	S279 #1	11 S279 #1	磨石	13.4	5.9	6.6	1170	安山岩	M070-4	S279 #1	11 S279 #1	磨石	13.4	5.9	6.6	1170	安山岩
		12 S279 #1	磨石	7.9	6.8	2.8	290	安山岩	12 S279 #1			磨石	13.4	5.9	6.6	1170	安山岩	13 S279 #1			磨石	13.4	5.9	6.6	1170	安山岩	
図106-6	S279 #1	6 S279 #1	16.3	13.9	11.1	2000	安山岩	安山岩	M070-19	S279 #1	6 S279 #1	磨石	10.4	10.2	6.1	840	安山岩	M070-19	S279 #1	6 S279 #1	磨石	10.4	10.2	6.1	840	安山岩	
		7 S279 #1	磨石	8.2	7.5	5.0	310	安山岩			7 S279 #1	磨石	11.6	8.1	5.0	640	安山岩			8 S279 #1	磨石	5.3	5.1	1.9	40.0	磨石	
図106-15	S279 #2	15 S279 #2	21.2	20.2	8.2	2390	安山岩	安山岩	M070-18	S279 #2	15 S279 #2	磨石	4.6	3.5	0.9	19.9	シルト岩	M070-18	S279 #2	15 S279 #2	磨石	4.6	3.5	0.9	19.9	シルト岩	
		16 S279 #2	磨石	8.7	8.9	5.6	630	安山岩			16 S279 #2	磨石	5.2	4.7	0.7	17.7	シルト岩			17 S279 #2	磨石	9.1	6.6	4.1	410	安山岩	
図106-16	S279 #1	16 S279 #1	9.0	8.3	6.9	670	安山岩	安山岩	M070-9	S279 #1	16 S279 #1	磨石	10.4	8.2	5.5	660	安山岩	M070-9	S279 #1	16 S279 #1	磨石	10.4	8.2	5.5	660	安山岩	
		17 S279 #1	磨石	13.3	6.2	3.7	480	安山岩			17 S279 #1	磨石	4.7	3.6	0.8	16.0	シルト岩			18 S279 #1	磨石	4.2	3.0	0.8	14.0	シルト岩	
M070-6	S279 #1	6 S279 #1	5.9	3.4	1.1	26.0	硬質頁岩	安山岩	M070-10	S279 #1	6 S279 #1	磨石	4.7	3.6	0.8	16.0	シルト岩	M070-10	S279 #1	6 S279 #1	磨石	4.7	3.6	0.8	16.0	シルト岩	
		7 S279 #1	磨石	10.5	8.2	3.2	270	安山岩			7 S279 #1	磨石	4.2	3.0	0.8	14.0	シルト岩			8 S279 #1	磨石	4.2	3.0	0.8	14.0	シルト岩	
図106-7	S279 #1	7 S279 #1	4.2	2.8	0.7	8.7	硬質頁岩	安山岩	M070-11	S279 #1	7 S279 #1	磨石	4.2	3.0	0.5	10.1	シルト岩	M070-11	S279 #1	7 S279 #1	磨石	4.2	3.0	0.5	10.1	シルト岩	
		8 S279 #1	磨石	7.4	4.3	2.0	6.6	硬質頁岩			安山岩	8 S279 #1	磨石	11.5	8.0	5.5	840			安山岩	9 S279 #1	磨石	11.5	8.0	5.5	840	安山岩
図106-11	S279 #1	11 S279 #1	20.6	21.6	3.9	3260	安山岩	安山岩	M070-10	S279 #1	11 S279 #1	磨石	6.7	3.4	1.1	14.4	硬質頁岩	M070-10	S279 #1	11 S279 #1	磨石	6.7	3.4	1.1	14.4	硬質頁岩	
		12 S279 #1	磨石	11.1	14.0	4.7	970	安山岩			12 S279 #1	磨石	3.4	3.8	1.4	15.3	硬質頁岩			13 S279 #1	磨石	5.6	8.2	4.0	800	安山岩	
M070-8	S279 #1	8 S279 #1	11.8	10.6	6.3	1070	安山岩	安山岩																			

第2章 遺構と遺物

表14 石器観察表(4)

図号	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	部号	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
30257-3	S115埋藏土	磨石	9.5	8.8	7.0	800	安山岩	30257-9	S115埋藏土	石錐	6.4	5.7	0.8	71.1	硬質頁岩
30259-8	S115埋藏土	石錐	3.6	3.0	3.3	36.4	硬質頁岩	30259-10	S1231-E1	削片	6.1	2.8	1.2	30.2	硬質頁岩
30263-3	S115埋藏土	磨石	11.7	5.8	3.8	300	輝綠岩	30263-11	S1235埋藏土	不定形石器	4.3	4.3	1.1	34.8	硬質頁岩
30269-7	S1232-E2	磨石	11.6	7.4	5.0	440	安山岩	30269-12	S1239埋藏土	石錐	3.7	3.5	1.4	30.5	硬質頁岩
8	S115埋藏土	磨石	2.7	2.2	0.4	1.8	輝綠岩	30269-13	S1123埋藏土	不定形石器	5.0	3.1	0.7	5.2	硬質頁岩
9	S115埋藏土	磨石	2.1	2.0	0.9	3.0	輝綠岩	30269-14	S1234、255埋藏土	不定形石器	3.8	6.4	1.6	50.7	硬質頁岩
30266-16	埋藏土層 埋藏土下層	不定形石器	7.7	5.8	1.6	70.0	硬質頁岩	30266-15	S1232埋藏土	不定形石器	2.9	2.5	0.8	7.4	輝綠岩
30272-11	S1132埋藏土	磨石	11.1	9.3	4.6	730	安山岩	30272-1	S1237埋藏土	削片	8.4	8.5	2.0	85.9	硬質頁岩
30277-7	S115埋藏土	磨石	6.1	7.8	3.3	170	安山岩	30277-2	S1231-E1	石錐	3.7	4.3	1.1	25.8	硬質頁岩
8	S115埋藏土	磨石	6.7	6.9	1.8	80.0	硬質頁岩	30277-3	S1239埋藏土	不定形石器	4.6	4.0	1.0	15.7	硬質頁岩
30279-9	S115埋藏土	磨石	12.3	9.2	5.5	780	安山岩	30279-4	S1234埋藏土	不定形石器	4.8	3.0	1.3	22.2	硬質頁岩
10	S115埋藏土	磨石	11.7	8.2	4.7	680	安山岩	30279-5	S1234埋藏土	不定形石器	6.9	4.3	1.3	7.8	硬質頁岩
11	S115埋藏土	不定形石器	5.2	2.0	1.1	10.5	硬質頁岩	30279-6	S1235埋藏土	不定形石器	4.4	7.7	1.0	30.4	輝綠岩
12	S115埋藏土	不定形石器	6.3	4.2	1.1	30.0	硬質頁岩	30279-7	S1234埋藏土	石錐	4.9	2.8	0.7	9.8	シロト岩
13	S115埋藏土	石錐	5.2	5.9	2.5	70.0	輝綠岩	30279-8	S1234埋藏土	石錐	4.0	2.9	0.6	5.7	シロト岩
30284-1	S1244-E6	不定形石器	3.0	3.7	1.1	22.8	硬質頁岩	30284-10	S1244埋藏土	磨石	6.6	5.7	3.4	60.4	輝綠岩
2	S1237-E2	石錐	3.2	3.7	1.3	13.1	硬質頁岩	30284-11	S1244埋藏土	不定形石器	6.0	3.5	1.3	20.8	硬質頁岩
3	S1237埋藏土中層	石錐	3.8	4.2	1.2	16.0	輝綠岩	30284-12	S1244埋藏土	不定形石器	5.2	5.1	1.0	36.0	硬質頁岩
4	S1237埋藏土中層	不定形石器	4.7	3.0	0.8	18.0	硬質頁岩	30284-13	S1237埋藏土	磨石	7.6	4.4	1.8	17.2	硬質頁岩
5	S1237埋藏土上層	石錐	2.8	1.9	0.7	3.8	硬質頁岩	30284-14	S1237埋藏土上層	石錐	5.5	2.6	1.3	20.5	硬質頁岩
6	S1237埋藏土上層	石錐	2.8	2.3	1.1	7.5	輝綠岩	30284-15	S1237埋藏土	尖頭	8.8	3.1	1.4	105.0	燧石
7	S1237埋藏土中層	不定形石器	4.9	2.0	0.6	4.5	輝綠岩	30284-16	S1237埋藏土	不定形石器	6.3	5.3	1.2	46.6	硬質頁岩
8	S1237-E3	不定形石器	4.0	3.9	0.5	12.5	硬質頁岩	30284-17	S1237埋藏土	不定形石器	6.9	4.3	1.4	13.1	硬質頁岩
9	S1244-E5	不定形石器	7.2	4.2	1.3	49.1	硬質頁岩	30284-18	S1237埋藏土	不定形石器	6.2	2.7	0.4	7.2	硬質頁岩
10	S1237埋藏土	不定形石器	5.4	2.3	0.8	10.9	硬質頁岩	30284-19	S1237埋藏土	不定形石器	5.9	4.5	1.1	30.3	硬質頁岩
11	S1237-E1	不定形石器	4.2	3.1	0.9	11.3	硬質頁岩	30284-20	S1237埋藏土	不定形石器	5.3	3.1	0.6	42.0	輝綠岩
12	S1237埋藏土	石錐	4.9	3.1	1.8	22.3	硬質頁岩	30284-21	S1237埋藏土	削片	6.4	3.1	0.6	13.1	硬質頁岩
13	S1237-E1	不定形石器	2.5	2.8	0.8	12.1	硬質頁岩	30284-22	S1237埋藏土	不定形石器	5.5	6.0	1.8	38.0	硬質頁岩
14	S1237-E1	削片	3.1	2.3	0.5	4.0	硬質頁岩	30284-23	S1237埋藏土	不定形石器	3.4	4.6	2.1	80.0	硬質頁岩
15	S1237埋藏土上層	不定形石器	3.5	1.9	0.5	4.3	硬質頁岩	30284-24	S1237埋藏土	不定形石器	2.7	3.1	1.2	64.5	硬質頁岩
16	S1237埋藏土	石錐	1.8	2.8	2.1	22.3	硬質頁岩	30284-25	S1237埋藏土	石錐	4.0	5.9	0.8	10.7	硬質頁岩
17	S1237埋藏土上層	不定形石器	2.7	2.8	0.8	12.9	硬質頁岩	30284-26	S1237埋藏土	削片	5.0	4.6	0.9	38.2	硬質頁岩
18	S1237埋藏土	石錐	3.8	2.2	0.5	3.7	硬質頁岩	30284-27	S1237埋藏土	削片	4.8	2.7	0.7	10.8	硬質頁岩
30285-1	S1244-E1	石錐	3.5	4.4	3.1	74.3	硬質頁岩	30284-28	S1244埋藏土	不定形石器	3.7	3.0	1.3	25.3	硬質頁岩
2	S1244埋藏土	削片	5.6	3.7	1.0	13.8	硬質頁岩	30284-29	S1244埋藏土	不定形石器	4.5	4.8	0.7	30.0	硬質頁岩
3	S1244-E1+2	不定形石器	2.8	3.0	1.1	34.5	硬質頁岩	30284-30	S1237埋藏土下層	石錐	6.5	3.2	4.1	131.0	輝綠岩
4	S1244-E1+2	不定形石器	5.4	5.0	1.0	21.0	硬質頁岩	30284-31	S1237埋藏土	石錐	2.6	2.9	1.3	10.2	硬質頁岩
5	S1244-E1+2	不定形石器	6.1	3.1	0.7	30.1	輝綠岩	30284-32	S1237埋藏土下層	削片	3.7	5.0	1.7	17.3	硬質頁岩
6	S1244-E1+2	不定形石器	6.6	2.9	1.2	10.4	硬質頁岩	30284-33	S1237埋藏土	不定形石器	4.1	4.4	0.7	9.9	硬質頁岩
7	S1244-E1+2	不定形石器	4.7	4.9	1.1	38.3	輝綠岩	30284-34	S1237埋藏土	石錐	4.9	3.4	1.6	21.2	燧石
8	S1244埋藏土	削片	6.0	3.3	1.0	14.5	硬質頁岩	30284-35	S1237埋藏土	石錐	5.5	3.0	1.1	14.6	燧石
9	S1244-E1+2	削片	4.5	3.0	1.7	22.8	硬質頁岩	30284-36	S1237埋藏土	不定形石器	5.4	7.0	1.4	41.2	硬質頁岩
10	S1237埋藏土上層	不定形石器	4.0	4.0	1.1	18.8	輝綠岩	30284-37	S1237埋藏土	不定形石器	6.1	6.1	1.4	48.4	硬質頁岩
11	S1237埋藏土上層	不定形石器	8.0	4.8	1.0	31.0	輝綠岩	30284-38	S1237埋藏土	一角状石錐	7.3	6.4	0.7	33.0	輝綠岩
12	S1237埋藏土	不定形石器	3.4	3.7	0.8	15.6	硬質頁岩	30284-39	S1237埋藏土	不定形石器	4.5	3.9	0.7	9.7	硬質頁岩
30286-1	S1232埋藏土	打製石錐	4.4	4.6	1.6	15.7	輝綠岩	30286-10	S1232埋藏土	不定形石器	5.6	5.8	0.9	31.0	硬質頁岩
2	S1237埋藏土中層	不定形石器	8.4	4.1	2.1	60.9	硬質頁岩	30286-11	S1232埋藏土	不定形石器	5.5	4.1	1.1	21.5	硬質頁岩
3	S1237埋藏土中層	不定形石器	3.1	3.9	1.4	18.4	輝綠岩	30286-12	S1232埋藏土	不定形石器	4.6	2.3	0.6	7.1	硬質頁岩
4	S1237埋藏土	不定形石器	2.9	1.5	0.4	2.9	硬質頁岩	30286-13	S1237埋藏土	不定形石器	3.9	2.5	1.0	12.3	硬質頁岩
5	S1237埋藏土	不定形石器	3.2	4.7	0.4	4.7	硬質頁岩	30286-14	S1237埋藏土	石錐	8.4	1.5	1.1	12.0	硬質頁岩
6	S1237-E3	不定形石器	2.9	3.2	1.1	14.0	硬質頁岩	30286-15	S1237埋藏土	不定形石器	4.9	4.5	1.4	28.7	硬質頁岩
7	S1237埋藏土	不定形石器	4.5	2.6	0.7	15.3	硬質頁岩	30286-16	S1237埋藏土	不定形石器	3.6	1.7	0.4	2.0	硬質頁岩
8	S1237埋藏土	石錐	3.0	4.4	0.8	10.7	硬質頁岩	30286-17	S1237埋藏土	不定形石器	6.5	6.5	1.3	31.1	輝綠岩

表 14 石器観察表(5)

図号	出土位置	器名	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	材質	図号	出土位置	器名	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	材質			
1001	5 DK119埋藏土	6型野山石	3.4	3.4	2.8	3.6	硬質頁岩	1002	8 SK109埋藏土	野山石	10.8	9.6	4.9	200	安山石	
	6 SK119埋藏土	6型野山石	2.1	2.5	1.4	4.2	硬質頁岩		9 SK109埋藏土	野山石	8.7	8.1	4.8	400	安山石	
	7 SK119埋藏土	石鏡	0.0	2.7	2.4	45.8	硬質頁岩		10 SK109埋藏土	野山石	10.3	9.6	2.4	200	硬質頁岩	
	8 SK119埋藏土	不定形石鏡	3.6	2.0	1.1	10.8	硬質頁岩		11 SK109埋藏土	野山石	10.3	6.4	5.5	400	安山石	
	9 SK119埋藏土	石鏡	7.3	6.6	1.3	4.2	硬質頁岩		12 SK109埋藏土	野山石	10.7	7.8	6.1	600	安山石	
	10 SK119埋藏土	6型野山石	0.8	4.0	1.4	42.3	硬質頁岩		13 SK109埋藏土	野山石	11.4	10.4	8.2	500	安山石	
	1002	1 SK211埋藏土	石鏡	0.4	2.2	1.5	11.0		硬質頁岩	4 SK211埋藏土	野山石	9.3	7.9	6.0	600	安山石
		2 SK211埋藏土	不定形石鏡	7.2	3.6	0.9	12.5		硬質頁岩	5 SK211埋藏土	野山石	10.2	6.9	5.2	600	安山石
		3 SK211埋藏土	石鏡	1.7	1.4	1.2	30.3		硬質頁岩	6 SK211埋藏土	野山石	13.7	7.6	4.0	510	安山石
		4 SK211埋藏土	石鏡	1.2	2.9	2.4	28.0		硬質頁岩	7 SK211埋藏土	野山石	14.4	7.7	4.7	780	安山石
5 SK211埋藏土		石鏡	12.3	7.8	3.9	35.0	硬質頁岩	8 SK211埋藏土	野山石	10.7	6.2	2.6	280	安山石		
6 SK211埋藏土		不定形石鏡	6.3	3.6	0.8	12.8	硬質頁岩	9 SK211埋藏土	野山石	9.4	5.3	2.3	780	安山石		
7 SK211埋藏土		6型野山石	1.2	4.4	0.7	29.3	硬質頁岩	10 SK211埋藏土	野山石	10.7	5.6	3.9	1280	安山石		
8 SK211埋藏土		石鏡	1.1	4.1	2.1	40.9	硬質頁岩	11 SK211埋藏土	野山石	11.8	9.3	5.0	600	安山石		
9 SK211埋藏土		不定形石鏡	2.5	2.3	1.0	59.0	硬質頁岩	12 SK211埋藏土	野山石	9.6	9.2	4.6	430	安山石		
10 SK211埋藏土		6型野山石	4.3	4.9	1.1	11.2	硬質頁岩	13 SK211埋藏土	野山石	11.6	8.6	4.8	510	安山石		
1003	1 SK220埋藏土	野山石	12.5	6.2	2.4	45.7	硬質頁岩	4 SK220埋藏土	野山石	9.8	9.2	5.3	680	安山石		
	2 SK220埋藏土	野山石	8.8	5.2	1.9	34.0	頁岩	5 SK220埋藏土	野山石	10.8	10.1	7.9	1380	安山石		
	3 SK220埋藏土	野山石	7.7	6.1	2.3	23.3	野山石	6 SK220埋藏土	野山石	8.8	6.7	4.6	430	安山石		
	4 SK220埋藏土	野山石	5.0	5.3	3.7	154.1	安山石	7 SK220埋藏土	野山石	9.4	7.4	3.7	225	安山石		
	5 SK220埋藏土	野山石	0.7	4.3	2.3	91.4	頁岩	8 SK220埋藏土	野山石	11.5	10.4	1.7	980	安山石		
	6 SK220埋藏土	野山石	9.0	5.0	2.4	59.7	硬質頁岩	9 SK220埋藏土	野山石	8.9	8.2	3.9	493	硬質頁岩		
	7 SK220埋藏土	野山石	0.8	1.2	1.3	13.0	硬質頁岩	10 SK220埋藏土	野山石	10.1	11.2	3.7	980	安山石		
	8 SK220埋藏土	野山石	12.3	5.2	2.1	20.8	硬質頁岩	11 SK220埋藏土	野山石	15.4	7.3	6.2	1040	安山石		
	9 SK220埋藏土	野山石	11.3	4.6	2.8	25.9	硬質頁岩	12 SK220埋藏土	野山石	13.6	14.6	6.7	502	安山石		
	10 SK220埋藏土	野山石	6.5	4.2	1.1	8.1	6.0	彩色花岩	13 SK220埋藏土	野山石	9.9	7.7	5.2	760	安山石	
1004	1 SK225埋藏土	野山石	6.4	6.4	0.9	23.0	硬質頁岩	4 SK225埋藏土	野山石	8.9	8.0	8.0	620	安山石		
	2 SK225埋藏土	野山石	4.3	1.8	0.7	26.5	硬質頁岩	5 SK225埋藏土	野山石	8.4	7.2	4.4	510	安山石		
	3 SK225埋藏土	野山石	18.5	5.0	2.4	174.5	硬質頁岩	6 SK225埋藏土	野山石	10.6	8.1	5.2	240	安山石		
	4 SK225埋藏土	野山石	8.6	3.9	1.6	47.2	野山石	7 SK225埋藏土	野山石	10.7	6.7	3.9	430	安山石		
	5 SK225埋藏土	野山石	0.7	4.8	1.2	73.0	シロト石	8 SK225埋藏土	野山石	12.0	9.9	3.6	460	硬質頁岩		
	6 SK225埋藏土	野山石	14.9	6.9	2.1	243.0	安山石	9 SK225埋藏土	野山石	9.7	7.1	4.6	780	安山石		
	7 SK225埋藏土	野山石	8.2	6.4	1.8	42.0	シロト石	10 SK225埋藏土	野山石	10.9	7.2	4.6	540	安山石		
	8 SK225埋藏土	野山石	14.0	8.1	2.4	212.0	シロト石	11 SK225埋藏土	野山石	11.6	9.7	5.6	980	安山石		
	9 SK225埋藏土	野山石	6.5	2.9	0.8	32.0	シロト石	12 SK225埋藏土	野山石	11.4	9.6	3.4	410	安山石		
	10 SK225埋藏土	野山石	10.9	10.1	1.2	101.2	シロト石	13 SK225埋藏土	野山石	14.8	17.6	4.8	1280	安山石		
1005	1 SK227埋藏土	野山石	50.4	8.9	3.7	430	安山石	4 SK227埋藏土	野山石	10.3	6.5	4.1	710	安山石		
	2 SK227埋藏土	野山石	16.8	7.7	0.8	340	安山石	5 SK227埋藏土	野山石	10.6	6.1	4.0	240	安山石		
	3 SK227埋藏土	野山石	11.2	3.9	1.3	280	安山石	6 SK227埋藏土	野山石	11.5	7.1	4.3	560	安山石		
	4 SK227埋藏土	野山石	15.2	3.9	0.5	140	安山石	7 SK227埋藏土	野山石	10.3	9.1	7.2	820	安山石		
	5 SK227埋藏土	野山石	15.7	7.0	4.0	470	安山石	8 SK227埋藏土	野山石	8.6	7.8	6.1	470	安山石		
	6 SK227埋藏土	野山石	11.0	6.2	0.8	270	安山石	9 SK227埋藏土	野山石	12.0	7.0	0.0	650	安山石		
	7 SK227埋藏土	野山石	11.6	3.1	1.1	300	安山石	10 SK227埋藏土	野山石	1.8	8.0	5.2	770	安山石		
	8 SK227埋藏土	野山石	11.1	6.5	3.1	290	安山石	11 SK227埋藏土	野山石	5.2	8.0	5.8	480	安山石		
	9 SK227埋藏土	野山石	11.9	6.6	4.7	290	安山石	12 SK227埋藏土	野山石	12.2	13.6	4.5	1380	硬質頁岩		
	10 SK227埋藏土	野山石	0.4	7.7	0.8	250	安山石	13 SK227埋藏土	野山石	9.8	8.8	8.0	420	安山石		
1006	1 SK229埋藏土	野山石	9.1	6.3	2.7	250	安山石	4 SK229埋藏土	野山石	17.3	8.8	6.4	900	安山石		
	2 SK229埋藏土	野山石	15.1	10.4	0.1	480	安山石	5 SK229埋藏土	野山石	12.6	6.7	6.8	610	野山石		
	3 SK229埋藏土	野山石	10.4	6.6	4.5	460	安山石	6 SK229埋藏土	野山石	11.3	9.1	6.2	910	安山石		
	4 SK229埋藏土	野山石	10.3	8.2	7.5	330	安山石	7 SK229埋藏土	野山石	11.0	6.6	1.3	460	安山石		
	5 SK229埋藏土	野山石	11.1	7.5	6.9	620	安山石	8 SK229埋藏土	野山石	9.2	7.4	5.0	580	安山石		
	6 SK229埋藏土	野山石	7.8	7.7	3.9	220	安山石	9 SK229埋藏土	野山石	9.6	7.5	6.3	640	安山石		
	7 SK229埋藏土	野山石	12.2	8.5	1.4	540	安山石	10 SK229埋藏土	野山石	11.9	7.9	5.3	690	安山石		

第2章 遺構と遺物

表 14 石器観察表(6)

図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	石質	
図10-1	SK430	石環	21.3	25.0	9.6	7000	花崗岩質	図10-1	SK799埋藏土	磨石	16.2	6.9	5.3	900	安山岩	
	SK431	磨石	10.9	8.6	5.7	870	安山岩		SK799埋藏土	磨石	10.2	2.9	2.7	500	安山岩	
	SK432	磨石	26.8	8.4	7.7	2650	安山岩		SK799埋藏土	磨石	10.2	9.2	5.2	700	安山岩	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	9.7	7.1	6.4	480	安山岩	4	SK799埋藏土	磨石	11.4	8.4	4.4	600	安山岩	
	SK433埋藏土	石環	14.4	37.5	6.5	7310	花崗岩質	5	SK799埋藏土	磨石	9.6	7.2	4.6	400	安山岩	
	SK433埋藏土	磨石	14.0	10.0	6.9	1260	安山岩	6	SK799埋藏土	磨石	12.7	9.6	5.0	1020	安山岩	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	9.1	6.2	4.7	380	安山岩	図10-1	SK799埋藏土	石環	5.7	1.4	0.9	300	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	31.0	10.2	6.9	900	安山岩		7	SK799埋藏土	石環	4.3	1.7	0.4	2.7	花崗岩質
	SK433埋藏土	磨石	9.9	7.4	6.2	630	安山岩		8	SK799埋藏土	石環	3.7	1.8	0.5	1.4	花崗岩質
図10-1	SK433埋藏土	磨石	8.6	8.2	5.0	240	安山岩	9	SK799埋藏土	石環	2.3	1.6	0.2	0.7	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	12.3	9.9	5.2	780	安山岩	10	SK799埋藏土	石環	2.1	1.7	0.4	1.2	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	11.1	8.7	6.4	860	安山岩	11	SK799埋藏土	石環	2.5	1.4	0.3	1.1	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	10.1	10.6	6.5	880	安山岩	12	SK799埋藏土	石環	3.2	1.3	0.5	0.6	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	15.2	8.2	5.0	1030	安山岩	13	SK799埋藏土	石環	5.6	2.6	1.0	10.7	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	11.6	7.0	6.1	320	安山岩	14	SK799埋藏土	石環	2.9	2.3	1.1	6.7	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	10.7	6.7	5.0	470	安山岩	15	SK799埋藏土	石環	4.0	2.7	1.1	12.8	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	9.5	5.7	6.9	870	安山岩	16	SK799埋藏土	石環	7.0	4.9	3.0	50.0	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	8.9	7.4	6.7	420	安山岩	17	SK799埋藏土	石環	4.8	3.2	1.4	13.1	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	8.3	8.2	4.2	350	安山岩	18	SK799埋藏土	石環	6.8	4.0	1.6	28.1	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	8.7	5.9	6.9	380	安山岩	19	SK799埋藏土	石環	7.1	4.4	3.2	36.5	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	13.2	8.3	5.9	730	安山岩	20	SK799埋藏土	石環	4.4	2.4	0.8	12.9	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	13.5	7.9	3.8	450	安山岩	21	SK799埋藏土	石環	6.1	2.7	1.3	19.9	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	13.9	8.0	6.2	1240	安山岩	22	SK799埋藏土	石環	8.0	3.1	1.3	20.6	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	12.6	6.5	5.6	460	花崗岩質	図10-1	SK799埋藏土	石環	10.8	2.6	1.7	50.7	花崗岩質	
SK433埋藏土	磨石	9.9	9.7	6.7	420	安山岩	1		SK799埋藏土	石環	6.1	2.6	1.2	18.2	花崗岩質	
SK433埋藏土	磨石	11.2	5.3	6.1	930	安山岩	2		SK799埋藏土	石環	5.3	2.4	1.2	17.7	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	9.2	8.3	7.0	630	安山岩	3	SK799埋藏土	石環	6.4	3.2	1.4	28.2	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	8.0	8.6	3.5	500	安山岩	4	SK799埋藏土	石環	5.9	2.9	1.9	19.8	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	10.2	6.7	5.5	470	安山岩	5	SK799埋藏土	石環	5.5	3.2	1.0	21.9	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	10.4	8.5	6.2	730	安山岩	6	SK799埋藏土	石環	8.6	4.8	2.2	37.2	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	11.0	10.6	6.9	1020	安山岩	7	SK799埋藏土	石環	8.2	2.6	1.0	21.2	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	6.8	7.8	4.6	240	安山岩	8	SK799埋藏土	石環	4.5	1.4	0.5	7.9	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	9.5	7.4	5.4	610	安山岩	9	SK799埋藏土	石環	6.4	2.6	0.6	13.6	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	7.0	5.9	4.7	90	安山岩	10	SK799埋藏土	石環	6.8	3.4	1.1	28.2	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	9.7	8.0	7.0	420	安山岩	11	SK799埋藏土	石環	6.2	2.2	0.7	11.3	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	10.9	7.9	3.6	430	安山岩	図10-1	SK799埋藏土	石環	9.4	4.3	1.9	40.0	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	11.2	10.0	6.1	1020	安山岩		2	SK799埋藏土	石環	8.8	3.0	0.8	17.1	花崗岩質
	SK433埋藏土	磨石	10.2	9.3	6.7	480	安山岩		3	SK799埋藏土	石環	9.4	2.7	1.2	26.0	花崗岩質
図10-1	SK433埋藏土	磨石	6.6	6.7	6.0	330	安山岩	4	SK799埋藏土	石環	5.9	2.2	0.8	13.0	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	7.3	6.0	6.3	220	安山岩	5	SK799埋藏土	石環	5.7	2.7	0.8	12.4	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	11.4	8.1	5.3	730	安山岩	6	SK799埋藏土	石環	6.8	2.3	1.1	26.9	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	13.5	8.1	4.8	730	安山岩	7	SK799埋藏土	石環	6.8	2.4	1.4	18.4	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	10.4	7.9	4.3	760	安山岩	8	SK799埋藏土	石環	8.7	3.1	1.4	26.5	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	13.0	8.1	5.2	620	安山岩	9	SK799埋藏土	石環	5.9	2.6	1.1	18.0	花崗岩質	
図10-1	SK433埋藏土	磨石	14.7	6.2	6.3	720	安山岩	図10-1	SK799埋藏土	石環	0.1	4.5	1.0	22.8	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	9.5	8.6	3.0	360	安山岩		10	SK799埋藏土	石環	8.1	3.8	0.9	22.8	花崗岩質
	SK433埋藏土	磨石	8.0	7.0	3.5	320	安山岩		11	SK799埋藏土	石環	4.5	4.6	1.1	11.1	花崗岩質
図10-1	SK433埋藏土	磨石	10.9	7.4	5.7	340	安山岩	図10-1	SK799埋藏土	石環	8.4	2.9	1.4	22.4	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	9.3	7.4	6.0	360	安山岩		2	SK799埋藏土	石環	8.0	2.4	0.8	13.5	花崗岩質
	SK433埋藏土	磨石	12.3	8.6	5.2	720	安山岩		3	SK799埋藏土	石環	7.2	3.1	1.6	26.0	花崗岩質
図10-1	SK433埋藏土	磨石	11.1	8.3	4.2	390	安山岩	4	SK799埋藏土	石環	6.8	4.6	0.7	23.1	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	14.2	8.6	4.7	300	安山岩	5	SK799埋藏土	石環	7.5	3.7	0.5	15.8	花崗岩質	
	SK433埋藏土	磨石	17.8	8.2	6.1	1380	安山岩	6	SK799埋藏土	石環	7.1	2.8	0.7	17.4	花崗岩質	

表14 石器觀察表(7)

圖No	山土位置	名稱	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	材質	形跡	出土位置	附屬	使用用途	使用 (%)	使用 (%)	重量 (g)	備註		
M90-1	*M90L1下層	石	6.2	2.4	1.3	15.3	燧石質	M90-11	2-100L1下層	不定形石	3.3	1.8	0.8	4.4	燧石片石	
		石	1.9	2.4	0.7	12.8	燧石質		14	4-100L1下層	不定形石	3.2	2.4	0.7	4.6	燧石片石
		石	6.9	2.9	0.9	11.1	燧石質		15	4-100L1下層	不定形石	3.3	2.6	0.4	3.9	燧石片石
		石	7.5	3.5	0.9	14.2	燧石質		16	4-100L1下層	不定形石	3.8	2.4	1.2	2.1	燧石片石
		石	3.2	4.7	0.8	17.5	燧石質		17	4-100L1下層	不定形石	5.0	2.1	0.7	8.9	燧石質片石
		石	4.8	6.6	2.8	23.9	燧石質		18	4-100L1下層	不定形石	4.0	2.4	0.9	4.4	燧石片石
		石	5.2	3.9	1.2	49.5	燧石質	M90-1	2-100L1下層	燧石	4.7	2.2	1.2	3.7	燧石質片石	
		石	5.6	5.9	0.7	33.8	燧石質		3	4-100L1下層	不定形石	2.6	1.6	0.9	3.5	燧石片石
		石	5.2	3.7	0.6	10.8	燧石質		5	4-100L1下層	不定形石	4.2	2.2	0.9	6.1	燧石片石
		石	5.3	7.2	0.8	11.6	燧石質		4	4-100L1下層	不定形石	4.2	2.6	1.2	8.9	燧石質片石
		石	1.8	3.1	0.2	20.3	燧石質		7	4-100L1下層	不定形石	4.2	2.6	0.3	10.0	燧石片石
M90-2	*M90L1下層	石	6.8	4.7	1.4	28.2	燧石質		9	4-100L1下層	不定形石	4.9	2.7	0.7	5.3	燧石質片石
		石	6.9	2.3	0.6	10.8	燧石質		1	4-100L1下層	不定形石	5.5	2.4	0.7	7.5	燧石片石
		石	4.3	2.8	0.9	13.5	燧石質		6	4-100L1下層	不定形石	5.0	2.5	1.0	3.9	燧石片石
		石	6.2	4.3	2.0	22.2	燧石質		8	4-100L1下層	不定形石	3.9	2.2	0.6	4.7	燧石質片石
		石	3.9	3.6	0.9	9.8	燧石質		10	4-100L1下層	不定形石	4.2	2.7	0.9	8.5	燧石質片石
		石	8.3	4.1	2.1	38.9	燧石質		11	4-100L1下層	不定形石	4.5	3.1	0.5	8.1	燧石質片石
		石	8.9	3.8	1.0	4.3	燧石質		13	4-100L1下層	不定形石	6.1	2.2	0.2	3.1	燧石片石
		石	8.1	5.0	1.1	22.6	燧石質		15	4-100L1下層	不定形石	5.9	2.7	1.4	14.0	燧石質片石
		石	8.7	2.7	1.5	48.3	燧石質		14	4-100L1下層	不定形石	3.8	3.9	0.8	9.4	燧石質片石
		石	3.3	3.2	1.5	15.9	燧石質		16	4-100L1下層	不定形石	4.5	3.8	1.0	10.2	燧石質片石
		石	3.8	2.1	1.1	14.7	燧石質		15	4-100L1下層	不定形石	3.7	3.1	0.7	11.9	燧石質片石
M90-3	*M90L1下層	石	9.2	4.4	1.2	43.8	燧石質		17	4-100L1下層	不定形石	3.9	3.0	1.1	8.2	燧石片石
		石	4.5	3.1	0.9	13.7	燧石質		18	4-100L1下層	不定形石	5.9	2.4	0.5	11.2	燧石質片石
		石	2.6	4.4	1.3	25.5	燧石質		12	4-100L1下層	不定形石	2.9	6.0	0.3	7.3	燧石質片石
		石	6.2	5.5	0.9	33.8	燧石質	M90-1	1-100L1下層	不定形石	4.4	2.0	0.5	7.0	燧石片石	
		石	4.1	4.7	1.2	32.2	燧石質		3	4-100L1下層	不定形石	5.1	3.0	0.9	12.4	燧石質片石
		石	4.4	3.4	1.2	21.0	燧石質		2	4-100L1下層	不定形石	4.3	1.9	1.1	6.9	燧石片石
		石	3.2	2.7	0.6	2.9	燧石質		4	4-100L1下層	不定形石	4.5	3.0	1.0	11.5	燧石質片石
		石	8.6	3.8	1.9	19.2	燧石質		5	4-100L1下層	不定形石	2.4	2.2	0.7	10.6	燧石片石
		石	4.6	2.3	1.5	32.0	燧石質		8	4-100L1下層	不定形石	4.5	2.3	1.1	8.0	燧石質片石
		石	8.3	6.3	1.4	66.7	燧石質		1	4-100L1下層	不定形石	3.8	2.0	1.0	15.4	燧石質片石
		石	8.9	4.2	1.9	75.2	燧石質		5	4-100L1下層	不定形石	3.7	1.7	0.9	3.4	燧石質片石
M90-4	*M90L1下層	石	4.8	4.3	1.8	45.3	燧石質		9	4-100L1下層	不定形石	4.5	2.6	0.6	7.7	燧石質片石
		石	4.6	2.9	1.1	18.3	燧石質		10	4-100L1下層	不定形石	3.8	3.0	0.8	7.5	燧石質片石
		石	0.4	4.9	2.1	40.3	燧石質		11	4-100L1下層	不定形石	4.2	5.6	1.9	2.3	燧石質片石
		石	3.5	3.9	2.2	12.9	燧石質		12	4-100L1下層	不定形石	4.2	3.5	0.9	8.4	燧石質片石
		石	2.9	2.2	0.6	5.5	燧石質		13	4-100L1下層	不定形石	2.9	4.3	1.2	10.4	燧石片石
		石	7.4	4.9	1.4	24.5	燧石質		14	4-100L1下層	不定形石	5.8	5.3	0.9	9.1	燧石質片石
		石	4.0	3.9	2.2	16.8	燧石質		15	4-100L1下層	不定形石	4.0	3.4	1.2	22.8	燧石質片石
		石	4.9	3.2	0.7	10.9	燧石質		16	4-100L1下層	不定形石	5.7	2.1	1.0	5.9	燧石質片石
		石	6.1	4.6	1.7	11.9	燧石質		17	4-100L1下層	不定形石	5.2	3.5	1.5	15.7	燧石質片石
		石	2.4	2.4	0.4	30.0	燧石質		18	4-100L1下層	不定形石	3.0	2.4	0.5	2.9	燧石質片石
		石	2.4	3.6	0.6	7.0	燧石質		19	4-100L1下層	不定形石	2.2	4.5	0.7	10.0	燧石片石
M90-5	*M90L1下層	石	6.2	3.0	0.9	13.5	燧石質		20	4-100L1下層	不定形石	2.9	3.5	0.5	5.5	燧石片石
		石	6.3	3.2	0.6	15.5	燧石質		1	4-100L1下層	燧石	4.3	3.3	0.2	1.0	燧石質片石
		石	2.2	3.4	1.4	23.5	燧石質	M90-1	2-100L1下層	燧石	5.1	3.0	0.8	14.6	燧石質片石	
		石	8.3	4.5	1.1	53.2	燧石質		2	4-100L1下層	燧石	5.1	2.6	0.8	1.0	燧石質片石
		石	3.1	2.0	0.8	4.4	燧石質		4	4-100L1下層	不定形石	5.0	2.8	1.2	12.2	燧石片石
		石	3.2	1.6	0.3	2.1	燧石質		5	4-100L1下層	不定形石	4.3	4.0	1.0	15.7	燧石質片石
		石	4.2	1.7	1.1	8.1	燧石質		6	4-100L1下層	不定形石	7.0	2.2	0.9	5.4	燧石質片石
		石	3.2	2.1	1.0	6.5	燧石質		7	4-100L1下層	不定形石	2.4	3.1	1.1	3.4	燧石質片石
		石	5.9	2.0	0.6	6.3	燧石質		8	4-100L1下層	不定形石	1.8	2.7	0.6	3.2	燧石質片石

表14 石器観察表(8)

器名	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	図記	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質
0099-9	*30GLB 上層	不定形石器	2.9	3.7	0.5	7.8	凝灰質頁岩	5	*30GLD	不定形石器	5.8	3.4	1.5	33.5	凝灰質頁岩
10	*30GLB 中層	不定形石器	5.2	2.9	0.7	16.0	凝灰質頁岩	0099-10	*30GLB	不定形石器	7.8	4.6	1.7	40.5	凝灰質頁岩
11	*30GLB 上層	不定形石器	5.7	4.1	0.9	12.0	凝灰質頁岩	2	*30GLB	不定形石器	6.9	3.2	0.6	13.8	凝灰質頁岩
12	*30GLB 上層	不定形石器	4.5	2.6	0.8	7.3	凝灰質頁岩	31	*30GLB	不定形石器	6.1	4.4	1.6	41.9	凝灰質頁岩
13	*30GLB 上層	不定形石器	4.2	1.7	0.7	8.7	凝灰質頁岩	4	*30GLB	不定形石器	5.3	3.9	1.1	29.3	凝灰質頁岩
14	*30GLB 上層	不定形石器	5.3	2.9	1.5	15.3	凝灰質頁岩	5	*30GLB	不定形石器	4.8	3.0	1.7	29.8	凝灰質頁岩
15	*30GLB 上層	不定形石器	6.3	4.1	1.7	33.3	凝灰質頁岩	6	*30GLB	不定形石器	5.3	4.7	1.4	35.0	凝灰質頁岩
16	*30GLB 下層	不定形石器	2.6	2.6	1.1	14.2	凝灰質頁岩	7	*30GLB	不定形石器	4.4	4.1	1.7	17.8	凝灰質頁岩
17	*30GLB 下層	不定形石器	3.5	3.4	0.8	11.0	凝灰質頁岩	8	*30GLB	不定形石器	7.5	3.6	1.6	38.0	凝灰質頁岩
18	*30GLB 下層	不定形石器	4.3	3.0	1.0	18.2	凝灰質頁岩	9	*30GLB	不定形石器	7.3	2.5	1.7	37.7	凝灰質頁岩
19	*30GLB 下層	不定形石器	4.6	3.4	0.9	11.7	凝灰質頁岩	10	***10GL	不定形石器	4.6	6.1	1.3	37.6	凝灰質頁岩
20	*30GLB	不定形石器	4.4	4.1	1.1	13.4	凝灰質頁岩	11	*30GLB	不定形石器	4.2	6.4	1.3	38.2	凝灰質頁岩
21	L1	不定形石器	5.3	4.0	1.1	18.1	凝灰質頁岩	12	*30GLB	不定形石器	3.4	4.8	0.9	13.8	凝灰質頁岩
22	*30GLB	不定形石器	5.3	3.8	1.2	20.0	凝灰質頁岩	13	*30GLB	不定形石器	3.3	6.0	1.0	17.2	凝灰質頁岩
23	*30GLB	不定形石器	4.8	4.3	0.9	18.6	凝灰質頁岩	14	*30GLB	不定形石器	6.0	2.9	1.0	22.4	凝灰質頁岩
24	*30GLB	不定形石器	5.4	3.4	1.3	24.8	凝灰質頁岩	15	*30GLB	不定形石器	6.8	3.3	0.9	18.2	凝灰質頁岩
25	*30GLB	不定形石器	5.1	4.7	1.7	47.0	凝灰質頁岩	16	*30GLB	不定形石器	4.0	3.3	0.9	20.4	凝灰質頁岩
26	*30GLB	不定形石器	5.9	2.9	0.8	12.0	凝灰質頁岩	17	*30GLB	不定形石器	4.9	3.8	0.8	18.2	凝灰質頁岩
27	*30GLB	不定形石器	6.3	4.5	1.4	20.8	凝灰質頁岩	18	*30GLB	不定形石器	4.7	4.5	0.8	16.3	凝灰質頁岩
28	*30GLB 下層	不定形石器	5.1	3.7	0.9	20.6	凝灰質頁岩	19	*30GLB	不定形石器	3.6	3.3	1.1	14.9	凝灰質頁岩
29	*30GLB 下層	不定形石器	4.8	3.0	0.9	13.8	凝灰質頁岩	20	*30GLB	不定形石器	6.4	2.7	1.4	24.4	凝灰質頁岩
30	*30GLB 下層	不定形石器	4.8	3.8	0.9	18.2	凝灰質頁岩	21	*30GLB	不定形石器	6.2	3.1	0.7	14.6	凝灰質頁岩
31	*30GLB 下層	不定形石器	5.2	4.0	1.4	22.1	凝灰質頁岩	22	*30GLB	不定形石器	5.0	3.3	0.9	15.1	凝灰質頁岩
32	*30GLB 下層	凝器	4.8	2.3	0.8	15.9	凝灰質頁岩	23	*30GLB	不定形石器	5.4	2.8	0.8	11.0	凝灰質頁岩
33	*30GLB 下層	石核	6.2	3.3	1.4	23.7	凝灰質頁岩	24	*30GLB	不定形石器	5.1	3.7	1.2	16.4	凝灰質頁岩
34	*30GLB 下層	不定形石器	2.9	4.9	1.3	20.1	凝灰質頁岩	25	*30GLB	不定形石器	6.3	3.7	1.2	24.9	凝灰質頁岩
35	*30GLB 下層	不定形石器	5.1	2.4	1.3	23.3	凝灰質頁岩	26	*30GLB	不定形石器	4.2	4.0	0.8	17.9	凝灰質頁岩
36	*30GLB 下層	不定形石器	4.6	4.2	1.1	18.4	凝灰質頁岩	27	*30GLB	凝器	4.9	2.8	0.9	9.5	凝灰質頁岩
37	*30GLB 下層	不定形石器	4.7	3.7	1.1	18.2	凝灰質頁岩	28	L1	凝器	3.4	3.9	0.7	13.7	凝灰質頁岩
38	L1	不定形石器	4.0	2.8	0.9	10.1	凝灰質頁岩	29	*30GLB	不定形石器	5.6	2.9	1.1	21.4	凝灰質頁岩
39	*30GLB	不定形石器	3.9	4.0	0.9	10.8	凝灰質頁岩	30	*30GLB	不定形石器	5.3	3.0	1.3	21.1	凝灰質頁岩
40	*30GLB	不定形石器	2.6	2.2	0.5	4.3	凝灰質頁岩	31	*30GLB	不定形石器	7.0	4.1	1.6	22.0	凝灰質頁岩
41	*30GLB	不定形石器	4.3	3.9	0.7	16.0	凝灰質頁岩	32	*30GLB	不定形石器	8.0	3.0	1.4	22.0	凝灰質頁岩
42	*30GLB 下層	不定形石器	6.5	2.9	0.9	20.2	凝灰質頁岩	33	*30GLB	不定形石器	4.1	5.0	0.7	18.2	凝灰質頁岩
43	*30GLB 中層	不定形石器	6.7	4.3	0.7	16.4	凝灰質頁岩	34	*30GLB	不定形石器	5.8	2.8	1.4	17.8	凝灰質頁岩
44	*30GLB 下層	不定形石器	5.2	3.0	1.2	17.5	凝灰質頁岩	35	*30GLB	凝器	3.4	5.7	0.9	24.6	凝灰質頁岩
45	*30GLB 下層	不定形石器	6.2	4.0	0.8	22.6	凝灰質頁岩	36	10GL1下層	石核	2.6	5.1	1.3	24.7	凝灰質頁岩
46	*30GLB	不定形石器	5.4	3.5	1.1	17.8	凝灰質頁岩	37	*30GLB	不定形石器	7.1	4.2	1.4	28.6	凝灰質頁岩
47	*30GLB	不定形石器	5.0	2.9	0.8	16.8	凝灰質頁岩	38	*30GLB	不定形石器	4.4	3.9	1.4	21.2	凝灰質頁岩
48	*30GLB	不定形石器	4.1	4.3	0.8	28.7	凝灰質頁岩	39	*30GLB	不定形石器	2.6	3.5	0.9	15.1	凝灰質頁岩
49	*30GLB 下層	不定形石器	5.9	3.9	1.5	18.8	凝灰質頁岩	40	*30GLB	凝器	7.4	2.9	1.2	39.2	凝灰質頁岩
50	*30GLB	不定形石器	5.5	3.5	1.3	13.2	凝灰質頁岩	41	*30GLB	石核	6.5	4.1	0.8	30.0	凝灰質頁岩
51	*30GLB	不定形石器	6.1	2.9	0.8	15.7	凝灰質頁岩	42	*30GLB	石核	4.5	3.7	1.2	26.0	凝灰質頁岩
52	L1	凝器	5.4	3.2	1.1	12.3	凝灰質頁岩	43	*30GLB	凝器	5.7	3.9	0.9	18.3	凝灰質頁岩
53	*30GLB	不定形石器	3.7	4.4	1.2	24.0	凝灰質頁岩	44	*30GLB	不定形石器	7.1	3.2	1.5	33.2	凝灰質頁岩
54	*30GLB	不定形石器	6.8	3.8	1.5	30.0	凝灰質頁岩	45	*30GLB	不定形石器	4.5	3.8	1.8	34.4	凝灰質頁岩
55	*30GLB 上層	不定形石器	6.8	5.0	1.4	21.0	凝灰質頁岩	46	*30GLB	不定形石器	2.5	4.1	1.3	16.0	凝灰質頁岩
56	*30GLB 上層	不定形石器	4.4	3.1	0.8	11.2	凝灰質頁岩	47	*30GLB	不定形石器	3.9	4.2	1.4	22.0	凝灰質頁岩
57	*30GLB	不定形石器	6.2	3.4	0.8	18.0	凝灰質頁岩	48	*30GLB	不定形石器	6.8	3.1	0.9	12.7	凝灰質頁岩
58	*30GLB	不定形石器	2.6	2.8	1.1	13.2	凝灰質頁岩	49	*30GLB	不定形石器	5.0	4.2	0.9	14.9	凝灰質頁岩
59	*30GLB 下層	不定形石器	6.1	4.2	0.8	17.2	凝灰質頁岩	50	*30GLB	不定形石器	6.1	4.1	1.2	26.2	凝灰質頁岩
60	*30GLB 上層	不定形石器	2.9	4.3	1.4	22.1	凝灰質頁岩	51	*30GLB	不定形石器	6.9	4.0	1.3	34.1	凝灰質頁岩
61	*30GLB 上層	不定形石器	4.5	3.5	0.8	8.8	凝灰質頁岩	52	*30GLB	不定形石器	4.1	3.7	1.4	30.2	凝灰質頁岩

表14 石器觀察表(9)

図号	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	材質	図号	出土位置	器種	最大径 (mm)	最大幅 (mm)	重量 (g)	材質		
図06-13	F90GL1下層	不定形石器	3.9	3.4	1.2	硬質頁岩	図11-2	F90GL1下層	不定形石器	6.5	4.9	6.9	11.4	硬質頁岩	
		不定形石器	3.8	4.4	0.9	11.7			硬質頁岩	3	F90GL1下層	不定形石器	5.9	3.0	0.9
図07-1	F107L1上層	不定形石器	7.0	4.2	1.4	31.1	硬質頁岩	4	F107L1下層	不定形石器	8.7	3.2	1.1	35.0	硬質頁岩
		不定形石器	8.3	3.0	1.1	17.7	硬質頁岩			5	F90GL1下層	不定形石器	7.1	3.8	0.9
2	F90GL1下層	不定形石器	4.6	2.6	0.8	13.1	硬質頁岩	6	F90GL1下層	不定形石器	7.9	3.0	0.7	16.5	硬質頁岩
		不定形石器	8.9	3.8	2.6	71.0	硬質頁岩			7	F90GL1下層	不定形石器	6.2	2.3	1.0
4	F90GL1下層	不定形石器	8.4	4.7	1.1	35.7	硬質頁岩	8	F90GL1下層	不定形石器	7.9	3.7	1.7	37.7	硬質頁岩
		不定形石器	7.4	2.6	1.1	19.9	硬質頁岩			9	F90GL1下層	不定形石器	2.9	1.5	1.3
7	F90GL1下層	不定形石器	5.0	4.7	1.5	26.2	硬質頁岩	10	F90GL1下層	不定形石器	7.8	5.0	1.8	47.8	硬質頁岩
		不定形石器	5.4	3.4	0.9	16.8	硬質頁岩			11	F90GL1下層	不定形石器	8.2	4.3	1.7
9	F90GL1下層	不定形石器	3.4	4.8	1.1	17.7	硬質頁岩	12	F90GL1下層	不定形石器	6.2	5.1	0.9	22.9	硬質頁岩
		不定形石器	3.9	4.4	1.0	17.3	硬質頁岩			2	F90GL1下層	不定形石器	4.1	5.0	1.9
10	F90GL1下層	不定形石器	2.7	3.8	1.2	23.3	硬質頁岩	3	F90GL1下層	不定形石器	4.9	6.1	1.1	48.4	硬質頁岩
		不定形石器	3.8	3.5	1.3	22.4	硬質頁岩			4	F90GL1下層	不定形石器	4.8	6.1	1.1
12	F90GL1下層	不定形石器	4.8	3.0	0.7	16.5	硬質頁岩	5	F90GL1下層	不定形石器	5.0	4.7	2.1	30.9	硬質頁岩
		不定形石器	4.6	4.3	1.0	28.0	硬質頁岩			6	F107L1下層	不定形石器	4.2	1.7	1.4
図08-1	F90GL1下層	不定形石器	5.8	2.0	1.1	19.8	硬質頁岩	7	F107L1下層	不定形石器	7.4	4.2	0.8	20.1	硬質頁岩
		不定形石器	6.9	4.1	0.8	21.3	硬質頁岩			8	F90GL1下層	不定形石器	5.9	3.8	1.0
2	F90GL1下層	不定形石器	5.4	5.6	1.4	32.0	硬質頁岩	9	F90GL1下層	不定形石器	4.0	3.3	1.5	34.5	硬質頁岩
		不定形石器	5.9	4.1	1.2	35.2	硬質頁岩			10	F90GL1下層	不定形石器	3.9	5.1	1.5
4	F90GL1下層	不定形石器	6.0	2.0	1.3	30.3	硬質頁岩	11	L1	不定形石器	5.0	5.0	1.1	25.0	硬質頁岩
		不定形石器	6.9	4.7	1.4	41.0	硬質頁岩			10013-1	F90GL1下層	不定形石器	6.3	4.6	1.1
8	F90GL1下層	不定形石器	7.0	4.0	1.5	35.3	硬質頁岩	2	F90GL1下層	不定形石器	4.2	2.7	0.9	15.5	硬質頁岩
		不定形石器	5.6	4.5	1.4	25.3	硬質頁岩			3	F90GL1下層	不定形石器	8.3	3.3	0.9
10	F90GL1下層	不定形石器	4.3	4.1	1.0	17.8	硬質頁岩	4	F90GL1下層	不定形石器	6.6	3.9	1.2	47.5	硬質頁岩
		不定形石器	6.2	4.1	1.9	36.1	硬質頁岩			5	F90GL1下層	不定形石器	3.6	4.5	1.6
12	F90GL1下層	不定形石器	4.4	5.4	1.3	38.1	硬質頁岩	6	F90GL1下層	不定形石器	6.8	4.8	1.7	72.3	硬質頁岩
		不定形石器	4.5	5.9	1.6	35.1	硬質頁岩			7	F90GL1下層	不定形石器	5.0	5.0	1.7
図09-1	F90GL1下層	硬質頁岩	6.2	4.0	1.1	22.9	硬質頁岩	8	F90GL1下層	不定形石器	3.8	4.3	1.0	16.9	硬質頁岩
		不定形石器	5.1	2.2	1.1	14.9	硬質頁岩			9	F90GL1下層	不定形石器	7.9	4.6	1.6
2	F90GL1下層	不定形石器	4.8	5.9	1.2	15.6	硬質頁岩	10	F90GL1下層	不定形石器	9.1	5.9	2.2	110.9	硬質頁岩
		不定形石器	5.7	2.4	1.6	20.5	硬質頁岩			図09-1	F90GL1下層	石核	9.2	3.0	0.9
4	F90GL1下層	不定形石器	6.4	8.7	1.3	18.7	硬質頁岩	2	F90GL1下層	硬質頁岩	9.1	2.8	0.8	22.3	硬質頁岩
		不定形石器	7.0	3.4	0.9	26.5	硬質頁岩			3	F90GL1下層	不定形石器	8.3	6.7	1.0
7	F90GL1下層	不定形石器	5.7	6.0	1.2	26.2	硬質頁岩	4	F90GL1下層	不定形石器	4.7	6.2	1.2	25.6	硬質頁岩
		不定形石器	6.8	6.5	1.2	35.6	硬質頁岩			5	F90GL1下層	不定形石器	4.4	6.0	1.6
9	F90GL1下層	不定形石器	7.3	4.0	1.2	17.9	硬質頁岩	6	F90GL1下層	硬質頁岩	7.3	4.0	1.2	46.3	硬質頁岩
		不定形石器	6.5	3.6	1.7	22.6	硬質頁岩			7	F90GL1下層	不定形石器	5.2	4.3	0.7
10	F90GL1下層	不定形石器	6.2	3.8	1.5	30.2	硬質頁岩	8	F90GL1下層	不定形石器	6.4	3.9	1.5	33.5	硬質頁岩
		不定形石器	3.9	4.0	1.3	17.4	硬質頁岩			9	F90GL1下層	不定形石器	7.7	7.8	1.9
12	F90GL1下層	硬質頁岩	6.3	3.2	1.2	27.2	硬質頁岩	10	F90GL1下層	不定形石器	7.6	5.6	1.1	40.5	硬質頁岩
		不定形石器	5.2	4.8	1.5	35.9	硬質頁岩			10013-1	F90GL1下層	石核	8.0	3.0	0.6
2	F90GL1下層	不定形石器	5.5	5.4	1.0	37.5	硬質頁岩	2	F90GL1下層	不定形石器	6.2	3.4	1.3	30.5	硬質頁岩
		不定形石器	5.8	5.7	0.8	35.8	硬質頁岩			3	F90GL1下層	不定形石器	7.4	4.6	0.8
4	F90GL1下層	不定形石器	3.6	7.6	1.6	50.0	硬質頁岩	4	F90GL1下層	不定形石器	5.8	5.7	1.6	55.7	硬質頁岩
		不定形石器	3.9	3.4	0.9	13.0	硬質頁岩			5	F107L1下層	不定形石器	4.9	3.0	1.1
6	F90GL1下層	不定形石器	4.3	4.6	1.1	18.7	硬質頁岩	6	F90GL1下層	不定形石器	8.3	4.8	1.5	58.0	硬質頁岩
		不定形石器	5.0	4.1	1.1	24.4	硬質頁岩			7	F90GL1下層	不定形石器	6.1	5.3	2.1
9	F90GL1下層	不定形石器	4.8	6.8	1.6	48.4	硬質頁岩	6	F90GL1下層	不定形石器	5.1	7.5	1.1	37.5	硬質頁岩
		不定形石器	6.0	4.6	1.3	24.7	硬質頁岩			9	F90GL1下層	不定形石器	8.4	6.3	1.8
10	F90GL1下層	不定形石器	3.9	5.2	1.7	23.0	硬質頁岩	10	F90GL1下層	不定形石器	2.8	4.6	1.9	43.3	硬質頁岩
		不定形石器	4.8	3.5	0.8	10.5	硬質頁岩			10013-1	F90GL1下層	硬質頁岩	6.4	4.6	2.2
図11-1	F90GL1下層	不定形石器	8.5	8.7	1.8	39.5	硬質頁岩	2	F90GL1下層	不定形石器	6.9	6.1	1.9	71.1	硬質頁岩

表14 石器観察表①

図号	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	石質	IC No.	出土位置	器種	最大径 (cm)	最大径 (cm)	重量 (g)	石質		
図16-3	2号G1.5a 中層	不定形石器	8.1	7.0	1.9	74.3	細粒凝灰岩	図20-1	2号G1.5a 中層	石核	3.5	7.3	2.0	44.4	片岩
	4号F3G1.5b 上層	不定形石器	7.3	5.0	1.3	48.1	硬質頁岩	図20-1	4号F3G1.5b 上層	不定形石器	7.0	6.3	1.4	33.0	凝灰質片岩
	7号F3G1.5b 中層	不定形石器	6.6	4.5	1.6	4.0	硬質頁岩	2	7号F3G1.5b 中層	不定形石器	5.3	5.6	1.2	19.8	凝灰質片岩
	8号F4G1.5b 中層	不定形石器	5.7	5.0	1.8	48.6	凝灰岩	3	8号F4G1.5b 中層	不定形石器	6.5	4.2	1.5	41.3	硬質頁岩
7	1号F2G1.5a 上層	不定形石器	6.3	3.7	1.2	31.1	凝灰質片岩	4	1号F2G1.5a 上層	不定形石器	4.4	2.9	0.8	12.8	凝灰質片岩
	8号L1	不定形石器	4.5	7.6	1.1	23.0	硬質頁岩	5	8号L1	不定形石器	5.3	3.2	0.8	10.8	硬質頁岩
	1号F3G1.5a 上層	不定形石器	6.2	5.6	0.9	32.6	凝灰質片岩	6	1号F3G1.5a 上層	不定形石器	5.2	3.7	0.8	7.3	硬質頁岩
	2号F3G1.1下層	不定形石器	6.5	5.5	1.7	62.4	凝灰質片岩	7	2号F3G1.1下層	不定形石器	8.5	4.7	2.4	44.2	硬質頁岩
図17	3号F3G1.1下層	不定形石器	6.5	5.4	1.4	44.7	硬質頁岩	8	3号F3G1.1下層	石核	5.5	2.7	1.2	10.7	凝灰質片岩
	4号F3G1.1	不定形石器	5.2	4.3	2.0	31.2	凝灰質片岩	9	4号F3G1.1	石核	3.2	3.3	1.5	21.4	硬質頁岩
	5号F4G1.5a	不定形石器	5.9	4.1	1.7	32.7	硬質頁岩	10	5号F4G1.5a	石核	4.4	2.4	2.7	20.7	硬質頁岩
	6号F3G1.1下層	不定形石器	6.9	5.9	1.7	70.8	凝灰岩	11	6号F3G1.1下層	石核	4.4	3.0	2.0	27.0	硬質頁岩
	7号F3G1.1下層	不定形石器	2.9	2.2	0.8	61.1	凝灰質片岩	12	7号F3G1.1下層	石核	4.4	4.0	2.0	22.4	硬質頁岩
	8号F3G1.1下層	不定形石器	6.2	3.5	1.7	59.4	硬質頁岩	13	8号F3G1.1下層	石核	3.6	3.1	1.7	25.1	凝灰質片岩
	9号F3G1.1下層	不定形石器	6.0	4.5	1.7	24.6	凝灰岩	14	9号F3G1.1下層	石核	4.1	4.0	2.0	20.8	硬質頁岩
	10号F3G1.1下層	不定形石器	6.8	3.7	0.5	15.2	硬質頁岩	15	10号F3G1.1下層	石核	3.5	6.8	2.1	20.1	凝灰質片岩
図18	1号F3G1.1下層	不定形石器	5.6	4.9	1.3	21.0	硬質頁岩	16	1号F3G1.1下層	石核	6.5	4.8	2.8	30.4	硬質頁岩
	2号F3G1.1下層	不定形石器	6.3	7.1	1.7	66.4	硬質頁岩	17	2号F3G1.1下層	石核	6.3	4.9	3.4	33.2	凝灰質片岩
	3号F3G1.1下層	不定形石器	6.7	4.8	1.3	27.4	硬質頁岩	18	3号F3G1.1下層	石核	7.0	5.9	2.6	34.5	凝灰岩
	4号F3G1.1	不定形石器	7.1	6.3	2.3	85.2	凝灰質片岩	19	4号F3G1.1	石核	6.5	4.1	2.7	64.7	硬質頁岩
	7号L1	不定形石器	7.9	2.7	1.2	27.7	硬質頁岩	20	7号L1	石核	3.7	3.5	1.7	20.7	硬質頁岩
	8号F3G1.1下層	不定形石器	6.9	8.1	1.6	29.2	硬質頁岩	21	8号F3G1.1下層	石核	5.6	3.2	3.2	118.0	硬質頁岩
	9号F3G1.1下層	不定形石器	6.2	4.8	2.1	36.5	凝灰岩	22	9号F3G1.1下層	石核	6.8	3.9	3.2	31.2	硬質頁岩
	10号F3G1.1下層	不定形石器	7.2	5.8	1.5	75.8	硬質頁岩	23	10号F3G1.1下層	石核	5.6	4.9	2.0	37.0	凝灰質片岩
図19	1号F3G1.1下層	不定形石器	7.9	7.5	3.8	102.7	凝灰質片岩	24	1号F3G1.1下層	石核	5.2	3.9	2.0	22.5	硬質頁岩
	2号F3G1.1下層	不定形石器	6.4	4.4	1.9	40.8	凝灰質片岩	25	2号F3G1.1下層	石核	6.1	5.2	4.4	141.2	基岩
	3号F3G1.1下層	不定形石器	8.2	4.4	1.9	68.4	硬質頁岩	26	3号F3G1.1下層	石核	2.7	4.9	1.4	42.4	硬質頁岩
	4号F3G1.1下層	不定形石器	10.5	4.4	0.8	52.0	硬質頁岩	27	4号F3G1.1下層	石核	7.1	6.2	2.5	116.1	凝灰質片岩
	7号F3G1.1下層	不定形石器	3.8	8.8	1.7	55.5	硬質頁岩	28	7号F3G1.1下層	石核	3.5	2.6	2.5	21.9	硬質頁岩
	8号F3G1.1下層	石核	9.3	4.9	1.4	56.0	凝灰質片岩	29	8号F3G1.1下層	石核	4.4	5.0	1.7	39.9	凝灰質片岩
	9号F3G1.1下層	石核	10.1	6.7	2.8	115.6	硬質頁岩	30	9号F3G1.1下層	石核	4.8	6.9	2.7	65.4	凝灰質片岩
	10号F3G1.1下層	石核	8.9	7.7	1.8	124.2	基岩	31	10号F3G1.1下層	石核	6.4	6.1	1.7	58.7	硬質頁岩
図20	1号F3G1.1下層	不定形石器	7.7	5.5	2.0	37.7	凝灰質片岩	32	1号F3G1.1下層	石核	8.2	4.3	2.1	59.0	硬質頁岩
	2号F3G1.1下層	不定形石器	7.8	5.0	1.3	48.8	硬質頁岩	33	2号F3G1.1下層	石核	4.9	5.0	3.9	112.0	硬質頁岩
	3号F3G1.1下層	不定形石器	9.2	2.0	1.4	45.7	凝灰質片岩	34	3号F3G1.1下層	石核	6.2	5.5	2.2	66.9	硬質頁岩
	4号F3G1.1下層	不定形石器	6.9	7.4	1.9	90.5	シルト岩	35	4号F3G1.1下層	石核	5.6	4.0	1.9	29.9	硬質頁岩
	5号F3G1.1下層	不定形石器	6.9	6.8	1.4	50.4	凝灰質片岩	36	5号F3G1.1下層	石核	7.6	4.4	2.0	22.3	硬質頁岩
	6号F3G1.1下層	不定形石器	11.9	8.2	2.9	160.7	硬質頁岩	37	6号F3G1.1下層	石核	7.0	4.6	1.6	29.8	硬質頁岩
	7号F3G1.1下層	不定形石器	4.2	3.6	53.0	硬質頁岩	38	7号F3G1.1下層	石核	7.8	4.9	1.9	20.2	硬質頁岩	
	8号F3G1.1下層	不定形石器	3.2	3.7	0.9	12.9	凝灰岩	39	8号F3G1.1下層	石核	6.7	2.7	2.1	41.5	硬質頁岩
	9号F3G1.1下層	不定形石器	7.0	3.1	1.0	32.4	凝灰質片岩	40	9号F3G1.1下層	石核	8.8	2.9	2.4	55.1	硬質頁岩
	10号F3G1.1下層	不定形石器	8.9	2.6	1.0	24.9	凝灰岩	41	10号F3G1.1下層	不定形石器	4.9	2.0	1.8	20.8	凝灰岩
図21	1号F3G1.1下層	不定形石器	4.4	3.2	1.2	24.9	硬質頁岩	42	1号F3G1.1下層	石核	9.1	6.2	3.3	142.0	凝灰質片岩
	2号F3G1.1下層	不定形石器	3.1	2.7	1.0	10.4	硬質頁岩	43	2号F3G1.1下層	石核	10.6	6.0	10.7	硬質頁岩	
	3号F3G1.1下層	石核	6.4	2.6	0.9	12.8	硬質頁岩	44	3号F3G1.1下層	石核	6.7	3.9	3.7	84.9	凝灰岩
	4号F3G1.1下層	石核	7.4	7.9	2.3	73.4	硬質頁岩	45	4号F3G1.1下層	L1	6.1	4.2	2.3	16.6	硬質頁岩
	5号F3G1.1下層	不定形石器	5.9	4.2	1.3	17.0	凝灰質片岩	46	5号F3G1.1下層	石核	7.1	3.9	1.0	48.1	凝灰質片岩
	6号F3G1.1下層	石核	5.9	3.1	1.0	50.5	硬質頁岩	47	6号F3G1.1下層	石核	6.2	3.5	1.0	20.8	凝灰質片岩
	7号F3G1.1下層	不定形石器	7.5	6.8	1.1	51.2	硬質頁岩	48	7号F3G1.1下層	磨製石斧	8.1	3.1	2.4	200.5	基岩
	8号F3G1.1下層	不定形石器	10.2	4.8	2.0	90.2	硬質頁岩	49	8号F3G1.1下層	磨製石斧	3.3	2.0	2.0	28.1	内河川砂
	9号F3G1.1下層	不定形石器	7.6	5.2	1.6	62.7	基岩	50	9号F3G1.1下層	磨製石斧	5.1	2.0	1.5	22.7	凝灰質片岩
	10号F3G1.1下層	不定形石器	2.7	2.6	0.7	11.4	硬質頁岩	51	10号F3G1.1下層	磨製石斧	4.5	2.2	3.3	69.9	凝灰質片岩
8	L1	不定形石器	4.8	2.2	0.6	11.9	硬質頁岩	52	L1	磨製石斧	7.1	4.2	3.7	142.7	凝灰岩

表14 石器観察表(II)

図号	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	図号	出土位置	器種	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	材質	
M009-9	2号HGLI上層	磨製石斧	9.8	3.7	2.5	140.3	黒色片岩	M031-76	1号HGLI上層	磨製石	7.1	5.4	1.3	59.0	シムツ石	
	1号HGLI上層	磨製石斧	5.1	4.3	2.4	89.7	燧石		27号HGLI上層	磨製石	7.9	5.7	1.2	76.7	燧石	
	1号HGLI上層	磨製石斧	4.1	3.8	2.8	42.9	玄武岩		18号HGLI上層	磨製石	6.9	5.0	1.9	110	安山岩	
	1号HGLI上層	磨製石斧	4.3	4.1	2.0	70.0	安山岩		19号HGLI下層	磨製石	7.1	3.9	1.3	120	シムツ石	
	1号HGLI上層	磨製石斧	5.4	4.4	1.9	85.2	燧石		M031-5	1号HGLI上層	磨製石	7.3	5.6	1.4	130	シムツ石
	1号HGLI上層	磨製石斧	6.8	6.0	2.8	119.8	安山岩		2号HGLI上層	磨製石	8.2	4.7	1.2	58.1	シムツ石	
	1号HGLI下層	磨製石斧	7.7	2.4	1.5	86.5	角閃閃長岩		3号HGLI上層	磨製石	6.5	5.4	2.9	86.9	シムツ石	
	1号HGLI上層	磨製石斧	4.8	3.1	1.2	33.1	燧石		4号HGLI上層	磨製石	6.2	5.3	1.2	78.7	安山岩	
	1号HGLI上層	磨製石斧	3.4	3.4	1.3	51.3	安山岩		5号HGLI上層	磨製石	7.4	4.9	1.6	70.0	シムツ石	
	1号HGLI下層	磨製石斧	3.6	4.5	2.1	51.9	燧石		6号HGLI上層	磨製石	5.8	5.6	1.6	69.2	シムツ石	
M009-10	1号HGLI上層	磨製石斧	5.1	3.7	1.5	52.0	燧石	7号HGLI下層	磨製石	7.2	5.5	1.3	70.3	シムツ石		
	1号HGLI下層	磨製石斧	8.0	3.4	1.9	104.7	燧石	8号HGLI上層	磨製石	8.1	4.7	1.2	86.0	シムツ石		
	2号HGLI上層	磨製石斧	8.0	4.2	2.3	120.2	花崗岩	9号HGLI上層	磨製石	4.3	2.5	0.8	60.0	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	12.9	5.9	2.7	200	燧石	10号HGLI上層	磨製石	6.9	6.6	1.5	89.0	安山岩		
	1号HGLI上層	磨製石斧	11.0	4.9	2.9	250	燧石	11号HGLI上層	磨製石	8.3	6.1	1.6	80.0	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	8.8	4.5	2.5	170	燧石	12号HGLI上層	磨製石	8.2	7.7	1.2	74.9	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	6.6	3.4	1.2	45.1	燧石	13号HGLI上層	磨製石	7.5	5.8	1.3	100.0	シムツ石		
	L1	磨製石斧	5.7	2.0	1.1	28.6	燧石	14号HGLI下層	石錐	2.9	2.1	1.0	22.8	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	10.2	4.0	2.4	210	燧石	15号HGLI上層	磨製石	8.6	7.4	1.3	70.0	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	9.9	4.0	2.1	172	燧石	16号HGLI下層	磨製石	8.5	7.2	1.1	100.0	シムツ石		
M009-11	1号HGLI下層	磨製石斧	8.1	4.1	2.0	110	燧石	17号HGLI上層	磨製石	10.5	6.8	1.4	51.2	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	10.0	4.6	2.1	142.3	角閃閃長岩	18号HGLI上層	磨製石	8.6	12.9	1.6	200.0	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	6.4	3.7	2.8	130	燧石	19号HGLI上層	磨製石	10.0	6.0	1.5	121.1	燧石		
	1号HGLI下層	磨製石斧	7.5	2.5	2.0	148	片岩	M031-3	1号HGLI上層	磨製石	4.8	4.0	1.9	49.8	燧石	
	1号HGLI上層	磨製石斧	8.7	4.5	2.3	130	安山岩	2号HGLI上層	磨製石	6.5	5.9	1.6	61.9	燧石		
	1号HGLI下層	磨製石斧	9.2	4.9	3.2	200	燧石	3号HGLI下層	磨製石	5.1	2.6	1.0	12.3	シムツ石		
	1号HGLI下層	磨製石斧	11.4	5.7	2.4	250	安山岩	4号HGLI上層	磨製石	7.2	6.0	1.2	57.5	燧石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	9.6	4.7	3.3	210	燧石	5号HGLI上層	磨製石	8.7	4.4	1.4	84.5	燧石		
	1号HGLI下層	磨製石斧	10.2	5.4	2.7	180	燧石	6号HGLI上層	磨製石	5.4	4.5	0.8	32.7	燧石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	8.4	4.8	3.0	140	燧石	7号HGLI下層	磨製石	2.1	10.9	2.4	190.0	シムツ石		
M009-12	1号HGLI上層	磨製石斧	10.1	4.5	2.6	290	燧石	8号HGLI上層	磨製石	17.7	10.4	2.4	542	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	7.1	3.9	1.9	48.1	角閃閃長岩	9号HGLI下層	磨製石	10.6	6.7	2.1	120	燧石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	4.9	3.1	3.2	110	シムツ石	10号HGLI上層	磨製石	12.7	6.5	1.7	200	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	5.0	4.7	2.4	99.0	燧石	11号HGLI上層	磨製石	16.2	6.8	2.9	380	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	10.1	5.7	3.1	220	燧石	M009-1	1号HGLI上層	石錐	4.7	2.4	0.5	3.0	シムツ石	
	1号HGLI下層	磨製石斧	11.3	10.9	1.3	220	燧石	2号HGLI下層	石錐	4.1	3.0	0.6	16.8	シムツ石		
	1号HGLI上層	打製石斧	20.5	10.5	3.1	600	安山岩	3号HGLI上層	石錐	5.3	2.4	0.8	8.0	シムツ石		
	1号HGLI上層	打製石斧	5.1	7.9	2.1	200	燧石	4号HGLI下層	石錐	5.1	5.8	1.7	100	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石斧	4.7	4.3	2.6	110.0	シムツ石	5号HGLI下層	磨製石	3.5	2.4	0.8	7.0	燧石		
	2号HGLI上層	磨製石	7.4	6.4	1.9	55.0	シムツ石	6号HGLI上層	磨製石	3.9	2.5	0.9	12.8	シムツ石		
M009-13	1号HGLI下層	磨製石	8.8	4.7	1.9	42.2	燧石	7号HGLI下層	磨製石	4.6	3.1	0.8	22.5	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	8.9	4.1	1.9	30.5	燧石	8号HGLI下層	石錐	4.3	3.4	0.8	13.5	シムツ石		
	L1	磨製石	7.7	7.5	1.7	90.0	シムツ石	9号HGLI上層	石錐	3.7	3.1	0.6	7.7	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	5.8	3.8	1.9	50.7	シムツ石	10号HGLI下層	石錐	4.9	3.7	0.9	12.8	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	6.6	4.7	1.5	60.1	シムツ石	11号HGLI上層	石錐	4.6	4.1	0.7	13.5	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	10.9	4.9	2.3	130	燧石	12号HGLI下層	石錐	5.3	2.8	0.6	13.5	燧石		
	1号HGLI上層	磨製石	4.3	5.2	1.6	49.2	燧石	13号HGLI上層	石錐	5.5	3.2	1.1	39.7	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	6.6	5.8	1.5	6.0	シムツ石	14号HGLI上層	石錐	4.2	3.3	0.7	9.3	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	3.3	4.8	0.7	18.7	燧石	15号HGLI上層	石錐	4.4	3.9	0.7	12.9	シムツ石		
	1号HGLI上層	磨製石	4.2	4.3	1.0	15.0	シムツ石	16号HGLI上層	石錐	5.3	3.1	0.7	8.1	シムツ石		
1号HGLI上層	磨製石	4.0	5.6	1.1	20.7	シムツ石	17号HGLI下層	石錐	4.9	2.4	0.8	11.0	シムツ石			
1号HGLI上層	磨製石	8.2	7.4	1.9	120	シムツ石	18号HGLI上層	石錐	4.5	3.1	1.0	15.8	燧石			
1号HGLI上層	磨製石	7.9	5.1	1.0	34.3	シムツ石	19号HGLI上層	石錐	4.3	3.5	0.7	10.2	燧石			

第2章 遺構と遺物

表14 石器観察表②

図号	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質	図号	出土位置	器種	最大長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重量 (g)	材質
図04-10	#19GL1下部	石鏃	3.4	4.2	1.2	33.2	シルト岩	図038-3	#39GL1	石鏃	27.2	36.6	13.9	2000	安山岩
21	#7GL1下部	石鏃	4.0	2.7	1.0	9.3	シルト岩	図039-1	#49GL1下部	石鏃	17.6	16.5	2.9	2890	安山岩
22	#6GL1	石鏃	5.1	3.4	0.8	14.4	シルト岩	2	#49GL1下部	石鏃	27.4	23.0	6.6	3810	安山岩
23	#19GL1	石鏃	5.4	4.4	1.0	35.4	シルト岩	3	LI	石鏃	16.1	22.0	6.2	3510	安山岩
24	#29GL1	石鏃	4.4	3.6	0.7	8.1	細粒凝灰岩	4	#49GL1下部	石鏃	29.9	18.4	6.8	2000	安山岩
25	#89GL1下部	石鏃	4.0	3.2	0.8	15.3	細粒凝灰岩	5	表層	石鏃	22.4	26.2	7.5	5500	安山岩
26	#19GL1	石鏃	4.3	3.0	0.8	10.7	シルト岩	6	#99GL1下部	燧石	8.2	7.4	4.9	560	安山岩
27	#39GL1	石鏃	4.0	2.9	0.5	3.5	シルト岩	7	#99GL1下部	燧石	7.9	6.6	3.7	380	安山岩
28	#49GL1下部	石鏃	3.3	4.6	0.7	2.7	シルト岩	図040-1	#3GL1下部	燧石	15.5	5.6	5.0	730	安山岩
29	#19GL1	石鏃	3.1	3.8	0.8	17.4	シルト岩	2	#49GL1下部	燧石	7.3	6.1	3.3	380	安山岩
30	#19GL1	石鏃	4.4	3.5	0.8	7.3	硬質頁岩	3	#59GL1下部	燧石	11.6	4.2	3.7	590	安山岩
31	LI	石鏃	5.2	3.5	0.5	10.1	シルト岩	4	#89GL1下部	燧石	7.0	4.0	6.7	1500	安山岩
32	#19GL1	石鏃	3.9	3.5	1.0	14.0	シルト岩	5	#99GL1下部	燧石	14.7	7.2	6.1	1170	安山岩
33	#39GL1	燧石	5.5	4.5	0.7	22.2	シルト岩	6	#99GL1	燧石	6.8	6.6	4.3	490	安山岩
34	#19GL1	石鏃	4.5	3.5	0.9	18.2	シルト岩	7	#39GL1	燧石	13.8	4.6	1.8	440	シルト岩
35	#49GL1	石鏃	4.5	3.9	0.7	12.0	シルト岩	図041-1	#29GL1	燧石	8.2	6.7	4.6	890	安山岩
36	#19GL1下部	石鏃	2.3	2.0	0.7	5.9	シルト岩	2	#49GL1	燧石	9.2	3.8	3.5	390	花崗岩
37	#29GL1下部	石鏃	4.6	2.9	0.8	10.7	シルト岩	3	#39GL1	燧石	18.7	9.7	7.0	3180	安山岩
38	#19GL1	石鏃	4.4	2.8	0.7	7.2	安山岩	4	#99GL1	燧石	12.5	5.6	4.5	700	安山岩
39	#6GL1下部	石鏃	4.5	3.2	0.8	8.7	シルト岩	5	#39GL1	燧石	9.5	8.2	2.4	650	安山岩
図042-1	#29GL1下部	石鏃	4.1	3.0	0.5	7.2	シルト岩	6	#99GL1	燧石	7.5	5.8	2.4	390	安山岩
2	#29GL1	石鏃	4.0	2.8	0.9	10.8	シルト岩	7	#39GL1	燧石	5.8	4.1	3.1	190	安山岩
3	#19GL1	石鏃	3.6	3.2	0.8	18.5	シルト岩	図043-1	#39GL1	燧石	11.7	5.1	3.9	500	粗粒砂岩
4	#19GL1	石鏃	4.5	3.0	0.5	10.0	シルト岩	2	#99GL1	燧石	10.8	4.8	4.2	440	安山岩
5	#27GL1下部	石鏃	3.7	3.8	0.9	20.0	シルト岩	3	#39GL1	燧石	12.2	5.6	1.5	400	花崗岩
6	#19GL1下部	石鏃	8.8	3.7	1.3	60.0	シルト岩	4	#39GL1	燧石	6.4	4.2	5.7	620	安山岩
7	#19GL1下部	石鏃	5.0	3.8	1.0	20.0	シルト岩	5	#29GL1	燧石	8.0	7.2	2.3	230	花崗岩
8	#19GL1	石鏃	7.2	2.6	1.7	30.0	シルト岩	6	#99GL1下部	燧石	11.2	14.3	3.5	520	安山岩
9	#19GL1	石鏃	5.2	2.6	0.7	18.0	シルト岩	7	#11GL1下部	燧石	14.2	5.9	4.6	590	安山岩
10	#59GL1	石鏃	5.5	3.7	0.7	17.6	シルト岩	8	#29GL1	燧石	12.0	2.7	3.5	220	粗粒凝灰岩
11	#39+39GL1	石鏃	3.3	3.2	0.6	6.2	シルト岩	9	#69GL1	燧石	23.8	10.8	16.2	2170	安山岩
12	#19GL1	石鏃	4.7	2.6	0.9	14.1	シルト岩	図044-1	#29+39GL1下部	燧石	12.7	9.0	4.8	890	安山岩
13	#29GL1下部	有層石鏃	6.8	4.1	1.7	53.3	安山岩	2	#49GL1	燧石	13.7	5.9	3.7	490	安山岩
14	#19GL1下部	打傷石鏃	6.6	4.8	1.6	60.0	中粒砂岩	3	#49GL1	燧石	12.5	7.4	4.6	520	安山岩
15	#19GL1下部	有層石鏃	8.5	8.8	2.4	250	中粒砂岩	4	#44GL1	燧石	15.7	9.2	16.2	1280	硬質頁岩
16	#99GL1	石鏃	4.0	3.8	1.3	10.0	燧石	5	#29GL1	燧石	14.8	8.9	6.8	1280	安山岩
図045-1	#99GL1	有層石鏃	10.1	6.4	1.9	95.0	花崗岩	6	#49GL1	燧石	9.1	8.3	6.2	720	安山岩
2	#29GL1	石鏃	10.7	14.0	3.7	620	安山岩	図046-1	#49GL1下部	燧石	12.9	7.3	3.7	840	安山岩
3	#19GL1下部	石鏃	11.4	11.6	4.7	720	花崗岩	2	#49GL1	燧石	14.0	4.4	4.0	860	安山岩
4	#99GL1	石鏃	7.5	14.9	4.1	880	安山岩	3	#39GL1	燧石	11.1	4.3	6.8	540	安山岩
5	#39GL1	石鏃	21.8	14.3	5.1	120	花崗岩	4	#99GL1下部	燧石	10.9	10.4	5.0	860	安山岩
6	#99GL1下部	石鏃	10.4	10.4	6.7	1520	安山岩	5	#49GL1	燧石	12.0	8.7	7.0	790	安山岩
7	#99GL1下部	石鏃?	17.6	8.8	5.2	1102	安山岩	6	#39GL1下部	燧石	11.0	6.9	4.0	570	安山岩
図047-1	#19GL1	石鏃	20.8	25.7	12.8	3502	安山岩	燧石	12.1	6.0	5.8	870	安山岩		
2	#49GL1下部	石鏃	25.4	22.1	8.6	2342	安山岩	図048-1	#39GL1	燧石	15.5	8.9	4.3	620	安山岩
3	燧石	石鏃	40.1	33.1	8.2	1080	粗粒凝灰岩	2	#39GL1	燧石	13.6	6.5	6.8	860	安山岩
4	#29GL1	石鏃	18.8	37.2	5.6	5810	石英安山岩	3	#49GL1	燧石	14.9	10.6	10.0	540	安山岩
5	#39GL1	燧石	27.2	22.6	5.1	2020	粗粒砂岩	4	LI	燧石	16.2	11.3	3.9	1720	安山岩
6	#39GL1	燧石	17.9	14.9	6.4	1380	安山岩	5	#19GL1	燧石	16.1	7.8	6.1	710	安山岩
図049-1	#49GL1	石鏃	22.9	18.2	6.1	1500	安山岩	6	LI	燧石	12.7	5.2	2.7	560	安山岩
2	#19GL1	石鏃	20.9	10.6	6.0	2280	安山岩	7	#69GL1	燧石	14.4	8.6	4.7	720	安山岩
3	#99GL1	石鏃	17.8	12.7	6.1	2080	安山岩	図049-1	#59GL1	燧石	15.2	10.4	8.2	1840	安山岩
4	#19GL1	石鏃	21.8	19.0	6.2	2380	安山岩	2	#39GL1	燧石	11.2	7.9	3.1	880	安山岩

表14 石器觀察表03

採集	系上位置	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	採集	系上位置	器種	長さ(mm)	幅(mm)	厚さ(mm)	重量(g)	材質	
M046-3	中層~4SGL1上層	磨石	18.2	12.7	6.0	3430	安山岩	M057-3	中~2AG+3SG1上層	打製一瓣石器	6.2	4.3	1.7	24.1	燧石質灰岩	
	中層	磨石	13.8	9.0	10.6	1810	安山岩		4	打製二瓣石器	7.7	4.7	3.0	19.1	燧石	
	中層	磨石	14.7	6.2	4.6	680	安山岩		5	打製2	?	3.5	4.3	0.4	3.8	燧石
	中層	磨石	15.7	8.3	3.0	870	安山岩		6	打製石	?	5.5	3.0	1.2	18.0	燧石質灰岩
	中層	磨石	18.0	12.8	4.3	1660	安山岩		7	打製石	?	4.6	3.9	1.2	30.0	燧石
	中層	磨石	14.9	4.9	7.3	800	安山岩		8	打製石	?	4.4	2.6	1.3	30.0	燧石質灰岩
M056-1	中層	二瓣石器	5.8	5.6	3.4	10.6	燧石質灰岩	9	打製石	準備中	3.4	3.5	1.5	19.9	燧石質灰岩	
	中層	一瓣石器	4.7	2.3	1.5	20.0	燧石質灰岩	10	打製石	準備中	3.4	3.2	0.6	8.5	燧石質灰岩	
	中層	二瓣石器	6.7	8.5	2.2	108.0	燧石質灰岩	11	打製石	準備中	5.7	3.4	1.3	36.0	燧石質灰岩	
	中層	二瓣石器	8.3	2.5	0.9	33.0	燧石質灰岩	12	打製石	二瓣石器	4.3	4.4	1.1	18.5	燧石質灰岩	
	中層	二瓣石器	4.5	4.1	1.2	39.0	燧石質灰岩	13	打製石	打製石製品	3.8	4.9	1.5	27.3	砂質燧石	
M056-2	中層	二瓣石器	5.7	4.5	1.5	34.0	燧石質灰岩	M056-1	中層	打製石	10.2	7.0	4.5	240	燧石質灰岩	
	中層	打製二瓣石器	4.7	8.4	2.8	57.6	燧石質灰岩		2	打製石	打製石製品	4.1	3.1	0.8	16.0	砂質燧石
	中層	打製一瓣石器	3.2	4.1	1.3	7.0	燧石質灰岩		3	打製石	?	9.0	7.7	6.3	115	燧石質灰岩
	中層	打製三瓣石器	7.2	7.9	1.6	85.0	燧石質灰岩		4	打製石	石版	4.6	7.3	2.3	81.3	燧石質灰岩
M057-1	中層	打製三瓣石器	4.1	6.7	1.8	38.0	燧石質灰岩	5	打製石	石版	6.4	6.7	2.6	115.0	燧石質灰岩	
	中層	打製一瓣石器	3.2	6.0	1.8	28.0	燧石質灰岩									



第3章 考察

第1節 縄文時代の遺物について

法正尻遺跡から出土した縄文時代の遺物は、土器・石器を主体とし、土偶・三角柱状土製品や大珠・三脚石器・岩版等の石製品が出土している。本節では出土遺物の中で主体を占めている土器と石器について述べる。

土 器

法正尻遺跡からは、縄文時代早期中葉から晩期の土器が出土している。この内、法正尻遺跡出土土器で主体を占めるものは、縄文時代前期末葉～中期末葉のもので、これ以外の土器の出土量は極めて少ない。検出された遺構はすべて、縄文時代前期末葉～中期末葉の時期に比定される。本節では法正尻遺跡の出土遺物で主体を占める、縄文時代前期末葉～中期末葉の土器について、時間的位置付けを中心に述べることにする。なお、図859～871には遺構や地点によってまとまりがあると考えられる土器を集成し、付図4・5にはこれを基に、Ⅱ群2類～Ⅲ群1類土器を対象として集成図を作成した。

Ⅱ群1類土器

縄文時代前期末葉、大木6式に比定される土器で、施文されている文様から、a～f種に12区分した。法正尻遺跡では0G以東の台地上と、0G以西の西向き斜面部から出土したⅡ群1類土器の内容に、明確な違いが見られる。0G以東の台地上からはa～f種、西向き斜面部ではg～l種が、主体的に出土している。特に、西向き斜面部では、a～f種の出土はまったく認められない。この違いは、基本的には大木6式土器における時間差と考えられ、a～f種が古く、g～l種が新しいものと判断している。この新旧関係については、法正尻遺跡における出土地点の違いの他に、法正尻遺跡や他の遺跡における層位的所見と、土器自体に見られる文様の特徴から判断した。

法正尻遺跡西向き斜面部、タ～ツ88G付近には黒色土に挟まれて、沼沢火山の火山灰が純層をなして堆積していた。この火山灰の上部に堆積する黒色土からは、次類土器も含めて多量のⅡ群1類g～l種が出土し、図649-1はこの火山灰に密着した状態で出土している。火山灰下部に堆積する黒色土からは、何等遺物は出土していない。SK278に堆積するⅡ2は純層に近い沼沢火山の火山灰で、この下から図440-1が出土している。さらに、正式な報告は未完であるが、本年度福島県文化センターが発掘調査報告を実施した、会津高田町に所在する鹿島遺跡³⁾からはⅡ群1類a～f種に近似する土器が出土している。その多くは純層をなす沼沢火山の火山灰の下に

堆積する黒色土から出土しているらしい。これらの属位的事例からⅡ群1類a～f種が大木6式古段階、同g～l種は大木6式新段階のものと判断した。

次に土器自体の様相について検討して見よう。図859にはⅡ群1類a～f種、図860には同g～l種を示した。深鉢の器形には、金魚鉢状のものと円筒形状のものが主体を占めるのは古段階・新段階ともに共通する。古段階の金魚鉢状をなす深鉢では、口縁部が丸く肥厚し複合口縁状をなすものが多く、円筒形状の深鉢の口縁部も、複合口縁状をなしているものが多い。古段階における、器形的な特徴と考えている。新段階の金魚鉢状をなす深鉢には、次類土器に繋がるような、口縁部が若干内湾するものが見られる。口縁部があまり肥厚しない、複合口縁状をなす円筒形状の深鉢も、口縁部の上下幅が広がり、断面形は板状をなす傾向が見られる。また新段階の土器には、異系統の土器ではあろうが、図649-3のような器形の深鉢も見られる。

古段階の土器の文様は複合口縁状に肥厚する部分に施されるものが多く、頸部には無文帯や粗文帯を配するものも見られる。図267-1、図646-2のように胴部上端に文様を施すものでも、そこに描かれる文様は単純なものが多い。口頸部と胴部は隆線で区画されるものが顕著に見られ、この隆線上には、図647-4や図648-7のように斜位の押捺を加えるものも多く認められる。施文される文様には、縄瓦痕文(a種)・沈線文(f種)・連続爪形文(d種)・粘土紐貼付文上に連続爪形文を施すもの(e種)、三角形の刻みを加えるもの(b種)がある。e種は、新段階としたj種と比べると粘土紐は太く、その上に施される連続爪形文の幅も広い。縄瓦痕文は1段攪りの縄を用いて施され、地文には2段攪りの縄を横に回転させて縄文を施すものがほとんどである。b種に見られる三角形の刻みは、大木5式土器の鋸歯状をなす口縁部にその祖形を求められるものと考えている。a種の縄瓦痕文は、すでに芳賀の指摘するように⁹⁾、大木5式土器から連続する文様要素であろう。

新段階の土器の文様は、円筒形状の深鉢では口縁部、金魚鉢状の深鉢では口縁部と胴部上半に施されている。金魚鉢状をなす深鉢の胴部上半にも、口縁部と同じく幾何学的で複雑な文様を描くものが多い。文様施文要素には、沈線(g・h種)・沈線の片割線に連続爪形文を施すもの(i種)・ソーマン状の粘土紐上に連続爪形文を施すもの(j種)・縄瓦痕文(k種)が見られる。連続爪形文は沈線文やソーマン状の粘土紐と複合して施されるものが主体を占め、これ独自で文様を描くものはほとんど見られない。k種は図648-8、図669-32のような器種に限定され、半精製土器的なあり方を示す。地文は2段攪りの縄を横に回転させて施すものが多いが、図506-5・6のように縄を縦に回転させたものも散見される。描かれる図形には、幾何学的な文様の他に、渦巻文が顕著に見られ、これも次類土器に繋がる要素と考えられる。g種に見られる短沈線を上下交互に施すものも、次類土器に見られる交互刻突文に繋がる手法と考えている。図649-3、図669-2は北陸地方の土器の影響を受けたものであろう。

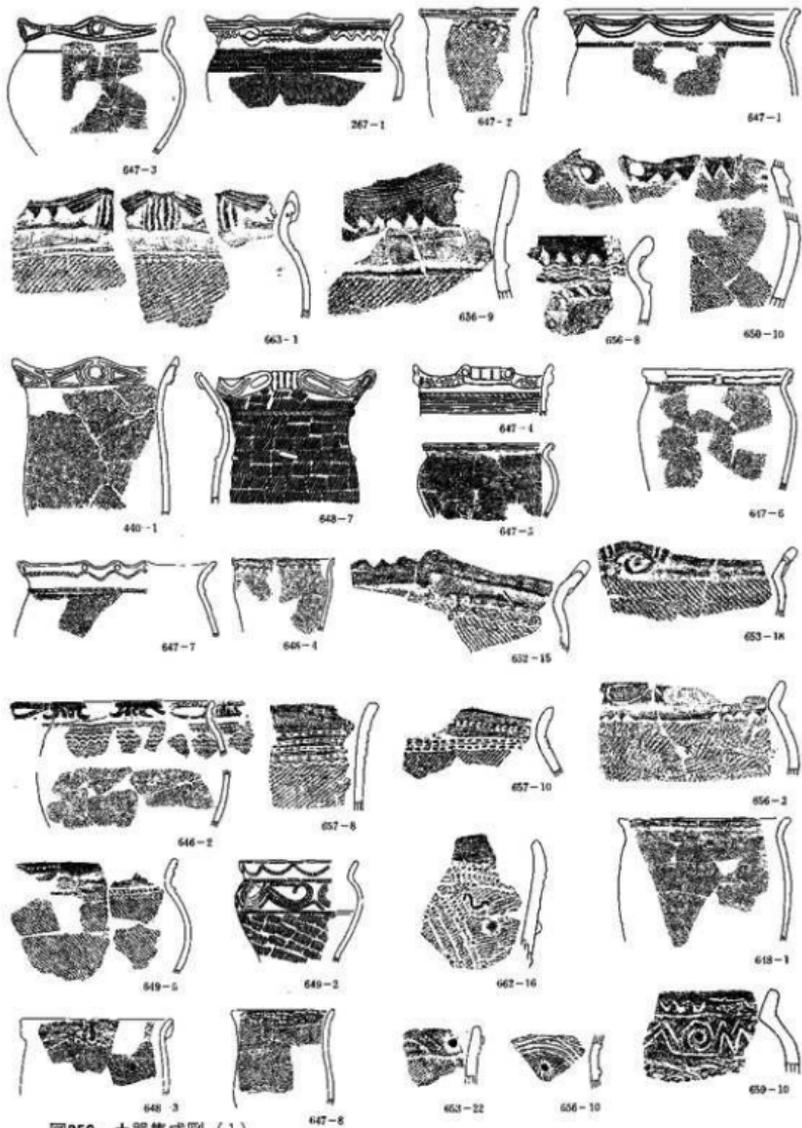


図859 土器集成図(1)

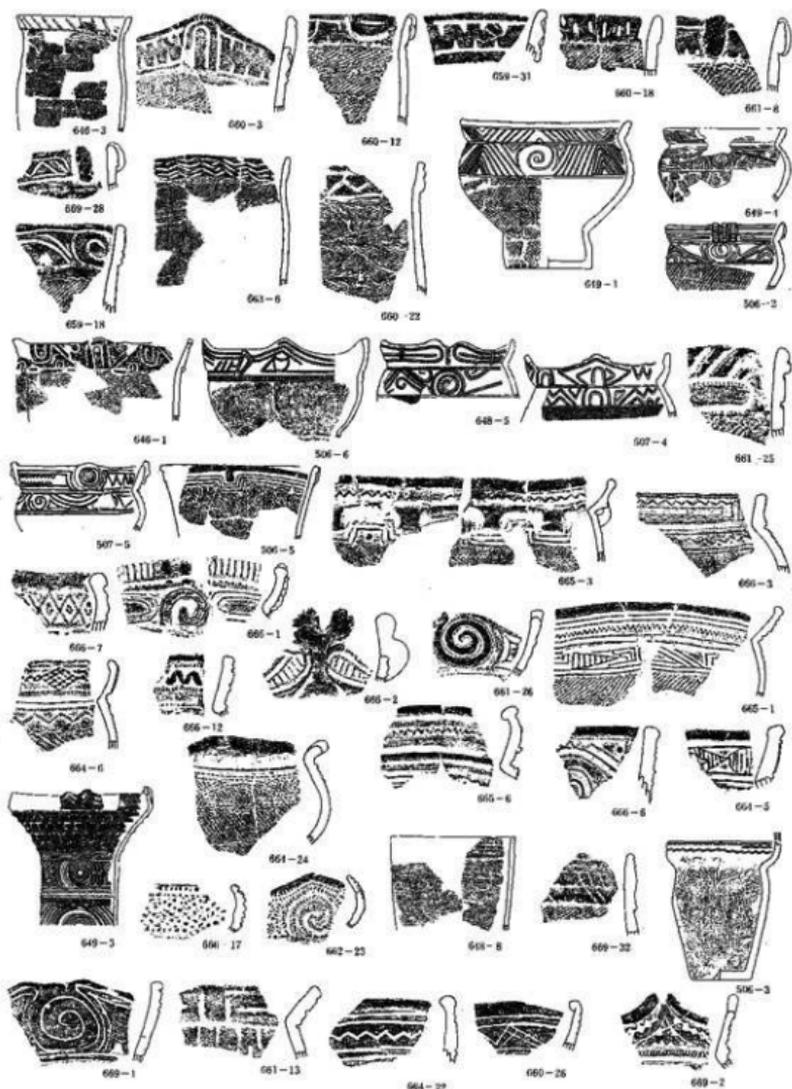


图860 土器集成图(2)

次に本群土器の分布について、他遺跡例と比較しながら検討を加える。法正尻遺跡において大木6式古段階とした土器に類似するものは、県内では会津高田町上道上B遺跡⁷¹、会津高田町鹿島遺跡、相馬市師山遺跡⁷²から出土している。県外では、岩手県鳩岡崎遺跡⁷³・滝ノ沢遺跡⁷⁴出土土器が本遺跡例に近いものと考えられる。山形県吹浦遺跡⁷⁵、宮城県小栗川遺跡⁷⁶にもこれと類似する土器の出土が認められ、東北地方の広い範囲に渡って類似した土器が分布していることが分かる。

法正尻遺跡Ⅱ群1類古段階の土器に最も近いものは、鹿島遺跡例である。鹿島遺跡からはa～f類が出土し、g～l類の出土量は極めて少ないようである。上道上遺跡・師山遺跡もこれに近い。師山遺跡では肥厚する口縁部の下端に三角形の刻みを加えたものが見られるが、口縁部に3個1対の小突起をもち、半截竹管で頸部に波状沈線文、胴部上半に対弧状の文様を巡らせるもの(同報文第306図1)が見られる。この土器に類似するものは、法正尻遺跡Ⅱ群1類土器の中には見られない。

鳩岡崎遺跡第3群土器や滝ノ沢遺跡Ⅱ群土器の口縁部は、法正尻遺跡Ⅱ群1類古段階の土器と同じく、複合口縁状に肥厚するものが多いようである。図647-4のような円筒形状の深鉢に見られる口縁部文様は、両遺跡出土土器の中で主体を占めている。しかし、法正尻遺跡と鳩岡崎遺跡・滝ノ沢遺跡では異なる点も数多く見られる。法正尻遺跡に顕著なa・b・c種はほとんど見られず、d種の出土量もごく少ないようである。これに変わって、沈線文の施されるものが主体を占める。さらに、両遺跡では、胴部に沈線によってX字状の図形を描くものが多いが、法正尻遺跡ではこの様な胴部文様はほとんど認められない。大きくは、大木6式古段階における地域差と考えることが妥当であろう。胴部文様の違い、文様施文要素の違いは基本的には大木6式新段階まで継承されるものと考えられる。

法正尻遺跡Ⅱ群1類新段階の土器に近いものは、県内では石川町葉師堂遺跡⁷⁷から、県外では山形県吹浦遺跡、岩手県滝ノ沢遺跡、宮城県小栗川遺跡や長根貝塚⁷⁸から出土している。しかし、葉師堂遺跡と吹浦遺跡を除けば、これに類似する土器の出土量はごく少ないらしい。

葉師堂遺跡からは、法正尻遺跡でg種・h種・i種・j種・k種としたものが出土している。葉師堂遺跡でg種に類似するものの中には、図660-3・11・12のように上下交互に短沈線を施すものも見られる。また、j種土器に近似するものについては、関東地方に分布する十二菩提式土器と区別が付かないものが含まれている点が指摘されている。法正尻遺跡j種の中にも、図664-22、図665-1・6のように、十二菩提式土器と区別が付かないものが見られる。

吹浦遺跡ではg種に近似するものが見られる。滝ノ沢遺跡、長根貝塚でも金魚鉢状の深鉢にはg種に近似するものがあり、この器形の深鉢に限って見れば、東北地方の中央部から関東地方まで類似する土器が分布するようである。g種の中で上下交互に短沈線を施すものは県外ではあ

まり見られず、i種のようなものほとんど見られない。これも大木6式おける地域差と考えている。法正尻遺跡Ⅱ群1類新段階に見られる諸要素は、十三菩提式土器や北陸地方の同時期の土器の影響を受けているものと考えられるが、両地方ともに土器の内容に不確定な部分が多く、現段階ではどの地方の影響をより強く受けているのか、具体的に述べるだけの材料に乏しい。

Ⅱ群2類土器

縄文時代中期初頭、大木7a式に比定される土器である。法正尻遺跡ではa～n種に14区分している。本類土器の分布はⅡ群1類土器と共通し、台地上と西向き斜面部から出土した土器には、明確な違いが見られる。西向き斜面部からはⅡ群2類a～g種が、台地上からは同h～n種が出土している。e種は両地点から出土しているが、他のものについては基本的に両地点から出土しているものはない。これらの土器については、従来の知見¹³⁾から、a～g種を大木7a式古段階、h～n種が新段階に相当するものと考えている。付図4にはa～g種をⅡ群2類(Ⅰ)、h～n種をⅡ群2類(Ⅱ)として示した。

図861には、西向き斜面部から出土した大木7a式古段階と考えられる土器を示した。a種(図671-1・3・5)は細密な沈線を密接して施すもので、中部～北陸地方に分布する中期初頭の上器に見られる沈線施文手法に近似すると考えている。b種(図506-7・8、図507-3、図670-1、他)は梯子状の沈線で文様を描くもので、五領ヶ台Ia式土器の文様施文要素に極めて類似する。本種には図506-8や図671-24のように、口縁部の上端と下端に交互に三角文を施し、この隙間を横位の沈線で充填するものも含まれた。これは、図507-3の同一器面にこの二つの文様が見られることによる。このように4単位に区画された口縁部の区画内に、交互に異なる文様を施すものは、従来あまり知られていないものであろう。図670-5は胴部を区画するように、沈線が施されている。図675-6の三角文は沈線で描かれ、その隙間に充填される沈線相互の間隔は広く、雑である。これらの土器については、b種でもより新しい時期のものである可能性がある。

b種に近似するものは、県内では、郡山市中ノ沢A遺跡¹⁴⁾、福島市愛后原遺跡¹⁵⁾に好例がある。両遺跡とも出土点数は僅かであるが、その内容は法正尻遺跡b種に近い。県外では茨城県虚空蔵貝塚¹⁶⁾、宮城県長根貝塚・小梁川遺跡からも出土している。長根貝塚では三群六類とされ、在地の大木7a式土器とセットをなす五領ヶ台式系の土器と考えている。小梁川遺跡で大木7a式とされたⅡ群土器は、ほぼ法正尻遺跡のb種で構成され、宮城県南部まで五領ヶ台Ia式系統の土器が主体を占めて分布しているらしい。山形県吹浦遺跡では、a種に近似するものが主体を占めているようである。

c種(図670-2・4、図670-17、図675-20、他)は沈線で文様を描くもので、長根貝塚二群二類とされた土器に近似し、小梁川遺跡Ⅱ群土器にも類似するものがある。東関東の五領ヶ台Ib式土器の中にも散見される。丹羽は長根貝塚第Iトレンチの6・7層と8・9層の出土土器に違いが

見られることを根拠に、法正尻遺跡b種を含む大木7a式(長根貝塚三群一・六類主体)と、法正尻遺跡c種を含む大木7a式(長根貝塚三群二・三類主体)の間に時間差を想定している¹³⁾。一方、小梁川遺跡報文では大木7a式の細部の変遷については、「今後の課題」としながらも、丹羽の見解には否定的である。福島県内ではc種に類似するものは、ごく限られている。飯館村羽白C遺跡¹⁴⁾の西地区、113号住居跡と遺物包含層からは図674-17に近似する「ハ」の字状の沈線文が施されたものが出土している。一方、b種に近似するものは、周辺に所在する遺跡を含めても1点も認められない。このことから、「ハ」の字状の沈線文の施された土器と、b種の間には基本的には時間差があるものと考えられる。しかし、その内容については現段階では不明な点も多い。

e種(図665-25, 図675-33, 図676-6, 他)は、三角文による交互刺突文を施すもので、飯館村羽白C遺跡西地区、113号住居跡にも見られることからc種に伴うものと考えられる。d・f・g種についてはb種・c種のどちらに伴うものか判然としない。

e種の一部とh~n種土器が、大木7a式の新段階を構成するものと考えている。一応大木7a式新段階と考えているが、東北地方南部においてどの段階の土器までを大木7a式とするのか、共通の認識がないままこの名称を使うことには問題があろう。一応報文では、東関東地方で竹ノ下式と言われるものと併行する時期までを大木7a式とした。この段階と考えられる土器を付図4に、1群2類(2)として掲載した。その内容は、「東関東地方に分布する土器」そのものと考えられる。法正尻遺跡ではこの時期の、大木式系統の土器が極めて少ないようである。これが法正尻遺跡における実態なのか、あるいは次類とした土器の中に、これらと併行する土器が含まれ、それを分離し得なかっただけなのか、基本的な所で大きな問題を残している。

図862に示したSI54出土土器は、本期に比定される唯一の一括資料である。i種2点とm種2点、無文の小型深鉢が1点出土している。図110-1・2は東関東的な土器、図109-1, 図111-1は福島県における大木式系の土器と考えられる。施文される文様で特記されるのは、口唇部に施された縦位の短沈線文と、三角文であろう。

付図4には、この段階と考えている土器を集成した。図688-1については、付図4でII群2類(2)に置いたが、第2章第6節で記載したように、波頂部の刻みと、波状口縁の片側縁に小突起が付き、左右非対象の意識が見られるところから、阿玉台Ia式に近いものとして、II群3類(1)に位置付けるのが妥当ではないかと考えている。図491-6, 図681-1は沈線に沿って列点文が施されるもので、五領ヶ台IIb式土器と考えられる。その他のものについては、五領ヶ台IIc式・竹ノ下式土器とされるものに類似している。

この段階に類似する資料は、県内では羽白C遺跡東地区、相馬市師山遺跡、川俣町後庵館遺跡¹⁵⁾、会津坂下町勝負遺跡¹⁶⁾から出土している。勝負遺跡においても五領ヶ台II式・竹ノ下式系土器の出土量が多く、大木式系土器については法正尻遺跡と同様不明な点が多い。後庵館遺

第3章 考 察

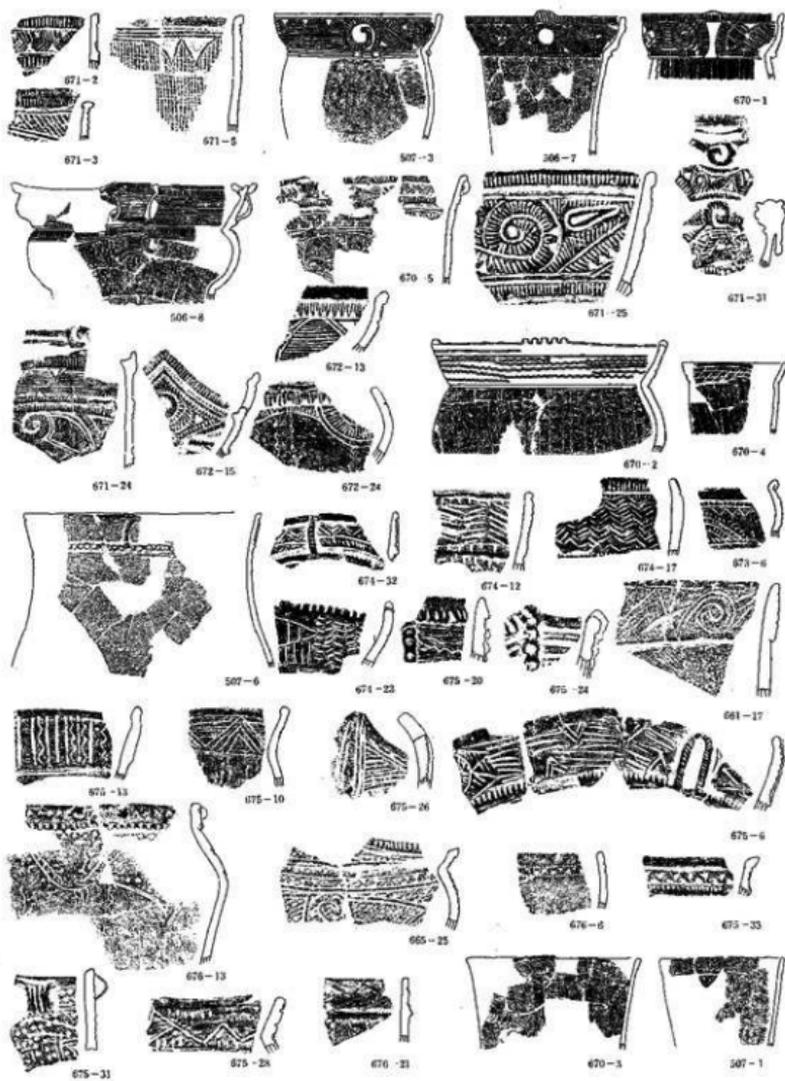


图861 土器集成图(3)

跡ではi種土器の系譜を引くと考えられる土器と、図111-1に近い粗製土器が出土し、SI54出土土器に近い内容が見られる。羽白C遺跡東地区でも五領ヶ台Ⅱ式土器や竹ノ下式系土器と考えられるものを除くと、その内容は極めて限定され、平行沈線文・爪形文・縄正浪文が施されたものしか基本的には残らず、数的にもごく限られるようである。この時期福島県においては、東関東的な土器が土器組成の中で主体を占めている可能性が高い。

師山遺跡からは五領ヶ台Ⅱ式土器が主として出土しているが、竹ノ下式系の土器は見られない。10数kmしか離れていない羽白C遺跡東地区では、竹ノ下式系土器が出土していることから、ここに時間差を考えることも可能だと考えている。師山遺跡Ⅲ群土器と法正坑遺跡Ⅱ群2類h～n種土器の間には、時間差があるものと考えている。

Ⅱ群3類土器

大木7b式に比定されるものと考えられる。器形をもとに4区分、施文されている文様要素で3区分、合計7区分している。SK415からは、本種土器がまとまって出土している。この土器については、出土層位と出土状態から極めて一括性の高いものと判断している。まず、図862に示した、SK415出土土器について検討する。

深鉢の器形は図477-1・2がc種、図477-3も胴部の形態はこれに近い。図474-7、図475-1・3、図476-3、図478-1がd種、図474-6も基本的にはこれに近いものと考えている。この他に、図475-2のようにI緑部が丸みを持つもの、図476-1・21のように胴部が長胴状をなしI緑部が開くもの、図477-4のように胴部下半に括れを持つものもある。図478-4のような小型の浅鉢も見られるが、a種とした大波状口縁の土器は含まれていない。これらの深鉢の器形は、次類土器にも基本的には継承される。しかし、図476-1・2のようなものは少なくなり、図475-2のようにI緑部に丸みを持つものが、次類土器では比較的顕著に見られる。

SK415出土土器の特徴を概観すれば以下のように整理できる。

- 1 c種と浅鉢を除いた土器のI緑部には、獸面・円形・棒状・橋状等の突起が例外なく付けられ、この他にI緑部に押捺などを部分的に加えているものも4点(図474-6、図475-2・3、図476-2)ある。
- 2 I緑に沿って交互刺突文を施すものが多く、I緑部直下に無文帯を配するもの(図475-2・3、図477-4)も見られる。図475-2、図477-4の無文帯は楕円形の区画文を描いている。
- 3 文様は沈線で描かれるものが多く、隆沈線(図474-7、図476-1)や縄正浪文(図477-1)、部分的に有節沈線文を施すもの(図477-2)もある。I緑部の棒状突起や、隆線上には刻みや押捺を加えるものも見られる。
- 4 文様はI緑部・胴部ともに、単純な図形の繰り返しで描かれている。胴部文様は簡素で、縦位のY字状隆線で胴部を区画するものが多い。このY字状の隆線上には縄文が施されるも

のも比較的多い。

この他に、図475-3では口縁部下端に見られる段と胴部上端を区画する隆線の間に、図477-4では胴の括れ部に無文帯が見られる。

さて、この様な特徴を持つSK415出土土器は、時間的にはどこに位置付けられるのであろうか。幸い、SK415からは阿玉台式土器が1点(図478-4)出土している。この土器は小型の浅鉢ではあるが、隆帯による楕円形の区画文内に単列の有節沈線文を施していることから、阿玉台Ib式¹⁰⁾と考えられる。このことから、SK415出土土器については、阿玉台Ib式と併行する時期の所産と考えている。

SK415出土土器に類似するものは、県内では飯館村上ノ台A遺跡¹⁰⁾、県外では茨城県取手遺跡¹¹⁾から出土している。上ノ台A遺跡II群土器の破片資料中には、大木8a式土器も見られるが、実測提示された資料はすべて大木7b式土器と考えて良いだろう。深鉢では、d種に近似するものが多く、c種も見られる。文様帯の構成や施文される文様も、基本的な部分では極めて類似性が高い。しかし、d種に近似する深鉢の口縁部は、丸みを持つものが多く、口縁上部に交互刺突文を配する土器と無文帯を配する土器の量は、法正尻遺跡と上ノ台A遺跡で明らかに逆転している。文様も単純な図形の繰り返して描かれるものが多いが、単位文内に渦巻文や波状文を加え装飾性を高めるなど、若干SK415出土土器とは異なる点も見られる。これらについては、僅かな時間差に起因する可能性もあるが、会津地方東部に所在する法正尻遺跡と、浜通り地方北部に所在する上ノ台A遺跡との地域差、具体的には東関東地方に分布する五領ヶ台式土器の系譜に繋がるSK415出土土器と、小栗川遺跡III・IV群土器の系譜上に位置する上ノ台A遺跡II群土器の違いがより強いものと現時点では考えている。

諏訪遺跡出土第6群土器も、SK415出土土器と基本的には近いものと考えられる。深鉢の器種組成や、口縁部上端に交互刺突文を施すものも見られるなど、類似点も多い。しかし、諏訪遺跡では口縁部と胴部の区画線は沈線や隆線で描かれるものが多く、このため胴部を区画する縦位の隆線はY字状をなすものは少ない。さらに、諏訪タイプ設定の契機となった、胴部を区画する縦位の隆線間に上下の対弧文を施すものが、SK415出土土器には見られないなど、相違点も多い。諏訪遺跡第6群土器については、すでに先学諸氏の指摘にあるように¹²⁾、一部は本上坑段階のものもあるが、これより若干後統するものも含まれているものと考えられる。

付図4・5には、II群3類¹³⁾としてSK415出土土器に類似すると考えられる土器を示した。SK415出土土器以外には、特に一括性が強い資料はなく、遺構内や遺物包含層から散在して出土している。この中で問題となるのは、報文中でa種とした大波状I線の深鉢であろう。上ノ台A遺跡II群土器、諏訪遺跡出土第6群土器でもこの種の土器は極めて少なく、各1点の土器が実測提示(上ノ台A遺跡報文図73-3、諏訪遺跡報文図50-8)されているだけである。これらの土器はい

ずれも口縁部文様帯が上下に2区分されるもので、上部には隆帯で三角形の区画文を描き、下部には縄文が施されるだけである。図106-1のような口縁部全面を対象として区画文を描く、a種とは口縁部文様帯のあり方が異なっている。上ノ台A遺跡の図73-3については、文様帯の構成から、d種に波状口縁を付け足したような様相が見て取れる。福島県においては、基本的にこの段階で大波状口縁の土器が、少なくなるのかもしれない。この傾向は、上ノ台A遺跡と同時期とされている、小梁川遺跡V群土器でも同じである。

図106-1は、II群3類(1)・(2)のいずれかに含むべきものか迷っている。この土器の口縁部は隆沈線で上下左右ともに区画されており、図688-2・3の口縁部の区画のあり方とは異なるものと考えられる。口縁部の区画だけを見れば、II群2類(2)とした図679-8により近い。図692-1・9は上ノ台A遺跡II群土器や諏訪遺跡第6群土器に見られる、大波状口縁の土器と口縁部文様帯の構成は近いものと考えられ、本段階に位置付けて良いものと考えている。図689-3は頸部に幅の狭い無文帯が見られ、口縁部に描かれている文様も単純であることから、本段階に置いた。いずれにせよ、a種の時間的な位置付けについては、問題が多いものと考えている。

c種は胴部上端に、楕円形の区画文を施すものが多い。図64-3のように、楕円形区画文の中に交互刺突文が充填施文されているものもある。図694-6は縄匠痕文が施されるもので、胴部上半には隆線に対弧状の文様を描いている。文様要素・文様の図形ともに、小梁川遺跡出土の大木7b式土器に類似する。図699-3は、口唇部に連続爪形文が施されていることから、図698-1と近似するものとして本段階に含めた。d種の中には図14-1、図704-1のように頸部に楕円形の区画文の見られるものもある。

法正尻遺跡SK415出土土器は、伴出する阿玉台式土器から阿玉台Ib式期に比定されるものと考えている。この他に、法正尻遺跡では、阿玉台Ib式土器に先行する、阿玉台Ia式土器も相当量出土している。このことから、II群3類土器の中にも、阿玉台Ia式土器と併行し、SK415出土土器に先行する土器があるものと考えた。付図4のII群3類(1)には、この段階と考えられるものを示した。法正尻遺跡では、この段階の一括資料はない。深鉢の器種には、a・c・d種があり、a種が顕著に見られる。

a種の中で山形の大波状口縁をなす土器の波頂部には、図726-3と同様に刻みを加えるものが多く見られる。図688-2・4は波頂部に三角と三日月状の突起が付けられている。a種では図688-2・4を含めて、I口縁部の区画文が完結しないものが多い。図691-1のように区画文を描くものでも、区画内をランダムに分割する傾向が見られる。波頂部下には渦巻文を描くもの(図688-2・3)、波底部には刻みを加えた棒状の突起を付けるもの(図688-3・4)も見られる。三角波状の口縁をなす図744-4のI口縁部片側縁には、挟りが加えられている。これらの特徴は、阿玉台Ia式土器にも認められることから、これらの土器については阿玉台Ia式土器と同時期の

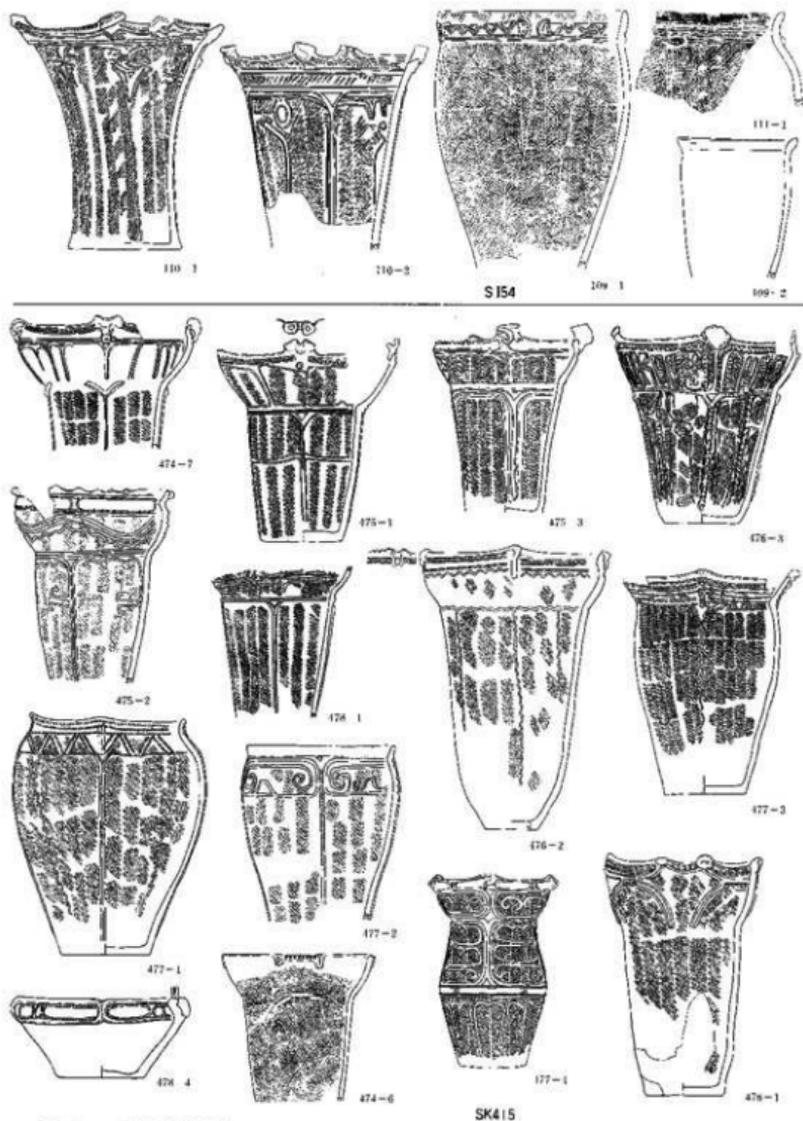


图862 二器集成图(4)

所産と考えている。

図691-1の口縁部には縦位、頸部には横位の隆線で区画された無文帯が見られる。この無文帯はX字状の隆線で区切られている。同図3の波頂部からはY字状の隆線が2本垂下し、この隆線の下端部には二又文状のアクセント文が付く。これらの文様は小栗川遺跡Ⅲ・Ⅳ群土器の中にも散見される。

c種も存在するものと考えられるが、法正尻遺跡ではあまり明らかにできなかった。図90-1の口縁部には、図688-1と同様な三角形の文様区画が見られるが、区画文の頂部には図688-2と同様に独立する渦巻文が描かれていることから本段階と考えた。胴部は方形に区画され、この区画に沿ってC字状のアクセント文が加えられている。

d種については、図718・1~4が、本段階に比定されるものと考えている。これらの土器は、新鶴村中江塚ノ宮遺跡²⁶に類例が多く見られ、同遺跡では阿玉台Ia式土器の出土も報告されている。図430-4も交互刺突文が重層して施されていることから、本段階に含めた。図718-3の器形は、図475-2に繋がるものと考えられる。図718・1~4は沈線や交互刺突文が主として施され、4を除き地文には縄文が施されていない。中江塚ノ宮遺跡にも地文に縄文を施さず、沈線を器面全面に施すものがある。北陸地方の土器の系統を引くものかと考えられるが、新潟県の清水上遺跡には類例が見られないし、交互刺突文の使用も新崎式土器にはあまり顕著ではないようである。図718-3の口縁部に見られる菱形の区画文は、大木7b式土器に多く見られる点を考えれば、会津地方の在地的な土器と考えることもできるのではなかろうか。

図436-1は胴部に部分的に縦位の沈線文を施すもので、その下には二又文状のアクセント文が加えられていることから本段階に含めた。図707・1はX字状の隆線で区画された縦位の無文帯で胴部を区画し、区画に沿ってC字状の沈線文を施している。

Ⅱ群4類土器

大木7b式の新しい部分から大木8a式の古い部分に相当する土器を含んでいる。阿玉台Ⅱ・Ⅲ式土器に併行する時期と考えられるものである。深鉢の器形・文様要素・文様の図形は、前類土器に共通するものも多く、細部では分類の不明確なものもある。法正尻遺跡ではSI30、SK25・326・327・566・669から、本類土器が一括出土している。図863・864に、これらの遺構から出土した土器を示した。この中で、SI30とSK326・669出土土器には、若「内容に違いが見られることから時間差を考え、付図5にⅡ群4類土器を(1)・(2)と2分して示した。

まずⅡ群4類(1)と考えている、SI30出土土器についてその特徴を概観する。深鉢の器形には前類土器でd種としたもの(図67-1、図68-2・4)があるが、図68-1・3のような口縁部の丸みの強いものが顕著に見られる。図67-2は胴部上半が「く」の字状に括れているが、c種に近いものと考えている。深鉢の基本的な器種構成は、Ⅱ群3類土器と同じものと考えられる。

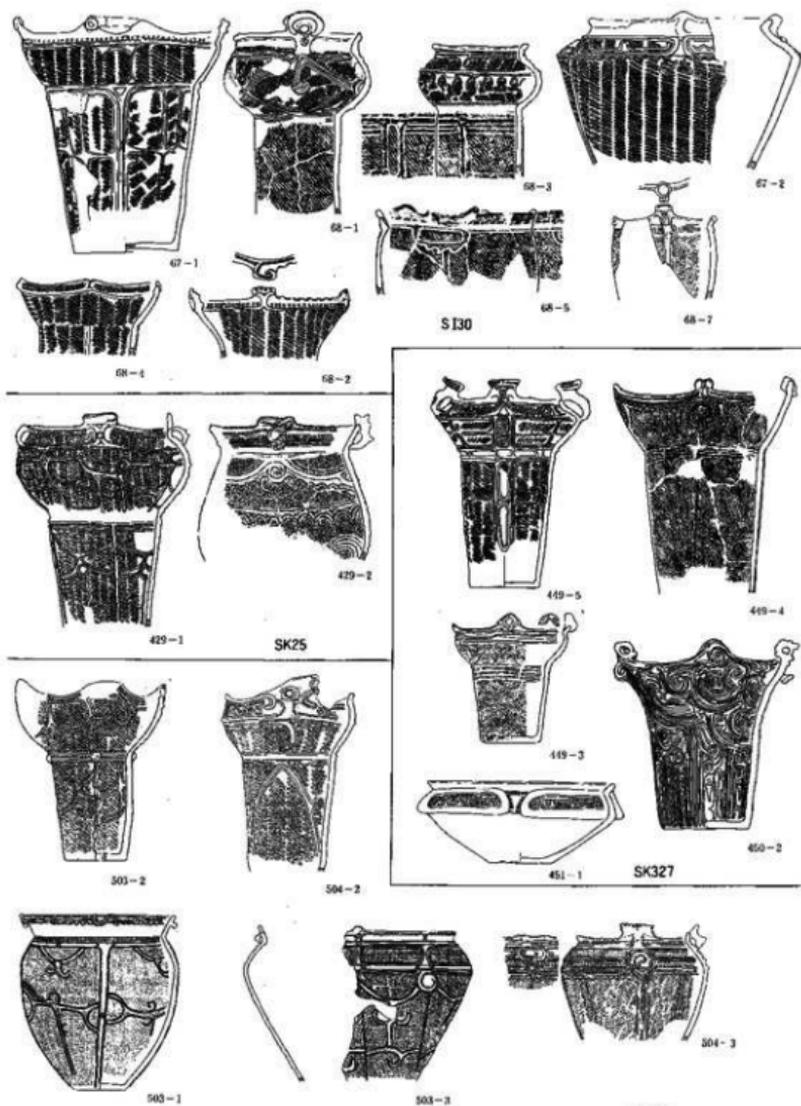


图863 土器集成图(5)

SI30出土土器の特徴は、以下のように整理される。

- 1 口縁部には、獣面・環状・橋状・渦巻状等の突起や把手が付くものが多いが、図68-3・4のように突起や把手が見られず、口縁の一部が僅かに器外面に突出するだけのものを認められる。d種の口縁部が大きく開く深鉢の口縁部内面には、Ⅱ群3類同種土器と同様に稜が見られる。
- 2 d種には、口縁に沿って交互刺突文を施すものは少なくなり、口縁部直下に無文帯を配するものは見られない。前類で楕円形の無文帯をなしていた部分にも、図68-3のように地文に縄文が施される。
- 3 胴部はY字状の隆線で区画されるが、図68-3・7のようにY字状の隆線を2本一組で施すものもある。
- 4 文様は沈線で描かれるものが多いが、有節沈線(図68-3)、隆沈線(図68-1)で描くものもある。この他に部分的に、爪形文(図68-5)、列点文(図68-1)、縦位の短沈線文(図68-2)を施すものも見られる。
- 5 描かれる文様は口縁部、胴部ともに単純で、菱形文(図68-1)、楕円形区画文(図67-2、図68-3)、長方形区画文(図67-1)等の図形の繰り返しで描くものが多い。

この様な特徴は、SK415出土土器からの影響を強く残しているものと考えられる。しかし、交互刺突文の施されるものは少なくなり、図67-2のように楕円形区画文内に波状沈線文を加えたり、図68-2のように口縁部直下に縦位の短沈線を施した幅の狭い文様帯を持つものが含まれるなど、Ⅲ群土器に繋がるような土器も見られる。これらの事からSI30出土土器は、SK415出土土器に後続する時期のものと考えられる。阿玉台式との関係については、明確な伴出例がないため断言できない。しかし、SI34の破片資料の中には、図67-2に近似する土器と阿玉台Ⅱ式土器と考えられるものが見られることから、本段階の土器については、阿玉台Ⅱ式土器と併行する時期の所産と考えている。

SK25・327出土土器とSK669出土土器の一部(図504-2・3)については、口縁部上端に比較的幅の広い文様帯が見られること、口縁部・胴部に施される文様は、区画が意識されていることから、SI30出土土器と同じ段階と考えている。図429-1や図449-4の口縁部直下に施された2条の有節沈線は、前段階の土器に顕著に見られた交互刺突文が置換した文様と考えられる。SK566出土土器については、図496-3のように口縁部に波状の隆線、胴部文様も横に展開する傾向が認められるなど、Ⅱ群4類(2)に近いものが含まれている。しかし、図496-5の口縁上部には三角形の区画文が見られ、同図4の口縁部には2本一對の棒状突起が付くなど、Ⅱ群3類土器の要素を残していることから、この段階と考えた。

付図5のⅡ群4類(1)には、この段階と考えられる土器を示した。SK327・566出土土器が本段

階に比定できるとすれば、図450-2や図496-5のような、いわゆる火炎土器系統の上器がすでにこの段階で存在していることを確認できる。新潟県清水上遺跡²⁰3号住居跡、25号上坑でも本段階に比定される上器とともに、火炎土器が出土している。図26-1は円筒形状をなす深鉢で、口縁部直下に隆帯で区画された幅の狭い文様帯が見られる。隆帯の下部は上下交互から刺突文を加えて波状文を描いている。さらに、口唇部上には粘上紙を貼り付けるなど、次群土器に近い文様が見られる。これについては、作出した破片から本段階とした。この他に好例がなく集成図には示さなかったが、d種で口縁部に縄圧痕文を横位に数条施すものも、この時期の土器組成の一部をなすものと考えている。

図733-9は勝坂式土器に近い。口縁部文様の隙間に施された三又文の周囲を、有節沈線で囲っていることから同上器でも古い段階のものと考えられる。図13-1は北陸地方の土器の系譜を引く浅鉢であろう。本段階に伴うものか、II群3類土器に伴うものか判断できなかった。

本段階に類似する土器は、石川町七郎内C遺跡²¹から出土している。石川町七郎内C遺跡でII群土器とされたもので、これと本段階の土器を比較すると、文様の描線に有節沈線と沈線の違いが見られる。しかし、深鉢の器種組成は口縁部に丸みを持つものをふくめたd種と、c種が主体を占め、口縁部直下に交互刺突文が施されるものが少ないなど、共通する点が多い。七郎内C遺跡II群土器には、II群4類②とした段階のものも多く含まれているが、その中で口縁上部に比較的幅の広い文様帯を持ち、口縁部と胴部の文様が区画文を主体として描かれ、横位に文様が展開しない、例えば、同報文1包48・49・50・2包12等が本段階と併行するものと考えられる。法正尻遺跡でも図68-3、図429-1・2、図449-4などは、七郎内C遺跡II群土器に極めて類似する土器である。

II群4類②とした段階の一括土器は、SK326とSK669出土土器の一部(図503-1~3)である。深鉢にc種・d種が多い点は、II群4類①と共通する。しかし、c種の中には、図503-1のように口縁部の幅が広がるものや、図446-8のような器形の深鉢も見られる。その特徴を概観しよう。

- 1 口縁部には突起が付くものが多いが、獣面の付くものは見られず、これに変わってS字・渦巻文を基調とする突起が多く見られる。
- 2 d種土器の口縁部内面に、稜の見られるものはほとんどない。
- 3 口縁部と胴部を区画する横位の隆線は少なくなる。これと関連して、胴部を区画するY字状の隆線も本段階ではほとんど見られない。
- 4 口縁部の隆線は、上下交互に押捺が加えられて小波状をなすものも見られる。
- 5 文様は沈線で描くものが多いが、有節沈線や縄の圧痕で描くものも見られる。縄圧痕文は、幅の狭い文様帯の中に縦位に施されるものも多く見られる。

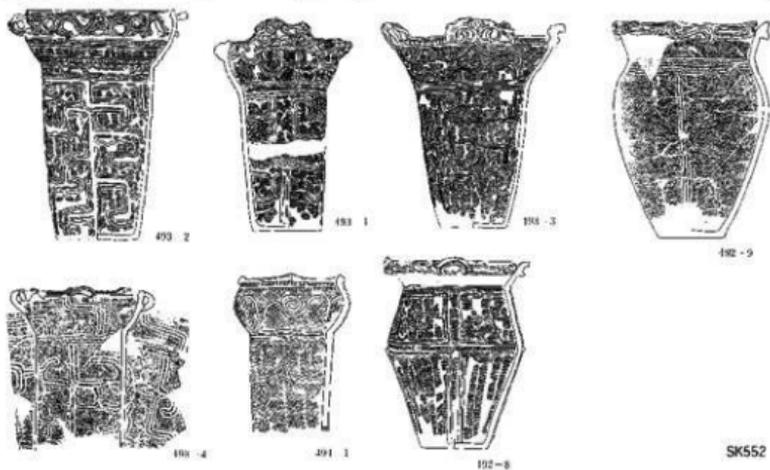
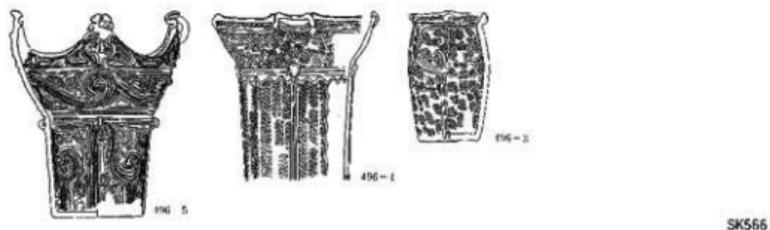
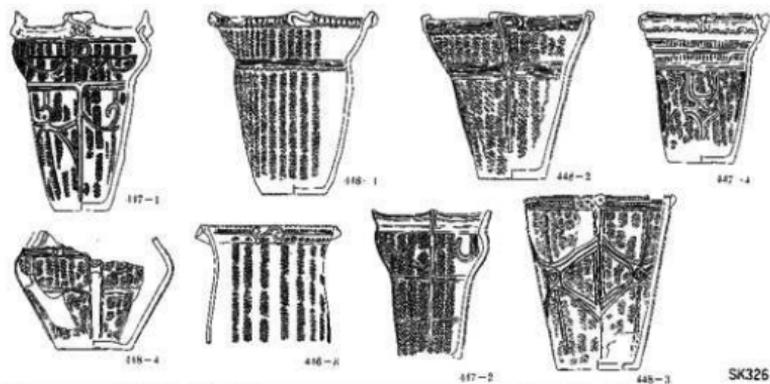


図864 十器集成図(6)

6 この他に従来横位・縦位の区画線を描くだけだった無文帯で、文様の図形を描くものも現れる。

7 描かれる文様には、楕円形の区画文や連弧文などを繰り返すもののほかに、図503-2のように一部で渦巻文を描きながら、横に連続展開する図形を描くものも現れる。

これらの特徴は、Ⅱ群4類(1)とした土器にも散見されるが、本土器群ではより明確になる。基本的に、時間差に裏打ちされた傾向と考えている。

付図5のⅡ群4類(2)に示した土器の中で、有節沈線文が施されたものと近似する土器は、県内では七郎内C遺跡、玉川村堂平B遺跡⁶⁰⁾、白河市南堀切遺跡⁶¹⁾、矢吹町桑名邸遺跡⁶²⁾の中通り地方南部に顕著に分布している。会津地方では高郷村博毛遺跡⁶³⁾から、県外では栃木県湯坂遺跡⁶⁴⁾から出土している。

七郎内C遺跡では、Ⅱ群土器とされたものの一部が本段階に比定されよう。同遺跡SK15出土土器もこの段階と考えられる。特に、報文で15坑4とされた円筒形状をなす土器の胴部上半には、降線で区画された無文帯で方形の単位が描かれ、その接点には同じく無文帯で弧状文・渦巻文を描いている。同種の文様施文要素は、湯坂遺跡T1-V区上坑、南堀切5号住居跡出土土器にも存在し、無文帯で渦巻文を描きながら横に展開する文様を施した土器も見られる。これらの遺跡では他に、S字状の突起の付く典型的な大木8a式土器と、阿玉台Ⅲ式土器が出土している。南堀切5号住居跡例については、塚本により出土する阿玉台式土器にⅡ式・Ⅲ式土器があることが指摘されている。伴出した大木系の土器には法正尻遺跡で、Ⅱ群4類(1)・(2)とした段階のものが含まれている。塚本はこれらの土器を一括し、阿玉台ⅡからⅢ式への移行期と捕らえている。桑名屋敷SK111例も本段階と考えている。博毛遺跡では、法正尻遺跡でd種とした土器が出土している。口縁部と胴部を区画する降線はなく、口縁部には無文帯で中心となる文様を描き、その間に有節沈線で渦巻文を描きながら横に展開する文様が施される等、本段階の要素すべてを備えているもの(報文図59-1)がある。

図64-1、図446-8のように口縁部直下に隆帯で区画された幅の狭い文様帯を持つものについては、現在までのところ良好な出土例がないが、口縁部文様帯のあり方はⅢ群1類としたものに繋がることから、この段階と考えて良いものと思う。図64-1については、地文にアヤクリ文が密接して施され、古い要素も残している。本段階で問題となるのは、典型的な大木8a式土器が見られないことである。典型的な大木8a式土器の定義は難しいが、例えば七郎内C報文図48-15坑4・6、博毛報文図59-2・3、南堀切遺跡報文図8-5・6の土器を考えている。これらの土器は、法正尻遺跡Ⅱ群4類(2)には見られない。また、本段階に見られるS字状の突起についても、正面からS字と判別できるものは少なく、図446-8ではS字状の突起と渦巻状の突起が交互に施されているなど、従来言われている大木8a式土器と異なる点があることも確認しておく。Ⅱ

群4類②については、湯坂遺跡・南堀切遺跡の伴出関係から、阿玉台Ⅲ式土器と併行する時期の所産と考えている。この段階からが、福島県における大木8a式期であろう。

法正尻遺跡では、阿玉台Ⅲ式土器の出上は確認できなかった。福島県内では、阿玉台式土器はより古い段階のものほど分布域が広く、新しくなるほどその分布域が狭まる傾向が強い。この時期、法正尻遺跡は阿玉台式土器の分布圏から、基本的には外れている可能性が高い。

Ⅲ群1類土器

大木8a式に比定される土器である。SI1, SK313・333・365・472・492・552から一括性の高い土器が出上した。これらの中で、SK552とSK365・492, SK313・333・472・SI1出土十器には若干様相の違いが見られることから、僅かずつ時間差があるものと考えている。付図5にはこれらの一括土器をもとに、Ⅲ群1類土器を①～③に3区分して示した。

Ⅲ群1類①としたものは、SK552出土土器を指標とした。まずこの十器群について検討する。図864には、SK552出土土器を示した。深鉢の器種組成は基本的に前段階の器種組成を踏襲しているが、c種の口縁部幅は広がり、胴部は上下に伸び、図492-9のような器形に変化する。d種の口縁部は丸みを帯び(図493-1・2)直立気味に立上がり、キャリバー状をなす。胴部は上下に伸び、茶筒のような形態を示す。一方で、図494-1のような図68-3に近似する器形の深鉢も残るようである。

次にこれらの土器の特徴を概観する。

- 1 突起は横方向に大型化し、口縁部を全周するものも見られる。突起はS字や楕円形を基調とし、これが組み合されるものが多く見られる。
- 2 口縁部と胴部は、波状の粘土紐貼付文で区画されるものが見られる。
- 3 文様描線は沈線が多いが、有節沈線(図492-8)も見られる。この他に、図492-9の頸部には交互刺突文が、図493-2は両端を隆線で区画された無文帯で文様を描いている。
- 4 口唇部直下に下端を隆帯で区画された、幅の狭い文様帯を持つもの(図492-8, 図493-3・4)がある。
- 5 描かれる文様は複雑で、渦巻文を描きながら、横に連続・展開するものが多い。方形の区画文を描く図492-8でも、区画内にはランダムな図形が描かれている。

本十坑出土土器については、Ⅱ群4類土器に見られる文様要素や図形が部分的に見られるものが多いことから、Ⅲ群1類とした土器の中では、最も古い段階に位置付けられるものと考えている。

付図5のⅢ群1類①には、これに類似する土器を集成した。図749-3の口唇部直下に見られる沈線文は、図428-5に類似することから本段階と考えた。図479-1と図436-6の口唇部には、小波状をなすように粘土紐を貼り付けている。図478-7・8, 図479-1はSK420出土土器

である。図478-7・8については、SK552出土土器に近似することから本段階に含めた。図479-1はⅢ群2類土器に多い、緩い波状口縁をなす円筒形状の深鉢で、口縁部上面に沈線文を施す土器の祖形的なものであろうか。

この段階に近似するものは、栃木県槻沢遺跡²⁷17H炉下P、14H-P2からまとまって出土している。これらの土器は、突起部が大型化し、文様が横に連続・展開し、一方で前段階の文様要素を残すものが見られるなど、Ⅲ群1類(1)とした土器と共通する点が多い。槻沢遺跡ではこれらの土器に伴って、阿木台IV式土器が出土することが報告されている。

Ⅲ群1類(2)は、SK365・492出土土器を指標とした。深鉢の器種は前段階のものを踏襲するが、口縁部が球体状をなすd種は姿を消し、これに変わって、図482-1のようなものが現れる。これらの土器に見られる特徴は以下のように整理される。

- 1 突起の横方向の大型化は前段階と共通するが、横幅が減少し、変わって高さが高くなるもの(図465-9、図480-1)が現れる。これと相呼应して、大きさや形の異なる突起を口縁部の対面する部分に付ける傾向が現れる。
- 2 Ⅱ群4類土器に見られた、文様要素・図形はほぼ完全に払拭され、図466-1の口縁部に見られる弧状文や、図467-1の胴部の沈線に僅かになごりが見られるだけである。
- 3 文様描線は沈線文が多いが、肉脛を調整しない粘土紐の貼付文で文様を描くものが新たに出現する。
- 4 口縁部と胴部は、波状の粘土紐貼付文で区画されるものが見られる。
- 5 文様は横に連続・展開するものもあるが、口縁部の文様は波状文(図480-1、図482-1)や区画文(図481-2、図480-2)を描くなど、簡素なものが多くなる。
- 6 いわゆる火炎土器の中には、大波状口縁(図466-3)と口縁部に鶏頭冠状の突起が付くもの(図100-1)、キャリバー状(図465-8)の深鉢がある。図465-8の胴部には縄文が施され、口縁部にも縄土痕文が見られる。

このような特徴は、前段階から後段階に続く漸移的な変化と考えられる。付図5のⅢ群1類(2)には、SK566 ㉔5から出土した土器(図497-1・2)を含めた。この2点はいずれも、胴部文様の一部に菱形のアクセント文を部分的に付加している。図497-2の口縁部下半には、渦巻文が描き出されている。

Ⅲ群1類(3)は、S11、SK313・333・472出土土器を指標とした。これらの遺構出土土器を図865・866に示した。深鉢の器種組成は前段階と共通するが、図481-2のように口縁部が直線的に開くものはほとんど見られなくなり、図430-6や図441-4のようなキャリバー状の深鉢が多くなる。この他に、図10-4のような極端に大きな深鉢の存在が明確となる。これらの土器に見られる特徴は以下のように整理される。

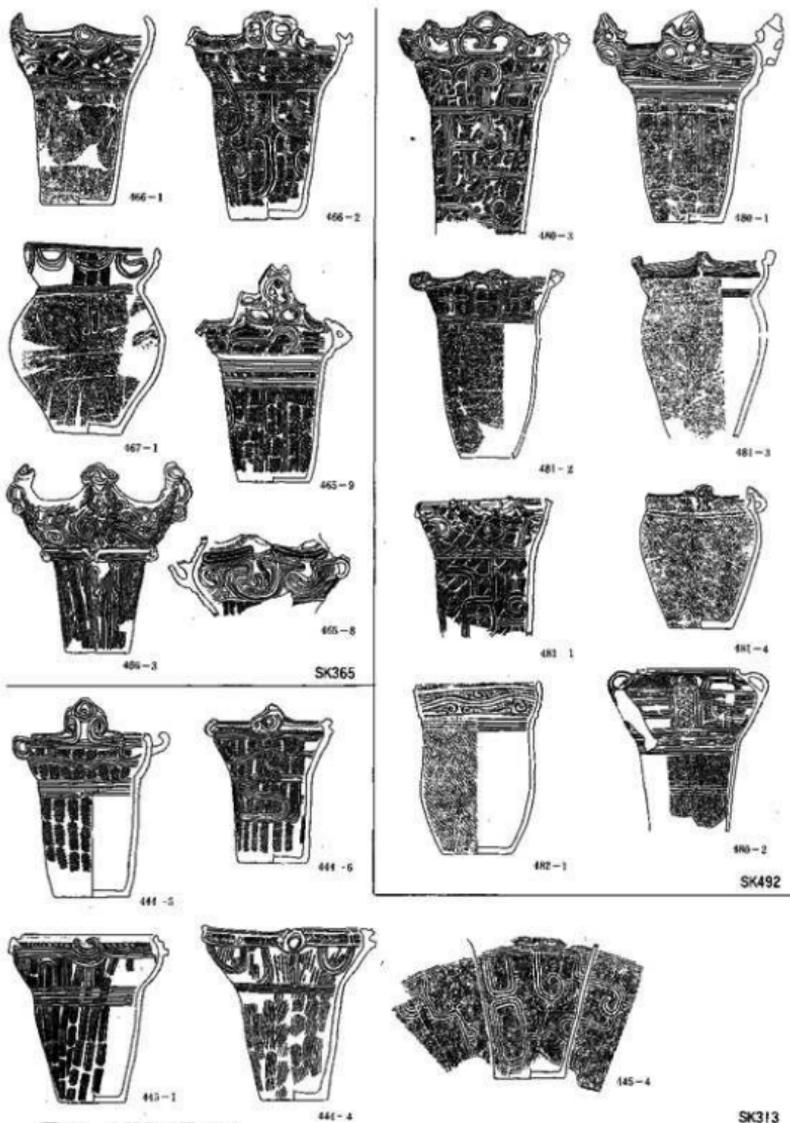


図865 土器集成図 (7)

第3章 考 察

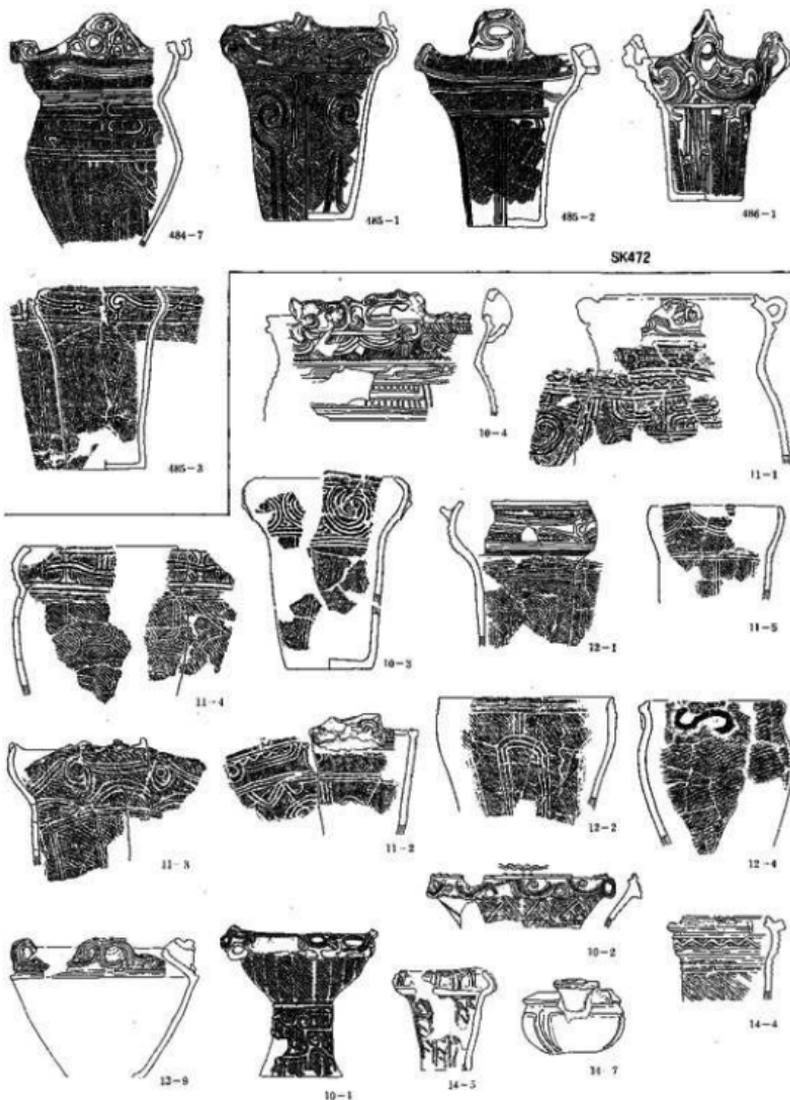


图866 土器集成图(8)

S11

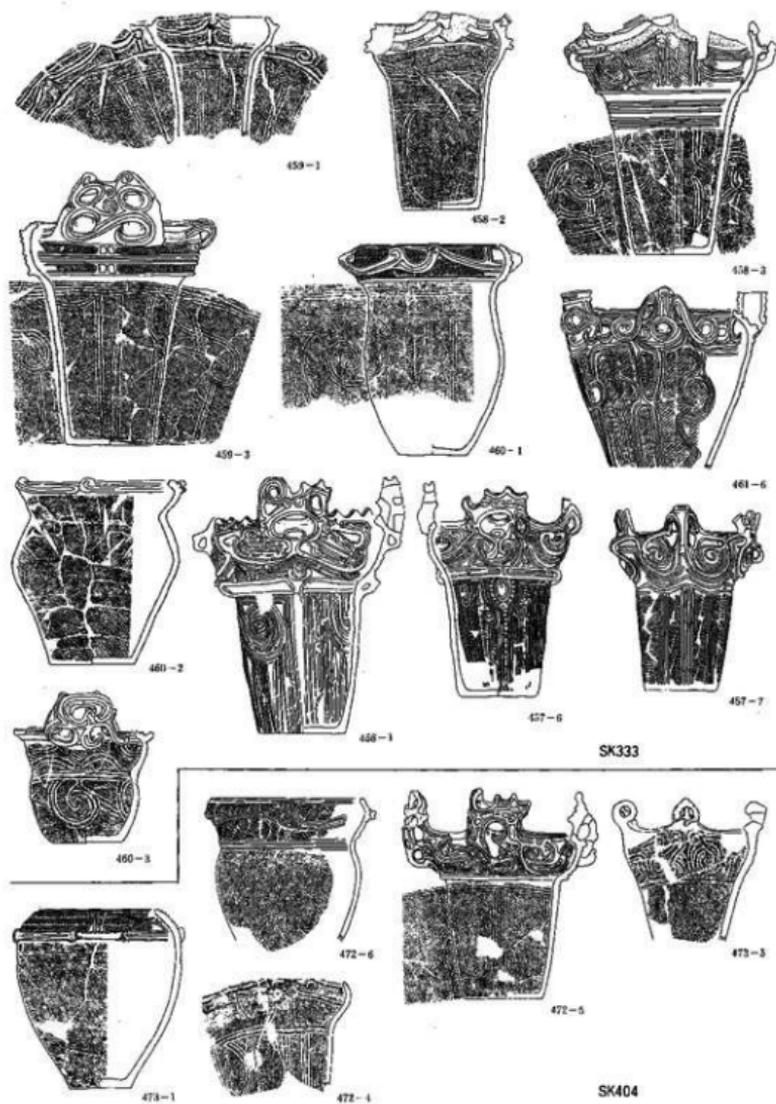


図867 土器集成図(9)

- 1 口縁部の突起は横幅を減じ、これによって上下に伸びる傾向と、突起自体が縮小する傾向が同時に強まる。これと呼応するように、口縁部には大きさ、形の違う突起を付ける傾向が強まる。粗製の土器では、口縁部にS字状の突起が見られ、より古い段階の突起のあり方を残すものが存在している。大型の土器では、口縁部に突起を全周させるものも多い。
- 2 口縁部直下に、下端を降帯で区画された、幅の狭い文様帯を持つものは著しく減少する。
- 3 文様描線は、両脇を調整しない粘土紐を用いるものが圧倒的に多くなる。図751-6のように、半截竹管による平行沈線文を用いるものも見られる。
- 4 口縁部と胴部は波状の粘土紐貼付文で区画されるものはほとんどなくなり、横位の沈線で区画されるものが大半を占める。
- 5 文様が横に展開する傾向は弱くなる。口縁部には波状文(図485-2, 図444-5, 他)を描く、簡素なものが多くなる。また、口縁部には、渦巻文を施すものも顕著に見られる。胴部文様もパターン化し(例えば:縦位の沈線と、この途中から派生して横に伸びる渦巻文、渦巻文の下から垂下する沈線)、この繰り返しで器面を埋めるもの(図485-1, 図442-5)が認められる。
- 6 いわゆる火炎土器の中には、渦巻文を繰り返すもの(図10-3)も見られる。
- 7 地文には縄文の他に、燃糸文を施すものも少なくない。

本段階の土器については、Ⅲ群2類土器としたものに直接的に繋がる要素が多く見られることから、大木8a式でも最も新しい段階と考えている。図10-1の口縁部には突起が全周し、文様は有節沈線で描かれるなど、古い要素を強く残している。この土器については、伴出土器から本段階に位置付けたが、その位置付けについては問題を残すものと考えている。Ⅲ群1類(3)に近似する土器は、郡山市野中遺跡⁸⁾から出土している。口縁部の突起や文様描線、文様の図形等、Ⅲ群1類(3)に示した土器と共通する点が多い。

Ⅲ群2類土器

縄文時代中期中葉、大木8b式と考えられる土器である。法正尻遺跡ではSI77, SK332・347・395・404・489・606・687から、一括性の高い土器が出土している。この中でSI77出土土器とその他の遺構出土土器の間に若干の違いが見られることから、Ⅲ群2類土器を(1)・(2)と区分して報告する。図867~869には、これらの遺構から出土した土器を掲載した。

Ⅲ群2類(1)は、上記したSI77以外の遺構出土土器を指標とする。深鉢の器種にはキャリバー状のものが多く、この他に、図454-2のような胴部が球体状をなす深鉢や、図456-1のような波状口縁をなす深鉢が見られる。図456-3のような胴部が樽状をなす深鉢も見られる。これらの土器の特徴は、以下のように整理される。

- 1 口縁部の突起は、図505-6のような箱状をなすものが顕著に見られる。この他に、口縁部に渦巻文を描くものでは、この渦巻文が器面から突出し、突起状をなすものが多い。

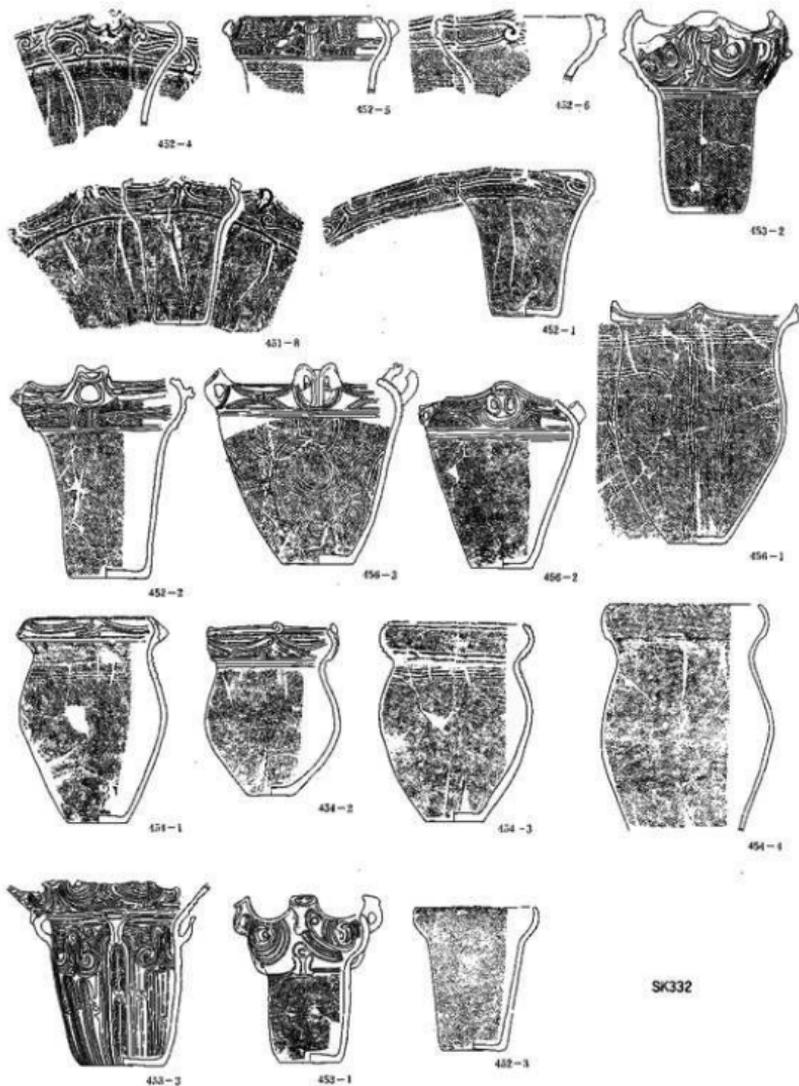


図868 土器集成図 (10)

第3章 考 察

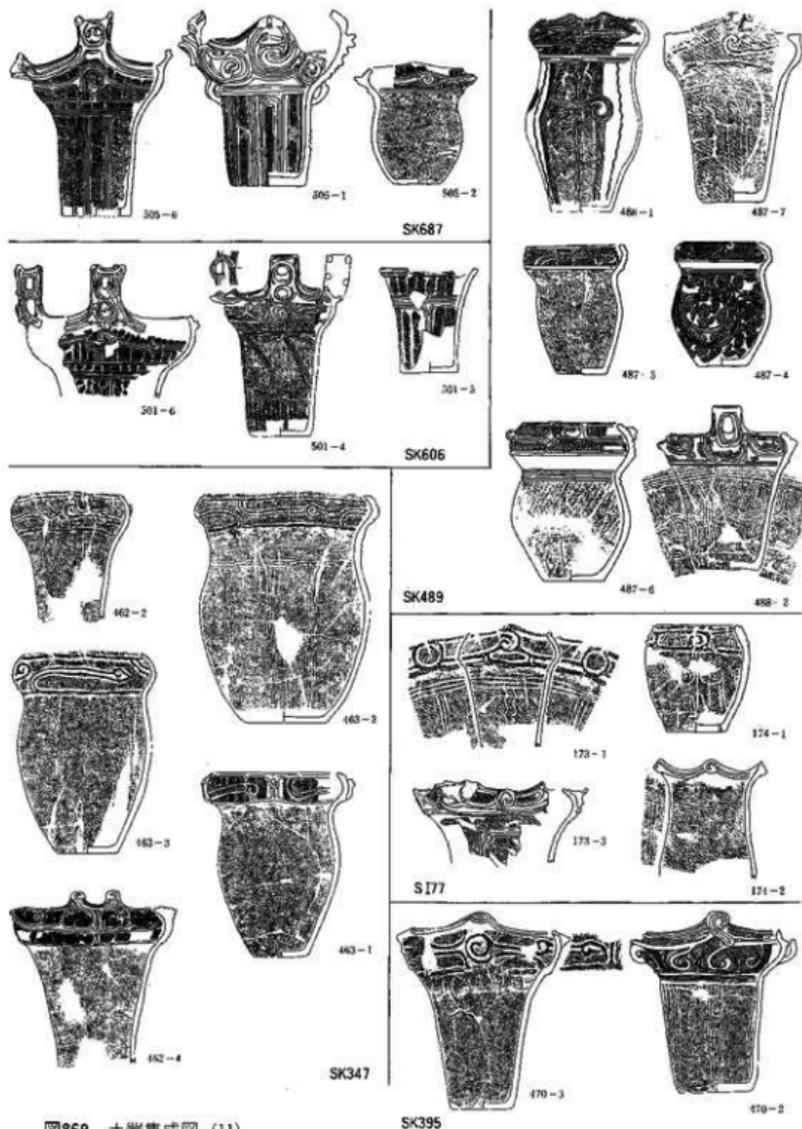


图869 土器集成图 (11)

SK395

- 2 文様描線は粘土紐の両脇を沈線で調整した、隆沈線を用いるものが多い。沈線に代えて縄圧痕文を施すものもある。
- 3 頸部文様帯が強く意識されるものが見られ、図451-8、図454-3、他には、頸部に無文帯を配している。
- 4 口縁部には、端部が渦巻文を描く弧状文・クランク文・横位文を4単位配するものが多い。この渦巻文には、剣先状のアクセント文がつくものも見られる。樽状の深鉢の口縁部には、対弧文を施すものが多い。
- 5 胴部の文様は横に展開するものもあるが、基本的には縦位の沈線と渦巻文の組み合わせで描かれ、Ⅲ群1類土器に比べると極めて単純である。この他には、縦位に沈線を施したものや、地文だけのものも多く見られる。
- 6 いわゆる火炎土器は口縁部に鶏頭冠状の突起を持つと、中空の突起が付くものが見られる。胴部には縄文が施されるものが多数を占めているが、沈線だけで文様を描くもの(図453・3)もある。図470-1の口縁部には、縄圧痕文が施されている。

これらの土器については、口縁部文様が単純で、前段階の土器からの系譜がたどれること、伴出する火炎土器には、前段階のものと区別が付かない鶏頭冠の付けられたものが見られることから、大木8b式土器でも古い段階と考えたい。頸部に無文帯を持つものが多い点を考えると、関東地方の加曾利EⅡ式土器の新段階と平行する可能性が高い。

Ⅲ群2類②は、SI77出土土器を指標とした。器種や文様要素、胴部文様のあり方には、Ⅲ群2類①との間に基本的な違いは見られない。Ⅲ群2類①と異なるのは、口縁部に描かれる文様である。SI77出土土器で口縁部に文様帯の見られる3点の土器はすべて、端部が渦巻文を描く楕円形状の区画文が描かれている。この様な区画文は、前述したⅢ群2類①にはほとんど見られない。両段階の間には基本的に、時間差があるものと考えて置きたい。SI77出土土器に類似する土器は、図195-3・8、図197-1、図214-11、図218-11、図439-3、図765-2・5などをあげることができる。しかし、SI77の土器出土量は少なく、小型の土器が多いことを考えると、この段階設定とその内容には、さらに検討を加える必要がある。この段階の土器については、口縁部に楕円形状の区画文が見られることから、加曾利EⅡ式土器と併行する時期と考えたい。本段階に近似する土器は、桑名邸遺跡や磐梯町天光遺跡²²から出土している。両遺跡ともⅢ群2類①としたものは少なく、本段階の土器が主体を占めるようである。(松本)

Ⅲ群3類土器

縄文時代中期後葉、大木9式期に比定される。本類土器は深鉢に見られる施文文様の特徴から①・②に2区分できる。また、主に遺構に伴って出土しているため、ここでは図870に掲載した遺構出土土器を中心として記述していく。

Ⅲ群3類土器(1)はSI63・70・90出上土器に代表される。図210-1のようにキャリバー状の器形をとり、口縁部には幅広の沈線による浮刻的な渦巻文、胴部には沈線による楕円形区画文を施文するものと、図118-1のように平縁の器形をとり、口縁部から胴部まで沈線による同一の楕円形区画文を施文するものが見られる。このように器形・文様構成の異なる2タイプではあるが、SI70の出土状態からおおむね共伴するものと考えている。このような深鉢に見られる2タイプ共存のあり方は、Ⅲ群4類土器にまで引き継がれており、キャリバー状の器形をとるものはⅢ群土器の一貫した系譜上に位置するものと考えている。

Ⅲ群3類土器(2)はSI58・62・75出土土器に代表される。図169-1のようにキャリバー状の器形をとるものでは、口縁部には渦巻状の、胴部には垂下する区画文を施文している。平縁の器形をとるものでは、楕円形の区画文から発展したH字、U字状の大柄な区画文を施文している。いずれも、縄文部と無文部の区画がⅢ群3類土器(1)に対比してより明瞭となっている。また、区画文の下端が閉じ垂下する傾向があり、胴部下半の区画線も見られない。このようなことから、Ⅲ群3類土器(1)とは時間差があり、Ⅲ群3類土器(2)が後続するものと考えられる。また、この様な内容からⅢ群3類土器(1)・(2)はともに、大木9式の中でも新しい段階に所属するものと考えられる。

Ⅲ群4類土器

縄文時代中期末葉、大木10式期に比定される。主に遺構に伴って出土しており、施文される文様・共伴関係等から(1)~(3)に3区分していく。また、図870・871に掲載したように遺構出上土器を中心として記述していく。

Ⅲ群4類土器(1)はⅢ群3類土器の系譜上に位置し、SI68・100・135出土土器に代表される。キャリバー状の器形をとる図229-4では、口縁部と胴部に独立した単位文が施文される。前段階の土器と比較するならば、胴部に施文される区画文の末端が閉じ横位の単位文を形成すること、胴部下半に波状沈線による縄文部との区画を持つ点が異なっている。

おおむね平縁の器形をとる深鉢では、胴部上半にU字・S字状の単位文を横位に展開させ、胴部下半の縄文部と波状沈線で区画するものと、胴部から口縁部に伸び上がる波頭状の縄文部を構成するものが見られる。また、図151-1のように、稜線による区画も見られる。このように文様構成に違いが見られるものの、SI135では両者が共伴していることから時間差がないものと考えている。

Ⅲ群4類土器(2)はSI59・78出土の一括土器が上げられる。前段階ないしその系譜上に位置すると考えられる土器と、異系統の土器が混在して出土している。SI59では図124-4・5、SI78では図177-1が前段階ないしその系譜上に位置するものと考えられ、波状沈線によって区画された胴部上半には「コ」の字、S字状の単位文を施文している。

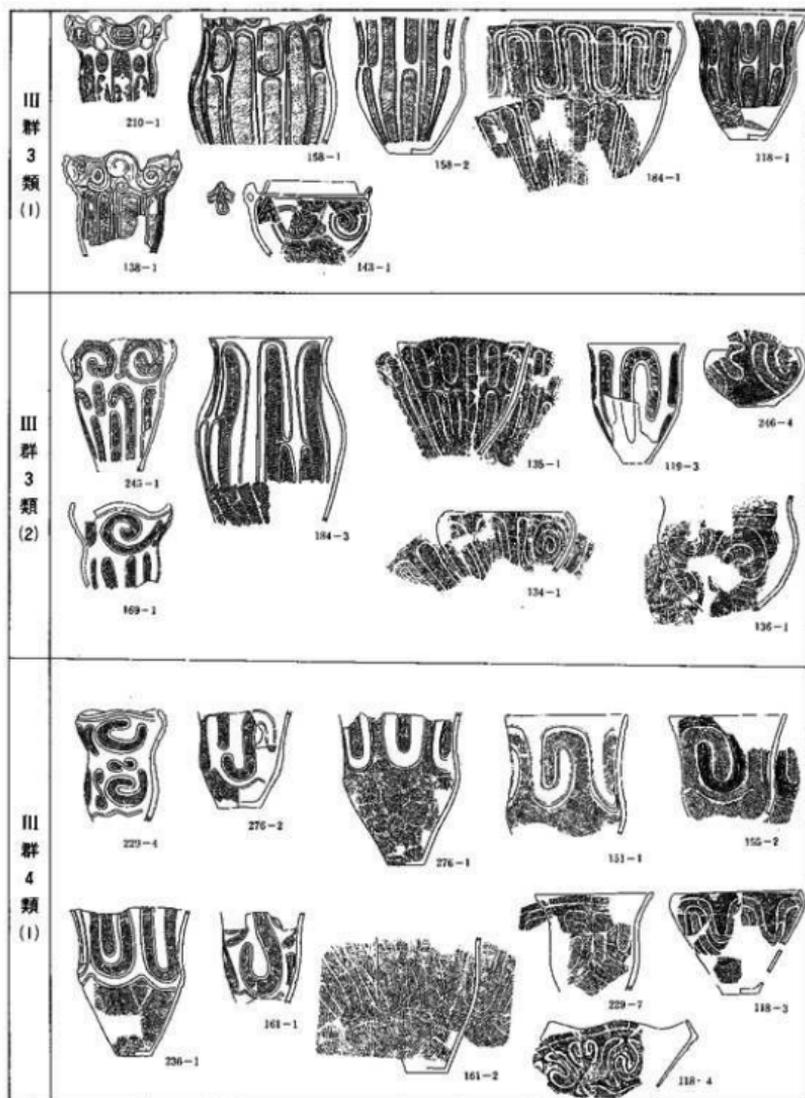


図870 土器集成図 (12)

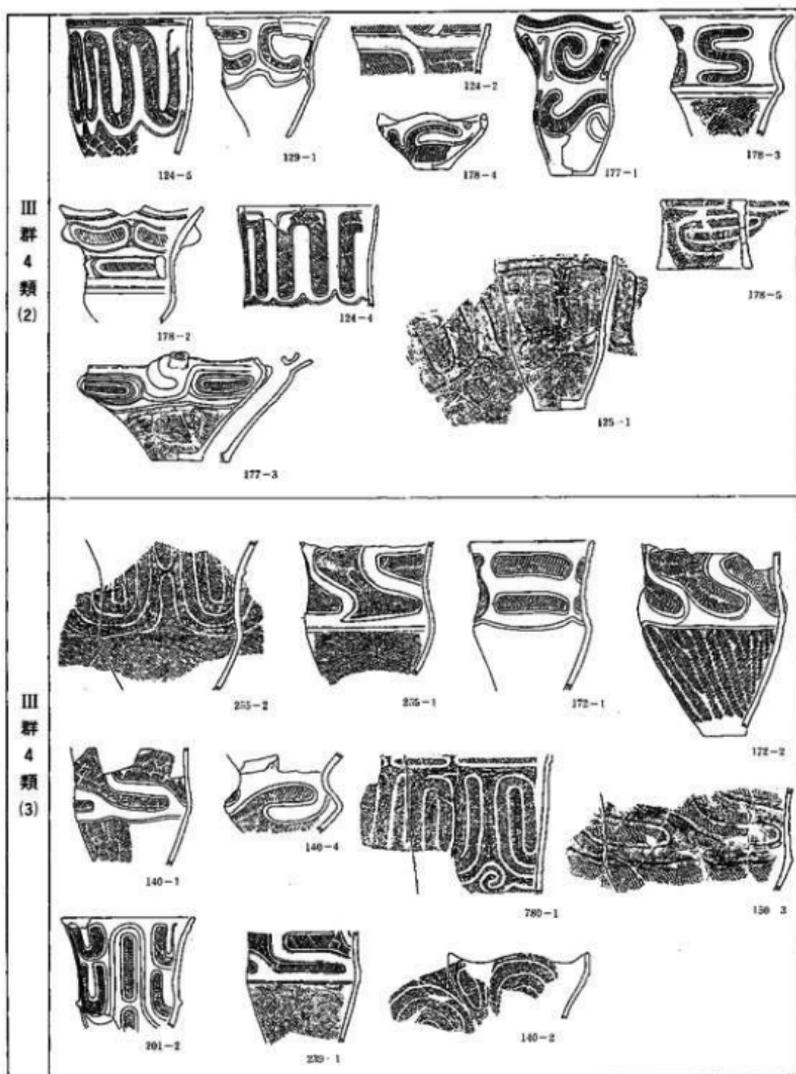


图871 土器集成图 (13)

SI59では図124-2、図125-1が稜線による帯状や方形状の区画文を、SI78では図178-2が横位の楕円形の接点に瘤状の貼付文を持っている。また、胴部下半との区画は平行沈線となっている。これらの土器は、前段階までの系譜では理解できないため異系統の土器と考えている。また、図178-3の深鉢は、胴部下半を平行線で区画し、「S」字状の単位文を施文しているもので、両系統の折衷したものかもしれない。

Ⅲ群4類土器③はSI76・114に代表される。図201-2、図255-2、図780-1は、沈線区画による「J」字状の単位文を主要文とするもので、胴部下半の区画沈線は縦位の区画文となっており、区画の接点には瘤状の貼付文をもっている。このような沈線文を主要とする文様構成は、Ⅲ群4類土器①からの系譜上に位置しているものと考えている。

図172-1・2、図255-1は、胴部下半の縄文部を区画し、胴部上半に稜線や稜沈線による横「Y」字状の単位文を施文している。前者とは施文文様・構成上で違いが見られるものの、SI114では共伴関係にあることから時間差はないものと考えている。

このような内容を持つⅢ群4類土器ではあるが、Ⅲ群4類土器②については複式炉からの共伴例がないために明示できない。しかしながら、Ⅲ群4類土器①とⅢ群4類土器③の間には、明確な時間差が存在するものと考えている。また、このような時間差を持つⅢ群4類土器ではあるが、大木10式の中でも占段階に所属するものと考えている。

(山 岸)

石 器

法正尻遺跡から出土した石器の中には、図789-1に示したナイフ形石器1点と、これに伴う可能性の高い、搔器が1点(図793-11)含まれている。その他の石器については、縄文時代前期終末から中期末葉の時期に、位置付けられるものと考えている。本項では、これらの石器について概観する。

縄文時代の石器には、石鏃・尖頭器・石錐・石鏝・石匙・搔器・不定形石器・石核・磨製石斧・打製石斧・石錐・有溝石器・石皿・磨石と各種の石製品がある。石鏃・石錐・石鏝・石匙・搔器の出十点数に占める各器種ごとの組成比率を見ると、石鏃は11%、石錐5%、石鏝9%、石匙34%、搔器41%と、石鏃が占める割合が低く、これに変わって、石匙と搔器が占める割合が高い。不定形石器としたものの多くは、刃部の状態から石匙や搔器に似通った機能を持つものと考えられる。石鏃が少なく、石匙・搔器とこれに類似する不定形石器が多いことが、法正尻遺跡における石器組成の特徴であろう。石鏃が少ない点については、排土のフルイ選別を行っていたため、微小な石鏃がたまたま見付からなかった可能性も否定できない。石匙や搔器が多く出土している事を考えると、石鏃の少なさをもってただちに狩猟活動の低下と考える事はできないだろう。

打製石斧も5点と、67点出土した磨製石斧と比べて極めて少ない。形状自体も打製石斧とし

ては定型的な、分銅型・撥型のはほとんど見られない。法正尻遺跡の石器組成における1特徴であろう。石錘は近接する縄文時代後期の角間遺跡³⁹から出土した石錘に、用いられる素材の形状・石質・加工の加えられる部位・加工の方法などは共通する。法正尻遺跡が所在する猪苗代湖北岸の地域では、少なくとも縄文時代中期から後期まで似通った石錘が使われていたことが明らかである。磨石の使用面は側縁部に見られ、従来使用面と考えられていた平滑で、ツルツルした表裏面については自然面と考えた。これは表裏面に面としての範囲が見られるものがほとんどなかった事による。側縁部の使用痕は、対象物を潰すための上下運動、さらにこれを細かくするための直線運動の結果形成されたものと考えている。石皿の出土量も多く、中には図837-1のように裏面に足を作り出しているものもある。

(松 木)

第2節 縄文時代の遺構について

法正尻遺跡からは、竪穴住居跡、土坑、埋甕、焼土遺構、捨て場としての遺物包含層等、縄文時代の遺構が数多く検出された。本節では、これらの遺構の内、竪穴住居跡と土坑について、その構造や機能、時期的な特徴等について概観する。埋甕については、住居内に取り込まれるものと、屋外に単独で作られているものがある。これらについては、従来言われている遺構としての特徴がそのまま認められ、特に新しい知見は得られなかった。このため、本節では取り扱わない事とした。焼土遺構は第2章5節に述べたように、単独で存在する屋外炉と住居跡の炉であったものも含んでいるものと考えている。焼土遺構については、竪穴住居跡の地床がと共通する遺構のあり方を示していることを確認するにとどめ、本節では取り扱わない。

竪穴住居跡

本遺跡からは、住居跡が129軒検出されている。これらの住居跡は、縄文時代前期から縄文時代中期末葉の時期に比定されるものであるが、時期の特定できたものは以下に示した113軒である。

大木7a式期5軒	SI46・50・54・55・136
大木7b式期22軒	SI2・3・6・21・22・28・29・30・33・34・35・38・43・48・51・53 101・117・118・119・124・134
大木8a式期19軒	SI1・4・5・7・9・11・13・14・19・23・25・26・37・39・45・47・49 120・126
大木8b式期24軒	SI10・12・18・24・32・36・44・72・77・81・82・84・85・94・95・96 98・107・111・113・121・125・128・132

大木9式期16軒 SI42・58・61・62・63・65・66・67・70・79・90・93・97・99・105
129

大木10b式期27軒 SI59・60・64・68・69・71・73・74・75・76・78・80・83・86・91・100
103・104・106・108・109・110・112・114・115・123・135

これらの住居跡の中で比較的遺存状態の良いものを中心に、平面形・規模・支柱穴のあり方等の構造的な特徴と、時期的なあり方について考えてみたい。図874には法正尻遺跡から検出された典型的な壁穴住居跡を時期・形態別に示した。

大木7a式期 本期に比定される住居跡は5例で、いずれも遺存状態が悪いため、多くを述べることはできない。本期の例としては円形を基調とするSI54を図874に示した。この他にSI46は方形、SI136は長方形を基調とするものと考えられる。支柱穴や炉のあり方についても、基本的には大木7a式期以降、大木8b式期まで見られる特徴と共通するものと考えられる。

大木7b～8b式期 本期に比定される住居跡は65軒である。これらの住居跡の平面形や規模、支柱穴や炉のあり方は、ほぼ共通している。その特徴は以下のように整理される。

- 1 住居跡の平面形には円形・方形・長方形の3つの類型がある。
- 2 一辺が7m以上の大きな住居が存在する。一方で、一辺が4mに満たない小さな住居も各時期に見られる。
- 3 支柱穴の配置は、住居跡の平面形に対応する。
- 4 検出された炉はすべて地床炉である。

住居跡の平面形は、円形基調のもの9軒(SI5・22・28・43・72・94・117・120・125)、方形のもの3軒(SI3・25・101)、長方形のもの11軒(SI1・2・9・11・13・21・44・45・77・81・84)である。数の上からは、円形、長方形を基調とする住居跡が多数を占め、方形の住居跡は少数である。

一辺が7mを超える大型の住居跡はすべて長方形を基調とし、11例中8例(SI1・2・9・13・21・44・81・84)を占めている。SI81は長辺の長さが11mを超え、SI9は9m、SI21は8m程の規模を持つ。長辺の長さは短辺に対して2～3倍程度である。円形や方形を基調とする住居跡は、4～6m程の大きさのものが主体をしめている。一辺が4mに満たない小型の住居跡は6軒(SI3・22・117・119・120・125)で、平面形が円形を基調とするものが4軒(SI22・117・120・125)と多数を占める。

支柱穴は、住居跡の平面形に対応する配置を示している。これは柱を立てるに際しては、周壁と柱との間隔を強く意識した結果と考えられる。SI25・28・72では、住居跡の平面形と支柱穴の配置が若干異なるように見えるが、柱を立てる場所の意識に、基本的な違いは認められない。小型の住居のうち3例が、2本支柱の構造を示しているのは、小型ゆえの特性と考えられる。2本支柱の住居跡の上屋は、切妻状をなしていたのであろう。

炉は、地床炉がいずれの時期にも一般的であるが、大木8b式期になると、区画施設を持つ地床炉も出現する。炉を持たない住居跡は、小型の住居跡に多く（SI3・22・117・119・120・125）、5mを超える住居跡で明らかに炉を持たないと判断されるのは、SI28だけである。SI28については、同時期の住居跡から離れた地点に位置しており、占地の上からもその特異性が伺われる。

円形・長方形をなす住居跡の炉は、床面中央付近に設置されている例が多い。長方形をなす大型の住居跡の炉は、ほとんど例外なく床面中央の長軸線上に位置している。柱穴の配置からこの部分は屋根の棟に相当するものと考えられ、住居の中で最も屋根が高い位置を意識して、炉を作っているものと考えられる。長方形をなす大型の住居跡の炉は、SI38例のように長軸5mに達するものもある。これらがすべて、同時期に1つの炉として機能していたものか、床面中央の長軸線上に炉を作ると言う規制の下で、転々と場所を移しながら炉を作っていた結果なのか断定することは難しい。しかし、SI53に見られるように、炉は比較的ルーズに場所を変えている事や、SI38例でも炉の焼けの状態には、部分的に強弱が見られることから判断すれば、転々と場所を移しながら炉を作っていた結果と考えている。

法正尻遺跡では大木8b式期に、石囲炉（SI82・111・121）や土器片囲炉（SI85・128）のような炉の区画施設を持つものが現れる。厳密な意味では区画施設と言えないが土器埋設炉（SI94・132）も現れる。炉の区画施設の発生は、住居空間において炉の位置が固定化されたことを示すものであろう。

大木9式期 本期に比定される住居跡は16軒である。本期の住居跡については、住居跡の炉に石囲炉を持つものと、複式炉を持つものが見られ、両者の間に時間差がある事が想定される。まず、石囲炉を伴う住居跡について検討する。石囲炉を持つSI42・65は、平面形が長方形をなすものである。大木7b～8b式期の同類型の住居跡と比べると、長辺と短辺の比率は1.3～1.4倍程度となり、方形化する傾向が見られる。規模は、SI42が5.5×7.3m、SI65は4.0×5.6mである。SI42については柱の配列を明示することができなかったが、SI65も含めて柱は壁際に作られる傾向が認められる。この2軒の住居跡については、大木8b式期の石囲炉等を施設を持つ住居跡と形態・住居施設のあり方に類似するものと考えている。

複式炉を伴う住居跡は、SI58・61・62・66・67・70・79・90・93・97・105の11軒である。これらの住居跡の特徴は以下のように整理される。

- 1 平面形は基本的には方形を基調とするものと考えられる。
- 2 規模は7mを超える大型の住居跡は顕著に認められるが、一辺が4mに満たないような小型の住居跡は見られない。
- 3 炉は複式炉である。
- 4 柱の配列は住居跡の平面形と一致している。この他に、複式炉前庭部付近に主柱穴に比べ

ると規模は小さいが、小穴を持つものも多い。

5 住居跡内に埋壁を持つ住居跡もある。

本時期の住居跡で平面形が明確な長方形をなすものや、正門に近い形状の住居跡は見られない。方形の住居跡についても、コーナー部が丸みを帯び、各コーナー間が膨らむ、隅丸胴張方形のものが多く、このため、平面形において円形か方形か判断し得ないものが大半を占めている。

住居跡の規模は一辺7mを超えるものが6軒で、最も大きなSI58は一辺8.8m、SI66も8.4mである。この2軒の住居跡は、同時期の住居跡の分布する地域の、それぞれ東・西端に位置している。柱は前時期と同じく平面形と同じ配列を示すものが、特に大型の住居跡では顕著に認められる。複式炉近辺については、炉の前庭部や前庭部の接する壁際に作られた、規模の小さな小穴が、主柱穴と同じ機能を果たしていたものと考えられる。SI66では複式炉前底部が取りついている部分の壁柱穴の数が、他の部分に比べて異常に多く、深さ30cmあるいはそれ以上のしっかりしたものが多くはこのためと考えられる。この傾向は他の住居跡でも確認できる。

この他に、本期に比定されると考えられる、平面形が長方形をなす住居跡が1軒(SI63)だけ検出されている。この住居跡については、住居施設に炉を持たない事が確認されており、住居の平面形だけでなく、住居施設についても他の住居跡と違ったあり方を示している。時期は異なるが、大木7b式期に比定されるSI28とともに、一般的な住居とは若干異なる性格を持っていたのではないかと考えている。

大木10式期 本期の住居跡に見られる特徴は以下のように整理される。

- 1 平面形は方形を基調とするものが多い。
- 2 住居跡の規模は、一辺4～5m程度のものが多数を占める。
- 3 炉は複式炉であるが、これとともに地床炉をもつ住居跡もある。
- 4 柱穴は新たに三角形に配置されるものが現れる。複式炉の埋設上器はこの三角形の底辺中央に位置するものが多い。
- 5 住居内に埋壁等の施設を持つものも見られる。

これらの住居跡のあり方は基本的には、大木9式期のそれと大差ないものと考えられる。平面形では、SI68・69のように正門をなす住居跡も認められる。規模については、一辺が7mを超えるような大型の住居跡は見られず、現状で確認できている最も大きなSI110で、5.0×6.5mである。大木9式期の住居跡と比べると、規模におけるバラツキはほとんど見られない。複式炉の他に、炉を持つ住居跡は2軒(SI59・110)で、SI59では地床炉の他に埋壁炉も見られる。柱の配置は矩形のもの6軒(SI59・60・69・74・75・123)、多角形のもの2軒(SI86・100)、円形のもの1軒(SI73)、三角形のもの9軒(SI64・68・71・76・80・83・108・114・135)である。SI71・80は複式炉の前庭部やこれと接する周壁際に、主柱穴と変わらない機能をもつと考えられる小穴を持つ。

第3章 考 察

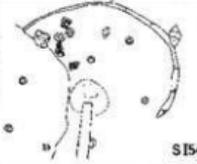
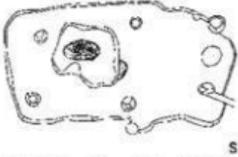
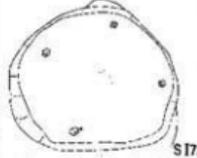
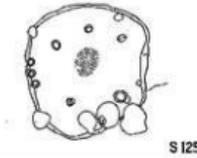
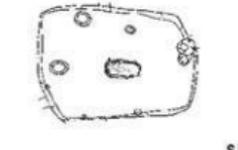
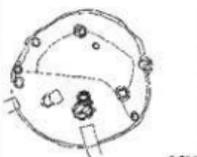
形状 時期	円形	方形	長方形
大木7式期 a	 S154		
大木7式期 b	 S143	 S1101	 S121
大木8式期 a	 S172	 S125	 S19
大木8式期 b			 S181
大木9式期	 S170	 S161	 S165
大木10式期	 S168	 S1135	 S1110

図872 竪穴住居跡集成図

角形の柱配置を持つ住居跡では、SI135のように主柱穴より若干小さい壁柱穴が見られるものや、複式炉前庭部周辺の小穴の存在を考えると、必ずしも3本の柱だけで上屋を支えていたものと考ええる必要はないだろう。

炉

法正灰遺跡から検出された、大木7a～10式期の住居跡に見られる炉のあり方について考える。本遺跡から検出された炉はその特徴から、1～6類に分類した。

1類 床面が焼けただけの、地床炉である。大木7a式期の古い段階から、大木8a式期までの住居跡の炉には例外なくこの形態の炉が作られている。炉自体に特別な施設を持つものはない。このため、炉は住居空間の中である特定の場所に、固定する傾向は弱い。例えば、SI53のような例はこれを物語るものと考えている。

2類 地床炉ではあるが、何らかの施設で炉の範囲を区切るもの（土器埋設炉・土器片囲炉・石囲炉）である。法正灰遺跡では、大木8b式期に出現している。これらの炉はいずれも、住居跡床面中央近くに設置され、炉の区画施設の出現とともに、炉が住居空間の中で位置的に固定化する状況を良く示している。

3類 2類に見られる石囲炉に、4類とする複式炉と同じような前庭部が結合した形状を示す炉である。本類の代表的な例は、SI90・97の炉で、SI99の炉も遺存状態は悪いがこれに近いものと考えられる。本類の炉については、2類とした炉と4類とした複式炉を繋ぐような形態的な特徴が見られる。その特徴は次のように整理される。

- 1 炉の形態は楕円形・円形状をなす石囲部に、「ハ」の字状に開く前庭部が取り付く。
- 2 石囲部の内部は焼けているが、炉上面は地床炉と同じくフラットなものが多い。
- 3 石囲部内部が、何等かの施設で区画されるものも見られる。
- 4 石囲部を区画する石は、拳大かそれより若干大きな石を使うものが多い。
- 5 上記の石以外には、石組は見られない。

SI90例は、全長3.2mを測る。石囲部内部は2区分され、前庭部側は底面を円形状に10cm程掘り窪め、ここに土器片を敷き詰めている。SI97の炉は、造り替えが行われているのであろう。同類形の炉が3基見られる。炉2は円形の石組部に、前庭部が取り付けいた形態を示す。現況では、SI90例のような石囲部内部に、区画施設は認められない。本類は2類から分化し、SI65のような石囲炉に、前庭部が結合して成立したものと推定される。

本類の炉は4類とした複式炉と比較すると、土器埋設部と石組部に相当する部分の分化は未発達で定型化しておらず、石の使用が区画だけに限られるなど、細部においては複式炉と異なる点も多い。しかし、炉空間の基本的なあり方は複式炉に共通することから、この様な炉が複式炉の

第3章 考 察

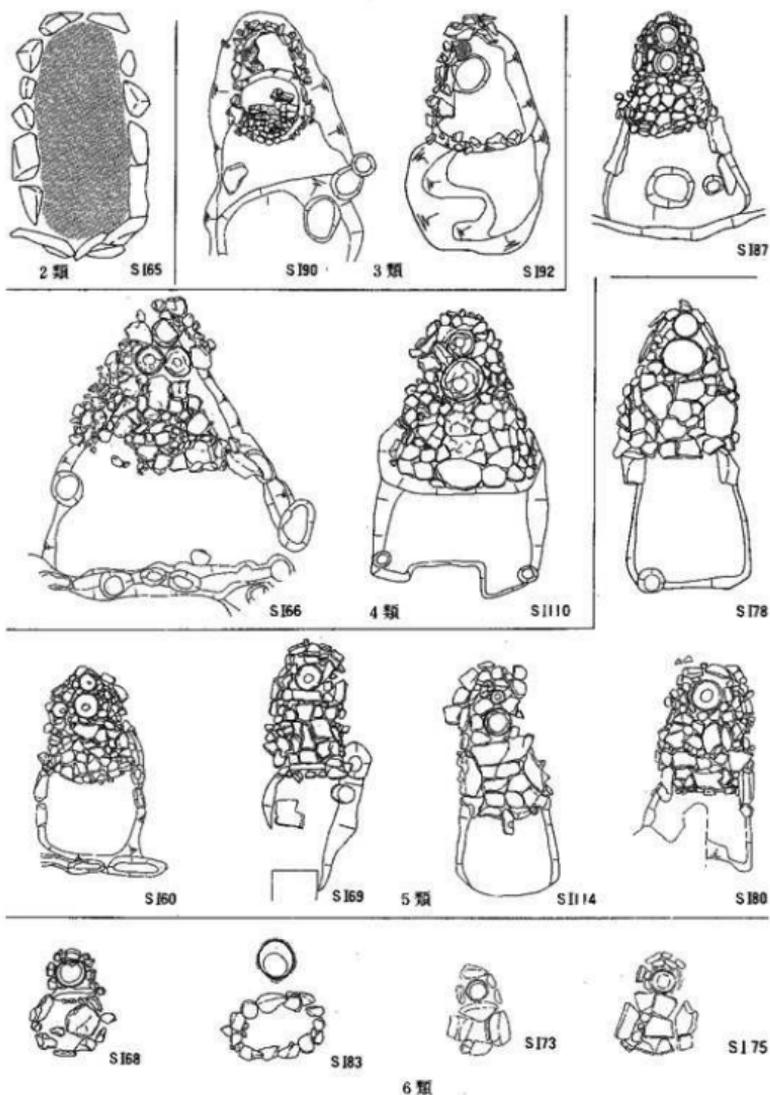


图873 炉集成图

1つの祖型をなすものと推察している。複式炉の祖型的な炉については、従来二本松市塩沢上原A遺跡SI04例に見られるように、石囲炉に埋設土器を伴うものが考えられてきた。本遺跡で複式炉の祖型的な炉と考えている3類とは、そのあり方を異にしている。このことは、きわめて興味深い点であり、時間的な違いや、地域的な特性も踏まえて、今後さらに検討を加える必要があらう。

4類 土器埋設部・石組部・前庭部から構成される複式炉で、平面形が二等辺三角形形状をなすものである。本類に所属するものは、SI58・62・66・79・87・110などである。SI58の複式炉は長軸3.7mで本遺跡中、最も規模が大きい。SI87の炉は長軸1.8mで、最も規模が小さい。平面形が整った二等辺三角形形状をなすものは、SI58・62・66・79である。SI87は土器埋設部が半円形状をなし、土器埋設部と石組部の接点がやや括れる。SI110も土器埋設部は半円形状をなし、前庭部もあまり開かない。石組部の断面形は、鍋底状をなすものがほとんどであるが、SI110の石組部の断面形はV字状をなし、他の炉と異なっている。以上のように、若干形態等に差異はあるものの、大きな違いがないことから、一つの類型として扱った。

5類 平面形が長方形形状をなす複式炉である。本類に所属するものは、SI60・64・69・78・80・91・114などである。4類とした複式炉と比べると、形態的には石組部の平面形が台形状から方形形状になり、前庭部も長方形形状をなす傾向が強く見られる。SI60・78の土器埋設部は三角形形状に近く、土器埋設部と石組部の接点がやや括れる特徴を持つ。SI64・69・80・91・114の土器埋設部は、半円形状をなし土器埋設部と石組部の接点部には、括れが見られない。前庭部は、やや「ハ」の字状に開くもの、閉じるもの、開かないもののいずれかの類型にあてはまる。石組部の断面形は、鍋底状のもの(SI60・78)、台形状のもの(SI64・69・114)、その中間的形態をとるもの(SI80・91)に分かれる。このように考えると、いくつかのバリエーションがありそうであるが、巨視的にみると、SI60・78の土器埋設部や石組部の形状は、4類の要素がやや残存するものの、前庭部の形状は矩形を基本としている。なお、SI69の前庭部からは立石が検出されており、本遺跡では特異な例である。

6類 埋設土器と小さな石組部からなるもので、前庭部が見られないものである。SI68・73・75・83の炉が比定される。石組部の平面形は方形(SI73・75)、円形(SI68)、楕円形(SI83)である。断面形は台形状(SI73・75)、鍋底状(SI68)をなしている。石組部の造りは簡素で、基本的には石組部の一辺に比較的大きい石を1個置いているだけのものも2例(SI73・75)ある。SI73の石組部底面に敷石は見られない。SI83は石組部と土器埋設部が離れ、石組部底面に敷石は見られない。規模は、いずれも、長軸の長さが、1m前後の小さなものである。

ところで、複式炉の規模と住居跡の規模を比較すると、どのようなことが言えるであろうか。ここでは、住居跡の規模を特定できたSI58・60・62・64・66・68・69・73・75・78・79・80・83・

87・110・114について検討する。6mを超える住居跡では、2.6～3.7mの炉が作られている。5m前後の住居跡では、1.8～2.5mの炉が作られる。4m前後の住居跡では、SI87を除いて、1m程の炉が作られている。SI87についても、土器埋設部と石組部の全長は1m程で、6類とした炉と人差はないものと考えている。このことから、住居跡の大きさと、複式炉の大きさは相関関係があるものと判断される。6類の複式炉に前庭部が見られないのは、住居規模が小さいことと関連するものと考えている。

次に、1類～6類の炉の所属時期についてまとめてみる。1類は、大木7a～8a式期に普遍的に見られ、大木8b式期まで存続するものである。2類は、土器埋設部・土器片圍炉が、大木8b式期に特有なものであり、石圍炉は大木8b式期に出現し、大木9式期の古段階まで存続する。3類の炉は、大木9式期でも古段階に比定されるもので、本遺跡では複式炉の祖型が、このころ誕生したものと想定される。大木8b式期末～大木9式期古段階の時期は、複式炉が出現する前段階の時期で、炉が一つの形態に定まっていなかったと考えられる。4類は出土遺物から考えて、SI58・62・66・79が大木9式期新段階、SI87・110が大木9～10式期の移行期に比定される。炉の前庭部の開きが弱くなる傾向は、時間差に裏付けられるものかもしれない。5類は、出土遺物から判断して、大木10式期でも古い段階に比定される。6類は、SI83を除いて大木10式期でも古い段階に比定される。したがって、炉の形態に違いが見られても、5類と6類の炉には時間差はないと判断される。SI83は出土遺物から大木10式期の時間幅の中に含まれるものであるが、明確な時期を特定することはできなかった。

複式炉については、既に先学によって、類型設定と変遷案が公表されているので、それらと本遺跡の例と対比してみよう。本跡の3類に相当する類例は、今のところ発見されていない。二本松市塩沢上原A遺跡SI04例・福島市月崎遺跡SI07例に見られるように、石囲炉+埋設土器の形態のものが、複式炉の初現的な形態とされている。特に月崎遺跡SI07例は、押山雄三によって、石囲部から前庭部を機能分化させた結果、複式炉が誕生したと評価されている³⁰。法正尻遺跡では3類とした炉のあり方から、石囲部に前庭部が付属することによって、複式炉が誕生するものと想定している。ともあれ、3類は、複式炉生誕の鍵を握る重要な資料であろう。

4類は、目黒の3類³⁰、鈴鹿のB1類³¹に相当し、それぞれ、大木9Ⅱ、大木9新式期～大木10古式期に比定されている。5類は、目黒の4類、鈴鹿のB2・C1類に相当し、それぞれ、大木10Ⅰ・Ⅱ、大木9新式期～大木10古式期に比定されている。なお、鈴鹿は、C1類は大木10中式期まで存続するとしている。6類は、目黒の7類で、大木10Ⅱに推定されている。本遺跡の複式炉の時期については、これらの見解とおおむね合致するものである。しかし、5類と6類には明確な時期差は認められなかった。このことは、既に指摘したように、住居の規模に規制された形態変化と考えられ、今後、時間軸だけではなく、居住空間との関連性に立った視点からも、論議される

(松 崎)

必要があるだろう。

土 坑

現在、泉内で大量の土坑が発見された遺跡は、検出数500基を超える天栄村桑名邸遺跡、飯館村羽白C遺跡が知られているが、本遺跡からは総数759基と他に例を見ない数の土坑が検出されている。それらの形状・規模はバラエティに富み、分布の状況も密な所、疎らな所に分かれ様ではない。土坑の所属時期は、大半が縄文時代前期末葉から中期末葉に比定され、伴出遺物や他遺構との重複関係から確実に所属時期が限定されたものは、全体の22%にあたる169基である(表15)。本節では、調査によって得られたデータを基に、土坑の機能と時期毎の特徴と時間的変化について触れてみたい。

土坑の機能について

土坑の形態・堆積土の状況・遺物の出土状態等から、大きく貯蔵穴・墓坑・落し穴の3つの機能を考えている。

貯蔵穴 本遺跡では、土坑内からクリ・クルミなど植物質の遺物が出土した例はなく、出土遺物から積極的に貯蔵穴と判断できる材料は乏しい。先学によれば²⁰⁾、自然堆積状況を示すフラスコ状、あるいは円筒状の土坑が植物貯蔵庫として使用されたとされている。本遺跡において多数検出されたフラスコ状土坑についても、従来の所見を否定するような見解は得られず、そのほと

表 15 形態別土坑時期区分

形態	大木6式期	大木7a式期	大木7b式期	大木8a式期	大木8b式期	大木9式期	大木10式期
I群		541 726	25 56 167 168 213	4 15 23 24 26 39 50 89 116 133 158 492	101 329 406 596 598	179	380 422 471 502
	278 731	281 676 698	134 282 293	73 95 97 118 156	280 367 387 388 499	610	306 322
	743 748 754	713 714 735 739 742 747 756 757	653	175 186 222 227 240	531 678		323 352 361 475 516
III群	706 744	699 720 721	7 32 37	46 47 52 86 87	237 273 284 285 300	368	423 517
		723 750 761	126 141 214	91 93 114 115 121	303 314 324 330 332		525
			312 327 415	143 146 157 307 311	345 346 347 356 375		
			544 566	326 333 365 378 399	386 395 402 404 425		
				420 429 450 453 472 474 552 564 569 577 579 582 605 669	432 438 459 463 489 495 497 506 512 538 556 559 578 625 628 634 635 687		

んどは貯蔵穴としての機能を有していたものと考えている。

SK 273・285の2基は、他のフラスコ状土坑底面の平面形が、円形及び楕円形であるのに対して、隅丸長方形あるいは長楕円形をなしている。また、周壁の一部はオーバーハングするが、他と比較すれば垂直に近い。さらに大きな特徴として、底面にそれぞれ2個、3個の小穴を持っている。壁際に位置する小穴は、壁を抉り込むように掘り込まれ、明らかに遺構に伴う柱穴である。柱穴のあり方とその平面的な規模から、竪穴住居跡である可能性を残す。しかし、底面には炉を持たず、検出面から底面まで1m以上の深さがありながら、恒常的に昇り降りするための施設、例えば階段状の施設等は認められない。このことから、SK 273・285については、上屋を持つ大型の貯蔵穴と捉えている。後節で述べられるが、この2基を含む地点からは、ほかに貯蔵穴がまとまって検出されており、ある時期の貯蔵穴域をなす地区と推定されることから、住居跡である可能性は低いものと考えている。

フラスコ状土坑は、他の土坑と比較して遺物の出土量が多く、器としての形態を保っている複数の土器が出土した土坑も数多い。SK 46・395・564・577・687から3点、SK 311・420から4点、SK 347・566・579・669から5点、SK 472・489から6点、SK 365・552から7点、SK 313・429から8点、SK 326・327から10点、SK 333から13点、SK 415から16点、SK 332からは本遺跡の遺構中最も多い22点の土器が出土している。これらの土器は、底面に密着した状態で検出されたものはほとんどなく、堆積土下部の比較的底面に近いレベルから出土したものが大半を占めている。これは、土坑が貯蔵穴として機能していた時期と、土器の入れられた時期に若干の時間差があることを意味している。

このようなフラスコ状土坑における土器の出土状態は、他の遺跡においても多数報告されている。山形県吹浦遺跡では、1. 坑底に密着して出土する例は少なく、やや浮いた状態にあること、2. 大型の上坑では壁寄りから出土するものが多いこと、3. 復元してみると、全破片のそろったものではなく、必ず欠失する部分があること、から「壊れて使えなくなった土器を廃棄したもの」との見解を示している。1・2については、本遺跡においても同様の様相を示している。しかし、3については土器が口縁部等を欠失していても、器としての形態を保っているものがほとんどであり、補修を加えれば、例えば木の実等の固形物を入れるには何等問題はないものと考えられる。しかも、出土状態にも数点が互いに接するようにまとまって出土している例(SK 327・347・365・415・420)も認められる。また、個々の出土状態に注目すれば、正立に近い状態で出土した土器が比較的多く、土器自体はほぼその形をとどめた状態で出土している。SK 332・333では、大型の深鉢の中に小型の深鉢が入った状態で出土している。2についても、意図的な行為の結果であることも推測できよう。これらのことから、フラスコ状土坑から出土した土器については、大型破片のような使用不能な土器が投棄された場合と、器としてまだ使える土器が有機的な関連を持つ

て出土した場合を区別する必要がある。後者については、単なる「廃棄」とは考えていない。

調査区中央部のLⅢb上面から検出したフラスコ状土坑の開口部周辺には、土坑構築の際の排土と思われる黄褐色土を確認した。特に、SK385はこれが、開口部周縁にドーナツ状に巡っていた。基本的には土坑構築時の排土を土坑周辺に置いたものと考えているが、結果的にはこの盛り上りによって、雨水等の侵入はある程度防がれていたものと考えている。

墓坑 本遺跡で人骨・骨片が出土した土坑はなく、直接的・科学的な判断材料には欠けるが、人為堆積を示し、副葬品を伴うものをこの類と考えた。SK138・501・541が比定される。

SK501の底面からは、硬玉製大珠が出土している。墓の副葬品として大珠が用いられた例は異外はもとより、県内においても七郎内C遺跡55号土坑等に見受けられる。SK541の底面からは、石匙・磨製石斧を含む18点の石器が2ブロックに分けて置かれていた。さらに小型の深鉢が斜位の状態で出土している。今回の調査で、18点もの石器が一度に出土した遺構は他になく、副葬品として埋納されたものと考えられる。SK138からも底部を欠失した小型の深鉢が、横倒しの状態で出土している。SK138・541に見られる小型深鉢の埋納は、法正尻遺跡における墓制の特徴と考えられよう。

大珠が出土したSK501には、幅・深さ20cm前後の壁溝が部分的に取り付いている。似たような壁溝は、取り付く位置が異なるもののSK369・478・519・562・616・636にも見受けられる。いずれも人為堆積を示す土坑で、SK636を除いて形態分類のⅡ群C類に属する。出土遺物から大木10式期以前の年代が与えられ、大木9・10式期の住居跡に取り囲まれるように、比較的狭い地域に点在している。

壁溝に溝を持つ土坑について県内では、桑名邸遺跡のSK19・166・352に類例が見られる。報告によればこれら3基は、底面壁際に周溝を持ち、本遺跡のSK369・478・501・519・636に近い平面形及び規模を有している。しかもSK19の堆積状況について、人為堆積の可能性を指摘している。報文では、これらの土坑の機能について言及していないが、法正尻遺跡SK501が墓であることから推測して、壁体のような施設を持った草坑と捉えておきたい。

SK321は調査の過程で、拳大から人頭大の腰が、壁際に方形に設置されていたことを確認している。堆積状況が不明のため推測の域を出ないが、墓としての利用が考えられよう。その他、単に人為堆積を示す土坑も、墓として利用された可能性を有していよう。

落とし穴 平面形が長方形または長楕円形で、断面「コ」字状のいわゆる落とし穴の形態を呈する土坑はSK245・319の2基である。SK245は調査区西側の遺構の稀薄地にあり、SK319は遺構の密集地にあるが、重複する遺構のどれよりも新しい。SK319は、底面に小穴が検出されている。いずれもLⅡに近似した黒色土が流入しており、縄文時代中期以降のものと考えている。

その他、SK72・551のように、遺構内堆積土中に人頭大の自然石が密集状態で入っているもの

がある。SK72は人為堆積の所見が得られており、墓の可能性も考えられるが、性格は不明としたい。また、土坑底面に小穴のある例として、上述のSK273・285以外にSK76・382・575・599がある。類似した小穴は、一連の真野ダム関連遺跡中の「日向遺跡⁴⁰」に検出例が多く、「湿気抜き」の状況が想定されている。

時期的変遷について

土坑の所属時期は、伴出遺物から表15の通り7期に区分される。時期が確定した土坑を基に、各時期毎に特徴を簡単にまとめると以下ようになる。

大木6式期 SK278を除く6基は調査区西端の斜面に位置しており、本期の土坑の密集地である。形態的には、ピーカー状土坑が多い傾向にあり、フラスコ状土坑は壁の括れが緩やかである。ピーカー状土坑は1m弱の深さを有し、自然堆積を呈することから貯蔵穴として用いられた土坑であろう。SK706が、深さ1.5m以上の大型フラスコ状土坑としては、本遺跡最古である。

大木7a式期 本期に比定された19基のうち17基は、前代と同様の調査区西端の斜面から検出されている。形態的にもピーカー状土坑が多く、フラスコ状土坑も壁の括れは緩やかである。

大木7b式期 調査区中央部と東部の遺構密集地に点在する。住居跡の軒数がほぼ同数の後代(大木8a・8b式期)と比較して、土坑の数量は $\frac{1}{2}$ 以下である。形態的にはフラスコ状土坑の比率が増加し、底面の直径及び深さが2m前後の大型のフラスコ状土坑が出現する(SK7・141・312・327・415)。壁中位の「く」の字状の括れが明瞭になる時期である。

大木8a式期 前代と比較して、土坑の数が飛躍的に増加する時期で、特にフラスコ状土坑の増加は顕著である。本期の土坑は、調査区東部と中央部の2つの遺構密集域に分かれて分布する。調査区東部では、同時期の住居跡群の周辺に位置し、この中でも東半部にフラスコ状土坑(SK52・86・87・91・93・114・115・146)が集中する。調査区中央部では、住居跡群から50～60m離れた位置に造られ、東部の土坑よりも一回り大型のフラスコ状土坑を中心に構成されている。

大木8b式期 前代と同じくフラスコ状土坑の盛行期で、調査区中央部の遺構密集地には、本期の住居跡を取り囲んで貯蔵穴が構築されている。なお、この密集地から50m程南のF～M・1～3グリッドでも、本期の貯蔵穴がまとまって検出されている。

大木9式期 本期の住居跡は15軒を数えるが、土坑は僅か3基が比定されるだけである。本期の遺構は調査区外に延びることが明らかで、未調査部に土坑群の存在が考えられることから断定できないが、フラスコ状の貯蔵穴が衰退を始めた時期との見方もできよう。

大木10式期 本期に比定される土坑は15基で、同時期の住居跡群内に点在する。最も深いフラスコ状土坑でもSK517の58cmと浅くなり、ピーカー状土坑の増加が目立つ。

これらのことから、法正尻遺跡で検出された土坑について2点の特徴が捉えられる。その1つは、大方、時期ごとに分布の範囲が規定されることである。詳細な時期毎の集落の変遷について

は、後節で述べられる。2つ目は、時間差によって若干の形態的・量的変化が見られたことで、具体的には貯蔵穴がこれにあたる。本遺跡では、フラスコ状土坑の貯蔵穴利用は各時期に渡って普遍的に行われている。しかし、大木7b式期に発展、大木8a～8b式期において盛期を迎えるのに対して、大木9式期以降フラスコ状土坑は数・規模ともに貧弱となる。この時期には、規模の小さなビーカー状の上坑が主体をなすらしい。この時間的変化は、東北地方・関東地方を含めて一般的な様相として捉えられている。

今回の発掘調査は2年間に渡り、膨大な量、激しい重複、狭い土坑内での掘り込み作業等、複雑かつ困難な調査であったが、総数759基の土坑は、貴重な資料を多数提供した。しかし、フラスコ状土坑の一括上器のあり方、壁溝をもつ人為堆積土坑の性格等、疑問点、判断に窮する点多々ある。類例の増加を待って今後の検討課題としたい。

(丹 治)

第3節 縄文時代の集落について

法正坑遺跡では縄文時代前期末葉から中期末葉まで、連続として集落が営まれ続けている。次に各時期ごとの集落のあり方について検討する。基本的に対象とする遺構は、竪穴住居跡と土坑・埋壁である。焼上遺構については、遺構の時期を特定する事が極めて難しいために除外する。また、住居跡と土坑・埋壁の中で、出土遺物や重複関係から遺構の時期を特定できたもの以外は除外する。土坑については表3に時期を明示したものを対象としている。

大木6式期

土坑は台地上に1基、調査区西端部の西向き斜面に6基占地している。本期に比定される住居跡は検出されていない。このため、集落の構成については不明である。

大木7a式期

図874-aに本期の遺構の配置を示した。調査区内では2か所に遺構が集中している。調査区西端の遺構群をA群、東側の遺構群をB群とする。A群の時期はⅡ群2類(1)、B群は同(2)で、A・B群には時間差がある。A群は住居跡2軒と土坑17基で構成され、上坑は貯蔵穴と考えられるものが多い。これらの土坑は、地点を違えて2つの地点に集中する傾向があるが、上坑の規模についてはこの間に人差は見られない。ホ91G付近では住居跡と多数の土坑が重複していることから、時間差があることは明らかである。本群の遺構のあり方から、住居と土坑がある程度距離をあげて存在していることが考えられる。

B群は竪穴住居跡3軒と土坑2基で構成されている。2基の土坑はいずれも深さ20cm程と浅く、貯蔵穴と考えられるフラスコ状の土坑は明確でない。住居跡は互いに近接・重複して作られている。住居跡から離れて位置している土坑(SK541)は、遺物の出土状態から墓坑と考えられる。

大木7b式期

Ⅱ群3類土器(Ⅰ)・(Ⅱ)、Ⅱ群4類土器(Ⅰ)を伴う時期の遺構である。図874-bに本期の遺構配置を示した。調査区内の台地上西側を除く、広い範囲に遺構が分布しているが、4か所に遺構が集積する傾向が見られる。それぞれをA～D群とする。

A群 Ⅱ群3類(Ⅰ)期の住居跡2軒(SI48・53)と同(Ⅱ)期の住居跡(SI51)、時期を特定できない土坑1基(SK293)で構成される。SK293は深さ27cmと浅い。

B群 Ⅱ群3類(Ⅰ)期の土坑1基(SK126)、Ⅱ群4類(Ⅰ)期の住居跡1軒(SI34)と土坑2基(SK134・141)、時期を特定できない住居跡4軒(SI22・33・117・118)と土坑1基(SK544)で構成されている。SI22・117は崩縁部に所在し、炉を持たない小型の住居跡である。SK126・141は深さ110cm以上の大型の土坑である。

C群 Ⅱ群3類(Ⅰ)期の住居跡1軒(SI35)、同(Ⅱ)期の住居跡2軒(SI29・38)と土坑3基(SK32・213・653)、Ⅱ群4類(Ⅰ)期の住居跡3軒(SI2・6・30)と土坑1基(SK25)、時期を特定できない住居跡4軒(SI3・21・124・134)と土坑1基(SK214)で構成される。SK214は重複関係からⅡ群3類(Ⅰ)期以前に比定される。小型で炉を持たない住居跡が2軒(SI3・124)含まれている。深さが100cm以上の大型の土坑は、2基(SK32・214)である。

D群 Ⅱ群3類(Ⅱ)期の土坑1基(SK415)、Ⅱ群4類(Ⅰ)期の土坑2基(SK327・566)と、Ⅱ群3類(Ⅱ)期以前の住居跡1軒(SI101)で構成される。土坑はいずれも深さ150cm以上と、規模が大きい。

この他に、単独でⅡ群3類土器(Ⅰ)期の住居跡が2軒(SI28・43)、時期を特定できない住居跡が1軒(SI119)ある。SI28は、直径6m程の住居跡であるが炉を持たない。SI119は、炉を持たない小型の住居跡である。埋壁は住居に近い所に作られ、Ⅱ群3類(Ⅱ)期に比定されるものが2基(SM4・11)、時期を特定できないものが2基(SM9・15)である。

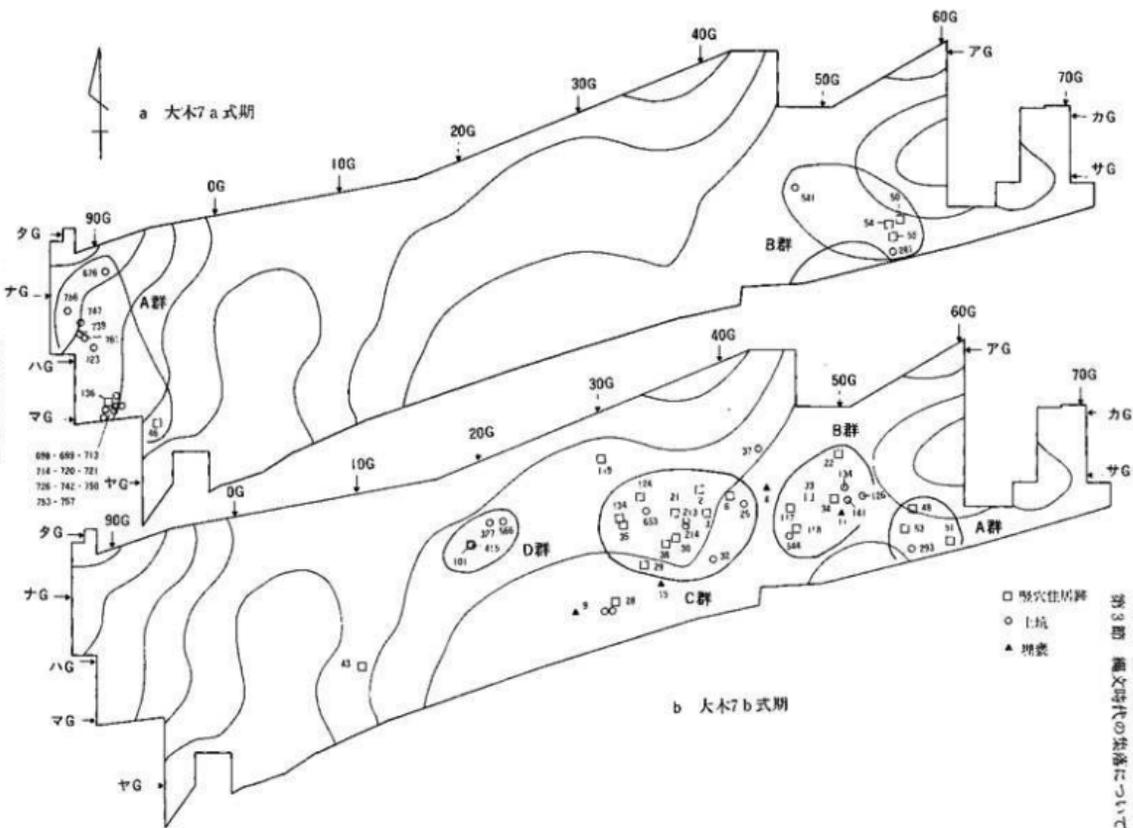
つぎに、本時期の集落のあり方について概観する。Ⅱ群3類(Ⅰ)期は調査区の広い範囲に渡って住居跡が散在して作られている。同(Ⅱ)期・Ⅱ群4類(Ⅰ)期は住居跡の作られる範囲がA～C群に限定される。D群にはこの時期の住居跡は見られず、大きな土坑だけが存在している。この時期、居住域と主たる貯蔵穴域が分離する傾向が見られる。

大木8a式期

Ⅱ群4類(Ⅱ)、Ⅲ群1類(Ⅰ)～(Ⅲ)を伴う遺構である。図875-aに本期の遺構配置を示した。住居が密集して作られる地点が4か所、土坑が密集して作られる地点が1か所認められる。これを、A～E群とする。

A群 Ⅱ群4類(Ⅱ)期の住居跡1軒(SI26)、Ⅲ群1類(Ⅰ)期の土坑6基(SK114・121・133・141・143・146)、同(Ⅲ)期の住居跡2軒(SI11・13)と土坑5基(SK47・52・86・89・115・116)、時期を特定でき

図874 大木7a式・大木7b式朝倉遺跡配図略図



第3期 縄文時代の集落について

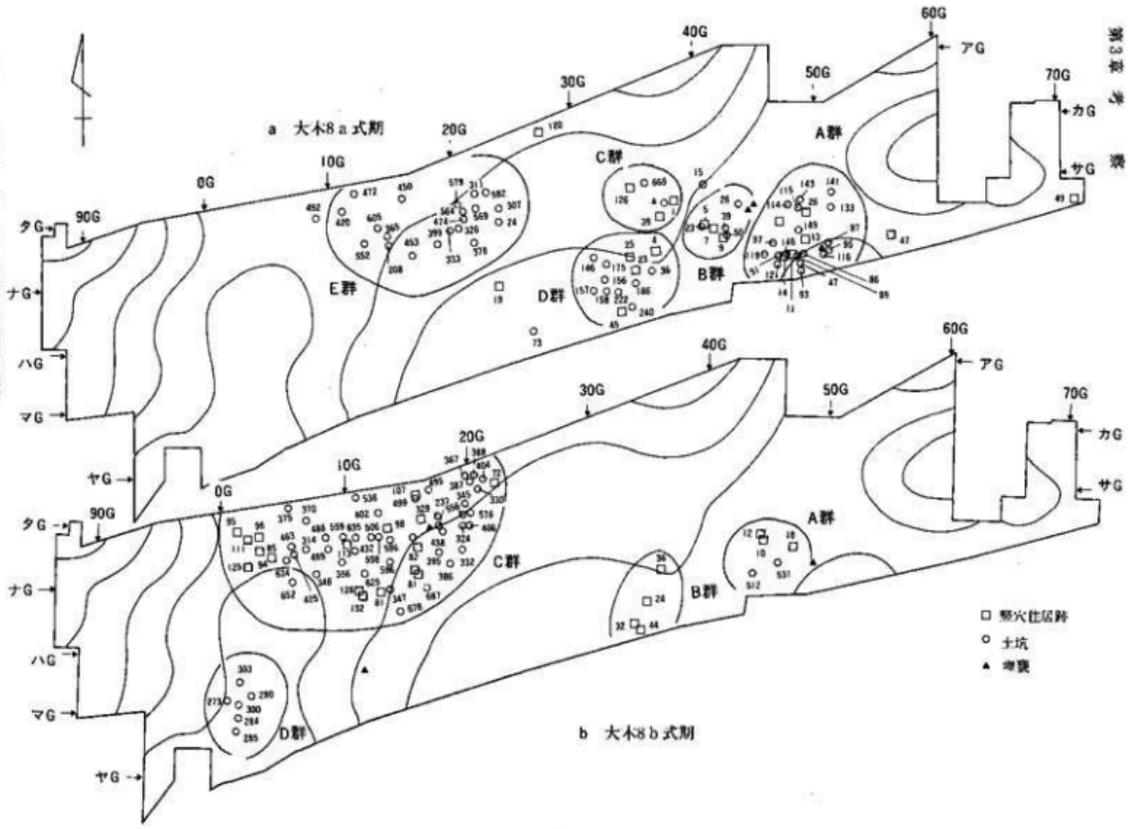
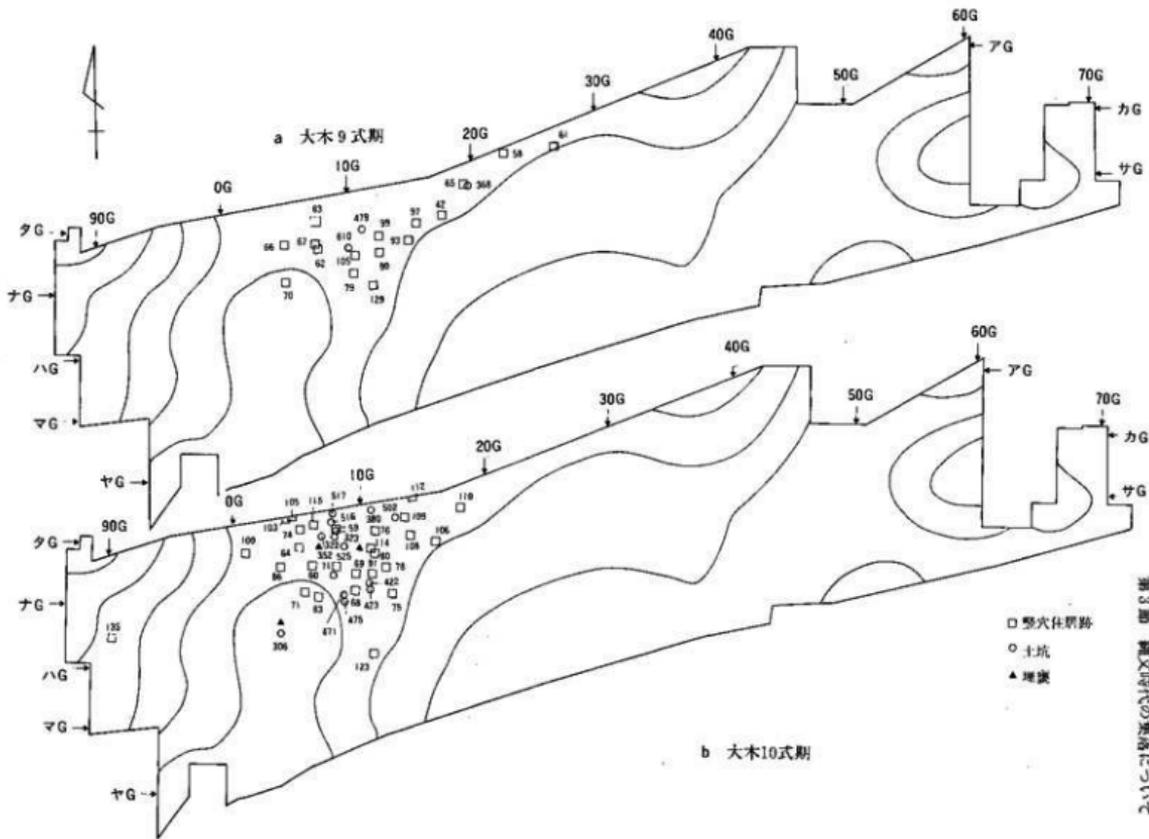


図875 大木8a式・8b式期遺構配置略図

図876 大木9式・10式期遺跡平面略図



第3編 縄文時代の集落について

ない住居跡2軒(SI14・37)と土坑6基(SK87・91・93・95・97・119)で構成される。SI37は、Ⅱ群4類(2)期かⅢ群1類(1)期のいずれかに比定される。土坑の中で深さ100cm以上の大型の上坑は、SK47・52・91・114・115・121・141・146の8基である。

B群 Ⅲ群1類(2)期の住居跡1軒(SI9)と土坑1基(SK50)、同(3)期の住居跡1軒(SI5)、時期を特定できない住居跡1軒(SI7)と土坑3基(SK23・26・39)で構成される。土坑はいずれも深さ30cm以下と浅い。

C群 Ⅱ群4類(2)期の土坑2基(SK4・669)、Ⅲ群1類(3)期の住居跡1軒、時期を特定できない住居跡2軒で構成される。SI39はⅢ群1類(1)・(2)期のいずれかに比定される。SI126は比較的小さな住居跡である。現況では炉は確認されていない。100cm以上の深さを持つ土坑はSK669だけである。

D群 Ⅱ群4類(2)期の土坑1軒(SK240)、Ⅲ群1類(1)期の住居跡1軒(SI23)と土坑1基(SK157)、同(3)期の住居跡1軒と土坑2基(SK175・227)、時期を特定できない住居跡2軒(SI4・45)と土坑4基(SK156・158・186・222)で構成される。SI4・45はⅢ群1類(1)・(2)期のいずれかに比定される。SI4は比較的小型の住居跡と考えられる。100cm以上の深さを持つ土坑はSK146だけである。

E群 上坑のみで構成される一群である。Ⅱ群4類(2)期の上坑2基(SK326・478)、Ⅲ群1類(1)期の上坑5基(SK420・552・564・579・605)、同(2)期の上坑5基(SK307・365・429・450・569)、同(3)期の上坑8基(SK24・311・333・378・399・453・472・582)で構成される。これらの土坑は深さ100cm以上と大型のものが多く、100cm以下の上坑はSK24だけである。

この他に、住居跡4軒(SI19・47・49・120)がこれらと離れた位置から単独で検出されている。SI47はⅢ群1類(1)・(2)期、SI49は同(2)・(3)のいずれかの時期に比定される。SI120は炉を持たない小型の住居跡である。

本期の集落の構成で特徴的なのは、居住域(A～D群)と貯蔵穴域(E群)が明確に分離している点であろう。E群にはⅡ群4類(2)期～Ⅲ群1類(3)期の上坑がすべて見られることから、大木8a式期全般に渡って、この地域が貯蔵穴域として意識されていたことが分かる。居住域内にも深さ100cm以上の土坑が見られるが、その数は少ない。埋甕は居住域内に取り込まれている。

大木8b式期

Ⅲ群2類(1)・(2)に比定される時期の遺構である。遺構は大きく4地点に集中している。C群の占地は次期以降の、遺構分布域と共通する。

A群 Ⅲ群2類(1)期の住居跡3軒(SI10・12・18)と土坑2基(SK512・531)で構成される。

B群 Ⅲ群2類(1)期の住居跡3軒(SI24・32・44)、時期を特定できない住居跡1軒(SI36)で構成されている。

C群 III群2類(1)期の住居跡3軒(SI72・81・84)と上坑20基(SK324・332・345・347・367・386・395)、III群2類(2)期の住居跡5軒(SI77・85・95・96・111)と上坑16基(SK237・314・329・330・346・356・387・388・438・459・489・495・499・596)、次期を特定できない住居跡8軒(SI82・94・98・107・121・125・128・132)と土坑7基(SK370・488・598・625・634・635・652)で構成される。住居跡はC群範囲で東端と西端に密集する傾向が見られ、東端にIII群2類(1)期、西端に同(2)期のものが多い。SI107・125は小型で炉を持たない住居跡で、他の住居跡の密集する縁辺部に作られている。土坑で深さ100cm以上の大きなものは19基である。III群2類(1)期で深さ100cm以上の大きな土坑は12基で、SK332・347・345・386・395は東端に、SK402・425・506・538・559は西側に作られている。同(2)期で深さ100cm以上の大きな土坑は7基で、C群の範囲内に散在して占地している。

D群 深さ100cm以上、あるいはそれに近い大きな土坑6基で構成されている。これらの土坑はすべてIII群2類(2)期の所産と考えられる。

III群2類(1)期の住居跡は、A・B群とC群東端に見られる。A・B群には規模の大きな土坑が見られないことから、C群域内に含まれる土坑のいずれかが、これらの住居跡に伴うものと考えられている。住居跡と土坑の占地に前時期と同じく居住域と貯蔵穴域にある程度の空間があるとすれば、C群東端に位置する土坑がA・B群の住居跡に伴うのではなからうか。III群2類(2)期では、D群が大規模な土坑のみで構成されている。このことから、本時期も基本的には、居住域と貯蔵穴域がある程度離れて存在したものと考えられる。(松本)

大木9式期

調査区内の台地上平坦部に遺構の分布が見られる。検出された遺構は、住居跡16軒、土坑3基であり、土坑の検出数は極めて少ない。土器に見られた時間差は、遺構の分布状況においては明確な特徴は見出せなかった。住居跡は台地上平坦部の東側から中央部にかけて分布しており、中央付近にはある程度の空白域が見られる。土坑については、検出数の希少さから見て、住居跡とある程度の距離を持って存在しているものと考えられるのが妥当であろう。また、遺跡の範囲が台地の北側に延びていることから、その部分に土坑が存在する可能性は極めて強い。したがって本期の集落構成は、台地上平坦部の南側には住居跡群が、北側には土坑群がある程度の距離を持って分布していたものと考えられる。

大木10式期

調査区内の台地上平坦部に遺構の分布が見られ、大木9式期の遺構の分布と合致している。検出された遺構は、住居跡27軒、土坑14基である。土坑数の希少さは大木9式期と同様に、住居跡とある程度の距離を持って存在しているものと考えられる。住居跡は台地上平坦部全域に分布し、大木9式期に見られた中央付近の空白域も埋め尽くしている。しかし、土器に見られる時間差においては、その分布からある程度の規則制は見出せない。したがって本期の集落構成は、台地上

平岡部の南側には主として住居跡群がほとんど規則制のないままに占地し、北側には十坑群がある程度の距離を持って分布していたものと考えられる。

墓坑と考えている、周壁際に溝等の施設を持つ土坑については、時期を限定できるものはほとんどなかった。しかし、その多くからは小破片ながらも大木9・10式土器が出土している。このことから、墓坑とした土坑についても大木9・10式期に近い時期と考えている。これらの土坑は、同時期の住居跡が占地する範囲内に作られており、大木9・10式においては、居住域内に墓域が含まれていたものと考えられる。

(山岸)

第4節 平安時代の遺構と遺物について

平安時代の遺構は、20号住居跡と1号特殊遺構が検出された。同時代の遺物の大半は20号住居跡から出土している。本稿では、同住居跡出土遺物とその性格等について若干の検討を加えた。

20号住居跡出土遺物には縄文土器片、土師器(杯・甕・鉢)、須恵器(杯・甕)、鉄製品(刀子)、羽目、石器がある。土師器杯は、全てロクロ成形のものである。底部は平底で、体部は内湾気味に立ち上がるが、そのうち図45-1~4は口縁部がやや外反する。内面はヘラミガキ後、同図5を除いて黒色処理される。炉の掘形から出土した同図5は再酸化を受け、内面は乳白色を呈している。調整技法は、全てに底部全面及び体部下端に回転ヘラケズリ再調整が施され、切り離し技法は不明である。須恵器杯は、底部が遺存するものは全て回転ヘラ切り痕を残し、大半にナデ調整が行われている。器形は、底部から口縁部にかけて直接的に開くものが多い。

土師器と須恵器のセット関係については、白鳥良一によって多賀城出土土器の一括資料がA~Fの6群に分類され、その変遷が明らかにされている⁴⁾。それに従えば20号住居跡の土師器杯はB群・C群に、須恵器杯はA~F群全てに認められる。さらに土師器杯が非ロクロを含まず、須恵器杯がすべてヘラ切りであることを考慮すれば、20号住居跡の上器群はC群に相当するものと考えられる。C群土器の年代は、9世紀前半に位置付けられている。

本県における古代の土器編年については、会津地方よりも中通り地方に報告例が多く見出される。

特に、東村谷地前C遺跡⁵⁾では土師器・須恵器が6群に分類され、編年の位置付けがなされている。本遺跡20号住居跡から出土した底部から体部下端まで回転ヘラケズリ再調整の土師器杯は、報文中第IV群及びV群に対応するものである。第IV群土器は回転ヘラケズリ再調整をうける杯を100%の組成としているのに対し、第V群土器は手持ちヘラケズリ再調整をうける杯が共存する。第IV群土器は9世紀初頭、第V群土器は9世紀中葉前後の年代が示されている。両群とも

ヘラ切り無調整の須恵器杯が相伴している。

会津地方の特色として、出土総数に占める須恵器の割合が多いことが指摘されているが、それは本遺跡でも同様である。本遺跡出土須恵器の生産地である可能性が高い南原窯跡⁴⁹群の南原19号・25号窯は9世紀中葉から後半に比定されているが、20号住居跡出土の須恵器杯は製作技法が同じで、器形的にもそれらに近いものがある。また20号住居跡と同様の土師器杯・須恵器杯のセット関係が得られた会津高田町下堀原遺跡⁴⁰、会津若松市清水上遺跡⁴⁰は9世紀前半から中頃の年代観が示されている。また猪苗代町登戸遺跡⁴⁰の8号住居跡から出土した須恵器杯は清水上遺跡出土須恵器杯に先行するものとして9世紀第2・4半期の年代を与えている。以上のことから、20号住居跡は9世紀前葉から中葉の年代が推定され、より時期を絞れば9世紀第2・4半期を中心とするものと考えられる。これは、多賀城及び谷地前C遺跡の上器編年と矛盾しない。

次に20号住居跡の施設について述べてみたい。カマドは南壁東寄りに造られ、燃焼部は住居外へ突出し、裾部は住居内に張り出さず袖石が据えられている。煙道は造られていない。15基の小穴は、その規模によって柱穴と貯蔵穴に分類される。特に、貯蔵穴がカマド脇の張り出し部内で検出されたことは、県内で他に類例を見ない。炉は住居跡中央部の南寄りに位置し、焼土化は6cm下まで及び、周囲の床面より若干窪められている。炉の存在と共に、刀子・羽口・鉄沖の微少片、さらに白色粘土が出土したことから、鍛造削片が検出されなかったことで若干疑問の余地を残してはいるが、本住居跡が鍛冶作業に関連するものではないかと考えている。貯蔵穴を屋外に突出させているのは、作業空間を広くとろうとする工夫の現れであろうか。

平安時代の本遺跡は、丘陵上の台地に軒で構成する点に特徴があるが、これは鍛冶作業に従事する工人の住むいわゆる「離れ国分⁴⁹」的な性格を有するものと言える。しかし、今回の発掘調査は、遺跡全体のうち道路幅の限られた面積であるため、未発掘の部分に平安時代の遺構が存在する可能性が考えられる。また本遺跡の西南西に約600m離れて位置する角間遺跡では、9世紀前半の住居跡が1軒検出され、さらに未命名ではあるが本遺跡の北約500mの地点にも、ロクロ土師器の散布が確認されている。またほぼ同時期、9世紀初頭には磐梯山麓に慧日寺が創建されている。これらのことから本遺跡を含む猪苗代湖北岸は、慧日寺の創建前後その周辺に集落が営まれ、同寺の隆盛と共に集落が広がりつつ発展したことは容易に想像できる。従って本遺跡20号住居跡は、慧日寺あるいはその周辺の集落が発展する過程において、それらと何等かの関わりを持っていた住居跡と考えてしかるべきであろう。

(丹 治)

参考文献

- 1) 本間宏、丹野隆明氏の御教示による。
- 2) 芳賀 英一 1985年 「大木5式土器と東部関東との関係」『古代第80号』
- 3) 会津高田町教育委員会 1983年 「上道土B遺跡」『会津高田町遺跡試掘調査報告』
- 4) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1990年 「師山遺跡」『相馬開発関連遺跡調査報告Ⅱ』
- 5) 岩手県教育委員会 1982年 「江釣子村鳩岡崎遺跡」『東北縦貫自動車道関係埋蔵文化財調査報告書XV-2』
- 6) 北上市教育委員会 1983年 「滝ノ沢遺跡」
- 7) 山形県教育委員会 1988年 「吹浦遺跡」
- 8) 宮城県教育委員会 1986年 「小栗川遺跡」『七ヶ宿ダム関連遺跡発掘調査報告Ⅱ』
- 9) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1983年 「薬師堂遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告13』
- 10) 宮城県教育委員会 1969年 「長根貝塚」
- 11) 今村 啓爾 1985年 「五輪ヶ台式土器の編年」『東京大学文化部考古学研究室研究紀要 第4号』
- 12) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1989年 「中ノ沢A遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査』
- 13) 福島県教育委員会・榎福島市文化振興事業団 1989年 「愛宕原遺跡」
- 14) 大川 清・大島 秀俊 1978年 「茨城県美浦村虚空蔵貝塚」『国士館大学考古学研究室報告乙種第5冊』
- 15) 月羽 茂 1981年 「中期の土器—大木式土器—」『縄文文化の研究』
- 16) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1988年 「羽白C遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅡ』
- 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1989年 「羽白C遺跡(第2次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告XⅢ』
- 17) 高橋 圭次 1984年 「伊達郡川伏町後庵館遺跡出土の縄文土器」『福島考古 第24号』
- 18) 会津坂下町教育委員会 1986年 「勝負沢遺跡調査報告書」
- 19) 西村 正衛 1972年 「阿玉台式土器編年の研究の概要」『早稲田大学大学院文化部研究紀要 第18号』
- 20) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1984年 「上ノ台A遺跡(第1次)」『真野ダム関連遺跡発掘調査報告V』
- 21) 日立市教育委員会 1980年 「諏訪遺跡発掘書」
- 鈴木 裕 芳 1987年 「諏訪遺跡出土土器の再検討」『茨城県史研究 第59号』
- 22) II群3・4類土器については、以下の文献に詳しい。
海老沢 隆 1982年 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(1)」『婆良岐考古 第4号』
同 1984年 「茨城県内における縄文中期前半の土器様相(2)」『婆良岐考古 第6号』
谷井 彪 1986年 「阿玉台式から見た東北南部大木式の変遷」『古代80号』
小栗 一夫・他 1987年 「馬高系土器群の系譜」『東京都埋蔵文化財センター研究論集V』
塚本 節也 1990年 「北関東・南東北における中期前半の土器様相」『古代89号』
- 23) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1987年 「中江型ノ宮遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告V』
- 24) 新潟県教育委員会 1990年 「清水上遺跡」
- 25) 福島県教育委員会・榎福島県文化センター 1982年 「七部内C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査

報告X]

- 26) 玉川村教育委員会 1985年 堂平B遺跡
- 27) 白河市教育委員会 1984年 「南畑切IV」
- 28) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1990年 「桑名邸遺跡(第2次)」『国営農地開発事業次吹地区遺跡発掘調査報告6』
- 29) 高郷村教育委員会 1982年 「博毛遺跡」
- 30) 海老原郁男・他 1979年 「湯坂遺跡」
- 31) 海老原郁男・他 1980年 「槻沢遺跡」
- 32) 鈴木 雄三 1982年 「郡山市野中遺跡調査報告」『福島考古第23号』
- 33) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1989年 「天光遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告5』
- 34) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1989年 「角間遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告8』
- 35) 押山 雄三 1990年 「福島県の複式炉」『郡山市文化財研究紀要 第5号』
- 36) 甘黒 吉明 1982年 「住居の炉」『縄文文化の研究8』雄山閣
- 37) 鈴鹿 良一 1986年 「複式炉と敷石住居」『福島の研究1』清文堂
- 38) 堀越 正行 1975～1977年 「小堅穴考(1)～(4)」『史館5・6・8・9号』市川ジャーナル社
- 39) 安藤 文一 1983年 「蕨塚人珠」『縄文文化の研究9』雄山閣
- 40) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1990年 「日向遺跡(第2次)」『奥野ダム関連遺跡発掘調査報告(福島県文化財調査報告書 第231集)』
- 41) 白鳥 良一 1980年 「多賀城跡出土土器の変遷」『研究紀要VII』多賀城調査研究所
- 42) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1982年 「谷地前C遺跡」『母畑地区遺跡発掘調査報告II』
- 43) 会津若松市教育委員会 1984年 「南原埋蔵文化財発掘調査概報」
- 44) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1983年 「下瀬原遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告I』
- 45) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1987年 「清水上遺跡」『国営会津農業水利事業関連遺跡調査報告V』
- 46) 福島県教育委員会・財福島県文化センター 1988年 「登戸遺跡」『東北横断自動車道遺跡調査報告3』
- 47) 中山 吉秀 1976年 「離れ岡分考」『古代第61号』



写 真

付 編

付編1 法正尻遺跡出土土器の蛍光X線分析

奈良教育大学 三 辻 利

平安時代の土器について

1) はじめに

律令体制下では各地の国衙のもとで須恵器生産は進展する。そのため、母集団となる窯跡の数が増え、化学分析による産地推定は一見、難しいように見える。しかし、須恵器生産が始まれば、当然、地元で須恵器は消費されているはずであるという考え方をとれば、須恵器の伝播・流通の研究においては、まず、化学分析によって地元産の須恵器を抽出することから始めるのは当然のことであろう。

猪苗代町の法正尻遺跡出土須恵器の産地推定でも、まず、地元の南原窯跡群の須恵器に対応させることによって、地元産と推定される須恵器を抽出した。搬入品と推定されたものについては、近くにある登戸遺跡出土の須恵器胎土との比較を試みた。土師器についても、須恵器胎土との比較、さらには、登戸遺跡の土師器胎土との比較も試みた。

2) 分析方法

表面付着物を除去するため、土器の表面を研磨した。次いで、均質な試料を得るため、タングステンカーバイド製乳鉢の中で粉碎し、100～200メッシュ程度の粒度の粉末にした。粉末試料は塩化ビニール製リングを枠として、約15トンの圧力を加えてプレスし、内径20mm、厚さ3～5mmのコイン状の錠剤を調製した。このような処理をするのは、試料とX線管および検出器に対する幾何学的条件を一定にするためであり、相対測定をする上には必要なことである。蛍光X線スペクトルの測定には、2次ターゲット方式のエネルギー分散型蛍光X線分析装置を使用した。

Tiを2次ターゲットにして真空中でK、Caを、また、Moを2次ターゲットにして空気中でFe、Rb、Srを測定した。標準試料には岩石標準試料JG-1を使用した。分析値はJG-1による標準化値で表した。

3) 分析結果

はじめに、分析データから出土土器を分類することを試みた。表2には法正尻遺跡出土土器のRb-Sr分布図を示す。この表には南原窯跡群の須恵器の分析データから得られた南原領域を示してある。勿論、この領域は定量的な意味は持たないが、法正尻遺跡から出土した須恵器が地元、南原窯跡群産であるかどうかの見当をつける上には役に立つ。表2より、No3・6・8・11

表1 法正尻遺跡出土土器の分析値

資料No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr	資料No.	器種	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	須恵器・甕	0.349	0.266	1.94	0.434	0.557	8	須恵器・甕	0.539	0.127	1.76	0.550	0.238
2	"・甕	0.371	0.382	2.42	0.453	0.493	9	"・甕	0.318	0.215	1.53	0.436	0.466
3	"・杯	0.622	0.133	1.51	0.635	0.265	10	土師器・杯	0.294	0.198	1.21	0.387	0.436
4	"・"・	0.316	0.235	2.06	0.413	0.438	11	須恵器・杯	0.613	0.101	1.67	0.585	0.211
5	"・"・	0.355	0.270	1.92	0.565	0.515	12	土師器・杯	0.274	0.160	1.77	0.335	0.334
6	"・"・	0.617	0.177	1.41	0.653	0.240	13	"・甕	0.322	0.255	1.44	0.385	0.447
7	"・"・	0.326	0.252	1.95	0.465	0.551							

(分析値はJG-1による標準化値である。)

表2 Rb-Sr分布図

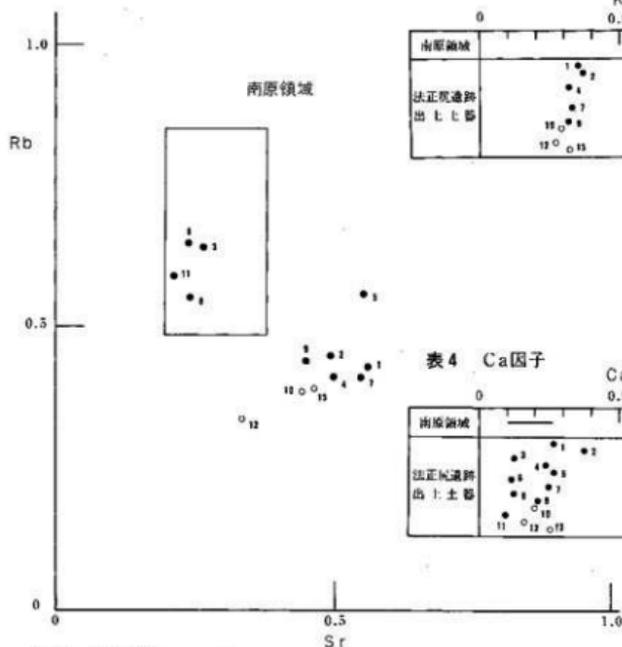


表3 K因子

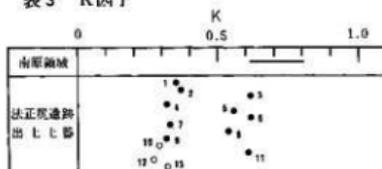


表4 Ca因子

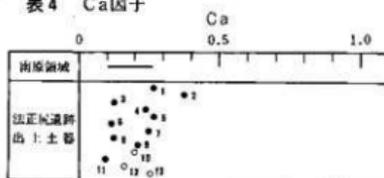
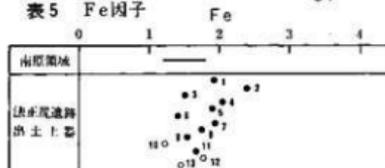


表5 Fe因子



の4点が地元、南原窯跡群産の可能性をもつが、他のものは地元産のものではない。搬入品と見られるNo1・2・4・5・7・9の須恵器とNo10・12・13の土師器の胎土はRb, Sr特性では類似しているように見える。これらが同質の胎土であるかどうかは他の因子を点検してみなければわからない。

表3にはK因子を対比してある。No3・6・8・11の4点はほぼ、南原領域に対応するが、No1・2・4・7・9の須恵器とNo10・12・13の土師器は対応しない。表2のRb-Sr分布図で、No1・2・4・7・9の須恵器と同一グループに入るとみられたNo5はK因子では全く異なる。したがって、No5は南原群にも対応しなければ、No1・2・4・7・9の須恵器グループとも異なることがわかる。

表4にはCa因子を対比してある。Ca因子でも、No3・6・8・11は他の須恵器とは異なることがわかる。また、No1・2・4・7も群を形成するとみられる。

表5にはFe因子を対比してある。No3・6・8・11には比較的Fe量が少なく、No1・2・4・5・7にはFe量は多い。No9はFe因子ではむしろ、No3・6・8・11のグループに近い。表5をみると、No9はNo1・2・4・7のグループよりも、むしろ、No10・12・13の土師器に類似するとみられよう。そこで、表2～4を再度点検すると、No9はNo10・12・13の土師器の同質の胎土であることがわかる。

以上の結果、法正灰遺跡出土土器は第1グループ(No3・6・8・11)、第2グループ(No1・2・4・7)、第3グループ(No5)と第4グループ(No9とNo10・12・13の土師器)の4群に分類できる。

この結果を、まず、外見上の土器の色調による分類と対応させてみよう。No1・2・4・8は青灰色の須恵器であり、No3・5・6・7・9・11は灰色の須恵器である。青灰色の須恵器は上記の第1グループと第2グループにまたがっており、さらに、灰色の須恵器も第1グループと第2、第3、第4グループにもまたがっている。つまり、外見上の色調による分類は化学分析による分類には対応しないことがわかった。外見上の色調は土器の素材の粘土の化学特性よりも、むしろ、土器の焼成条件に関係するものと思われる。したがって、外見上の色調のみで土器を分類することは危険である。

次に、登戸遺跡の須恵器と同様、地元、南原窯跡群に対応するものが4点検出された。搬入品とみられるNo5とNo1・2・4・7の4点は登戸遺跡で搬入品とみられた2点の須恵器とも胎土は異なる。これらはK量も少ないところから、福島県や宮城県の太平洋沿岸地域に産地を求めなければならないであろう。そのためには、同年代のこれらの地域の窯跡を抽出しなければならない。

一方、No5にはK量は多い。この須恵器は東北地方の太平洋沿岸地域のものではない。東北地方から北陸地方へかけての日本海沿岸地域や、静岡県湖西地域などに産地を求めなければならないであろう。

No10・12・13の土師器の胎土は登戸遺跡の土師器の胎土とも異なる。むしろ、No1・2・4・7の須恵器の胎土に類似している。したがって、これらの須恵器と一緒に持ち込まれた土師器である可能性がある。

縄文時代の土器について

縄文土器には窯跡は残っていないが、K・Ca・Rb・Srの4因子を使ったクラスター分析とRb-Sr分布図による地域差を活用すると、胎土についてのかなりの情報を入手することができる。

まず、法正尻遺跡の縄文土器の分析値を表6に示す。分析値は岩石標準試料JG-1による標準化値で表示されている。

表7にはクラスター分析の結果を示す。縦軸の類似度にギャップができるところで区切る訳であるが、何処の谷間で切るかについては判断が難しい。一応、表7に示すように区切り、A・B・C・Dの4群に分類してみた。一番多くのサンプルを含むのはB群であり、ついで、C・D群である。この他に、どの群にも属さないものが数点でた。No3・8・29・15・40である。

次に、表8にはRb-Sr分布図を示す。そして、表7による分類結果によってグループ分けをしてある。そうすると、注目される点は最もサンプル数の多いB群が丁度、地元産と推定される土師器や船ヶ森西1群の須恵器が分布する領域に分布することがわかる。このB群の縄文土器が地元産と推定されるものである。縄文土器、弥生土器、土師器についてはどの遺跡でも多数派を占めるグループが地元産である例が多い。その逆の例はほとんどない。このようなデータから、縄文土器、弥生土器、土師器についてはクラスター分析の結果、多数派を占めるグループを地元産と仮定することすら可能である。K・Rb量の多いC群は勿論、少数派であるが、地元産の縄文土器ではない。北陸地域、または、東海地域からの搬入品である可能性をもつ。逆に、K・Rb量が少なく、Ca・Sr量が多いA・D群の縄文土器は東北地方の太平洋沿岸他の地域、または、関東地域からの搬入品である可能性をもつ縄文土器である。また、1点ではあるが、Ca・Sr量の少ないNo40も北陸地域、または、東海地域からの搬入品である可能性をもつ縄文土器である。そうして、全体を眺めると、全体の半数を越える土器は地元産であるが、それでも、かなりの数の搬入品があり、しかも、複数の地域からの搬入品が含まれていたということは縄文時代、法正尻遺跡は多くの地域の人々と接触をもったことを意味し、実に興味深い。

参考文献

- 二辻 利一 1988年 「登戸遺跡山土須恵器の蛍光X線分析」 『東北横断自動車道遺跡調査報告3』 福島県教育委員会・財福島県文化センタ
- 二辻 利一 1990年 「船ヶ森西遺跡出土土器の蛍光X線分析」 『東北横断自動車道遺跡調査報告9』 福島県教育委員会・財福島県文化センタ



図1 胎土分析資料

表6 法正尻遺跡出土縄文土器の分析値

資料No	分類	群別	K	Ca	Fe	Rb	Sr	資料No	分類	群別	K	Ca	Fe	Rb	Sr
1	Ⅱ-2	A	0.276	0.805	2.06	0.166	0.577	26	Ⅱ-2		0.150	0.299	2.85	0.520	0.694
2	Ⅱ-2	B	0.315	0.187	2.50	0.470	0.317	27	Ⅱ-2	B	0.450	0.280	3.72	0.451	0.600
3	Ⅱ-2	D	0.294	0.669	1.90	0.284	0.626	28	Ⅱ-1	H	0.303	0.224	1.79	0.445	0.492
4	Ⅱ-2	H	0.310	0.375	2.41	0.247	0.474	29	Ⅱ-1		0.190	0.479	2.80	0.196	0.549
5	Ⅱ-2	D	0.378	0.253	2.01	0.458	0.498	30	Ⅱ-1		0.300	0.276	1.69	0.258	0.569
6	Ⅱ-1	A	0.301	0.628	2.03	0.315	0.686	31	Ⅱ-1	H	0.265	0.125	1.87	0.242	0.267
7	Ⅱ-2	B	0.267	0.291	2.52	0.312	0.351	32	Ⅱ-1	D	0.371	0.373	2.53	0.314	0.817
8	Ⅱ-3		0.331	0.366	1.69	0.419	0.632	33	Ⅱ-3	D	0.358	0.264	4.39	0.323	0.503
9	Ⅱ-3	D	0.425	0.432	2.35	0.304	0.826	34	Ⅱ-5	B	0.566	0.208	4.38	0.521	0.477
10	Ⅱ-3+4	D	0.470	0.315	1.93	0.458	0.479	35	Ⅱ-5	H	0.332	0.230	3.23	0.356	0.437
11	Ⅱ-4	B	0.151	0.328	2.82	0.282	0.373	36	Ⅱ-5	H	0.346	0.558	4.90	0.371	0.509
12	Ⅱ-3+4	B	0.275	0.440	2.12	0.227	0.551	37	Ⅱ-5	M	0.419	0.563	4.56	0.339	0.470
13	Ⅱ-3+4	H	0.273	0.380	2.13	0.207	0.362	38	Ⅱ-5	D	0.218	0.271	3.47	0.175	0.328
14	Ⅱ-3+4	H	0.280	0.352	2.13	0.283	0.502	39	Ⅱ-5	B	0.422	0.129	2.09	0.101	0.471
15	Ⅱ-3		0.120	0.437	3.62	0.160	0.332	40	新橋		0.299	0.068	2.92	0.441	0.152
16	Ⅱ-3	A	0.272	0.692	3.61	0.162	0.583	41	新橋	H	0.406	0.105	1.56	0.307	0.280
17	Ⅱ-3	A	0.192	0.668	2.41	0.214	0.706	42	新橋	H	0.455	0.068	3.18	0.430	0.277
18	Ⅱ-3	A	0.086	0.626	3.46	0.105	0.541	43	新橋	H	0.404	0.104	2.40	0.408	0.285
19	Ⅱ-3	A	0.274	0.808	2.99	0.254	0.694	44	新橋	B	0.452	0.128	1.66	0.166	0.411
20	Ⅱ-3	D	0.427	1.000	2.37	0.252	0.883	45	新橋	B	0.294	0.136	1.83	0.320	0.280
21	Ⅱ-3	C	0.637	0.196	1.79	0.772	0.611	46	円筒	A	0.215	0.715	3.61	0.115	0.524
22	Ⅱ-2		0.059	0.731	3.52	0.226	0.804	47	円筒	B	0.179	0.327	3.65	0.301	0.468
23	Ⅱ-2	C	0.568	0.280	4.03	0.774	0.570	48	円筒	C	0.397	0.163	1.96	0.759	0.592
24	Ⅱ-2	C	0.553	0.212	4.20	0.627	0.598	49	円筒	A	0.163	0.584	3.46	0.163	0.716
25	Ⅱ-2	D	0.102	0.922	3.23	0.169	0.663	50	Ⅱ-3+4	H	0.538	0.123	1.89	0.478	0.444

(分析値はJG-1による標準化値である。)

表7 法正尻遺跡出土縄文土器のクラスター分析 (K・Ca・Rb・Sr因子使用)

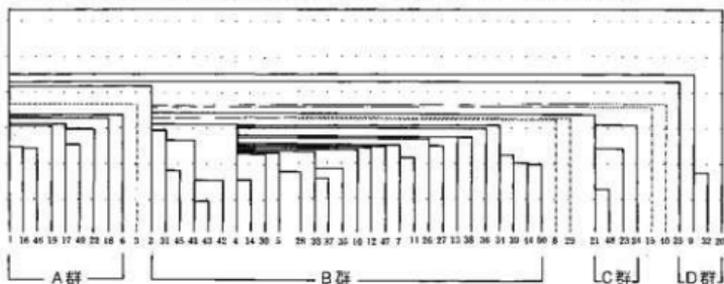
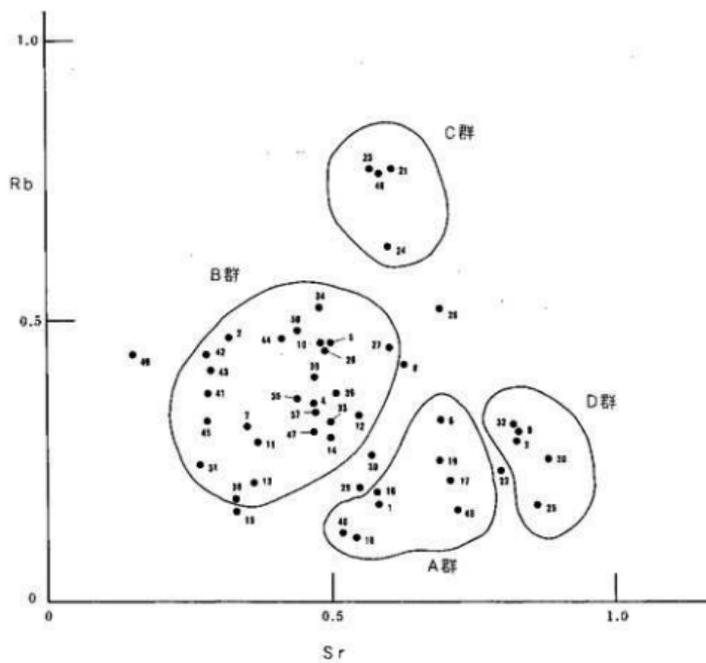


表8 縄文土器のRb-Sr分布図



付編 2 法正尻遺跡出土黒曜石の原産地推定

二宮 修治・網下 守*・大沢 眞澄

(東京学芸大学教育学部化学教室・成城学園高等学校*)

1 はじめに

法正尻遺跡(福島県猪苗代町)より出土した黒曜石の原産地推定を目的として、エネルギー分散蛍光X線分析(EDXRF)を用い、黒曜石資料の主成分元素の非破壊定量分析を行った。

半導体検出器(リチウムドリフト型Si検出器、一般にSi(Li)検出器と呼ばれる)を用いるEDXRFの最大の特徴は、①資料を非破壊で測定できること、②多元素同時測定できることなどがあげられ、これらの利点を生かした応用が多くの分野で開発されている。

現在、筆者らは、このEDXRFが非破壊的に多元素の同時定量が可能であるという特徴を生かし、黒曜石(原産地黒曜石、遺跡出土黒曜石)の主成分元素の非破壊定量分析法の検討を行い、それらの結果をもとに、日本各地に産出する原産地黒曜石および各地域の遺跡出土黒曜石の主成分元素の定量を試み、主成分元素存在量(科学組成)による原産地黒曜石の識別・分類、遺跡出土黒曜石の原産地推定を進めている。これらの研究の一環として、福島県内の各遺跡から出土した黒曜石について原産地推定を行っている。

本稿では、法正尻遺跡出土黒曜石の原産地推定の結果について報告する。

2 実 験

法正尻遺跡の時期・性格は、縄文時代前期末葉～中期末葉の集落跡である。分析に供した黒曜石資料の出土地点、特徴、時期を表1に示す。

EDXRFの測定条件を表2に示す。分析に用いたEDXRF装置は、セイコー電子工業製卓上型蛍光X線分析装置SEA-2001である。定量分析は、標準試料として長野県和田峠の小深沢産黒曜石を用い、ファンダメンタルパラメータ法により行った。定量した元素は、一般にケイ酸塩岩石試料の主成分元素であるケイ素(Si)・チタン(Ti)・アルミニウム(Al)・鉄(Fe)・マグネシウム(Mg)・カルシウム(Ca)・ナトリウム(Na)・カリウム(K)の8元素である。なお、測定は、1試料につき測定ポイントを変え、3回以上繰り返し行った。1回の測定は300秒間である。

3 結果および考察

EDXRFによる法正尻遺跡出土黒曜石資料11点の主成分元素の定量結果を表3に示す。主成分元素組成の表記は、岩石・鉱物学の慣例に従って酸化物として示す。なお、鉄は、岩石・鉱物中で Fe^{2+} と Fe^{3+} として存在するが、ここでは全鉄として Fe_2O_3 で示してある。

法正尻遺跡出土黒曜石資料11点のうち、HS 2・IIS 6・IIS 9の3点を除く8点が類似した主成分元素組成を示した。

EDXRFの同一測定条件で得られた主な原産地黒曜石の主成分元素組成の一例を表4に示す。

表3の法正尻遺跡出土黒曜石資料と表4の原産地黒曜石の主成分元素組成と比較し、原産地推定を行った。その結果を表5に示す。本遺跡出土黒曜石資料11点のうち9点の原産地推定が可能であり、2点については現段階ではこれまでに分析された原産地黒曜石と対応関係をもたないため原産地未定とした。

法正尻遺跡出土黒曜石の原産地としては、栃木県那須の高原山が8点、新潟県新発田市の板山が1点であった。なお、原産地未定の黒曜石2点では、HS 6資料は高原山産の黒曜石と類似しており高原山の可能性が高い。またHS 9資料は福島県内の他の遺跡出土黒曜石資料に類似した主成分元素組成を示すものが見いだされていること、さらにIIS 6資料ほどではないが高原山とも若干類似していることから、福島県内あるいは周辺地域に未検討の原産地が存在することを示唆しているのかもしれない。これらの問題については、高原山を含め、今後の原産地の追及により解明されるものと思われる。

今回の原産地推定の結果を考古学的解釈を行うためには余りにも分析点数が少ない。現在、福島県内の各地域の遺跡から出土した黒曜石について原産地推定を進めている。これからの遺跡出土黒曜石、原産地黒曜石の組織的な研究が望まれる。

参考文献

- 小田 静雄 1982年「黒曜石」『縄文文化の研究8』雄山閣：168-179
- 東村 武信 1986年『石器産地推定法』考古学ライブラリー47 ニュー・サイエンス社
- 近堂 祐弘・勝井 義雄・戸村 健児・町田 洋・鈴木 正男・小野 昭 1981年「黒曜石石器の年代測定と産地分析」『考古学・美術史の自然科学的研究』日本学術振興会：68-81
- 鈴木 正男 1980年「泉川遺跡の黒曜石の分析」『東北新幹線関連遺跡発掘調査報告1』第2編 泉川遺跡福島県教育委員会・日本国有鉄道：80-82
- 上野 修一・二宮 修治・網下 守・大沢 眞澄 1986年「石器時代の本県域における黒曜石の利用について―栃木県高原山産黒曜石を中心に―」栃木県立博物館研究紀要3：91-115
- 二宮 修治・董科 実・網下 守・大沢 眞澄 1990年「田中中原遺跡出土黒曜石の原産地推定」『田中中原遺跡』群馬県教育委員会・90群馬県埋蔵文化財調査事業団：467-472
- 合志 関一・佐藤 公隆編 1986年『エネルギー分散型X線分析 半導体検出器の使い方』日本分光学会 測定法シリーズ18、学会出版センター
- 鈴木 正男 1985年「黒曜石研究の現状と課題―関東・中部地方の事例を中心に―」考古学ジャーナル 244：2-6

表1 分析資料一覧

資料No	出土地点	特 徴	時 期
IIS 1	SI 1 ㉔ 1	粒 ナシ・透明度 弱	・白っぽい 大木 8a
HS 2	SI 3 堆積土	粒 ナシ・透明度 強	大木 7b
HS 3	SI 3 堆積土	粒 少ない・透明度 弱	・白っぽい 大木 7b
IIS 4	SI 72 ㉔ 1・2	粒 多い・透明度 弱	大木 8b
IIS 5	SK 136 堆積土	粒 多い・透明度 弱	大木 7a
HS 6	SK 698・699 堆積土	粒 多い・透明度 ナシ	大木 7a
HS 7	SK 702 堆積土	粒 多い・透明度 弱	大木 7a
IIS 8	SK 737 堆積土	粒 多い・透明度 弱	大木 6?
HS 9	SK 766 堆積土	粒 多い・透明度 弱	大木 7a?
HS 10	SK 767 ㉔ 1	粒 多い・透明度 弱	大木 6?
IIS 11	ト 33 GL Ⅲb 下配	粒 多い・透明度 弱	大木 7b?

表2 エネルギー分散型蛍光X線分析の測定条件

装置 セイコー電子工業製桌上型蛍光X線分析装置 SEA-2001			
X線発生部	ターゲット	Rh(ロジウム)管球	
	電 圧	15kV	
	電 流	80~120 mA	
	照射面積	3 mmφ	
検 出 器	Si(Li)半導体検出器		
	分解能	170 eV (Mn-Kα 5.9 keV)	
測 定	窓	He(ヘリウム)10 μm厚	
	試料室雰囲気	真空	
	測定時間	300秒	
定 量 分 析	測定箇所	3点以上	
	ファンダメンタルパラメータ法	標準試料 小深沢(和田町)産黒曜石	
	元 素	原子番号	特性X線のエネルギー(keV)
Na	11	Na-Kα	1.041
Mg	12	Mg-Kα	1.253
Al	13	Al-Kα	1.486
Si	14	Si-Kα	1.739
K	19	K-Kα	3.312
Ca	20	Ca-Kα	3.690
Ti	22	Ti-Kα	4.508
Fe	26	Fe-Kα	6.398

表3 黒曜石の主成分元素組成(%) - 蛍光X線分析

試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MgO	CuO	Na ₂ O	K ₂ O
HS 1	75.3	0.5	13.4	3.1	0.0	1.9	2.5	3.3
HS 2	75.9	0.2	13.6	1.2	0.0	1.0	3.3	4.9
HS 3	75.0	0.5	13.0	2.8	0.0	1.9	3.5	3.2
HS 4	74.8	0.6	12.6	3.4	0.0	1.9	3.4	3.2
HS 5	75.1	0.5	13.1	2.9	0.0	2.0	3.2	3.2
HS 6	72.7	0.6	13.5	3.4	0.0	1.6	1.5	6.7
HS 7	73.3	0.6	13.7	3.1	0.0	2.7	3.5	3.2
HS 8	74.5	0.6	13.4	3.4	0.0	2.2	2.9	3.1
HS 9	73.2	0.8	14.3	4.0	0.0	2.3	2.5	3.0
HS 10	74.1	0.5	13.6	2.9	0.0	2.6	3.2	3.1
HS 11	74.5	0.4	13.1	3.5	0.1	2.7	2.6	3.4

表4 主な原産地黒曜石の主成分元素組成(%) - 蛍光X線分析

試料番号	SiO ₂	TiO ₂	Al ₂ O ₃	Fe ₂ O ₃	MgO	CuO	Na ₂ O	K ₂ O
高原山(郡須)	75.3	0.5	12.9	2.5	0.1	2.0	3.7	3.3
	± 0.3	± 0.03	± 0.2	+ 0.03	-	+ 0.2	± 0.1	± 0.1
板山(新発田)	75.8	0.2	13.5	1.1	0.1	1.0	3.7	4.6
	± 0.1	± 0.01	± 0.4	± 0.1	-	± 0.02	± 0.4	± 0.03
屋ヶ塔(信州)	76.2	0.2	13.2	1.1	0.1	0.7	3.7	4.9
	± 0.3	± 0.1	± 0.1	± 0.7	-	± 0.04	± 0.3	± 0.2
小深沢(信州)	76.0	0.2	13.2	1.1	0.1	0.8	3.9	4.8
	± 0.4	± 0.1	± 0.1	± 0.1	-	± 0.1	± 0.3	± 0.3
畑宿(新根)	74.6	0.7	12.7	3.4	0.1	2.3	4.8	1.3
	± 0.3	± 0.01	± 0.1	+ 0.2	-	± 0.03	± 0.2	± 0.01
恩輪島(神津島)	76.6	0.3	13.1	1.2	0.1	1.0	4.5	3.3
	± 0.1	± 0.01	± 0.04	± 0.01	-	± 0.02	± 0.1	+ 0.04

表中の上段の数値は平均値、下段の±に続く数値は標準偏差

表5 原産地推定結果

原産地	個体数	資料内訳							
高原山	8	HS1	HS3	HS4	HS5	HS7	HS8	HS10	HS11
板山	1	HS2							
未定	2	HS6		HS9					
合計	11								

付編3 法正尻遺跡出土土器の漆及び赤彩資料について

国立歴史民俗博物館情報資料研究部 永嶋正春

1 はじめに

標記の遺跡からは、縄文時代中期の土器が大量に出土している。発掘担当者がそれらの上器類を精査した結果、漆様の付着物が認められるもの、あるいは赤色染彩の施されたものとして、4点が検出された。これらの例が漆だと確定できれば、現在までのところ福島県内で最古のものとなり、県内資料としては今までの縄文時代晩期の例から縄文時代中期へと一挙に遡ることができる。

東北地方の漆文化は、近年の山形県高島町押出遺跡の発掘により、縄文時代前期に於いて既に高度に花開いていたことが知られる。したがって、押出遺跡に見られる縄文時代前期の漆関係資料と東北地方に普遍的に認められる縄文時代後・晩期の漆関係資料とが一体どのような関係性を持ち得るのか、大変興味を引かれるところである。ところでここで検討する4点の資料は、これらの間を埋めるものとしても大きな資料的価値を有すると考えられ、それからできるだけ多くの情報を引き出すことが、東北地方における縄文時代の漆文化を解明していく上で重要になる。

以上のことを念頭に置いた上で、これら4点の資料について主として漆技術の立場から調査を行ったので、ここに報告する。

2 調査結果

調査方法 調査は、肉眼並びに光学顕微鏡にて資料を丹念に観察することから始まるが、それに加え 1) X線分析と 2) 塗膜断面試料の作製と観察を行い、それらの付着物、塗彩物の素材や層構成内容を検討した。

1) X線分析 蛍光X線分析並びにX線回折である。前者により資料からの元素情報が、後者により結晶性化合物の情報がそれぞれ得られる。使用の装置は、大型資料室を有する文化財用下面照射型蛍光X線分析装置及び文化財用X線回折装置であり、共に歴博の調査室に設置している¹⁾。両者とも対象資料から分析用の試料を採取することなく、いわゆる文化財を非破壊的に分析できる機能を有している。今回調査した4点の資料に即していえば、いずれの資料にもその外観からはべんがら(Fe_2O_3)かと思われる赤色顔料が認められるので、その確定が主たる目的となる。

2) 塗膜断面試料の作製と観察 漆あるいは赤色塗彩資料の調査研究においては、それらの素材や技法を把握する事がまずもって大切である。個別の資料調査の場合、本項の調査を行うこと

でその資料の持つ有意な情報をより具体的に示すことができる。さて、断面層断而試料の作成と観察であるが、筆者の元では通常次のように行っている。

a 試料採取と樹脂埋包 目的に応じ、対象試料の所定の部位から極微の試料を採取し、無色透明のポリエステル樹脂にて埋包する。

b 切断と研磨 目的の面が出るよう、必要な位置にてポリエステル埋包試料を切断する。切断によって得られた二片の内、一片を鏡面研磨し残りは予備として保管する。

c 観 察 上記の研磨片を金属顕微鏡にて観察、写真記録する。この段階では厚みのある試料を反射光で観察することになるので、漆関係資料の様に暗色のものの場合、得られる情報に限界を生じる。

d 試料の薄片化 cの観察を済ませた研磨資料をスライドガラスに接着した上で、試料の大部分をその接着面間際で切断除去する。得られた試料薄片を必要な薄さにまで研磨し鏡面に仕上げる。

e 観 察 上記で完成した薄片試料を顕微鏡観察し、写真に記録する。観察は透過光観察を主とするが、必要に応じ反射光も加える。この観察により、cでは判別困難な情報が確保されることとなるが、観察目的によっては、更に極限にまで即ち試料の消失直前までの薄片化を必要とする。

№1 小型の深鉢で底部を欠損するが、口縁部下端から下の体部を全体の半分足らず残存する。この断片の内面は緩い凹部を構成するが、凹部の全体に渡って一見して漆かと思われる付着物が認められる(写真1)。この付着物の中央を中心として周辺部への広がりを持った赤色物が存在する(写真2)、これはX線分析によるとべんがらである。体部から底部にかけての漆様付着物の外縁部は艶消し状に黒化し炭化のやや進んだ状況を示しており(写真3)、中央部の赤色過多の状況(写真4)に比べ異質である。このように付着物の状況は複雑であるが、全体としてはおよそ次のようなことが言える。すなわち、この土器は漆液容器に転用した段階では相当破損しており、横位にした時に生じる体部内面の凹部を生かしてそこに僅かの漆をいれ、弱く加熱したものである。この加熱は、恐らく生漆を黒目漆に加工する目的で行われており、加熱の途中か最後の段階でべんがらが加えられているが、漆と十分には混ぜ合わされていない状況を示している。両者の混合が不十分なのはあるいは漆の固化が進み過ぎたためであろうか、更に漆を注ぎ足しているようにも見られる(写真5)。外観的には以上のような観察結果が得られるが、各部位から採取した試料の層断面を見ても上記の観察に異なるところはなく、むしろそれを補強する物である。例えば写真6・7・8は試料が漆であることを示しているが、漆の層内においては生漆のような不均一さが認められずきわめて黒目漆的である。なお、写真7で空気層に面する漆面の最表部が褐黒色に変色しているが、これは加熱の影響である。写真6には漆とはあまりよく混ざっていない

べんがらの層が認められるが、写真7の上方にはよく混合した部分も存在する。その部分を更に拡大したのが写真8であるが、漆中に分散したべんがら粒子の中にはパイプ状を呈するものが認められる。

№2 内面に赤色及び褐色の付着物が認められる(写真9)。赤色物はX線分析に寄ればべんがらであり、塗膜状を呈する(写真10)。それらの層断面(写真11・12)によれば、付着物は漆とべんがらとで構成されており、その混合にむらのある部分(写真11)は外観的にはより褐色色味を帯び、均一な部分(写真12)は赤色が強調されている。べんがら粒子にパイプ状のものが認められる点は、№1の試料と共通する。これらの付着物の状況から見ると、内面の付着物は赤色塗彩ではなくむしろ漆作業に伴う用具としての汚れと考えることができる。なお外面の黒色の汚れも、その層断面で見ると漆と思われる性状を示している。

№3 内外面共に赤色物が認められる(写真13)。X線分析によればそれらはべんがらである。層断面を見た場合、赤色層としては全体としては極めて薄い層ではあるが、胎土表面上に別層を形成する。パイプ上の粒子を含む良質のべんがらが使用されてもおり(写真14)、焼成前の塗布とは考え難い。漆を使用しているかと判断できるだけの積極的な証拠も現在までのところでは見いだされない。しかしながら、№1・2のような試料の存在を考慮すればべんがら漆として塗布された可能性も高い。

№4 赤色塗彩の残存状況が悪く粉状に見えるが(写真15)、層断面には発色の良好なパイプ状のべんがら粒子が認められる(写真16)。№3と同様に考えられる資料である。

3 おわりに

福島県下の縄文時代中期に遡る土器で漆に関係したものが確認できたことは、今後東北地方南部の漆関係資料を検出し調査していく上で大きな意義があるものと考えられる。№3・4の赤彩はべんがらの漆の塗布とは断定できなかったものの、今後更に追跡調査を実施していくなかで判断が下せよう。なお当然ながら該期の土器で顕著なべんがら漆を有するものも近い将来検出されることになろう。漆塗木製品などについても同様である。パイプ状のべんがら粒子が検出されたことなど論じるべき点を残しているが、これらについては機会を改めたい。

最後に、本調査の実施は助福島県文化センターの関係者に負う所が大きかったことを記し、あらためて感謝の意を表することとした。

註

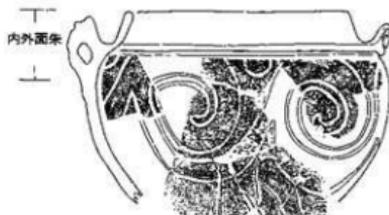
- 1) 装置内容の紹介は、本稿の目的ではないので省略する。それらの概略については、拙筆「展博における文化財調査用X線機器」理学電機ジャーナル、15(1984)、拙筆「X線分析室 第3調査室一」展博5号(1984)などを参照されたい。



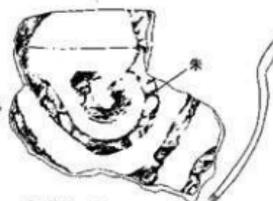
1 (ス480 LIIIb下部) Ⅱ-4

0 5cm
— (1/3)

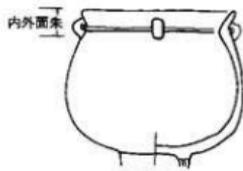
内面全面
赤漆



2 (図10-1)



3 (図77-1)



4 (図507-7)

図1 分析資料